

世田谷の鳥 2020

— 世田谷区鳥類目録 —

2022 年

一般財団法人 世田谷トラストまちづくり

野鳥ボランティア

世田谷の鳥 2020

— 世田谷区鳥類目録 —

2022 年 7 月

一般財団法人 世田谷トラストまちづくり

野鳥ボランティア

◆◆◆ 世田谷の野鳥を支える環境 ◆◆◆

世田谷区には多摩川をはじめとする大小の河川や多くの緑地があり、その豊かな自然環境が野鳥の生息を支えています。



国分寺崖線 - 野川と多摩川に沿って世田谷区内を8km続く崖線は連続した帯状の緑地帯を提供している
開発しにくい崖地ゆえに豊かな自然が残されている



多摩川 - 中州や寄州、河川敷、河畔林などバラエティーに富んだ環境を提供しており、水辺の鳥、山野の鳥が集まる



緑道(烏山川緑道) - 小河川の多くは暗渠化され、緑道として緑地環境の一部をなしている



野川 - 野鳥のみならず水辺の生き物にも接することができる貴重な場所である



仙川 - 垂直のコンクリートと河床の自然が水鳥たちに安住の環境を提供している



砧公園 - 40 万㎡の広大な公園では四季を通じて多くの山野の鳥が観察される



祖師谷公園 - 仙川が中央を流れ、多くの水辺の鳥と山野の鳥が観察される



二子玉川公園 - 国分寺崖線の緑と多摩川の水辺に囲まれた自然豊かな場所で野鳥の生息・繁殖の場になっている



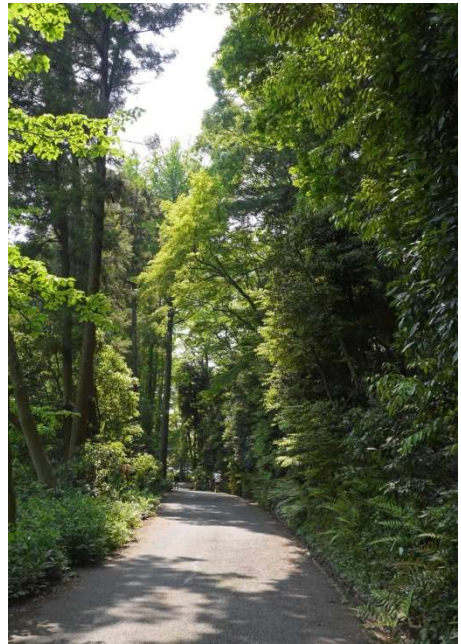
蘆花恒春園 - 武蔵野の面影を残す公園で、樹林、竹林、芝地のバラエティーが多種の野鳥を集める



次大夫堀公園 - 区内唯一の田圃や水路、畑もあって隣接する野川と共に多くの野鳥が観察される



駒沢オリンピック公園 - スポーツ公園であるがスポーツ施設の間の広大な緑地では多くの山野の鳥が観察される



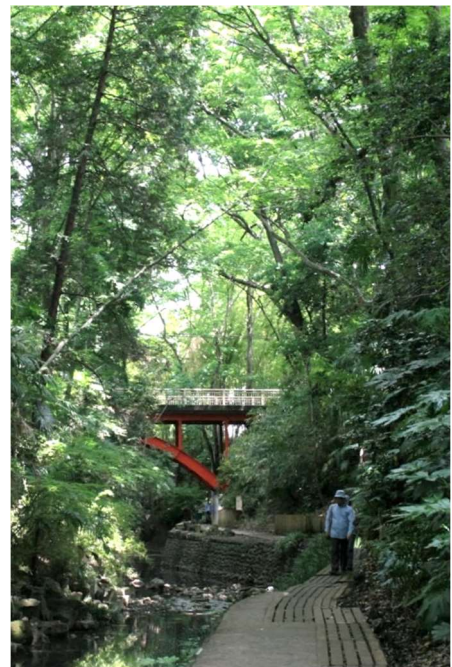
岡本静嘉堂周辺- 丸子川と谷戸川にはさまれた台地と崖線からなる緑地で水辺の鳥、山野の鳥、渡り途中の鳥も多く観察される



羽根木公園 - 周辺は住宅地、商業地に囲まれているが、小高い丘に位置する公園には周囲と隔絶した自然環境が見られる



成城三丁目緑地 - 国分寺崖線の中にある緑地で樹林、林床、湧水からの流れが豊かな自然環境を形成している



等々力溪谷公園 - 谷沢川の浸食により形成された都区部唯一の溪谷で、高さ10mの崖に囲われた独特の自然環境を形づくっている



社寺林（浄真寺）－ 区内に点在する社寺の古木、大木は野鳥たちの生息、移動、繁殖の場を提供している



生産緑地－ 区面積の 2,5%にまで減少した生産緑地も野鳥の生息を支えている。



屋敷林－ 点在する屋敷林も多くの野鳥たちの生息や移動上の拠点として利用されている



商業地－ ツバメは商業地や倉庫、工場など人々の生活する場所で営巣する



住宅地－ 住宅地の緑は規模は小さいが野鳥の生息や移動に役立っている

は じ め に

このたびの本報告書をまとめあげた野鳥ボランティアグループは、当財団の前身であるせたがやトラスト協会の時代の平成 3 年度より野鳥観察を通して世田谷の環境を見つめ続け、人と生き物が共生するまちづくりの実現を目指して、バードウォッチングの開催や調査活動などの様々な取り組みを行ってきております。

同グループは、世田谷区全域の戦前から現在までの鳥類の変遷を区民に広く情報提供を呼びかけながら、1910 年～2007 年までの鳥類の記録をまとめた「世田谷の鳥」を 2009 年に作成しました。その後も継続的な調査活動や情報収集を行い、2011 年には改訂版を、2017 年には 2011 年～2015 年の 5 年分の情報やその解説のほか、野鳥の変遷についても分析を加えた「世田谷の鳥 2015―世田谷区鳥類目録―」を発行しました。そしてこの度、その後の 5 年間の情報を加え、新たな視点での分析も加えた「世田谷の鳥 2020―世田谷区鳥類目録―」を発行することになりました。

生き物は、環境ごとに適応した種がそれぞれの場所に生息しており、鳥類の種が多様であるほど、そのまちが多様な環境を持っているといえます。住宅街、みどり、水辺からなるまち世田谷において、鳥類の変遷を振り返ることは、環境の質を知る上で非常に意義深いことです。地球温暖化が進む中で区民の方々が自分の住むまちの環境の変化に関心をもつきっかけとして、また、学校教育の現場等でこの鳥類目録を大いに活用いただき、SDGs や環境共生のまちづくりを考える上で、少しでもお役に立つことができましたら幸いに存じます。

最後に、長年に渡る調査観察と記録の蓄積、通常では考えられない膨大な資料を、気が遠くなるような地道な作業によりまとめ上げられ市民科学の取組みを続けている野鳥ボランティアグループに敬意を表するとともに、大変貴重な記録を惜しむことなくご提供いただいた多くの皆様方に心より御礼申し上げます。

令和 4 年 7 月 吉日

一般財団法人世田谷トラストまちづくり
理事長 男 鹿 芳 則

編集にあたって

「世田谷の鳥 2020 一世田谷区鳥類目録」を刊行いたしました。1900 年代初めより 2007 年までの記録を収録した 2009 年発行の第 1 集以降 5 年ごとに発行する事とし、この度のものは 2016～2020 年分を増補した第 4 集となります。これは私たち野鳥ボランティアが定例調査などで蓄積した記録に加えて、新旧様々な文献記録、写真等この 75 年間に世田谷区で生息の記録がある全ての野鳥 285 種 31 万件のデータを集録した世田谷の野鳥データベースをもとにしております。これほど多くの種類の野鳥が世田谷区で観察されたのか、こんな鳥も繁殖しているのか、現在ではどの場所にどんな種類が生息しているのか等、データが物語ってくれます。

本書は 4 章で構成されております。第 I 章は世田谷の地理的概要、自然環境、および主な野鳥の観察地の状況を記述、第 II 章には記録された全野鳥の出現年代と季節の一覧表、繁殖および消滅あるいは出現・定着をした種の一覧表を提示しています。

第 III 章は“世田谷区鳥類目録”として、記録にある全 285 種について種ごとに世界と日本での生息状況、生態の概略、そして世田谷区内での観察記録をグラフ付きで詳述しております。これは世田谷区で野鳥観察をする際には既存の野鳥図鑑と合わせて参照することにより、またとない案内書になる事でしょう。

第 IV 章では多摩川、野川、仙川、成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園の 7 ヶ所で行っている「定例調査」から得られたデータにより読み取れる各調査地での鳥相、種や個体数の変化を季節的な要素も含めて記載し、新たな分析と考察を述べています。最後に「各章データ集」として、1910～2020 年の全種の生息状況と 2011～2020 年の観察地別の生息状況詳細を記載しました。

多摩川をはじめとする河川や多くの公園緑地など、多様な自然が世田谷にまだ残っていることが、様々な野鳥の生息を支えています。現在の緑の環境が未来に引き継がれ、いっそう豊かに育まれて、野鳥観察をたのしむ区民の方のみならず、研究者や行政関係者等多くの方々に本書「世田谷の鳥 2020 一世田谷区鳥類目録」がお役に立てますようにと願っています。

編集に際して、観察記録や写真の提供等ご協力いただいた皆様に、心からの感謝を申し上げます。

2022 年 7 月 吉日

一般財団法人 世田谷トラストまちづくり 野鳥ボランティア

代表 塩出 美和子

目 次

(写真) 世田谷の野鳥を支える環境	トウゾクカモメ科	112
はじめに	ウミスズメ科	113
編集にあたって	ミサゴ科	113
第Ⅰ章 世田谷区の概要	タカ科	114
1. 世田谷区の位置と面積	フクロウ科	122
2. 地形と気象	カワセミ科	126
3. 土地利用状況	ブッポウソウ科	127
4. 区内の公園緑地と河川、国分寺崖線の概要と 主な野鳥観察地	キツツキ科	128
第Ⅱ章 世田谷区の鳥の概要	ハヤブサ科	132
1. 記録された鳥類	サンショウクイ科	135
2. 科別構成	コウライウグイス科	136
3. 繁殖した種の生息状況	カササギヒタキ科	136
4. 主な種の消滅と出現	モズ科	137
第Ⅲ章 世田谷区鳥類目録	カラス科	140
キジ科	キクイタダキ科	145
カモ科	ツリスガラ科	146
カイツブリ科	シジュウカラ科	146
ハト科	ヒバリ科	150
アビ科	ツバメ科	152
ミズナギドリ科	ヒヨドリ科	157
ウミツバメ科	ウグイス科	158
コウノトリ科	エナガ科	160
ウ科	ムシクイ科	161
サギ科	メジロ科	165
トキ科	センニュウ科	166
クイナ科	ヨシキリ科	167
カッコウ科	セッカ科	169
ヨタカ科	レンジャク科	170
アマツバメ科	ミソサザイ科	171
チドリ科	ムクドリ科	172
セイタカシギ科	ヒタキ科	175
シギ科	イワヒバリ科	190
タマシギ科	スズメ科	190
ツバメチドリ科	セキレイ科	192
カモメ科	アトリ科	198
	ツメナガホオジロ科	205

ホオジロ科	206
外来種	214
キジ科	214
カモ科	215
ハト科	215
インコ科	217
チメドリ科	219
ムクドリ科	222
カエデチョウ科	222
第7版の外来種に記載されていない種	225
フラミンゴ科	225
オウム科	225
コンドル科	225
ハタオリドリ科	225
テンニンチョウ科	226

第IV章 多摩川、野川、仙川、成城みつ池緑地、砧公園

駒沢オリンピック公園、羽根木公園 における

定例調査結果の分析

1. 定例調査実施地における鳥相	228
1) 定例調査実施地での出現種	228
2) 定例調査実施地ごとの鳥相	231
3) 定例調査実施地の鳥相比較	235
2. 定例調査実施地の個体数推移	237
1) 多摩川定例調査の個体数推移	237
2) 野川定例調査の個体数推移	239
3) 仙川定例調査の個体数推移	240
4) 成城みつ池緑地定例調査の個体数推移	242
5) 砧公園定例調査の個体数推移	243
6) 駒沢オリンピック公園定例調査の個体数推移	245
7) 羽根木公園定例調査の個体数推移	246
3. 主な種の個体数推移	248
1) 主な種の個体数推移	248
2) 生態上の類似点がある種の個体数比較	263

各章データ集計	267

集計表 1. 1910～2020 年の生息状況

(○生息 ●繁殖)	268

集計表 2. 2011～2020 年の観察地別記録件数	276

集計表 3. 2011～2020 年の河川・地域別

記録件数	282

Web からの冊子の入手

および「データCD」の提供について	286

参考文献	287

協力者・スタッフ一覧	288

参考資料	289

参考資料 1. 野鳥台帳入力シート	290

参考資料 2. 繁殖ランク判定基準	291

参考資料 3. 環境省・東京都の 絶滅危惧種カテゴリー	292

種名索引	294

第 I 章

世田谷区の概要

1. 世田谷区の位置と面積

世田谷区は、東京 23 区の西南端に位置している。周囲は大田区、目黒区、渋谷区、杉並区、三鷹市、狛江市、調布市にそれぞれ接し、さらに多摩川をはさんで神奈川県川崎市と接している。区の形状は、東西に約 9km、南北に約 8km となり、おおよそ四角形のような形をしている。面積は 58.049km²で 23 区中 2 番目の大きさである。

人口は920,918人(2020年12月1日)で23区中第1位である。これに比して人口密度は15,805人/km²(2020年1月1日)で第14位である。大正の初めから急激な人口増加がみられたが、1970年頃から増加は鈍化した。その後1990～1995年頃多少の減少が見られたものの、それ以後再度緩やかな増加が続いている。区内の人口密度分布は都心部に近い世田谷地域、北沢地域で高く、次いで烏山地域、玉川地域、砧地域と西部で順次低くなっている。

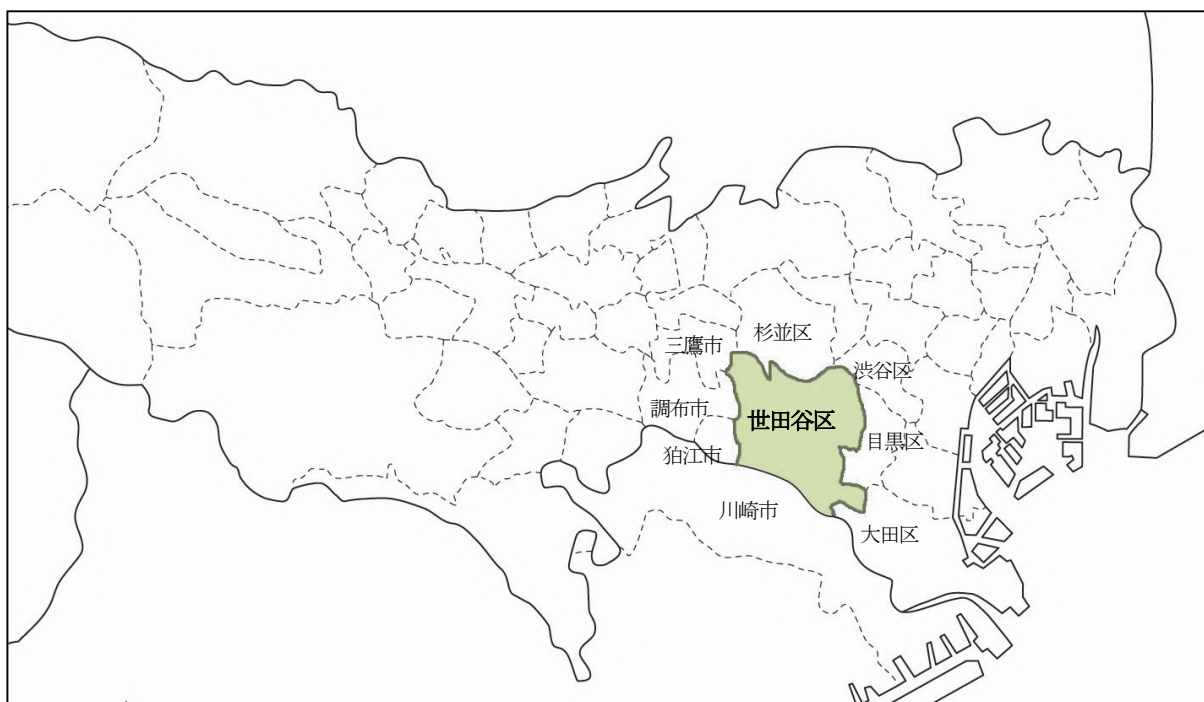


図 I-1-1. 世田谷区の位置

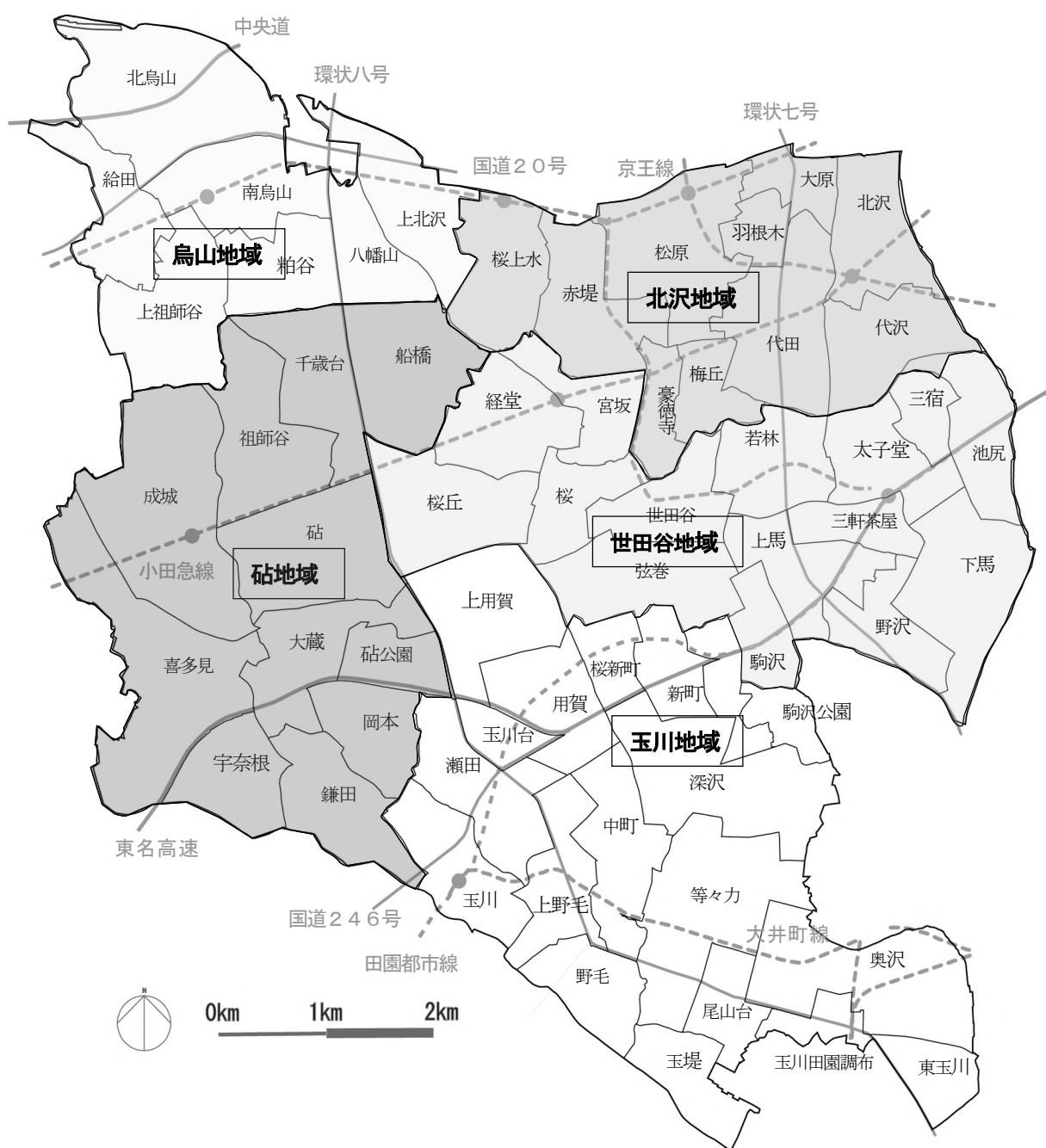


図 I-1-2. 世田谷区全図（行政地域と町名）

2. 地形と気象

世田谷区の地形は台地（標高 30～50m）と低地（標高 10～25m）からなっている。多摩川に沿って成城付近から南東の喜多見や大蔵、瀨田、野毛に至るまでの急な崖の連なり（国分寺崖線）があり、これより南西側は低地（沖積層）、北東側は台地（洪積層）に区分されている。武蔵野台地である台地部は、中小多数の河川によって枝状に浸食されており、その結果、丘や谷の起伏がつくられた。区内の標高の最高地点は砧二丁目（水道局大蔵給水所）の 53.60m で、最低地点は玉堤一丁目地内の 9.19m である。

また、世田谷区の地形の特徴を表すものとして国分寺崖線がある。立川市から大田区まで約 30 km 続いている高さ 10～20m の斜面を国分寺崖線という。約 10 万年前から多摩川が武蔵野台地を削ってできた崖で

ある。東京の基盤である上総層(不透水層)の上に砂利層、関東ローム層(透水層)が重なった武蔵野台地は、崖下の至るところに湧水口があり、野川の水源にもなっている。

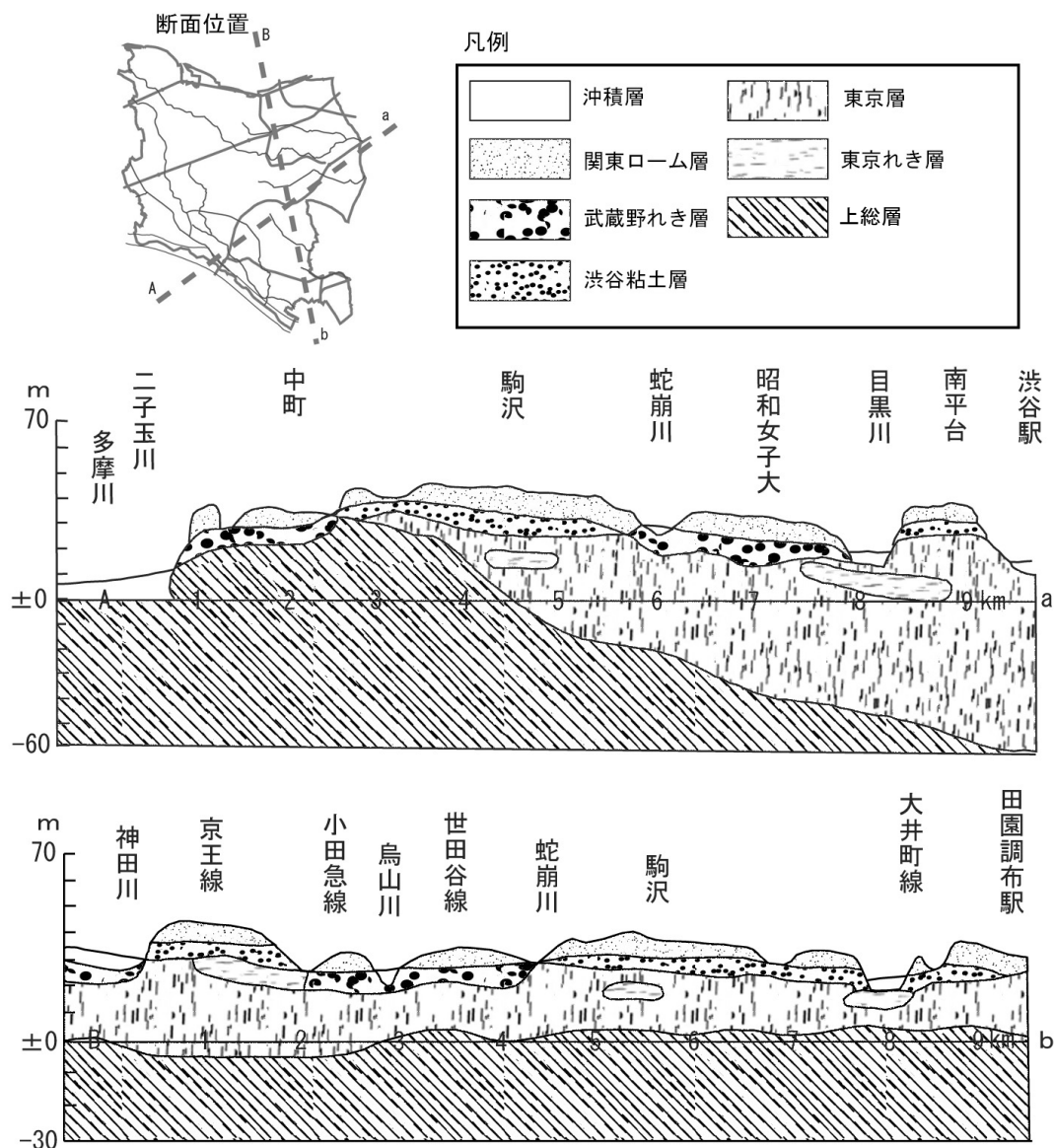


図 I-2-1. 地層断面図

主な河川として、一級河川の多摩川水系、二級河川の呑川水系と目黒川水系の3水系、12河川があり、さらに用水やその支流がかんがい用水として発達していた。市街化が進むこともない農地が減少したため、大部分は下水道幹線として暗渠(あんきょ)化され、その地表部は緑道となっている。

東京都の気温の変化をみると(図 I-2-2. 東京都の日最高・最低の平均気温 10 年間平均の推移)、この 100 年間で平均気温は 2.4℃、最高気温は 1.9℃、最低気温は 2.9℃上昇している。最高気温に比べ最低気温の上昇が大きく、一日の寒暖差が小さくなる傾向にある。平均気温が 1℃上昇すると地球の環境に大きく影響を与えるといわれており、地球規模の温暖化傾向と都市化によるヒートアイランド現象が野鳥の分布や渡りに少なからぬ変化を与えているといわれている。

世田谷区は、都心に近い市街地と郊外地があること、また東京湾多摩川河口から 14.2～21.1 kmの距離にあるため、海の影響を受けている地域があることから、市街地と郊外地、海岸寄りと内陸寄りでは風向、風速、気温など気象の差が見られるという独特の気象条件を持っていた。しかし、近年、全域に市街化が進む傾向にあり、こうした特徴も次第に薄れつつある。

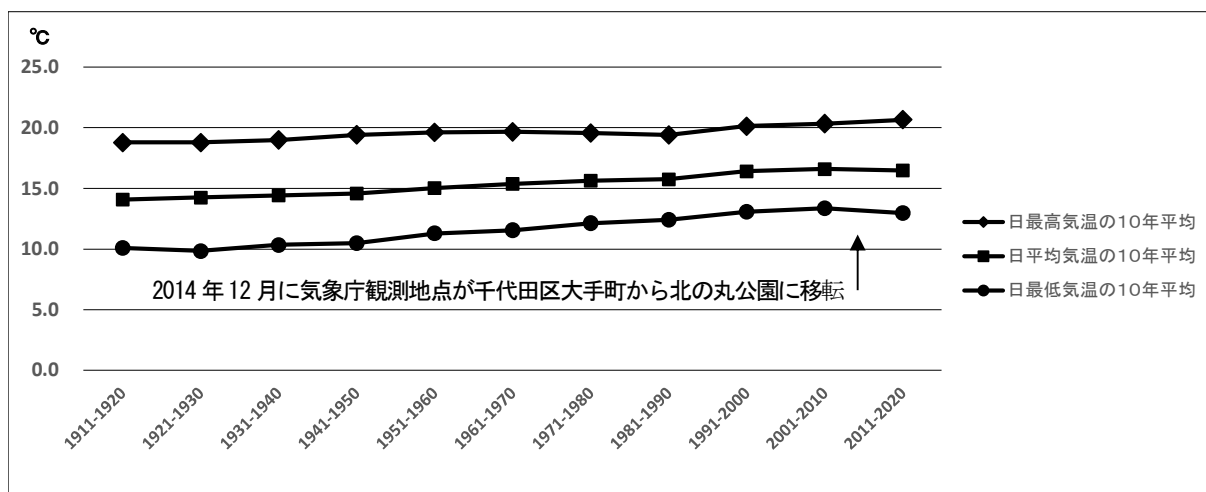


図 I-2-2. 東京都の日最高・最低平均気温 10 年間平均の推移（気象庁データによる）

3. 土地利用状況

明治の初め、世田谷一带は畑作を主とする純農村地帯であった。また地域の大部分が武蔵野台地にあり関東ローム層が厚く、長く雑木林や原野の状態が続いた。

しかし 1897 年(明治 30 年)代以降、三宿から三軒茶屋にかけての軍事施設の移転をきっかけに、様子を変えていった。さらに大正末から昭和の初期にかけて、世田谷線や小田急線など、私鉄の開通が相次ぎ、1933 年(昭和 8 年)の井の頭線の開通ではほぼ現在の区内の鉄道網ができあがった。それに併せて沿線に宅地開発が進み郊外住宅地としての世田谷が形づくられた。また、岡本から上野毛の国分寺崖線沿いは、別荘や高級邸宅化し、緑の多い地域が維持された。

戦後は、1950 年代から 1960 年代にかけ住宅団地の開発が活発化し、大規模な住宅施設が造られた。その後も拡大する大都市東京の人口の受け皿として世田谷は住宅地化が進んだ。

1970 年から 2020 年の 50 年間の土地利用の推移(表 I-3-1. 地目別土地面積の推移)をみると、田・畑・山林原野・雑種地で 109 ha が減少し、商業地・住宅地が 87ha 増加している。雑木林や田畑、緑地や河川など自然環境はかなり失われ 2020 年では 1970 年の 25%までに減少したことがわかる。緑地面積の減少は世田谷区が 1973 年より実施している緑被率調査の結果にも出ている。1973 年から 2001 年の間に「緑被率」(区の全面積に対する樹木地+竹林+草地+農地+屋上緑地の割合)は 13.45 ポイント減少した。現在の調査法に変わった 2006 年との比較では 2011 年の値は 1.12 ポイント減少したが、住宅用地を中心に小規模な樹木地が増えていること、ある程度まとまった樹木地では、樹木の生長にしたがって面積が増加していることにより 2016 年調査では 23.56%と 2011 年調査から 0.67 ポイント増加した。

表 I-3-1. 地目別土地面積の推移

単位(ha)

年	総数	商業 地区	住宅 地区	田	畑	山林 原野	池沼	雑種地	他	緑被率 (%)
1970 年	3,958.0	99.4	3,035.0	53.5	523.3	41.1	1.2	153.1	51.3	33.90 (1973)
1980 年	3,861.5	104.6	3,191.3	19.5	344.9	25.1	0.4	170.5	5.3	25.00 (1981)
1990 年	3,803.4	117.2	3,255.8	2.4	283.3	45.4	0.1	99.1	0.1	20.45 (2001)
2000 年	3,398.7	13.5	3,385.3	1.0	176.1	8.2	0.0	113.0	2.3	<調査法変更> 24.01 (2006)
2010 年	3,465.3	19.3	3,446.0	0.1	128.2	6.3	0.0	98.2	1.5	22.89 (2011)
2020 年	3,682.5	21.9	3,463.7	0.0	94.6	5.4	0.0	95.0	1.9	23.56 (2016)

*本表数字は固定資産税の対象となる評価面積であり、寺・学校用地等は含まれない。雑種地とは、運動場・ゴルフ場・鉄軌道用地等をいう。*1997 年の固定資産税評価替えに際して地区の見直しが行われ、商業地区の一部が住宅地区に変わった。

4. 区内の公園緑地と河川、国分寺崖線の概要と主な野鳥観察地

1. 公園緑地

現在区内には571カ所、268.6haの都市公園等があり、これは区全体面積の4.62%を占めている。区民一人当たりの面積は2.92㎡となっており、23区内では、14番目という平均的な位置にあるが、23区の平均面積である6.56㎡には達していない。区の緑被率は、23区の中でも2番目に高い23.6%(2016年現在)となっているが前項で見るように年々減少傾向にある。また、公園面積としては江戸川、江東、足立区に続き4番目であり、30万㎡を超える大規模な都市公園は砧公園と駒沢オリンピック公園の2カ所となっている。また地域的にみると区内の南西部に位置する公園が多く、都心部に近い地域には公園が少ない。しかしながら、小河川の暗渠化に伴う緑道の整備など緑地の確保に努力がなされている。

表 I-4-1. 世田谷区の都市公園等の面積(世田谷区都市公園等面積総括表・世田谷区統計書 2020 年 4 月 1 日)

	世田谷地域	北沢地域	玉川地域	砧地域	烏山地域	合計及び平均
公園面積と数	30.7ha 139カ所	16.9ha 81カ所	86.4ha 121カ所	110.4ha 146カ所	24.2ha 84カ所	268.6ha 571カ所
区民一人当たり面積	1.21㎡	1.10㎡	3.81㎡	6.71㎡	2.00㎡	2.92㎡
公園率	2.49%	1.95%	5.09%	8.15%	3.14%	4.97%

公園率：地域(区全体)に都市公園等が占める面積割合

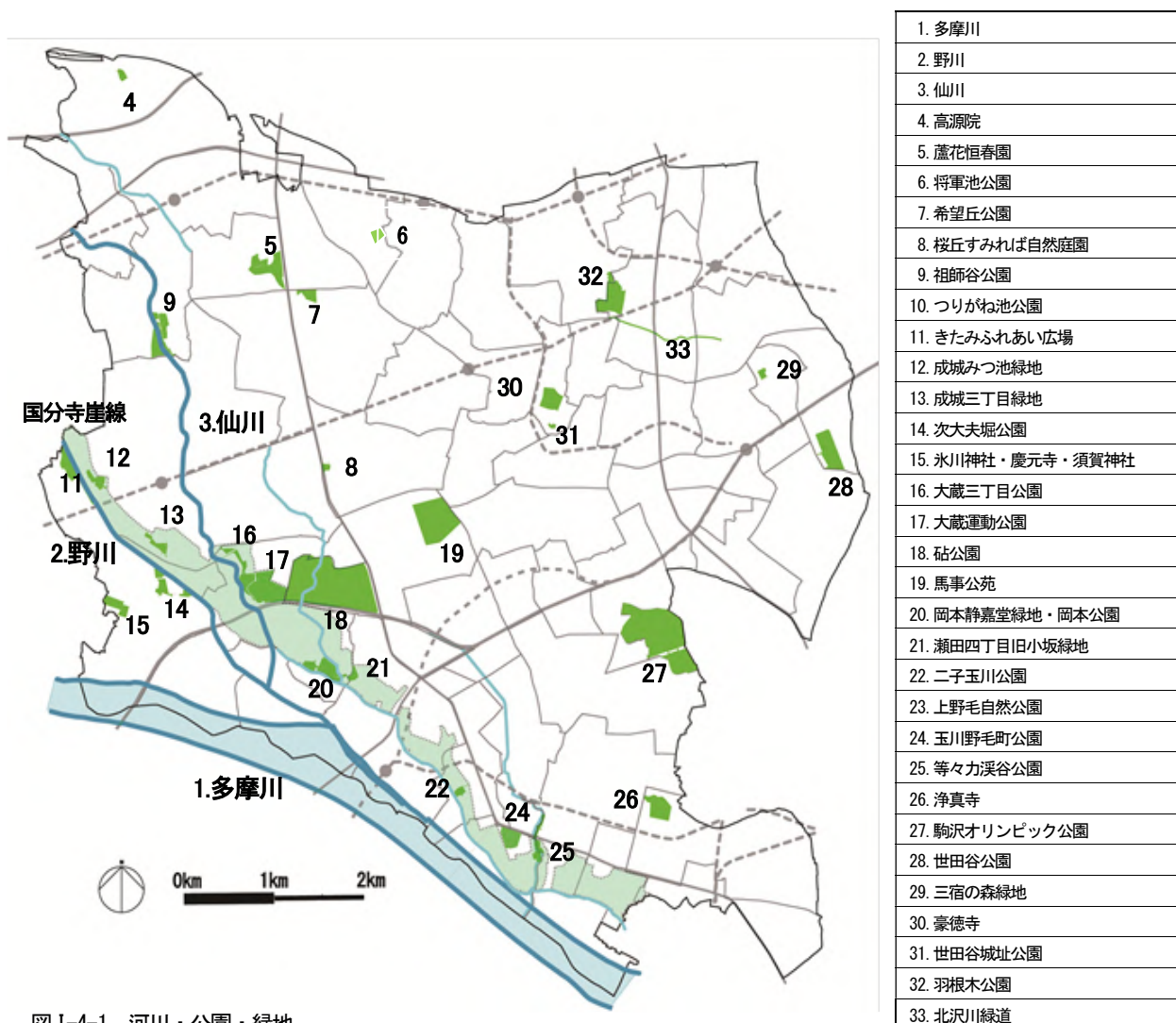


図 I-4-1. 河川・公園・緑地

2. 河川

世田谷区の南西部には多摩川をはじめ野川、仙川、丸子川、谷沢川、谷戸川が流れており、すべて多摩川の支流である。一方、北東部には目黒川、北沢川、烏山川、蛇崩川、呑川、九品仏川が流れているが、一部を除きそのほとんどが暗渠化され下水道幹線となっている。暗渠上部は緑道化された部分が多く、日常の通行や憩いの場としてのみならず野鳥の生息や移動にも役立つ環境となっている。

3. 国分寺崖線

国分寺崖線は、立川から国分寺を通り大田区の大田区まで約 30 km の間に続く高さ 10～20m の崖の斜面で、武蔵野台地の南側を古い多摩川の流れが削ってできた崖である。国分寺市に目立った崖があることからこの名がついた。

野川の流れとほぼ並行して連なり、豊かな森を形成している。その斜面状の地形から比較的宅地化や開発から免れたため貴重な自然が残っており、世田谷の環境を語るうえで重要な要素である。

この崖は一般には「ハケ」（水の流通の意味）とも呼ばれる。喜多見不動の湧水、等々力溪谷の湧水、成城三丁目緑地内の湧水など区内だけで約 30 カ所で地下水が湧き出ており、野川や丸子川に注いでいる。成城みつ池緑地の湧水、岡本静嘉堂の湧水、大蔵三丁目の湧水池等には水生昆虫類や小動物が生息している。

国分寺崖線沿いは、縄文時代には人々が定住し、当時を物語る遺跡(稲荷丸北古墳「五島美術館敷地内」、等々力溪谷三号横穴、野毛大塚古墳等)が公園や緑地等として残っている。又、喜多見や宇奈根、鎌田等は、古くから水田や畑地として利用され、今でも畑が残っている。これらの森や湧水、池や畑は野鳥の生息に貴重な場所となっている。

1955 年(昭和 30 年)頃までは、農家が崖線のコナラやクヌギを主とする雑木林を管理し良好な自然環境を造っていた。しかし農地の宅地化で堆肥や薪炭材として利用されなくなった雑木林は、伐採や更新が行われず、アズマネザサが林床を覆い、日陰でも育つ常緑樹林化が進んでいった。近年は土木技術の進歩と景観がよいとの理由で急速にマンション開発が進んで樹林地は伐採され、雨水の浸透もなくなり、地下水量の減少や水質の悪化を招いている。国分寺崖線は、開発により自然が失われつつある斜面林ではあるが、区内に残る唯一の带状緑地帯として多くの生物にとって緑の生命線といわれる貴重な場所である。

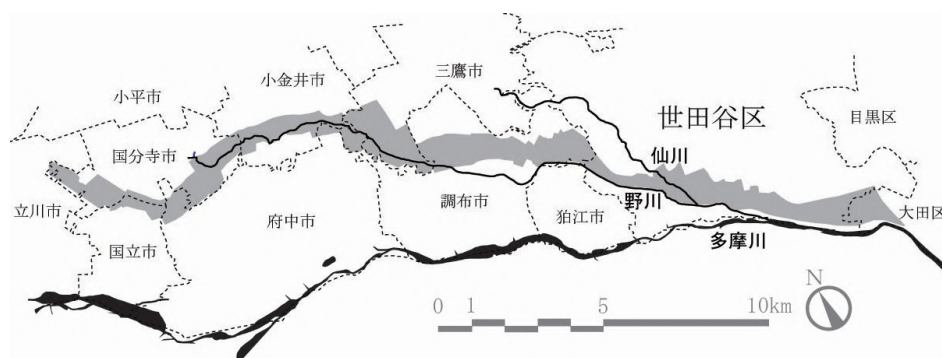


図 I-4-2. 国分寺崖線

4. 主な野鳥観察地

区内の主な野鳥観察地の概要を以下に示す。区内各地域及び各観察地で見られる野鳥に関しては巻末の「集計表 2」、「集計表 3」を参照。

この 5 年間では台風による倒木や河川の増水による地形の変更など野鳥の生息に影響するような被害が発生し、また 2019 年からはカシノナガキクイムシ（カシナガ）を起因とする樹木枯損（ナラ枯れ）が多くの公園で発生している。

①多摩川 区内約 6.9km

多摩川は水源である笠取山(山梨県塩山市)から、世田谷区の南西部を上流は狛江市境から神奈川県川崎市と接しながら大田区境まで約 6.9 km を流れ、東京湾に注ぐ全長 138 km の一級河川である。世田谷区は多摩川河口より 14.2~21.1 km に位置し、川幅は約 380~700m と広い。低水敷は淵、瀬、中州や寄り州で構成され、また幅広い河川敷も芝生、土、草地、樹木地とバラエティーに富んでいるため、水辺の鳥、山野の鳥、身近に見られる鳥を含め年間約 100 種が観察される。

2019 年の台風 19 号では水位が堤防まで達し、二子玉川周辺では溢水被害もあった。川底も大きくえぐられ川筋や寄り州、中州の形状も大きく変わると共に、河川敷の植生にも大きな影響があった。以前から計画されていた二子玉川の堤防かさ上げ工事は台風には間に合わなかったが、2020 年 11 月に着工し、2025 年まで継続される計画である。この工事のための仮設工事や中州・寄り州からの砂利採取なども野鳥生息環境に少なからず影響を与えていると思われるが、工事範囲に含まれる兵庫島から野川をはさんだ対岸部の樹林帯はゴイサギ、カワセミなど多くの鳥が見られる場所であり、近隣住民や野鳥ボランティアを含む関係者からの要望を受けて、樹林帯の幅を半分程度残す形で工事の計画がなされている。

②野川 区内約 5.4km

野川は水源の国分寺市東恋ヶ窪一丁目から、国分寺崖線の湧水を集めながら武蔵野台地を東南に流れる。小金井市、三鷹市、調布市を通して狛江市に入り、世田谷区境付近で入間川を合流、さらに世田谷区内を流れて鎌田三丁目まで仙川を合流後、玉川一丁目が多摩川に流入する。延長 20.2 km (世田谷区内 5.4 km) の一級河川である。2008 年 2 月からは、吉澤橋上流の治水対策のため川底を下げるなどの工事が上流に向け順次始まり、2009 年からは工法選択に「多自然川づくり」の考えを取り入れた生物多様性の維持が考慮された工事であった。2020 年 3 月で世田谷区内の河床整備工事は終了した。その後は上流に向かって工事は進められている。特に世田谷区内は湧水の流れ込みや目に見えない水面下や川底からの地下水の湧出が多量にあり、その流動保全もされてきた。明るく開けた環境で、小規模ながら中州や河川敷があり野鳥が集まる環境となっている。両岸には遊歩道があり野鳥観察に適している。

カワセミは流域全体で頻繁に観察され繁殖もしている。最近ではコチドリの営巣も見られている。

③仙川 区内約 6.2 km

仙川の水源は小金井市にあり、鎌田三丁目野川に合流する延長 20.9 km の一級河川である。両岸が直立護岸の人工的な河川で、人や犬が立ち入りできないため、野鳥が安心して生息できる環境になっている。川幅は 15m 程度と狭いが、流れには早瀬や淀みなどの変化があり、点在する小さな中州や寄州にはカモ類が好むセイヨウカラシナ、ショカツサイ、ミゾソバなどが自生している。また、両岸の緑道には野鳥が好むサクラ、ミズキ、トウネズミモチなどが生えている。さらに仙川が公園の中心部を流れる祖師谷公園をはじめとし、川沿いに点在する小緑地や川に面した民家の植え込みも野鳥が集まる拠り所となっている。

流水の特徴は、下水処理場から処理水が放流され、水質がやや富栄養であるため、沈水性植物や蘚苔類が多く見られ、それがカモ類の大切な食物になっている。また、この沈水性植物は魚類や水生昆虫類の産卵場所であり、甲殻類や両生類の隠れ家ともなっている。仙川は、植物を主食とするカモ類、水生昆虫や甲殻類を採食する野鳥が見られる河川である。

④高源院 北鳥山 4-30

高源院には緑に囲まれた弁天池があり、コウホネやスイレンが群生している。池の周囲は常緑樹が多く、他にモミジ、エノキなどが植えられている。昔は鴨池といわれコガモが沢山見られたが、今はカルガモだけである。池があるので普通に見られる鳥以外にダイサギ、アオサギが時々入ることもある。運が良ければカワセミに会えることもある。

⑤蘆花恒春園 粕谷 1-20-1 80,304 m²

明治、大正の文豪徳富蘆花の居宅と墓地があり、当時の武蔵野の面影を生かして公園が造られた。居宅周辺やその東側の墓地周辺にはクスノキ、コナラ、マテバシイ、コブシの大きな木や竹林があり、鳥が多く見られる。最も南側にある草地広場をイチョウ、スギ、ポプラが取り囲んでいる。普通に見られる鳥以外に

ミゾゴイやトラツグミが立寄ったこともある。春と秋にはキビタキ、オオルリ、センダイムシクイ等が見られる。

2018、2019 年の台風では強風により 47 本もの木々が倒木・半倒木など大きな被害を受けた。加えて、2019 年からは 34 本の樹木にナラ枯れの被害が出、一部伐採も行われている。

⑥将軍池公園 上北沢 1-11 約 5,000 m²

烏山地域の区立広場で、子供用の遊具はなく 2012 年 5 月 8 日にオープンした。公園緑地のシンボルである将軍池にはカルガモ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、カワセミなどが立ち寄る。その池と周辺の緑地は都立松沢病院の敷地内にあり立ち入り禁止となっている。公園に設置されたウッドデッキ広場から柵越しではあるが、借景の将軍池を間近にながめ、四季の移り変わりを楽しむことができる。観察窓がないサンクチュアリー形式の公園である。将軍池周囲には野鳥の餌となるエノキ、ムクノキ、カキノキ、イイギリ、サクラなどもあり、周辺の野鳥の拠り所になっている。

⑦希望丘公園 船橋 7-9 18,657 m²

1976 年、土地区画整理事業を記念して造られた区立公園で、芝生山を中心に円形球技場、グラウンドのほか子供用のアスレチック器具も設置されている。ケヤキ、クスノキ、サクラなどの大木が施設の間を埋めているが、比較的開放的な雰囲気を持つ公園である。隣地には清掃工場の温水を利用したプール施設もあり家族連れで賑わっている。普通に街中で見られる鳥が観察されている。

⑧桜丘すみれば自然庭園 桜丘 4-23-12 6,643 m²

環状八号線に面した緑地で、個人住宅であった当時の庭園のたたずまいを活かして、地域住民と財団が連携し運営している。入り口近くにネイチャーセンターがあり、常駐の自然解説員が説明をしてくれる。園内の中央には芝地があり、春はスミレが咲いている。周囲は低木の植え込みとケヤキ、マツ、コナラ、クヌギ、イロハモミジなどの高木樹林などがあり、東側にはアズマネザサやススキの藪、アサザの池もある。

市街地の中の貴重な緑地であり、市街地で普通に見られる野鳥のほか、市街地ではなかなか見られない冬鳥や、渡りの鳥が見られることもある。

⑨祖師谷公園 上祖師谷 3-22-19 93,372 m²

旧東京教育大学農場跡地を中心として整備され、1975 年に開園した公園である。仙川が公園のほぼ中央を流れ、公園を東西に二分している。仙川を挟んで面積の広い左岸には児童公園、運動施設、花壇、ヨシに縁どられた細流、草地があり、右岸はなだらかな傾斜地でアカマツ、スギ、サワラ、シラカシ、クヌギ、コナラ、サクラなどの常緑樹と広葉落葉樹の混交林、高木に囲まれた広い芝地、笹藪、細い流れと池などがある。

水辺を好む野鳥と山林を好む野鳥の両方が見られる公園である。

2019 年の台風 15 号、19 号では倒木 9 本、半倒木 3 本など大きな被害があった。また 20 本近いナラ枯れ被害も出ている。

⑩つりがね池公園 祖師谷 5-33-11 2,629 m²

当公園は 1974 年 3 月 31 日に開設され、せたがや百景 No. 47 に選定された四季折々に美しい公園である。つりがね池は、標高凡そ 45m の武蔵野台地の窪地にある自然林に囲まれた湧水池（現在は人工給水）であった。つりがね池公園はその湧水池を中心に作られた緑地公園で、昔は人々が生活の水場としたことから、今も池畔には水神様が祭られている。池の水は西方に流れ、大石橋付近で仙川に注ぐ。公園の植相はハンノキ、サンゴジュ、ムクノキ、サクラ、ミズキ、モウソウチク林、などで構成され、カルガモ、キジバト、カワセミ、オナガ、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロ、ホンセイインコなど身近な野鳥が見られる。

⑪きたみふれあい広場 喜多見 9-25-5 38,825 m²

小田急線の喜多見車検区の建物上に作られた人工地盤の公園で、世田谷区が管理している。地上 10 メー

トルの高さにあるため見晴らしが良く、富士山、丹沢の山々や国分寺崖線も一望できる。すぐそばの野川緑道等ともあわせて整備されており、花壇やちびっこ広場、遊具施設、芝生広場、池などが配されているほか四季折々の花や木々が多く植えられている。モズやウグイスが繁殖している。

⑫成城みつ池緑地 成城 4-20 22,911 m²

「成城みつ池緑地」は国分寺崖線の中にあり、東京都の緑地保全地区、世田谷区の特別保護区に指定されているので、普段は関係者以外の立ち入りが禁止されている。そのため、世田谷区でありながら、水量が豊かな湧水と多彩な林相に恵まれ、季節にはゲンジボタルが飛び交い、絶滅危惧種といわれる動植物が数多く自生している大変貴重な自然保護区である。

野鳥にとっても安全でしかも大変棲みやすいバランスがとれた樹林帯を構成している。冬期にフクロウが見られることもあり、渡り途中の鳥も多く観察されている。

2018年10月の台風では倒木2本を含む大きな被害を被った。更に2020年にナラ枯れ被害が発生し、枯れたコナラを伐採した。

⑬成城三丁目緑地 成城 3-16 19,836 m²

林野庁の職員宿舎の跡地と周辺の樹林地が地域住民によって保全管理されている緑地で、全体が国分寺崖線内にある。スギ、アカマツの針葉樹やサクラ、ナラ、カシ類の高木が生える斜面の林床には低木やアズマネザサの藪がある。湧水を引き込んだせせらぎの流れがあり、サワガニなどが生息する自然豊かな所である。

2020年にはナラ枯れ被害によりコナラを伐採した。

⑭次大夫堀公園 喜多見 5-27-14 36,567 m²

江戸時代初期、狛江から大田区まで多摩川の水を引き、農業用水を開削した小泉次大夫の名を冠して造られた公園である。現在は、野川から水を取り入れ昔の用水路を再現している。園内は水路が走り、水田や畑もある。民家園が隣接しており、正面入口には池がある。周囲は宅地化されたとはいえ社寺林、生産農家の畑、屋敷林が残っていて緑が多い環境である。

⑮氷川神社周辺 喜多見 4-26-1

鎮守の森が多くある氷川神社周辺は、千年以上の昔から信仰により守られてきた多くの種類の樹木や竹林がある。氷川神社やそばにある慶元寺は杉木立の長い参道があり、神殿近くにはイチョウの大木が長い樹齢を物語っている。少し離れた所には須賀神社があり、ここには樹齢400年以上のムクノキ5本が小さな神社を囲んでいる。宅地化が進んできているが、社寺周辺は変わることなく続いてきた昔ながらの風景を残している。

⑯大蔵三丁目公園 大蔵 3-2-40 15,223 m²

国分寺崖線斜面の樹林帯にある緑地で、崖の上部と下部に団地があり、団地を結ぶ小道が散歩道となっている。世田谷通りを挟んだ団地内はサクラの名所でもある。崖下を湧水が流れ、池を作り、裾を洗いながら仙川に注ぐ。草花類や樹木相も豊かで水辺の鳥や山野の鳥などが見られる。

⑰大蔵運動公園 大蔵 4-6-1 112,816 m²

砧公園に隣接したスポーツ公園で1967年に開園した。野球場、陸上競技場、テニスコート、屋内体育館、屋内プール、ジョギングコースや児童用遊具施設もそろう総合運動施設である。施設の間に広場や木立、芝生地、植え込み、噴水池、バラ園や梅林などが造られている。国分寺崖線の一部斜面林も含まれ、湧水からの小さな流れもある。主に市街地で普通に見られる鳥が見られる。

⑱砧公園 砧公園 1-1 391,777 m²

戦後、都立のゴルフ場だったが、1957年に自然の地形を生かした都立公園として整備された。外周は常緑樹林によって東名高速・環状八号線の騒音や排気ガスをさえぎっている。世田谷美術館、運動場、アス

レチック広場、スポーツの施設などがあり、西側のファミリーパークは中央部が広い芝生になっている。園内を流れる谷戸川は自然に近い小川で両岸が樹林帯となっており、また池を中心とした常緑樹の多いバードサンクチュアリ(立ち入り禁止区域)も整備されている。四季を通して多くの野鳥観察ができるが、エナガ、アオゲラ、コゲラ、ホンセイインコなど多くの山野の鳥が繁殖し、渡り途中の鳥も多く観察されるという特徴がある。

2018年10月1日の台風24号では多くの大樹が倒れたり幹割れの被害を受けた。2019年8月からはナラ枯れが見られ、2020年末現在被害は100本以上に及んでいる。

⑲馬事公苑 上野賀 2-1-1 184,643 m²

日本中央競馬会(JRA)が運営する馬事普及の拠点で、1940年の第12回東京オリンピックに向けた馬術選手育成のために開設された。現在でも関東における主要な馬術競技会場となっている。園内には1周1,100mの砂地走路のほかアリーナ3面、耐久競技走路などに加え、馬に親しむ広場、日本庭園、木立の中の児童遊園、1ha程度の武蔵野自然林もある。

開けた砂地や芝生地に加えて自然林もあることから、市街地で普通に見られる鳥の他に冬鳥や渡り途中の鳥も見られる。

老朽化した施設の再整備と2020年東京オリンピック・パラリンピック馬場馬術競技会場としての利用に適合させるために2016年末に閉園して2022年末の全体完成を目指して工事が行われてきた。オリンピック・パラリンピックは1年延期されたため、工事全体の終了は早くても2023年末となり、再開園は2024年になると思われる。

工事途中の台風により倒木・幹割れの被害も発生し、ナラ枯れ被害も武蔵野自然林を中心に発生したため伐採も行っている。工事完了時にはこれら被害木の代替木が植えられる予定である。

⑳岡本静嘉堂周辺 岡本 2-18 約30,000 m²

岡本静嘉堂緑地と岡本公園を併せた一帯は国分寺崖線の裾を流れる丸子川とその川に合流する谷戸川に挟まれたY字状の台地と崖線で構成されている。上部の静嘉堂美術館など主要施設周辺は庭園樹や独立した針葉樹の大木などが植えられた明るい場所である。丸子川に至る崖線斜面は、人の立ち入りがなく、常緑広葉樹の大木が主の自然林によるうっそうとした森になっている。谷戸川側も坂道の両側が常緑樹林の大木に覆われた暗い急斜面の森である。丸子川側、谷戸川側とも豊富に湧水が流れ出し、水生植物が繁茂する湿地帯や水量豊富な池を形成している。

国分寺崖線の、変化に富む豊かな自然環境が広く保たれているので、水辺の鳥から野の鳥、山の鳥まで幅広い鳥種が観察され、ムシクイ類、ヒタキ類も毎年のように記録されている。

㉑瀬田四丁目旧小坂緑地 瀬田 4-41-2 9,459 m²

国分寺崖線の上から丸子川に至る斜面に造られた元は個人の屋敷。崖線上部にある旧邸の庭園の他は斜面で、常緑樹の大木に混ざって落葉樹の大木もあり、一部には竹林もある。湧水による湿地状の部分もある。全体として大木によるうっそうとした森になっている。

野鳥にとっては岡本静嘉堂緑地と一帯になった存在で、同様の鳥種が記録されている。

㉒二子玉川公園 玉川 1-16-1 9,600 m²

世田谷区立の都市公園(地区公園)で、再開発事業である二子玉川ライズに隣接して整備され、2013年に開園した。国分寺崖線のみどりと多摩川の水辺に接し、富士山も望める公園である。芝地の広場や遊び場の周辺に区民により植樹された1,400本の樹木帯がある。また、日本庭園「帰真園」の中には世田谷区登録有形文化財「旧清水家住宅書院」が復元されている。

園内の「いのちの森」(樹林帯と草地)では、モズ、カオグロガビチョウが観察され、「サンクチュアリ」周辺では、メジロ、ツグミ、ハクセキレイの採食シーンなども見られる。

㉓上野毛自然公園 上野毛 2-17 9,240 m²

国分寺崖線の斜面林を保護保全する目的で造られた公園で、サクラが植えられた崖上の広場と崖下のあ

やめの池周辺を除くと、通路以外は立ち入りができない。斜面林はカシ類が多く、やや暗い感じである。丸子川が裾を流れ、園内には小さな水路のあやめ池がある。アオゲラ、キセキレイ、シメ、アオジなども記録されている。

②④玉川野毛町公園 野毛 1-25-1 38,051 m²

環状八号線に面し第三京浜の入口近くに位置し、公園の中央には東京都指定史跡である野毛大塚古墳がある。野球場、テニスコート、プール、広場、遊具施設等がある。特に休日は大勢の人で賑わう区内では大型の公園の一つである。園内には環状八号線沿いにケヤキ並木があり、サクラ、ツバキ、シラカシ、クスなどがある。

②⑤等々力溪谷公園 等々力 1-22 31,502 m²

都区部唯一の溪谷で、谷沢川が武蔵野台地を削り、国分寺崖線を1kmほど深く切り込んで形成された。台地の標高差は約10mある。溪谷の斜面には、武蔵野の代表的な樹木であるケヤキ、シラカシ、コナラ、ミズキ、ヤマザクラ、イロハカエデのほかシダ類や湿生植物が繁茂しており、溪谷の所々で湧水が出ている。

②⑥浄真寺 奥沢 7-1

旧奥沢城主の大平出羽守の城跡に建てられた。敷地には本堂、三仏堂、庫裏が並び、墓地が敷地の半分近くを占める。境内や参道にはサクラ、ケヤキ、イヌシデ、アカマツ、イチョウ、カヤなどの巨樹、古木が多く、緑濃い落ち着いた雰囲気である。境内は整然と整えられ、落ち葉もきれいに掃き清められている。

②⑦駒沢オリンピック公園 駒沢公園 1-1 413,573 m² (目黒区を含む公園全面積)

駒沢オリンピック公園は、1964年の第18回オリンピック東京大会の際に第二会場として使用されたのを記念して命名、開園された。世田谷区では砦公園に並ぶ大きさである。世田谷区、目黒区の両区にまたがって位置し、周囲は住宅地や商業地からなる。運動施設面積が公園全体の3割以上を占める運動公園である。各運動施設との間にヒマラヤスギやケヤキ、カツラ等の高木、ツツジ、イヌツゲ等の低木が配置されている。シンボルタワー下の人工池にはカルガモが年中見られ、毎年繁殖する。公園西側にはバードサンクチュアリがあり、ツミやシロハラ、ヤブサメ、シメなどが見られる。

2018年10月の台風24号、2019年9月の台風15号ではヒマラヤスギ数本の倒木があった。今のところナラ枯れの被害は無いが、クビアカツヤカミキリによる食害で15本以上の高木が枯れた。

②⑧世田谷公園 池尻 1-5-27 78,957 m²

1959年に都立公園として開園した後、1965年に区に移管された。区内で最も東に位置した公園で、中央の噴水広場を中心に西側には野球場、プール、テニスコートなど運動施設、東側には芝生広場や樹木帯が広がっている。

②⑨三宿の森緑地 三宿 2-27 7,959 m²

烏山川緑道の崖上にある三宿の森緑地は、昭和初期には個人の屋敷、戦後は国の施設として使われてきたが、2004年に区立公園となった。多様な自然環境を維持しているのは、公園の企画から維持までを取り組む市民団体「三宿の森を育てる会」によるところが大きい。敷地の半分は古木の樹林である。実のなる木もあり、水場、ねぐら、隠れ場所など鳥の生息にいい環境である。面積は狭いが保護のため立ち入り禁止の区域がある。

③⑩豪徳寺 豪徳寺 2-24

広大な敷地を持ち、招き猫と彦根藩主井伊家墓所(国の史跡指定)で有名な古刹である。見事な松並木の参道を進むと境内には古木が多く、樹洞のある大木もある。墓地の近くはケヤキ、ムクノキ、シラカシの大木やカエデが繁っていたが、近年、枝打ちや伐採が行われて明るい環境に変わっている。墓地の北と東側にはヒノキの植林地がある。

周囲は住宅地であるが、豪徳寺を中心に半径 500m圏内に世田谷八幡、勝光院、世田谷城址公園、常徳院、常泉寺別院、勝国寺などの寺社林や公園が点在し、豪徳寺一帯は比較的緑の多い環境を構成している。

③①世田谷城址公園 豪徳寺 2-14-1 3,836 m²

昭和 15 年に開園した世田谷区内唯一の「歴史公園」で「東京都指定文化財」にもなっている。昔のおもかげを残す土塁や丘、谷があり、樹木に覆われた自然豊かな公園で、世田谷百景にも選ばれている。豪徳寺境内までおよそ 100m しか離れておらず、その間には土塁と空堀が残っている。

③②羽根木公園 代田 4-30 79,651 m²

北沢地域を代表する公園。1956 年 10 月に東京都により開設され、1965 年 4 月に世田谷区の管理となった。小田急線、井の頭線の最寄りの駅からも近く、周囲は商業地、住宅地、小・中学校などの公共施設に囲まれている。公園全体が小高い丘になっており、北に広場と野球場、中央にテニスコート、南東にプレイパーク、南斜面に梅林と針葉樹林が広がる。

2020 年にはナラ枯れが見られ、伐採を行っている。

③③北沢川緑道 約 1.6 km

北沢川は、都立松沢病院付近を水源とし、上北沢から目黒川に注ぐ二級河川である。現在では全域が暗渠化されており、その内、赤堤から池尻までの約 4 km 間が再生水を利用した人工流水路のある遊歩道になっている。観察地はその内の代田 2 丁目および代沢 4 丁目の 1.6km の部分である。遊歩道の両岸は桜並木で、根元にはツツジなどが植栽されている。

第Ⅱ章

世田谷区の鳥の概要

1. 記録された鳥類

記録のある1910年以降、上空通過も含め世田谷区内において記録された鳥類の累計は、2020年12月末現在、外来種を含め22目66科285種である。なお、合計の種数では在来種のキジと外来種のキジ(亜種コウライキジ)を1種として集計した。また、ここ5年間(2016年～2020年)で記録された累計は外来種を含め18目52科210種であった(表Ⅱ-1-1)。

区内で記録された鳥類は、キツツキ類やシジュウカラ類、ツバメ類、ヒタキ類など公園や住宅地など都内でごく普通に見られる一般的な種、平地の池や河川など淡水性の水辺で見られるカモ類やサギ類、シギ・チドリ類、カモメ類、および猛禽類などで、関東地方で山地、沿岸部を除く地域で普通に見られる鳥類のほとんどが含まれている。

記録された種を目、科、種に分類した。年別出現区分を、記録の有る1910～2010年、2011～2015年、2016～2020年に分け、繁殖記録は●印、生息記録は○印を付けた。また、ここ10年間(2011～2020年)に観察された種を各季節(春：3～5月、夏：6～8月、秋：9～11月、冬：12～2月)に分け、記録された件数を記述した。

絶滅のおそれがある野生生物の評価を東京都区部レッドリスト(RL 2020)と環境省レッドリスト(RL 2020)に分けて、それぞれに記号で記載した。記号の詳細は「参考資料3」を参照。

No.(種番号)、目名、科名、種名および配列は日本鳥類目録改訂第7版に準拠した。

表Ⅱ-1-1. 世田谷区鳥類リスト

No.	目名	科名	種名	1910-2010	2011-2015	2016-2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
3	キジ目	キジ科	ウズラ	○		○	1				CR	VU
5			キジ	●	●	●	112	44	19	23	EN	
7	カモ目	カモ科	サカツラガン	○								DD
8			ヒシクイ	○		○			1		EX	VU
10			マガン	○		○	2				EX	NT
15			シジュウカラガン			○	1					CR
19			コハクチョウ	○	○	○			2	1		
20			オオハクチョウ	○		○			1			
21			ツクシガモ	○								VU
24			オシドリ	○	○	○	1	4	9	4	EN	DD
26			オカヨシガモ	○	○	○	46	1	15	81		
27			ヨシガモ	○	○	○	45		30	102	EN	
28			ヒドリガモ	○	○	○	299	6	256	604		
29			アメリカヒドリ	○	○					1		
30			マガモ	○	○	○	211	17	214	616		
32			カルガモ	●	●	●	1007	1087	1072	1287		
34			ハシビロガモ	○	○	○	95		25	212		
35			オナガガモ	○	○	○	98	41	143	396		
36			シマアジ	○	○	○	9	2	3	1	DD	
37			トモエガモ	○	○	○	2		5	4	DD	VU
38			コガモ	○	○	○	633	40	556	1186		
42			ホシハジロ	○	○	○	4		12	31	VU	
43			アカハジロ	○	○					1		DD
46			キンクロハジロ	○	○	○	2		16	46		
47			スズガモ	○	○	○	2		6	20	*②	
53			ビロードキンクロ	○							DD	
57			ホオジロガモ	○	○	○				10	VU	
58			ミコアイサ	○							EN	

No.	目名	科名	種名	1910~2010	2011~2015	2016~2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
59	カモ目	カモ科	カワアイサ	○	○	○	5	6	1	2		
60			ウミアイサ	○		○				3	DD	
62	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	●	○	○	106	18	143	234	NT	
63			アカエリカイツブリ	○		○	13			2	NT	
64			カンムリカイツブリ	○	○	○	14		19	45	*②	
65			ミミカイツブリ			○				1		
66			ハジロカイツブリ	○	○	○				6	NT	
74	ハト目	ハト科	キジバト	●	●	●	1592	1446	1312	1637		
78			アオバト	○	○	○	3	1	20	1	・	
81	アビ目	アビ科	アビ	○	○		1					
98	ミズナギドリ目	ミズナギドリ科	オオミズナギドリ	○	○			1				
112		ウミツバメ科	クロコシジロウミツバメ	○								OR
114			コシジロウミツバメ	○								
115			オーストンウミツバメ	○								NT
118	コウノトリ目	コウノトリ科	ナベコウ	○								
119			コウノトリ			○				2		OR
127	カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○	558	434	622	778		
132	ペリカン目	サギ科	サンカノゴイ	○		○			1		CR	EN
133			ヨシゴイ	●	○	○	1	5	1	1	CR	NT
134			オオヨシゴイ	○								OR
137			ミゾゴイ	○	○	○	2	6			・	VU
139			ゴイサギ	○	○	○	69	89	121	278	VU	
141			ササゴイ	●	○	○	5	29	8		CR	
142			アカガシラサギ	○	○	○	5	1				
143			アマサギ	○	○	○	22	8	8			
144			アオサギ	○	○	○	410	519	816	769		
146			ダイサギ	○	○	○	188	191	464	471	NT	
147			チュウサギ	○	○	○	6	35	59	5	NT	NT
148			コサギ	○	○	○	528	615	797	935	VU	
149			クロサギ	○								
150			カラシラサギ	○								NT
154		トキ科	クロツラヘラサギ			○				1	CR	EN
166	ツル目	クイナ科	クイナ	○	○	○	42		24	108	DD	
170			ヒクイナ	●	○	○	1	1			CR	NT
173			ツルクイナ	○								
174			バン	●	○	○	91	4	62	136	EN	
175			オオバン	○	○	○	144		153	332	CR	
184	カッコウ目	カッコウ科	ジュウイチ	○		○	1				・	
185			ホトトギス	○	○	○	8	8			・	
187			ツツドリ	○	○	○	3	3	37		・	
188			カッコウ	○	○	○		2			CR	
189	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ	○							EX	NT
191	アマツバメ目	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	○		○			1			
192			アマツバメ	○	○	○	18	8	37	1	・	
193			ヒメアマツバメ	●	○	●	120	90	102	149	VU	

No.	目名	科名	種名	1910~2010	2011~2015	2016~2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
194	チドリ目	チドリ科	タゲリ	○	○	○			16	13		
195			ケリ	○	○	○	8	1	8	1	・	DD
197			ムナグロ	○	○	○	18	3	11		VU	
199			ダイゼン	○		○	1				VU	
200			ハジロコチドリ	○								
202			イカルチドリ	●	●	●	163	144	162	270	EN	
203			コチドリ	●	●	●	292	196	2	4	CR	
204			シロチドリ	●	○		2				CR	VU
205			メダイチドリ	○	○		2				VU	
210		セイタカシギ科	セイタカシギ	○	○	○	1	1	2		EN	VU
212		シギ科	ヤマシギ	○	○	○	1			3	VU	
216			オオジシギ	○	○	○	4		1		DD	NT
218			チュウジシギ	○							DD	
219			タシギ	○	○	○	162		93	200	VU	
221			オオハシシギ	○								
223			オグロシギ	○	○			1			EN	
227			チュウシャクシギ	○	○	○	6		6		VU	
231			ホウロクシギ			○	2				CR	VU
232			ツルシギ	○	○	○	2				CR	VU
233			アカアシシギ	○		○		1			CR	VU
234			コアオアシシギ	○	○	○		1	1		CR	
235			アオアシシギ	○	○	○	6	5	20	3	NT	
239			クサシギ	○	○	○	6	2	7		CR	
240			タカブシギ	○	○	○	9	7	4		CR	VU
241			キアシシギ	○	○	○	130	25	5		VU	
243			ソリハシシギ	○							VU	
244			イソシギ	●	●	●	188	140	265	303	VU	
246			キョウジョシギ	○	○	○	3				VU	
247			オバシギ		○		1				CR	
251			トウネン	○	○	○	5	5			VU	
253			オジロトウネン	○	○	○	11		6	9	CR	
254			ヒバリシギ	○	○		1					
256			ヒメウズラシギ	○								
258			ウズラシギ	○	○	○	2	2				
259			サルハマシギ	○	○	○			6		CR	
261			ハマシギ	○	○	○		1	6	16	VU	NT
264			キリアイ		○				1		CR	
266			エリマキシギ	○	○	○	1	2			CR	
268			アカエリヒレアシシギ	○	○	○	7	3	4		DD	
269			ハイイロヒレアシシギ	○	○	○	2			2	DD	
271		タマシギ科	タマシギ	○	○	○	1		3	1	CR	VU
273		ツバメチドリ科	ツバメチドリ	○	○	○	4	3				VU
278		カモメ科	ミツユビカモメ	○	○				1	1		
286			ユリカモメ	○	○	○	69		153	174		
287			ズグロカモメ	○								VU

No.	目名	科名	種名	1910~2010	2011~2015	2016~2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
293	チドリ目	カモメ科	ウミネコ	○	○	○	1	53	29		①	
294			カモメ	○	○	○	6		1	4		
296			シロカモメ	○	○	○				2		
299			セグロカモメ	○	○	○	129		70	141		
301			オオセグロカモメ	○	○	○	8			5		NT
307			コアジサシ	●	●	●	132	102			EN	VU
311			セグロアジサシ	○								
312			ベニアジサシ	○								VU
314			アジサシ	○	○	○	2		3			
316			クロハラアジサシ	○	○	○		4	14			
317			ハジロクロハラアジサシ	○	○	○	1		2			
322		トウゾクカモメ科	シロハラトウゾクカモメ	○	○		1					
333		ウミスズメ科	コウミスズメ	○								
339	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	○	○	○	18	3	46	15	EN	NT
340		タカ科	ハチクマ	○	○	○	2		1		・	NT
342			トビ	○	○	○	131	85	180	167	NT	
349			チュウヒ	○	○	○				3	EN	EN
350			ハイイロチュウヒ	○							CR	
354			ツミ	●	●	●	185	155	49	35	EN	
355			ハイタカ	○	○	○	18	1	18	67	EN	NT
356			オオタカ	○	●	●	175	80	151	262	EN	NT
357			サシバ	○	○	○	5	12	13		・	VU
358			ノスリ	○	○	○	17	3	28	110	CR	
360			ケアシノスリ	○								
364			クマタカ	○							・	EN
366	フクロウ目	フクロウ科	オオコノハズク	○	○					1	DD	
367			コノハズク	○							・	
372			フクロウ	○	○	○	10	4	7	9	CR	
374			アオバズク	●	○	●	12	67	2		CR	
375			トラフズク	○	○	○				6	CR	
376			コミミズク	○	○	○	5		5	15	CR	
378	ブッポウソウ目	カワセミ科	アカショウビン	○		○	1		1		・	
383			カワセミ	●	●	●	391	421	515	620	VU	
387		ブッポウソウ科	ブッポウソウ			○		1			・	EN
388	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ	○	○	○	6		9	12		
390			コゲラ	●	●	●	819	534	592	820		
393			アカゲラ	○	○	○	15	3	3	16	・	
397			アオゲラ	○	●	●	180	93	63	107	EN	
401			チョウゲンボウ	●	●	●	161	122	169	193	EN	
403	ハヤブサ目	ハヤブサ科	コチョウゲンボウ	○	○					2	DD	
404			チゴハヤブサ	○	○		3		4		DD	
407			ハヤブサ	○	○	○	26	28	44	91	EN	VU
412												
412	スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ	●	○	○	12		6		EX	VU
413		コウライウグイス科	コウライウグイス		○		1					
418		カササギヒタキ科	サンコウチョウ	●	○	○	4	3	3		EX	

No.	目名	科名	種名	1910~2010	2011~2015	2016~2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
419	スズメ目	モズ科	チゴモズ	●							EX	CR
420			モズ	●	●	●	291	57	435	533	CR	
421			アカモズ	●		○				1	CR	EN
427		カラス科	カケス	○	○	○	7		19	15		
429			オナガ	●	●	●	601	620	461	442	NT	
435			ハシボソガラス	●	●	●	1303	1259	1185	1388		
436			ハシブトガラス	●	●	●	1629	1516	1513	1620		
438		キクイタダキ科	キクイタダキ	○	○	○	2		5	22	○	
439		ツリスガラ科	ツリスガラ	○	○	○	2			6		
441		シジュウカラ科	コガラ	○	○	○	3		1	1		
442			ヤマガラ	●	●	●	66	24	80	109	VU	
443			ヒガラ	○	○		19		17	30		
445			シジュウカラ	●	●	●	1738	1379	1416	1651		
450		ヒバリ科	ヒメコウテンシ	○		○	1					
452			ヒバリ	●	●	●	166	125	133	131	VU	
453			ハマヒバリ	○								
455		ツバメ科	ショウドウツバメ	○	○	○	5	2	30			
457			ツバメ	●	●	●	852	1576	134	5		
459			コシアカツバメ	○	○	○	6	11	54		VU	
461			イワツバメ	●	●	●	187	192	20		DD	
463		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	●	●	●	1803	1423	1716	2323		
464		ウグイス科	ウグイス	●	●	●	671	190	308	839	○	
465			ヤブサメ	○	○	○	9		1		・	
466		エナガ科	エナガ	●	●	●	412	133	282	570		
470		ムシクイ科	ムジセッカ			○	1		1			
474			キマユムシクイ			○	2					
476			オオムシクイ	○	○	○	1	5	2			DD
477			メボソムシクイ	○	○	○	3	1	1		・	
479			エゾムシクイ	○	○	○	33		2		・	
480			センダイムシクイ	○	○	○	97	4	20		EX	
485		メジロ科	メジロ	●	●	●	1101	855	990	1629		
487		センニュウ科	シマセンニュウ	○								
490			オオセッカ			○	1				CR	EN
491			エゾセンニュウ		○	○	2					
492		ヨシキリ科	オオヨシキリ	●	○	●	107	72	11		CR	
493			コヨシキリ	○	○	○	9	9	5		・	
499		セッカ科	セッカ	●	●	●	160	168	97	52	CR	
500		レンジャク科	キレンジャク	○	○					2		
501			ヒレンジャク	○	○	○	3			4		
504		ミソサザイ科	ミソサザイ	○	○	○	2		2	9	○	
506		ムクドリ科	ムクドリ	●	●	●	1728	1538	763	1528		
508			コムクドリ	○	○	○	40	23	16	1		
511			ホシムクドリ		○				1			
513		ヒタキ科	マミジロ	○							・	
514			トラツグミ	○	○	○	3			12	VU	

No.	目名	科名	種名	1910~2010	2011~2015	2016~2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
518	スズメ目	ヒタキ科	クロツグミ	○	○	○	4		1		・	
520			マミチャジナイ	○	○	○	1		10	3		
521			シロハラ	○	○	○	245		46	455		
522			アカハラ	○	○	○	82		15	107		
525			ツグミ	○	○	○	878	1	155	1523		
530			コマドリ	○	○	○	7				・	
533			ノゴマ	○		○			1			
534			コルリ	○	○	○	6				・	
536			ルリビタキ	○	○	○	6		7	27		
540			ジョウビタキ	○	○	○	148		314	594		
542			ノビタキ	○	○	○	20		43	2		
549			イソヒヨドリ	○	○	●	66	34	86	37	NT	
552			エゾビタキ	○	○	○	1		30			
553			サメビタキ	○		○			4		・	
554			コサメビタキ	●	○	○	5		46		EX	
558			キビタキ	○	○	●	134	29	44			
559			ムギマキ	○		○	1		2			
560			オジロビタキ	○		○				1		
561			オオルリ	○	○	○	30		10		・	
566		イワヒバリ科	カヤクグリ	○							・	
568		スズメ科	ニューナイスズメ	○								
569			スズメ	●	●	●	1679	1835	1553	1831		
571		セキレイ科	ツメナガセキレイ	○	○	○	8		1	3		
573			キセキレイ	●	○	●	220	16	463	895		
574			ハクセキレイ	●	●	●	730	603	999	1492		
575			セグロセキレイ	●	●	●	251	171	288	364	VU	
580			ビンズイ	○	○	○	3			10		
583			ムネアカタヒバリ	○	○	○	1			5		
584			タヒバリ	○	○	○	119		111	192		
586		アトリ科	アトリ	○	○	○	68		15	227		
587			カワラヒワ	●	●	●	655	476	336	680		
588			マヒワ	○	○	○	19		15	22		
589			ベニヒワ	○	○					2		
592			ベニマシコ	○	○	○	11		23	55	VU	
599			ウソ	○	○	○			5	8	NT	
600			シメ	○	○	○	200		65	472		
601			コイカル	○	○		2					
602			イカル	○	○	○	8		4	13	NT	
603		ツメナガホオジロ科	ツメナガホオジロ	○		○			1			
609	ホオジロ科		シラガホオジロ	○								
610			ホオジロ	●	●	●	108	40	76	178	EN	
614			ホオアカ	○	○	○	17		9	21		
615			コホオアカ	○	○	○	1			1		
617			カシラダカ	○	○	○	10		11	67	VU	
618			ミヤマホオジロ	○	○	○	1			5		

No.	目名	科名	種名	1910～2010	2011～2015	2016～2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
622	スズメ目	ホオジロ科	チャキンチョウ	○								
623			ノジコ		○	○			2		・	NT
624			アオジ	○	○	○	289		190	553		
625			クロジ	○	○	○	20		9	6	NT	
626			シベリアジュリン	○								
627			コジュリン	○							DD	VU
628			オオジュリン	○	○	○	87		10	82	NT	
633			サバンナシトド	○								

外来種

No.	目名	科名	種名	1910～2010	2011～2015	2016～2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
1	キジ目	キジ科	コジュケイ	●		○	1					
3			キジ（コウライキジ）	○								
7	カモ目	カモ科	コブハクチョウ	○								
8	ハト目	ハト科	カワラバト	●	●	●	1377	1328	1350	1689		
13	インコ目	インコ科	セキセイインコ	○	○	○			2	2		
14			オオホンセイインコ	○								
15			ホンセイインコ	●	●	●	779	586	522	658		
16			ダルマイインコ	○	○	○				2		
21	スズメ目	チメドリ科	ガビチョウ	○	○	●	76	79	53	19		
23			カオグロガビチョウ	○	○	●	31	45	40	19		
25			ソウシチョウ	○	○		1	1	1	3		
26		ムクドリ科	ハッカチョウ	○								
34		カエデチョウ科	カエデチョウ	●								
35			ベニスズメ	●								
38			ギンバラ	○								
39			キンバラ	●								
40			ヘキチョウ	○								
41			ブンチョウ	○								

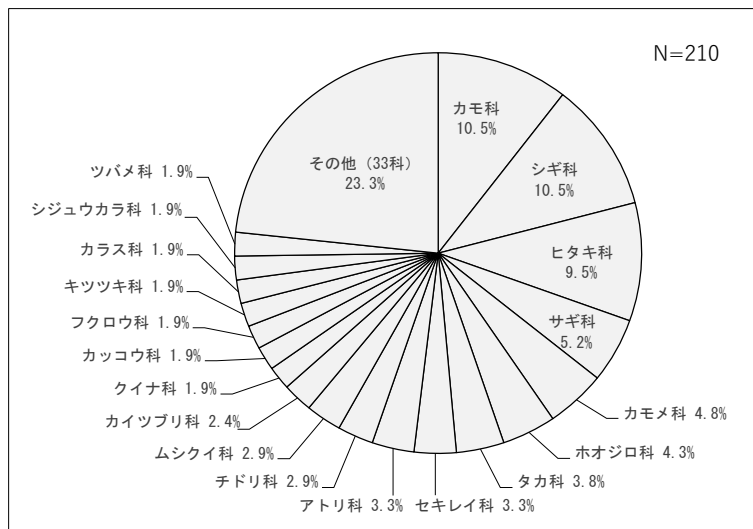
日本鳥類目録改訂第7版に記載されていない外来種

No.	目名	科名	種名	1910～2010	2011～2015	2016～2020	春	夏	秋	冬	都RL	環RL
1	フラミンゴ目	フラミンゴ科	チリーフラミンゴ	○								
2	インコ目	オウム科	オカメインコ	○								
3	タカ目	コンドル科	クロコンドル	○								
4	スズメ目	ハタオリドリ科	オウゴンチョウ	○								
5			ベニビタイキンランチョウ	○								
6			キンランチョウ	○								
7		テンニンチョウ科	テンニンチョウ	○								

2. 科別構成

1910 年から 2020 年に観察された種は外来種を含め 22 目 66 科 285 種である。その内、2016 年から 2020 年に観察された 18 目 52 科 210 種(外来種含)の科別構成をしてみる。

最も種数が多いのはカモ科とシギ科で各 22 種 10.5%、3 位はヒタキ科で 20 種 9.5%、4 位はサギ科で 11 種 5.2%、5 位はカモメ科で 10 種 4.8%、6 位はホオジロ科 9 種 4.3%となる。7 位以下はタカ科 8 種 3.8%、セキレイ科 7 種 3.3%、アトリ科 7 種 3.3%、チドリ科 6 種 2.9%、ムシクイ科 6 種 2.9%、カイツブリ科 5 種 2.4%、クイナ科 4 種 1.9%、カッコー科 4 種 1.9%、フクロウ科 4 種 1.9%、キツツキ科 4 種 1.9%、カラス科 4 種 1.9%、シジュウカラ科 4 種 1.9%、ツバメ科 4 種 1.9%、その他は 33 科 49 種 23.3%となる(図Ⅱ-2-1)。



図Ⅱ-2-1. 2016～2020 年の種数の科別構成

3. 繁殖した種の生息状況

世田谷区で繁殖した種は、2020 年末現在外来種を含め 15 目 37 科 58 種であった。記録の有る 1910～2010 年、2011～2015 年、直近 5 年間の 2016～2020 年に分けて表示した。

繁殖した各種の内容を見てみると、過去に繁殖していたが近年になって見られなくなった種、過去に繁殖していたが近年再び繁殖した種、かつては稀な種であったが近年になって繁殖するようになった種など様々である。それら繁殖や生息の概要を解説した。1910～2020 年の繁殖・生息の詳細は「集計表 1」を参照。

繁殖基準は、全国鳥類繁殖分布調査マニュアル(2016)に準じ、繁殖ランク A(繁殖を確認)とした。詳細は「参考資料 2 繁殖ランク判定基準」を参照。

表Ⅱ-3-1. 世田谷区の繁殖種とその生息状況

●印は繁殖 ○印は生息

種名	1910～2010	2011～2015	2016～2020	繁殖記録と生息状況
キジ	●	●	●	1968～1990 年に放鳥。1991 年から時々繁殖している
カルガモ	●	●	●	1968 年からほぼ毎年繁殖が続いている
カイツブリ	●	○	○	1996～2001 年繁殖したが、その後主に冬期に観察されるようになる
キジバト	●	●	●	1953～1971 年繁殖、1997 年から再び繁殖が続いている
ヨシゴイ	●	○	○	1964 年に 3 組、1965 年 1 組繁殖。その後少数となり 2014 年から観察されていない
ササゴイ	●	○	○	1957、1958 年に繁殖例があるが 2010 年以降、少数がまれに観察される
ヒクイナ	●	○	○	1963、1964 年に繁殖。その後稀になり、2000 年、2014 年、2019 年に観察された
バン	●	○	○	1967～2004 に時々繁殖していた。その後主に冬期に少数が観察されるのみとなる
ヒメアマツバメ	●	○	●	1981 年初記録。個体数は冬期に多く夏期には少ない。2001 年、2007 年、2016 年に繁殖した例がある
イカルチドリ	●	●	●	1950～1970 年に繁殖。2001 年から再び繁殖が観察され現在まで続いている
コチドリ	●	●	●	1949～1970 年まで繁殖。1996 年から再び繁殖し現在まで続いている
シロチドリ	●	○		1975 年まで繁殖 その後生息のみ 2004 年以降は稀 2014 年以降観察されず
イソシギ	●	●	●	1960～1968 年に繁殖。1996 年から再びほぼ毎年繁殖が続いている
コアジサシ	●	●	●	1949～1962 年に繁殖、2002 年～2009 年ころは多数が観察され、営巣も多く確認されたが、2010 年から飛来数は激減。2014 年以降の繁殖は 2018 年のみ
ツミ	●	●	●	1988 年に初記録。2003、2005 年繁殖し、2009 年頃からほぼ毎年繁殖している

種名	1910～2010	2011～2015	2016～2020	繁殖記録と生息状況
オオタカ	○	●	●	1987 年に初記録。2000 年頃から観察例が急増 2012 年からほぼ毎年繁殖する
アオバズク	●	○	●	1944～1981 年繁殖。1998 年～2004 年に再び繁殖 2016 年からはほぼ毎年繁殖
カワセミ	●	●	●	1953 年に繁殖。その後 1997 年頃から再び繁殖が観察されるようになる
コゲラ	●	●	●	1984 年に初記録。1987 年初繁殖 2001 年からはほぼ毎年繁殖が観察される
アオゲラ	○	●	●	1962 年から観察され、2011 年、2016 年、2017 年、2018 年に繁殖が見られた
チョウゲンボウ	●	●	●	1953 年観察され 2005 年に初めて繁殖する。その後毎年続いている
サンショウクイ	●	○	○	1938 年から生息記録があり、1949 年に繁殖する。その後は稀に観察される
サンコウチョウ	●	○	○	1940、1941、1965 年に繁殖。その後稀に春と秋に観察されている
チゴモズ	●			1952～1960 年に時々繁殖し、1974 年まで生息したが以後観察されていない
モズ	●	●	●	1946～1982 年まで時々繁殖。2003 年から再び繁殖してから毎年続いている
アカモズ	●			1964～1969 年に繁殖、1974 年まで生息した 亜種シマアカモズが 2019 年に久しぶりに観察された
オナガ	●	●	●	1946～1975 年まで時々繁殖。2000 年から再び繁殖が続いている
ハシボソガラス	●	●	●	1949 年に繁殖。その後 2000 年に再び繁殖し年々個体数も増加している
ハシブトガラス	●	●	●	1977、1987 年に繁殖。1996 年から急増し、1999 年から繁殖も続いている
ヤマガラ	●	●	●	1949 年初記録。その後生息が継続 繁殖は 2001、2007、2010、2011、2018 年
シジュウカラ	●	●	●	1945 年初記録。繁殖は 1959 年から続いている
ヒバリ	●	●	●	1948～1975 年に時々繁殖。2002 年からほぼ毎年繁殖している
ツバメ	●	●	●	1962 年から繁殖記録があり、一時記録が途切れるも 1997 年から再び繁殖が記録されている
イワツバメ	●	●	●	1948 年から生息し、1977 年に繁殖。1988 年以降時々繁殖している
ヒヨドリ	●	●	●	1946 年から生息記録がある。1970 年頃から繁殖しその後毎年続いている
ウグイス	●	●	●	1945 年から生息記録あり、2008、2013 年、その後 2016 年からはほぼ毎年繁殖
エナガ	●	●	●	1986 年から生息し、1987 年繁殖、2006 年からほぼ毎年繁殖している
メジロ	●	●	●	1945 年から生息記録があり、2000 年に初めて繁殖。その後毎年繁殖が続く
オオヨシキリ	●	○	●	1940～1973 年に時々繁殖。1998～2010 年に再び繁殖が観察され、その後 7 年間繁殖がなかったが、2018 年に久しぶりに繁殖が確認された
セッカ	●	●	●	1949～1970 年まで繁殖するがその後繁殖なし。1995 頃から再び繁殖を確認。2009 年以後は毎年繁殖している
ムクドリ	●	●	●	1948 年から生息記録あり。1957～1977 年に繁殖。2002 年から再び繁殖が続く
イソヒヨドリ	○	○	●	1973、2002 年に記録あり。2007 年から毎年観察され 2017、2018 年には繁殖
コサメビタキ	●	○	○	1948 年に繁殖例がある。その後記録が途切れたが、1993 年から観察されている
キビタキ	○	○	●	1946 年に初記録。1994 年からは毎年観察される 2017、2018、2019 年に繁殖
スズメ	●	●	●	過去から継続して繁殖していると思われる。繁殖は 1950 年が初記録で 2006 年以降は毎年記録されている
キセキレイ	●	○	●	1946 から生息記録 1948～1952 年、1966 年に続き 2016 年久しぶりに繁殖確認
ハクセキレイ	●	●	●	1948 年から生息記録があり、主に冬期に観察されていた。繁殖期に観察されるのは 1980 年代後半になる。繁殖は 1981 年初記録、1996 年以降毎年続いている
セグロセキレイ	●	●	●	1950～1966 年に繁殖。その後一時繁殖は途切れるが 1996 年から再び続く
カワラヒワ	●	●	●	1948 年から観察されているが繁殖記録は無く、1972 年が繁殖初記録となる。1997 年からはほぼ毎年繁殖が観察されている
ホオジロ	●	●	●	1947 年から 1962 年まで時々繁殖が観察されていた その後繁殖は暫く途切れたが 2015 年からはほぼ毎年繁殖が確認されている
コジュケイ	●		○	1948～1989 年まで繁殖 その後 2003 年まで稀に観察されたが、その後見られなくなった 2017 年に久しぶりに観察された
カワラバト	●	●	●	1966 年から生息記録はあるが、繁殖記録はなく 2007 年が繁殖の初記録
ホンセイインコ	●	●	●	1971 年から生息しているが、繁殖は 2008 年が初記録。その後ほぼ毎年続く
ガビチョウ	○	○	●	2002 年に生息を確認 2007 年からは毎年観察され、2016 年に繁殖が見られた
カオグロガビチョウ	○	○	●	1996 年に初記録 2010 年から頻繁に観察される 2019 年に初の繁殖を確認
カエデチョウ	●			1980 年に繁殖記録。2003、2005 年に生息記録のみ
ベニスズメ	●			1961 年から生息し、1969 年に繁殖する。その後 2006 年まで生息する
キンバラ	●			1967 年から観察し、1969 年に繁殖記録がある。その後観察されていない
期間の繁殖種数	52 種	35 種	43 種	1910～2020 年繁殖種数 58 種

4. 主な種の消滅と出現

世田谷区で1946年から2020年までに観察された主な種の消滅と出現状況を5年ごとに表した。

表Ⅱ-4-1. 区内から消滅した、或いは消滅の傾向がある主な種

●印は繁殖 ○印は生息のみ

種名 / 年	46-50	51-55	56-60	61-65	66-70	71-75	76-80	81-85	86-90	91-95	96-00	01-05	06-10	11-15	16-20
ヒクイナ			○	●	○						○			○	○
バン			○	○	●	●	●		●	●	●	●	○	○	○
シロチドリ	●	●	●	●	●	●	○			○	○	○		○	
サンショウクイ	●	○	○	○	○	○						○	○	○	○
サンコウチョウ	○	○	○	●	○	○	○		○	○		○	○	○	○
チゴモズ	○	●	●	○	○	○									
アカモズ				●	●	○									○
キセキレイ	●	●	○	○	●	○	○		○	○	○	○	○	○	●
ホオジロ	●	○	●	●	○	○				○	○	○	○	●	●
コジュケイ	●	●	●	○	●	●	●		●	○		○			○
ベニスズメ				○	●		○		○	○	○	○	○		

表Ⅱ-4-2. 区内に出現してきた主な種

●印は繁殖 ○印は生息のみ

種名 / 年	46-50	51-55	56-60	61-65	66-70	71-75	76-80	81-85	86-90	91-95	96-00	01-05	06-10	11-15	16-20
オカヨシガモ									○	○	○	○	○	○	○
ヨシガモ										○	○	○	○	○	○
シマアジ								○		○	○	○	○	○	○
カワアイサ									○	○	○	○	○	○	○
カンムリカイツブリ										○	○	○	○	○	○
アマサギ										○	○	○	○	○	○
アオサギ				○					○	○	○	○	○	○	○
オオバン									○	○	○	○	○	○	○
ヒメアマツバメ								○	○	○	○	●	●	○	●
タゲリ										○	○	○	○	○	○
ケリ											○	○	○	○	○
セグロカモメ				○				○	○	○	○	○	○	○	○
ミサゴ									○		○	○	○	○	○
ツミ									○	○	○	●	●	●	●
オオタカ									○	○	○	○	○	●	●
コゲラ								○	●	●	○	●	●	●	●
チョウゲンボウ		○			○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●
ツリスガラ										○	○	○	○	○	○
ヒヨドリ	○	○	○	○	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
エナガ									●	○	○	○	●	●	●
メジロ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●
イソヒヨドリ						○						○	○	○	●
ハクセキレイ	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	●	●	●	●	●
ホンセイインコ						○	○		○	○	○	○	●	●	●
ガビチョウ												○	○	○	●
カオグロガビチョウ											○	○	○	○	●

これまで観察されていたが稀になったり見られなくなった種、冬期にのみ観察されていたが繁殖が見られるようになった種、個体数が増減した種、新たに出現した種など、「種の入替わり」といえる状況が1970年頃から1990年頃の約20年間に集中して起こっている。

区内から消滅した、或いは消滅の傾向がある主な種の例として、ヒクイナ、シロチドリ、サンショウクイ、サンコウチョウ、チゴモズ、アカモズなど繁殖していた種が、1970年代頃から稀になったり見られなくなったことが挙げられる。また、キセキレイやホオジロは冬期にのみ観察されるようになったが、最近では再び繁殖が見られるようになった。ベニスズメは全く見られなくなった(表Ⅱ-4-1)。

区内に出現してきた主な種の例として、冬期にのみ観察されていたチョウゲンボウ、ヒヨドリ、メジロ、ハクセキレイなどがあり、70年代頃から90年代にかけて次々と繁殖するようになる。1980年から1990年には数種のカモ類をはじめ、カンムリカイツブリ、アオサギ、オオバン、ヒメアマツバメや猛禽類のミサゴ、ツミ、オオタカなどが次々に出現してきた。

1996年に記録のある外来種のカオグロガビチョウ、2002年に初めて観察された外来種のガビチョウ、2002年から継続的に生息が見られてきたイソヒヨドリは、僅か20年近くで世田谷区の南半分に広がり、繁殖するまでになった(表Ⅱ-4-2)。

第Ⅲ章

世田谷区鳥類目録

1) 目的

- ① 世田谷区の 1910～2020 年までの間に記録された鳥類の把握
- ② 各鳥類の生息状況(生息、繁殖の有無)とその変化の把握

2) 観察記録

本目録作成にあたっては野鳥ボランティアによる調査記録および個人観察記録を主に使用したが、野鳥ボランティア以外の個人記録や文献も収集し引用した。

3) 記載内容と解説

- ① 本目録は、1910 年以降 2020 年 12 月末までに、世田谷区内で記録された在来種 20 目 58 科 261 種、外来種 9 目 12 科 25 種、合計 22 目 66 科 285 種を対象とした。なお、合計の種数では在来種のキジと外来種のキジ(亜種コウライキジ)を 1 種として集計した。
- ② 分類、配列、種番号、和名、学名、英名についての採用は主として「日本鳥類目録改訂第 7 版」(2012)に準じた。
- ③ 目録の記述は、世界の生息分布、日本の生息分布と生息環境、特に世田谷区で繁殖している種は繁殖、採食例などを解説した。世田谷区では、主に 2006 年以降の生息状況、観察地、採食例などを記した。他に「東京都の保護上重要な野生生物種(本土部) 2020 年版・東京都区部」と「環境省レッドリスト 2020 版」に記載のある絶滅のおそれのある種のカテゴリー、全記録件数と記録年を付記した。観察記録は過去の記録も含め年代順とした。繁殖記録を優先し、記録の少ない種は記録の全てを、記録の多い種は観察内容と地域的なバランスを考慮して選択した。2011 年から 2020 年に 10 件以上記録の有る種については月別観察件数と観察 1 件あたりの平均個体数のグラフを入れた。
- ④ 繁殖状況の判定基準は、現在実施している全国鳥類繁殖分布調査(2016～2020 年)マニュアルの繁殖ランク A を繁殖ありとした。
- ⑤ 観察記録は、年月日、場所、個体数、観察内容の順で記載した。観察内容では原文の一部を省略したり、わかり易い表現にしたものもある。時刻は 24 時表示とした。
- ⑥ 観察地名は調査上登録した観察地名(河川、公園名など)、町名は○町○丁目までとし、古い記録は現在の観察地名に置き換えた。
- ⑦ 野鳥ボランティアは 2002 年以降、多摩川、野川、仙川、砧公園、2013 年以降、駒沢オリンピック公園、羽根木公園、2016 年からは成城みつ池緑地の定例調査を行っており、これらの観察内容欄には「定例調査」と入れた。そのほかにコアジサシ繁殖調査、ツバメ繁殖数調査、ツバメ集団ねぐら調査なども観察内容欄に記載した。
- ⑧ 2007 年以降、野鳥ボランティアによる調査範囲を世田谷区内の主な公園、緑地に広げたので、観察件数が増加している。
- ⑨ 観察記録において、文献から採用したデータで、日または月日が不明なものは不明部分を空白とした。

◆キジ科 PHASIANIDAE

3. ウズラ *Coturnix japonica* Japanese Quail

キジ科

ユーラシア大陸東部、モンゴル北部、バイカル湖周辺、中国北部、アムール川流域、日本で繁殖する。冬はインド、インドシナ、中国南部、朝鮮半島などに移動する。日本では、北海道、本州北部に夏鳥として渡来し繁殖する。本州中部以南、伊豆諸島、四国、九州、大隅諸島では冬鳥である。

留鳥性の高いキジ科の鳥としては距離の長い旅をする種である。北海道では低地の、本州中部では低山帯の草原に住む。山地草原や牧場、海岸草原、農耕地などで見られ、渡りの時期には平地の河川敷や農耕地にも現れる。繁殖期は4～9月頃で、藪かげや草むらの地面の窪みに枯れ草をしいて皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ、雌だけの世話を受けながら成長する。草むらに落ちている草の種子、小果実や小昆虫類、などを歩きながら採食する。昔から花鳥風月の題材として登場し、江戸時代には、武士や好事家のあいだで、鳴き声や姿を愛でられ飼育されてきた。現在では、採卵のための家禽として養殖されている。

世田谷区では、主に冬期に観察される。草の中などにいることが多く観察はむずかしいが、足元から飛び立った例や草原の細道を歩いているのが観察されている。1997年頃までは多摩川の野毛、玉堤などでも見られたが、1999年以降は鎌田1の草原だけで観察されている。2010年以降は記録が途絶えたが、2018年に久々に記録された。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数43件 1954～2018年)

○主な観察記録

1954. 04. 08	多摩川(野毛)	1羽	鳴く 渡し場
1966. 04. 18	多摩川(野毛)	1羽	谷沢川先の島に降りていた
1997. 06. 30	多摩川(玉堤2)	1羽	川岸の藪を歩いている(7/4まで2回)
2000. 04. 18	多摩川(鎌田1)	1羽	草原の細道を歩いていたが何かに驚いたように急に深い藪に入る
2004. 03. 16	多摩川(鎌田1)	3羽	枯れた草地の裸地をゆっくり移動
2007. 02. 28	多摩川(鎌田1)	1羽	藪の細道を移動
2010. 12. 20	多摩川(鎌田1)	2羽	草原で「クルル」と鳴いて北に30mほど飛び高い土手に降りる
2018. 03. 19	多摩川(鎌田1)	1羽	草原の細道から飛び立ち川よりに約50m飛び草原に降りる

5. キジ *Phasianus colchicus* Common Pheasant

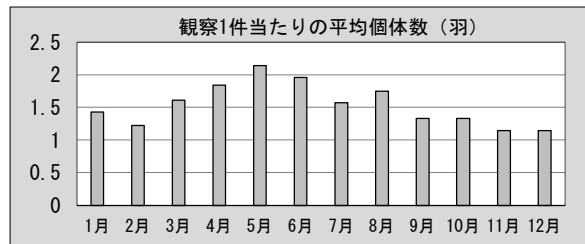
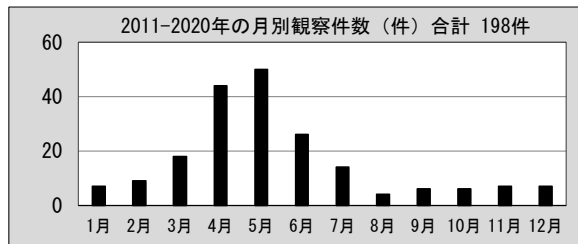
キジ科

ユーラシア大陸のコーカサスからトルキスタン、モンゴル、アムール川流域、朝鮮半島、日本などに分布する。日本には、亜種キジ、亜種トウカイキジ、亜種シマキジ、亜種キュウシュウキジの4亜種が生息する。日本の国鳥に指定されている。本州北部から四国、九州に留鳥として生息している。代表的な狩猟鳥であり自然分布のほか現在も全国で放鳥が行われている。

平地や山地の草原、農耕地、雑木林、低木林、川原の草原に生息する。繁殖期は4～7月で、草原、低木林、農耕地周辺の草むらの窪地に、雌が枯れ草を敷いて皿状の巣を作り抱卵する。1巣卵数は6～12個で、雌だけが抱卵し、抱卵日数は23～25日位である。早成性で、ヒナは孵化後すぐ巣を離れ、自分で餌を採ることができる。雌だけの世話を受けながら成長する。繁殖期の雄は「ケーン、ケーン」と聞こえる声でよく鳴く。食性は雑食性で、ノビエ、アブラナ、クコ、イネ科の植物の芽、葉、実などの他、ミミズ、昆虫類、クモ類、多足類なども採食する。

世田谷区では、多摩川の河川敷で繁殖している。1968年以前の生息記録はなく、1968年から1990年まで岡本、上野毛、成城、大蔵、等々力溪谷公園、多摩川などで放鳥が行われた。放鳥後は等々力溪谷公園、岡本、野川、奥沢、仙川、砧公園などで観察されたが、2005年以降は多摩川だけで観察されるようになる。繁殖は数年おきに観察されているが、生息地は年々狭まり、ほぼ鎌田、玉堤だけになる。2017年以降繁殖の記録はない。繁殖期の3月下旬から6月は活動が活発で、姿や鳴き声がよく見聞きされる。5月下旬から7月頃の人通りの少ない時には、散策路、草原の縁、川岸を親子連れで移動する姿、砂浴びや雄どうし

が飛び蹴りし争う様子などが観察されている。(東京都区部：絶滅危惧IB類 全記録数1,975件 1968～2020年)



○放鳥記録

1968. 10. 31	(岡本、等々力溪谷公園)	20羽	
1969. 09. 19	(岡本、喜多見、上野毛、大蔵、等々力溪谷公園)	50羽	
1970-1973年	(区内 放鳥)	50羽	
1974年	(区内 放鳥)	80羽	
1975-1976年	(区内 放鳥)	50羽	
1977. 08. 02	(岡本、上野毛、成城、大蔵、等々力溪谷公園)	100羽	生後90～100日
1977. 10. 18	(岡本、深沢、成城)	30羽	生後90～100日
1989. 10. 30	多摩川(鎌田、玉堤)	32羽	
1990. 10. 26	多摩川(鎌田、玉堤)	54羽	放鳥 世田谷区みどり政策課

○主な繁殖記録

1991. 07. 07	多摩川(玉堤1)	1巣	ヒナ6羽	ウズラ大
1995. 06. 27	多摩川(野毛2)	1巣	ヒナ1羽	成鳥と遊歩道に出てきた
1996. 06. 10	多摩川(鎌田1)	1巣	ヒナ3羽	成鳥1羽と川岸にいた
1998. 06. 12	多摩川(玉川1)	1巣	幼鳥1羽	成鳥1羽と中州にいた
2001. 06. 16	多摩川(玉堤2)	1巣	ヒナ2羽	成鳥雌と川原の草地を歩いている
2002. 07. 06	多摩川(野毛2)	1巣	ヒナ2羽	川原のバイクのわだちで砂浴び
2005. 07. 01	多摩川(玉堤1)	1巣	ヒナ2羽	中州で草や河畔林の生えた岸を移動
2009. 06. 14	多摩川(玉堤1)	1巣	ヒナ2羽	雌成鳥1羽、ヒナ2羽が中州の砂礫地に出てくる
2013. 06. 10	多摩川(玉堤1)	1巣	ヒナ2羽	成鳥1羽、孵化後1週間位のヒナ2羽中州砂礫地から草地へ
2015. 06. 15	多摩川	1巣	ヒナ8羽	雌成鳥1羽とヒナ8羽が中州砂礫地を歩く
2016. 06. 06	多摩川(玉堤1)	1巣	雌成鳥1羽、ヒナ3羽	中州草地から川岸に出てくる

○主な観察記録

1969. 03. 27	岡本	1羽	岩崎邸にて鳴く
1974. 10. 19	等々力溪谷公園	1羽	世田谷警察署で保護されたキジを放鳥
1988. 02. 15	岡本	2羽	八幡神社
2001. 06. 21	奥沢	1羽	線路を歩く
2005. 04. 27	多摩川	7羽	定例調査
2009. 08. 26	多摩川	10羽	
2012. 06. 18	多摩川(玉堤1)	4羽	雄1羽が草原から川崎側の川原に低空で飛び移る
2013. 05. 05	多摩川(玉堤1)	3羽	雄が、草が疎らな砂礫地で雌に向かって鳴きながら羽ばたく
2015. 05. 04	多摩川	1羽	雄1羽が中州草地でカラシナの種子を次々と食べる
2016. 08. 28	多摩川(玉堤1)	1羽	雄2、雌1羽が左岸から飛び立ち中州へ
2017. 05. 03	多摩川(玉堤1)	1羽	大田区境やや上流中州で鳴く 雄
2018. 04. 16	多摩川(玉堤1)	1羽	雄が草原を歩く
2019. 04. 22	多摩川(玉堤1)	1羽	草原から2度鳴く声
2020. 11. 11	多摩川(玉堤1)	1羽	雄1羽が左岸の繁みから多摩川本流方面へ飛び去る

◆カモ科 ANATIDAE

7. サカツラガン *Anser cygnoides* Swan Goose

カモ科

ユーラシア大陸東部、アルタイ山脈以東のモンゴル、バイカル地方、アムール川流域で繁殖し、冬は中国や日本に移動する。日本では、稀な冬鳥として北海道、本州、四国、九州、屋久島、琉球諸島など各地

に不定期に渡来する。1950 年頃までは東京湾に定期的に渡来していた。

越冬地では、湖沼、湿原、河川、河口、水田などで生活し、つがいや家族で渡来したものは、他のガン類やカモ類の群れに入らずに行動していることが多い。繁殖期は4～5月で、川の中州や湖沼の中の小島の草むらに雌が枯れ草の茎を積み重ね皿形の巣をつくる。主に植物食で、水生植物、陸生植物、藻類などを採食する。家禽として広く飼育されているシナガチョウは本種を原種とし、中国で改良されたものである。

世田谷区では、多摩川に飛来した1例の記録がある。(環境省：情報不足 全記録数1件 2005年)

○観察記録

2005. 04. 09 多摩川(上野毛2) 1羽 上空を上流方面へ飛ぶ

8. ヒシクイ *Anser fabalis* Bean Goose

カモ科

ユーラシア大陸のシベリアからロシア極東の森林地帯やツンドラ地帯で繁殖し、冬は中国、朝鮮半島、日本などに移動する。日本には、冬鳥として亜種オオヒシクイ、亜種ヒシクイ、亜種ヒメヒシクイの3亜種が渡来するが、亜種ヒメヒシクイは稀である。北海道では旅鳥で、本州の限られた地域で越冬する。主な越冬地は、宮城県伊豆沼、新潟県福島潟や佐渡、石川県片野鴨池、滋賀県琵琶湖などである。関東では、小規模ながら亜種オオヒシクイの越冬地が茨城県江戸崎の水田地帯にある。

農耕地や安全な湖沼、河川で生活する。繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。木の根元や藪の下の地上に雌が主ではあるが、雄も協力して草の葉、枯れ葉、地衣類などで皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐ巣を離れ、雌雄の親鳥の世話を受けながら成長する。朝夕に小群、大群で農耕地や湖沼などに移動して落ち穂や湖沼の水生植物、藻類などを採食する。

世田谷区では移動途中に観察された下記2例の記録がある。(東京都区部：絶滅、環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数2件 2006、2019年)

○観察記録

2006. 01. 12 多摩川(玉川1) 6羽 亜種オオヒシクイ 上流から飛来し通過する

2019. 11. 04 多摩川(玉堤1) 4羽 亜種オオヒシクイ 成鳥2羽、幼鳥2羽が中州水際に羽繕いと水浴び

10. マガン *Anser albifrons* Greater White-fronted Goose

カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の極北の沿岸部ツンドラ地帯、北アメリカ、シベリア、アラスカ、カナダ、グリーンランド西部で繁殖し、冬はヨーロッパやイラク、カスピ海地方南部、中国、朝鮮半島、日本、同じようにアメリカ南部、メキシコなどに移動する。日本には、冬鳥として渡来し、北海道では旅鳥で本州北部・中部、佐渡で越冬する。他に稀ではあるが、全国各地で広く観察されている。主な越冬地は宮城県伊豆沼、蕪栗沼、石川県片野鴨池などである。また、異常寒波や積雪が多い年には更に南へ分散移動することが知られている。1971年に国の天然記念物に指定された。

繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。広大なツンドラ地帯の中州や沼沢地の草むらの地上に、雌が主に、灌木の枝、地衣類、草などを主材に皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐ巣を離れ、雌雄の親鳥の世話を受けながら成長する。家族の結束が強く、越冬地でもつがいと幼鳥の家族単位で行動する。夜間は安全な池や沼で休息し、早朝に広い水田地帯へ群れて移動する。地上を歩きながら水田地帯で稲の落穂、池や沼でマコモなどを採食する。

世田谷区では稀で、多摩川に渡来した記録がある。2004年1月に飛来した個体は3月まで滞在した。2006年は移動の途上立寄った14羽の群れの記録がある。(東京都区部：絶滅 環境省：準絶滅危惧 全記録数54件 1974～2018年)

○主な観察記録

1974. 12. 14	多摩川	3 羽	ゴルフ場内で遊ぶ
1975. 02. 16	多摩川	1 羽	矢沢川先
2004. 01. 16	多摩川	1 羽	若鳥 (3/26 まで留まった)
2006. 10. 10	多摩川(上野毛 2)	14 羽	成鳥 2 羽、若鳥 2 羽、幼鳥 10 羽が中州で休んでいたが、その後隊列を組んで上流へ飛び立つ
2018. 03. 25	多摩川(鎌田 1)	1 羽	高水敷で休息し、川崎方面へ飛び去った
2018. 03. 29	多摩川(鎌田 1)	1 羽	

15. シジュウカラガン *Branta hutchinsii* Cackling Goose

カモ科

主に北アメリカ大陸のカナダ、アラスカ、西はアリューシャン列島で繁殖する。以前はコマンドール諸島、千島列島でも繁殖した。冬は主に温暖なメキシコ北部、メキシコ湾沿岸に移動する。日本には、少数が北東シベリアから日本に渡来し、稀な冬鳥として北海道、本州、九州に渡来の記録がある。本州での越冬地としては、宮城県伊豆沼周辺が知られている。他に、亜種ヒメシジュウカラガンが迷鳥として北海道と本州で記録されている。

マガン、ヒシクイの群れと行動を共にし、昼間は安全な池や沼で休息し、夕方と早朝に水田地帯で主に稲の落穂などを採食する。

世田谷区では稀で、移動途中に観察された下記 1 例の記録がある。(環境省：準絶滅危惧 IA 類 全記録数 1 件 2017 年)

○観察記録

2017. 05. 05	多摩川(玉堤)	1 羽	シジュウカラガンの若鳥が見られた

19. コハクチョウ *Cygnus columbianus* Tundra Swan

カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の極北の沿岸部で広く繁殖し、冬は南ヨーロッパ、中央アジア、中国中央部、アメリカ南部に移動する。日本に渡来する亜種はレナ川からアナディール地方にかけて、東シベリアの沿岸部で繁殖し、冬は東アジアの中国、朝鮮半島、日本などに移動する。日本には、冬鳥として渡来し、北海道では旅鳥で、本州で越冬する。主な越冬地は青森県小川原湖、福島県猪苗代湖、滋賀県琵琶湖、島根県中海などである。他に亜種アメリカコハクチョウが北海道、本州、四国で稀な冬鳥として記録がある。

越冬地では、湖沼、内湾、河川、農耕地などで生活し、安全な水面や湿地をねぐらとする。繁殖期は 6～7 月で、一夫一妻で繁殖する。水辺の草地や水に漬かりそうな地上に、雌が主ではあるが雄も協力して草、枝、地衣類を使って大きな皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ、親鳥に導かれ群れで生活する。家族の結束が強いと言われる。早朝に水田や田畑、湖沼、川などに群れで採食に移動する。主に植物食で、水草の葉、茎、地下茎、種子、水底の草や堆積物などを採食する。

世田谷区では、不定期に多摩川に飛来する。若鳥が 1991 年 2 月から 4 月、1991 年 11 月から翌年 3 月、1996 年 10 月から翌年 4 月まで滞在した。2012 年、2013 年に続き 2017 年も移動途中立寄った記録がある。(全記録数 139 件 1991～2017 年)

○主な観察記録

1991. 02. 20	多摩川(玉堤)	1 羽	若鳥 (4/15 まで留まった)
1991. 11. 01	多摩川	1 羽	若鳥 (翌年 3 月まで留まり越冬した)
1996. 10. 28	多摩川(鎌田 1)	1 羽	若鳥 (翌年 4/18 まで留まり越冬した)
1999. 11. 09	多摩川(野毛 2)	2 羽	成鳥 幼鳥が下流より飛来し中州でくちばしを背に入れて休息
2002. 10. 24	多摩川(玉堤 1)	6 羽	成鳥 渡りの途中、一時降りる
2004. 10. 24	多摩川(玉川 3)	7 羽	上空を低空で下流へ通過す

2005. 10. 23	多摩川(玉堤 1)	6 羽	成鳥 4 羽、幼鳥 2 羽が中州の草地で採餌や休息
2012. 01. 06	多摩川(玉堤 1)	5 羽	浅瀬で休息 時々高い声で鳴き交わす 15 分ほどで 1 直線に並び、上流方向に飛びたっていった
2013. 10. 22	多摩川(玉堤 1)	3 羽	成鳥 2 羽、幼鳥 1 羽 上流から飛来し下流へ
2017. 10. 17	多摩川(玉堤 2)	3 羽	成鳥 2 羽、幼鳥 1 羽が中州水際にいたが上流へ飛び立つ

20. オオハクチョウ *Cygnus cygnus* Whooper Swan

カモ科

ユーラシア大陸のアイスランド、スカンジナビア、キルギス草原地帯、北モンゴル、アムール川流域、カムチャツカなどで広く繁殖し、冬はイギリス、ヨーロッパ、黒海、カスピ海周辺、中国、朝鮮半島、日本などに移動する。日本には、冬鳥として北海道、本州の北部と中・南西部に渡来し越冬する。主な越冬地は、北海道尾岱沼、青森大湊湾、宮城県伊豆沼、新潟県瓢湖などである。

越冬地では湖、沼、大きな川、河口、内湾などで生活し、安全な水辺の浅瀬をねぐらとする。繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。水辺の草地や水に漬かりそうな地面に雌雄が枯れ草などで大きな巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに親鳥に導かれ巣を離れる。幼鳥を含む家族群が行動の単位で、集合して数十羽から数百羽の大きな群れを構成する。早朝に湖沼、湿地、川、水田などへ群れて採食に移動する。食性は植物食で、落穂やヨシ、ガマ、内湾ではアマモなど水生植物の茎や根を採食する。

世田谷区では、多摩川に飛来した下記 2 例の記録がある。(全記録数 2 件 2008、2016 年)

○観察記録

2008. 12. 16	多摩川(玉堤)	2 羽	成鳥 1 羽、幼鳥 1 羽 中州で休息 成鳥は時々羽繕いする
2016. 10. 25	多摩川(野毛 1)	1 羽	寄州で観察 頭上を通過直後発見 下流へ飛翔中

21. ツクシガモ *Tadorna tadorna* Common Shelduck

カモ科

ユーラシア大陸のヨーロッパ中部沿岸や中央アジアで広く繁殖し、冬はイギリス、ヨーロッパ南西部、北アフリカ、小アジア、インド、中国、日本などに移動する。日本には、冬鳥として、本州南西部、九州に渡来する。特に有明海を中心とした九州北部沿岸の河口部、干潟、湖沼などで越冬する。和名「筑紫鴨」は、ツクシガモが九州北部に多く渡来することに由来する。

越冬地では、沖にでることは少なく、内湾や河口近くの広大な干潟で生活する。繁殖期は4～7月で、樹洞、獣の古い巣穴や岩の割れ目など暗い穴の中に、雌雄が共同して枯れ草などで皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ、雌雄の親鳥の世話を受けて成長する。育雛の期間は短く 2 週間ほどで親鳥は換羽のために、一定の換羽地に立ち去る。残された幼鳥たちは幼鳥集団を形成し、45～50 日で独立し、独立した順に繁殖地を去る。食性は動物食で、干潟を歩きながら泥の中に嘴を突き込み、巻貝、二枚貝、甲殻類、小魚などを採食する。

世田谷区では、多摩川に渡来した下記 1 例の記録がある。(環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 1 件 2008 年)

○観察記録

2008. 04. 01	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌 1 羽が中州の縁でヒドリガモ約 20 羽の群れと休息

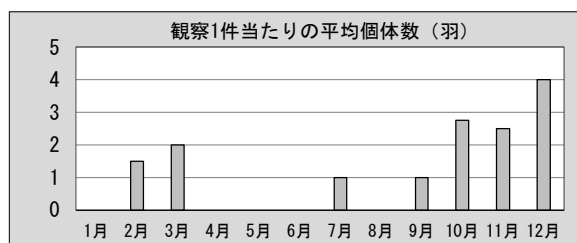
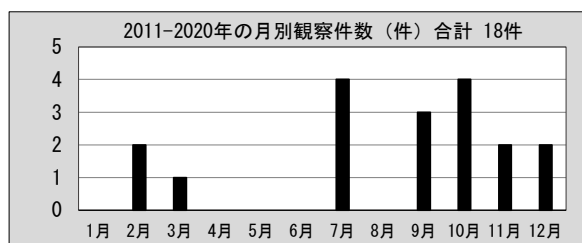
24. オシドリ *Aix galericulata* Mandarin Duck

カモ科

ユーラシア大陸の中国東部、アムール川流域、沿海州、サハリン、朝鮮半島、日本など極東の狭い範囲で繁殖する。冬になると北部のものは中国南部や台湾、日本などの暖地に移動する。日本では、北海道、本州北部では夏鳥であるが、本州中・南西部、四国、九州、対馬、琉球諸島では留鳥である。冬期には、北方の個体群が冬鳥として本州から四国、九州、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島に渡来する。

山間の溪流や山地の湖などに生息し、特に広葉樹が覆いかぶさるような薄暗い水辺を好む。越冬期には数十羽から数百羽の群れをつくることもあり、公園の池などにも現れる。稀に海に出ることもある。他のカモ類と異なり木の上を休息場所やねぐらとする。繁殖期は4～7月で、平地から山地にかけての森林で繁殖する。主に水辺の木の樹洞に営巣するが、地上の草陰にも営巣することがある。樹洞の場合は巣穴の中に雌が産座を作り、枯草と自分の胸と腹の綿羽を敷く。地上の場合は雌が枯れ草などで皿形の巣を作り、産座には自分の胸と腹部の綿羽を敷く。樹洞のほか巣箱もよく利用し、市街地の公園でも繁殖するケースがある。抱卵は雌のみが行い、つがいは解消する。1 巣卵数は7～12 個、抱卵日数は28～30 日、早成性で、孵化したヒナはすぐ歩くことができ、雌親に導かれて巣穴から飛び降りて水辺に向う。雌のみがヒナを世話し、ヒナは40～45 日で親元を離れる。食性は、主に植物食で、草木の種子や実を採食するが、特にカシ類、ナラ類のドングリを好む。他に水生昆虫などを食べることもある。

世田谷区では、繁殖は観察されていない。1960 年頃までは等々力溪谷公園の谷沢川、丸子川でしばしば観察されている。1992 年に深沢八丁目無原罪特別保護区、砧公園でそれぞれ 16 羽が観察された。ほぼ毎年観察されているが、最近では移動途中と思われる少数の個体が多摩川、野川、砧公園などに立寄るだけになっている。2004 年仙川に夏期、雄 1 羽が生殖羽で飛来しエクリップスに換羽するまでとどまった例がある。(東京都区部：絶滅危惧 IB 類 環境省：情報不足 全記録数 110 件 1949～2020 年)



○主な観察記録

1949. 01. 17	等々力溪谷公園	3 羽	夕方、谷沢川上流より下流へ鳴きながら飛来し滝の上流に着水
1959. 11. 01	野毛(新田)	12 羽	2、4、6 羽の群れ 南から北へ飛ぶ
1992. 01. 18	深沢 8	16 羽	深沢八丁目無原罪特別保護区
1992. 03. 14	砧公園	16 羽	雄 10 雌 6 羽
1998. 11. 02	多摩川(野毛 2)	2 羽	雄 2 羽 中州で羽づくろい
2004. 05. 15	仙川(給田 2)	1 羽	雄 1 羽が生殖羽で飛来 (8/13 まで約 3 ヶ月滞在し、エクリップスに換羽)
2007. 03. 29	砧公園	10 羽	雄 5、雌 5 羽 サンクチャリ池
2012. 10. 29	多摩川(上野毛 2)	3 羽	雄 2、雌 1 羽
2013. 09. 23	砧公園	1 羽	エクリップス サンクチュアリ池で遊泳
2018. 10. 13	野川(成城 3)	1 羽	川で遊泳
2019. 10. 07	多摩川(野毛 2)	5 羽	雌 2、雄 3 雄 3 羽の内 1 羽が銀杏羽のある冬羽、2 羽はエクリップス羽 右岸でオギやイヌタデの葉を採り水に浸けた後食べる
2020. 02. 10	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雄 右岸で休息

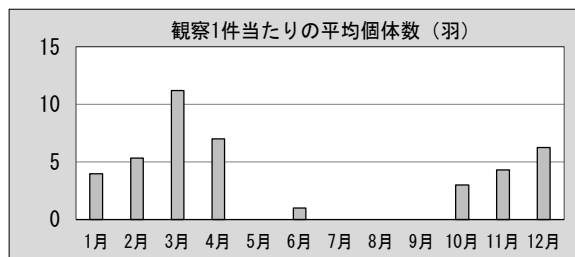
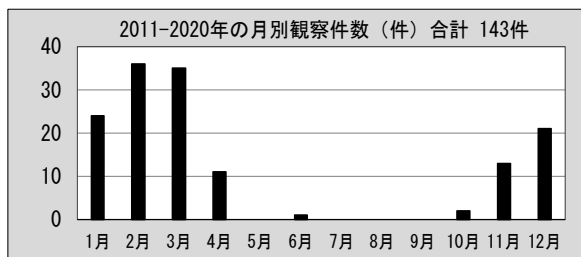
26. オカヨシガモ *Anas Strepera* Gadwall

カモ科

アイスランド、ヨーロッパ、シベリア、カムチャツカ、サハリン、南はカスピカイ、北日本、同様に北アメリカからアラスカで繁殖し、冬は北アフリカ、イラン、インド、中国南部、朝鮮、日本、北アメリカ南部に移動する。日本では、北海道の一部で少数が繁殖するが、多くは冬鳥として本州、四国、九州、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島、大東諸島に渡来する。

越冬地では、湖沼や河川などで生活し、他のカモ類の群れに混じり昼間は安全な水面で休息し、水面や水中の水草などを採食して過ごす。繁殖期は5～6月で、ヨシ原や湿地草原の地上に雌が草の葉や茎を組み合わせて皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化後すぐ巣を離れ、雌親の世話を受けて成長する。夜間は水田や湿地などの餌場に移動して採食する。食性は主に植物食で、イネ科の植物の種子や水草の茎や葉などを食べる。

世田谷区には、10月から11月に渡来し、翌年の4月中旬頃に渡去する。主に、多摩川に渡来する。野川、仙川など小河川にも稀に渡来する。多摩川への飛来数は年によりばらつきがある。（全記録数1,278件 1988～2020年）



○主な観察記録

1988. 11. 03	多摩川(玉堤)	6羽	
1989. 01. 17	多摩川	45羽	カモ類調査(玉堤、野毛)
1990. 01. 17	多摩川	37羽	カモ類調査(玉川、玉堤、野毛)
2000. 03. 10	多摩川(鎌田1)	80羽	雄1羽が中州で休んでいるユリカモメ1羽に嘴を開けて威嚇
2002. 03. 07	多摩川	32羽	
2004. 02. 26	多摩川	18羽	10羽が中州の入り江で逆立ち採食
2006. 01. 18	多摩川	13羽	定例調査
2009. 11. 26	仙川	3羽	雄2、雌1羽 遊泳、採食
2012. 04. 12	多摩川(玉堤1)	10羽	雄6、雌4羽 逆立ち採餌を繰り返す
2014. 03. 03	多摩川	46羽	
2016. 03. 08	多摩川	27羽	
2017. 12. 18	多摩川(玉川1)	4羽	雄2、雌2羽
2018. 02. 05	多摩川(鎌田1)	43羽	雄26、雌17羽の群れ
2019. 03. 06	多摩川(鎌田1)	50羽	雄30、雌20羽の群れ
2020. 01. 29	多摩川	8羽	8羽の群れ（下流）
2020. 02. 05	仙川	4羽	雄2、雌2羽（鞍橋）

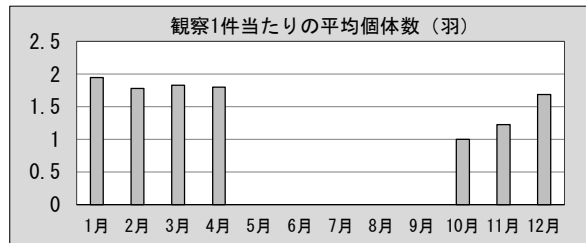
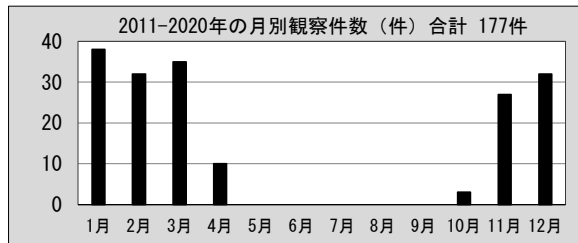
27. ヨシガモ *Anas falcata* Falcated Duck

カモ科

ユーラシア大陸のエニセイ川から南東部のシベリアやオホーツク沿岸、サハリン、カムチャツカ、中国北部、千島列島、北海道の一部など、極東の比較的狭い範囲で繁殖する。冬は中国南東部や朝鮮半島、日本などに移動する。日本では、北海道の一部で繁殖しているが、多くは冬鳥として本州、四国、九州、対馬に渡来する。

越冬地では湖沼、河川や海岸で生息し、内湾で見られることも多い。繁殖期は6～7月で、水辺の草むらや藪の地上に、雌が枯草を組み合わせ皿形の巣を作る。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れて雌親に導かれて水辺にむかい成長する。昼間は他のカモ類と一緒に安全な水面で、休息したり、水面や水中で採食をしたりして過ごし、夜間から早朝にかけて水田や湿地などに移動して採食する。食性は主に植物食で、水辺の草や水草、イネ科植物の種子などを食べる。

世田谷区では、10月頃から翌年の4月中旬にかけて観察されている。飛来数は少なく滞在期間も短い。多摩川と仙川で少数が観察されている。仙川では2006年から2014年冬まで雄1羽が8年連続して渡来し越冬した。それに2010年11月22日雌1羽が初めて加わり、以降2013年までつがい越冬した。食性は、仙川に多く見られる沈水性の水藻や中州、寄州のセイヨウカラシナ、ショカツサイなどの若葉を採食している。2015年以降、仙川で越冬しなくなり多摩川だけで観察されていたが、2020年11月に雄1羽が飛来し越冬した。（東京都区部：絶滅危惧IB類 全記録数1,111件 1992～2020年）



○主な観察記録

1992. 01. 18	多摩川	1羽	二子橋上流
1997. 01. 02	多摩川	5羽	雄2、雌3羽
1998. 03. 02	仙川	3羽	定例調査
2001. 01. 29	多摩川	3羽	全て雌
2005. 11. 06	多摩川	1羽	雌
2006. 11. 10	仙川	1羽	雄（翌年3/24 エクリプスから生殖羽に換羽し渡去する）
2009. 01. 18	仙川	1羽	雄 水辺の草を食べていた
2010. 11. 02	仙川	2羽	雄1羽（雌1羽11/22 飛来、12/27 雌雄2羽で越冬中、翌年4/10 雌雄で渡去）
2011. 01. 11	仙川	2羽	雄1、雌1羽が2羽で行動
2012. 01. 23	多摩川	4羽	雄1、雌3羽
2013. 03. 15	仙川	2羽	雄1、雌1羽 だけで川底の水藻を採食
2014. 02. 28	多摩川(野毛2)	1羽	雄 オカヨシガモと行動していた
2015. 01. 31	多摩川(玉川3)	3羽	兵庫池で休息
2017. 03. 20	上野毛2	2羽	雌雄
2018. 02. 12	多摩川(鎌田1)	2羽	雄1、雌1羽
2019. 12. 23	多摩川(玉堤1)	2羽	雄1、雌1羽
2020. 11. 09	仙川	1羽	雄、第1回冬羽。仙川で越冬繁殖羽に換羽し翌年の3/24 まで滞在(東原橋上流)

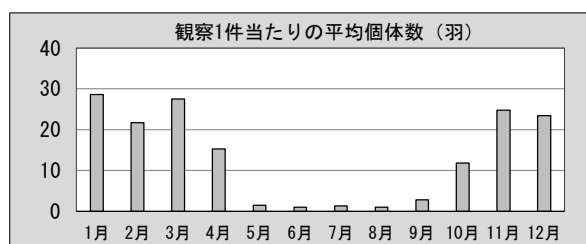
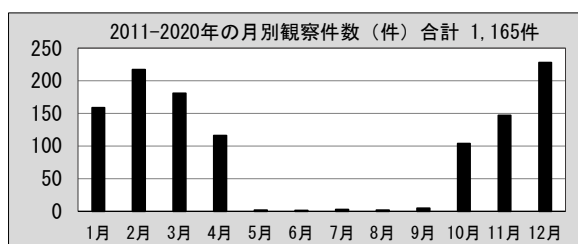
28. ヒドリガモ *Anas penelope* Eurasian Wigeon

カモ科

ユーラシア大陸のアイスランド、スカンジナビア、シベリア東部からカムチャツカにかけて広く繁殖し、冬はユーラシア大陸の温暖な南ヨーロッパ、北アフリカ、カスピ海、インド、中国南部、日本などに移動する。日本には、冬鳥として北海道、本州、伊豆諸島、小笠原群島、硫黄列島、四国、九州から琉球諸島まで全国に広く渡来する。

越冬地では、内湾、湖沼、河川などで生活し、淡水ガモの中では海に出る傾向が強い。日中は湖沼や河川の中央の水面で休息していることが多い。繁殖期は4～5月で、水辺の草むらに雌が草の葉や茎を組み合わせ皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ、雌親に導かれて水辺にむかい成長する。夜間から早朝にかけて採食場の水田や河川などに移動する。食性は主に植物食で、水藻、水蘚、ときには岸边や中洲などの青草、ドングリなどを採食するが、海岸で生活している個体は、夜に海上に出て海苔などの海藻類を好んで食べる。

世田谷区には、10月頃から渡来し、翌年の4月中旬から5月上旬に渡去する。多摩川、野川、仙川で見られる。時には、河川敷の草地に上がり、群れで青草を採食するのが観察されている。時々夏期に傷病や越夏と思われる個体が見られることがある。多摩川では2007年以降激減し、野川では2010年以降は記録が途絶えている。一方、仙川は、直立護岸で人や動物から守られ、餌となる水藻や青草があるためか、漸減傾向ではあるが、100羽前後を維持している。（全記録数3,952件 1954～2020年）



○主な観察記録

1954. 09. 09	多摩川	1羽	捕獲
1990. 01. 17	多摩川	381羽	カモ類調査(玉川、玉堤、野毛)
1991. 02. 28	野川	8羽	定例調査(世田谷区環境課)
1996. 04. 26	多摩川	1羽	(越冬個体 1～2羽 9/29まで観察された)
1997. 02. 14	多摩川	635羽	
1999. 01. 31	仙川	36羽	定例調査
2001. 03. 06	多摩川	681羽	
2002. 02. 15	野川	61羽	定例調査
2003. 02. 10	多摩川	496羽	
2011. 02. 13	多摩川(瀬田1)	60羽	雄37、雌23羽 二子橋～新二子橋間
2012. 02. 19	仙川	101羽	鎌田橋～仙川橋間
2014. 03. 22	多摩川(鎌田1)	51羽	オギの海下流付近 時々陸に上がって草を採食
2015. 12. 02	仙川	74羽	定例調査
2016. 02. 03	仙川	71羽	仙川定例調査(仙川橋～鎌田橋)
2017. 02. 01	仙川	79羽	仙川定例調査(仙川橋～鎌田橋)
2018. 02. 07	仙川	68羽	定例調査
2019. 02. 13	多摩川(玉堤1)	54羽	大田区境 雄30、雌24羽
2020. 02. 05	仙川	53羽	仙川定例調査(仙川橋～鎌田橋)

29. アメリカヒドリ *Anas americana* American Wigeon

カモ科

北アメリカ大陸のアラスカ、カナダ、北米などで繁殖し、冬はカリフォルニア、中央アメリカから西インド諸島、ハワイ諸島などに移動し、稀に日本にも渡来する。日本では、冬鳥として北海道から本州、佐渡、四国、九州、小笠原群島、沖縄諸島などに不定期ではあるが少数が渡来する。

越冬地では、ヒドリガモや他のカモの群れに混じり少数が見られ、湖沼、河川などで生活する。日中、積極的に採餌し、ヒドリガモよりは淡水域を好む傾向がある。繁殖期はヒドリガモと同じと思われ、水辺の草むらや藪の中に雌が草の葉や茎を組み合わせて浅い皿形の巣をつくる。食性は植物食で、水面に浮かぶ水草や水中の藻及び、植物の茎、根、種子などを食べる。

世田谷区では、冬期、不定期に渡来する。古くは、1990年のカモ類調査で観察された記録がある。2004年頃までは多摩川で越冬する個体が見られた。その後、越冬は観察されず、2月から4月にかけて、多摩川、野川、仙川で、1～2羽がヒドリガモの群れの中にいるのが観察されている。2013年以降は観察されていない。(東京都区部：対象外 全記録数229件 1989～2012年 2011年以降1件)

○主な観察記録

1989. 12. 23	多摩川(玉堤)	1羽	
1990. 01. 17	多摩川(玉堤)	1羽	カモ類調査
1992. 02. 28	野川	1羽	定例調査
1996. 03. 14	多摩川	2羽	
2001. 11. 02	多摩川	1羽	1羽が渡来(12/3まで滞在した)
2002. 12. 19	多摩川	1羽	(ヒドリガモに混じって12/26まで確認)
2004. 11. 11	多摩川	1羽	(翌年4/5まで滞在した)
2005. 01. 19	多摩川	1羽	定例調査 雄
2008. 02. 22	仙川	1羽	宮下橋上流
2008. 04. 01	多摩川	1羽	
2010. 04. 06	多摩川(野毛1)	1羽	雌
2012. 02. 13	多摩川(玉堤1)	1羽	雄

30. マガモ *Anas platyrhynchos* Mallard

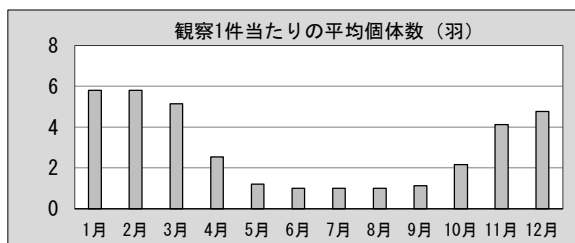
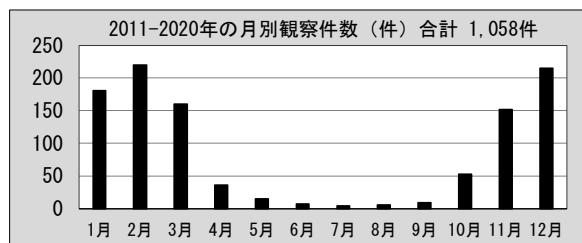
カモ科

ヨーロッパからカムチャツカ、日本、南は地中海、小アジア、アフガニスタン、チベット、および北アメリカ、メキシコで繁殖し、北で繁殖したものは温暖な亜熱帯地方に移動する。日本では、主に冬鳥とし

て大部分がシベリアから渡来するが、北海道、本州の山地で繁殖するものもいる。本州、伊豆諸島、小笠原群島、四国、九州から琉球諸島まで冬鳥として広く渡来する。

越冬地では、湖沼、大きな川、内湾の海上など開けた水面に大きな群れで生活していることが多い。繁殖期は4～8月で、岸辺の草むらやササ藪の中の地上に雌が枯草やササの葉で皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐ歩くことができ雌親に導かれて水辺に向かう。昼間は水面で休んでいることが多く、夜間に湿地、水田、湖沼の岸などに採食のため移動する。食性は主に植物食で、水田や岸辺の草の種子、水蘚をついばんだり、泳ぎながら首を水中に突っ込み水草を食べたりする。家禽としてよく飼育されるアヒルは古い時代、中国やエジプトで本種を原種とし改良されたものである。現在家禽として広く飼育されているアイガモは欧州で家禽化したものを輸入し、日本で改良されたものである。

世田谷区には、10月から11月頃渡来し、翌年の3月中旬から4月中旬頃渡去する。稀に夏期に少数観察されることがある。主に多摩川、野川、仙川で見られ、他に高源院、砧公園、駒沢オリンピック公園、岡本静嘉堂周辺、馬事公苑、等々力溪谷公園などの記録もあるが数は少ない。首を水中に差し込んで水草、水蘚、堆積物を採食している姿が見られる。(全記録数2,534件 1952～2020年)



○主な観察記録

1952. 11. 04	多摩川(玉堤)	3羽	下流から上流へ
1962. 12. 21	高源院	2羽	雌雄
1989. 01. 17	多摩川	6羽	カモ類調査(玉堤、玉川)
1993. 03. 10	砧公園	2羽	
2001. 02. 21	多摩川	33羽	
2004. 01. 21	多摩川	6羽	定例調査
2009. 02. 04	野川	24羽	定例調査
2010. 11. 02	多摩川	72羽	
2012. 11. 30	岡本静嘉堂周辺	3羽	
2013. 12. 04	仙川	11羽	定例調査
2016. 11. 01	野川	3羽	川で採食
2016. 12. 07	多摩川(玉川3)	37羽	中洲水際と兵庫池
2016. 12. 07	仙川	16羽	定例調査
2018. 01. 22	野川(喜多見5)	3羽	雪の降りしきる中遊泳
2020. 12. 31	等々力溪谷公園	20羽	雄11、雌9羽が水中で採食し遊泳している

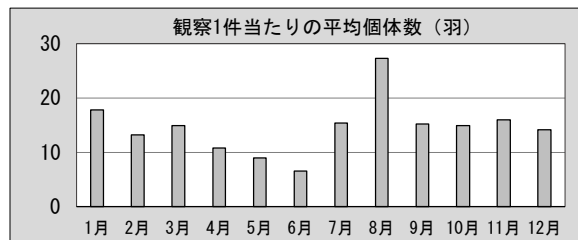
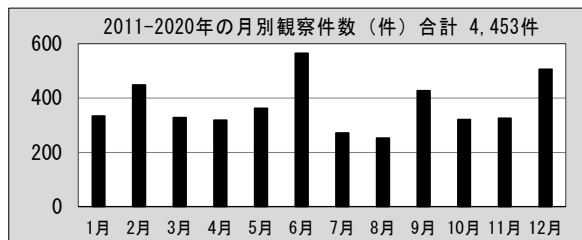
32. カルガモ *Anas zonorhyncha* Eastern Spot-billed Duck

カモ科

ユーラシア大陸のバイカル湖周辺からアムール川流域、中国北部、朝鮮半島、サハリン、日本などで繁殖する。冬には、一部が中国南部など温暖な地域に移動する。日本では、北海道で大半が夏鳥である。本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島に留鳥として分布し繁殖する。

湖沼、河川、水田、海岸などに生息する。草むらや藪の多い水辺、特に水田に多い。繁殖期は4～7月で、水辺近くの草むらや休耕田、竹藪などの地上に雌が枯草や枯葉で皿形の巣をつくり、その上に自分の胸や腹部の綿羽を敷く。1巣卵数は10～12個で、雌だけが抱卵し、抱卵日数は24～26日位である。早成性で、孵化したヒナはすぐ歩くことができ、雌親に導かれて水辺に向かう。食性は雑食で、水蘚、水草、ノビエ、タデ、ミゾソバ、マコモなどの草の茎や種子などを主食とするが、他に水生昆虫、小魚、魚卵など様々なものを採食する。

世田谷区では、通年、多摩川、野川、仙川、丸子川のほか、小さな河川、公園、寺院の池などで普通に見られ、各所で繁殖している。カキノキから落下した熟柿、タデ、シャクチリソバ、ミゾソバ、マコモの根や茎、ドジョウ、マルタウグイの魚卵などを採食する様子が観察されている。繁殖場所は川の中州や岸辺、公園の池など水辺に近い草むらや竹藪の平地で、5月から8月頃には小さなヒナを連れた群れの姿がよく見られる。区内の小河川が雷雨などで水位が急上昇すると、多摩川に一時退避し群れをつくることもある。また、カルガモが換羽期を迎えて飛べなくなる7～8月には、直立護岸で人や犬から守られた安全な仙川に移動し、多数が換羽する。（全記録数 10,307 件 1949～2020 年）



○主な繁殖記録

1968. 05. 26	高源院	1 巣	ヒナ 2 羽
2000. 06. 30	多摩川	3 巣	ヒナ各 4、7、9 羽
2001. 06. 05	岡本	1 巣	ヒナ 4 羽（丸子川）
2002. 05. 15	成城	1 巣	9 卵 湧き水の流れの傍（6/8 卵 5 個、6/13 卵 3 個）
2005. 06. 12	仙川	1 巣	ヒナ 1 組 14 羽 1 組のヒナの最大羽数（大石橋～鞍橋間）
2006. 06. 15	仙川	6 巣	ヒナ 31 羽
2006. 07. 16	深沢 6	1 巣	ヒナ 11 羽（呑川緑道）
2010. 06. 15	多摩川（玉堤 1）	2 巣	ヒナ 10 羽
2011. 05. 15	野川（鎌田 2）	1 巣	ヒナ 12 羽
2012. 07. 20	高源院	1 巣	ヒナ 4 羽
2013. 06. 10	多摩川	1 巣	ヒナ 8 羽
2014. 05. 19	仙川（成城 2）	1 巣	ヒナ 11 羽 東原橋下落ち込みで採餌
2015. 05. 24	駒沢オリンピック公園	1 巣	定例調査 人工池に孵化後 1 週間以内の雛 4 羽
2016. 05. 09	駒沢オリンピック公園	2 巣	カルガモ雛 6 羽 1 組-2、1 組-4
2017. 05. 20	駒沢オリンピック公園	1 巣	ヒナ 1 組-2 羽
2018. 05. 14	玉堤 1	1 巣	雌が雛 8 羽を連れて採食しながら上流へ向かう（丸子川で）
2019. 05. 23	野川（喜多見 7）	1 巣	ヒナ 7 羽を連れて遊泳
2020. 06. 08	仙川	3 巣	ヒナ 20 羽（1 組-11 羽、1 組-2 羽、1 組-7 羽）

○主な観察記録

1949. 05. 29	野毛	1 羽	18 時頃自宅上空
1968. 01. 19	高源院	20 羽	
1990. 01. 17	多摩川	102 羽	カモ類調査（玉川、玉堤、野毛）
1991. 10. 20	岡本静嘉堂周	22 羽	
1995. 06. 26	仙川	150 羽	定例調査
1997. 12. 01	多摩川	265 羽	
2002. 02. 24	仙川	199 羽	定例調査
2004. 04. 05	多摩川（野毛 2）	1 羽	中州左岸の早瀬マルタウグイの産卵場所に接近魚卵を採食
2007. 12. 25		9 羽	
2008. 02. 06	野川	88 羽	定例調査
2012. 11. 12	多摩川	78 羽	
2014. 09. 03	仙川	115 羽	定例調査
2015. 07. 21	多摩川	48 羽	
2016. 08. 20	仙川	129 羽	仙川に換羽のため集結する
2017. 11. 01	多摩川（玉川 1）	43 羽	1 群 二子橋下流
2017. 06. 07	野川	68 羽	定例調査
2019. 02. 18	仙川	102 羽	定例調査
2020. 02. 05	野川	57 羽	定例調査

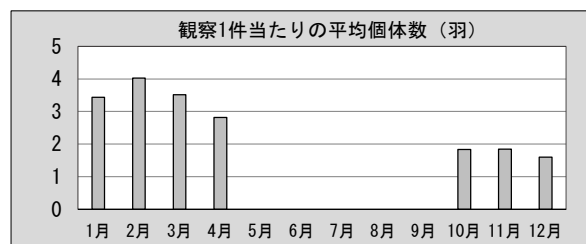
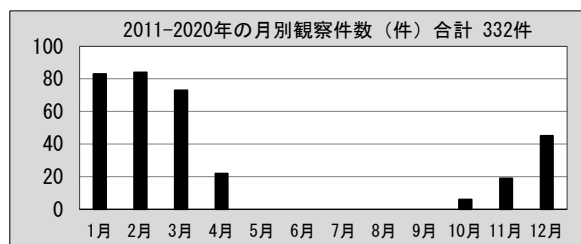
34. ハシビロガモ *Anas clypeata* Northern Shoveler

カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸で繁殖し、冬は南ヨーロッパ、北アフリカ、インド、東南アジア、東アジア、北アメリカ南部に移動する。日本では、北海道では旅鳥であるが、本州、四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、大東諸島、琉球諸島に冬鳥として渡来する。

越冬地では、湖沼、河川で生活するが、海上で見られることもある。繁殖期は4～6月で、水辺近くの乾いた草地の上に、雌が草の葉や茎を組み合わせて皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ、雌親に導かれて水辺に向かいその世話を受けて成長する。富栄養な比較的浅い水面で、円を描きながら泳ぎ、くちばしを水に漬けすくうように採食する。幅広いくちばしでプランクトンや昆虫、種子などを水と一緒に吸い込み、嘴の上下についている多くのくし状の板歯でこし取って食べる。マガモ属の中ではその採食習性を異にする種である。つがいになると雄は雌の横に接近して相互に回りながら水中に入れた嘴を雌の嘴に近づける。雌は雄の嘴から漏れる餌を食べるようで、これが求愛給餌行為に当たる。

世田谷区には、10月頃から11月上旬に渡来し、翌年の3月中旬から4月頃渡去する。多摩川、野川、仙川で少数が観察されている。河川以外では高源院、砧公園、大蔵運動公園でも観察されていたが、2010年以降は見られていない。仙川では、ハシビロガモとしては珍しい小魚を採食した例がある。多摩川の兵庫島周辺（ひょうたん池）では2014年12月から翌年3月まで、数に変動はあるが、2～18羽が観察された。その後、毎年記録はあるが減少傾向である。野川は不定期に1～2羽が記録されるだけで、毎年越冬していた仙川も2020年には見られなかった。（全記録数1,799件 1948～2020年）



○主な観察記録

1948. 03. 30	多摩川(野毛)	2羽	渡し場
1990. 01. 17	多摩川(玉川、	42羽	カモ類調査
1992. 04. 03	砧公園	18羽	雄11羽、雌7羽
1996. 02. 06	仙川	32羽	定例調査
2001. 02. 22	野川	2羽	定例調査
2003. 12. 03	仙川	14羽	定例調査
2006. 02. 23	多摩川	16羽	内、ひょうたん池に12羽
2008. 10. 19	大蔵運動公園	6羽	
2009. 11. 26	仙川	2羽	遊泳 1羽は小魚を採食
2012. 03. 07	多摩川(玉川3)	6羽	6羽が兵庫島公園のひょうたん池で首を左右に振りながら採餌
2013. 03. 28	仙川	5羽	竜沢寺橋～仙川橋間 雄3、雌2羽
2014. 12. 15	多摩川(玉川3)	2羽	12/15 2羽が飛来し、10～18羽が翌年3/16まで滞在した
2015. 12. 20	多摩川(玉川3)	7羽	エクリプス4、雌3 兵庫島 ひょうたん池
2016. 01. 13	多摩川(玉川3)	7羽	定例調査兵庫島公園ひょうたん池
2017. 02. 25	多摩川(玉川3)	2羽	兵庫池
2019. 04. 03	仙川	1羽	
2019. 02. 07	多摩川(鎌田1)	4羽	新二子橋上流中洲
2020. 01. 15	多摩川(玉川3)	3羽	兵庫島ひょうたん池

35. オナガガモ *Anas acuta* Northern Pintail

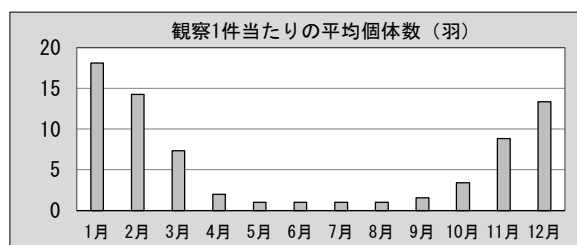
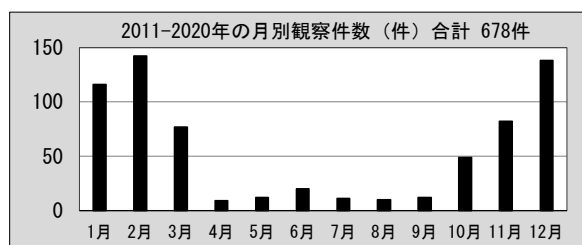
カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の寒帯から亜寒帯で広く繁殖し、冬は北アフリカ、インド、東南アジア、東アジア、北アメリカ大陸の温帯から熱帯域に移動する。日本には、冬鳥として北海道、本州、小笠

原群島、四国、九州、大隅諸島、奄美諸島、大東諸島、琉球諸島に渡来する。

越冬地では、湖沼、河川、内湾などで生活するが、カモに給餌している市街地の小河川、公園の池などにも多数が集まっている。繁殖期は5～7月で、水辺の草むらの地上に、雌が草の葉や茎を組み合わせ、皿形の巣をつくる。早成性でヒナはすぐに巣を離れ、雌親に導かれて水辺にむかい成長する。食性は植物が主で、長い首を利用して逆立ちして水底の水草の葉や茎、堆積物を採食し、水際の草や種子、水蘚なども食べる。

世田谷区には、10月中旬頃渡来し、翌年の3月下旬に渡去する。多摩川、野川、仙川で観察され、他に、砧公園、高源院、松沢病院將軍池に立寄った記録がある。採食行動は、他のカモ類より比較的水深のある沈水性の水藻や川底の堆積物を「逆立ち採食」するのがよく観察される。世田谷区で越冬するカモ類のなかでは渡去が一番早く、2月末から3月上旬には旅立って行く。2019/5/27 渡来したオナガガモ雄1羽（繁殖羽）は、仙川でエクリプスに換羽し、9/8 仙川を渡去した。野川では1999年頃から減少しほとんど見られなくなった。多摩川では2006年頃までまとまった羽数が観察されたが、その後減少し、野川は毎年記録されるが1～2羽程度である。比較的稳定していた仙川も減少傾向である。（全記録数2,854件 1968～2020年）



○主な観察記録

1968. 01. 07	多摩川	1羽	雄1羽 コジキッタナに下りていた
1989. 01. 17	多摩川	594羽	カモ類調査(玉川、玉堤、野毛)
1991. 02. 28	野川	176羽	定例調査（世田谷区環境課）
1995. 11. 21	多摩川	203羽	
1996. 02. 06	仙川	265羽	定例調査
2001. 02. 25	仙川	138羽	定例調査
2003. 12. 02	多摩川	173羽	
2006. 01. 18	多摩川	140羽	定例調査
2008. 01. 18	仙川	82羽	
2011. 03. 04	多摩川	65羽	
2012. 02. 04	仙川	70羽	定例調査
2014. 01. 12	上北沢2	2羽	將軍池公園の池に雄1、雌1羽が下りて休息
2015. 12. 02	仙川	45羽	定例調査
2017. 02. 01	仙川	19羽	定例調査
2018. 02. 07	仙川	18羽	定例調査
2019. 09. 08	仙川	1羽	5/27 渡来したオナガガモ雄1羽（繁殖羽）は、仙川でエクリプスに換羽し、9/8 仙川を渡去した(宮下橋付近)
2020. 02. 05	仙川	7羽	定例調査
2020. 12. 12	野川	2羽	

36. シマアジ *Anas querquedula* Garganey

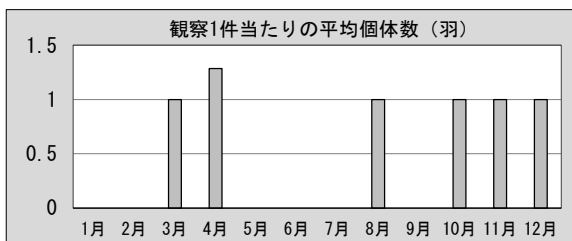
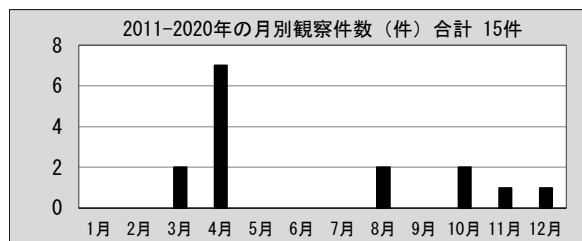
カモ科

ユーラシア大陸のヨーロッパ、南ロシア、中央アジアから中国北部、カムチャツカ、サハリンで繁殖し、冬はアフリカ北西部、インド、東南アジアなどに移動する。日本では北海道根室で繁殖した記録がある。主に旅鳥として本州、四国、九州、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島に渡来するが数は少ない。本州、琉球諸島では冬鳥として越冬するものもいる。

生息地は湖沼、沼沢地、湿地の小さな池、干潟、水田などで、食性は雑食性ではあるが、主に植物食で、イネ科やタデ科の種子、アオミドロなどを採食する。渡りの途中に飛来し、コガモの群れに混じり、湖沼、

川、内湾などで少数が記録されている。繁殖期は4～6月で、河川、湖沼、湿原など水辺の草むらに、雌が草の葉や茎を組み合わせて皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐ巣をはなれ雌親に導かれて水辺にむかい成長する。

世田谷区では、春、秋に観察されている。多摩川でコガモやカルガモの群れの中に1羽いるのが観察されている。2020年、初めて仙川祖師谷橋で雌1羽が記録された（東京都区部：情報不足 全記録数38件 1982～2020年）



○主な観察記録

1982. 04. 12	多摩川	3羽	雄2、雌1羽
1996. 10. 05	多摩川	1羽	雌 コガモ8羽の群れの中にいた
1999. 10. 04	多摩川(玉堤2)	1羽	雌 谷沢川合流付近
2002. 11. 02	多摩川	2羽	
2003. 09. 26	多摩川	1羽	雌1羽が渡来(10/13まで滞在した)
2005. 04. 12	多摩川	1羽	
2007. 04. 26	多摩川(玉堤2)	1羽	雄が川岸で休んでいる
2008. 03. 23	多摩川	1羽	
2009. 10. 09	多摩川	2羽	
2010. 03. 17	多摩川	1羽	定例調査
2011. 03. 14	多摩川(玉堤1)	1羽	雌
2013. 03. 25	多摩川(野毛2)	1羽	雄 生殖羽
2015. 11. 09	多摩川(野毛2)	1羽	雌タイプ コガモと対岸のブロックに上がり休息
2016. 10. 24	多摩川(野毛2)	1羽	雄エクリプス コガモの群れの中
2019. 04. 17	多摩川(宇奈根1)	1羽	コガモと一緒に遊泳
2020. 12. 21	仙川	1羽	雌(祖師谷橋)

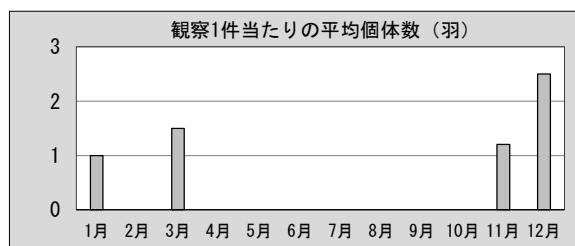
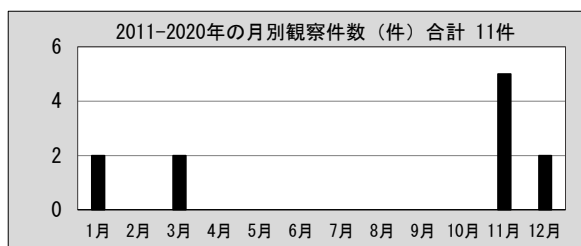
37. トモエガモ *Anas formosa* Baikal Teal

カモ科

ユーラシア大陸のシベリア東部で繁殖し、冬は東アジアの中国南東部や朝鮮半島、日本に移動する。日本では、北海道は不定期渡来であるが、本州、四国、九州に冬鳥として渡来する。石川県など日本海側で多く見られ、太平洋側は少ない。全国的に記録されているが、一般に数は少ない。

越冬地では湖沼、川、池などで生活し、少数の時はコガモの群れに混じり行動している。習性もコガモに似て、昼間は安全な水面で過ごす。繁殖期は4～7月で、ツンドラや森林地帯にある水辺の窪地や草むら、流木の下などに、雌が植物の茎や葉で皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐ巣を離れ、雌親に導かれ水辺にむかい成長する。雄、雌の育雛に関する協力関係については不明なことが多いと言われる。夕方から早朝にかけて、河川や水田などの餌場に移る。食性は、主に植物食であるが、イネ科の植物や水生植物の他に昆虫、甲殻類なども食べる。

世田谷区では、11月から3月頃に不定期に渡来し、多摩川や野川で観察されている。移動途中と思われ、滞在期間が短く、個体数も少ない。1996年1月多摩川に渡来した雌雄は3月まで滞在した。野川で2012年、2015年各1羽が記録された。2019年以降区内での記録はない。（東京都区部：情報不足 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数65件 1954～2018年）



○主な観察記録

1954. 04. 08	多摩川(玉堤)	1羽	コジキッタナに降りていて上流に飛び立つ
1996. 01. 06	多摩川	1羽	第三京浜橋下流300m付近（新二子橋～野毛2で継続して観察された 1/24 雌雄になり、4/3まで留まった）
1998. 12. 28	多摩川(玉堤 1)	2羽	雄1羽、雌1羽 ヒドリガモの群れの中で休んでいた
2003. 11. 18	多摩川	1羽	
2005. 01. 07	多摩川(玉堤 1)	7羽	雄2羽、雌5羽
2006. 01. 18	多摩川(鎌田 1)	3羽	定例調査（翌日 1/19 雌雄の2羽が観察された）
2008. 12. 12	多摩川	2羽	（内1羽が12/25まで滞在した）
2010. 11. 02	多摩川(玉堤 1)	1羽	雄1
2011. 12. 12	多摩川(玉堤 2)	2羽	雄1 雌1
2012. 01. 10	野川(成城 4)	1羽	カルガモと共に遊泳
2015. 11. 01	野川(成城 4)	1羽	エクリップス 神明橋の少し上流
2016. 12. 12	多摩川(野毛 1)	3羽	雄1、雌2羽
2018. 03. 26	多摩川(玉堤 1)	2羽	雄1、雌1羽中洲で休息

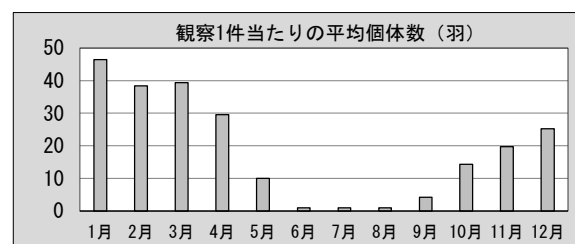
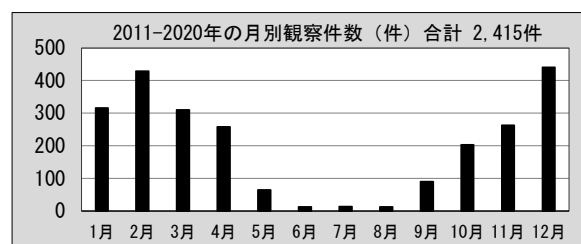
38. コガモ *Anas crecca* Teal

カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の亜寒帯で広く繁殖し、冬はヨーロッパ南部、北アフリカ、中近東、南アジアから東アジア、北アメリカの中南部などに移動する。日本では、北海道、本州山地の一部で繁殖するものもあるが、大半は冬鳥として極東ロシアの低緯度から高緯度地帯の広いエリアから本州、伊豆諸島、四国、九州、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島に渡来する。他に、稀に亜種アメリカコガモが全国的に少数ではあるが渡来する。

越冬地では湖沼、池、河川などで生活し、広い湖沼にいる場合は奥まった入り江の岸边にすることが多い。繁殖期は5～7月で、水辺の草むらなどの窪みに、雌が草や葉などを重ねて皿形の巣をつくる早成性で、ヒナは孵化するとすぐに雌親に導かれて水辺にむかい成長する。食性は植物食が主で、浅瀬を歩いたり泳いだりして水蘚や岸の草の葉、イネ科植物の種子などを食べる。

世田谷区には、9月頃渡来し、翌年の5月の中旬頃渡去する。カモの仲間では、渡来が一番早く、渡去が一番遅い。多摩川、野川、仙川で多く、世田谷区に渡来する冬ガモのなかでは、個体数が一番安定して観察される種である。その他に砧公園や駒沢オリンピック公園などで少数の記録がある。1996年ころまでは高源院に多数が飛来していたが、宅地開発による樹林帯の減少により、今では見られなくなった。川岸の浅瀬で水蘚や草の葉、草の種子を採食するのが見られる。1998年に亜種アメリカコガモ1羽が多摩川で観察された。（全記録数5,682件 1950～2020年）



○主な観察記録

1950. 09. 29	多摩川	4羽
1968. 01. 19	高源院	170羽

1989. 01. 17	多摩川	329 羽	カモ類調査（玉川、野毛、玉堤）
1992. 09. 18	砧公園	60 羽	
1993. 02. 22	野川	235 羽	定例調査
1997. 01. 22	仙川	424 羽	定例調査
1998. 01. 19	多摩川	1 羽	亜種アメリカコガモ
2005. 04. 19	砧公園	40 羽	サンクチュアリの池
2006. 01. 18	多摩川	574 羽	定例調査
2012. 02. 01	仙川	221 羽	定例調査
2013. 01. 21	多摩川(野毛2)	249 羽	80 羽が川面上空約 5m をハヤブサに追われて下流へ
2014. 02. 05	仙川	147 羽	定例調査
2015. 02. 03	多摩川	400 羽	
2017. 02. 01	仙川	186 羽	定例調査
2018. 02. 07	野川	88 羽	定例調査
2020. 02. 05	仙川	195 羽	定例調査
2020. 03. 03	仙川	1 羽	雄、右翼負傷(9/2 まで滞在しエクリプスに換羽、越冬個体と合流)

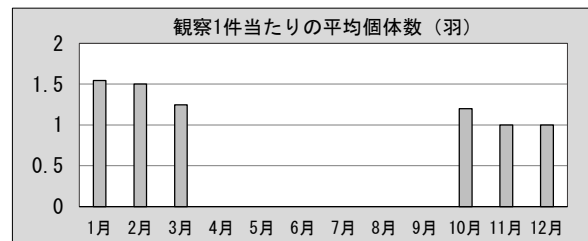
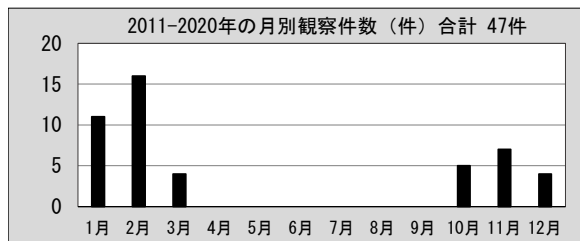
42. ホシハジロ *Aythya ferina* Common Pochard

カモ科

イギリス、ユーラシア大陸のヨーロッパからバイカル湖周辺にかけて繁殖し、冬は南ヨーロッパ、北アフリカ、中近東、インド、中国東部、日本などに移動する。日本では、北海道では旅鳥であるが、冬鳥として本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島に渡来する。釧路で繁殖した例がある。

越冬地では、湖沼、河川、湾内などに群れて生活する。繁殖期は4～6月で、水辺のイグサやヨシの茂み、水面に浮かぶ水生植物の上などに雌がヨシを積み上げた皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナはすぐに巣を離れ雌親に導かれて水辺にむかい成長する。食性は主に植物食であるが雑食で、水中に潜り、アマモ、エビモなどの水草の葉や茎などの他、魚類、両生類、甲殻類なども採食する。

世田谷区には、10月から翌年の3月頃にかけて不定期に渡来する。多摩川、仙川、野川、駒沢オリンピック公園で観察されているが、個体数は少なく、滞在期間も短い。2001年、1羽が多摩川で越冬した記録がある。（東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 599 件 1976～2020 年）



○主な観察記録

1976. 11. 21	多摩川	1 羽	
1995. 11. 09	多摩川	4 羽	雄3羽、雌1羽
1997. 02. 11	野川	1 羽	定例調査
1997. 05. 06	多摩川	1 羽	雄1羽が渡来し(8/20 まで滞在し越冬した)
2001. 01. 02	多摩川	1 羽	雄1羽が渡来し(10/8 まで滞在 越冬した)
2002. 02. 24	仙川	1 羽	定例調査
2003. 12. 02	多摩川	1 羽	雄
2007. 12. 05	仙川	4 羽	定例調査
2011. 02. 02	仙川	1 羽	定例調査
2011. 11. 04	駒沢オリンピック公園	1 羽	雄 シンボルタワー下の人口池
2013. 10. 18	多摩川(鎌田1)	1 羽	雄 オギの海の水際 他のカモと一緒に行動
2014. 11. 18	多摩川(鎌田1)	1 羽	雄 オギの海入口から上流へゆっくり移動
2015. 10. 24	祖師谷公園	1 羽	雄 公園内の仙川でヒドリガモと一緒に行動
2016. 02. 08	多摩川(玉川3)	1 羽	兵庫島の池で遊泳

2017. 10. 31	多摩川(玉堤 2)	2 羽	
2018. 03. 06	多摩川(鎌田 1)	1 羽	
2019. 02. 08	多摩川(玉川 3)	1 羽	兵庫池、散歩する人がパンくずを給餌
2020. 11. 12	野川喜多見 6)	1 羽	川を遊泳

43. アカハジロ *Aythya baeri* Bear's Pochard

カモ科

ユーラシア大陸東部のアムール川流域からウスリー地方、中国北東部にかけての狭い地域で繁殖する。東アジアの特産種である。冬は主に中国東部に移動するが、時には日本、インド北東部、ミャンマー北部やタイ北部などに渡ることもある。日本では、稀な冬鳥として不定期に渡来し、キンクロハジロなどの群れに混じっていることが多い。北海道、本州、四国、九州、琉球諸島で記録がある。

渡来地では湖沼や河川で生活し、1~2羽の少数でいることが多く、淡水域で、ホシハジロやキンクロハジロの群れに混じっていることが多い。野生の繁殖生態の詳細は不明である。開けた水草の豊かな河川、湖沼の水辺の草むらに営巣する。食性は雑食で植物の茎や根などの他、小魚、甲殻類なども採食する。

世田谷区では、不定期に渡来した下記2例の記録がある。(環境省:情報不足 全記録数2件)

○観察記録

2000. 10. 17	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄がヒドリガモ 5 羽と中州の岸で休息
2014. 12. 22	多摩川(野毛 1)	1 羽	雄 8:30 時頃 犬連れの人が入り下流へ低空で飛び立つ

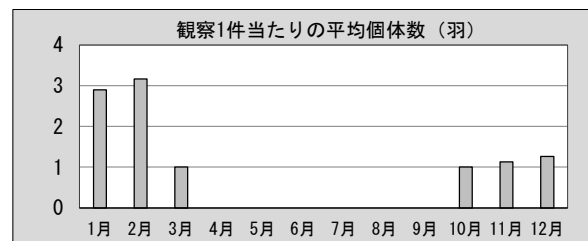
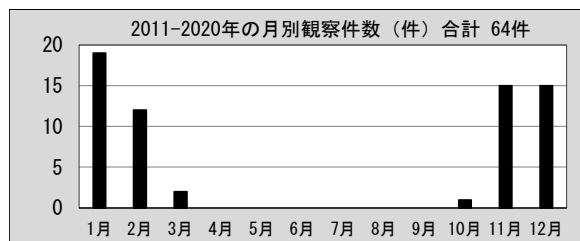
46. キンクロハジロ *Aythya fuligula* Tufted Duck

カモ科

ユーラシア大陸のアイスランド、ヨーロッパ、カスピ海エリア、東はシベリアからカムチャツカ、サハリンまで広く繁殖する。冬は南ヨーロッパ、北アフリカ、中近東、インド、中国南部、朝鮮半島、日本などに移動する。日本では、北海道では留鳥として少数が繁殖するが、大半は冬鳥として本州、四国、九州、大隅諸島、奄美諸島、大東諸島、琉球諸島に渡来する。

越冬地では、湖沼、大河川、池などで生活し、市街地の公園の池でもよく見られる。繁殖期は5~7月で、水辺の草原や浅瀬に、雌がヨシやイグサなどの枯れ草を組み合わせる皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ雌親に導かれ水辺にむかい成長する。食性は雑食で水中に潜り、貝、小魚、両生類などをよく採食するが、水草などの植物も食べる。海に出ることは少ない。

世田谷区では、10月から翌年の3月頃にかけて不定期に渡来する。毎年渡来するが、一冬通して滞在することはない。多摩川、仙川、砧公園、駒沢オリンピック公園、上北沢2(將軍池公園)などで少数が観察されている。(全記録数536件 1960~2020年)



○主な観察記録

1960. 04. 03	多摩川	2 羽	赤岩 雌雄
1990. 01. 17	多摩川(玉堤)	73 羽	カモ類調査
1996. 01. 16	多摩川	42 羽	
1998. 01. 20	多摩川	18 羽	
2002. 12. 15	仙川	5 羽	
2004. 02. 04	仙川	8 羽	定例調査

2005. 01. 17	砧公園	1 羽	
2006. 01. 18	多摩川	3 羽	定例調査
2008. 02. 29	多摩川	5 羽	
2011. 11. 04	駒沢オリンピック公園	1 羽	雄 シンボルタワー下の人工池
2012. 01. 23	多摩川(玉堤 1)	4 羽	雄 2 雌 2
2013. 03. 19	野川(成城 4)	1 羽	遊泳 カルガモとバトル
2015. 12. 25	上北沢 2	1 羽	雌 将軍池公園の池で 1 羽が休息
2016. 12. 12	多摩川	4 羽	個人センサス調査
2017. 02. 04	仙川	1 羽	竜沢寺橋下、雄 1 羽
2018. 01. 18	多摩川	2 羽	定例調査中流 1, 下流 1 羽
2019. 02. 12	多摩川(上野毛 2)	11 羽	雄 6、雌 5 羽が多摩川と合流地の元野川の止水域で頻繁に潜水を繰り返す
2020. 12. 25	多摩川(玉川 3)	1 羽	ひょうたん池で採食と休息

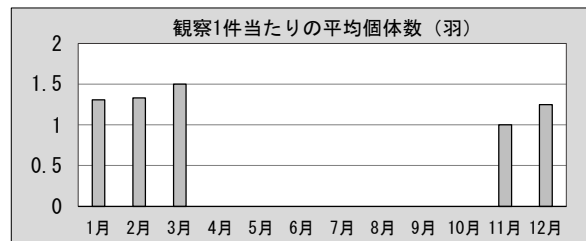
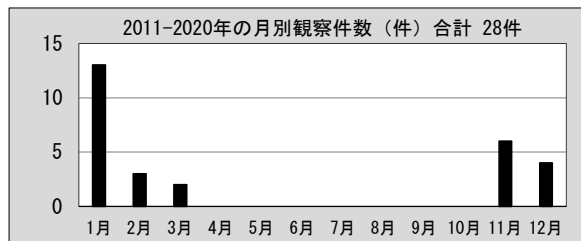
47. スズガモ *Aythya marila* Greater Scaup

カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北部で広く繁殖し、冬はヨーロッパ、カスピ海エリア、ペルシア湾、東アジア、北アメリカの西海岸と東海岸などに移動する。日本では、北海道では旅鳥で、本州、四国、九州、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島に冬鳥として渡来する。

海ガモ類の中では最も個体数が多く、越冬地では内湾や入り江などの波の静かな海面に大きな群れをなしていることが多い。東京湾では数万羽の大きな群れが観察される。繁殖期は5～7月で、湖沼や湿地の水辺の草原や藪の中、岩の間に、雌が草の葉や茎で皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ雌親に導かれて水辺にむかい成長する。近年、東京湾岸で繁殖地に戻らず越夏する個体も見られる。食性は主に動物食で、浅い海底にいる貝類を好んで食べる。

世田谷区では、10月から3月頃にかけて少数が不定期に渡来する。主に多摩川で見られている。2002年頃から仙川や野川でも見られるようになる。(東京都区部：留意種 全記録数 60 件 1959～2020 年)



○主な観察記録

1959. 01. 11	多摩川(玉堤)	2 羽	雌 1、雄 1 羽 (小杉多摩川)
1964. 10. 31	多摩川(玉堤)	9 羽	コジキッタナ
1995. 11. 02	多摩川	3 羽	雄 1、雌 2 羽
2000. 03. 24	多摩川	14 羽	
2002. 12. 24	仙川	4 羽	
2003. 12. 07	仙川	3 羽	
2004. 05. 18	多摩川	1 羽	
2005. 11. 18	多摩川(野毛 3)	1 羽	雌 1 羽が中州近くの水面で激しく水しぶきをあげ水浴びする
2007. 10. 28	野川(成城 4)	1 羽	
2008. 12. 11	野川	1 羽	
2009. 01. 27	多摩川	1 羽	
2012. 01. 23	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌
2015. 01. 05	多摩川(玉堤 1)	1 羽	等々力排水樋管付近
2017. 03. 13	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雄 1、雌 1 羽
2018. 12. 12	野川(喜多見 6)	1 羽	川辺で休息
2019. 11. 19	野川(喜多見 5)	1 羽	川辺で休息
2020. 01. 16	多摩川(玉川)	3 羽	雄 1、雌 2 羽

53. ビロードキンクロ *Melanitta fusca* Velvet Scoter

カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の亜寒帯で繁殖し、冬はイベリア半島、カスピ海、中国、日本、アメリカのカリフォルニア、南カロライナなどに移動する。日本では、冬鳥として北海道、本州、四国、九州の沿岸まで渡来する。

越冬地では、小群でクロガモの群れに混じり海上で生活する。内湾や波の荒い海岸で見られるが、あまり岸近くには接近しない。繁殖期は5～7月で、亜寒帯針葉樹林の中にある湖沼や河川の水辺の隠れた茂みや樹木の根本の浅い窪みに、雌だけで小枝や葉などを敷いて皿形の巣をつくる。早成性のヒナは雌親の世話になるが、多くの雌親はすぐヒナから離れ去る。ヒナどうしが集まりグループで生活し、初め雌の成鳥について行動するがやがて独立してゆく。食性は動物食で、浅い海に潜り二枚貝など貝類を主食とするが、カニ、ウニ、ヒトデ、小魚なども採食する。

世田谷区では、多摩川に渡来した下記2例の記録がある。(東京都区部：情報不足 全記録数2件 2004年)
○観察記録

2004. 11. 11 多摩川(玉堤2) 1羽 雄1羽 谷沢川合流地点でカルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ約30羽と休息)
2004. 11. 16 多摩川(玉堤2) 1羽 雄1羽 谷沢川合流地点

57. ホオジロガモ *Bucephala clangula* Common Goldeneye

カモ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北ヨーロッパからシベリア、カムチャツカ、アラスカ、カナダ、アメリカ合衆国北部などで広く繁殖し、冬はヨーロッパ、地中海やペルシア湾、中国東部、日本、アメリカ合衆国中部などに移動する。日本では、冬鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来する。

越冬地では、広い湖沼、河川、内湾などで見られる。繁殖期は5月から7月で、森林地帯の湖沼や河川周辺の高木林の樹洞に営巣する。巣箱も利用するといわれる。早成性で、孵化するとヒナはすぐに巣を離れ雌親に導かれて水辺にむかい成長する。巣を離れたヒナは2km近くを歩いて水辺に行くこともあるといわれる。食性は主に動物食で、活発に潜水し貝類、エビ、カニ、小魚、水生昆虫などを採食し、他に水草などの植物も食べる。

世田谷区では、11月から翌年の3月頃にかけて少数が不定期に渡来する。多摩川で観察され、滞在期間は短い。頻繁に潜水して採食する。(東京都：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数28件 1953～2018年)



○観察記録

1953. 11. 03 多摩川(野毛) 5羽 新田 群れが上空を下流より上流へ
1969. 12. 10 多摩川(玉堤) 2羽 雌1、雄1羽 観察 (12/13まで雌雄で滞在し 12/14雄1羽になる)
コジキッタナ
2003. 12. 02 多摩川(野毛2) 2羽
2006. 12. 19 多摩川(鎌田1) 3羽 雄2羽、雌1羽がヒドリガモの群れの中で頻繁に潜水
2008. 11. 19 多摩川 2羽 定例調査
2010. 01. 13 多摩川 1羽 定例調査
2011. 01. 24 多摩川(玉堤1) 1羽 雌 頻繁に潜水を繰り返す
2012. 01. 23 多摩川(玉堤1) 1羽 雌
2013. 12. 17 多摩川(玉堤2) 1羽 雌 第1回冬羽 急流を頻繁に潜水する

2014. 12. 22	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌雄
2016. 01. 07	多摩川(宇奈根 2)	1 羽	雌
2017. 12. 25	多摩川(玉堤 2)	1 羽	雌、第 1 回冬羽
2018. 01. 02	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌、第 1 回冬羽

58. ミコアイサ *Merugellus albellus* Smew

カモ科

ユーラシア大陸の亜寒帯で広く繁殖し、冬はヨーロッパ中部、カスピ海、黒海、中国東部、朝鮮半島、日本などに移動する。日本では、北海道では旅鳥であるが、北部で繁殖の記録がある。冬鳥として本州、四国、九州に渡来する。

越冬地では、湖沼、大河川で生活し、ときには海に出ることもある。数羽か数十羽の群れで見られることが多い。日本に渡来するアイサ類の中では最も小型である。繁殖期は5～7月で、針葉樹林帯の緩やかな流れの川や湖沼などで生活し、水辺周辺の高木林の樹洞に営巣する。早成性で、孵化するとすぐにヒナは巣を離れ、雌親に導かれて水辺にむかい成長する。食性は動物食で、潜水して魚類、甲殻類、貝類などを採食する。

世田谷区では、11月から翌年の4月頃にかけて不定期に渡来する。移動途中と思われ、多摩川で短期間滞在するのが観察されている。2011年以降の記録はない。(東京都区部：絶滅危惧IB類 全記録数63件 1981～2010年)

○主な観察記録

1981. 01. 12	多摩川	2 羽	雌 1、雄 1 羽
1995. 12. 28	多摩川	1 羽	雄
1996. 11. 28	多摩川	1 羽	雄 エクリプス
1997. 03. 08	多摩川(鎌田 1)	3 羽	雄 1、雌 2 羽
1998. 05. 15	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌 1 羽が渡来し中州で休んでいた (6/1 まで滞在した)
1999. 12. 04	多摩川(鎌田 1)	1 羽	(12/9 まで滞在した)
2001. 12. 07	多摩川	1 羽	雌
2002. 11. 18	多摩川	1 羽	雌 コガモの群れに混じっていた
2003. 03. 21	多摩川(野毛 3)	2 羽	雌 1 羽が浅瀬を潜る
2005. 02. 12	多摩川	2 羽	
2006. 12. 11	野川	1 羽	雌 兵庫橋近く盛んに潜水・移動
2006. 12. 14	多摩川(玉川 3)	1 羽	雌 川面で休んでいる
2007. 11. 09	多摩川(野毛 2)	1 羽	雄 エクリプス
2008. 02. 16	多摩川	1 羽	
2010. 02. 03	多摩川	1 羽	
2010. 12. 15	多摩川	1 羽	

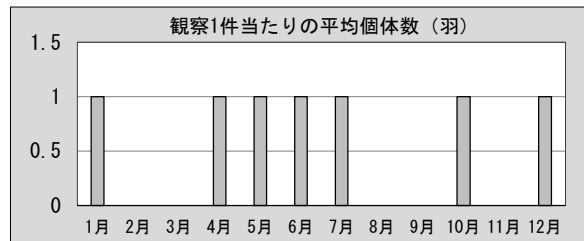
59. カワアイサ *Mergus merganser* Common Merganser

カモ科

ユーラシア大陸の中北部と北アメリカ大陸の北部で繁殖し、冬はヨーロッパ、中央アジア、インド東部、中国東部、朝鮮半島、日本、北アメリカ中部などに移動する。日本では、北海道では留鳥として繁殖しているが、本州、四国、九州には冬鳥として渡来する。他に亜種コカワアイサが北海道、本州、九州で迷鳥として記録されている。

越冬地では、淡水域の広い湖沼や河川で数羽から数十羽が群れで生活し、内湾や沿岸部の浅瀬でも観察される。北日本では海水域で多く、西日本では淡水域に多く生息する傾向があると言われる。アイサ類の中では最も大きく、内陸の湖沼や河川周辺の草原や湿原で生活する。繁殖期は4～6月で、巣は雌が地上に枯れ草などを使用して皿形の巣をつくる。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ、雌親に導かれて水辺にむかい成長する。食性は動物食で潜水して魚類を捕食する。

世田谷区では、冬鳥として多摩川に少数が不定期に渡来するが、夏期の観察記録も多い。2001 年 12 月から翌年 4 月まで雌 1 羽が越冬した例はあるが、多くは一時的な通過滞在である。また、1996 年 7 月から 9 月まで雌 1 羽が越夏した。さらに 2016 年 6 月雄 1 羽、2018 年 7 月雌 1 羽の夏期の短期滞在記録がある。頻繁に潜水し、深場や背中が出るような浅瀬で採食しているのが観察されている。2015～2019 年まで毎年 1 羽が観察されていたが、2020 年は記録がない。(全記録数 100 件 1987～2019 年)



○主な観察記録

1987. 12. 21	多摩川	1 羽	雌
1995. 10. 27	多摩川	1 羽	雌 コンクリートブロックの上で休んでいた
1996. 07. 24	多摩川	1 羽	雌 1 羽が谷沢川合流付近に渡来 (9/11 まで滞在した)
1998. 03. 23	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄 上流より飛来し浅瀬に着水
2001. 12. 19	多摩川	1 羽	雌 1 羽が渡来 (翌年 4/8 まで滞在した)
2002. 02. 20	多摩川	1 羽	雌 定例調査
2005. 12. 29	多摩川	1 羽	
2006. 12. 25	多摩川(野毛 2)	1 羽	雌
2007. 02. 28	多摩川(玉川 1)	1 羽	野川のコンクリートブロックの上で休息
2010. 03. 11	多摩川(野毛 1)	1 羽	雄 頻繁に潜水
2012. 12. 03	多摩川(玉川 1)	1 羽	雌 上流より飛来し着水する
2013. 05. 28	多摩川(野毛 2)	1 羽	雄 浅瀬を時々潜水
2013. 06. 03	多摩川(野毛 1)	1 羽	矢沢川流れ出し、潜水しているが背が水面からでている
2015. 01. 13	多摩川	1 羽	雄 中州に上がっている
2016. 06. 06	多摩川	1 羽	雄 1 羽(6/27 まで滞在した)
2016. 06. 20	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄が流れに向かい潜水
2017. 04. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌が小さな中洲で休息
2018. 07. 02	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌が中洲で休息
2019. 04. 01	多摩川(玉堤 2)	1 羽	雌、水際で休んでいたが川に入り潜水

60. ウミアイサ *Mergus serrator* Red-breasted Merganser

カモ科

ユーラシア大陸の中北部と北アメリカ大陸の中北部で繁殖し、冬はヨーロッパ南部、小アジア、カスピ海沿岸、中国東部、朝鮮半島、日本、北アメリカ西海岸、メキシコ湾などに移動する。日本では、冬鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来する。

越冬地では、数羽から数十羽が群れで生活し、内湾や港など波の静かな海に多いが、時には、海に近い池や川に姿を見せることもある。繁殖期は5～7月で、普通は短期的な一夫一妻で繁殖するが、一夫多妻、一妻多夫の例も報告されている。水辺の藪林や崖の割れ目、洞窟の中などに、雌が草の葉や茎で皿形の巣をつくり産座には自分の胸や腹部の綿羽を敷く。早成性で、ヒナは孵化するとすぐに巣を離れ、雌親に導かれて水辺にむかい成長する。食性は動物食で、潜水が巧みで水中で魚を捕食する。群れで潜水し、魚群を浅瀬に追い上げ捕食することもある。

世田谷区では、下記 3 例の記録がある。(東京都区部：情報不足 全記録数 4 件 2000～2019 年 2011 年以降 3 件)

○観察記録

2000. 01. 02	多摩川	1 羽	雌 コガモの群れの中にいた
2019. 01. 28	多摩川(野毛 2)	1 羽	雄が右岸の浅瀬で休息
2019. 12. 03	多摩川(宇奈根 1)	1 羽	対岸へ飛翔、その後遊泳 (12/6 にも観察された)

◆ カイツブリ科 PODICIPEDIDAE

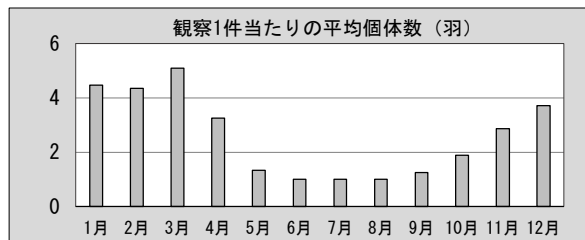
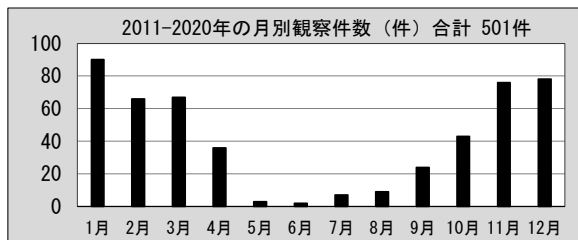
62. カイツブリ *Tachybaptus ruficollis* Little Grebe

カイツブリ科

ユーラシア大陸の温帯から熱帯地域にかけて、西ヨーロッパ、アフリカ大陸、南アジア、東南アジア、東アジアで広く繁殖する。北部のものは生息場所の凍結を避けて南に移動する。日本では北海道で夏鳥であるが、本州、四国、九州、大隅諸島、奄美諸島、大東諸島、琉球諸島まで、留鳥として各地で繁殖する。他に、大東諸島に亜種ダイトウカイツブリが留鳥として生息する。

日本のカイツブリ科の中では一番小さい。主に平野部の池、湖沼、堀、河川などに生息し、稀に海に出ることもある。秋や冬は河川の下流域でも見られる。ヨシ等が密生する水面にいて、採食の時は広々とした水面に現れる。足指につくヒレ状の弁膜で水をかいて潜水する。繁殖期は主に5～8月で、一夫一妻で繁殖する。繁殖は2～12月と長期にわたり、年に2～3回繁殖する。秋や冬にも繁殖活動をしているものがあるので、2月頃に幼鳥が見られることもある。巣はヨシ原やその他の水生植物、杭などに、植物の葉や茎、布きれ、ビニール、ナイロン袋などを無造作に積み上げて浮巣をつくる。巣作り、抱卵、育雛は雌雄共同でおこなう。ヒナは早成性ではあるが、食性が小魚のため捕食が難しく、自立できるまでの約2カ月間は親鳥の給餌を受けながら成長する。親鳥が巣を離れる時、卵を巣材で覆い隠すので、白色の卵もやがて茶褐色を呈するようになる。食性は主に動物食で、小さなフナやタナゴなどの魚類、水生甲殻類、昆虫、軟体動物を採食し、他にヒシの実のような植物も食べる。

世田谷区では、9月から翌年の4月頃まで見られる。稀に夏期に観察されることもある。多摩川、野川が主で、他に仙川、砧公園、馬事公苑、上北沢2（将軍池公園）などで観察されているが、数は少ない。小魚や小さなザリガニを採食するのが観察されている。1996年から2001年まではほぼ毎年繁殖していたが、2002年以降繁殖は観察されていない。（東京都区部：準絶滅危惧 全記録数2,503件 1949～2020年）



○繁殖記録

1973. 05. 06	高源院	1 巣	浮巣 2 卵
1996. 07. 06	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 2 羽
1997. 08. 25	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 2 羽
1998. 07. 13	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 1 羽 成鳥と一緒に泳ぐ
1999. 06. 22	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 1 羽 中州の入り江で成鳥から餌をもらう
2000. 07. 25	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 1 羽 成鳥が雛を背に乗せて川崎側に向かって泳いでいる
2001. 07. 30	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 1 羽 中州の岸近くで成鳥から小魚をもらう

○主な観察記録

1949. 08. 31	多摩川	1 羽	上空を南西より 15 : 30 頃南西より北東に飛行す
1963. 01. 21	多摩川(野毛)	52 羽	下流から上流に飛ぶ 渡し場
1990. 01. 20	馬事公苑	1 羽	池で潜水し採餌 1 日だけ
1996. 01. 06	多摩川	51 羽	
2002. 11. 20	多摩川	18 羽	定例調査
2005. 01. 19	多摩川	17 羽	定例調査
2007. 11. 00	砧公園	1 羽	
2008. 02. 15	野川(成城 4)	1 羽	
2011. 03. 06	多摩川	16 羽	定例調査
2013. 06. 20	上北沢 2	1 羽	将軍池公園の池で採食 (6/27 まで滞在した)

2015. 01. 19	多摩川	8羽	1羽が潜っていたがアメリカザリガニを啜って浮上する
2015. 03. 09	多摩川	4羽	1羽が白化個体
2016. 12. 07	野川(宇奈根3)	1羽	潜水して下流へ
2017. 01. 17	多摩川	7羽	全域定例調査
2018. 01. 17	多摩川	10羽	全域定例調査
2019. 01. 16	多摩川	9羽	全域調査
2020. 01. 29	多摩川	7羽	全域調査

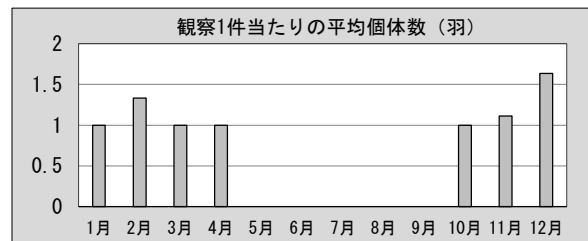
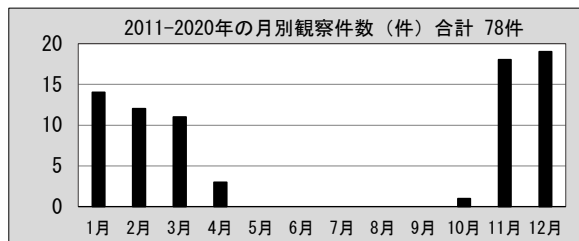
63. アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena* Red-necked Grebe

カイツブリ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の亜寒帯で繁殖し、冬には南ヨーロッパ、東アジア、北アメリカの沿岸部に移動して越冬する。日本においては、北海道では夏鳥で道東の湖沼で局地的に繁殖している。冬鳥として本州、四国、九州、対馬、伊豆諸島に渡来する。

冬は内湾や河口部で見られ、内陸の湖沼や河川に入ることは少ない。繁殖期は5～9月で、一夫一妻で繁殖する。湖沼や湿地のマコモ、イグサなどが密生する水辺に生息し、水草が密生した水辺の浅瀬に雌雄共同で水草を積み上げて浮き巣をつくる。ヒナは早成性ではあるが、食性が小魚のため採食が難しく、自立できるまでの約2カ月間は雌雄の親鳥の給餌を受けながら成長する。食性は動物食で、頻繁に潜水を繰り返し、魚類、水生の甲殻類、昆虫、軟体動物を採食する。

世田谷区では、2007年以降少数ながら多摩川で観察されるようになる。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 17件 2007～2020年)



○主な観察記録

2007. 03. 09	多摩川(玉堤1)	1羽	中間羽、中州入り江の近くで時々潜水
2010. 05. 02	多摩川(野毛1)	1羽	夏羽、潜水を繰り返す 後に水勢に流されるように下流へ
2017. 03. 08	多摩川(玉川3)	1羽	兵庫島野川で採食 (4/16まで継続的に見られた)
2019. 12. 28	多摩川(玉堤1)	1羽	中洲寄りの浅瀬に出る
2020. 02. 03	多摩川(玉堤1)	1羽	右岸の川面に浸っているヤナギで休息

64. カンムリカイツブリ *Podiceps cristatus* Great Crested Grebe

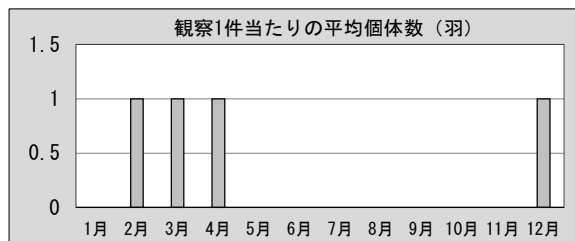
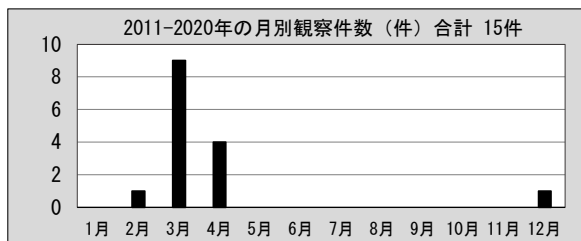
カイツブリ科

ユーラシア大陸の亜寒帯に広く分布する他、アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドなど、広範囲に分散した繁殖地を持つ。冬は温暖な地域に南下するものもいる。日本では、青森、茨城、滋賀で夏鳥として少数繁殖しているが、主に冬鳥として北海道、本州、四国、九州、対馬に渡来する。

海岸部、淡水湖沼や大きな河川に多く、稀に内陸の湖沼や大きな河川にも入る。繁殖期は3～8月で、一夫一妻で繁殖し年に1～2回繁殖する。池や沼の水草が密生した水辺の浅瀬に、雌雄共同で水草を積み上げて逆円錐形の浮き巣をつくる。ヒナは早成性ではあるが、食性が小魚のため採食が難しく、自立できるまで約2カ月間は雌雄の親鳥の給餌を受けながら成長する。食性は主に動物食で、潜水を繰り返し魚類、水生の甲殻類、昆虫などを採食する。

世田谷区では、10月から翌年の4月頃まで見られる。多摩川の上流や下流でしばしば観察されるが数は少ない。世田谷区内での記録は1994年以降で、比較的新しい。多摩川で頻繁に潜水をくりかえし10cmほ

どの魚をくわえ浮上するのが観察されている。一冬連続して滞在することは少なく単発的であるが、2001年は少数が1月から4月まで4ヶ月連続、2005年は5月に夏羽の個体が5/6～5/24まで19日間観察された例がある。2005年と2015年には幼鳥が多摩川で観察されている。(東京都区部:留意種 全記録数176件 1994～2020年)



○主な観察記録

1994. 11. 05	多摩川(玉堤)	1羽	(11/23まで滞在)
1996. 11. 15	多摩川(玉堤1)	1羽	1羽が渡来(11/28まで滞在)
1998. 03. 06	多摩川(玉堤1)	1羽	夏羽1羽が渡来(3/9まで滞在)
2001. 01. 19	多摩川	7羽	(1/19から1～5羽が4/6まで継続して滞在)
2004. 11. 08	多摩川	1羽	1羽が渡来(11/16まで滞在)
2005. 05. 06	多摩川(玉堤1)	1羽	夏羽 1羽が渡来(5/24まで滞在)
2005. 10. 30	多摩川(鎌田1)	2羽	成鳥と幼鳥が時々潜水
2007. 11. 27	多摩川(玉堤2)	1羽	上流に向かって頻繁に潜水
2010. 11. 29	多摩川(玉川3)	1羽	二子橋から新二子橋間 遊泳、時々潜水
2012. 11. 13	多摩川(鎌田1)	1羽	オギの海脇 時々潜水
2012. 11. 20	多摩川(鎌田1)	1羽	頻繁に潜水をくりかえし10cm位の魚をくわえて浮上する
2014. 11. 18	多摩川	1羽	上流から平瀬川合流点付近まで移動
2015. 11. 21	多摩川(玉川3)	1羽	幼鳥 兵庫島公園ひょうたん池付近本流の左岸
2017. 02. 13	多摩川(玉堤1)	2羽	
2018. 03. 19	多摩川(鎌田1)	1羽	夏羽
2019. 12. 08	多摩川(宇奈根1)	6羽	川で遊泳
2020. 02. 14	砧公園	1羽	砧公園サンクチャリの池に15日迄観察

65. ミミカイツブリ *Podiceps auritus* Horned Grebe

カイツブリ科

ユーラシア大陸の亜寒帯からアリューシャン列島、アラスカで繁殖し冬は気候温暖な地域に移動する。日本では、北海道は旅鳥で、本州、四国、九州に冬鳥として渡来する。

内湾、河川、湖沼に生息し、海上で見られることが多い。単独か少数の群れで行動することが多い。繁殖期は4月から9月頃で、自立できるまで雌雄の親鳥の給餌を受けながら成長する。食性は小魚、貝、昆虫、甲殻類など、主に動物食である。

世田谷区では下記1例の記録がある。(全記録 1件 2016年)

○観察記録

2016. 12. 09	多摩川(玉堤1)	1羽	等々力排水樋管付近、時々潜水

66. ハジロカイツブリ *Podiceps nigricollis* Black-necked Grebe

カイツブリ科

ユーラシア大陸のヨーロッパやオビ川以東のシベリア、満州、ウスリー地方及び、アフリカ南部、北アメリカ西部などに分散して繁殖している。冬は気候温暖な地域に移動する。日本には、中国東北部からウスリー地方で繁殖したものが、北海道から本州、四国、九州、伊豆諸島、小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島まで広く冬鳥として渡来する。

海岸近くの湖沼、河口部、内湾でよく大きな群れで見られ、内陸の大湖沼や大きな河川にも現れる。繁

殖期は5月から8月頃で、一夫一妻で繁殖する。年1から2回繁殖する。雌雄共同で池や沼の水草が茂った場所に浮巣を作り、雌雄交代で抱卵する。ヒナは早成性ではあるが、自立できるまでは雌雄の親鳥の給餌を受けながら成長する。食性は主に動物食で、潜水が巧みで、小さな魚、甲殻類、昆虫を採食し、他に藻類などの植物も食べる。

世田谷区では、11月から3月頃にかけて不定期に渡来する。多摩川だけで少数が観察されている。頻繁に潜水し採食する姿が見られる。

(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数24件 1969～2019年 2011年以降6件)

○観察記録

1969. 12. 01	多摩川(玉堤)	1羽	1羽が渡来(12/16まで滞在 カイツブリの群れの中) コジキッタナ
1970. 11. 21	多摩川	1羽	二子橋上流
1995. 12. 10	多摩川(玉堤1)	1羽	
1997. 12. 05	多摩川(玉堤1)	1羽	1羽が渡来 (12/7まで滞在 時々潜水)
2000. 03. 03	多摩川(鎌田1)	1羽	冬羽1羽が渡来 (3/10まで滞在 時々潜水)
2001. 01. 21	多摩川	1羽	
2005. 01. 02	多摩川(玉堤1)	1羽	時々潜水
2008. 03. 15	多摩川	1羽	
2010. 12. 06	多摩川(玉堤1)	4羽	(11/2 1羽が渡来し、12/6まで滞在)
2012. 12. 03	多摩川(玉堤1)	1羽	
2013. 02. 04	多摩川	1羽	
2015. 01. 13	多摩川	1羽	
2017. 01. 23	多摩川(鎌田1)	1羽	平瀬川合流地で潜水を繰り返す
2018. 01. 02	多摩川(玉堤1)	1羽	
2019. 01. 02	多摩川(玉堤1)	1羽	

◆ ハト科 COLUMBIDAE

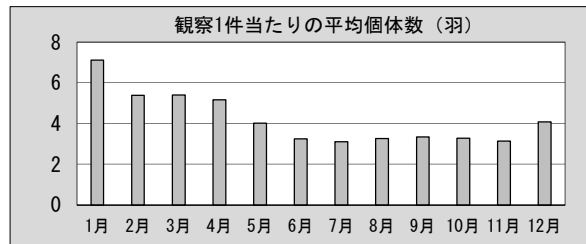
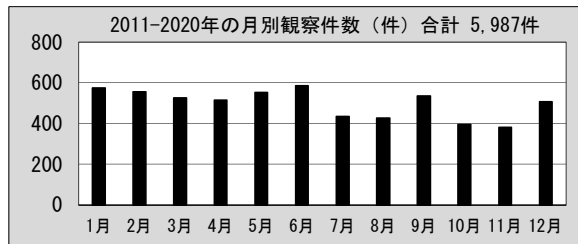
74. キジバト *Streptopelia orientalis* Oriental Turtle Dove

ハト科

ユーラシア大陸中緯度のロシア南東部から南アジア、中央アジア、東アジア、東南アジアに広く分布し繁殖する。分布地の北部のものは、冬には南へ移動する。日本では、北海道では夏鳥で、本州、四国、九州、大隅諸島、伊豆諸島では留鳥である。冬期には、北海道で繁殖したものは暖地へ移動する。日本には他に、亜種のリュウキュウキジバトが生息し、奄美諸島、琉球諸島に留鳥として分布する。

低地から亜高山帯までの広い範囲に生息し、雑木林、山林、畑地、集落、市街地などで見られ、つがいで行動することが多い。繁殖期は長く3～11月とほぼ一年中にわたり、雑木林、公園、街路樹、河畔林などの3～5mの高さの枝に、枯れ枝を積み上げ皿形の巣をつくり、産座には特に細い枯れ枝を使用する。1巣卵数は2個で、抱卵と育雛は雌雄共同でおこない、抱卵期間は15～16日位である。育雛期間中だけ、ピジョンミルクといわれるミルク状の高栄養な分泌物が成鳥雌雄の「そのう」で生成される。そのミルクを雌雄がヒナに与えて育てるので、食物の乏しい晩秋から冬にかけても繁殖することができる。食性は主に植物食で、スズメノカタビラ、ハコベ、イネ、ヒマワリ、ムクノキ、ヤマグワ、サクラ、エノキなどの種子や実などであるが、他に昆虫類も採食する。他の科の鳥と異なり、水面にくちばしを浸けたまま直接水を飲む習性がある。

世田谷区では、一年中観察されている。河川敷、公園、畑地、社寺林、住宅地、グラウンドの芝地など至る所で観察でき、「デデッポーポー」と聞こえる鳴き声がよく聞かれる。人家の近くや河川敷、公園、畑などでアカメガシワ、イイギリ、エノキ、カラスザンショウ、ノイバラ、ムクノキ、ヤマモモ、イネ科の実、ヨウシュヤマゴボウ、などの実を採食するのがよく見られる。繁殖は河畔林、社寺林、公園などの他、街路樹、住宅地の庭木や植え込みで行われるが、建物で繁殖した例もある。巣材集めも年中観察される。(全記録数12,372件 1946～2020年)



○主な繁殖記録

1953. 09. 20	岡本	1 巣	ヒナ
1958. 03. 28	野毛	1 巣	営巣 (4/4 2卵 自宅裏カシに営巣)
1963. 09. 04	上野毛	1 巣	2卵 (9/12 孵化 9/24 巣立ち スギに営巣)
1967. 10. 19	尾山台	1 巣	ヒナ2羽 夕方巣立ち シイに営巣
1970. 03. 03	瀬田	1 巣	抱卵中 (3/13 孵化ヒナ2羽 人家のヒノキ)
1997. 06. 01	用賀3	1 巣	タクシー会社建物内で営巣
2004. 11. 26	多摩川(玉堤1)	1 巣	ヒナ1羽 エノキに営巣
2010. 06. 08	駒沢オリンピック公園	1 巣	巣の中にヒナ1羽
2015. 05. 21	桜上水2	1 巣	浦野グランドカバー園境の植え込みに営巣抱卵 (6/17 ヒナ2羽が無事に巣立って行った)
2016. 08. 14	祖師谷公園	1 巣	藤棚で繁殖(抱卵)、地面で採餌など
2016. 09. 17	桜上水2	1 巣	浦野グランドカバー園のキジバトの巣では、親が抱雛、雛2羽は健在であった 雛は綿羽から幼羽に変わっていた
2018. 05. 07	多摩川(玉堤1)	1 巣	散策路脇のクワの木に営巣中で時々座り直して抱卵 5/21 雛2羽
2019. 05. 27	多摩川(玉川3)	1 巣	親鳥が兵庫島公園のエノキで抱卵及び抱雛 6/3 雛2羽
2020. 06. 15	多摩川(玉堤1)	1 巣	成鳥1羽、雛2羽 親鳥が川岸のオニグルミの巣に入り、大きな雛2羽に口移しに給餌する

○主な観察記録

1946. 08. 24	野毛	1 羽	
1953. 06. 13	野毛	1 羽	小麦畑に降りて落ちていた小麦を食べる
1969. 07. 07	等々力2	9 羽	人家の庭
2002. 04. 03	砧公園	7 羽	定例調査
2003. 06. 04	野川	17 羽	定例調査
2004. 01. 21	多摩川	70 羽	定例調査
2006. 12. 27	蘆花恒春園	16 羽	
2007. 04. 05	馬事公苑	24 羽	
2011. 02. 24	岡本静嘉堂周辺	69 羽	
2013. 01. 09	砧公園	82 羽	定例調査
2015. 01. 14	多摩川	106 羽	定例調査
2016. 12. 12	奥沢6	2 羽	ムクノキの実を採食(浄真寺別荘)
2017. 01. 13	浄真寺	29 羽	14羽と15羽の2群れが落葉の中で採食(奥沢7)
2017. 11. 10	祖師谷公園	2 羽	ヨウシュヤマゴボウの乾燥した実を啄んでいた
2018. 01. 10	砧公園	9 羽	内4羽はカラスザンショの実を採食
2018. 01. 15	砧公園	25 羽	個人調査(東地区)
2018. 07. 30	等々力溪谷公園	6 羽	内2羽はアカメガシワの実を食べる
2019. 04. 20	若林公園	21 羽	若林公園 デデポーとさえずる(若林4)
2020. 03. 31	蘆花恒春園	35 羽	地面で採餌

78. アオバト *Treron sieboldii* Japanese Green Pigeon

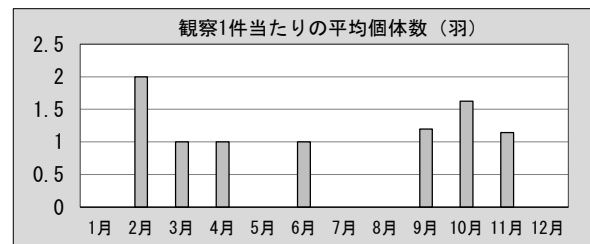
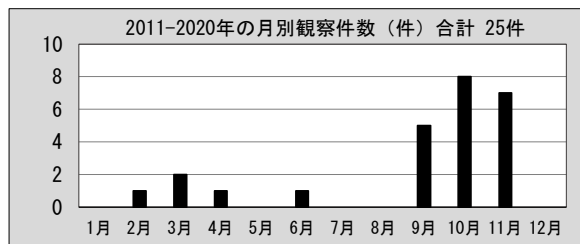
ハト科

日本、中国南東部、台湾、ハイナン島、ベトナムなどに分布する。日本では、北海道、佐渡では夏鳥で、冬期は南へ移動する。本州、四国、九州に留鳥として分布する。

丘陵地から山地の森林に生息し広葉樹林や針広混交林を好む。非繁殖期には数羽から数十羽の群れで行動することが多い。「オーアオー オーアオー」と聞こえる大きな声で鳴く。繁殖が確認されているのは日

本だけである。産卵期は6月頃2個の乳白色の卵を産む。しかし、巢の発見例は少なく、繁殖生態については不明な点が多い。食性は主に植物食で、ミズキ、シラカシ、アラカシ、コナラ、ミズナラ、ナナカマド、ヤマザクラ、ピラカンサなどの実や新芽を食べる。初夏から秋にかけて海水や温泉水で塩分を補給する習性があるが、生理的な意味は十分解明されていない。神奈川県大磯町、北海道白糠の海岸で群になって海水摂取する姿が観察されている。

世田谷区では、9月から11月に少数が観察されている。砧公園、駒沢オリンピック公園や、瀬田、喜多見などの樹木の多い場所だけでなく、多摩川の河畔林などでも観察されている。きたみふれあい広場ではピラカンサの実を採食していた記録がある。移動途中の不定期な立寄りであるが、2006年頃より観察例が増加傾向にある。(東京都区部：非分布 全記録数35件 1938～2020年)



○観察記録

1938. 08. 10	太子堂	1羽	
1973. 11. 01	深沢6	1羽	幼鳥
1976. 03. 13	上野毛	1羽	保護
1988. 05. 18	成城7	1羽	声
1990. 02. 12	等々力溪谷公園	1羽	
2003. 04. 20	瀬田4	2羽	鳴いている姿を目撃 国分寺崖線内
2006. 10. 00	砧公園	1羽	
2007. 10. 06	駒沢オリンピック公園	2羽	
2009. 12. 23	喜多見9	1羽	ふれあい広場でピラカンサの実を採食
2011. 09. 28	多摩川	1羽	谷沢川合流地点周辺
2012. 09. 22	砧公園	1羽	
2014. 09. 10	多摩川	2羽	定例調査
2015. 02. 23	多摩川	2羽	雄が河畔林近くの芝地で採餌
2016. 06. 18	等々力溪谷公園	1羽	鳴き声
2016. 11. 01	砧公園	1羽	谷戸川付近の樹上で木の実を捕食、3日怠いた
2017. 11. 04	羽根木公園	1羽	定例調査(D地区)
2019. 03. 25	多摩川(玉堤1)	1羽	雌が右岸方向から飛来し川岸のオニグルミで風切り羽を羽づくろい
2020. 11. 05	桜ヶ丘すみれば自然庭園	1羽	

◆ アビ科 GAVIIDAE

81. アビ *Gavia stellata* Red-throated Loon

アビ科

北半球北部のタイガからツンドラ地帯、アラスカ、カナダ北部の内湾や湖沼の岸で繁殖し、冬は冷温帯の沿岸に移動する。日本では、北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

主に海岸の岸から沖合に生息し、内陸にはほとんど入らないといわれるが、海が荒れた時には湾内や河口に入ることがある。水に潜って主に魚類を捕えるが、水生昆虫、甲殻類なども食べる。

世田谷区では、下記4例の記録がある。多摩川で2月から5月に観察されているので、渡り途中や海が荒れた時の飛来と思われる。(全記録数6件 1950～2013年 2011年以降1件)

○観察記録

1950. 05. 29	多摩川(玉堤)	1羽	(5/31 まで川ダレやコジキッタナ付近で見る)
2003. 04. 10	多摩川(玉堤 1)	1羽	中間羽
2004. 02. 07	多摩川(宇奈根)	1羽	川岸に上がる
2013. 03. 19	多摩川(玉堤 1)	1羽	下流から飛来し一旦着水するがすぐ飛び立ち上流に向かう

◆ ミズナギドリ科 PROCELLARIIDAE

98. オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* Streaked Shearwater

ミズナギドリ科

世界では日本、朝鮮半島、中国、ロシア東南部の沖合の島々で繁殖し、非繁殖期はフィリピンからニューギニアにかけての海域まで南下する。日本では、北海道から八重山諸島の島嶼で繁殖し海上に生息する。

繁殖地は、海岸や島嶼の海沿いに限られ、営巣環境により草本類の密生地、原生林の傾斜地、常緑樹がうっそうと茂る密林中の傾斜地等の石が少なく巣穴を掘り易い土壌の地中に直径 20 cm 深さ 1~2m 位の巣穴を掘って集団で繁殖する。北海道から琉球諸島にかけて集団繁殖している島があり、このうち北海道渡島大島、岩手県三貫島、京都府冠島、島根県星神島などがオオミズナギドリ繁殖地として天然記念物に指定されている。生涯のほとんどを外洋で過ごす。波のあおりを利用して洋上を帆翔し、餌を求めて広く海上を飛び回る。飛翔しつつ波間に浮かぶ餌を食べたり、海面に降りて泳ぎ回り、頭を水中に入れてオキアミ、イカの幼体、稚魚などを食べる。翼が長く、脚も強くないため直接地面から飛立えず、木や崖の上から飛び降りたり、開けた斜面を駆け下って飛び立つ。このため繁殖地には必ず飛び立つための斜面や大きな木がある。

世田谷区では、下記 4 例の記録がある。(全記録数 5 件 1981~2012 年 2011 年以降 1 件)

○観察記録

1981. 07. 04	船橋	1羽	保護
1998. 10. 19	多摩川(鎌田 1)	1羽	下流から飛来し上流へ 前日の台風で迷って飛来したと思われる
1999. 09. 16	多摩川(玉堤 1)	1羽	上流から下流へ飛翔 前日の南風で迷ってきたと思われる
2012. 06. 20	多摩川(鎌田 1)	3羽	台風明けの上空を羽ばたかずに飛ぶ、水道局管理地を通過

◆ ウミツバメ科 HYDROBATIDAE

112. クロコシジロウミツバメ *Oceanodroma castro* Band-rumped Storm Petrel ウミツバメ科

世界では日本近海、東太平洋、東大西洋の熱帯、亜熱帯海域に広く分布し、繁殖する。日本では、本州北部に渡来する旅鳥であるが、地上の捕食者がいない海洋小島の岩手県日出島(クロコシジロウミツバメ繁殖地として天然記念物に指定)、三貫島、宮古市の小島には繁殖コロニーがある。

繁殖活動は夜間に行い、同じ島で繁殖するカモメ類が活動を停止する夜 8 時半頃から島に現れ、夜中の 2 時半頃まで活動する。繁殖期の日中は遠く離れた洋上か、巣穴の中に潜んで過ごす。繁殖期は 5~10 月で、年 1 回一夫一妻で繁殖する。ヒナには未消化の海洋動物と消化した食物からでた脂肪を大量に含む混合物を与える。海上の水面近くを飛び、小魚や浮遊するプランクトン、イカ、エビなどを水面に降りることなく捕らえる。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(環境省：絶滅危惧 IA 類 全記録数 1 件 1966 年)

○観察記録

1966. 09. 26	多摩川(玉堤 2)	1羽	17 時頃水面すれすれに上流へ行ったり下流へ行ったりして飛翔 コジキッタナ

114. コシジロウミツバメ *Oceanodroma leucorhoa* Leach's Storm Petrel ウミツバメ科

北太平洋、北大西洋の島々に生息し繁殖する。非繁殖期は太平洋、大西洋の熱帯海域で越冬するが、インド洋やニュージーランド、オーストラリア付近まで南下することもある。日本では、北海道大黒島(海鳥繁殖地として天然記念物に指定)、岩手県日出島、三貫島で繁殖する。

繁殖期には土中に穴を掘って営巣する。同じ島で繁殖するカモメ類の活動が停止する夜間に繁殖活動を行い、日中は、島を遠く離れた洋上か、巣穴の中に潜んで過ごす。冬は本州中部以北、伊豆諸島、小笠原諸島の海上で過ごす。海上をヒラリヒラリと波から身をかわすように飛び、水面近くの小魚や浮遊するプランクトン、イカ、エビなどを水面に降りることなく、くちばしで捕る。

世田谷区では、保護された下記1例の記録がある。(全記録数 1件 1979年)

○観察記録

1979. 10. 22 代沢 1羽 東京都傷病鳥獣記録

115. オーストンウミツバメ *Oceanodroma tristrami* Tristram's Storm Petrel ウミツバメ科

北太平洋の西部亜熱帯海域に分布し、ミッドウェー島、レイサン島、日本の伊豆諸島の蛇島、恩馳島、鳥島、北硫黄島で集団繁殖する。非繁殖期も繁殖地周辺の海にとどまる個体もいるが、渡りについての詳細はよくわかっていない。

航海中の船の後をつけて飛び、ミズナギドリのように翼を傾けて水面上を低く飛ぶことが多い。採食時には脚を下げて水面近くを跳びはねるようにして飛び、水面近くの小魚、浮遊するプランクトン、イカ、エビなどを水面に降りることなく、くちばしで捕る。地上に捕食者がいない海洋の小島の岩の隙間や土中に巣穴を掘って集団繁殖する。繁殖活動は夜間に行う。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(環境省：準絶滅危惧 全記録数 2件 2003年)

○観察記録

2003. 05. 16 多摩川(鎌田1) 1羽 15時頃から約1時間、流れの急な水面を漂い100m位流されると低空で上流に飛翔し着水を繰り返す

◆ コウノトリ科 CICONIIDAE

118. ナベコウ *Ciconia nigra* Black Stork コウノトリ科

世界ではユーラシア大陸の中緯度地方、中国東北部、北朝鮮、アフリカ大陸南部で繁殖し、ユーラシア大陸で繁殖する個体は冬にアフリカ大陸中部、インド、中国南部、東南アジアに渡る。日本では迷鳥でごく稀に渡来し、北海道から沖縄まで各地に記録がある。

深い林内の湖沼や河川、水溜り、湿地などで生活し、淡水域でドジョウを主食としカエル、ネズミ、ヤゴなども食べる。また、小哺乳類や野鳥の雛も捕食する。樹上に枝を積み上げた大きな巣をつくる。

世田谷区では、下記1例の記録がある。この個体は約2週間多摩川に留まり、他に粕江市、府中市でも同時期に観察されている。(全記録数 1件 1990年)

○観察記録

1990. 10. 29 多摩川 1羽 上空を巡回する 調布堰から第三京浜道多摩川橋まで

119. コウノトリ *Ciconia boyciana* Oriental Stork コウノトリ科

中国東北部やアムール川、ウスリー河流域、中国東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬期には中国南東部、日本、台湾等へ南下して越冬する。日本には稀に北海道、本州、佐渡、舩倉島、隠岐、四国、九州、

奄美諸島、琉球諸島で観察されている。以前に日本でも本州中部から西部で繁殖し、周年生息する個体群が見られたが、1994 年以降絶滅した。兵庫では 2005 年から飼育個体を放鳥しているが、長野、山梨、福井などで飛来が観察されている。国の特別天然記念物に指定されている。

水田、河川敷、湖沼などに生息し、魚類、カエル類、ヘビ類、鳥類の卵やヒナ、昆虫などを食べる。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(環境省：絶滅危惧 IA 類 全記録数 2 件 2018 年)

○観察記録

2018. 2. 13 多摩川(喜多見 1) 1 羽 多数のハシボソガラスがそばに集まってきた。河川敷で羽繕いしていたが、北の方へ飛び去った。背中にアンテナ、足環も装着されていた

◆ ウ科 PHALACROCORACIDAE

127. カワウ *Phalacrocorax carbo* Great Cormorant

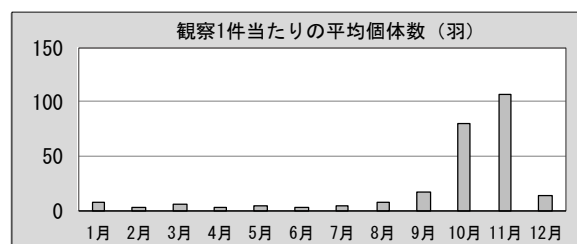
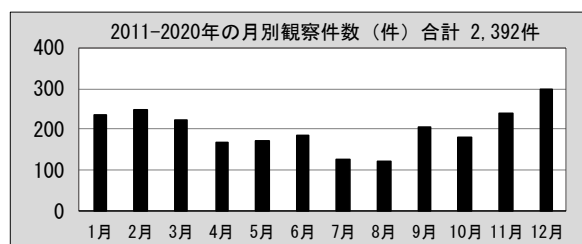
ウ科

ユーラシア大陸、日本、オーストラリア、ニュージーランド、アフリカ大陸、北アメリカ大陸東部など広い範囲に生息し繁殖する。日本では、本州、四国、九州で留鳥、北海道、本州北部では夏鳥。琉球諸島では冬鳥。

内陸の淡水、河川、湖沼に生息し、水かきのついた足を使い、尾を舵にして巧みに潜水して魚類や甲殻類を捕る。水中で捕った魚を一旦水面に出てから呑み込む。水に潜って魚を捕ることに特化しているため、翼は油分が少なくあまり水をはじかない。このため翼を広げて乾かす。夜明けに採食のため隊列を成してねぐらから餌場に向かう。夕方になると再びねぐらに戻る。群の飛翔時には V 字形に編隊を組み高く飛ぶことが多い。河川や湖沼近くの樹上や鉄塔などに枯枝などを利用し皿型の巣を造る。11 月から翌年の 7 月頃まで長期にわたり 2~3 回集団繁殖する。1 巣卵数は 3~4 個。雌雄交替で抱卵し卵は 27~31 日で孵化する。育雛も雌雄共同で行う。繁殖にさきがけ、頭部と腿部に細くて白い羽毛が生える。

1960~1970 年代、日本経済の高度成長期に沿岸部の埋め立てや生息環境の悪化により極端に減少したが 1970 年代後半になると、繁殖地の保全や水質の改善により急激に個体数の回復と分布域を広げてきた。関東地方においても個体数の増加と分布拡大が見られるようになった。東京湾沿岸の三番瀬、葛西沖、多摩川河口、水元公園などで集団繁殖している。この劇的な変化が各地で漁業被害問題を起こしている。現在はカワウの個体数と分布を計画的に管理していくことで被害を少なくする試みが行われている。

世田谷区では一年中生息している。1948 年から少数記録されていたが 1968 年頃一旦途切れる。1984 年から再び観察されるようになり、1990 年代後半から個体数が急激に増加する。多摩川、野川、仙川で見られる他、砧公園や蘆花恒春園、喜多見、桜丘、奥沢、桜上水など区内各地の公園や住宅地などの上空を群れや単独で飛翔するのが観察されている。濡れた翼を乾かすために中州などで両翼を左右に広げて長い間そのままの姿勢でいるのがよくみられる。多摩川で個体数が多く、特に秋から初冬は個体数が多く大群で行動し、群れで漁や休息をするのが観察されている。アユ、ドジョウ、ナマズ、ザリガニ等を捕る。1996 年 11 月 3 日には多摩川で 2,400 羽を記録した。2019 年の台風 19 号により、河床の変化に伴い魚の減少等があり、2020 年は個体数の大幅な減少が見られた。(全記録数 6,298 件 1948~2020 年)



○主な観察記録

1948. 06. 11 野毛	1 羽 自宅上空 上流に飛行
1959. 04. 26 野毛	12 羽 自宅付近 群れが南から北へ飛翔
1967. 06. 17 多摩川	1 羽 下流から飛来し上流へくる

1984. 02. 21	多摩川(野毛)	50 羽	
1996. 11. 03	多摩川	2400 羽	上流から飛来し二子上空で多摩川と都心方面の二方向に分かれる
2002. 12. 04	野川	10 羽	定例調査
2006. 10. 13	多摩川(上野毛 2)	800 羽	中州で羽を広げるなどして休んでいる
2007. 10. 29	多摩川(野毛)	630 羽	250 羽、380 羽の群れが中州で休息や採食
2009. 02. 17	高源院	1 羽	弁天池で何度も魚を捕っていた 採食後翼を広げて乾かしている
2010. 06. 02	野川	5 羽	定例調査
2011. 11. 20	奥沢 6	110 羽	上空を 60 羽、20 羽、30 羽の群が東方へ飛ぶ
2012. 06. 11	多摩川(玉堤 1)	14 羽	成鳥 1 羽が排水樋管流れだして潜水しザリガニを捕り食べる
2014. 03. 14	高源院	1 羽	低空を飛翔していた個体が弁天池に着水し採食を行った
2014. 12. 15	多摩川(玉堤 1)	70 羽	32 羽が浅瀬を群になって魚を岸に追い小魚を捕食
2015. 03. 29	浄真寺	2 羽	上空を飛翔
2016. 02. 06	上北沢 2	1 羽	將軍池で潜水採餌 カワウを浅い池で観察するのは初めてである
2016. 10. 03	多摩川(玉堤 1)	866 羽	川崎市等々力緑地から次々に飛来し川面に降りる。
2017. 02. 05	駒沢オリンピック公園	16 羽	公園内高空を南へ
2020. 09. 25	多摩川(玉川 1)	32 羽	21 羽と 11 羽の二群れが下流に向かって飛ぶ

◆ サギ科 ARDEIDAE

132. サンカノゴイ *Botaurus stellaris* Eurasian Bittern

サギ科

ユーラシア大陸、北日本、北西アフリカで繁殖し、北方のものは冬にアフリカ、南アジア、東南アジアに渡る。日本では、北海道、岩手、茨城、千葉、石川で繁殖し、繁殖地周辺では留鳥であるが北海道では夏鳥である。本州南西部、四国、九州、琉球諸島では冬鳥である。

平地の湖沼、河川周辺の広大なヨシ原や水田の背の高い草むらに生息する。あまり開けた場所には出てこない。早朝と夕暮れに水辺に出てきてじっと待ち伏せし、魚、エビ、カエル、ネズミなどを捕食する。

世田谷区では冬期に観察された下記 4 例の記録がある。竹柵に擬態したのも観察されている。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 環境省：絶滅危惧 IB 類 全記録数 4 件 1985～2016 年 2011 年以降 1 件)

○観察記録

1985. 12. 15	多摩川(玉堤 1)	1 羽	(12/18 までいた)
1987. 12. 21	多摩川	1 羽	
2001. 01. 30	多摩川(玉川 3)	1 羽	野川と混交林の間の岸で休んでいたが、望遠鏡を向けると首を伸ばして周囲の竹柵に擬態する
2016. 09. 16	多摩川(玉川 1)	1 羽	低水敷のアシ原で上空にトビが通過すると首の毛を逆立てて威嚇する

133. ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* Yellow Bittern

サギ科

東アジアから東南アジア、日本、インドにかけてとミクロネシア西部に分布する。日本では、夏鳥として渡来し、北海道から九州までの各地で繁殖する。琉球諸島では冬鳥。

池や沼、川岸、休耕田などのヨシ、マコモ、ガマ類などの背の高い単子葉植物が繁茂する湿地に生息する。ヨシの茎を足指でつかんで茎から茎へと巧みに伝って移動したり、ヒシやハスの浮き葉の上を歩いたりする。じっと待ち伏せしドジョウ、モツゴ、フナ、カエル、ザリガニなどを捕らえる。5 月から 8 月に水辺にあるヨシやマコモの草原の中に生えたままの葉や茎を束ねて皿型の巣を造る。1 巣卵数は 4～7 個。警戒時、首を伸ばし周りのヨシと一体化する擬態もよく行う。

世田谷区では、5 月頃から 10 月に観察されている。多摩川と野川で見られ、多摩川でほぼ毎年観察されていたが、移動途中と思われ単発的である。フナやカエルを捕食した観察例がある。1964 年と 1965 年に 3 例繁殖した記録があり、2001 年 8 月には幼鳥が観察されている。1996 年から毎年観察されているが 2014 年以降は観察されていない。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 環境省：準絶滅危惧 全記録数 132 件 1952～2019 年、

2011 以降 8 件)

○繁殖記録

1964. 06. 20	多摩川(玉堤)	1 巣	6 卵(6/24 抱卵していた 6/28 巣から卵が落ちていて成鳥は付近を飛んでいた) 地上 118cm コジキッタナ島
1964. 07. 12	多摩川(玉堤)	2 巣	①(7/16 7 卵抱卵中 7/22 3 卵孵化方不明 7/23 2 卵孵化 7/25 1 卵離れ 3 羽 8/1 雛 3 羽巣に立っていた 8/2 雛人に捕られる 渡し場) ②(7/16 5 卵抱卵中 7/22 1 卵不明 4 卵 抱卵していた 7/25 2 卵孵化 7/28 雛 2 羽は人に捕られる 渡し場)
1965. 07. 25	多摩川(玉堤)	1 巣	雛 5 羽 宮内多摩川のヨシの中で鳴いていた 7/27 雛が巣の中で全部死んでいた

○主な観察記録

1952. 05. 04	多摩川	1 羽	
1960. 05. 22	上野毛 2	1 羽	明神池の埋め立てた跡に降りる
1989. 05. 24	多摩川(玉堤)	2 羽	
1997. 07. 19	多摩川(鎌田 1)	1 羽	バンの池の水草の上を歩き水面をつついて小魚を捕る
1999. 05. 29	多摩川(鎌田 1)	2 羽	雌雄がバンの池の縁にいたが川へ飛び立つ
2001. 08. 06	多摩川(鎌田 1)	1 羽	幼鳥がバンの池の岸で小ブナを捕り頭から呑み込む
2003. 10. 16	多摩川(鎌田 1)	1 羽	バンの池及びその周辺
2006. 09. 28	多摩川(玉川 1)	1 羽	幼鳥 野川緑草地中州の水際
2007. 08. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中州の水際で休んでいる
2009. 07. 29	多摩川(野毛 2)	1 羽	排水樋管口のヨシで休息
2011. 06. 13	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄がアシの茂る脇の小さな流れの縁で飛び出てきた 15cm 位のカエルを捕える
2012. 07. 30	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄 中州のアシが茂った細い流れ際にいて頸をのばしてカエルを捕える
2013. 05. 21	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌雄不明 川面上空約 5m を上流から飛来し、下流 13.8 km 付近の中州に降りる
2018. 06. 18	多摩川(玉川 1)	1 羽	左岸のヨシ群生地縁でカエルを捕る
2019. 07. 22	多摩川(野毛 1)	1 羽	成鳥が川岸の草間から川面を見る

134. オオヨシゴイ *Ixobrychus eurhythmus* Von Schrenck's Bittern

サギ科

シベリア東部、朝鮮半島、中国東部、サハリン、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬は東南アジア、フィリピンに渡る。日本では、本州中部以北では旅鳥であるが、まれに繁殖する。繁殖は局地的で個体数は減少している。北海道、佐渡島でも繁殖の記録がある。本州南西部、四国、九州では越冬するものもいる。

池や沼、川岸、休耕田などのヨシ、マコモ、ガマ類など背の高い単子葉植物が繁茂する湿地に生息する。夜行性で日中は草むらの中に隠れ、早朝と夕暮れに水辺に出てきてじっと待ち伏せし、魚、エビ、カエル、バッタなどを捕食する。

世田谷区では、下記 3 例の記録がある。(環境省:絶滅危惧 IA 類 全記録数 3 件 1957、1968 年)

○観察記録

1957. 09. 22	多摩川(玉堤)	1 羽	宮内多摩川でみる
1968. 08. 24	多摩川(玉堤)	2 羽	コジキッタナ付近で見る
1968. 10. 27	多摩川(玉堤)	1 羽	コジキッタナの草の中にいた

137. ミゾゴイ *Gorsachius goisagi* Japanese Night Heron

サギ科

東アジア全域に分布するが、日本でのみ繁殖する。日本では夏鳥として渡来し、本州、四国、九州、伊豆諸島の低山帯で繁殖する。冬は台湾、フィリピン、中国南部で越冬し、琉球諸島でも少数が越冬する。

山地のスギ、ヒノキなどの針葉樹の密林や、クリ、ナラなどの落葉広葉樹の密林に生息し、沢筋や谷間の溪流、山ぎわの湖沼のふちなどで魚類、サワガニ、カエル、ミミズを捕食する。夜行性で、主に夕方から夜間にかけて採食する。つがいは分散して営巣する。繁殖期は 4~7 月で樹皮、樹根などで粗雑な皿型の巣を地上から 7~20m 位の樹上につくる。繁殖期の 4 月下旬ごろ、日没と夜明け前に「ブォー ブォー ブ

オー」と聞こえる低い声で連続的によく鳴く。

世田谷区では、移動途中に立ち寄ったと思われる4例の記録がある。蘆花恒春園には2009年4月16日から23日まで1週間留まった(記録としては13件)。桜丘すみれば自然庭園には2012年7月1日から12日まで約2週間滞在した(記録としては6件)。(東京都区部：非分布 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 20件 2009～2018年 2011以降8件)

○観察記録

2009.04.16	蘆花恒春園	1羽	(4/23まで記録13件 落葉の溜まっている地上で採食 人が近づくとササ藪の方へ移動 カラス1羽が地上にいて威嚇すると木の上に飛び上がった)
2012.07.01	桜丘すみれば自然庭園	1羽	(7/12まで記録6件 園内の薄暗い樹林にいて、人が居ないと地上で採食し、人が来ると樹上に移動する)
2013.05.05	多摩川(玉堤1)	1羽	河畔林内の細道にいたが人に気づいて川岸のエノキに飛び移る
2018.05.21	多摩川(玉堤1)	1羽	河畔林内オニグルミから下を向く

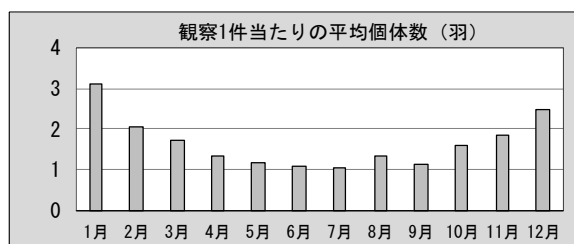
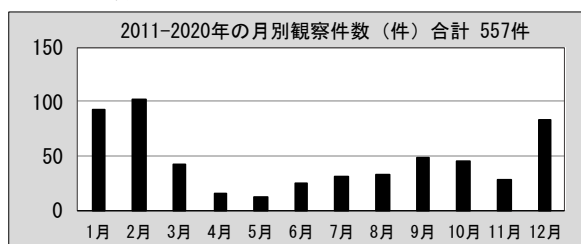
139. ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* Black-crowned Night Heron

サギ科

ユーラシア大陸、中国東部、日本、アフリカ大陸、南北アメリカ大陸の熱帯から温帯に幅広く生息し、北半球の温帯で繁殖するものは、南方に渡って越冬する。日本では留鳥で、本州、四国、九州、琉球諸島で繁殖する。北海道でも稀に繁殖することがある。北海道、東北地方など北方で繁殖するものは、冬に南下する個体もいる。

夜行性で、昼間は水辺の雑木林や竹林などに群れでねぐらを形成している。夕方になって「グワー」と聞こえる大きな声で鳴きながら飛び立つ。4月から7月にアマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギなどと混生して集団繁殖することが多く、マツ林、雑木林、竹林などの樹上に枯枝などを用いて粗雑な皿形の巣を造り営巣する。1巣卵数は3～6個。一夫一妻で繁殖し、雌雄交替で21～27日間抱卵する。沼や沢、水田のヨシ原に出て、昆虫、オタマジャクシ、カエル、ドジョウ、フナ、アメリカザリガニなどを捕食する。養魚場や庭の池などにも夜間に飛来する。

世田谷区では、一年中生息している。多摩川、野川、仙川、砧公園で主に見られるが、瀬田、下馬、桜上水、北沢川緑道など住宅地上空で飛翔姿が見られたり、鳴き声が深夜聞かれている。夜行性であるが日中、コイ、カエル、オタマジャクシ、ザリガニなどを捕食した例がある。昼間の日当たりのよい野川沿いの河畔林(玉川3)にねぐらを形成し、夕方飛び立って採食場所に向かう姿が観察されているが、2015年以降ねぐら入りの個体数は少なくなり、多い時でも10羽位になってきた。ねぐら入り個体の年齢構成も若い個体が多い。過去には岡本、野毛、多摩川でねぐらがあつた。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 2,849件 1948～2020年)



○主な集団ねぐらの記録(観察場所の野川(玉川3)と多摩川(玉川3)は同一場所)

1962.12.12	岡本	120羽	コサギとともに山林のスギに止まっている 八幡神社先
1963.03.17	野毛	60羽	モウソウ竹林に止まっていた
1967.11.04	岡本	30羽	八幡神社先のスギ林
1994.12.17	野川(玉川3)	20羽	野川の樹林や大イチョウ
1998.01.13	野川(玉川3)	65羽	河畔林のイチョウや周りの木々で休んでいた
2001.12.30	多摩川(玉川3)	12羽	12羽が散らばって河畔林で休んでいた
2004.12.01	野川	16羽	定例調査
2007.12.17	多摩川(玉川3)	7羽	幼鳥5羽、成鳥2羽が野川の林で休息
2010.11.29	野川(玉川3)	11羽	若鳥のみ兵庫島周辺の樹林帯で休息

2010. 12. 06	多摩川(玉川3)	17羽	内、16羽が川岸の混交林で休んでいたが何かに驚き飛び立つ
2014. 01. 07	多摩川(玉川3)	12羽	河畔林で休息
2018. 02. 10	多摩川(玉川3)	9羽	野川樹林 成鳥4 若5羽休息

○主な観察記録

1948. 05. 05	等々力溪谷公園	60羽	18時頃谷沢川上空を北方に飛行
1964. 06. 12	多摩川(玉堤)	1羽	夜、ギャーギャーと鳴き次にガアガアと鳴き飛び去った
1997. 06. 01	下馬4	1羽	ハシブトガラス2羽に追われ南西へ
2000. 07. 07	多摩川	1羽	川岸でオタマジャクシを2匹食べる
2003. 06. 11	高源院	1羽	若鳥 大きなコイを採食
2004. 12. 01	多摩川	16羽	定例調査
2007. 09. 28	多摩川(玉川1)	1羽	幼鳥が中州の岸でカエルを捕え食べる
2008. 07. 01	砧公園	3羽	
2014. 04. 21	高源院	3羽	成鳥2、第2回夏羽1羽、竹藪の中で休息 成鳥1羽は頭に2本の冠羽あり
2015. 02. 21	野川(喜多見6)	1羽	カラス2羽とバトル
2015. 02. 23	多摩川	2羽	成鳥1羽が河畔林から浅瀬に降りザリガニを捕る
2016. 06. 24	仙川	2羽	成鳥2羽
2017. 01. 22	祖師谷公園	1羽	せきれい橋下の中洲で座り込んで休息
2018. 03. 01	多摩川(玉川1)	4羽	野川樹林帯 成鳥2 若鳥2 休息
2019. 10. 05	成城みつ池緑地	1羽	幼鳥 下の池から飛び立ち、近くの木に止まる
2020. 05. 18	桜上水3	1羽	自宅上空を鳴きながら南西方向に通過して行く 2014/07/05 以来、およそ 6年ぶりのことである

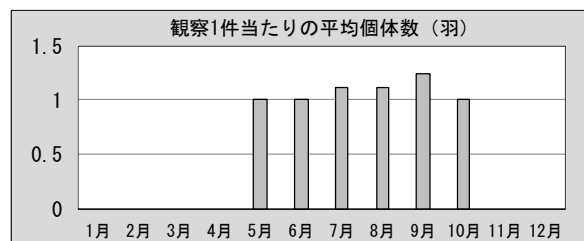
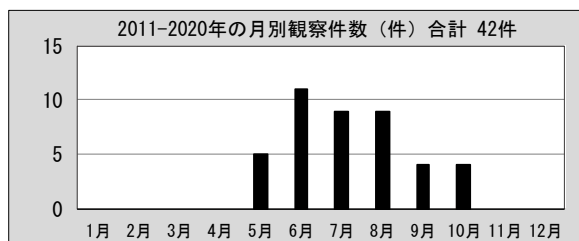
141. ササゴイ *Butorides striata* Striated Heron

サギ科

アフリカ、アジアの温帯及び熱帯、南アメリカ、ニューギニア、オーストラリアに分布する。日本では、主に夏鳥として本州から四国、九州で繁殖する。九州から琉球諸島では越冬するものもいる。北海道でも記録がある。

水田、湖沼、川原、ヨシ原などの開けた水辺や浅瀬に生息する。4月から7月に水辺近くのヤナギ、雑木林、マツ、スギなどの樹上に枯れ枝を組んで皿形の巣をつくる。1巣卵数は2~4個で2日おきに1卵ずつ産卵し雌雄交替で抱卵する。獲物を待ち伏せて、魚、アメリカザリガニ、カエル、水生昆虫などを食べる。マツの小枝、木の葉、実、アヒルの羽毛などを、くちばしでくわえて水面に落とし、コイ、ウグイなどが餌と間違えて寄ってくるのを、水面に飛び込んで捕らえる行動が「撒き餌漁」として知られている。

世田谷区では、5月から6月に渡来し、10月頃渡去するが、過去には越冬した記録がある。主に多摩川で見られ、野川、仙川では稀である。砧公園でも記録されている。川岸や池の縁を歩いたり、じっと待つて魚を狙っている姿勢がみられている。2013年に多摩川のコンクリート上で、くちばしにくわえた葉を3枚川面に落とす撒き餌漁が観察されている。1950年代に繁殖した例がある。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 406件 1938~2020年)



○繁殖記録

1957. 07. 07	野毛	1巣	3卵 7/18 5卵になる 7/28 3卵にひびが入る、2卵行方不明 7/29 雛1羽 孵る 2卵孵化出来ず(1卵は無精卵もう1卵は卵の中で雛が死亡) 8/3 雛行方不明3卵 谷沢天神山 マツに営巣 地上8.17m 巣材 ケヤキの枝 産座はマツ葉 外径42cm 内径17.5cm

○主な観察記録

1938. 08. 20	太子堂	1 羽	
1952. 07. 29	野毛	1 羽	オナガ 1 羽に追われる 宮の森
1997. 09. 12	多摩川(玉堤 1)	2 羽	じっと魚を狙っていた
2000. 12. 11	多摩川	1 羽	越冬 主に中流のテトラポット付近で採餌 (翌年 2/19 までいた)
2003. 08. 19	多摩川(上野毛 2)	5 羽	成鳥 4、幼鳥 1 羽が中州の浅瀬にいて成鳥 1 羽が魚を捕る
2005. 07. 11	多摩川(玉堤 1)	2 羽	成鳥 2 羽が早朝東京側から飛来し等々力緑地に戻る
2006. 08. 09	野川(成城 4)	1 羽	成鳥
2007. 09. 07	多摩川(野毛 2)	1 羽	河川上空を飛翔
2010. 06. 12	多摩川(鎌田 1)	2 羽	平瀬川出合い地点上空をグラント上空經由下流へ通過
2011. 10. 06	砧公園	1 羽	池の縁を歩く
2013. 09. 02	多摩川(野毛 2)	1 羽	左岸縁に突き出ているコンクリート上で嘴に咥えた葉を 3 枚川面に落とす
2015. 06. 20	多摩川(玉堤 1)	1 羽	大田区境対岸から移動、元渡し場付近水際で採餌
2016. 10. 12	多摩川(野毛 2)	1 羽	野毛 2 丁目バス停地先 左岸から対岸へ飛翔移動
2019. 08. 04	野川(鎌田 4)	1 羽	川辺で餌を狙っていた
2020. 10. 26	野川(宇奈根 1)	1 羽	餌を求めて仙川合流点を移動

142. アカガシラサギ *Ardeola bacchus* Chinese Pond Heron

サギ科

中国からベトナム、ミャンマー東部にかけて分布する。北方のものは中国、マレー半島、インドネシアに渡って越冬する。日本では、北海道から本州、四国、九州、小笠原諸島に渡来するが不定期である。1960 年頃までの記録は 10 例にも満たない。近年は観察記録が増え、関東以西で多く見られるようになる。熊本県(1981 年、1996 年)と秋田県(1986 年)で繁殖、また、神奈川県や沖縄県で越冬も観察されている。

沿岸や沿岸近くの水田、湿田、湖沼、河川など水辺や湿った場所に生息し、ドジョウやフナ、アメリカザリガニ、オタマジャクシ、カエル、トンボなどを捕食する。

世田谷区では、夏に多摩川と野川で観察された下記 6 例の記録がある。1999 年 6 月に多摩川に渡来した個体は約 1 ヶ月滞在した。(全記録数 10 件 1999 年～2016 年 2011 年以降 6 件)

○観察記録

1999. 06. 03	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽 下流から飛来し中州のヤナギや林に止る (7/6 まで多摩川の野毛 1、玉川 3 で観察)
2005. 05. 16	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽 中州にいたが飛び立って下流へ
2011. 05. 13	野川(喜多見 6)	1 羽	休息、飛翔
2013. 06. 18	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽 中州(14.6 km)の中州縁にいたが上流方向に飛立ち、15.8、16.2 km 地点で同じ個体と思われるものを再確認する
2015. 05. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	
2016. 05. 23	多摩川(玉堤 1)	1 羽	小さな中州で小魚を捕る

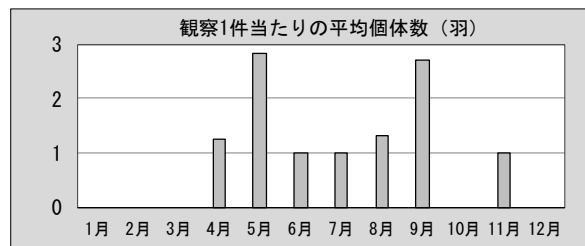
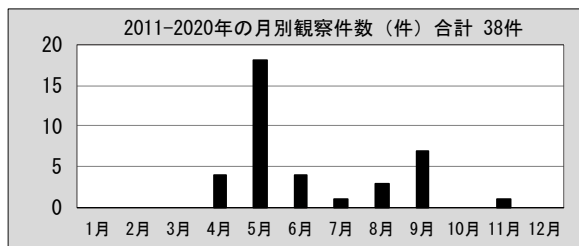
143. アマサギ *Bubulcus ibis* Cattle Egret

サギ科

アフリカ、南ヨーロッパから南中国に至るユーラシア大陸、東南アジア、日本、台湾、北アメリカ中部から南アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドに分布する。日本では、夏鳥として渡来し、本州から九州までの各地で繁殖する。分布域を北に広げ 1973 年頃から北海道でも観察例が増えている。冬はフィリピンなど南方に渡るが、琉球諸島では少数が越冬する。

農耕地や草原、川原、湖沼などに生息するが他のサギ類に比べると乾いた草地を好む。4 月から 9 月に林などの樹上に枯枝などを用いて粗雑な皿形の巣を造り営巣する。1 巣卵数は 2～7 個。雌雄交替で 22～27 日間抱卵する。水田やハス田の畦道や草原でバッタなどの昆虫やカエルを食べる。上下のくちばしには鋸歯状の細い切れ込みがある。

世田谷区では、4月中旬から9月に見られる。主に春と秋に観察される。全て多摩川で見られ、個体数は少ないが稀に30羽位の群れが見られることがある。川原や草地でバッタやトンボ、カエル、ガなどを捕食しているのが観察されている。(全記録数 202件 1995～2020年)



○主な観察記録

1995. 05. 03	多摩川	8羽	夏羽が中州の草地で採食
1996. 05. 16	多摩川(玉堤1)	17羽	夏羽 群れで川崎側から東京側に移動
1998. 10. 02	多摩川(玉堤1)	26羽	冬羽 川原の草地にいるがその内の1羽がカエルを捕る
2001. 06. 07	多摩川	4羽	
2003. 09. 25	多摩川	4羽	中州にコサギ29羽といた
2004. 06. 11	多摩川(野毛2)	31羽	夏羽の群れが川崎側から飛来し世田谷区の市街へ
2005. 09. 04	多摩川(玉堤1)	2羽	冬羽 中州の草地でトンボを捕る
2006. 07. 04	多摩川(玉堤1)	1羽	中州の草地でバッタを捕る
2007. 10. 02	多摩川(鎌田1)	7羽	川岸でサギ群れと休息、しばらくして一斉に飛び立つ
2010. 05. 27	多摩川(玉堤1)	31羽	川崎側から群れで飛来し世田谷区の市街方面へ
2012. 05. 01	多摩川(野毛2)	2羽	1羽が中州の草地でカラシナの花に集まる虫を捕食
2014. 04. 17	多摩川(野毛2)	1羽	中州でカワウに混じって羽繕い
2015. 05. 13	多摩川(宇奈根1)	2羽	駒沢大学近くの左岸草地に降りて採餌
2016. 05. 23	多摩川(玉堤2)	14羽	1羽が草先の茶褐色のガを首を伸ばして捕る。
2018. 06. 13	多摩川	1羽	上空通過のサギを写真判定したらアマサギの繁殖羽であった
2018. 11. 14	多摩川	1羽	東名高速道路上流の上空を通過
2020. 05. 20	多摩川(玉堤2)	1羽	夏羽 上流方向から飛来し中州に降りる

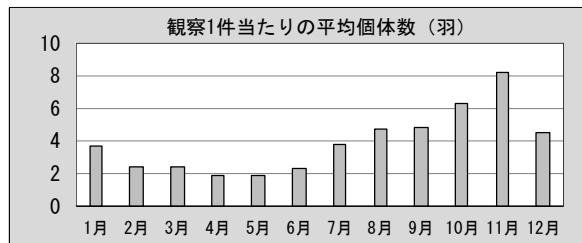
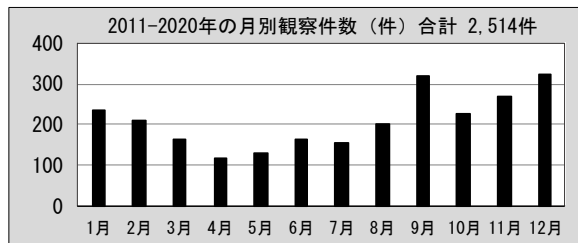
144. アオサギ *Ardea cinerea* Grey Heron

サギ科

西ヨーロッパからユーラシア大陸中部以南、日本、インドネシア、インド、アフリカ、マダガスカルに分布。日本では、北海道、本州、四国、九州で繁殖する。北海道、本州北部では夏鳥、それ以南では留鳥、琉球諸島では冬鳥。

河川、湖沼、水田、干潟などに生息し、夕方は川の中州や水辺近くの樹上で休むことが多い。4月から9月にゴイサギ、ダイサギなどと同じ場所で集団繁殖することもあるが、アオサギだけでコロニーをつくる方が多い。高木の針葉樹や落葉広葉樹の樹上や梢に枯枝などの巣材で粗雑な皿型の大きな巣を造る。1巣卵数は2～5個。2日おき、または3～4日おきに産卵する。雌雄交替で25～28日間抱卵する。くちばしは黄色、足も黄褐色であるが繁殖期には婚姻色と呼ばれる鮮やかな赤みの強いピンク色になる。魚類、両生類、昆虫類のほか、ネズミや小鳥も捕食する。

世田谷区では、一年中生息している。主に多摩川、野川、仙川で見られ、砧公園や馬事公苑、祖師谷公園、次大夫堀公園、高源院など公園や緑地の池や、桜上水、千歳台、下馬など住宅地上空を通過するのも見られている。多摩川では秋から初冬にかけ個体数が多く、この20年間では増加傾向にあったが、2017年以降減少が見られている。多摩川脇の池で1羽がウシガエルを何度も出し入れしながらやっとうちから飲み込んだり、カワウによって追いこまれた魚を中州縁で次々と捕獲したり、約15cm位のヒキガエルや、枝に止まったトンボやバッタを捕食したりするのが観察されている。繁殖は確認されていないが2010年に砧公園で1羽が巣造りしているのが観察されている。(全記録数 5,003件 1963～2020年)



○主な観察記録

1963. 10. 31	多摩川(野毛)	1羽	谷沢川流れ出し先島
1986. 11. 01	馬事公苑	1羽	池の縁のヒマラヤスギに止まっている
1990. 02. 12	岡本静嘉堂周辺	16羽	林
2002. 10. 25	多摩川	27羽	
2005. 04. 05	多摩川	4羽	1羽が浅瀬で魚を追っているカイツブリ 5羽の間に入り魚を捕る
2007. 12. 05	野川	8羽	定例調査
2009. 11. 05	多摩川	64羽	
2010. 07. 11	砧公園	6羽	1羽が巣材を運び巣造りしていた(その後放棄)
2011. 02. 22	多摩川(野毛2)	4羽	1羽が多摩川脇の池でウシガエル(腹部に大きな黒い斑)を何度も出し入れしながらやっと頭から飲み込む
2013. 10. 18	高源院	1羽	第1回冬羽個体 枝に止まったトンボを捕獲
2014. 02. 17	多摩川(玉川1)	6羽	1羽がカワウによって追い込まれた魚を中洲の縁で次々と採食
2014. 08. 25	多摩川(玉川1)	20羽	1羽が中洲縁で15cm位のヒキガエルを捕食
2017. 03. 06	仙川	4羽	大川橋下流に滞在する1羽は嘴、脚が美しいオレンジ色の婚姻色となった
2018. 03. 01	野川(喜多見7)	1羽	カエルを捕食
2019. 11. 04	多摩川(玉川1)	31羽	31羽が中洲で休んでいたが、トビが上空で旋回すると飛び立つ
2020. 11. 06	梅丘2	1羽	城山小学校グラウンド上空を西の方向に通過

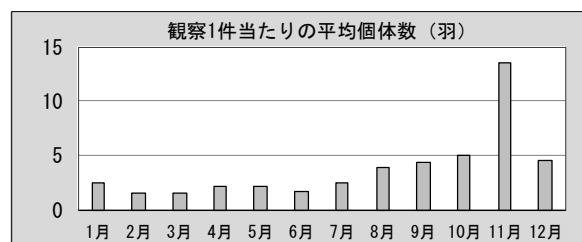
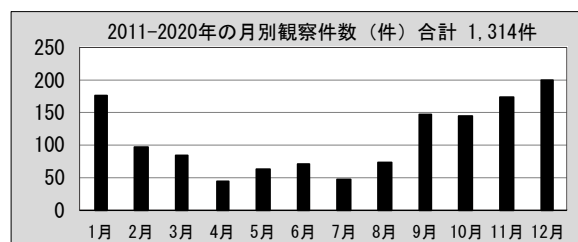
146. ダイサギ *Ardea alba* Great Egret

サギ科

西ヨーロッパからインド、中国東部、日本、オーストラリア、ニュージーランド、アフリカ、北アメリカ南部、南アメリカに分布する。日本では、亜種チュウダイサギが留鳥または夏鳥として本州、四国、九州までの各地で繁殖し、冬は小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島などに移動するが、一部で越冬する個体もいる。亜種ダイサギも日本で越冬する個体がいる。

河川、湖沼、水田、干潟などに生息する。4月から9月にアマサギ、チュウサギ、コサギなどと同じ場所で集団繁殖することが多く、マツ林、雑木林、竹林などの樹上に枯枝などで粗雑な皿形の巣を造り営巣する。1巣卵数は3〜5個。2日おきに1卵ずつ産卵する。雌雄交替で25〜26日間抱卵する。繁殖期は、くちばしと足が黒く目先が鮮やかな青緑色であるが、非繁殖期は、くちばしが黄色くなり眼先も黄緑色になる。魚類、両生類、甲殻類や、ネズミなども捕食する。

世田谷区では、亜種チュウダイサギが一年中観察されるが、春から夏にかけて個体数が少なくなる。多摩川、野川、仙川で見られ、野川沿いの次大夫堀公園や仙川沿いの祖師谷公園、高源院、蘆花恒春園、上北沢、砧公園などでも観察されている。川でアユやドジョウ、ザリガニを捕ったり、草地でトンボを捕獲したりするのが観察されている。秋に個体数が多くなり、多摩川ではカワウの大群が漁をする周辺に集まり、逃れてきた魚を待ち受けてコサギと大きな群れをつくって捕食するのが観察されている。冬期、ひときわ体の大きい亜種ダイサギが稀に観察される。（東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 4,404件 1958〜2020年）



○主な観察記録

1958. 10. 07	多摩川(野毛)	1羽	赤岩に降りていた
1986. 06. 01	馬事公苑	1羽	上空通過
1998. 10. 02	多摩川	66羽	
2000. 10. 21	多摩川	31羽	カワウの群れが追い出した魚を奪い合って捕る
2004. 09. 08	多摩川	40羽	定例調査
2007. 12. 05	野川	6羽	定例調査
2011. 11. 09	多摩川	11羽	定例調査 亜種ダイサギ 1羽 東名高速道下流の早瀬で亜種チュウダイサギの群れの中で見られた
2014. 01. 27	高源院	1羽	弁天池で採餌 2回続けて魚を捕獲したらアオサギに威嚇され池から飛び去る
2014. 10. 20	多摩川(玉堤 2)	24羽	1羽が草地でバッタを捕る
2015. 01. 20	仙川	2羽	1羽が大川橋で大きなドジョウを捕る
2015. 10. 26	野川(喜多見 5)	1羽	水際の草むらからザリガニを捕食
2015. 11. 09	多摩川(鎌田 1)	29羽	13羽が右岸寄りの早い流れ出しに群がり 6羽が 20 cm 位のアユを捕食
2015. 12. 27	祖師谷公園	1羽	宮下橋下流で採餌
2017. 11. 01	多摩川(玉川)	34羽	二子橋下流 休息・採餌
2018. 08. 10	将軍池公園	1羽	河川から離れた公園の小さな池に、サギ 3 種が入り採食するのは珍しい
2019. 08. 05	仙川	1羽	久々に観音堂よこに入る。オオシオカラトンボを捕食
2020. 12. 14	砧公園	1羽	ハシブトガラス 1羽にモビングされながら西へ飛んだ

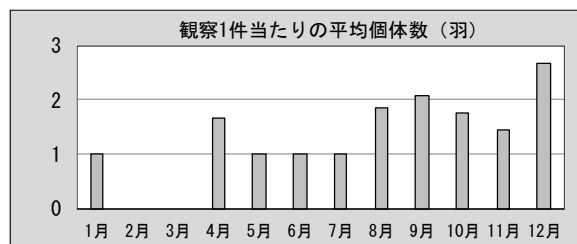
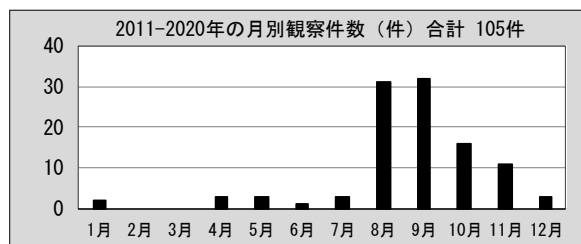
147. チュウサギ *Egretta intermedia* Intermediate Egret

サギ科

朝鮮半島から中国、日本、東南アジア、インド、オーストラリア、アフリカに分布する。日本には、夏鳥として渡来し、本州から九州までの各地で繁殖する。分布域を北に広げつつあり、1981 年頃から北海道で観察例が増えているが、全国的には減少している。冬は南方に渡去するが、琉球諸島などでは越冬する。

平地の水田、湿地、大きな河川に生息する。4 月から 9 月にアマサギ、ダイサギ、コサギなどと同じ場所で集団繁殖することが多く、マツ林、雑木林、竹林などの樹上に枯枝などを用いて粗雑な皿形の巣を造り営巣する。1 巣卵数は 3～5 個。雌雄交替で 24～27 日間抱卵する。昼行性で、浅瀬や草地を歩きながら餌を探し、魚類や両生類、昆虫類、クモ類などを食べる。

世田谷区には、多くが 8 月頃渡来し、12 月頃に渡去する。主に多摩川で見られ、野川や仙川では稀である。稀に冬に観察された例もある。記録の多くは秋に集中し、川岸や草地でバッタやトンボ、トカゲ、カナヘビ、ミミズを捕食しているのが観察されている。(東京都区部：準絶滅危惧 環境省：準絶滅危惧 全記録数 521 件 1953～2020 年)



○主な観察記録

1953. 09. 27	多摩川(野毛)	1羽	渡し場
1957. 08. 27	多摩川(野毛)	40羽	群れが赤岩上空を上流より下流に飛行
1969. 04. 19	等々力溪谷公園	2羽	コサギ 3羽と岸の山を低空で飛ぶ
1978. 05. 01	馬事公苑	1羽	上空を飛翔
1990. 09. 12	多摩川(玉堤)	8羽	
1996. 08. 05	多摩川(玉堤 1)	10羽	川岸に群れていた
2001. 08. 24	多摩川(野毛 1)	17羽	川岸にいてその内の 1羽がミミズを捕る
2005. 08. 14	多摩川	14羽	ダイサギ 6羽、コサギ 15羽、アオサギ 2羽と混群
2008. 09. 23	仙川	1羽	
2009. 09. 22	多摩川(野毛 2)	4羽	散策路アレチウリ群生地上を移動し、内 1羽がトカゲを捕食

2010. 01. 08	多摩川	1 羽	
2012. 09. 30	野川(成城 4)	1 羽	高水敷でカナヘビを捕食
2013. 12. 08	野川	1 羽	川辺で休息
2014. 09. 29	多摩川(玉堤 2)	1 羽	斜面アレチウリ群生地でバッタを捕る
2015. 11. 16	多摩川(玉堤 2)	1 羽	草地でトンボを捕る
2017. 09. 19	多摩川(野毛 1)	1 羽	右岸草地でカナヘビを捕り水に浸けた後頭から飲み込む
2018. 08. 28	多摩川(野毛 1)	1 羽	川岸の草地を歩く
2020. 08. 11	多摩川(上野毛)	2 羽	1 羽が中洲草地のアレチウリ蔓先にいるカマキリを捕る

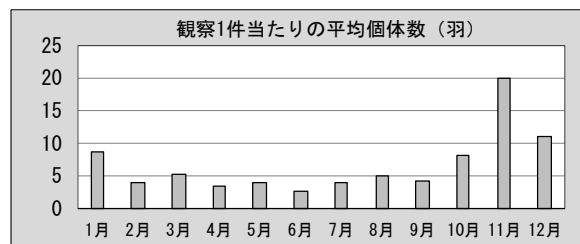
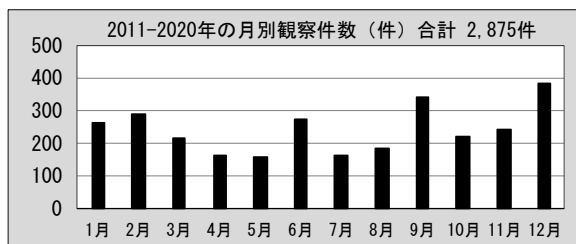
148. コサギ *Egretta garzetta* Little Egret

サギ科

中国、日本、東南アジア、インド、ヨーロッパ南部、アフリカ、ニューギニア、オーストラリアに分布。日本では、留鳥または夏鳥として本州、四国、九州の各地で繁殖する。冬期には暖地に移動し、小笠原群島、奄美大島では冬鳥である。1970 年代以降、分布を広げる傾向にあり、山間の盆地や北日本での個体数が増えている。

低地や山地の水田、湖沼、河川、干潟などの水辺に生息する。4 月から 9 月にアマサギ、ダイサギ、チュウサギなどと同じ場所で集団繁殖することが多く、マツ林、雑木林、竹林などの樹上に枯枝を使い粗雑な皿型の巣を造る。1 巣卵数は 4～7 個。雌雄交替で 22～24 日間抱卵する。生殖羽では後頭に 2 本の長い冠羽と胸と背にレース状の飾り羽が見られる。繁殖期には眼先と足指がピンク色を帯びた婚姻色になる個体を見ることができる。川の浅瀬や水田を歩いて魚や、甲殻類、カエルなどを捕食する。1 羽ずつ分散して採食することが多いが、魚が多い場所では群れて採食する。

世田谷区では、一年中観察される。主に多摩川、野川、仙川で見られるが、砧公園、岡本静嘉堂周辺、馬事公苑、大蔵、成城、桜丘など公園や緑地の池、住宅地上空などでも見られる。秋に個体数が多くなり、多摩川ではカワウが大群で漁をする周辺に集まり、カワウの漁から逃れてきた魚を待ち受けてダイサギと一緒に大きな群れて採食するのが観察されている。アユ、オイカワ、小型のコイの捕食も観察されている。区内に営巣地はないが、隣接する川崎市中原区等々力緑地で 1990 年頃から 2005 年まで繁殖しており、多摩川で 6 月から 8 月に幼鳥が観察された。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 7,356 件 1951～2020 年)



○主な観察記録

1951. 09. 21	多摩川(玉堤)	1 羽	八丁堤に降りていた
1957. 08. 15	上北沢	57 羽	夕方 6 時頃、頭上を西から南へ 40 羽と 17 羽の群が通過
1995. 12. 25	砧公園	20 羽	
2000. 10. 13	多摩川	119 羽	内、77 羽が川岸でカワウの群れが漁をしている傍らに集まり魚を捕る
2002. 10. 25	多摩川	278 羽	内、約 200 羽の群が中州で休んでいた
2003. 07. 03	多摩川	16 羽	内、6 羽が幼鳥
2004. 11. 17	多摩川	134 羽	定例調査
2008. 07. 25	祖師谷公園	1 羽	公園内仙川鞍橋～宮下橋間で採餌
2010. 10. 26	多摩川	153 羽	
2014. 01. 16	仙川	7 羽	小型のコイを捕食（大川橋上流）
2014. 06. 20	野川(喜多見 5)	1 羽	川で婚姻色の大きなオイカワを捕食
2014. 12. 27	蘆花恒春園	1 羽	トンボ池で採食
2015. 12. 01	多摩川(玉川 3)	86 羽	60 羽が兵庫橋下の水深 30～50cm の所に集まり、その内 8 羽が 20cm 位のアユを捕食
2016. 03. 15	多摩川(玉川 3)	3 羽	4 羽が瓢箪池の清掃中を動き回り、1 羽が跳ねたヒキガエルを空中で捕る。

2018. 02. 26	等々力溪谷公園	1 羽	上空から谷沢川に舞い降り、流れの中で魚を捕食
2019. 01. 16	野川(玉川3)	60 羽	兵庫橋を挟んで上流側・下流側を行き来している
2020. 11. 23	仙川	13 羽	大石橋の上流左岸でドジョウを捕食

149. クロサギ *Egretta sacra* Pacific Reef Heron

サギ科

中国南東部、日本、東南アジア、オーストラリア、ミクロネシアに分布。日本では、本州中部以南の海岸に留鳥として生息し、局地的に繁殖する。北海道、本州北部は稀である。

岩の多い海岸や岩礁、サンゴ礁に生息する。4 月から 7 月に海岸の岩棚や岩場に生えた樹木の上で営巣する。水際をゆっくり歩き、魚、カニ、イソガニ、貝などを採食する。本種には全身が黒っぽい黒色型と全身が白い白色型があり、白色型は暖地に行くほど多くなり沖縄本島では 6 割以上が白色型となる。

世田谷区では、下記 3 例の記録がある。いずれも秋から冬に観察されている。(全記録数 4 件 1968、1976、2002 年)

○観察記録

1968. 11. 03	多摩川(玉堤)	1 羽	中州に降りていたが発見後すぐ上流に向かって飛び去る(11/10 コジキッタナ多摩川から上流に飛び去る)
1976. 02. 19	多摩川	1 羽	
2002. 09. 20	多摩川(玉川1)	1 羽	黒色型 中州の岸で休んでいる

150. カラシラサギ *Egretta eulophotes* Chinese Egret

サギ科

朝鮮半島、中国中南部で繁殖し、東南アジア、フィリピン、ボルネオで越冬する。日本には、迷鳥または旅鳥として 4 月頃から 9 月頃に渡来し、北海道から九州、琉球諸島まで各地で観察されている。

単独でいることが多く、入り江、干潟、河川、海岸近くの湿地や水田に生息し、魚類やエビ、シャコなどの甲殻類を捕食する。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(環境省：準絶滅危惧 全記録数 3 件 2002 年)

○観察記録

2002. 04. 18	多摩川(玉堤1)	1 羽	(4/26 まで滞在)

◆ トキ科 THRESKIORNITHIDAE

154. クロツラヘラサギ *Platalea minor* Black-faced Spoonbill

トキ科

中国東北地方、朝鮮半島で繁殖し、冬期にはベトナム、中国南部、台湾や日本南部、稀にフィリピンにも移動する。日本では越冬のため 9 月から翌年の 4 月頃まで少数が滞在する。主に四国、九州、沖縄などで見られるが、稀に北海道、本州にも飛来する。

干潟や河口、池、ワンド、水路などに生息し、魚類、甲殻類など頸部を左右に振りながら採食する。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 環境省：絶滅危惧 IB 全記録数 1 件 2018 年)

○観察記録

2018. 02. 19	多摩川(玉堤1)	1 羽	下流方向から飛来し、中州のワンド内で広くちばしを左右に振って採食

◆ クイナ科 RALLIDAE

166. クイナ *Rallus aquaticus* Water Rail

クイナ科

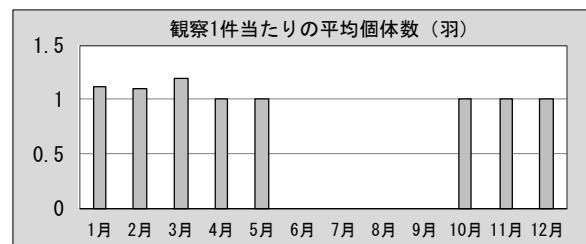
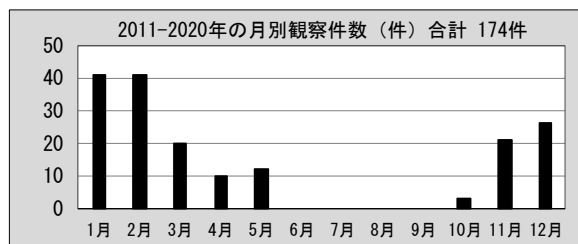
イギリスからユーラシア大陸の温帯、日本、ウスリー、サハリン、北アフリカなどで繁殖し、冬期、寒地のものは気候温暖な地域に南下する。日本では、北海道、本州北部に夏鳥として渡来し繁殖する。本州

中部では留鳥および冬鳥、それ以南の本州、四国、九州および琉球諸島では冬鳥である。関東地方では栃木県渡良瀬遊水地(1988 年)や茨城県神栖(1992 年)で繁殖した例がある。

淡水の湖沼、沼沢、河畔などの水辺の草地、ヨシ原、水田などで生活する。特にマコモやヨシの密生する湖沼畔、沼沢、河畔などに多い。繁殖は、淡水域のヨシやマコモが密生する湿地の草むらに枯れたヨシや草を用いて雌雄で皿形の巣をつくる。繁殖期以外は単独で生活する。魚類、甲殻類、両生類、軟体動物の腹足類、昆虫類を捕食し、イネ科やタデ科などの種子も食べる。

世田谷区では、10 月から 12 月に渡来し、翌年の 3 月から 5 月に渡去する。多摩川、野川、仙川で見られ、アメリカザリガニを捕食しているのが観察されている。冬枯れのヨシの密生地や水辺の藪などに潜みなかなか姿を見せない。また、人が近づくとすぐ草むらに隠れてしまうので姿を見るのが難しい鳥である。

(東京都区部：情報不足 全記録数 401 件 1956～2020 年)



○主な観察記録

1956. 06. 09	多摩川(玉堤)	1 羽	
1964. 11. 26	多摩川(玉堤)	1 羽	ヨシの中を歩いていた
1995. 02. 11	野川	2 羽	定例調査
1997. 12. 19	多摩川(鎌田 1)	1 羽	ザリガニを食べ、足は呑み込む
2003. 01. 20	野川	1 羽	流れの中、ゴミの溜まった所に潜む 喜多見大橋付近
2006. 11. 15	多摩川	1 羽	定例調査
2007. 04. 29	野川	1 羽	上野田橋下流 50m 水際で採餌し、すぐに芦のワンドに隠れる
2011. 12. 27	多摩川(野毛 2)	1 羽	上野毛排水樋管流れだしでアメリカザリガニを咥えて岸の水草の間に入る
2012. 03. 26	多摩川(玉堤 2)	1 羽	カルガモが近くに来るとアシの間に入る
2013. 01. 21	多摩川(玉堤 1)	1 羽	アシが茂る細い流れで採食していたが何かに驚きアシの間に入っていく
2014. 11. 04	多摩川(玉川 1)	1 羽	中州の草地から水溜まりに出てくる
2015. 02. 14	仙川(上祖師谷 2)	1 羽	仙川調査で初記録 みどり橋下流 50m 左岸直立護岸基盤湧水のあるところ
2016. 01. 22	野川(成城 4)	1 羽	ザリガニを捕食
2017. 11. 20	多摩川(玉川 1)	1 羽	二子橋下流 大きな水溜りの縁を急ぎ足で移動し姿を消す
2018. 02. 19	多摩川(野毛 2)	1 羽	草の茂る細い流れでミミズを食べる
2019. 02. 22	野川(成城 4)	3 羽	オオシマザクラを挟んで上下流の 3 羽が採食
2019. 05. 22	野川(成城 4)	1 羽	川辺で伸びをして、いよいよ渡去か
2020. 12. 01	多摩川(野毛 2)	1 羽	上野毛排水樋管合流地の水草間を歩く

170. ヒクイナ *Porzana fusca* Ruddy-breasted Crane

クイナ科

中国、朝鮮半島、日本、東南アジア、タイ、インドにかけて繁殖し、冬期北方の個体は南部に移動する。日本では、北海道から九州に夏鳥として渡来し繁殖する。伊豆諸島、対馬、琉球諸島では冬鳥である。

水田や水辺の草地、河川、湖沼などの草むらで生活する。繁殖は 5 月から 8 月、水辺のヨシ原などの湿地にイネ科のヨシ、スゲ類の茎や葉を用い、雌雄で皿形の巣をつくる。低木の低い枝につくこともある。1 巣卵数は 5～9 個。草むらの間をくぐり抜けながら採食する。食性は動物質では昆虫類、カエルなどの両生類、軟体動物など、植物質ではイネ科やタデ科の種子を採食する。水田や湿地の減少などによる生息環境の変化によって、姿を消しつつある種の一つである。

世田谷区では、以前は夏に渡来し多摩川で繁殖していたが、1965 年以降繁殖記録はない。2000、2014、2019 年にのみ観察されている。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 環境省：準絶滅危惧 全記録数 21 件 1957～2019 年)

2011 年以降 2 件)

○繁殖記録

1963. 06. 16	多摩川(野毛)	1 巢	6 卵 (7/1 2 羽だけ孵化)	ヨシの中の地上 30 cm に営巣	谷沢川先
1963. 06. 22	多摩川(野毛 1)	1 巢	6 個抱卵		
1963. 06. 29	多摩川	1 巢	繁殖		
1963. 08. 22	多摩川(野毛)	1 巢	卵	谷沢川先	
1964. 06. 20	多摩川(玉堤)	1 巢	4 卵 (6/28 9 卵 7/13 4 羽孵化 7/14 巣立ち)		

○主な観察記録

1957. 05. 30	砧	1 羽			
1958. 06. 15	多摩川(野毛)	1 羽	ヨシの中を歩いていた	赤岩	
1963. 08. 07	多摩川(玉堤)	1 羽	深い所を泳いでいた		
1965. 05. 25	多摩川(野毛)	1 羽	ヨシの中から飛び立つ		
1966. 05. 26	多摩川	1 羽			
1968. 06. 27	多摩川(野毛)	1 羽			
1969. 06. 01	多摩川	1 羽			
2000. 06. 22	多摩川(玉堤 1)	1 羽	早朝、川岸の入江で採餌		
2014. 07. 22	多摩川(玉堤 1)	1 羽	成鳥 大型犬が草の茂っている浅瀬に入ると急に飛立ち約 100m 下流の砂礫中州に降りる		
2019. 05. 27	多摩川(玉堤 2)	1 羽	夏羽 中州草地を出入り		

173. ツルクイナ *Gallicrex cinerea* Watercock

クイナ科

インド、インドシナ、マレー半島、フィリピン、中国東部など熱帯アジアに留鳥として分布する。日本では、佐賀県と石垣島で稀な繁殖の記録がある。北海道から琉球諸島まで広く記録があるが、いずれも不定期な渡来で大変稀である。

湖沼、河畔、湿原のヨシの草むら、水田などに生息する。警戒心が強く、昼間は水辺のヨシなどの草むらに潜みなかなか姿を見せないが、朝夕の薄暮時や雨天には水辺に出て盛んに活動する。驚いた時には体を低くして迅速に草むらに逃げ込む。イネ科や水草の芽、水生植物の種子などのほか、イナゴ、バッタなどの昆虫類、カタツムリなどの軟体類も捕食する。繁殖は、淡水域の湿性草原、沼地、水田などの草むらの地上にイグサなどを組み合わせた巣をつくる。

世田谷区では、保護された下記 1 例の記録がある。(全記録数 3 件 1966 年)

○観察記録

1966. 11. 16	野毛	1 羽	幼鳥保護を依頼される (11/17 写真を撮ろうとしたら逃げられる)

174. バン *Gallinula chloropus* Common Moorhen

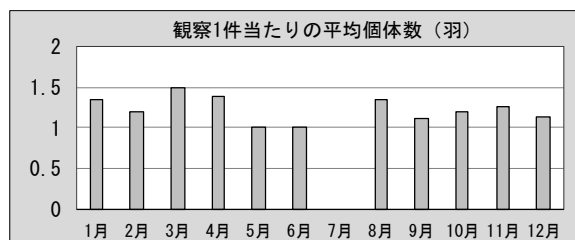
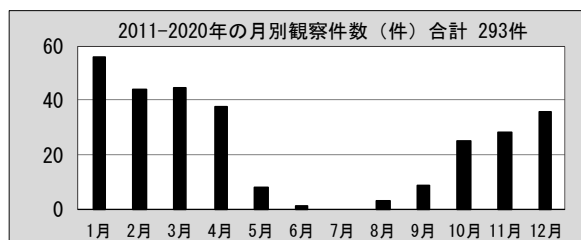
クイナ科

温帯から熱帯にかけてのユーラシア大陸、東南アジア、日本、北アメリカ中・南部、中部南アメリカに広く生息し繁殖する。日本では、北海道、本州北部に夏鳥として渡来し、本州中部以南から奄美諸島、琉球諸島、大東諸島では留鳥である。

湖沼、河川、沼沢、蓮田、水田などのヨシ原に生息する。繁殖期は 4 月から 8 月で、繁殖は淡水域のヨシ、マコモ、ガマなどの草むらや水田に枯れ草を積み、雌雄で皿形の巣をつくる。1 巣卵数は 5~9 個。一夫一妻の場合は雌雄交替で 21~22 日間抱卵する。一夫多妻の雌たちが一つの巣を利用して行う種内托卵が知られており、抱卵、育雛の子育てを托卵した雌も共同で行うことがある。また、ヨシゴイの巣にバンが托卵しているのも確認されている。先に生まれた幼鳥が子育てを手伝うヘルパー行動を行うこともある。岸や浅い水の中を歩いてタデ科やイネ科の種子、昆虫類、軟体動物などを採食する。危険を感じるとすぐに草の中に逃げ込む。

世田谷区では、以前は年中生息し、多摩川のヨシ原や水草の中で繁殖していたが、2004 年の記録を最後

に繁殖記録はない。2005 年以降、繁殖期の 5 月から 8 月に見られるのは稀になり 10 月から 4 月にかけて多くみられるようになった。多摩川、野川、仙川で多く観察されているが、高源院の弁天池でも観察されている。中州や池で若草や枯草を採食しているのが見られている。(東京都区部：絶滅危惧 IB 類 全記録数 1,531 件 1957～2020 年)



○主な繁殖記録

1967. 09. 28	多摩川(玉堤)	1 巣	成鳥 1 羽	巣立ち間もない雛 4 羽が小さな中州付近を泳いでいた
1969. 08. 20	多摩川(玉堤)	1 巣	雛 7 羽	成鳥 3 羽
1996. 07. 02	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雛 7 羽	雛に給餌
1997. 05. 12	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雛 3 羽	(5/15 雛 4 羽になる)
1997. 08. 20	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 2 羽	成鳥 2 羽
1998. 06. 16	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雛 2 羽	成鳥と一緒に泳いでいた
2004. 07. 16	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 5 羽	ヨシや水草に覆われた中州の入江で成鳥と移動

○主な観察記録

1957. 05. 04	多摩川(玉堤)	1 羽	ヨシの中から飛び立つ
1995. 08. 08	多摩川(鎌田 1)	5 羽	バンの池
2001. 04. 03	多摩川(鎌田 1)	1 羽	中州の若草を盛んに食べていた 手前の中州
2006. 11. 06	野川(成城 4)	2 羽	幼鳥
2007. 10. 11	野川(喜多見 7)	1 羽	幼鳥
2009. 11. 02	仙川(成城 9)	1 羽	観音堂付近
2012. 10. 02	野川(成城 4)	1 羽	川辺で休息
2013. 10. 18	高源院	1 羽	幼鳥 弁天池の周りの草を採食 弁天堂に人が来ると池に倒れかかった竹藪に飛び上り、静かになると池に飛び降りる
2015. 01. 18	仙川(上祖師谷 6)	2 羽	仙川の祖師谷中橋の上流約 10m の右岸で確認
2015. 03. 30	多摩川	3 羽	一組が川面に張り出したヤナギで交尾する
2016. 03. 21	多摩川(玉堤 2)	2 羽	対岸 岸辺を泳ぎながら草を採食
2017. 09. 28	仙川(成城 7)	2 羽	仙川の鞍橋下流のヒメガマの上で採食
2018. 02. 19	野川(喜多見 7)	1 羽	高水敷で採食
2019. 10. 28	多摩川(玉川 3)	2 羽	成鳥、若鳥が河畔林下の木屑間や水面を移動
2020. 10. 05	野川(喜多見 7)	1 羽	若鳥が川辺を採餌しながら移動

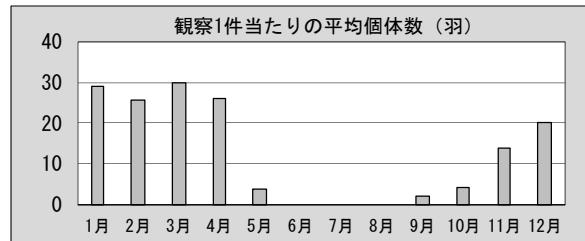
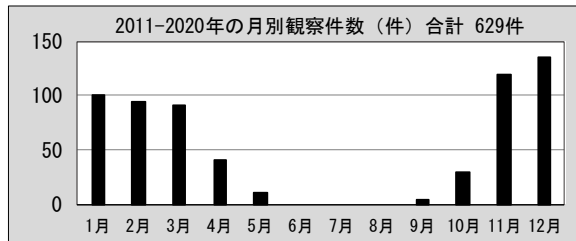
175. オオバン *Fulica atra* Eurasian Coot

クイナ科

ユーラシア大陸の温帯に広い繁殖地を持ち、北西アフリカ、インド、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランド、日本などでは 1 年を通して生息している。日本では、北海道に夏鳥として渡来し、本州及び九州の一部(福岡、大分)では留鳥である。隠岐、四国、伊豆諸島、小笠原諸島、奄美諸島、琉球諸島には冬鳥として渡来する。

平地の湖沼、蓮田、河川に生息する。バンよりも広々とした湖沼を好む。繁殖期にはつがいやヨシ、マコモなどの草むらで生活し、非繁殖期には広々とした湖面に群生する。繁殖は、水辺のヨシ原や草原の水面に雌雄で枯れ草を積み重ね皿形の巣をつくる。1 巣卵数は 6～10 個。雌雄交替で 21～25 日間抱卵する。年 2 回以上繁殖するため、先に生まれた若鳥が親の縄張りに留まり、育雛に参加することもある。頻繁に潜水して草の根や藻などの植物、昆虫類、小魚類、軟体動物などを採食する。また、川岸や中州に上がって草も食べる。オオバンは本来淡水の鳥であるが、近年、東京湾沿岸の海水域に進出して海草類を採餌している群れが観察されている。飛び立つ時は水をけて助走する。

世田谷区には、9月下旬から12月に飛来し、翌年3月から5月頃去る。多摩川全域で多数が観察され、野川でも見られる他、仙川でも少数が記録されている。河川の草地で草や種子を採食したり、潜水してアイノコイトモなどの水草を採食しているのが観察されている。(東京都区部：絶滅危惧IA類 全記録数 1,049件 1988～2020年)



○主な観察記録

1988. 11. 16	多摩川(玉堤)	2羽	
1999. 11. 15	多摩川(鎌田1)	1羽	パンの池及びその周辺
2002. 10. 31	仙川	1羽	
2004. 10. 23	多摩川(鎌田1)	1羽	パンの池
2007. 12. 17	野川(玉川3)	1羽	水面を移動しながら採餌
2009. 12. 20	多摩川(玉堤1)	18羽	
2013. 12. 04	野川(玉川3)	1羽	兵庫橋近くで盛んに潜水水草を採食
2014. 11. 28	多摩川(玉堤1)	98羽	58羽が右岸の法面に上がって草を食べる
2015. 11. 03	仙川	1羽	観音堂横に入る 水草のアイノコイトモを採食していた
2016. 02. 16	多摩川(玉川3)	107羽	1羽が瓢箪池でヒキガエルを捕る。
2017. 02. 15	多摩川(玉堤1)	165羽	大田区境中州付近110、中州脇3、等々力排水樋管19、ベンチ前33
2018. 02. 07	野川	41羽	定例調査
2019. 12. 28	多摩川	10羽	陸地や野川で採食移動
2020. 12. 18	祖師谷公園	3羽	水上を移動 (仙川)

◆ カッコウ科 CUCULIDAE

【 托卵する鳥 】

托卵性の種は自分で巣をつくらず他の種の鳥の巣に卵を産み込む。その後の抱卵や育雛は仮親(他種の親鳥)にいったい任せてしまう習性を持っている。仮親の卵を1個または2個抜き取ってから、自分の卵を巣の中に産み込む。ヒナは仮親の卵より早く孵化し、巣の中の卵やヒナを背中にある窪みにのせ巣の外に放り出し、その後は育雛といった仮親の世話のすべてを独占するようになる。産み込む卵も仮親の卵の色や斑に似ていることが多い。

カッコウ科の鳥は極地を除く全世界に分布し、大部分の種は熱帯、亜熱帯に生息する。托卵される種はカッコウ科の種ごとに概ね決まっている。カッコウ科の中で托卵という方法で繁殖するのはカッコウ科の中の種数にして約40%で、残りの約60%を占める非托卵性のカッコウ類は地上や樹上に巣をつくり、抱卵や育雛は雌雄が分担して行う。日本で繁殖しているジュウイチ、カッコウ、ツツドリ、ホトトギスは何れも托卵性である。

184. ジュウイチ *Hierococcyx hyperythrus* Rufous Hawk-Cuckoo

カッコウ科

アムール湾、ウスリー地方、中国東北部及び日本で繁殖し、中国東部、インドシナ半島で越冬する。日本では、北海道、本州、四国、九州に夏鳥として渡来し繁殖する。

日本のカッコウ科の中では最も標高の高い山地まで生息し、主にオオルリ、コルリ、ルリビタキ、コマドリ、キビタキ、クロツグミなどの巣に托卵する。単独またはつがいで行動し、樹上で昆虫類を捕らえる。渡りの時は平地でも見られ、夜間鳴きながら上空を通過することもある。繁殖期には「ジュウイチ、ジュ

ウイチ」と聞こえる声で鳴く。

世田谷区では下記3例の記録がある。(東京都区部：非分布 全記録数 3件 1974、1985、2016年)

○観察記録

1974. 10.	岡本静嘉堂周辺	3羽	
1985. 10. 01	岡本6	2羽	八幡神社裏のニセアカシアに幼鳥が止まっていた
2016. 05. 11	上野毛3	1羽	個人の屋敷林内から雄が現れるが、すぐ林内にはいる 暫くしてさえずる

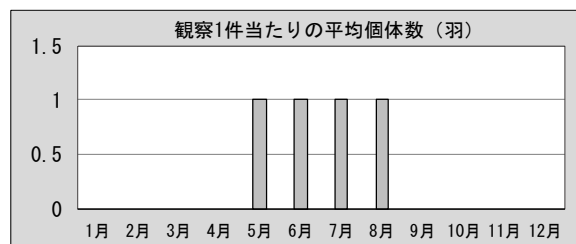
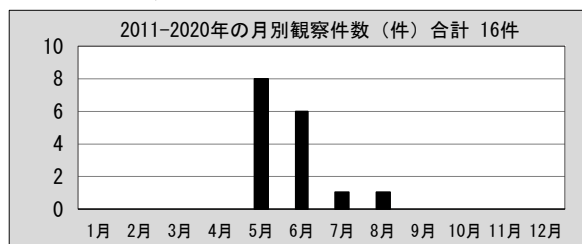
185. ホトトギス *Cuculus poliocephalus* Lesser Cuckoo

カッコウ科

ヒマラヤからウスリー、中国北部及び東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、インド、バングラデシュ、マレー半島で越冬する。

日本では、夏鳥として北海道南部、本州、佐渡、四国、九州、対馬、伊豆諸島、奄美諸島の一部に渡来し繁殖する。主な托卵相手がウグイスなので生息環境もウグイスと一致し、低地から山地のササ藪のある林に生息する。ウグイス以外の托卵相手としてはミソサザイ、クロツグミ、センダイムシクイ、アオジ、ベニマシコなどが挙げられる。繁殖初期には夜中じゅう鳴きながら飛び回る習性もある。雌には稀に赤色型の個体がいる。樹上で昆虫類を捕らえ、毛虫を多く食べる。

世田谷区では、春は5月から6月に立ち寄る。2010年以前は9月から10月にも立ち寄った記録がある。春に観察例が多い。砧公園、蘆花恒春園、多摩川、野川などで見られ、桜上水、深沢、喜多見、豪徳寺等の住宅地上空で夜や早朝に鳴きながら通過しているのが観察されている。(東京都区部：非分布 全記録数 71件 1949～2018年)



○主な観察記録

1949. 06. 02	野毛	1羽	22:00頃 自宅上空南方より東北に鳴きながら飛行
1953. 05. 09	等々力溪谷公園	1羽	雌の赤色型
1984. 05. 29	岡本静嘉堂周辺	1羽	木に止まっていた
1997. 05. 22	成城みつ池緑地	1羽	14時頃場所を変えて2回鳴く
2000. 08. 11	多摩川(玉堤1)	1羽	中州のヤナギに止まっている
2003. 06. 09	喜多見6	1羽	4:30 寝床で鳴声を聴く、1〜2声だったので飛びながらの声と思われる
2005. 05. 28	豪徳寺1	1羽	21:00頃、鳴き声(上空通過)
2007. 10. 16	蘆花恒春園	1羽	少し鳴く
2008. 09. 24	砧公園	1羽	
2010. 05. 08	砧公園	1羽	木止まり 飛翔
2010. 05. 21	次大夫堀公園	1羽	窓を開けたら次大夫堀公園(東側)から鳴声が聞こえてきた
2011. 06. 03	深沢3	1羽	19:38 1羽が住宅地上空を轉りながら通過
2013. 05. 14	桜上水3	1羽	22:50 自宅の上空を鳴きながら通過
2014. 05. 26	多摩川(玉堤1)	1羽	対岸から鳴きながら飛来し世田谷市街へ
2016. 05. 28	桜上水2	1羽	夜、自宅で鳴きながら遠ざかる声を聞く
2017. 08. 05	浄真寺	1羽	参道の棕の樹冠部で、「キョッ キョッ キョッ」と聞こえる声で鳴く
2018. 05. 20	上野毛自然公園	1羽	鳴き声
2018. 05. 24	等々力溪谷公園	1羽	鳴き声

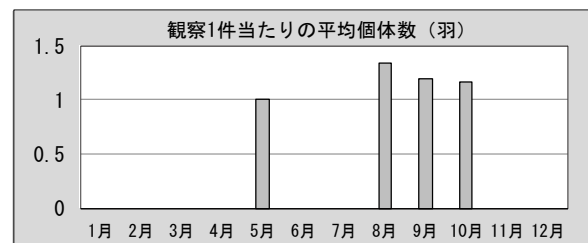
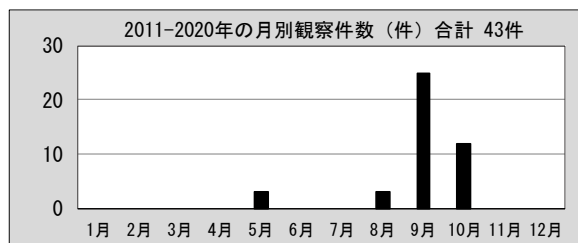
187. ツツドリ *Cuculus optatus* Oriental Cuckoo

カッコウ科

西シベリアからカムチャツカ、サハリン、オホーツク海沿岸から中国東北部、日本で繁殖し、冬期は中国南部、マレー半島、フィリピン、オーストラリア北部で越冬する。日本では、夏鳥として北海道、本州、佐渡、四国、九州に渡来し繁殖する。日本のカッコウ類の中では最も早く渡来する。

本州では、托卵相手は主にセンダイムシクイ、メボソムシクイなどのムシクイ類、アオジ、ビンズイ、メジロ、キクイタダキ、オオルリ、コルリに托卵するため低山帯の落葉広葉樹林や亜高山帯の針葉樹林に生息する。樹上で毛虫、甲虫などを捕食する。ムシクイ類が非常に小さな白い卵を産むため、それに合わせ白っぽい小さな卵を産む。一方、北海道のツツドリはウグイスに托卵するために、チョコレート色に似た卵を産む。秋の渡りの時は市街地の公園などでもよく観察される。繁殖期には竹筒を吹いたような低い「ポポッ、ポポッ」と聞こえる声で鳴く。稀に赤色型の個体がいる。

世田谷区では、春は5月、秋は8月から10月に立ち寄る。2000年以降は春より秋に観察されることが多い。砧公園、馬事公苑、蘆花恒春園などの公園や多摩川などで見られる。毛虫を捕食している観察例が多い。(東京都区部：非分布 全記録数 94件 1949～2019年)



○主な観察記録

1949. 05. 12	野毛	1羽	鳴き声を聞く 川向野毛(南の森)にて
1955. 05. 10	等々力溪谷公園	1羽	谷沢山で鳴く
1966. 10. 09	多摩川	1羽	(文献16)
2001. 10. 06	馬事公苑	1羽	馬道の木から出て自然林へ飛んで行く
2004. 10. 14	多摩川(玉川1)	1羽	世田谷側から飛来し川崎側へ
2007. 10. 07	多摩川	4羽	
2009. 08. 28	砧公園	2羽	毛虫を採食 (9/10 まで滞在)
2010. 10. 18	蘆花恒春園	1羽	南に飛び去る
2012. 09. 18	多摩川(玉堤1)	1羽	堤のサクラで枝移りしながら葉に付いている毛虫6匹を捕食
2013. 09. 20	野川(成城4)	1羽	オオシマザクラの木に止まった
2014. 10. 04	祖師谷公園	1羽	赤色型 仙川左岸沿いの桜に入った後2分程で飛び去った
2015. 09. 14	多摩川(野毛2)	2羽	幼鳥2羽が川岸のオニグルミに止まり1羽が毛虫を捕食
2015. 09. 15	蘆花恒春園	1羽	中庭にあるアカマツの横枝にいた 全体が灰色っぽく翼に比べ尾羽が長い 尾羽の先端に不明瞭な横帯が1本、尾羽の下面にも不明瞭な帯がある
2017. 05. 14	等々力溪谷公園	1羽	鳴き声.
2018. 09. 18	多摩川(野毛2)	1羽	赤色型 1羽が草地のオニグルミから東方向に飛び立つ
2019. 10. 02	砧公園	2羽	桜山で1羽 環八近くで1羽

188. カッコウ *Cuculus canorus* Common Cuckoo

カッコウ科

イギリスとユーラシア大陸の亜寒帯・温帯地域、日本で繁殖し、アフリカ南東部、南アジアで越冬する。日本では、夏鳥として北海道、本州、佐渡、四国、九州に渡来し繁殖する。それ以南では旅鳥。

日本のカッコウ科の中では最も開けた高原や高地の明るい林に生息する。北海道では川原、低木の生えた草原、農耕地の周辺でも見られる。日本で繁殖する托卵鳥の中で最も托卵対象の種が多く、ホオジロ類、モズ類、セキレイ類やオオヨシキリやコヨシキリに托卵するが、1970年頃からオナガに托卵する個体も観察されている。主として樹上で毛虫、甲虫などを食べる。1羽で生活することが多く、繁殖期には「カッコー、カッコー」と聞こえる声で鳴く。

世田谷区では、春は5月から6月頃鳴き声が聞かれ、秋は9月に立ち寄る。千歳台、祖師谷、上祖師谷などの住宅地や砧公園、多摩川などで観察されている。2011年以降2回しか観察されていない。(東京都区部：絶滅危惧IA類 全記録数 46件 1954～2017年 2011年以降 2件)

○主な観察記録

1954. 05. 17	野毛	1羽	早朝から正午まで鳴く
1957. 04. 26	等々力溪谷公園	1羽	滝の山で声を聞く
1960. 05. 19	経堂	1羽	
1969. 07. 01	砧	1羽	
1975. 05. 25	北鳥山	1羽	声を確認
1980. 07. 25	成城	1羽	
1987. 06. 09	岡本4	1羽	八幡神社の電線に止まって鳴く
1996. 10. 12	多摩川(玉川)	1羽	
2001. 05. 22	千歳台1	1羽	
2005. 06. 09	多摩川(玉堤1)	1羽	中州の河畔林で鳴く
2008. 05. 07	岡本静嘉堂周辺	1羽	
2008. 09. 16	砧公園	1羽	高枝で休息 (9/20までいた)
2010. 06. 10	多摩川(玉堤1)	1羽	中州のヤナギ群落で鳴く
2013. 06. 10	多摩川(玉堤1)	1羽	中州の5m位のヤナギの頂上で鳴く
2017. 06. 06	豪徳寺	1羽	北側の林縁方向から鳴き声が聞こえてくる。しばらく鳴いていたが、確認に向かったら鳴きやむ

◆ ヨタカ科 CAPRIMULGIDAE

189. ヨタカ *Caprimulgus indicus* Jungle Nightjar

ヨタカ科

インド、東南アジア、ロシア極東南部、朝鮮半島、日本、中国東部、マレー半島に分布し、北方のものは冬にアジアの熱帯地域に移動する。日本では、北海道、本州、佐渡、四国、九州に夏鳥として渡来し、繁殖する。

本州中部では標高 500～1,500m 位に多いが、東北地方では低山帯、北海道では平地から山麓部に多い。草原や灌木が散在する落葉広葉樹林や針葉樹林の明るい林に生息する。繁殖期は5～8月。主に林縁の地上に、胴体が入る程度の浅い窪みをつくり、そこに直接産卵し巣材は使用しない。1卵卵数は通常2個、抱卵後約19日で孵化する。孵化後4～5日間、親鳥は巣から離れない。敵が接近すると擬傷行動をして、敵の注意を巣からそらし卵や雛を守ろうとする。大きな口を開き羽音をたてずに飛びながらガ、ゴミムシ、ゲンゴロウ、カワトビゲラ、カメムシなどの昆虫を空中捕食する。日没前後から数時間、最も活発に捕食行動をする。日中は木の枝に平行に腹を密着させるようにして止まって休息する。繁殖期以外は1羽で生活する個体が多い。

世田谷区には、稀に春と秋に立ち寄る。1944年から時々観察されていたが、1990年以降極めて稀になり、2007年成城みつ池緑地と2009年次大夫堀公園の2例の記録しかない。2009年には繁殖期に記録された。(東京都区部：絶滅 環境省：準絶滅危惧 全記録数 12件 1944～2009年)

○観察記録

1944. 05.	奥沢	1羽	日時は不明
1948. 10. 16	野毛	1羽	
1949. 09. 28	野毛	2羽	夕方、自宅上空を通過
1950. 06. 06	等々力	1羽	檜村にて目撃
1953. 09. 02	野毛	1羽	自宅上空を飛ぶ
1955. 07.	野毛2	1羽	日にちは不明 鳴きながら上空を飛んでいた
1975. 09. 25	馬事公苑	1羽	林の中で休んでいたのにヒヨドリに追われ逃げ出す
1976. 05. 05	船橋4	1羽	
1990. 11. 12	区内	1羽	放鳥
2007. 11. 08	成城みつ池緑地	1羽	落鳥(羽毛が散乱していた(11/22 初列風切2枚発見))

2007. 12. 01 成城みつ池緑地 1羽
2009. 07. 13 次大夫堀公園 1羽 木の枝で休息

◆ アマツバメ科 APODIDAE

191. ハリオアマツバメ *Hirundapus caudacutus* White-throated Needletailed Swift アマツバメ科

ヒマラヤから中国南部、ウスリー、朝鮮半島、日本、千島で繁殖し、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。日本では、夏鳥として北海道及び本州中部以北で局地的に繁殖する。

北海道では平地にも生息するが、本州では低山帯から高山帯を主とする山岳地帯に生息する。空中生活に適応し、採食、巣材運び、水飲み、水浴び、交尾までも地上に降りることなく行い、短時間の睡眠を繰り返しながら長期間空中で行動できる。繁殖期は5～9月、山地の断崖の亀裂の中や森林の高木の樹洞の中に椀形の巣を造る。1巣卵数は4～7個。雌雄交替で17～21日間抱卵する。小群をつくって飛翔し、上昇気流に吹き上げられたスズメバチ、甲虫、ガガンボ、イトアメンボなどの昆虫や羽化した水生昆虫を食べる。天候が悪化すると低空域に集中する。渡りの時は、平地、山間の稲田や湖面などを細い鎌のような翼で低く飛ぶこともある。飛翔はアマツバメよりさらに速く、全鳥類のなかで最速の飛行速度をもつといわれている。

世田谷区では、秋に観察された下記5例の記録がある。(全記録数5件 1961～2018年)

○観察記録

1961. 10. 06	多摩川(野毛)	35羽	赤岩の上空を飛翔
1975. 09. 18	船橋4	10羽	上空通過
1978. 09. 21	岡本	1羽	
2004. 10. 02	多摩川(鎌田1)	2羽	ヒメアマツバメ約80羽、アマツバメ約25羽とグランドの低空から高空を飛翔
2018. 09. 18	多摩川(鎌田1)	1羽	グランド上空を低空から高空を繰り返し飛翔

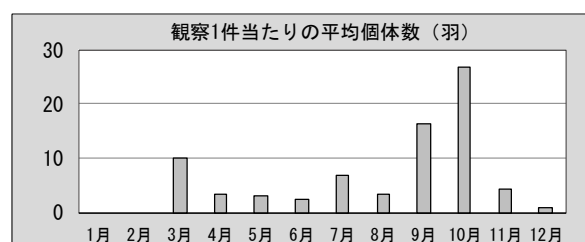
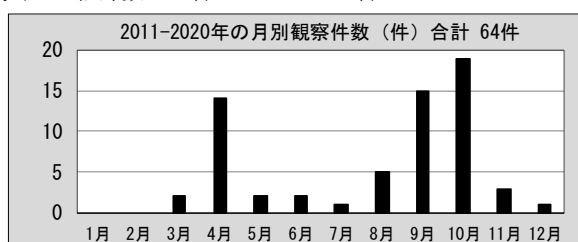
192. アマツバメ *Apus pacificus* Pacific Swift

アマツバメ科

シベリアからオホーツク海沿岸、カムチャツカ半島、中国、日本、ベトナム南部、タイ北部、台湾などで繁殖し、インド南部、中国中部、東南アジアからオーストラリアで越冬する。日本では、夏鳥として北海道から九州にかけて局地的に繁殖する。それ以南では旅鳥。

本州中部では2,300～3,100m位の高山帯に生息し、採食時は標高500m位の山麓にも飛来する。高山や滝壺の岸壁、火口壁や海岸の岸壁の亀裂や隙間に集団営巣する。巣は植物の根、茎、葉を材料に粘性のある唾液を用いて椀形の巣を造る。繁殖期は6～7月で1巣卵数は2～3個。ヒメアマツバメと同じく空中生活に適応し、採食、巣材集め、水飲み、水浴び、交尾までも地上に降りることなく行う。短時間の睡眠を繰り返しながら長期間空中で行動できる。多くは群れをつくって飛翔し、大きな口を開けてハナアブ、ガガンボ、ハエ、カなど空中に漂う昆虫を捕食する。飛行速度が速く、洋鎌形の翼を伸ばし身近を飛ぶと風を切る羽音がする。秋の渡りの頃は高空を群れて飛ぶ姿を各地で見ることができる。

世田谷区では、4月頃から10月頃に立ち寄るが、11、12月に見られた例もある。多摩川で多く見られるが、野川や砧公園、駒沢オリンピック公園、池尻、桜上水など河川や公園、住宅地でも見られている。秋に観察例が多く、ヒメアマツバメ、ツバメなどと混群で飛翔しているのが観察されている。(東京都区部：非分布 全記録数265件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 07. 02	野毛	5羽	おなけ畑にて北東に飛行
1952. 10. 05	多摩川(野毛)	200羽	渡し場
1961. 10. 06	用賀	20羽	
1976. 10. 04	馬事公苑	30羽	上空
1997. 09. 30	多摩川	120羽	
2001. 08. 07	下馬 4	1羽	東方へ飛び去る
2004. 11. 14	野川	2羽	
2005. 05. 01	多摩川(玉堤 2)	4羽	4羽が水面をヒメアマツバメ、ツバメ約 40羽と飛び交う
2008. 10. 05	多摩川(鎌田 1)	50羽	群で上空通過
2010. 09. 21	多摩川	53羽	
2014. 10. 12	多摩川(鎌田 1)	12羽	芝地グラウンドや草原上空 3~10mを採食飛行
2015. 10. 13	多摩川(鎌田 1)	69羽	草原や芝地グラウンドの低空から高空で飛行採食
2016. 03. 29	多摩川	2羽	
2017. 10. 24	砧公園	1羽	
2017. 04. 02	多摩川(玉堤 1)	5羽	船着き場付近上空 ヒメアマツバメに混じって採餌飛行
2018. 10. 03	多摩川(鎌田 1)	12羽	草原を低空で飛行を繰り返す
2020. 09. 21	多摩川(玉堤 1)	8羽	グラウンドの水溜まりを低空で繰り返し飛行

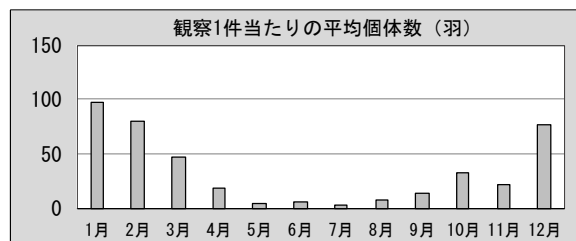
193. ヒメアマツバメ *Apus nipalensis* House Swift

アマツバメ科

アフリカ、インド、ヒマラヤ、東南アジア、中国中部・南部、日本、台湾に分布する。日本では 1964 年頃から種子島、鎌倉、高知で観察されるようになり、1967 年 8 月に静岡市で初めて繁殖が確認された。現在は、本州、四国、九州、奄美大島で留鳥として繁殖している。

主に平野部の市街地やその周辺の丘陵部に生息する。市街地の建物や橋の下部などに 4 月中旬から 12 月頃まで集団営巣する。羽毛や植物の葉、茎などを唾液で張り合わせて半球状の巣を造る。また、コシアカツバメの古巣を利用することもある。1 巣卵数は 2~4 個。空中生活に適応し、採食、巣材集め、水飲み、水浴び、交尾までも地上に降りることなく行う。短時間の睡眠を繰り返しながら長期間空中で行動できる。捕食は上空を飛び回りながら上昇気流に吹き上げられたカ、ハエ、ハアリなどの昆虫を捕る。

世田谷区では 1981 年に初めて観察され、その後は一年中観察されるようになった。冬に多く見られ、多摩川や野川、その他区内全域で見られる。群れで上空を採食飛行するのが観察されている。区内の繁殖記録は 2001、2007、2017、2019 年の 4 例しかないが、2005 年頃まで多摩川右岸川崎市(中原区)の工場の軒で多数が繁殖していたので、繁殖期は多摩川で飛行している姿が多くみられた。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 2,519 件 1981~2020 年)



○繁殖記録

2001. 09. 05	野川(大蔵 6)	集合巣	定例調査 東名高速道橋桁下面
2007. 05. 11	野川(大蔵 6)	集合巣	東名高速道橋桁下面
2017. 07. 24	野川	1 巣	イワツバメの巣に営巣
2019. 07. 02	多摩川(鎌田 1)	1 巣	親鳥が幼鳥に 2 度グラウンド上空で給餌する

○主な観察記録

1981. 09. 23	等々力溪谷公園	20羽	
1992. 04. 22	岡本 7	5羽	八幡神社付近
1994. 12. 24	池尻 3	10羽	

2000. 06. 17	野川	39 羽	定例調査
2001. 01. 16	岡本静嘉堂周辺	30 羽	民家園の上空を旋回
2003. 07. 02	砧公園	2 羽	定例調査
2005. 04. 27	多摩川	34 羽	定例調査
2007. 06. 12	蘆花恒春園	10 羽	上空を飛行
2008. 09. 14	多摩川(鎌田 1)	60 羽	上空を採餌飛行
2009. 12. 14	駒沢オリンピック公園	14 羽	
2010. 02. 03	多摩川	130 羽	
2015. 01. 03	多摩川(鎌田 1)	160 羽	河川敷上空を飛びまわる
2016. 01. 31	多摩川(鎌田 1)	220 羽	新二子橋上空採餌飛翔
2017. 03. 08	多摩川	90 羽	平瀬川合流地点付近上空を群舞し上昇気流にのった羽虫を採食
2018. 02. 19	多摩川(鎌田 1)	86 羽	約 80 羽がグランド飛翔時に 1 羽がタヒバリ 6 羽に威嚇され約 20m 高空まで追われる
2019. 12. 21	多摩川	75 羽	定例調査
2020. 09. 10	成城みつ池緑地	1 羽	

◆ チドリ科 CHARADRIIDAE

194. タゲリ *Vanellus vanellus* Northern Lapwing

チドリ科

ユーラシア大陸西部・中部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ北部、中国南部、日本で越冬する。日本には、冬鳥として本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島などに渡来する。渡来地はほとんど一定している。山形県、新潟県、茨城県、石川県、福井県で繁殖した例がある。

水田、乾田、湿地、川原の砂礫地、草地や畑など広々とした場所に生息する。両脚を交互にして地上を静かに歩いて餌を採ることが多い。飛び立つ時には翼をゆったりと羽ばたき、特徴のある飛び方で舞い上がる。繁殖期は 3 月から 6 月。芝地、草地などに営巣し、巣は地面に窪みをつくり、産座には藓類や枯れ草、水草の茎を敷くものが多い。繁殖期には擬傷することがある。動物質のオサムシ、ヒメクロバエやトビケラの幼虫、ミミズ、ナメクジなどを捕食する。

世田谷区では、11 月頃から翌年 2 月頃に観察されている。渡来初期の 11 月に観察例が多い。2000 年秋には 133 羽が観察された。多摩川の川原やグランドの芝生、上空などで見られるが記録は単発的である。(全記録数 78 件 1995～2020 年)



○主な観察記録

1995. 11. 29	多摩川	1 羽	川原の中州に降りていた
1998. 01. 22	多摩川	1 羽	残雪の芝生野球場 (1/21 も観察された)
2000. 10. 27	多摩川(鎌田 1)	133 羽	上流から飛来しグランドの芝生に降りる
2003. 10. 25	多摩川(玉堤 1)	17 羽	群れが上流から飛来し下流へ
2005. 02. 24	多摩川(上野毛 2)	3 羽	中州に暫らくして下流方向へ飛び去る
2008. 10. 28	多摩川	8 羽	
2011. 11. 08	多摩川	9 羽	2 羽が上流から飛来し下流へ、玉堤 1 で 3 羽が上流から飛来し下流へ、上野毛 2 で 4 羽が中州で休息
2012. 11. 16	多摩川(鎌田 1)	1 羽	多摩川(鎌田 1)
2013. 12. 17	多摩川(野毛 2)	3 羽	中州で休息
2015. 11. 16	多摩川(鎌田 1)	2 羽	寄州で休息

2016. 11. 07	多摩川(野毛 2)	1 羽	玉川排水樋管上流 300m 中州 採食
2017. 01. 23	多摩川(玉堤 1)	2 羽	小さな中州で休息
2018. 02. 05	多摩川(鎌田 1)	1 羽	中州を時々歩く
2019. 11. 04	多摩川(玉堤 1)	2 羽	中州で休息
2020. 01. 06	多摩川(玉堤 1)	2 羽	中州砂礫地で休息

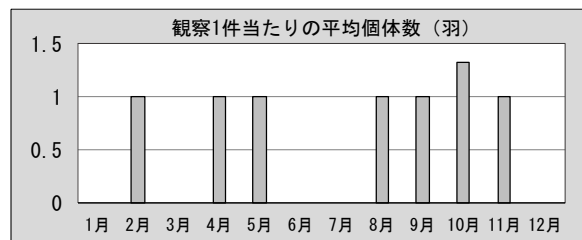
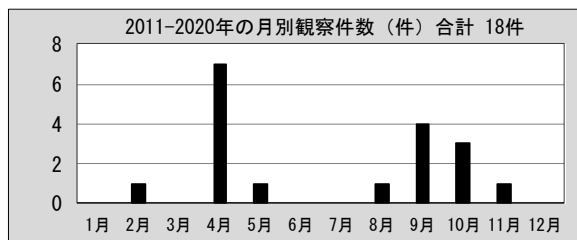
195. ケリ *Vanellus cinereus* Grey-headed Lapwing

チドリ科

中国東北部、日本で繁殖し、中国、東南アジア、インドで越冬する。日本では、東北で夏鳥、本州中部・南西部、九州では留鳥である。本州中部以南では冬鳥として越冬する個体もいる。繁殖地は東海から近畿地方に多く、関東、北陸、東北地方は局地的である。

巣は地上に窪みをつくり、産座に苔や枯れ草、細茎などを敷く。繁殖期は3月から6月である。雌雄で縄張りを持ち、他の雌雄を近寄せない。非常に警戒心が強く、人、犬、カラス類、タカ類などが巣に近づくと激しく鳴き、付近にいるケリが多数集まって飛翔攻撃をする。また、雄は擬傷行動を行うことがある。広々とした芝原、草原、川原の砂地や水田、畑に生息し、地上を歩いたり走ったりして採食する。主として昆虫、カエル、ミミズ、イネ科やタデ科などの草の種子などをついばむ。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は8月から11月に立ち寄るが、稀に冬にも見られる。多摩川の中州で採食や羽繕いなどが観察されている。(東京都区部:非分布 環境省:情報不足 全記録数 40 件 1997～2019 年)



○主な観察記録

1997. 10. 21	多摩川(鎌田 1)	1 羽	幼鳥 1 羽が平瀬川合流付近の中州で羽繕いをしたあと採食をする。
1999. 11. 17	多摩川	1 羽	
2003. 04. 07	多摩川(上野毛 2)	1 羽	下流より飛んできて中州に降りしゃがみこんでしばらく休息
2006. 09. 15	多摩川(玉堤 2)	1 羽	幼鳥、中州の岸で時々羽繕い
2009. 04. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	成鳥が中州縁を移動しながら採食 (4/3～22 迄観察された)
2010. 10. 01	多摩川(玉堤 1)	1 羽	
2011. 05. 16	多摩川(野毛 2)	1 羽	中州縁で休息していたがイカルチドリに追われ下流へ
2012. 09. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	幼鳥
2013. 09. 02	多摩川(野毛 3)	1 羽	中州の縁を歩いていた
2014. 04. 16	多摩川(鎌田 1)	1 羽	新二子橋下中州をしゃがんだり、歩いたりしていた
2016. 04. 25	多摩川(野毛 2)	1 羽	成鳥が川岸で採食。
2017. 10. 17	多摩川(玉堤 1)	1 羽	幼鳥がグランド水溜まりで採食
2018. 04. 10	多摩川(玉堤 2)	1 羽	上流から飛来し中州に降りる
2019. 04. 15	多摩川(玉堤 1)	1 羽	浅瀬を歩く

197. ムナグロ *Pluvialis fulva* Pacific Golden Plover

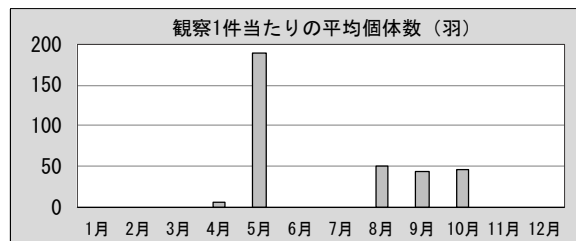
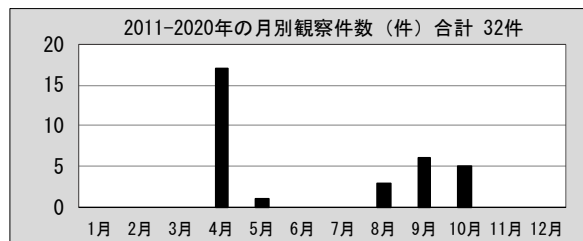
チドリ科

シベリア、アラスカ西部で繁殖し、インド、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドで越冬する。日本へは、主に旅鳥として渡来するが、小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島では越冬する個体もいる。

主として水田、畑、河川、草原、牧場や芝原などに生息し、時には海湾の干潟や河口の三角州にも生息する。地上で活発に活動し、時には素早く走るが、時折立ち止まってピョコリと身体を上下に振る習性がある。

ある。群飛する時にはV字形に並ぶのが常である。地上の窪みに巣をつくり、産座には蘚苔類、地衣類を敷く。産卵期は6月から7月頃である。主としてコガネムシ、ハサミムシ、カメムシ、イナゴ、エンマコオロギ、ミミズ、クモなどの動物質を採り、植物質ではニワヤナギ、カヤツリグサの種子などを採食する。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は8月から10月に立ち寄る。毎年多摩川で見られ、川原やグラウンドの芝生で観察される。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 403 件 1950～2020 年)



○主な観察記録

1950. 09. 08	多摩川	6羽	多摩川(スミガシ)にて目撃する
1959. 10. 19	多摩川(野毛)	200羽	渡し場
1981. 11. 03	多摩川	15羽	二子玉川
2006. 04. 17	多摩川(鎌田 1)	14羽	野球場芝生上で長時間採餌と休息
2007. 10. 10	多摩川(鎌田 1)	26羽	オギの海調査 草地上空を飛翔
2011. 04. 25	多摩川(鎌田 1)	2羽	グラウンドの草地で休息
2012. 04. 17	多摩川(鎌田 1)	10羽	浅瀬 5(夏羽 1, 夏羽換羽中 3, 冬羽 1)、グラウンド 5羽(夏羽 1 冬羽 4)休息、採餌
2013. 04. 24	多摩川(鎌田 1)	8羽	新二子橋上流芝生グラウンドで採餌
2013. 09. 17	多摩川	1羽	
2014. 04. 14	多摩川	2羽	
2015. 04. 12	多摩川	3羽	
2017. 04. 10	多摩川(野毛 2)	2羽	冬羽 浅瀬で採食
2018. 10. 22	多摩川(玉川 1)	1羽	中州砂礫地で休息
2019. 04. 29	多摩川(玉堤 1)	3羽	夏羽 3羽が小さな中州の草陰で休息
2020. 09. 21	多摩川(鎌田 1)	1羽	グラウンドで休息

199. ダイゼン *Phuvialis squatarola* Grey Plover

チドリ科

ユーラシア北部、北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアの海岸で越冬する。日本には旅鳥として、北海道、本州、四国、九州、奄美諸島に渡来する。本州の中部以南や九州、小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島では越冬するものもいる。

海岸の砂浜、干潟、河口域、干拓地、海岸近くの草原などに生息し、内陸の河川では稀である。干潟に降りて餌をあさったり、防波堤で休んだりする。休憩時には、くちばしを羽の間に入れ、片脚で立って眠る。干潮の時には砂地や泥地で活発に活動する。群飛する時には横列やV字形に並ぶことが多い。主として動物質の小エビ、小ガニ、トビムシ、ミミズや昆虫類、植物の実も採食する。

世田谷区では、下記3例の記録がある。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 3 件 1948、1997、2018 年)

○観察記録

1948. 10. 12	多摩川(玉堤)	1羽	等々力
1997. 04. 28	多摩川(玉堤 1)	6羽	下流から飛来し中州に降りる
2018. 04. 16	多摩川(玉堤 1)	4羽	夏羽、中間羽が中州で休息

200. ハジロコチドリ *Charadrius hiaticula* Ringed Plover

チドリ科

グリーンランド、ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ、西アジアで越冬する。日本では、稀な旅鳥として少数が渡来する。

海岸の砂浜や河口の三角州、海湾の干潟に生息する。地上では両脚を交互にして忙しげに走り歩き、ジグザグ形に歩行することが多い。立ち止まった時に体を上下に振り動かす。産卵期は5月から7月頃である。マグソコガネなどの昆虫類、トビムシ、小貝類などを食べる。

世田谷区では稀に渡来した2例の記録がある。(全記録数 2件 1956年)

○観察記録

1956. 12. 03 多摩川(鎌田 1) 1羽 兵庫島上流の川の中の島に居た 鳴声はムナグロの声の澄んだように聞こえた
1956. 12. 13 多摩川 1羽

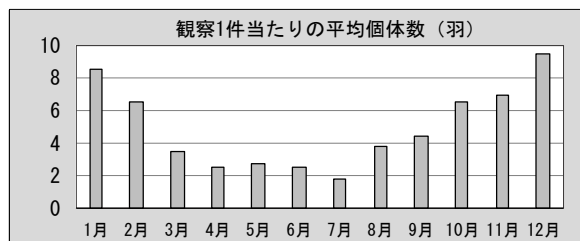
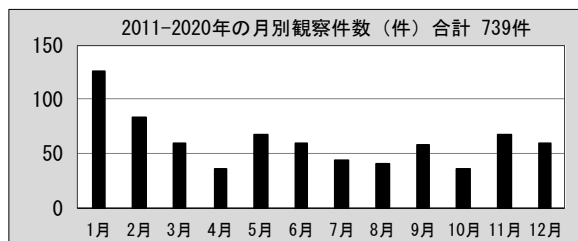
202. イカルチドリ *Charadrius placidus* Long-billed Plover

チドリ科

アムール湾、ウスリー地方や中国南部を経て、朝鮮半島、日本などで繁殖し、中国南部、北インド、東南アジアで越冬する。日本では北海道で夏鳥、本州、四国、九州、伊豆諸島では留鳥、琉球諸島では冬鳥である。

川原の砂礫地や草地、湖沼の砂地や田んぼなど、主として河川の中流や上流に生息する。繁殖期は雌雄で生活し、産卵期は3月から7月、巣は砂礫地や砂地に窪みをつくり、産座には小石、枯れ草、貝殻の小破片などを少量敷く。また繁殖期には擬傷行動を行う。1巣の卵数は3~4個で、ほとんどは4個である。孵化したヒナは早成性の離巢性で、孵化するとすぐに歩くようになり、親に連れられて巣を離れる。両脚を交互にして歩くが、コチドリほど忙しげに動き回らず、時おり立ち止まっては体をピョコリと上下に振り動かす。くちばしを突き出して、主として甲虫、ユスリカなどの昆虫を捕食する。

世田谷区では、多摩川、野川、仙川で見られるが、個体数は多摩川が多い。2008年に河川から遠く離れた桜上水の大学グラウンドの水たまりで採食していた記録がある。冬に個体数が多くなる。数組が4月から6月にかけて多摩川の中州砂礫地でほぼ毎年繁殖している。コアジサシのコロニーで繁殖した例もある。(東京都区部：絶滅危惧IB類 全記録数 3,809件 1919~2020年)



○主な繁殖記録

1950. 05. 07	多摩川(鎌田)	1 巣	わかもと工場下河原にて卵を見る
1959. 04. 11	多摩川(野毛)	1 巣	4 卵 2 卵にヒビが入っている (4/12 卵が壊されていた) 渡し場
2007. 05. 29	多摩川(鎌田 2)	1 巣	コアジサシコロニーで抱卵、雛 2 羽が中州を歩き回る
2009. 05. 27	多摩川(野毛 2)	1 巣	中州の砂礫地で成鳥 2 羽、雛 1 羽
2010. 06. 01	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立雛 3 羽は大きな中州を移動し、成鳥 1 羽は少し離れた所で雛を見ている
2012. 04. 24	多摩川(野毛 2)	1 巣	成鳥 2、雛 1 羽 成鳥 1 羽が中州の高台から歩いてきて水浴びをする その後高台に戻って孵った雛に覆いかぶさるように羽を広げて陰を作る
2013. 05. 05	多摩川(玉堤 1)	1 巣	中州砂礫地で抱卵中、地面すれすれに飛翔したツバメを威嚇する
2015. 04. 27	多摩川	1 巣	親鳥が川岸から巣に戻ると雛 2 羽が嘴を開ける
2016. 05. 02	多摩川	2 巣	成鳥 2 羽、雛 2 羽。雛 2 羽が中州砂礫地を岸の方へ走る。成鳥 2 羽は雛の約 2m 後方、玉堤 1. 成鳥 2 羽、雛 2 羽。中州縁 野毛 2.
2017. 04. 24	多摩川(玉堤 1)	1 巣	成鳥 2 羽、雛 2 羽。雛が中洲の草地から砂礫地に出てくる
2018. 04. 23	多摩川(野毛 2)	1 巣	成鳥 1 羽、雛 4 羽 孵化 3~5 日の雛 4 羽が親鳥から離れて川岸に走る
2019. 05. 07	多摩川(鎌田 1)	1 巣	成鳥 2 羽、雛 2 羽 雛 2 羽は川岸を歩いたり走ったりする
2020. 04. 06	多摩川(鎌田 1)	1 巣	成鳥 2 羽、雛 4 羽 雛 4 羽が平瀬川合流地近くの中州砂礫地で親の腹を出入りする

○主な観察記録

1919. 04. 07	多摩川	1 羽	二子多摩川原
1954. 09. 09	多摩川	40 羽	赤岸上流の川原
1998. 01. 30	多摩川	26 羽	
2003. 08. 19	多摩川	37 羽	21 羽と 16 羽の群れ
2004. 12. 24	多摩川	84 羽	
2008. 04. 08	桜上水 3	2 羽	雨の中、日大陸上グラウンドにできた水たまりに降りて採食、(3/31 も 1 羽が観察される)
2010. 02. 10	多摩川	47 羽	
2011. 01. 10	野川(喜多見 6)	1 羽	川辺で採餌
2012. 01. 19	多摩川(玉堤 1)	18 羽	区境 11、中州・浅瀬 7
2013. 08. 13	多摩川(野毛 2)	16 羽	中州で採餌
2014. 02. 10	野川(喜多見 6)	2 羽	雪の中、川辺で採食
2015. 07. 28	多摩川(玉堤 1)	5 羽	大田区境中州 1 群 水浴・羽づくろい
2016. 04. 08	多摩川	2 羽	等々力排水樋管付近中州上空を 2 羽で鳴きながら飛翔
2017. 01. 14	野川(喜多見 7)	2 羽	川辺でミミズを捕食
2018. 05. 16	多摩川	11 羽	定例調査 鳴き交わし飛び回る
2019. 11. 13	多摩川	22 羽	中州水際ほかで休息
2020. 11. 10	仙川	1 羽	

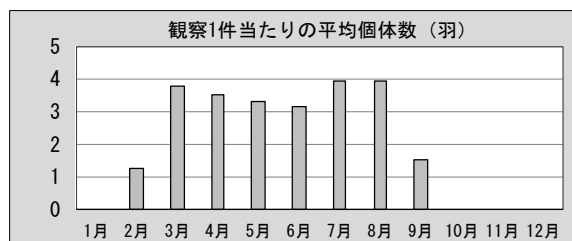
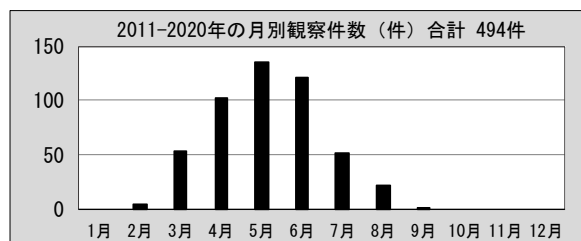
203. コチドリ *Charadrius dubius* Little Ringed Plover

チドリ科

スウェーデン、フィンランドから地中海沿岸までのユーラシア大陸、東南アジア、ニューギニア、日本などで繁殖し、冬は南下し温暖・熱帯地域に移動する。日本では、北海道、本州、四国、九州などに夏鳥として渡来し、繁殖する。本州南西部、四国、琉球諸島で少数が越冬する。

繁殖期は雌雄で生活し、それ以外では小群でいる。他のチドリ類と同様にジグザグ型に歩き、体を上下に振り動かす。繁殖期にカラスなどの外敵が近くに来ると巣から離れて、自分の方に注目させるため、両翼を左右に広げ、地面を引きずり歩いて傷ついたような擬傷行動をする。産卵期は 4 月から 7 月で、巣は砂地に雌雄で浅い窪みをつくり、産座には小石、枯れ草、貝殻の破片などを敷く。1 巣の卵数は 3~5 個で 4 個が多い。抱卵して 23 日前後で孵化する。ヒナは早成性の離巢性である。河原の砂礫地や海岸の波打ち際の砂地で、ゴカイ、貝類、カニ類などを食べる。

世田谷区では、3 月頃に渡来し、8 月から 9 月頃に渡去する。多摩川、野川、仙川で見られ、多摩川では個体数が多い。個体数は 2002 年をピークに減少している。繁殖は 1949 年から 1970 年頃までは毎年見られていた。その後記録は無く途切れるが、1996 年頃からはほぼ毎年観察されている。多摩川では単独またはコアジサシやイカルチドリなどと同じ中州砂礫地で営巣する。野川では 2013 年から中州や隣接する遊歩道脇の空地で繁殖が観察されている。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 全記録数 2,345 件 1946~2020 年)



○主な繁殖記録

1949. 05. 29	多摩川(鎌田 1)	1 巣	5 卵 わかもと工場下河原
1957. 05. 05	多摩川(野毛)	2 巣	4 卵、2 卵 5/9 4 卵は人に捕られ、2 卵は抱卵中止 渡し場
1970. 04. 21	多摩川(鎌田)	1 巣	2 卵 二子橋上流
1996. 06. 03	多摩川	1 巣	
1997. 07. 22	多摩川	1 巣	雛 3 羽 (7/31 も確認出来た)

2000. 05. 30	多摩川(玉堤 2)	1 巢	雛 1 が川岸で採餌。親が雛に近づいたイソシギを威嚇する
2001. 05. 25	多摩川(上野毛 2)	1 巢	雛 3 羽が中州の岸を走る
2007. 05. 01	多摩川(鎌田)	1 巢	コアジサシ調査 抱卵と雛 1 羽
2012. 06. 04	多摩川	1 巢	1 羽が低い中州が広がる砂礫地で抱卵 雄が抱卵している雌に近づいたイカルチドリ 1 羽を追いかける コアジサシのコロニー
2013. 05. 29	野川(喜多見 6)	1 巢	親が交代で抱卵、卵 4 個になっていた
2014. 06. 03	多摩川(玉堤 1)	1 巢	孵化後 7 日位の雛 2 羽が中州の縁を走る 近くに成鳥が雛に近づいたイソシギ 1 羽を威嚇する
2015. 06. 19	野川(喜多見 7)	1 巢	雛 4 羽誕生
2018. 05. 21	多摩川(玉堤 2)	1 巢	中州で水浴びしたあと砂礫地中央にきて巣に座るときに卵が 3 個
2019. 05. 08	野川(成城 4)	1 巢	親が見守っている中、雛 1 羽が水辺迄きて採食
2020. 07. 05	多摩川(玉堤 1)	1 巢	1 羽がグランドの水溜まりで水浴びした後砂地に行き抱卵 7/13 親鳥がグランド水溜まり近くでミズを捕り水に浸けると近くにいる雛が寄ってきて食べる

○主な観察記録

1946. 07. 20	多摩川(玉堤)	1 羽	コジキッタナにて
1967. 06. 01	岡本	1 羽	水田で
1991. 05. 19	野川	2 羽	
2006. 06. 07	野川	1 羽	定例調査
2007. 05. 21	仙川	1 羽	
2009. 04. 10	多摩川	25 羽	
2011. 03. 23	多摩川(玉堤 1)	19 羽	グランドで休息
2013. 07. 16	多摩川(野毛 2)	4 羽	第三京浜橋下浅瀬で成鳥 2、幼鳥 2 羽
2014. 06. 04	野川(喜多見 7)	7 羽	定例調査 成鳥 4 羽、幼鳥 3 羽(雁追橋)で確認
2016. 05. 14	多摩川(玉堤 1)	2 羽	大田区境 1 羽、等々力排水樋管やや下流小さな中州 1 羽
2017. 05. 16	多摩川(玉堤 1)	2 羽	大田区境 営巣か 2 羽で盛んに飛び、中州水辺近くの草地に入る
2018. 06. 13	多摩川	7 羽	定例調査
2019. 05. 23	野川(成城 3)	1 羽	キアシシギ 2 羽と一緒に採餌
2020. 05. 01	多摩川(玉堤 1)	1 羽	「ピッピッピッ」と中州で鳴く

204. シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Kentish Plover

チドリ科

ユーラシア大陸から朝鮮半島、日本、地中海からアラビア半島、アフリカ大陸の沿岸、オーストラリア、北アメリカ大陸で広く繁殖し、冬は温帯・熱帯地方に渡って越冬する。日本では、北海道は夏鳥として、本州から九州、伊豆諸島、奄美諸島、琉球諸島などで留鳥として繁殖する。

夏は雌雄で砂浜や川原、埋立地の砂礫地で繁殖し、その他の季節では小群や大群または他のチドリ類と混じって海浜や河口の砂地に生活する。地上を忙しげに走り歩いて餌をあさる。4～5 歩位歩いては立ち止まって方向を変え、ジグザグ形に歩行し、立ち止まった時に体をピョコリと上下に振り動かす。巣は小石の間に窪みをつくり、産座には小木片、貝殻の小破片、小石などを敷く。産卵期は 3 月から 6 月頃で、1 巢の卵数は 3 個である。雛は早成性の離巢性である。主として動物質のゴミムシやクモ、トビムシなどを食べる。最近各地で生息数の減少が報告されている。

世田谷区では、春と秋に稀に観察されている。主に多摩川で見られ、1975 年までは繁殖していたが、その後繁殖は観察されていない。2002 年頃までは頻繁に観察されたが、その後急激に減少して、2011 年以降は 2 例の記録しかない。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA 類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 156 件 1949～2013 年 2011 年以降 2 件)

○主な繁殖記録

1950. 04. 30	多摩川	1 巢	1 卵
1952. 04. 18	多摩川(野毛)	1 巢	4 卵
1957. 06. 04	多摩川(鎌田)	2 巢	わかもと下の川原で 1 巢卵(1)と 1 巢 2 卵(2) 19:00 には 3 卵になって、6/13(1) 雛 1 羽孵化 1 卵ひびが入る、1 卵変化無し、6/14(1)の巣は 1 卵を残し巣には雛見当たらず

1959. 05. 18	多摩川(鎌田)	1 巢	雛 2 羽	わかもと工場下の川原
1962. 05. 16	多摩川(玉川)	1 巢	1 巢 3 卵(抱卵中 5/24)	二子橋上流
1966. 05. 01	多摩川(野毛)	1 巢	3 卵 抱卵	谷沢川先
1975. 05. 07	多摩川(玉堤)	1 巢	丸子橋上流 1.5km	抱卵姿勢

○主な観察記録

1949. 05. 29	多摩川(鎌田)	1 羽	わかもと工場下河原
1959. 04. 06	多摩川(野毛)	1 羽	渡し場多摩川にて見る
1965. 12. 18	多摩川(野毛)	4 羽	多摩川に降りていた 渡し場
1967. 08. 24	多摩川	8 羽	上流から下流へ飛行
1975. 11. 02	多摩川	30 羽	東名高速北側
1991. 05. 25	多摩川	2 羽	二子橋下流
1997. 09. 05	多摩川(玉堤 1)	3 羽	上流へ低空で飛んでいく
1998. 09. 01	多摩川	2 羽	(9/14 迄観察された)
2000. 09. 12	多摩川	20 羽	台風の影響で風強く、水量多い中、二子橋付近を群れで飛び回る。
2001. 09. 09	多摩川(玉堤 1)	4 羽	中州で採餌 (9/14 も 3 羽観察されている)
2002. 07. 01	多摩川	7 羽	(7/1～7/29 まで 4 羽から 10 羽観察されている)
2005. 09. 07	多摩川(玉堤 1)	8 羽	中州を移動しながら採餌
2013. 05. 14	多摩川(玉堤 2)	1 羽	中州の川岸に突き出た砂礫地を歩いている
2013. 05. 21	多摩川	1 羽	

205. メダイチドリ *Charadrius mongolus* Mongolian Plover

チドリ科

ユーラシア大陸中部からシベリア東部、カムチャツカ半島などで繁殖し、冬は東アフリカからインド、東南アジアに渡って過ごす。日本には旅鳥として、北海道、本州、四国、九州、小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島に渡来し、本州、九州、奄美諸島、琉球諸島では一部が越冬する。

干潟、砂質海岸、河口域、海上の岩礁などに生息する。単独または 2～3 羽、時には小群(30～40 羽)で忙しげに砂浜で採食する。両脚を交互にして走り歩き、立ち止まった時には体を上下にピョコリと振り動かす。翼を力強く羽ばたいて飛翔する。巣は地上に窪みをつくり、産座にはシシウド類の葉や茎を敷く。産卵期は 6 月上旬頃である。主としてゴミムシ、トビケラ、ミミズ、カニなどの動物質を採り、植物質ではスズメノヒエの種子などを採食する。

世田谷区では、春は 4 月から 5 月、秋は 8 月から 9 月に多摩川で見られる。2005 年頃までは毎年のように見られたが、それ以降は 2011 年と 2013 年の 2 件だけである。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 40 件 1952～2013 年 2011 年以降 2 件)

○主な観察記録

1952. 09. 30	多摩川(野毛)	1 羽	渡し場にて
1959. 04. 23	多摩川(鎌田)	20 羽	1 群二子橋上流より下流へ飛翔
1962. 04. 20	多摩川(野毛)	13 羽	渡し場
1968. 04. 29	多摩川	8 羽	1 群が低空で、多摩川下流から上流に飛び去った
1995. 04. 21	多摩川	3 羽	
1998. 08. 06	多摩川	3 羽	
2002. 08. 20	多摩川(玉堤 1)	14 羽	キョウジョシギ 2 羽と水面を数度旋回して下流へ
2003. 08. 10	多摩川(上野毛 2)	3 羽	1 羽が増水した中州で採餌
2004. 05. 11	多摩川(鎌田 1)	2 羽	上空を鳴きながら飛んでいる
2005. 09. 07	多摩川(玉堤 1)	15 羽	中州で休んでいる
2011. 04. 25	多摩川(鎌田 1)	1 羽	小さな中州で休息
2013. 05. 05	多摩川(野毛 2)	2 羽	

◆ セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE

210. セイタカシギ *Himantopus himantopus* Black-winged Stilt

セイタカシギ科

アフリカ大陸中南部、ユーラシア大陸南部、日本、インド、東南アジア、オーストラリア大陸南部、北アメリカ大陸南部、南アメリカにかけて広く繁殖する。日本では、北海道では少なく、本州では留鳥であるが、繁殖は一部の地域に限られている。四国、九州、奄美諸島、琉球諸島では旅鳥または冬鳥である。

河口部や入り江の干潟、水を張った水田、湖沼の泥地などに生息する。繁殖期は5月から7月頃で、一夫一妻で繁殖する。巣は乾いて開けた場所の草が疎らな砂泥地の浅い窪みにつくる。小さな甲殻類、小魚、オタマジャクシ、ガガンボの幼虫などを食べる。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は8月から10月に立ち寄り、多摩川で1~2羽が見られている。
(東京都区部：絶滅危惧ⅠB類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 17件 1990~2019年 2011年以降4件)

○主な観察記録

1990.05.28	多摩川(玉堤1)	1羽	雄	川原の浅瀬を移動しながら採食
1998.04.28	多摩川(玉堤2)	1羽	雄	河原の浅瀬で移動しながら採食
1999.09.13	多摩川(鎌田1)	1羽	雄	河原で休んでいたが人が近づき上流へ飛立つ
2003.09.28	多摩川(鎌田1)	2羽		下流から飛来し上流へ
2005.04.17	多摩川	1羽		(4/24まで雌を確認)
2007.10.06	多摩川(玉川1)	1羽	幼鳥	護岸散策路下テトラポッドで休息、立ち上がり伸び後近くを鳴きながらゆっくり歩く その後飛び立ち見えなくなるが、また同じ場所に戻る
2008.05.02	多摩川	1羽		
2009.04.22	多摩川	1羽		
2010.09.06	多摩川	1羽		
2011.08.09	多摩川(野毛2)	1羽	雄成鳥	1羽が浅瀬で脚をたたんで休息
2012.09.03	多摩川(玉川1)	1羽		二子橋下流200m中州の水辺、すぐ飛び立つ
2013.05.05	多摩川(野毛2)	2羽	雌雄	が浅瀬を歩く
2019.10.28	多摩川(玉堤1)	2羽		上流から飛来し中州に降りるがすぐ飛び立ち下流へ

◆ シギ科 SCOLOPACIDAE

212. ヤマシギ *Scolopax rusticola* Eurasian Woodcock

シギ科

ユーラシア大陸のヨーロッパから主にシベリア南部、サハリン、日本、さらにコーカサス、中国西部でも広く繁殖し、冬は温暖な地中海エリア、北アフリカ、中国南部、東南アジア、日本の南部に移動する。日本では、北海道から本州北部では夏鳥で、本州中部と伊豆諸島では留鳥である。冬期は、北部の個体为本州中部、伊豆諸島、四国、九州から奄美諸島、琉球諸島、大東諸島に南下し越冬する。

平低地や低山帯の常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、スギ林、マツ林などいろいろな林に生息するだけでなく、農耕地、河川敷、水湿地、灌木湿地、湿原など幅広い生息域をもつが、夜行性と隠れ潜む特性のため、生息地での様子はよく分らない。単独でいることが多いが、冬は小群でいることもある。夕方から夜間にかけて林を出て、河畔、水田、沼地などに現れ、薄暗い場所の湧き水、溜り水、細い流れなどがある水湿地で採食する。主としてミミズ、昆虫の幼虫、ムカデ類、エビ、軟体動物などの動物食であるが、イネ科やタデ科の種子も採食する。

世田谷区では、11月頃から翌年の4月頃に稀に観察されている。1970年代頃まで、等々力溪谷公園、岡本静嘉堂周辺、成城などでの記録はあるが、2000年以後は稀になり、多摩川と住宅地の深沢や成城みつ池緑地で見られた4件のみであったが、2018年、5年ぶりに等々力溪谷公園で観察された。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 35件 1949~2018年 2011年以降4件)

○主な観察記録

1949.11.24	等々力溪谷公園	1羽		ゴルフ橋下(谷沢川)にて目撃す 本年渡来初認
1950.01.07	等々力溪谷公園	1羽		不動公園

1955. 01. 18	等々力溪谷公園	1羽	滝の山 本年渡来初認
1960. 12. 18	等々力溪谷公園	1羽	滝の山
1967. 02. 13	成城	1羽	成城学園図書館の林
1977. 04. 02	岡本静嘉堂周辺	2羽	
1997. 01. 25	多摩川(野毛2)	1羽	水のほとんど無いワンドの草陰で休んでいる.
1998. 03. 23	多摩川	1羽	ヒバリが原先の川に出る道の右側からゆっくり飛び立ち、川崎側へ去る
2003. 03. 21	多摩川(鎌田1)	1羽	枯れた草原の窪地にいたが人が近づき 50m 位飛んで降りる
2007. 11. 05	深沢	1羽	夕方上空を飛翔
2011. 03. 23	多摩川(玉堤1)	1羽	川岸の入り込んだ草地から飛び出し上流へ
2013. 02. 02	成城みつ池緑地	1羽	
2018. 02. 24	等々力溪谷公園	1羽	人の立ち入れない場所でしきりに落ち葉をひっくり返していた

216. オオジシギ *Gallinago hardwickii* Latham's Snipe

シギ科

ユーラシア大陸のウスリー地方南東部、サハリン南部、日本列島で局地的に繁殖し、冬は温暖なニューギニア、オーストラリア、タスマニアに移動する。日本には、夏鳥として北海道から本州北部に、旅鳥として本州中・南西部、九州に渡来し一部が繁殖する。琉球諸島には旅鳥として渡来し越冬するものもある。

渡り時期には本州以南の各地の水田、ハス田、池や河川の周辺の砂泥地で見られる。低地から標高 1,400m 位の高原までの、比較的広々とした草原や荒れ地状の灌木草原に生息する。繁殖地では、大小の池や灌木が散在する湿原周辺の草原を好む。繁殖期は 4～6 月で、雄は「ズビャク ズビャク」と聞こえる声を発し、「バリ バリ バリ」という大きな羽音を立てながら急降下するディスプレイフライトを行なう。飛び立つとき「ゲェッ」と聞こえる声で鳴く。1 巣卵数は 4 個、雌のみが抱卵するといわれるが、繁殖生態の詳細いことはわかっていない。河川や湖沼縁の水に浸かるか湿った泥地で、昆虫の幼虫やミミズ、貝、カニなどの甲殻類や草の種子、葉、根などを採食する。

世田谷区では、春は 4 月から 5 月、秋は 8 月から 9 月頃に立ち寄る。多摩川の川岸や草原で観察される。2017 年以降記録されていない。(東京都区部：情報不足 環境省：準絶滅危惧 全記録数 27 件 1952～2016 年 2011 年以降 5 件)

○主な観察記録

1952. 04. 18	多摩川	1羽	飛び立った時ゲェッと鳴く
1970. 05. 16	多摩川(玉堤)	1羽	コジキッタナ島
1996. 04. 12	多摩川(鎌田1)	1羽	人に驚き草原から鳴いて飛び立つ (4/17 まで3回観察された)
2001. 09. 21	多摩川(玉堤1)	2羽	上流から飛来し中州の岸に降りる
2002. 04. 13	多摩川(鎌田1)	1羽	人に驚き鳴きながらアシ原から飛び出す.
2003. 04. 25	多摩川(鎌田1)	3羽	オギの海より鳴いて飛び立ちすぐ降りる
2004. 04. 13	多摩川(鎌田1)	1羽	人に驚き草原からゲィと鳴き飛び立つ
2005. 09. 14	多摩川	5羽	定例調査
2007. 04. 11	多摩川(鎌田1)	2羽	オギの海調査
2008. 08. 13	多摩川(鎌田1)	1羽	オギの海調査
2011. 04. 14	多摩川(玉堤2)	1羽	川岸近くの草原で人に驚きゲィと鳴き東へ飛び立つ
2013. 04. 15	多摩川(玉堤1)	1羽	草原から飛び立ち数度上空を旋回して上流方向へ
2015. 09. 05	多摩川(鎌田1)	1羽	オギの海中央部よりやや上流足元近くから飛び立ち数メートル先の藪に降りる
2016. 04. 18	多摩川(鎌田1)	1羽	草原の足元から飛び立つ 次列風切り羽の縁は白くない

218. チュウジシギ *Gallinago megala* Swinhoe's Snipe

シギ科

ユーラシア大陸のアルタイ、バイカル湖周辺、モンゴル、エニセイ川流域、アムール川流域、ウスリー地方で繁殖し、冬期は温暖なインドからマレーシア、インドネシア、ニューギニア島、オーストラリア大陸に移動する。日本には、旅鳥として本州、四国、九州、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島に少数が渡来する。

湿地、水田、農耕地などで見られ、地上に水が浸み出るような所で採食する。長いくちばしを地面に深く差し込んで、ミミズ、昆虫、貝類などを採食する。

世田谷区では、多摩川で1954年から1969年まで見られたが、1970年以降は観察されていない。(東京都区部：情報不足 全記録数 16件 1954～1969年)

○主な観察記録

1954. 09. 09	多摩川(野毛)	1羽	捕獲 新田外多摩川河原
1955. 07. 21	区内(玉堤)	1羽	鳴きながら向畑上空を北東より南方に飛行する
1958. 04. 30	多摩川(野毛)	2羽	赤岩多摩川草原に居た
1961. 03. 26	多摩川(玉堤)	1羽	コジキッタナ
1962. 04. 04	多摩川(玉堤)	1羽	コジキッタナ
1963. 08. 20	多摩川(玉堤)	1羽	コジキッタナ
1964. 10. 03	多摩川(玉堤)	5羽	等々力多摩川から飛び立ち上流に飛び去った
1968. 09. 29	多摩川(玉堤)	5羽	コジキッタナ
1969. 09. 15	多摩川(玉堤)	1羽	コジキッタナ

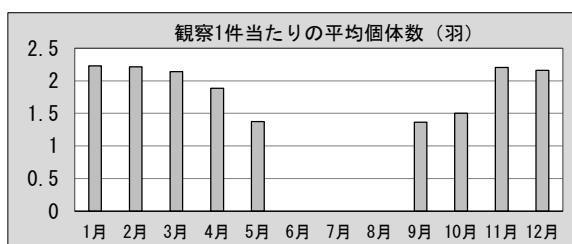
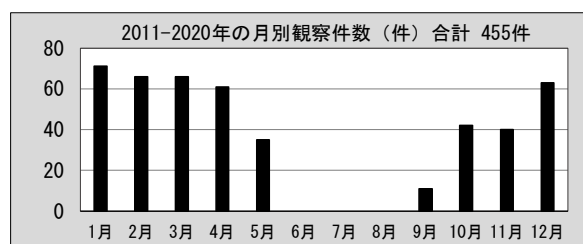
219. タシギ *Gallinago gallinago* Snipe

シギ科

ユーラシア大陸のアイスランド、イギリス、ヨーロッパ南西部、東はアナディール地方、コマンドル諸島、カムチャツカ、南はキルギス、トルキスタン、中国北東部、ウスリー地方、同様に北アメリカ、南アメリカで幅広く繁殖する。冬期は温暖なアフリカ、インド、東南アジア、マリアナ諸島、スンダ列島に移動する。日本には、北海道をはじめ各地に旅鳥として渡来するが、本州、四国、九州から伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島では冬鳥として越冬する。

干潟、溜池、沼地、水田、河川などの縁や隠れた泥地などで見られる。水田では畦の近くの水に浸かるような所にいる。非繁殖期は小群で過ごす。驚いて草原や川岸から飛び立つときは「ジェッ」と聞こえる声で鳴く。湿地を歩き、ミミズ、カワゲラ、エビ、アメリカザリガニなどを採食する。

世田谷区では、9月から10月に渡来し、翌年の5月中旬に渡去する。主に多摩川と野川で見られ、他に千歳台4や成城みつ池緑地、仙川などでも観察されている。野川では毎年越冬している。草の茂った川岸や中州の入り江、池、草原、畑や樹林帯の池などで採食や休息しているのが観察されている。くちばしを泥地に差し込んでミミズなどの他、エビ、アメリカザリガニを採食する姿が見られている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 1,200件 1950～2020年)



○主な観察記録

1950. 09. 22	玉堤	1羽	等々力(三角) 畠にて雄1羽拾う
1953. 09. 22	等々力	3羽	畑に降りる
1958. 03. 21	多摩川(野毛)	1羽	赤岩多摩川にて下流より上流に飛行
1966. 03. 06	喜多見2	50羽	狛江市境の湿地に降りた
1975. 05. 07	多摩川(玉堤)	2羽	丸子橋上流1.5km
1998. 04. 14	多摩川(鎌田1)	9羽	中州で休んでいる
2003. 09. 05	多摩川(玉堤2)	4羽	草原にいたが人が近づき飛立つ
2005. 03. 02	千歳台4	1羽	畑で虫をとり公園へ飛ぶ
2006. 04. 19	多摩川	7羽	定例調査
2009. 10. 31	野川(鎌田4)	6羽	休息

2011. 03. 10	成城みつ池緑地	1 羽	みつ池では初記録
2013. 12. 15	野川	3 羽	1 羽(天神森橋・町田橋間)2 羽(町田橋・水道橋間)並んで休息
2014. 03. 09	仙川	1 羽	西谷戸橋上の枯れヨシの中
2015. 04. 06	多摩川	6 羽	4 羽が谷沢川流れだしの浅瀬で嘴を泥地に差し込み、1 羽がミミズを採食
2018. 01. 13	野川(喜多見 7)	2 羽	交尾
2019. 02. 05	野川(喜多見 7)	3 羽	エビを捕食
2019. 04. 01	多摩川(玉堤 1)	2 羽	2 羽が中州の干上がった泥地に嘴を出し入れ、1 羽がアメリカザルガニを捕り足を次々取り除き腹部を嘴で刺して食べると近くの1羽が寄ってきて奪い合う
2020. 03. 31	多摩川(上野毛 2)	1 羽	細い流れ脇で採食

221. オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus* Long-billed Dowitcher シギ科

ユーラシア大陸のシベリア北東部、レナ川からチュコト半島と北アメリカ大陸アラスカ西海岸の北極圏で繁殖し、冬期は、温暖なアメリカのカリフォルニアからメキシコにかけて移動、時には日本にも立ち寄る。日本には、旅鳥として北海道、本州、九州、琉球諸島に渡来し、九州や琉球諸島では少数が越冬する。

繁殖期は5～6月であるが、詳しいことは不明である。泥深い溜り水、溜池、水田、ハス田などで見られる。水の中をゆっくり歩きながら、長いくちばしを頭が水につくほど深く差し込んで採食する。ほかに昆虫、特に双翅類の幼虫や蛹も採食する。

世田谷区では、下記1件の記録がある。(全記録数 1件 2003年)

○観察記録

2003. 09. 15 多摩川(野毛 2) 1 羽 水のほとんどないワンドを歩いている

223. オグロシギ *Limosa limosa* Black-tailed Godwit シギ科

ユーラシア大陸のアイスランド、スカンジナビア南部、ロシア北西部からシベリアやキルギス草原、アナディール地方、カムチャツカ、南はモンゴルで繁殖する。冬期は温暖な熱帯、南半球に移動する。日本には、旅鳥として北海道から本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島に渡来する。九州(長崎)で越冬の記録がある。

海岸の河口部、干潟、湖沼や河川の砂泥地、水田、溜池など水に浸かる泥地で観察される。海水域よりも淡水域を好む傾向がある。長い脚と長いくちばしで、他のシギ類よりもいくらか深い所に入り、頭まで水中に入れて、昆虫類、二枚貝、ミミズ、ゴカイなどを採食する。

世田谷区では、春と秋の渡りの時期に観察された下記4件の記録がある。(東京都区部:絶滅危惧IB類 全記録数 4件 2004～2014年 2011年以降1件)

○観察記録

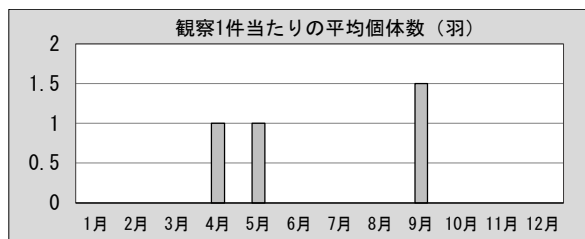
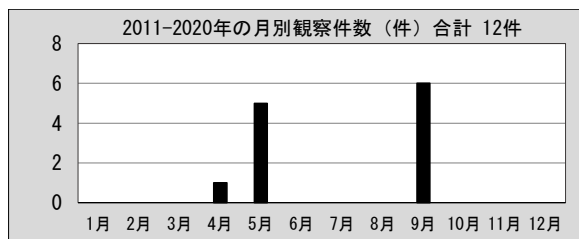
2004. 04. 28 多摩川(野毛 2) 1 羽 川岸の湿地から飛び立つ
 2004. 08. 21 多摩川(玉堤 2) 3 羽 上流から飛来し川の中程の浅瀬に降り採食 1羽は嘴を背に入れて休む
 2005. 09. 14 多摩川 1 羽 定例調査
 2014. 08. 18 多摩川(野毛 2) 2 羽 中州で休息

227. チュウシャクシギ *Numenius phaeopus* Whimbrel シギ科

ヨーロッパのツンドラや山岳地帯、シベリア、ロシア極東部、北アメリカからアラスカ、ハドソン湾で繁殖し、冬期は温暖な熱帯地方や南半球に移動する。日本には、旅鳥として北海道から本州、四国、九州、伊豆諸島、小笠原群島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島に至るほぼ全国に渡来し、九州、奄美諸島、琉球諸島では少数が越冬する。

東京湾の谷津干潟と常陸利根川湿地では100羽を超えるねぐら入りが観察されている。海岸の干潟、砂浜の水溜り、河川の砂泥地、水田などで見られ、農耕地などではカエル、バッタを捕食する。海水域ではカニ、巻貝、二枚貝などを採食する。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は9月頃に立ち寄る。多摩川で見られ、数羽が河岸や浅瀬などで採食、水浴、休息する姿が観察されている。1938年、1989年に各1件の観察記録だけであったが、1999年以降はほぼ毎年観察されている。（東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 32件 1938～2020年）



○主な観察記録

1938. 08. 23	太子堂	1羽	
1989. 05. 08	多摩川	1羽	
1999. 04. 22	多摩川(玉堤 1)	1羽	上流から低空で飛来し河原に降りるがすぐ飛び立ち下流へ(5/21までに2～3羽(鎌田 1)観察された)
2000. 04. 28	多摩川(玉堤 2)	1羽	川原でくちばしを水面に入れ採食
2001. 05. 01	多摩川(野毛 2)	1羽	川の浅瀬で水浴び
2003. 09. 03	多摩川(野毛 2)	2羽	上流から飛来し低空で下流へ
2005. 06. 27	多摩川(鎌田 1)	1羽	元バンの池の近くの浅瀬
2007. 04. 26	多摩川(野毛)	1羽	下流に向かって飛翔
2008. 09. 26	多摩川(鎌田 1)	1羽	上流より飛来し草地のグラウンドに降り休む
2011. 09. 20	多摩川(鎌田 1)	3羽	中州の縁で休息
2013. 09. 24	多摩川(野毛 2)	2羽	上流から飛来し小さな中州に降りる
2016. 05. 09	多摩川	1羽	
2017. 09. 11	多摩川(玉堤 2)	1羽	右岸よりの浅瀬で採食
2019. 04. 29	多摩川(玉堤 1)	1羽	浅瀬で採食
2020. 05. 18	多摩川(野毛 2)	1羽	浅瀬を歩きながら時々採食

231. ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* Far Eastern Curlew

シギ科

ユーラシア大陸の東部、カムチャツカ、オホーツク沿岸、中国北東部、ウスリー地方で繁殖し、冬期は、温暖なフィリピンからニューギニア、オーストラリアに移動する。日本には、旅鳥として北海道から本州、四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島に渡来し、九州の一部（佐賀、長崎、熊本、宮崎）と琉球諸島では越冬する。

干潟、海岸の砂浜、河口、水田、草地などでみられる。干潟を歩きながら、下に大きく湾曲したくちばしを砂泥に差し込んでカニやゴカイを採食する。草地ではバッタなども捕食する。

世田谷区では多摩川で下記2件のみ観察されている。（東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数2件 2016、2019年）

○観察記録

2016. 04. 12	多摩川(喜多見 1)	1羽	世田谷区内で初認 川辺で採食してグラウンドへ飛翔
2019. 05. 20	多摩川(玉堤 2)	1羽	下流から飛来し浅瀬に降りる

232. ツルシギ *Tringa erythropus* Spotted Redshank

シギ科

ユーラシア大陸のスカンジナビア北部からシベリア北部、アナディール地方にかけて繁殖し、冬期は、温暖な地中海エリア、アフリカ大陸中部からインド、中国南部、インドシナに移動する。日本には、旅鳥として北海道、本州、四国、九州から伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島まで広く渡来する。九州、琉球諸島では越冬するものもいる。

繁殖地では、森林限界近くの湿地、沼沢地、樹木の少ない荒れ地、藪ツンドラなどに生息する。渡りの途上や越冬地では、海岸や湖沼の砂泥地、水田、溜池などに現れる。浅い水の中の、それも他のシギ類に比べて深い所まで入り、歩いたり、泳いだりしながら水生昆虫、甲殻類、軟体動物、貝類などを採食する。

世田谷区には、稀に春と秋に立ち寄る。多摩川で見られ、1960年代までは15件の記録があるが、2002年以降は5件だけである。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 記録数 20件 1959～2018年 2011年以降2件)

○主な観察記録

1959. 08. 19	多摩川(野毛)	4羽	1群渡し場に降りていた 本年渡来初認
1959. 08. 23	野毛	22羽	1群 自宅上空 下流から上流へ飛翔
1964. 08. 25	多摩川	8羽	下流より上流に飛び去る
1965. 08. 26	多摩川(野毛)	3羽	新田多摩川に降りていた
1969. 08. 23	多摩川(玉堤)	1羽	コジキッタナ
2002. 04. 02	多摩川(鎌田1)	1羽	中間羽1羽が川岸で採食
2005. 04. 18	多摩川(玉堤1)	1羽	雄夏羽が中州で採食
2008. 04. 17	多摩川	1羽	
2012. 04. 02	多摩川(玉堤1)	1羽	中州縁を採食しながら移動
2018. 04. 02	多摩川(玉堤1)	1羽	夏羽に換羽中の雄が中州ワンドで採食

233. アカアシシギ *Tringa totanus* Common Redshank

シギ科

アイスランド、イギリス、ヨーロッパ南西部、東はヨーロッパ中部からロシア南部、ウズリー地方、サハリン、日本北部、南はイラン北部、ヒマラヤ、チベットで繁殖し、冬期は温暖な熱帯地方に移動する。日本には、旅鳥として北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島に渡来する。北海道東部(風蓮湖、春国岱)で繁殖例があり、琉球諸島では越冬も報告されている。

干潟、水田、湿地、ハス田などに少数が見られる。水に浸かる砂泥地を歩きながら、ガガンボ、トビゲラの幼虫、貝類、小ガニ、ミミズなどを採食する。

世田谷区では、多摩川で観察された下記5例の記録がある。記録は全て秋の通過である。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 5件 2000～2017年 2011年以降1件)

○観察記録

2000. 09. 26	多摩川(玉堤1)	1羽	冬羽 中州の岸で採餌
2003. 09. 08	多摩川	1羽	幼鳥 当地初(2名で観察)
2003. 09. 08	多摩川(上野毛2)	1羽	幼鳥 中州を移動しながら採餌
2009. 10. 09	多摩川(玉堤1)	1羽	細い流れで採食
2017. 08. 28	多摩川(玉堤1)	1羽	夏羽 小さな中州で採食していたが突然鳴いて上流へ飛び立つ

234. コアオアシシギ *Tringastagnatilis* Marsh Sandpiper

シギ科

ヨーロッパ南東部からキルギスを経てバイカル湖から中国東方まで断続的に繁殖している。冬は南アフリカ、オーストラリアに移動する。日本には、旅鳥として北海道から奄美諸島に渡来する。本州、九州、琉球諸島では冬鳥としてとどまるものもある。

湖沼の縁、河川の砂泥地、水を張った水田、溜池の浅く水に浸かる泥地などで見られる。浅い水のある砂泥地に入り、水生昆虫、小貝類、小魚を食べる。

世田谷区では、稀に春と秋に立ち寄る。多摩川で見られ、草の茂った川岸で採食しているのが観察されている。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 10件 1995～2016年 2011年以降2件)

○観察記録

1995. 10. 07	多摩川(玉堤1)	1羽	釣り人に驚き、鳴きながら飛び去る
1996. 09. 29	多摩川(玉堤1)	1羽	中州を移動しながら採餌

2000. 08. 22	多摩川(玉堤 1)	2 羽	中州で採餌
2002. 04. 28	多摩川(玉川 3)	1 羽	小さな中州を移動しながら採餌 (4/30 迄観察された)
2003. 09. 08	多摩川(野毛 2)	2 羽	川原の草が繁った湿地で採餌
2004. 05. 14	多摩川(野毛 2)	1 羽	河原のイヌタデなど草の繁った湿地を移動しながら採餌
2010. 09. 14	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中州縁を歩きながら採食しているとイソシギに威嚇される
2012. 08. 28	多摩川(野毛 2)	1 羽	上流から川面上空を低空で飛翔しイソシギの群れに入る
2016. 09. 05	多摩川(玉堤 1)	1 羽	台風の増水によってできた中州の水溜り周りで採食

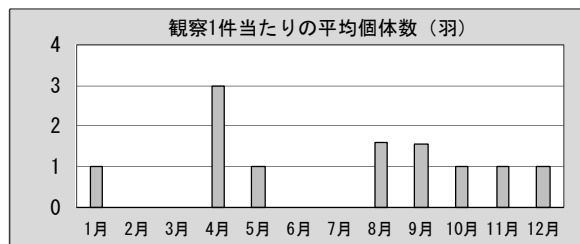
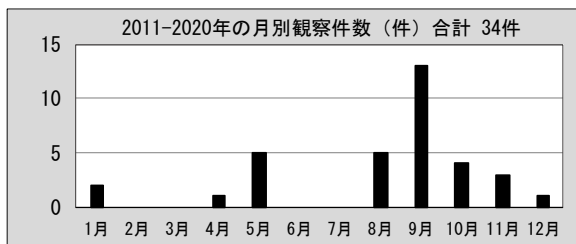
235. アオアシシギ *Tringa nebularia* Common Greenshank

シギ科

ユーラシア大陸の北部ツンドラ地帯で繁殖し、冬は地中海から南アフリカ、インド、インドシナ、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランドへ移動する。日本には、旅鳥として北海道から奄美諸島に渡来する。本州、九州、琉球諸島では冬鳥としてとどまるものもある。

河川、河口、干潟、湖沼、水田などの砂泥地で見られ、「ピッ ピッ ピッ」または「ピョー」と聞こえる声でよく鳴く。浅く水に浸かる泥地を歩きながらついばんだり、嘴で探りを入れたりして水生昆虫、ゴカイ、ミミズ、カエル類や小魚を採食する

世田谷区では、春は4月から5月、秋は8月から10月に立ち寄るが、冬期に観察されることがある。例年多摩川で見られる。中州や川岸を移動しながら採食する。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 210 件 1951～2020 年)



○主な観察記録

1951. 10. 19	多摩川(野毛)	1 羽	鳴きながら上流より下流へ
1955. 09. 22	多摩川(野毛)	4 羽	赤岩にて見る 本年渡来初認
1968. 09. 29	多摩川(玉堤)	1 羽	コジキッタナ多摩川で見る
1996. 08. 05	多摩川(玉堤 1)	12 羽	(大田区境) 調布堰の水を抜いたために一面川原になる
2000. 09. 20	多摩川	2 羽	08:30～12:00 同一場所から動かず
2002. 10. 03	多摩川(玉川 1)	2 羽	鳴きながら下流
2005. 08. 19	多摩川(野毛 2)	1 羽	(10/2 まで9回 1～3羽が中州の岸を移動しながら採餌)
2006. 08. 30	多摩川(玉堤 1)	2 羽	中州の岸を移動しながら採餌
2010. 09. 14	多摩川	4 羽	
2012. 09. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	上流から鳴きながら飛来し川岸に降りる
2014. 05. 14	多摩川	1 羽	定例調査
2015. 09. 05	多摩川(鎌田 1)	2 羽	チョーチョーと鳴きながら上流へ
2018. 01. 15	多摩川(玉堤 1)	1 羽	冬羽がワンド内で採食
2018. 09. 12	多摩川(玉川 3)	2 羽	兵庫島ひょうたん池付近本流対岸の砂礫地で休息後、下流へ飛び去る
2020. 09. 06	多摩川(野毛 2)	2 羽	2羽が小さな中洲で採食

239. クサシギ *Tringa ochropus* Green Sandpiper

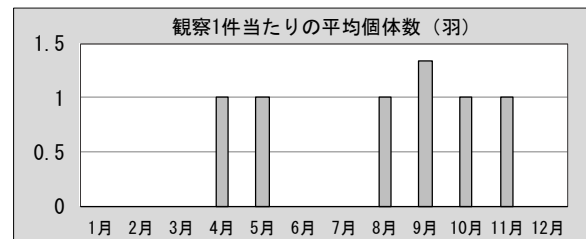
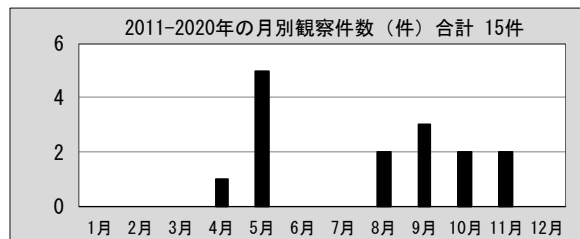
シギ科

スカンジナビア、中央ヨーロッパからアムール川流域、南はアルタイで繁殖し、冬は地中海地域、アフリカ、インド、フィリピン、ボルネオに渡る。日本では、旅鳥として北海道から奄美諸島に渡来する。関東以南では少数が越冬し、琉球諸島では冬鳥である。

河口、海岸の干潟、内陸の河川、湖沼など草の疎らな砂泥地で見られる。渡り期や越冬期でも単独か数

羽でいることが多い。浅く水に浸かる砂泥地を歩いて、表面にいる甲虫やユスリカ、エビ、カニ、クモ、軟体動物をついばみ、植物の種子なども食べる。

世田谷区には、春は3月から5月、秋は8月から11月頃に立ち寄る。多くは多摩川で見られ1960年代までは複数個体が観察されたが、以降は1羽の観察記録のみである。2013年と2019年の2回野川で観察され、2019年には砧公園の池で2羽が観察された。(東京都区部:絶滅危惧IA類 全記録数 84件 1953～2019年)



○主な観察記録

1953. 08. 28	多摩川(野毛)	1羽	新田
1967. 09. 13	多摩川(野毛)	11羽	谷沢川流れ出しに降りていた
1982. 04. 19	多摩川	1羽	
1996. 03. 19	多摩川(玉堤1)	1羽	中州の岸で採餌
2000. 03. 21	多摩川(野毛2)	1羽	右岸の河原で採餌していたがバイクが近づき上流へ飛ぶ
2004. 11. 08	多摩川(野毛3)	1羽	冬羽1羽が草の繁っている川岸を採餌しながら移動
2005. 10. 04	多摩川(玉堤2)	1羽	幼鳥1羽が右岸の河原で採餌
2007. 04. 15	多摩川(玉堤2)	1羽	中州で水に浸かって採餌
2008. 11. 19	多摩川	1羽	定例調査
2010. 07. 26	多摩川(野毛2)	1羽	中州の草が茂った縁を移動
2012. 08. 20	多摩川(野毛2)	1羽	
2013. 05. 04	野川(喜多見5)	1羽	川辺で移動、採食
2014. 11. 28	多摩川(玉堤2)	1羽	中州の縁を歩いていた
2017. 11. 13	多摩川(玉堤1)	1羽	草が繁ったワンドを歩く
2018. 10. 15	多摩川(玉川1)	1羽	旧野川の草が繁った細い流れで採食
2019. 09. 05	砧公園	2羽	サンクチュアリの池で8日迄観察
2019. 09. 11	野川(成城4)	1羽	川辺を移動

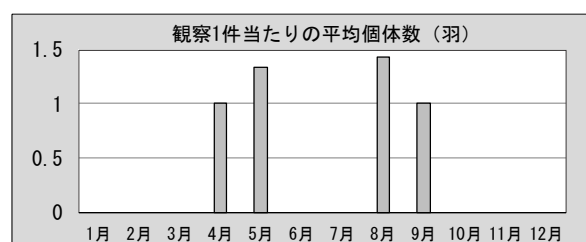
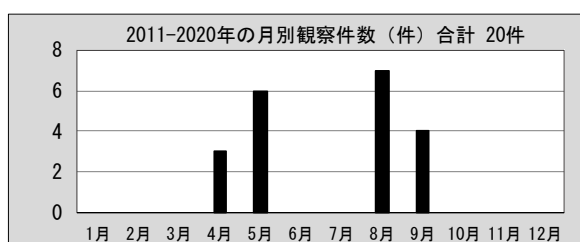
240. タカブシギ *Tringaglareola* Wood Sandpiper

シギ科

ユーラシア大陸の北部で繁殖し、冬は地中海、アフリカ、インド、東南アジア、ニューギニア島、オーストラリアなどに渡る。日本には、北海道から琉球諸島まで旅鳥として渡来する。関東以南では少数越冬するものもいる。

干潟、河川や河口、水田、湖沼岸の砂泥地など、泥の多い水辺で見られる。2～3羽の小群から20羽位の群れで、湿った浅く水に浸かる砂泥地を歩いて昆虫、カニ、エビ、クモ類、小さな貝類を食べる。飛び立つ時に鳴くことが多い。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は8月から9月に立ち寄る。多摩川だけで見られ、草の茂った浅瀬で採食するのが観察されている。(東京都区部:絶滅危惧IA類 環境省:絶滅危惧II類 全記録数 68件 1969～2020年)



○主な観察記録

1969. 08. 09	多摩川(玉堤)	3羽	コジキッタナ
1972. 08. 30	多摩川(野毛)	20羽	第三京浜道多摩川橋
1984. 09. 03	多摩川	1羽	
1996. 08. 05	多摩川(野毛 2)	1羽	(8/17 まで3回 1羽が浅瀬で採餌)
2001. 08. 20	多摩川(玉堤 2)	1羽	中州で採餌
2003. 09. 08	多摩川(野毛 2)	5羽	(9/19 まで4回 2~5羽が草の多い河原を移動しながら採餌)
2007. 04. 15	多摩川(野毛 2)	1羽	第三京浜道多摩川橋下流の中州で休んでいる
2008. 08. 02	多摩川(玉堤 1)	3羽	コアジサシ調査で観察
2010. 07. 26	多摩川	3羽	
2012. 08. 15	多摩川(玉川 1)	1羽	二子橋下流 150m で採食
2013. 04. 30	多摩川(鎌田 1)	1羽	オギの海入口水際
2014. 05. 03	多摩川(玉堤 1)	1羽	上流へ飛び姿を観察
2016. 05. 02	多摩川(玉堤 1)	1羽	夏羽、小さな中州を次々に渡り歩く
2020. 09. 09	多摩川	1羽	定例調査 1羽が飛び立ち上流へ、上尾筒の白さが目立った

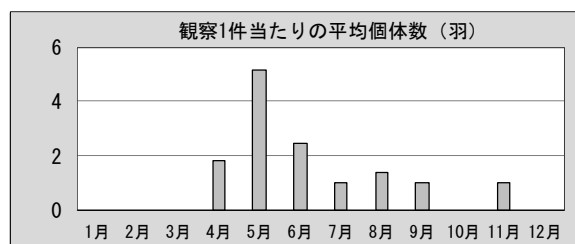
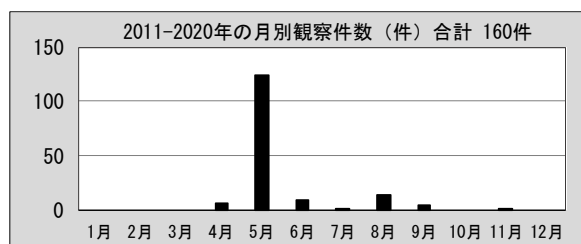
241. キアシシギ *Heteroscelus brevipes* Grey-tailed Tattler

シギ科

シベリアの東北部で繁殖し、インドネシア、フィリピン、ニューギニア島、オーストラリアに渡って越冬する。日本には、旅鳥として北海道から琉球諸島に渡来し普通に見られる。琉球諸島では越冬するものもいる。

海岸の砂浜、波打ち際や干潟、河川の砂泥地や砂礫地、河口、岩場、水田に生息する。砂泥地や砂礫地で水の中に入って歩き、表面や水中からエビ、カニ、フジツボ、貝類、ゴカイ、昆虫類などを採食する。

世田谷区では、春は4月から6月、秋は7月から9月頃に立ち寄る。個体数は春が多く秋は少ない。1951年から記録があるが、多摩川では1994年以降、野川では2002年以降毎年観察されている。仙川では2003年と2005年だけで見られている。河原の浅瀬を数羽から十数羽が移動しながら採食する。野川でザリガニを食べている姿が見られている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 914件 1951~2020年)



○主な観察記録

1951. 09. 23	多摩川	20羽	
1952. 08. 07	野毛	1羽	自宅にて鳴き声を聞く
1970. 05. 09	多摩川(玉堤)	7羽	コジキッタナ
1989. 05. 08	多摩川	3羽	
1990. 05. 20	野川	1羽	野川で初めての記録
1996. 05. 07	多摩川	12羽	
2000. 05. 06	多摩川(鎌田 1)	26羽	中州の岸で直接頭掻き
2003. 05. 21	仙川	1羽	氷川橋上流
2005. 05. 13	多摩川(野毛 3)	21羽	13羽が右岸の浅瀬を移動しながら採餌
2005. 05. 20	仙川	1羽	祖師谷橋で下流に向かって飛ぶ
2006. 05. 31	野川(喜多見 7)	2羽	浅い水の中を歩きながら採食
2007. 05. 16	多摩川	7羽	定例調査
2011. 08. 27	野川(成城 4)	2羽	ザリガニを採食
2013. 05. 09	多摩川(玉堤 1)	14羽	大田区境 5羽 15km付近 9羽 採餌移動 時々鳴く
2015. 05. 13	多摩川	26羽	定例調査

2017. 05. 17	多摩川	16羽	定例調査 16羽のうち、浅瀬で採食していた14羽が一斉に飛び立ち、やや上流で1羽プラスされて観察
2019. 05. 12	多摩川(野毛2)	2羽	小さな中州で嘴を背の羽間に入れ休息
2020. 05. 10	野川(喜多見6)	3羽	川辺で採餌

243. ソリハシシギ *Xenus cinereus* Terek Sandpiper

シギ科

ユーラシア大陸の北部で繁殖し、冬はペルシャ湾からアフリカ南部、インド、東南アジア、オーストラリアに移動する。日本には、旅鳥として北海道から琉球諸島まで全国に渡来する。

海岸の干潟、水路、砂浜の溜り水、溜池などの砂泥地で、浅い水の中に入ってカニや昆虫類を採食する。秋に多く見られる。

世田谷区では、8月から9月に立ち寄る。1997～2005年までほぼ毎年渡来し、多摩川で1～2羽が見られていたが、2006年以降は観察されていない。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 20件 1997～2005年)

○主な観察記録

1997. 08. 18	多摩川(玉堤1)	2羽	(8/22まで3回 1～2羽が川岸の浅瀬で採餌)
1998. 09. 11	多摩川(玉堤1)	2羽	川原にいたが飛び立つ
1999. 10. 29	多摩川(玉堤1)	1羽	川原で休んでいる
2000. 08. 04	多摩川(玉堤1)	2羽	2羽が中州の岸で休んでいるがその内1羽が採餌しているイソシギを威嚇
2001. 08. 03	多摩川(鎌田1)	1羽	(8/10まで3回 1羽が中州で採餌)
2002. 08. 06	多摩川(野毛2)	1羽	対岸の浅瀬で採餌
2004. 08. 21	多摩川(鎌田1)	1羽	1羽がワンドの岸で1本足で立っていたが座り込む
2005. 09. 02	多摩川(上野毛2)	1羽	中州の岸で休んでいた

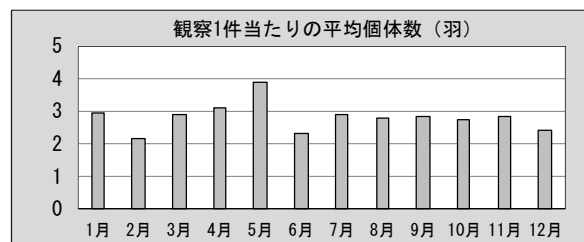
244. イソシギ *Actitis hypoleucos* Common Sandpiper

シギ科

ユーラシア大陸の中部から北部で繁殖し、冬はヨーロッパ南部からアフリカ南部、インド、中国南部、東南アジア、日本、南はオーストラリアに渡る。日本では、北海道では夏鳥、本州から小笠原群島、奄美諸島までは留鳥として繁殖または旅鳥として通過する。琉球諸島では冬鳥である。

河川、湖沼、水田、畑地などに生息し、河川では河口部から亜高山帯の上流部まで見られるが、特に河原の発達した中流域に多い。繁殖期は4月から7月で、巣は砂地の河原の浅い窪みに、枯れ草を敷いて皿形につくる。1巣の卵数は3～4個、ほとんど4個であるが、稀に5～7個のことがある。ヒナは早成性の離巢性で、密生した幼綿羽を持ち、孵化後数時間で巣を離れる。親の世話を受けて育ち25～30日ほどで独立する。水辺を腰を上下に振りながら歩いて、昆虫をついばんだり、ほじくり出したりし特にユスリカ類、トビケラ類などの水生昆虫の幼虫を捕る。「ピョーー」または「ツイ リー リー」と聞こえる声で鳴く。

世田谷区では年中、主に多摩川、野川、仙川で見られ、他に馬事公苑や砦公園で観察された例がある。2002年以降は毎年のように多摩川の岸や中州で繁殖し、5月下旬から7月にヒナが観察される。ミミズやトンボを採食しているのが見られている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 4,337件 1951～2020年)



○主な繁殖記録

1960. 06. 19	多摩川(野毛1)	1巣	渡し場下の島で子供が雛を取る 雛死亡保存

1968. 06. 01	多摩川(野毛)	1 巣	4 卵 抱卵中(6/2 抱卵している巣に約 4m 近づいたら、成鳥巣から出て擬傷。6/3~4 抱卵していた)
1996. 05. 27	多摩川(野毛 2)	1 巣	雛 3 羽中州で尻を上下に振り時々岸を走る
2002. 06. 03	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 2 羽中州の岸を移動 成長は少し離れた所で見ている
2003. 05. 26	多摩川(玉堤 2)	1 巣	雛 3 羽中州の岸で尾を振りながら歩く 成鳥は 2m 位後ろから見ています
2005. 06. 03	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雛 3 羽が草木の繁った中州の岸を親鳥の後を追っている
2007. 06. 21	多摩川(鎌田 2)	1 巣	雛 1 羽
2009. 07. 07	多摩川(玉堤 1)	1 巣	大きな中州の縁で成鳥 2 羽、雛 1 羽
2013. 05. 21	多摩川(玉堤 1)	1 巣	成鳥 2 羽、雛 2 羽は腰を上下に振りながら中州砂礫地や草地で水辺に行ったり砂礫地に戻ってきたりしている。成鳥は雛の近くで時々鳴く
2015. 06. 29	多摩川(玉堤 1)	1 巣	成鳥 2 羽、雛 2 羽が大きな中州の砂礫地を歩く
2017. 05. 22	多摩川(玉堤 1)	1 巣	成鳥 2 羽、雛 3 羽が中州草地の砂礫地や水際を歩く
2019. 06. 03	多摩川(玉堤 1)	1 巣	成鳥 1、雛 3 羽 雛は大きな中州の水際を走ったり、少し離れた高い位置にいる親鳥のそばに行ったりする

○主な観察記録

1951. 07. 21	多摩川	1 羽	
1954. 08. 09	多摩川(野毛)	10 羽	渡し場付近
1961. 07. 25	多摩川(玉堤)	18 羽	コジキッタナに降りていた
1992. 06. 29	野川	10 羽	定例調査
1995. 09. 13	多摩川	20 羽	
2001. 07. 09	多摩川	65 羽	
2003. 09. 10	多摩川	25 羽	定例調査
2005. 02. 02	仙川	2 羽	定例調査
2006. 09. 08	野川	9 羽	定例調査
2009. 07. 03	馬事公苑	1 羽	奥の三角池にいた
2010. 01. 25	多摩川	12 羽	
2011. 09. 27	野川(喜多見 5)	3 羽	3 羽で喧嘩していた
2013. 08. 06	野川(宇奈根 3)	1 羽	トンボを捕食
2014. 11. 17	砧公園	1 羽	三の橋、四の橋間の谷戸川
2015. 02. 04	仙川	1 羽	定例調査
2016. 09. 23	多摩川	14 羽	定例調査
2017. 01. 09	野川(喜多見 7)	1 羽	枯草の下から採食
2018. 05. 23	多摩川(玉川 3)	2 羽	「ピーピーピー」と鳴きながら飛ぶ
2019. 11. 08	野川(宇奈根 3)	1 羽	キセキレイと一緒に移動
2020. 05. 01	野川(大蔵 5)	2 羽	2 羽ともに採餌、ミミズを捕食

246. キョウジョシギ *Arenaria interpres* Ruddy Turnstone

シギ科

ユーラシア大陸の北極圏、北アメリカ大陸の北極圏で繁殖し、冬は赤道周辺から南半球の各地に渡る。日本には、北海道から九州、琉球諸島まで広く旅鳥として渡来し、本州、九州、小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島では一部が越冬する。

岩礁海岸に生息し、稀に内陸の河川、水田にも現れる。海岸では砂浜や河口の砂泥地、岩石地や砂利地の海岸を好む。岩礁ではヨコエビ類、カニ類、フジツボ類、貝類を食べ、砂浜ではハマトビムシ、二枚貝なども食べる。

世田谷区では、稀に春、多摩川に立ち寄る。1962 年までは年間 20~30 羽程見られていたが、それ以降ほとんど見られなくなった。1995 年以後は再び見られるようになり、6 例が観察されている。中州の縁を移動しながら小石をひっくり返して採食しているのが見られている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 32 件 1953~2020 年 2011 年以降 3 件)

○主な観察記録

1953. 05. 06	多摩川(玉堤)	1 羽	コジキッタナ
1954. 04. 22	多摩川(野毛)	7 羽	一群 渡し場上空を上流へ

1957. 04. 17	多摩川	6 羽	多摩川渡し場にて ジュジュ又はジュールジュールと小声で鳴く
1957. 05. 17	多摩川(鎌田)	20 羽	わかもと下川原でみる
1959. 05. 17	多摩川(野毛)	30 羽	一群 赤岩上流より下流へ
1961. 08. 01	多摩川(玉堤)	24 羽	コジキッタナに降りていた
1962. 05. 05	多摩川(野毛)	18 羽	谷沢川流れ出し付近 下流より来て止まり上流へ飛び去る
1970. 05. 09	多摩川(玉堤)	6 羽	コジキッタナ島
1995. 05. 09	多摩川(野毛 2)	4 羽	
1996. 05. 15	多摩川(野毛 2)	3 羽	小さな中州で休んでいた
2002. 08. 20	多摩川(玉堤 1)	2 羽	メダイチドリ 14 羽と川面を数回旋回し下流へ
2011. 04. 25	多摩川(玉堤 1)	2 羽	中州の縁を移動しながら小石をひっくり返して採食
2015. 05. 11	多摩川(玉堤 2)	1 羽	小さな中州を歩き、時々小石を裏返しする
2020. 05. 11	多摩川(野毛 2)	1 羽	浅瀬で時々採食

247. オバシギ *Calidris tenuirostris* Great Knot

シギ科

ロシア極東地域からオホーツク沿岸のごく限られた地域で繁殖し、インドから東南アジア、オーストラリアに渡って越冬する。日本には、旅鳥として北海道から琉球諸島まで全国的に飛来し、春は4～5月頃、秋は7～9月頃見られる。

海岸の砂浜や干潟、海岸に近い沼沢地で見られ、内陸の河川にも入ることがある。主に砂泥地で貝や甲殻類、昆虫の幼虫や成虫、クモ類、種子などを採食する。

世田谷区では下記1例の記録がある。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 1件 2011年)

○観察記録

2011. 05. 03 多摩川(野毛 2) 1 羽 夏羽 中州で休息

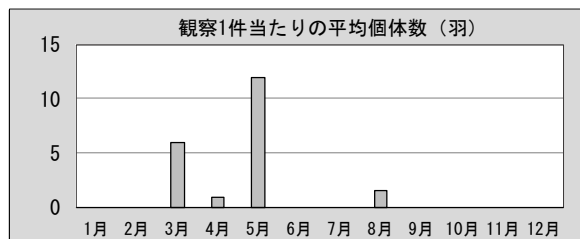
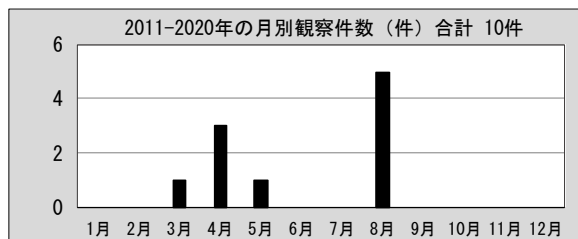
251. トウネン *Calidris ruficollis* Rufous-necked Stint

シギ科

シベリアのレナ川、ヤナ川などの河口、ベーリング海沿岸、アラスカ北西部などのごく限られた地域で繁殖し、冬は東南アジアからフィリピン、オーストラリアに渡る。日本には、旅鳥として北海道から九州、小笠原群島、琉球諸島に渡来する。一部では越冬する個体もいる。

海岸の砂浜、内湾や河口部の干潟砂泥地、湖沼、溜池、河川の岸辺の砂泥地、水を張った水田などで生息する。砂泥地で歩き回り、細かくくちばしを使ってついばむ。5～6羽位の小群や100～200羽以上の大群で、時にはハマシギなどと群れをなして干潟などでミミズ、ゴカイ類、トビムシ、小エビ、トビゲラの幼虫、小貝、草の種子などを食べる。

世田谷区では、春の渡りは3月から5月、秋は8月に立ち寄る。例年、少数が多摩川で見られるが1999年と2003年には個体数が多く観察された。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 128件 1951～2020年)



○主な観察記録

1951. 05. 28	多摩川	1 羽	
1958. 04. 14	多摩川(野毛)	7 羽	群れが赤岩を下流より上流に飛行
1997. 05. 12	多摩川(鎌田 1)	10 羽	夏羽 10 羽が中州で採餌

1999. 05. 14	多摩川(鎌田 1)	28 羽	夏羽 中州で採餌
1999. 09. 10	多摩川	3 羽	10/18 まで 13 回、1～15 羽が全域で見られた
2001. 08. 06	多摩川(玉堤 2)	4 羽	中州の浅瀬で採餌
2003. 09. 08	多摩川	28 羽	(8/25 から 9/19 まで 8 回 1～28 羽がほぼ連続して見られた)
2004. 08. 19	多摩川(玉堤 2)	5 羽	夏羽 5 羽が右岸の中州を移動しながら採餌
2006. 05. 12	多摩川(玉川 1)	3 羽	中州の水際
2008. 09. 14	多摩川	5 羽	
2010. 08. 10	多摩川	2 羽	
2013. 04. 29	多摩川(玉堤 2)	1 羽	中州の縁で羽繕い
2014. 08. 25	多摩川(玉堤 1)	3 羽	中州の縁を移動
2017. 03. 28	多摩川(玉堤 1)	6 羽	中州水際で採食
2018. 04. 23	多摩川(玉堤 2)	1 羽	
2019. 08. 12	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中間羽 小さな中州間を行き来し採食
2020. 05. 18	多摩川(野毛 2)	12 羽	夏羽、左岸寄りの浅瀬で採食

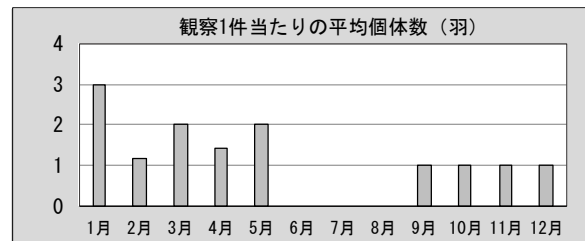
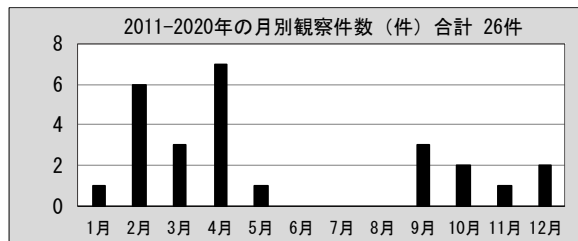
253. オジロトウネン *Calidris temminckii* Temminck's Stint

シギ科

ユーラシア大陸の北部で繁殖し、冬はアフリカ大陸中部からインド、東南アジア、ボルネオで越冬する。日本には、北海道から奄美諸島に旅鳥として飛来し、その内、本州以南では一部が越冬する。琉球諸島では冬鳥である。

淡水湿地、水田、湖沼、河川などに生息し、干潟など海岸に出ることは稀である。昆虫類の幼虫や成虫、ミミズ、ゴカイ類などを食べる。

世田谷区では、春と秋に少数が立ち寄るが、冬にも見られる。多摩川で 1996 年以降ほぼ毎年少数が見られ、川岸や中州で採食する。(東京都区部：絶滅危惧 1A 類 全記録数 85 件 1954～2020 年)



○主な観察記録

1954. 03. 12	多摩川	2 羽	
1959. 01. 25	多摩川	10 羽	
1960. 01. 01	多摩川(鎌田)	1 羽	二子橋上流より上流へ飛び立つ
1996. 03. 16	多摩川(鎌田 1)	1 羽	中州で採餌
1998. 03. 26	多摩川(上野毛 2)	2 羽	中州で採餌
2001. 08. 10	多摩川(鎌田 1)	3 羽	夏羽 2 羽、幼鳥 1 羽が中州で採餌
2002. 01. 22	多摩川(野毛 2)	3 羽	川岸で採餌
2004. 05. 18	多摩川(玉川 1)	1 羽	夏羽 1 羽が中州で移動しながら採餌
2005. 12. 20	多摩川(玉川 1)	2 羽	冬羽 2 羽が中州の岸を移動しながら採餌
2006. 09. 04	多摩川(鎌田 1)	2 羽	平瀬川前の中州 1 羽、オギの海の中州に 1 羽
2007. 11. 14	多摩川	1 羽	
2009. 03. 27	多摩川	1 羽	
2011. 04. 04	多摩川(鎌田 1)	1 羽	換羽中の 1 羽が中州の縁を移動しながら採食
2013. 09. 24	多摩川(玉堤 1)	1 羽	成鳥冬羽 等々力樋管口を移動しながら採食
2014. 02. 17	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中州縁を歩きながら時々採食
2016. 03. 29	多摩川(玉堤 1)	3 羽	小さな中州で採食
2017. 02. 28	多摩川(玉堤 2)	1 羽	中州浅瀬で採食
2019. 01. 28	多摩川(玉堤 1)	3 羽	谷沢川合流地で採食
2020. 12. 07	多摩川(玉堤 2)	1 羽	谷沢川合流地の中州で採食

254. ヒバリシギ *Calidris subminuta* Long-toed Stint

シギ科

シベリア中部からカムチャツカ半島、コマンドル諸島で繁殖し、インドネシアからボルネオにかけて越冬する。日本には、旅鳥として北海道から奄美諸島に飛来するが、本州や九州では一部越冬する。琉球諸島では冬鳥である。

海湾の干潟や浅瀬、海岸の砂浜、三角州、湖沼、水田などに生息するが、数はあまり多くない。トウネン、ハマシギの群れに混じって1~2羽、または10羽前後の小群で生息。干潟や水田などでゴカイ、ミミズ、貝類などや昆虫の幼虫を採食する。

世田谷区では、春は4月、秋は8月から10月に少数が稀に多摩川に立ち寄る。(全記録数 8件 1999~2013年 2011年以降 1件)

○観察記録

1999. 10. 08	多摩川(鎌田 1)	1羽	1羽が中州でトウネン 11羽と休んでいる
2001. 08. 12	多摩川(上野毛 2)	1羽	中州中央部にいた
2001. 09. 07	多摩川(玉堤 1)	1羽	中州で採餌
2002. 09. 29	多摩川(玉川 1)	1羽	中州の岸で休んでいる
2003. 09. 05	多摩川(玉川 1)	1羽	中州の岸でトウネン 5羽と採餌
2008. 04. 12	多摩川	1羽	
2009. 04. 22	多摩川(玉堤 1)	1羽	夏羽が中州の縁を移動しながら採食していたが、近くにいたコチドリに威嚇される
2013. 04. 15	多摩川	1羽	

256. ヒメウズラシギ *Calidris bairdii* Baird's Sandpiper

シギ科

ユーラシア大陸東端のチュコト半島、北アメリカ大陸の北極圏、グリーンランド北西部で繁殖し、南アメリカ大陸南部に渡って越冬する。日本には旅鳥として稀に渡来し、北海道、宮城、山形、茨城、千葉、東京、神奈川、静岡などの各都道県に記録がある。

海岸の河口、入江などの干潟で見られる。繁殖地では、海岸から高地にかけての乾いたツンドラ、湿地、ツンドラなどに生息、砂泥地で探りを入れたりして、昆虫類の幼虫や成虫などを食べる。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数 1件 1978年)

○観察記録

1978. 09. 15	多摩川(玉川 1)	1羽	幼鳥、雌雄不明 約10羽のトウネンと共に、川岸の水辺で採餌行動をしていた トウネンと比べて一回り大きく、嘴はやや長く下向きに湾曲 初列風切りが長くて、たたんだ状態では尾羽の後に突出していた

258. ウズラシギ *Calidris acuminata* Sharp-tailed Sandpiper

シギ科

シベリアのヤナ川とコリマ川にかけてのごく限られた地域のみで繁殖し、インドネシアからニューギニア島、オーストラリアで越冬する。日本には旅鳥として北海道から琉球諸島まで全国に飛来する。

海岸の水溜りや河口の干潟、河川の砂泥地、水を張った水田、溜池、湖沼の砂泥地など、泥底の浅い水域に生息する。ゴカイ、トビムシや昆虫類、種子などをついばむ。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は8月から10月に立ち寄る。少数が多摩川で見られ、中州で移動しながら採食するのが観察されている。(全記録数 28件 1953~2019年 2011年以降 4件)

○主な観察記録

1953. 11. 01	多摩川(野毛)	1羽	捕獲(農林省) 新田
1975. 05. 07	多摩川(玉堤)	1羽	丸子橋上流 1.5km
1997. 10. 19	多摩川(野毛 2)	2羽	(10/30 まで 5回) 1~2羽が小さな中州で採餌

2002. 11. 23	多摩川(玉川 3)	1 羽	小さな中州の浅瀬で採餌
2003. 04. 17	多摩川(鎌田 1)	4 羽	新二子橋中州
2003. 09. 15	多摩川	1 羽	新二子橋下流 300m 中州
2004. 04. 21	多摩川(玉川 3)	1 羽	二子橋～新二子橋 (4/25 迄観察された)
2005. 05. 01	多摩川(玉堤 2)	1 羽	川岸を移動しながら採餌
2008. 05. 02	多摩川	1 羽	
2011. 05. 03	多摩川(鎌田 1)	1 羽	夏羽
2013. 08. 13	多摩川(野毛 2)	1 羽	中州の縁を移動しながら採食
2014. 08. 18	多摩川	1 羽	
2019. 04. 29	多摩川(玉堤 1)	1 羽	小さな中洲や浅瀬で休息

259. サルハマシギ *Calidris ferruginea* Curlew Sandpiper

シギ科

シベリアのエニセイ川からコリマ川河口、タイミル半島の極めて限られた地域で繁殖し、アフリカ大陸、インド、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドに渡って越冬する。日本には旅鳥として北海道から琉球諸島まで少数が飛来する。

海岸砂浜の水溜り、河口や入江の干潟、池沼の砂泥地などで見られる。水に浸かる砂泥地を歩き、ゴカイや貝などを採食する。

世田谷区では、下記 5 例の記録がある。2013 年 10 月に河川敷のグラウンドでミミズを採食しているのが観察されている。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA 類 全記録数 13 件 2002～2018 年 2011 年以降 6 件)

○観察記録

2002. 09. 26	多摩川(野毛 3)	1 羽	第三京浜道多摩川橋上流の浅瀬 (9/29 迄観察された 観察件数 2 件)
2002. 11. 26	多摩川(玉川 3)	1 羽	冬羽 1 羽が浅瀬で水浴び (11/27、12/3 にも観察されている)
2008. 08. 18	多摩川	1 羽	
2013. 10. 23	多摩川(鎌田 1)	1 羽	グラウンドでミミズを採食 観察件数 4 件 (10/24 も観察されている)
2018. 10. 22	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中間羽 胸に赤みが残る 中州水際で休息

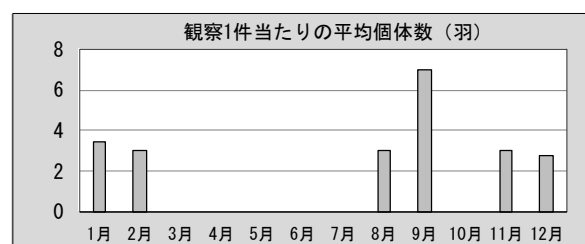
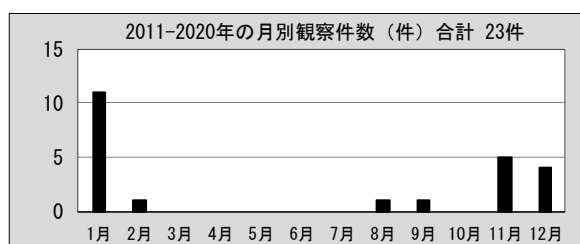
261. ハマシギ *Calidris alpina* Dunlin

シギ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北極圏で繁殖し、冬は温帯地域および熱帯地域に渡って過ごす。日本には、北海道では旅鳥、本州から奄美諸島は旅鳥で一部が越冬する。琉球諸島には冬鳥として渡来する。

繁殖地では草原ツンドラなどに生息、小丘状の乾いた部分で営巣する。非繁殖期には群れて生活する。春の渡りは大群となり、数千、数万羽にも達することがある。中継地や越冬地では、海岸の砂浜、干潟、溜池、水を張った水田、内陸の湖沼や大きい河川の砂泥地などで、水生昆虫の幼虫やミミズ、ゴカイ、ヨコエビなどを採食する。

世田谷区には、8 月から 11 月頃に渡来し、翌年の 2 月頃に渡去する。1995 年以降毎年多摩川で見られ、新二子橋周辺や谷沢川合流付近で群れて採食するのが観察されている。2010 年頃までは一度に 10 羽以上が観察されていたが、その後一度に観察される個体数が少なくなり、2016 年から 3 年間は観察されなかった。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 環境省：準絶滅危惧 全記録数 695 件 1979～2020 年)



○主な観察記録

1979. 12. 02	多摩川(玉川 1)	1 羽	二子橋上流
1980. 02. 01	多摩川(玉川 1)	1 羽	
1995. 04. 21	多摩川	43 羽	
1998. 11. 20	多摩川(野毛 2)	96 羽	53 羽が中州の浅瀬で採餌
2000. 11. 11	多摩川(野毛 2)	22 羽	中州で休んでいる
2002. 01. 22	多摩川	26 羽	
2005. 11. 15	多摩川(玉堤 2)	17 羽	中州を移動しながら採餌
2007. 12. 18	多摩川(鎌田 1)	24 羽	新二子橋下の中州浅瀬で休息と採餌
2008. 01. 21	多摩川	38 羽	
2010. 01. 23	多摩川(鎌田 1)	15 羽	川の上空低く飛び一斉のターンを 3 回し、中州の川崎寄りに降りる
2012. 11. 05	多摩川(野毛 2)	2 羽	大きくなった中州縁で休息
2013. 09. 17	多摩川	7 羽	
2015. 01. 26	多摩川	2 羽	
2019. 12. 16	多摩川(野毛 2)	2 羽	浅瀬で採食
2020. 11. 09	多摩川(鎌田 1)	4 羽	大きな中洲の縁で嘴を背の間に入れ休息

264. キリアイ *Limicola falcinellus* Broad-billed Sandpiper

シギ科

スカンジナビア半島北部、シベリア北部で繁殖し、冬は温帯地域および熱帯地域、または南半球に移動し越冬する。日本には旅鳥として北海道から琉球諸島まで全国に飛来するが、数は少ない。

生息場所は干潟、河口、埋立地の水たまりや水田などである。秋の記録が多い。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 全記録数 1 件 2014 年)

○観察記録

2014. 09. 02	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中州の縁を歩いているとハクセキレイに威嚇される

266. エリマキシギ *Philomachus pugnax* Ruff

シギ科

ユーラシア大陸の高緯度地方から北極圏で繁殖し、冬はアフリカ大陸中東部からインド、東南アジア、ボルネオに渡る。日本には、旅鳥として少数が北海道から九州、琉球諸島に広く飛来する。秋の記録が多い。本州の一部、九州の一部、琉球諸島では越冬する。

湖沼、溜池、水田、干潟など、浅く水に浸かる泥地で見られる。繁殖期にはつがいによる繁殖はせず、雄が 1 か所に集まり、それぞれの雄がそこを訪れる雌に求愛するというレック配偶システムをとる。泥面や水に浸かりながら昆虫、ゴカイ、ミミズ、植物の種子などを採食する。採食中に背や肩羽が逆立っていることが多い。

世田谷区では、2000 年に初めて観察された。春は 3 月から 4 月、秋は 8 月から 10 月頃に立ち寄る。多摩川で見られ、川岸や中州の浅瀬で採食する。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 全記録数 29 件 2000～2017 年 2011 年以降 3 件)

○主な観察記録

2000. 03. 17	多摩川(鎌田 1)	2 羽	雄 2 羽が中州の浅瀬で頭部を水面に入れて採餌 (3/27 まで 4 回観察された)
2000. 09. 19	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌 1 羽が中州でくちばし頭部を水面に入れて採餌 (9/24 迄 3 回観察された)
2002. 04. 09	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄 1 羽が手前の岸で採餌していたが釣り人が近づき中州へ飛ぶ
2002. 11. 14	多摩川	1 羽	二子橋～新二子橋 コンクリート岸辺を歩いていた
2003. 09. 19	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌雄の 2 羽が中州の浅瀬で採餌
2005. 04. 15	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雌 川原で頭部まで水面に入れて採餌
2007. 04. 06	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中州の岸を移動しながら採餌
2009. 08. 13	多摩川	1 羽	
2010. 10. 19	多摩川(野毛 2)	1 羽	雌幼鳥

2012. 08. 20	多摩川(野毛 2)	1 羽	雌幼鳥
2016. 08. 15	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌成鳥 中間羽 緩やかな流れを膝まで浸かって歩く
2017. 04. 02	多摩川(玉堤 1)	1 羽	元船着場中州水際を採餌移動

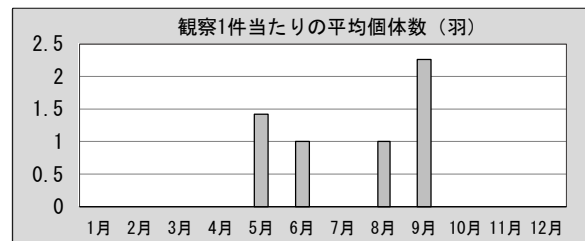
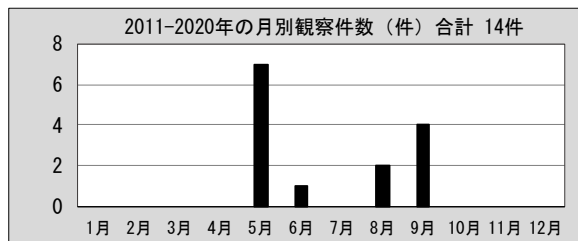
268. アカエリヒレアシシギ *Phalaropus lobatus* Red-necked Phalarope

シギ科

ユーラシア大陸とアラスカ北部、カナダ北部で繁殖し、インド洋沖、南太平洋沖、ペルー沖などで越冬する。日本には、旅鳥として北海道から九州にかけて飛来する。小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島では稀である。

主として海上に生息するが、渡り途中に埋立地の水溜り、港、海岸近くの湖沼、河川、水田に入ることもある。非繁殖期は小群で過ごす。甲虫類、ハエ類、ハチ類、ゴカイ類、エビ類、クモ類などを食べる。

世田谷区では、春は5月から6月、秋は8月から9月に立ち寄る。1996年以降ほぼ毎年見られ、多くは多摩川だが、2011年に野川で観察された例がある。多摩川の流れの少ない浅瀬や中州の入り江などで、浮くように移動したり、クルクル回りながら採食するのが観察されている。(東京都区部：情報不足 全記録数 46件 1971～2020年)



○主な観察記録

1971. 09. 02	多摩川	1 羽	二子橋下
1981. 08. 23	多摩川	50 羽	二子玉川
1985. 09. 15	多摩川	1 羽	
1996. 05. 15	多摩川(野毛 2)	1 羽	雌 川原の浅瀬を浮くように歩いて採餌
1999. 05. 14	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄 浅瀬でくるくる回りながら採餌
2001. 05. 13	多摩川(野毛 2)	1 羽	雄 川原の浅瀬でくるくる回りながら採餌
2003. 09. 03	多摩川(野毛 2)	6 羽	冬羽 4 羽、幼鳥 2 羽 川原のイヌタデの茂った岸付近を浮きながら採餌
2005. 08. 26	多摩川(玉堤 2)	3 羽	濁流の水面近くを下流に向かって飛翔
2007. 05. 15	多摩川(鎌田 2)	1 羽	コアジサシ調査 水面に着水するがすぐ飛び立つ
2009. 05. 09	多摩川(玉堤 2)	3 羽	雄 1 羽、雌 2 羽が中州の浅瀬で移動しながら採食
2011. 09. 25	野川(成城 4)	1 羽	川を遊泳
2013. 09. 09	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌が増水した小さな中州の間を泳いで移動
2015. 05. 11	多摩川	2 羽	雌雄が約 10m の流れを浮いて中州に渡る
2016. 05. 02	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌雄夏羽。細い流れ沿いで採食時オオタカが上空通過すると首を真上に向ける
2017. 08. 21	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌が濁流上空を低空で下流へ
2018. 05. 14	多摩川	1 羽	雄が大きな中州から小さな中州に移動
2019. 09. 10	多摩川(玉堤 1)	6 羽	冬羽 4 羽、中間羽 2 羽 濁流を左岸から中州へ流されながら泳いで渡る
2020. 05. 25	多摩川(野毛 2)	2 羽	夏羽 雌雄 腹下まで水に浸かりながら浅瀬を歩いて採食

269. ハイイロヒレアシシギ *Phalaropus fulicarius* Red Phalarope

シギ科

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北極圏、グリーンランドで繁殖し、アカエリヒレアシシギよりさらに北極寄り繁殖する。冬は南太平洋、南大西洋で過ごす。日本には、旅鳥として北海道から九州、トカラ列島、伊豆諸島に渡来する。

世田谷区では、1972 年以来約 40 年ぶりに野川と多摩川で観察された。以下 4 例の記録がある。(東京都区部：情報不足 全記録数 5 件 1972～2019 年 2011 年以降 4 件)

○観察記録

1972. 05. 02	多摩川(玉堤)	1 羽	コジキッタナ中州 夏冬中間羽
2011. 12. 02	野川(成城 4)	1 羽	遊泳 (同日同じ場所で観察例もう 1 件あり)
2013. 04. 22	多摩川(玉堤 2)	1 羽	雄の生殖羽 対岸寄りの浅瀬を浮くように歩く
2019. 04. 22	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌雄 夏羽 右岸寄り溜まり場をクルクル回り採食

◆ タマシギ科 ROSTRATULIDAE

271. タマシギ *Rostratula benghalensis* Greater Painted Snipe

タマシギ科

小アジアからインド、中国東部、東南アジアの地域、オーストラリア大陸、アフリカ大陸に生息し、繁殖する。日本では、本州北部で夏鳥、本州中部、南西部、四国、九州、沖縄島などでは留鳥として繁殖する。

稲田、湿地の草原、ヨシ原、ハス田、沼地畔の草地、沼沢などに生息し、草むらに潜み静かに歩みながら餌を採る。繁殖期は 4～10 月と長く、ハス田、小池、河畔の水草、ヨシ原などの窪みに皿形の巣をつくる。産座には葉、茎、シイの葉、落ち葉などを敷く。一妻多夫の形をとり、雌は雄の巣に産卵をすませるとつがいの雄を離れ、別の雄を探して求愛する。産卵後は雄が抱卵も育雛も行う。コオロギ、バッタ、カブトムシやミミズ、植物質ではイネ科やタデ科など草の種子を採食する。

世田谷区では、様々な時期に多摩川などで観察されている。(東京都・区部：絶滅危惧ⅠA 類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 16 件 1955～2018 年 2011 年以降 5 件)

○主な観察記録

1955. 10. 13	多摩川(野毛)	1 羽	渡し場河原にて取得した落鳥を寄贈された
1959. 07. 31	多摩川(玉堤)	1 羽	宮内
1967. 08. 27	岡本	3 羽	水田にて
1968. 06. 09	多摩川(玉堤)	1 羽	鳴き声をコジキッタナで聞く
1997. 10. 27	多摩川(野毛 3)	2 羽	雄 1 羽、幼鳥 1 羽が中州の草の生えた岸で採食
2002. 11. 20	多摩川	2 羽	定例調査
2005. 05. 16	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌 中州の草の茂った入り江を移動
2009. 09. 24	多摩川	1 羽	
2012. 10. 22	多摩川(野毛 2)	1 羽	雄が下野毛樋管流れだし沿いを移動採食
2015. 04. 06	多摩川	1 羽	雄が草の茂った水の少ない左岸と中州の間を歩く
2017. 09. 11	多摩川(玉川 1)	1 羽	雌が元野川の細い流れで水草の間を歩く
2017. 12. 28	野川(喜多見 7)	1 羽	淀みで採餌
2018. 11. 19	多摩川(玉川 1)	1 羽	雌が左岸の旧野川の細い流れで採食

◆ ツバメチドリ科 GLAREOLIDAE

273. ツバメチドリ *Glareola maldivarum* Indian Pratincole

ツバメチドリ科

インドからタイ北部、中国やモンゴルの地域、東南アジアや日本 で繁殖し、冬はインドから東南アジア、フィリピン、オーストラリア大陸に渡る。日本には、旅鳥又は不定期に本州から琉球諸島に渡来し、関東以南で局地的に繁殖する。

繁殖期は 3～6 月で、農耕地や荒地で単独またはコロニーをつくり、地上で営巣する。シロチドリやコアジサシのコロニーに混じって営巣することもある。主として、飛翔中のトンボ類やバッタ、イナゴなどを飛びながら食べる。「クリリ」と聞こえる声で鳴く。

世田谷区では、5 月から 7 月に立ち寄り、6 月に最も多く観察されている。多摩川でハチを捕ったりコチ

ドリやコアシサシなどから威嚇されるのが観察されている。(環境省:絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 24 件 1954~2017 年 2011 年以降 7 件)

○主な観察記録

1954. 07. 11	多摩川(鎌田 2)	1 羽	わかもと工場下の川原 (7/16 も 3 羽観察された)
2001. 06. 16	多摩川	1 羽	成鳥が大きなハチを中州から飛び立って捕る 中州で休んでいると近くで営巣しているコチドリ、コアシサシから威嚇される 飛翔しているときはクリリと鳴く (7/3 迄観察された)
2005. 09. 13	多摩川(野毛 3)	1 羽	飛翔しながらクリリと鳴き、時々中州に降りる
2006. 05. 15	多摩川(鎌田 1)	1 羽	上空通過、上流へ
2007. 06. 05	多摩川(鎌田 2)	1 羽	コアシサシ調査 上流からコアシサシ営巣地の上空に飛来、コアシサシにモビングされるが中州に降りる
2009. 06. 22	多摩川(玉堤 1)	1 羽	「クリリ」と鳴きながら中州の縁に降りる
2011. 06. 07	多摩川(野毛 2)	2 羽	中州で休息
2012. 05. 28	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中州の縁にいたが急に「クリ クリ」と鳴いて下流へ飛び立つ
2013. 05. 21	多摩川(玉堤 2)	1 羽	水面上空や小さな中州に降りるのを繰り返し、時々クリクリと鳴く
2015. 06. 01	多摩川(野毛 2)	1 羽	中州の縁で休息、コチドリに威嚇され飛び立つがすぐ同じ場所に戻る
2016. 05. 16	多摩川(玉堤 2)	1 羽	小さな中州にいたがイソシギに威嚇され 10m 位離れた下流中州に移動する
2017. 05. 22	多摩川(野毛 3)	1 羽	川原上空を鳴きながら飛び、中州に降りる

◆ カモメ科 LARIDAE

278. ミツユビカモメ *Rissa tridactyla* Kittiwake

カモメ科

北ヨーロッパから極東ロシア、カムチャツカ、アリューシャン列島、アラスカ西岸、北東カナダ、グリーンランドなどの北極海沿岸や島々で繁殖する。冬期には温帯域にまで南下する。日本には、冬鳥として北海道、本州北部・中部などに、その他の地域には旅鳥として渡来する。北海道の知床半島では一部が越冬した例がある。

外洋性のカモメで、非繁殖期は海岸よりむしろ洋上に多く、群れで海上を飛び交う。稀に海岸に現れ、岩礁や防波堤などで他のカモメ類に混ざって休息、採食する。内陸の河川や湖沼に現れることもある。水面近くを飛びながらついばみ捕ったり、泳ぎながら水中の魚やイカ、貝、エビなどを食べる。

世田谷区では、4 例の記録がある。(全記録数 4 件 2001~2015 年 2011 年以降 2 件)

○観察記録

2001. 02. 19	多摩川(玉堤 2)	1 羽	成鳥 ユリカモメ、セグロカモメ、カモメと川原で休んでいる
2002. 01. 22	多摩川(鎌田 1)	1 羽	第 1 回冬羽 中州でユリカモメ、セグロカモメ約 800 羽と休んでいる
2013. 10. 28	多摩川(鎌田 1)	1 羽	成鳥 中洲の縁に降りたり飛上ったりする
2015. 12. 01	多摩川(野毛 3)	1 羽	成鳥 川面上空約 20m を下流から上流へ 河口から 16.4km 地点で観察、同一と思われる個体が 17.4~17.6 km の中州でユリカモメと休息しているのを確認

286. ユリカモメ *Larus ridibundus* Black-headed Gull

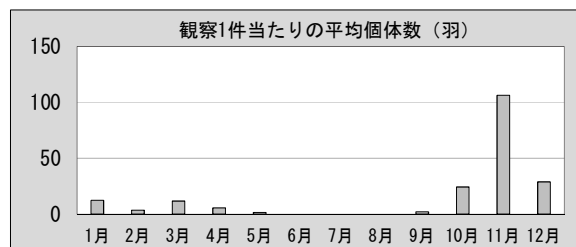
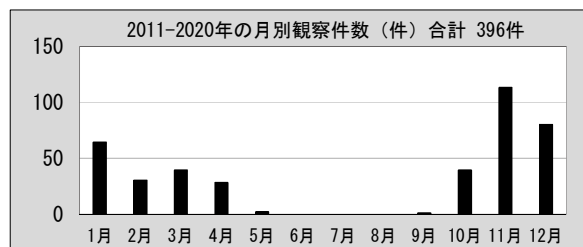
カモメ科

北ヨーロッパ、西ヨーロッパからカムチャツカにかけてユーラシア大陸の中緯度地方に広く分布し、沿岸や内陸の湖沼で繁殖する。冬は地中海地域やアフリカ大陸熱帯域、東南アジア、東アジアに南下する。日本では、北海道では旅鳥。本州、四国、九州、琉球諸島などに冬鳥として渡来し、普通に見られる鳥である。東京湾では夏期でも少数の残留個体が見られる。

海岸、漁港、干潟、湖沼、河川中・下流に生息、水田などでも姿が見られ、日本では最も内陸の水系まで入ってくるカモメである。水面を羽ばたき飛びながら魚をくわえ捕ったり、泳ぎながら、あるいは地上を歩きながら、ついばみ捕る。早朝に内陸に入っても夕方には海に戻り、ねぐらは海上にとるのが普通だが、広い川や湖沼をねぐらとすることもある。年中、大小の群れで生活し、大群にもなる。

世田谷区には、10 月頃に渡来し、ピークは 11~12 月、翌年の 4 月頃に渡去する。主に多摩川で観察さ

れ、川崎市の平瀬川との合流点付近で多く見られている。野川、仙川でも見られる。川面、中州、川原、草地での休息の姿や、魚、バッタ、ミミズなどを採食する様子が観察されている。飛来数の多かった時期には、夕方、河口に向かう際、集団で上昇気流を捉えて、渦巻き状に旋回上昇する“カモメ柱”を形成するのが観察されたこともある。カワウの漁にサギ類と一緒に行動する姿が見られる。大小様々な大きさの群で行動する。1995年には一度の観察で5,500羽を記録されたが、2000年頃からは観察件数、群の大きさとも減少傾向にある。4月頃に頭が黒い夏羽の個体が見られることがある。「東京都の鳥」に指定されている。(全記録数 2,716件 1946～2020年)



○主な観察記録

1946. 07. 22	多摩川(玉堤)	1羽	下流より飛来して川に着水 コジキタナ所見 (7月の観察は極異例)
1953. 03. 24	多摩川(野毛)	22羽	渡し場付近を鳴きながら旋回し、下流へ向かう
1958. 04. 28	多摩川(野毛)	1羽	頭が黒い 赤岩多摩川にて見る
1968. 01. 14	多摩川(玉堤)	3,000羽	コジキタナ (1/24 まで2,000～1,500の断続的な観察記録あり)
1969. 01. 22	多摩川(玉堤)	120羽	コジキタナに降りていたが内3羽が油で汚れてまっ黒になっていた
1989. 11. 26	多摩川(玉堤)	1,300羽	(3/5 まで1,200～500の断続的な観察記録あり)
1995. 12. 28	多摩川	5,500羽	
2000. 03. 24	多摩川(玉堤1)	3,980羽	約3,000羽が、河原が増水で降りられずグランドの芝生で休む
2000. 11. 21	多摩川	840羽	約450羽が冠水した中州に降りられず緑地で休む(玉堤1) 15時半頃300～400羽ユリカモメの柱ができる(鎌田1)
2004. 12. 09	多摩川(鎌田1)	326羽	中州で休んでいた約200羽がオオタカに襲われ飛立つ 下流に向かい二子橋下流で渦状に舞上がる 上流から戻ってきた約50羽が合流
2004. 12. 20	多摩川(玉堤2)	210羽	1羽が緑地で捕った乾いたミミズを川岸に運び水に浸して食べる
2010. 11. 15	多摩川(野毛2)	391羽	内48羽が緑地を移動しながら採食、1羽がバッタを捕食
2010. 12. 01	仙川	30羽	定例調査
2011. 04. 14	多摩川	4羽	1羽の頭部が黒色
2011. 11. 08	多摩川(玉川3)	125羽	58羽が急流の浅瀬で流れに向かって次々に水面に降りアユを捕る
2012. 11. 12	多摩川	614羽	
2013. 11. 21	多摩川(鎌田1)	334羽	新二子橋下中州付近～平瀬川合流点前浅瀬
2014. 11. 08	野川(喜多見)	120羽	川で小魚を捕食、飛翔
2016. 12. 12	多摩川(玉堤1)	337羽	148羽がカワウの漁をしている周囲を飛び回り6羽が魚を捕る
2017. 11. 01	多摩川(鎌田1)	1,200羽	新二子橋下中州上流側浅瀬 休息、採食
2018. 01. 21	多摩川(野毛2)	18羽	カワウが漁をしている近くの岸に集まる
2019. 11. 29	野川(喜多見7)	6羽	橋手すりで休息 川に降りて遊泳、飛翔
2020. 03. 11	多摩川(鎌田1)	23羽	定例調査 18.6km付近 平瀬川合流地点

287. ズグロカモメ *Larus saundersi* Saunders's Gull

カモメ科

世界的に個体数が少なく、5,000羽程といわれる。中国東北部の内陸湖沼で繁殖していると思われ、冬はロシア極東、中国、朝鮮、日本、台湾の沿岸部に南下する。日本には本州、四国、九州、琉球諸島などの沿岸地域に冬鳥として、その他には旅鳥として、いずれも少数が渡来する。九州の博多湾、有明海並びに沖縄では比較的よく見られる。

干潟、海岸、海上に生息。水辺を往復飛翔して餌を探す。繁殖の場所と生態など、まだ殆ど知られていない。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 1件 2009年)

○観察記録

2009. 03. 16 多摩川 1羽 第1回冬羽と思われる ユリカモメ 5羽と中州で休息 ユリカモメより小さく嘴は黒く短い 脚が赤い

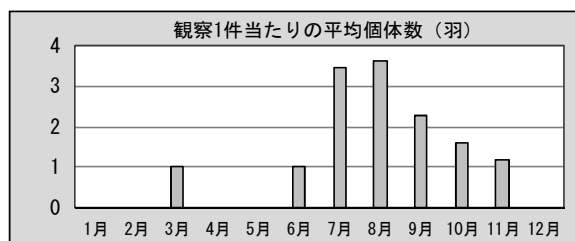
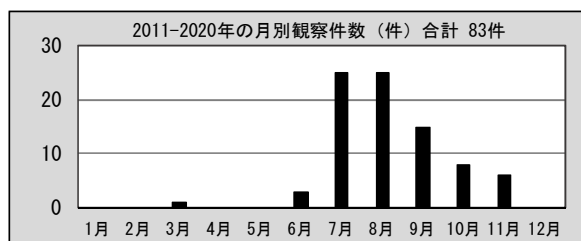
293. ウミネコ *Larus crassirostris* Black-tailed Gull

カモメ科

世界的にも、狭い範囲のみに生息する種である。日本の沿岸や湖沼、ウスリー地域から朝鮮、中国東部一帯の沿岸で留鳥として繁殖する。冬は、一部がサハリン、大部分は中国南東部の沿岸に生息する。日本では、本州および周辺諸島では留鳥、北海道とその周辺では夏鳥として沿岸、島々で繁殖し、冬鳥として四国、九州、琉球諸島などの広い海域に生息する。

北海道の天売島や知床半島、青森県蕪島、岩手県椿島、宮城県江島、山形県御積島、島根県経島、東京都八丈小島、長崎県男女島などの島々では特に大きなコロニーを形成して繁殖し、その多くはウミネコ繁殖地として国の天然記念物に指定されている。繁殖期は4~7月。巣は、海岸の崖、岩礁、防波堤など建造物にも、枯れ草などを集めて浅い皿形につくる。2、3個の卵を雌雄交代で抱卵、25日程で孵化、その後46日程で巣立つ。常に群れで生活するが、離合集散、群れとして安定したものではない。沿岸海域にすることが多く、岩礁や海岸、漁港、河口部に多く生息。河川を遡り、水田や、市街地の川や池にも現れる。上空から水面に降りて採食するが水中にもぐることはない。漁船に群がったり、イワシの群れを狙うウミスズメなどにつきまとい、上空を群がって旋回し、浮き上がる魚を捕ったり、小型の魚、エビ、カニ、ゴカイ、漁船や漁港で捨てられた魚などを食べたりする。

世田谷区では、6月頃から11月頃にかけて見られる。関東地方周辺で周遊していると思われる若鳥が6月下旬から飛来、1か月程遅れて成鳥や幼鳥が加わり、個体数が多くなる。主に多摩川で見られるが、野川などでの少数例もある。浅瀬や川岸で、魚や、飛んでいる昆虫を捕ったり、死んだ魚をついばむ姿、橋の照明灯などで休息している姿などが観察されている。2003年頃からは観察件数が激減し年間数例のみとなった。特に2016年以降はほとんど観察されていない。(東京都区部：留意種① 全記録数 1,026件 1952~2020年)



○主な観察記録

1952. 10. 06	多摩川(玉堤)	45羽	
1958. 09. 18	多摩川(野毛)	50羽	20羽の群が赤岩多摩川を上流より下流に飛行
1969. 09. 15	多摩川(玉堤)	14羽	
1972. 09. 24	多摩川	12羽	ユリカモメ、アジサシの群れと
1979. 08. 09	多摩川	73羽	丸子橋~二子橋
1991. 08. 05	多摩川(玉堤)	32羽	
1995. 08. 03	野川	2羽	
1999. 10. 21	多摩川(野毛3)	2羽	成鳥1羽が川原で死んでいるアユを突く
2001. 09. 14	多摩川(玉堤2)	7羽	若鳥1羽が低空で飛んでいて水面で跳ねた小魚を捕る
2003. 07. 12	多摩川(野毛2)	1羽	若鳥 川原にいて、飛んでいるハチを首を伸ばして捕る
2003. 08. 05	多摩川(玉堤2)	3羽	若鳥1羽が、釣り人が釣ったアユを手元にくる寸前で奪い河原で食べる
2006. 08. 22	多摩川(野毛2)	1羽	川岸で死んだコイを突いている
2007. 09. 19	多摩川	56羽	定例調査
2009. 10. 22	多摩川	95羽	

2011. 08. 02	多摩川(鎌田 1)	21 羽	成鳥 2、若鳥 3 羽 橋の照明灯で休息
2013. 11. 04	野川(成城 3)	1 羽	足を痛め川辺で休息
2015. 07. 21	多摩川(野毛 2)	1 羽	若鳥 川面上空を飛翔中に急降下して水面の小魚をつまみ捕る
2017. 09. 11	多摩川(鎌田 1)	2 羽	成鳥が橋の照明灯で休息
2018. 04. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	第一回冬羽 セグロカモメと中州で休む
2020. 08. 05	多摩川(玉川 3)	1 羽	川辺に佇んでいた

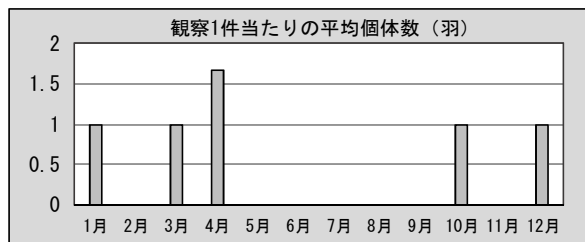
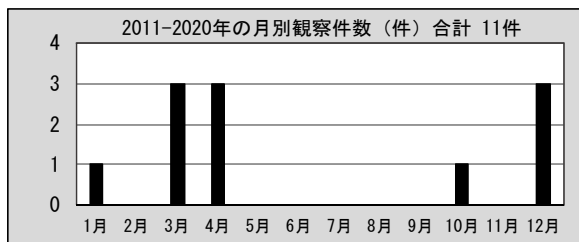
294. カモメ *Laruscanus* Mew Gull

カモメ科

ヨーロッパ北西部から、ユーラシア大陸の亜寒帯域を経て、カムチャツカ、サハリン、アラスカ、カナダ北西部まで、南はキルギス、バイカル湖などを含む広い地域で繁殖し、冬は温帯域まで南下する。日本には、冬鳥として全国に広く渡来する。

世界的には、海沿いに限らず、大陸内部の河川、湖沼などの水系にも広範に生息、繁殖する。冬期は主に海岸で見られ、港湾や河口、沿岸、岸から遠くない洋上でも見られる。同種での集合性が強い。採食はホバリングから舞い降りて嘴ですくい取ったり、水面、地上でついばんだりする。海岸では魚、無脊椎動物、甲殻類などを食べる。淡水では魚、昆虫、カエルなどを捕る。また、捨てられた屍肉をあさったり、他の海鳥を襲って食物を奪い取ったりもする多様な食性を持つ。

世田谷区では、10 月から翌年 4 月にかけて、主に多摩川で、毎年のように見られている。2004 年には 12 羽が観察されているが、他は一度の観察個体数は少ない。2005 年以降、渡来件数も大きく減って、見られなかった年もある。(全記録数 126 件 1952～2019 年)



○主な観察記録

1952. 10. 06	多摩川(玉堤)	1 羽	
1976. 09. 13	上馬	1 羽	保護 東京都傷病鳥獣記録
1996. 01. 21	多摩川(鎌田 1)	2 羽	2 羽が中州で休んでいる
1998. 02. 02	多摩川(玉堤 1)	2 羽	2 羽が中州で休んでいる
1999. 01. 11	多摩川(玉川 3)	1 羽	1 羽が右岸にいる人からパン屑をもらい浅瀬に降りて食べる
2000. 03. 24	多摩川(玉堤 1)	5 羽	増水で河原に降りられず、ユリカモメ約 3000 羽とグランドで休んでいる
2001. 01. 12	多摩川(玉堤 2)	3 羽	中州で休んでいる その内の 1 羽は第 1 回冬羽
2001. 03. 10	仙川	1 羽	
2004. 10. 30	多摩川	12 羽	(10/28 にも 10 羽の記録あり)
2005. 11. 21	多摩川(玉堤 2)	1 羽	中州の浅瀬でユリカモメ約 120 羽と休んでいる
2007. 01. 18	多摩川(玉堤 2)	1 羽	ユリカモメ約 80 羽と中州の岸で休んでいる
2010. 03. 22	多摩川(玉堤 1)	1 羽	第 1 回冬羽、浅瀬で休息
2013. 04. 11	多摩川(玉堤 1)	2 羽	太田区境中州で休息
2015. 12. 07	多摩川(鎌田 1)	1 羽	成鳥冬羽 小さな中州で休息
2018. 04. 10	多摩川(玉堤 1)	1 羽	第一回冬羽 セグロカモメと中州で休む
2019. 12. 03	多摩川(野毛 2)	1 羽	第二回冬羽 中州で休む

296. シロカモメ *Larus hyperboreus* Glaucous Gull

カモメ科

スカンジナビアからユーラシア大陸、北アメリカ大陸にわたる北極圏、グリーンランドで留鳥あるいは夏鳥として繁殖する。冬期には温帯地域まで南下する。日本では、冬鳥として北海道、本州北部で普通に

見られ、北海道では越夏例もある。本州中部以南には、旅鳥として少数観察されている。

世田谷区では、下記6例の観察記録がある。(全記録数 7 件 1952～2020 年 2011 年以降 2 件)

○観察記録

1952. 10. 10	多摩川	1 羽	
2000. 11. 27	多摩川(野毛 2)	1 羽	成鳥冬羽が川岸で羽繕い
2008. 04. 01	多摩川	1 羽	(4/12 にも 1 羽見られた)
2010. 01. 08	多摩川(玉川 1)	1 羽	第 2 回冬羽
2013. 01. 16	多摩川(野毛 2)	1 羽	
2020. 01. 13	多摩川(野毛 2)	1 羽	第二回冬羽が上流から飛来し中州で休息中のセグロカモメ傍に降りる

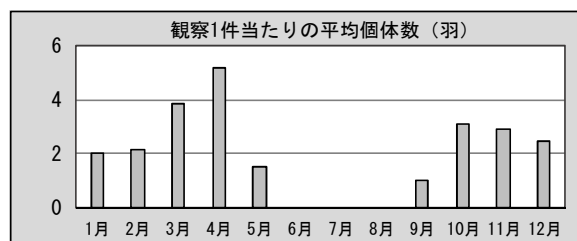
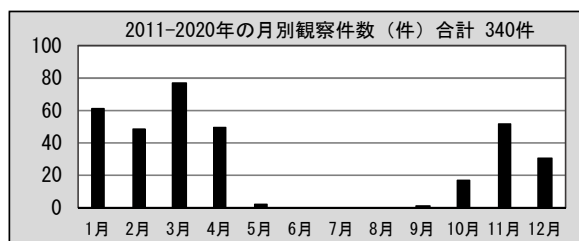
299. セグロカモメ *Larus argentatus* Herring Gull

カモメ科

ユーラシア大陸の高緯度地方からカスピ海、バイカル湖、モンゴル、中国東北部、北西アフリカ、北アメリカ大陸の高緯度地方の海岸、島々、湖沼地帯など広い範囲で、夏鳥あるいは留鳥として繁殖し、冬は温帯から熱帯地域の沿岸にまで南下して広範囲に生息する。日本には、冬鳥として北海道から琉球諸島にかけて全国的に広く渡来する。東京湾の港湾、河口部などで少数の個体が残留することがある。

沖合、沿岸部、港、河川、湖沼などに生息し、大群で洋上に浮いてねぐらをとることもある。水中の魚の他、水産加工の廃棄物や魚などの死肉、貝、ヒトデなどを食べる。

世田谷区では、10 月頃渡来し、翌年の 4 月頃に渡去するが、稀に夏期に観察されることがある。主に多摩川、中でも、新二子橋周辺や谷沢川合流点付近で見られることが多い。中州縁や橋の照明灯で休む姿、空中からダイビングして小魚を捕ったり、コイやマルタの死骸を食べている姿などが観察されている。観察件数は 2003 年以降、減少傾向にある。(全記録数 1,944 件 1963～2020 年)



○主な観察記録

1963. 03. 15	多摩川	1 羽	
1987. 02. 16	多摩川	16 羽	成鳥 14 羽、若鳥 2 羽、ユリカモメと一緒に、新二子橋上流
1992. 01. 21	野川	1 羽	(1/26 にも見られている)
1996. 03. 02	多摩川	79 羽	
1997. 03. 31	多摩川(玉堤 1)	10 羽	2 羽がお互いをけん制しながら川原で死んでいる大きなコイを食べている
1999. 03. 26	多摩川	24 羽	川原 4 カ所で 6 羽がコイやマルタを食べている (鎌田 1、上野毛 2、野毛 2)
1999. 08. 12	多摩川	1 羽	(4/20 日から継続的に 1 羽が観察され、越夏したと思われる)
2000. 03. 04	多摩川	70 羽	
2002. 01. 19	野川	1 羽	ユリカモメの群れに 1 羽だけ
2004. 03. 26	多摩川(玉堤 1)	18 羽	1 羽が中州の岸で死んだフナを食べている
2006. 03. 06	多摩川	51 羽	
2010. 12. 17	野川(成城 4)	1 羽	コイの死骸を採食
2011. 02. 22	仙川	1 羽	宮前橋の少し上流で鯉の死骸を食べていた
2012. 04. 09	多摩川(鎌田 1)	17 羽	1 羽が寄り州の水際でマルタウグイ(約 40cm)の腹部を突いている
2013. 01. 28	多摩川(玉堤 1)	2 羽	1 羽が川面上空約 5m から水面に数度ダイビングする
2015. 11. 11	多摩川	14 羽	定例調査 1 羽が平瀬川出合いの中州先端部カワウとコサギの群れに混っていた 東名高速道の少し上流でセグロカモメのカモメ柱(12 羽)

2016. 04. 11	多摩川(野毛 2)	8 羽	1 羽が川岸でかなり腐食したマルタの頭部を食べる
2017. 10. 28	多摩川(鎌田 1)	25 羽	二子橋・新二子橋間および新二子橋上流 上空低く飛び回る
2019. 03. 13	多摩川	14 羽	定例調査
2020. 04. 06	多摩川(野毛 2)	1 羽	上空から川面にダイビングし 30cm 位の魚を捕り泳いで中州に運ぶ

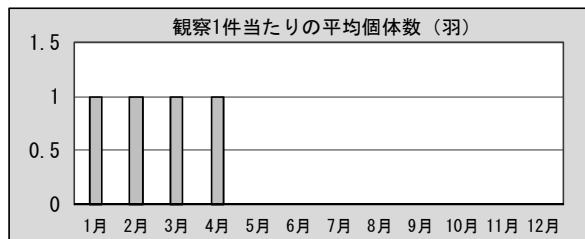
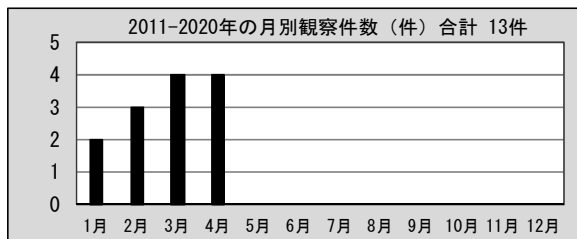
301. オオセグロカモメ *Larus schistisagus* Slaty-backed Gull

カモメ科

北太平洋、オホーツク海の地域、北海道を南限とする沿岸で、留鳥あるいは夏鳥として繁殖する。冬は中国北部、朝鮮、日本の海域に南下する。日本では、北海道、本州北部で留鳥として繁殖し、天売島、知床半島、大黒島などでは繁殖コロニーが知られている。ほぼ全国に冬鳥として生息、九州以南には稀に飛来する。関東周辺では夏期に少数の個体が残留することが知られている。

繁殖期は5～8月、海岸の崖、岩礁、岬などに形成される大コロニーに集まる。斜面、岩棚に浅い窪みを作り、枯れ草や海藻など集め皿形の巣を作る。海岸、漁港、河口部などに生息、北海道では海岸地域の市街地や牧場にも入ってくる。海岸の防波堤に止まって休息する姿がよく見られる。水面を飛びながら魚やイカなどをついばみ捕る。雑食性で、動物やその死骸も食べ、漁港、農地や牧場などのゴミ捨て場に集まり、ゴミを漁ることも多い。ウミネコやウミスズメ類の卵やヒナ、小型の成鳥なども捕食するので、ウミガラスなどが絶滅に追い込まれている一因ともいわれる。

世田谷区では、11月頃から、翌年の4月にかけて観察される。1996年に初記録以来、毎年観察されていたが、2006年から観察件数が減り、2015年からは観察が途絶えたが、その後2019、2020年には1回ずつ観察されている。全て多摩川で観察され、1～3羽が中州などで休む姿や、コイを捕え、中州に運んで食べる姿なども観察されている。(環境省：準絶滅危惧 全記録数 283件 1996～2020年)



○主な観察記録

1996. 03. 09	多摩川	1 羽	
1998. 11. 13	多摩川(玉堤 2)	1 羽	川原で死んでいるコイの目を突つつく (1998/11/13～1999/3/17 まで継続観察)
1999. 12. 20	多摩川(鎌田 1)	2 羽	中州で休んでいる (1999/11/9～2000/3/24 まで1、2羽が継続観察された)
2000. 01. 05	多摩川(鎌田 1)	1 羽	水に浸りながら羽づくろい (1999/11/9～2000/3/24 まで1、2羽を継続観察)
2002. 04. 04	多摩川	3 羽	年最多羽数 (2001/11/1～2002/4/13 まで1～3羽が継続観察された)
2003. 04. 19	多摩川(玉堤 1)	1 羽	成鳥夏羽 早朝下流から飛来し中州で休む (2002/10/8～2003/6/3 まで1、2羽が継続観察された)
2005. 02. 22	多摩川(野毛 2)	1 羽	水面に降りて 20 cm位のコイを捕らえ中州まで運んで食べる (2004/11/21～2005/4/5 まで1、2羽が継続観察された)
2006. 03. 09	多摩川(鎌田 1)	3 羽	中州水際で休息 (3/9～4/17 まで1～3羽)
2008. 03. 27	多摩川(玉川 1)	3 羽	中州最上浅瀬 休息・飛翔 (2007/12/17～2008/4/12 まで1～3羽を継続観察)
2010. 02. 02	多摩川(鎌田 1)	1 羽	セグロカモメと一緒に (1/3～4/19 まで9件観察された)
2012. 03. 20	多摩川	1 羽	(2/8～4/19 まで4件が継続観察された)
2014. 04. 08	多摩川(玉堤 1)	1 羽	第1回冬羽 中州縁で休息 (3/17～4/8 まで4件が継続観察された)
2019. 02. 12	多摩川(玉堤 1)	1 羽	成鳥冬羽が浅瀬で死んでいるコイを食べる
2020. 01. 02	多摩川(鎌田 1)	1 羽	成鳥 橋の照明灯で休息

307. コアジサシ *Sterna albifrons* Little Tern

カモメ科

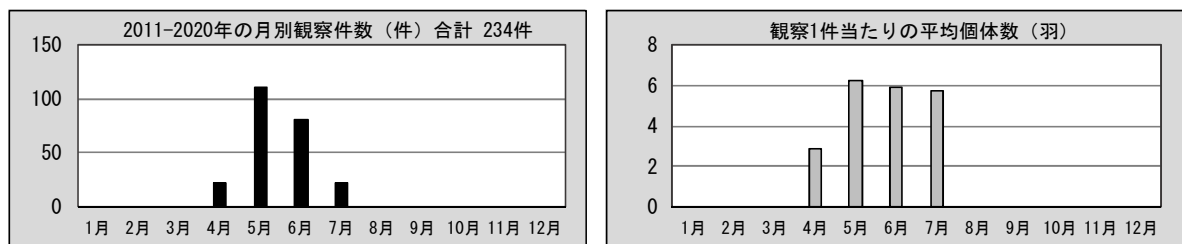
世界各地温帯から熱帯域、中でもユーラシア大陸、アフリカ大陸、北アメリカ大陸、オーストラリアの沿岸で繁殖する。繁殖地が広いが分散している。北方のものは冬期、熱帯域、南半球にまで渡る。日本で

繁殖した個体が台湾、フィリピン、パプアニューギニア、オーストラリア、パラオ諸島で発見された例がある。日本では、北海道などには旅鳥として渡来、本州から琉球諸島には夏鳥として渡来し繁殖もする。

海岸の砂浜、河川の州の砂礫地などで集団で生息する。繁殖期は5～7月、この時期オスからメスへの求愛給餌が頻繁に見られる。コロニーを形成、外敵が近づくと一斉に飛び立ってモビングを行い、卵やヒナを共同防衛する。捕食者が近づきにくい小島や中州などの砂地、砂礫地に浅い窪みを作って巣とするが、近年では東京都大田区の森ヶ崎水再生センターの屋上など人工営巣地でも営巣している。1巣に3個程の卵を産む。雌雄交代で抱卵、20日程で孵化、ヒナは準早成性、2～3日雌の抱雛の後、20日程で飛べるようになるが、数か月間両親の給餌を受ける。コロニーの近くに魚の豊富な餌場を持つことが多い。水面から3～12m位の上空を「キリッ、キリッ」と聞こえる声で鳴きながら飛び回り、ホバリングして魚を見つけると急降下して水面近くの小魚を捕る。

世田谷区では、4月中旬に渡来し、7月頃に渡去する。主に多摩川で観察されるが、野川などの上空を通過した観察例がある。1960年頃まで、多摩川で毎年3～8巣繁殖していたが、その後観察されなくなった。1998年頃から飛来数が急増し、2001年に繁殖が復活した。2002年には1回の観察で170羽という記録もあり、営巣も多数見られるようになった。中州の砂礫地などに集団で営巣するが、大雨による卵やヒナの流出や、カラス類、チョウゲンボウなどによる捕食により営巣地を巣立つ幼鳥はわずかな数であった。観察件数、個体数は共に2002年から減少傾向にあったが特に2010年からは急速に減少している。営巣数も2010年から減少し、2014年以降では2018年に1件見られたのみである。

野鳥ボランティアでは2002年から2015年まで継続して多摩川での「コアジサシ繁殖調査」を行った(表3-1)。繁殖調査後も2018年に繁殖が確認されている。カモメ類では唯一、身近に繁殖などの生態が多数観察されている貴重な種であり、採食、求愛給餌、捕食者へのモビング、子育てなど色々な生態が見られていた。(東京都区部：絶滅危惧ⅠB類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 1,727件 1948～2020年)



表Ⅲ-1. 野鳥ボランティアによる「多摩川コアジサシ繁殖調査」記録

調査年	成鳥		最多巣数		最多ヒナ数		最多幼鳥数		集団営巣地 (いずれも中州)
	月/日	羽数	月/日	羽数	月/日	羽数	月/日	羽数	
2002	6/01	120	6/01	66	6/08	34	6/30	39	上野毛2、玉堤1
2003	5/18	62	6/24	17	6/24	2		0	上野毛2、玉堤1
2004	6/20	90	6/19	37	6/26	15	7/10	13	上野毛2
2005	6/08	120	6/14	75	6/21	19	7/05	14	上野毛2
2006	6/15	53	6/15	38	7/20	10	8/01	1	鎌田2、上野毛2
2007*	5/26	123	6/09	84	6/10	31		0	鎌田2、鎌田1、上野毛2
2008	6/21	90	6/21	49	7/12	12	7/19	12	玉堤1
2009	6/06	80	6/06	60	6/20	24	7/11	4	上野毛2、玉堤1
2010	5/22	52	6/10	6	6/13	2		0	鎌田1、玉堤1
2011	5/09	32		0		0		0	
2012	6/05	31	6/05	16	6/18	1		0	玉堤2、玉堤1
2013	5/15	41	6/01	1		0		0	玉堤1
2014	5/14	24		0		0		0	
2015	7/22	53		0		0		0	

各年度の調査結果から、成鳥、巣、ヒナ、幼鳥それぞれについて、観察された最多の数とその日付を表示。但し、2007*年は1回目の繁殖の早い時期に増水により卵が流出したため、2回目の繁殖が見られた。各数値は1、2回目の合計数字(表示の日付は1次繁殖の確認日)。

集団営巣地の玉堤1(丁目)は多摩川河口から2002、2003年は14.2km、2008年以降は14.5kmの地点、玉堤2は14.7km、上野毛2は17.0km、鎌田1は18.5km、鎌田2は19.5kmの各地点に位置する。いずれも中州が営巣地。

○主な観察(含む繁殖)記録(上記のデータに含まれる記録を含む)

1948. 04. 12	多摩川	2羽	本年渡来初認
1949. 06. 30	多摩川(鎌田)	8羽	4巢 3巢各1卵、1巢2卵 わかもと工場下の川原
1951. 06. 21	多摩川(鎌田)	12羽	6巢 3巢各1卵、2巢各2卵、1巢3卵 わかもと工場下の川原
1952. 09. 06	多摩川(野毛)	30羽	幼鳥も多数混じり、赤岩付近の川原に降りていた(この年は9/30にも30羽、遅くまで観察)
1955. 08. 20	多摩川(野毛)	58羽	渡し場付近を遊飛中
1960. 07. 24	多摩川(玉堤)	87羽	コジキッタナ
1962. 05. 16	多摩川(玉川3)	2羽	2巢 2卵、3卵 二子橋上流
1969. 08. 20	多摩川(玉堤)	48羽	コジキッタナ
1996. 05. 15	多摩川	30羽	
1998. 05. 08	多摩川(上野毛2)	30羽	雄が中州の岸で雌にプレゼント後に交尾
2000. 05. 06	多摩川(玉堤1)	32羽	14羽が中州の岸で休んでいる 雄1羽が川岸で雌に小魚をプレゼントするが受け取ってもらえず自分で食べる
2002. 06. 01	多摩川(上野毛2)	120羽	コアジサシ調査 66巢 雛18羽(7巢)、カラス類が営巣地上空にくると、全数が一斉に飛び立ちモビングする
2002. 06. 13	多摩川(上野毛2)	170羽	親鳥は雛に近づいたヒバリの雛1羽を嘴で突く コアジサシ雛1羽がとなりの親と雛2羽に近づきその親子から激しく突かれ逃げ惑う
2003. 06. 24	多摩川(上野毛2)	30羽	コアジサシ調査 17巢 抱卵 雛2羽(1巢) カラス類、チョウゲンボウの飛来時、モビングかける
2004. 06. 20	多摩川(玉川1)	106羽	6巢 雛6羽 同じ親の雛でも灰色系と茶色系の2色に別れる
2005. 06. 17	多摩川(玉川1)	159羽	成鳥1羽がコロニーで自分の雛か? よその雛か? 雛2羽を別々にくわえ上空から川に捨てる
2005. 06. 24	多摩川(玉川1)	175羽	雛2羽が中州で紙パックの陰で休んでいる 約90羽がコロニーに入ったハシボソガラス1羽、ハシブトガラス1羽を激しく威嚇するが雛2羽を捕食される(※巣の数不明、多数あった模様)
2007. 05. 26	多摩川(上野毛2、鎌田2)	116羽	コアジサシ調査 27巢 抱卵 オオタカが中州上空を旋回、抱卵中の数羽を残し全て飛び立ちモビング
2007. 07. 09	多摩川(上野毛2、鎌田2)	24羽	コアジサシ調査 19巢 抱卵抱雛19か所 ヒナ5羽(2か所、2羽は親から60cmほど離れる、3羽は巣の近く)(2次営巣)
2009. 06. 23	多摩川(玉堤1)	80羽	コアジサシ調査 50巢 抱卵・抱雛、雛22羽 チョウゲンボウ7回飛来し雛2羽捕食 ハヤブサ1羽飛来したがモビングで撃退
2013. 06. 25	多摩川(鎌田1)	16羽	成鳥2羽、幼鳥1羽 小さな中州で幼鳥が成鳥から給餌をうける
2015. 07. 22	多摩川(玉堤1)	53羽	大田区境~15km付近順次18羽が下流方向へ 等々力排水樋管前中洲から約35羽が一斉に飛び立つ 強風に煽られ約10羽が再び中州で休息 コアジサシ調査報告に使用
2017. 06. 14	多摩川	44羽	定例調査 兵庫島公園前本流でダイビングを繰り返す
2018. 06. 25	多摩川(上野毛2)	4羽	成鳥4、雛2羽 親鳥が魚を咥えて中州の草が疎らに生えている砂礫地中央に降り雛2羽に給餌。親鳥は雛に給餌後立ったまま羽を広げ影を作る
2020. 04. 27	多摩川(野毛2)	2羽	1羽が川面上空を下向きに飛翔を繰り返し、1羽は小さな中州で休息

311. セグロアジサシ *Sterna fuscata* Sooty Tern

カモメ科

太平洋、インド洋、大西洋で北緯30°から南緯34°辺りの熱帯・亜熱帯域で繁殖する。冬は海洋に生息する。日本では、小笠原群島、南鳥島、硫黄列島、八重山諸島、尖閣諸島など一部の島々に夏鳥として渡来、繁殖する。その他、本州中部以南に旅鳥として飛来する。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数1件 1966年)

○観察記録、

1966. 09. 25 多摩川(野毛) 2羽 10:00頃 谷沢川流れ出し先に飛来

312. ベニアジサシ *Sterna dougallii* Roseate Tern

カモメ科

アフリカ東岸からインド洋、大洋州、中国、北米東海岸、カリブ海、中南米、一部西ヨーロッパなど世界各地温帯から熱帯域の沿岸、島々、海洋に生息し繁殖する。北域のものは冬に熱帯域まで南下する。世界的に広い範囲で局地的に散在する。日本には九州北部のほか種子島から八重山諸島に夏鳥として渡来、繁殖するが、数は多くない。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数1件 2007年)

○観察記録

2007. 09. 07 多摩川(鎌田) 1羽 台風通過後、河川が増水し、アジサシ、ハジロクロハラアジサシなどと共にグランドで休息

314. アジサシ *Sterna hirundo* Common Tern

カモメ科

ヨーロッパからカムチャツカまでのユーラシア大陸温帯域、北・西アフリカ、北アメリカ大陸北東地域などを主とする広い範囲で繁殖し、冬は熱帯や南半球の広い範囲の海沿い地域に渡って過ごす。日本では、北海道、本州、九州などに旅鳥として渡来する。稀に越夏し、東京都、兵庫県などで繁殖が確認されている。春に沖合を大群で北上するのが観察されている。

海岸、干潟、湖沼、河川などに生息する。水面上1～6m位の高さから水面にダイビングするが深くは潜らない。飛翔しながら水面に近づいてすくい捕ることもある。魚や甲殻類を捕えるが、他のアジサシから奪いとることもある。年中群れで過ごすが、2～10羽ぐらいの小群でいることも多い。

世田谷区には、5月から6月、8月から11月に立ち寄る。多摩川で休息や飛翔しているところが見られている。台風通過後など荒天後の観察例が多い。(全記録数79件 1959～2019年 2011年以降5件)

○主な観察記録

1959. 09. 20	多摩川(野毛)	9羽	渡し場 飛翔中
1963. 08. 26	多摩川(野毛)	5羽	谷沢川流れ出し先島
1969. 05. 17	多摩川(玉堤)	250羽	河川上空を飛翔(翌日にも200羽など、5/24 19羽まで1週間継続的に多数を観察)
1980. 09. 04	多摩川	2羽	ユリカモメ、ウミネコの混群の中に
1999. 08. 20	多摩川(玉堤1)	2羽	2羽が鳴きながら上流へ
2001. 09. 11	多摩川	30羽	台風通過直後、濁流の上を群れで上下していた(9/23まで少数が滞在)
2003. 08. 10	多摩川(玉堤1)	5羽	5羽が中州で休んでいる。
2005. 09. 07	多摩川(玉堤1)	24羽	中州周辺で休んだり飛翔したり 強風で河口が荒れ避難してきたと思われる
2007. 09. 07	多摩川	1羽	台風9号が通過した翌日で群れで飛び回る
2011. 09. 06	多摩川(玉堤2)	3羽	冬羽3羽が水面近くを上流に向かって飛翔
2013. 05. 28	多摩川(玉堤1)	1羽	川面や中州上空を行き来する
2017. 11. 08	多摩川(玉堤2)	1羽	定例調査 浅瀬で休息
2019. 05. 13	多摩川(玉堤1)	1羽	中州で休息

316. クロハラアジサシ *Chlidonias hybrida* Whiskered Tern

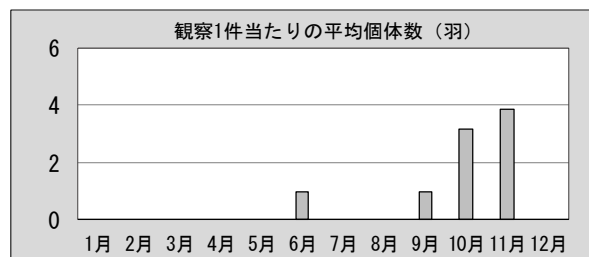
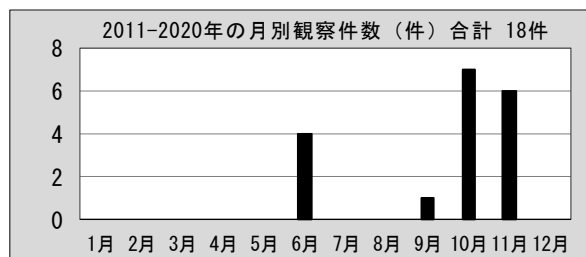
カモメ科

南西ヨーロッパ、中央アジアから中国東部・北東部、オーストラリア、北西・南東アフリカなどで留鳥、夏鳥として繁殖。北方のものは冬期に熱帯域、南半球で越冬する。日本には、旅鳥として本州から南は琉球諸島に渡来する。

内湾から、干潟、湿原、湖沼、河口、河川などの水域に現れる。他のアジサシ類のようにダイビングすることは少なく、ホバリングの後、水面からすくい捕ったり、湿地などの水面で小魚などをつまみあげるが多い。草地あるいは空中で昆虫やその幼虫も捕食する。通年、群れで生活する。

世田谷区では、6月頃、9月から11月、多摩川に立ち寄ったものが稀に見られており、夏羽や冬羽の個

体が川面を低空で飛翔し、小魚を捕食する姿などが観察されている。(全記録数 32 件 2001～2020 年)



○主な観察記録

2001. 06. 08	多摩川(玉堤 1)	2 羽	夏羽	中州でコアジサシの群れと休んでいる
2002. 10. 06	多摩川(玉川 1)	1 羽	幼鳥	中州で時々休む(同一個体が 10/18 まで観察された)
2004. 05. 27	多摩川(玉堤 1)	2 羽	夏羽	川岸に沿うように低く飛び、ゆっくり川面に降りて小魚を捕る
2007. 07. 16	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽	水面近くを飛翔
2010. 09. 14	多摩川(野毛 2)	1 羽	冬羽	中州の縁で休んでいたが、下流へ飛び立つ
2012. 10. 11	多摩川(野毛 2)	3 羽	成鳥	冬羽に移行中、腹の黒部がまだらに残る 3 羽一緒に 2、3 回往復し上流へ(10/2 から 10/26 まで 6～1 羽が観察された)
2013. 06. 10	多摩川(玉堤 2)	1 羽	夏羽	水面付近を往き来する
2017. 11. 08	多摩川(玉堤 2)	4 羽	定例調査	浅瀬で休息したり、水面上の飛翔を繰り返す
2018. 10. 09	多摩川(玉堤 1)	2 羽	成鳥冬羽、幼鳥	(背が褐色、目の後ろが黒く丸い斑)と思われる 1 羽が川岸で休息。成鳥冬羽 1 羽が川面を低空で飛翔を繰り返す
2019. 06. 25	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽	川面を低空で上流、下流と飛翔を繰り返し、時々水面に足を付ける
2020. 06. 01	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽	細長い中洲で休む

317. ハジロクロハラアジサシ *Chlidonias leucopterus* White-winged Black Tern カモメ科

西ヨーロッパから中央アジア、サハラにかけての地域、カナダ北部から中部アメリカの一部で繁殖し、アフリカの熱帯地域と南アメリカで越冬する。日本では、北海道から琉球諸島までに旅鳥として渡来するが数は少ない。

干潟、河川、湖沼、湿原、水田などに現れる。水上をひらりと飛び回り、主に小魚、昆虫、カエルなどを食べる。群れでいることが多い。

世田谷区では、5 月から 7 月、9 月から 10 月頃、稀に多摩川で見られる。中州で休んだり、水面を低空で飛翔する姿が観察されている。(全記録数 21 件 1996～2018 年 2011 年以降 3 件)

○観察記録

1996. 09. 13	多摩川(玉堤 1)	1 羽	川岸で休んでいる
2002. 10. 06	多摩川	2 羽	幼鳥、成鳥 川原で時々休む(同個体が 10/20 まで滞在したと思われる記録 11 件)
2005. 07. 01	多摩川(玉川 1)	2 羽	第 1 回夏羽 中州の岸でコアジサシ 6 羽と休んでいる(6/3 から 7/5 まで滞在したと思われる 記録 2 件)
2007. 09. 07	多摩川(鎌田 1)	2 羽	河川が増水、グランドで休んでいる(アジサシ、ベニアジサシと一緒に)
2010. 06. 21	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽 中州の縁に降りている(6/30 にも観察された)
2011. 09. 06	多摩川(玉堤 2)	2 羽	冬羽 2 羽が水面近くを飛翔し上流と下流を行き来していた
2013. 09. 17	多摩川(玉堤 1)	1 羽	冬羽 中州の縁で休息
2018. 05. 28	多摩川(玉堤 1)	1 羽	夏羽 中州水際を低空で飛翔し小魚をすくい捕る

◆ トウゾクカモメ科 STERCORARIIDAE

322. シロハラトウゾクカモメ *Stercorarius longicaudus* Long-tailed Jaeger トウゾクカモメ科

ユーラシア大陸、北米大陸、グリーンランドを含む北極圏の沿岸で繁殖し、冬は太平洋、大西洋の南半球までの極めて広い海洋域に分布生息する。日本には、旅鳥として立ち寄り、春に太平洋側の海上で、渡

り途中の大きな群を見ることがある。

世田谷区では、下記2例の記録がある。(全記録数 2件 2000、2013年)

○観察記録

2000. 05. 11	多摩川(玉堤 1)	1羽	上流から飛来し下流へ
2013. 04. 15	多摩川(野毛 2)	1羽	成鳥夏羽 川面上空 10m 位を行き来していたが下流に向かう 前日、約 20m の南風が一日中吹いたので迷って入ったと思われる

◆ ウミスズメ科 ALCIDAE

333. コウミスズメ *Aethia pusilla* Least Auklet

ウミスズメ科

ベーリング海の島々やアリューシャン列島、アラスカ西岸などで繁殖し、冬は日本列島の北部沿岸まで南下する。日本には冬鳥として北海道に、旅鳥として本州沿岸各地の冬の海域に飛来。特に流水の周辺に見られるのが特徴的で、氷とともに南下、北上する。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数 1件 1924年)

○観察記録

1924. 02. 17 世田谷 1羽 (東京都産鳥類目録)

◆ ミサゴ科 PANDIONIDAE

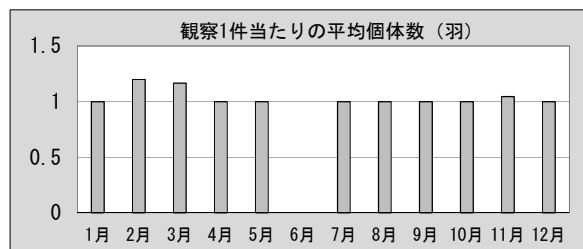
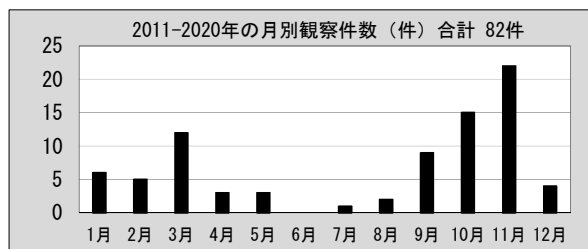
339. ミサゴ *Pandion haliaetus* Western Osprey

ミサゴ科

ユーラシア大陸やアメリカ大陸北部の北半球全域、さらにアフリカ大陸北部からフィリピン、オーストラリア沿岸部など広く分布し繁殖する。冬は、寒地のものは温帯、熱帯地方に移動する。日本では、北海道から琉球諸島まで広く繁殖する留鳥である。冬期、水辺が氷に覆われる地域のは暖地に移動する。

海岸、大河川、湖などに生息し、魚を見つけるとホバリングして狙いを定め、脚で獲物を捕る。捕らえた魚を岩の上や杭、木の枝など一定の場所に運んで食べる。繁殖期は4~7月、年1回、一夫一妻で繁殖する。人が近付かない岩棚や水辺の巨木、鉄塔などに枯れ枝を積んで皿形の巣をつくる。

世田谷区では、ほぼ1年中観察されるが夏期は少なくなる。主に多摩川で観察されるが、多摩川から離れた駒沢オリンピック公園や桜丘すみれば自然庭園、弦巻5、成城4でも休息したり上空を飛ぶ姿が観察されている。多くは上空通過であるが、ホバリングしてから、または川岸のヤナギの枝から水に飛びこんでコイ、マルタやアユなどを捕り、川原、グランドのサッカーゴールポスト、橋桁などで食べる姿が観察されている。観察件数は2013年頃から減少傾向にあり2020年では2011年の5分の1程度になっている。(東京都区部：絶滅危惧1B類 環境省：準絶滅危惧 全記録 176件 1988~2020年)



○主な観察記録

1988. 12. 02	多摩川	1羽	上空
1997. 05. 06	多摩川(玉堤 2)	1羽	1羽がカラス6羽に威嚇されながら上流へ
2001. 10. 11	多摩川	1羽	上流方向へ飛翔

2004. 10. 02	多摩川(鎌田 1)	1 羽	1 羽が上空を数度旋回し下降、水面に着く寸前に上昇し下流へ
2006. 04. 17	多摩川(野毛 3)	1 羽	上空から川面に急降下してコイを狙ったがつかみ損なう
2007. 08. 10	多摩川(鎌田 1)	1 羽	上流から下流へ飛翔
2009. 10. 22	弦巻 5	1 羽	自宅上空を飛翔
2009. 12. 07	多摩川(玉堤 1)	1 羽	ゴルフ場渡し場付近、ダイビングして魚を捕え上流へ飛び去る
2011. 11. 04	駒沢オリンピック公園	1 羽	送電線で休息
2011. 11. 12	成城 4	1 羽	上空飛翔
2012. 12. 03	多摩川(鎌田 1)	1 羽	グランドのポールに止まり 20cm 位の魚を掴んで周囲を見回していたが、人が近
2013. 03. 05	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	強風時に上空を南へ飛んで行く
2013. 04. 29	多摩川(玉堤 2)	1 羽	成鳥雄 寄り州先で周りのカラス類を警戒しながら 40cm 位のマルタを食べる
2013. 11. 18	多摩川(上野毛 2)	2 羽	成鳥雌 1 羽が川面上空約 10m で小さな旋回をしていると急に川面に飛び込み 40cm 位の魚を捕り近くの橋脚まで運ぶ
2015. 10. 05	多摩川(玉堤 1)	1 羽	川面上空約 5m からダイビングし浮いている約 20cm のアユを捕る
2018. 11. 13	多摩川(宇奈根 1)	1 羽	下流から飛来 水浴後カラスにモビングされ高架線にとまる
2020. 11. 06	多摩川(喜多見 1)	1 羽	カラスが絡んで飛翔、下流に飛び去る

◆ タカ科 ACCIPITRIDAE

340. ハチクマ *Pernis ptilorhynchus* Honey Buzzard

タカ科

ロシア東部、中国北東部、北朝鮮、日本、インドで繁殖し、冬は亜熱帯、熱帯地方に渡って越冬する。日本では、北海道、本州、佐渡島、四国に夏鳥として 5 月頃渡来し繁殖する。九州以南では旅鳥。

標高 1,500m 以下の丘陵地や低山の山林に生息し、ナラやアカマツなどの落葉広葉樹や針葉樹林で繁殖する。繁殖期は 5 月下旬から 9 月、年 1 回、一夫一妻で繁殖する。低山帯の大木の枝上に猛禽類の古巣を利用して皿形の巣をつくるが、古巣に新しい巣材を補充していくため直径が 1.5~2m の大きな巣になる。春と秋の渡りの時期には市街地などの上空で観察されることがある。ハチの幼虫やサナギを好んで食べ、クロスズメバチなどのジバチ類を特に好む。

世田谷区では下記 4 例の記録がある。(東京都区部：非分布 環境省：準絶滅危惧 全記録数 4 件 2003、2012、2018、2019 年)

○観察記録

2003. 05. 16	多摩川(玉堤 2)	1 羽	川崎側からカラス 2 羽に追われて飛来し上流へ
2012. 09. 26	多摩川(玉川 3)	3 羽	新二子橋上空 100~150m をサシバに混ざって西へ向かう
2018. 05. 18	多摩川(宇奈根 1)	1 羽	カラスにモビングを受け下流へ
2019. 05. 13	多摩川(玉川 1)	1 羽	暗色型雄 川原上空 20~30m をカラス類 4 羽に追われ左右に身をかわしながら北東方向へ

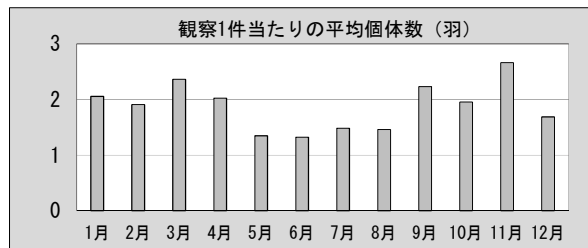
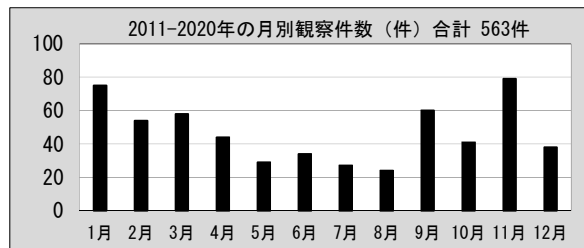
342. トビ *Milvus migrans* Black Kite

タカ科

ユーラシア大陸の亜寒帯以南、日本、アフリカの一部、オーストラリアなどに広く分布し繁殖する。冬は寒地のものの一部が暖地に移動する。日本では、北海道、本州、四国、九州まで留鳥として分布し繁殖するが、琉球諸島では冬鳥である。

海岸、水田地帯、河川、湖沼の近くに生息し、市街地でもよく見られる。繁殖期は 2~9 月、一夫一妻で繁殖し、年 1 回繁殖する。1 巣卵数は 2~3 個。平地から低山の大木の枝上に、枯れ枝を積み重ねて皿形の巣をつくる。非繁殖期には数十羽から数百羽もの群れをつくってねぐらにつく。海岸、漁港などには大群で見られる。ゆっくりした羽ばたきや翼を水平に広げ帆翔していることが多い。主に死肉を食べるが、小哺乳類、爬虫類、魚類など生きている獲物も捕る。獲物を見つけると急降下し脚で捕り、杭、岩、枝上、地上など安全な場所に運んで食べるが、飛びながら食べている姿も見られる。

世田谷区では、一年中観察されるが、夏期は少なくなる。多摩川でよく見られる他、河川や公園、住宅地などでも普通に観察される。飛翔時はカラス類とよく争うがホンセイインコの群れやユリカモメ、セグロカモメとも争う。獲物は河原で死んでいるコイやマルタなどであるが、小鳥やネズミ、トカゲ、チョウなども捕る。川岸に降りて食べたり飛びながら食べる。中州で砂浴びしているのも見られている。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 1,518 件 1948～2020 年)



○主な観察記録

1948. 09. 01	野毛	1 羽	
1975. 02. 01	馬事公苑	5 羽	
1995. 02.	砧公園	1 羽	上空
1999. 02. 05	野川	2 羽	定例調査
2003. 03. 24	多摩川(玉堤 1)	4 羽	4 羽が上空を旋回
2004. 07. 27	多摩川(鎌田 1)	10 羽	10 羽が上流から低空を旋回しながら飛来する
2005. 02. 01	多摩川(玉堤 1)	2 羽	散策路でカワラバトをつかんで下流へ向かうがカラスに何度も威嚇される
2006. 09. 20	下馬 4	1 羽	低空で 20 羽のホンセイインコにモビングされる
2006. 09. 15	多摩川(鎌田 1)	1 羽	トカゲ類をつかみ飛びながら足を前に出して食べる
2008. 09. 17	多摩川	11 羽	定例調査
2009. 08. 13	多摩川(野毛 2)	2 羽	1 羽が飛翔中のチョウを捕らえ飛びながら食べる
2010. 03. 13	桜上水 3	2 羽	自宅上空で 2 羽がディスプレイ飛行 ホンセイインコ 8 羽がモビングする
2010. 09. 15	多摩川	22 羽	定例調査
2012. 01. 09	野川(成城 4)	2 羽	小鳥を捕食 カラスとバトル
2012. 01. 09	多摩川(鎌田 1)	4 羽	1 羽が中州で砂浴び
2014. 03. 11	多摩川(玉堤 1)	5 羽	1 羽が川面や草地上空を飛翔しながら掴んでいる小魚を前に出して食べる
2014. 11. 23	駒沢オリンピック公園	1 羽	定例調査 公園北西寄り飛来し上空 70～80m で帆翔旋回後東へ向かう
2015. 04. 06	多摩川(上野毛 2)	2 羽	1 羽が中州でネズミを食べている
2017. 04. 16	多摩川(野毛 2)	1 羽	中州で干からびた魚(コイ)を食べていたが、カラス 3 羽にモビングされる
2020. 04. 06	多摩川(鎌田 1)	1 羽	釣り人が投げた約 20cm の魚を空中で捕る

349. チュウヒ *Circus spilonotus* Eastern Marsh Harrier

タカ科

バイカル湖からアムール川流域と中国東北部、モンゴル、日本、ニューギニアなどで繁殖し、冬は東アジア、東南アジアの温帯、熱帯地方に移動する。日本では、北海道で夏鳥として繁殖、本州中部以北の一部地域では少数が留鳥として繁殖する。多くは冬鳥として本州から琉球諸島まで広く渡来する。

越冬地では、草原、ヨシ原、農耕地、牧草地などで生息する。獲物を求めてヨシ原や草原の上を風に向かって羽ばたき、翼を浅いV字型にして滑翔を繰り返し、ネズミ、小鳥類、カエルなどの小動物を発見すると尾羽を広げ、垂直に近い角度で地上に降りて捕獲する。繁殖は、4～7月、一夫一妻で繁殖する。巣づくりは雌が行い、地上に枯れたヨシやススキなどの茎を重ね、イネ科の枯葉を皿形の産座に敷く。

世田谷区では、11月から翌年4月に多摩川で観察されている。(東京都区部：絶滅危惧IB類 環境省：絶滅危惧IB類 全記録数 7 件 1998～2020 年 2011 年以降 3 件)

○観察記録

1998. 04. 08	多摩川(野毛 2)	1 羽	緑地で羽ばたきと滑翔を繰り返し町の中へ
2002. 12. 30	多摩川(鎌田 1)	1 羽	草原上空を川崎側へ
2005. 11. 25	多摩川	1 羽	雌 カラス類 1 羽に追われている
2009. 01. 12	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄 河川上空を下流から飛来し上流へ向かう

2014. 02. 03	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雌	上流からオギ原上空に飛来したがUターンして上流へ戻る
2016. 12. 05	多摩川	1 羽	雌	が草原上空をハシボソガラス 5 羽に追われて飛来し下流へ
2020. 01. 07	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雄	が砂礫地及び草地上空を旋回

350. ハイロチュウヒ *Circus cyaneus* Hen Harrier

タカ科

ユーラシア大陸のツンドラ地帯や中国東北部、北モンゴル、アメリカ大陸の亜寒帯などで広く繁殖し、冬は両大陸の気候温暖な地域へ南下移動する。

日本には冬鳥として北海道から本州、四国、九州、琉球諸島まではほぼ全国に渡来する。

越冬地では、広い草原、ヨシ原、農耕地、牧草地などに生息する。草原やヨシ原上を地上すれすれの高さとで飛翔し、ゆっくりしたはばたきと翼を浅いV字形に保って滑翔を繰り返しながら獲物を探す。ネズミ、小鳥類、カエルなどの小動物が飛び出すと急旋回して捕える。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(東京都区部：絶滅危惧 IA 全記録数 2 件 2009 年)

○観察記録

2009. 12. 12 砧公園 1 羽 公園内飛翔 写真で確認

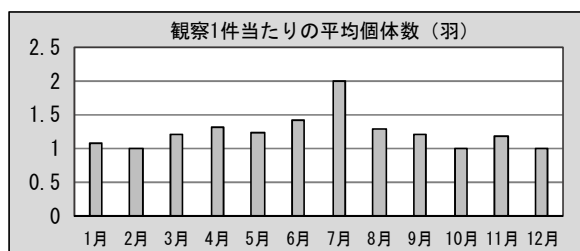
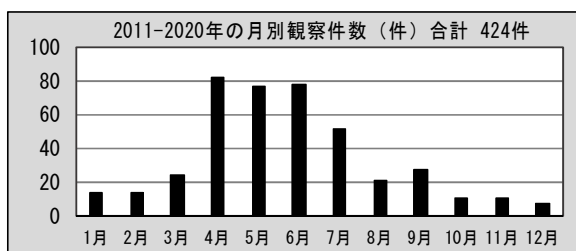
354. ツミ *Accipiter gularis* Japanese Sparrowhawk

タカ科

シベリア東南部から中国東北部、ウスリー地方やサハリン、日本などで繁殖し、冬は中国南部、東南アジアに移動する。日本では、全国で繁殖し、暖地では年中生息するが、積雪の多い寒地のものは暖地に移動する。八重山諸島には亜種リュウキュウツミが留鳥として生息している。

多くは平地から亜高山帯の林に生息する。水田地帯や牧草地、住宅地、およびその周辺など比較的開けた環境で繁殖する。近年では、市街地やその周辺の林で繁殖例が増えており、都市へ進出が目立っている。繁殖は第 2 暦年目の春に幼羽を残した状態で繁殖するものもある。産卵期は 4～5 月、一夫一妻で繁殖する。針葉樹や落葉広葉樹林など様々な樹木の枝に枯枝を積み重ねて皿形の巣をつくり、産座にサワラなど針葉樹の葉を敷く。1 巣卵数は 3～5 個。抱卵は主に雌が行うが、雌が餌を食べているときや休んでいる間だけ雄が行う。抱卵日数約 35 日。雄は抱卵または抱雛する雌に給餌する。ヒナへの給餌は雌だけが行う。孵化後約 24 日で巣立つ。主に小鳥類を捕食するがネズミや昆虫も捕る。

世田谷区では 1 年中観察されるが、春から夏にかけてが多い。河川や公園、緑地、住宅地などほぼ全域で観察される。1988 年の馬事公苑が初記録。2000 年頃から観察例が多くなり、2003 年に成城 3 で初めて繁殖が記録された。その後、豪徳寺、次大夫堀公園、成城 4、祖師谷公園、多摩川、羽根木公園、駒沢オリンピック公園、桜上水 1 で繁殖が観察されている。2013 年は 4 か所で繁殖し、その後も複数個所での繁殖が続いている。営巣は 4 月上旬から 7 月にイヌシデ、エノキ、サクラ、アカマツ、ケヤキなど針葉樹や落葉広葉樹林で行われ、カラス類の古巣で営巣した例がある。獲物はイソシギ、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイなどの小鳥のほか、アブラコウモリを襲った例やセミを捕るのが見られている。観察件数は、最も古い記録のある 1988 年から連続して増加してきたが、2016 年の 74 件をピークに 2020 年の 19 件まで減少している。(東京都区部：絶滅危惧 IB 類 全記録数 567 件 1988～2020 年)



○主な繁殖記録

2003. 05. 17 成城 3 1 巣 イヌシデの樹冠に営巣

2005. 04. 21	豪徳寺	1 巣	巣材(小枝など)を運ぶ (6/5 時々抱卵を交代することがある 雄が餌を持ち帰る 6/16 雌雄成鳥、雛 4 羽 巣の中で給餌する姿が見える)
2009. 05. 22	次大夫堀公園	1 巣	巣材運び (5/23 巣作り 5/24 抱卵姿勢 6/4 雄が餌を持ってくる)
2010. 07. 23	成城 4	1 巣	親が雛 2 羽に給餌 (7/25 雛は 4 羽 7/29 全て巣立ち)
2012. 04. 16	祖師谷公園	1 巣	雌雄交尾、巣を確認 (5/1 雌抱卵、雌が巣から出て羽繕い、雄は見張りシカラスを追撃)
2012. 07. 04	豪徳寺	1 巣	成鳥雌 1、幼鳥 2 羽
2013. 05. 28	多摩川(玉堤 1)	1 巣	河畔林エノキでカラスの古巣を使って抱卵姿勢 (7/9 雛 2 羽 雛は白い 7/16 雛 3 羽を確認)
2013. 06. 02	豪徳寺	1 巣	アカマツで雌が抱卵していたが 15:35 抱卵を雄に交代 (6/14 1 羽の雛孵化)
2013. 07. 07	羽根木公園	1 巣	定例調査 サクラ古木の巣に孵化後 2 週間位の雛 3 羽
2013. 07. 21	駒沢オリンピック公園	1 巣	定例調査 雌雄 巣は確認できず (8/1 成鳥雌 1、幼鳥 2 羽)
2015. 05. 18	祖師谷公園	1 巣	巣で雌の尾羽がかすかに見えた、雄は近くの木から飛び立つ (6/25 雛 3 羽は巣立ちが近い、雌雄成鳥は電線で見張り 7/10 雌雄成鳥、幼鳥 5 羽巣と巣の周辺に分散)
2015. 07. 02	桜上水 1	1 巣	雄 団地内のケヤキに営巣 (7/19 雌が巣の中を動きまわり雛の面倒を見るそぶり 8/21 雌が餌を巣に運び、巣立ち雛 2 羽が食べる)
2019. 06. 28	若林 4	1 巣	雄と雌。1 巣 2 雛 若林公園
2020. 05. 24	次大夫堀公園	1 巣	雌が雄からもらった餌を食べて巣に戻った

○主な観察記録

1988. 04. 20	馬事公苑	2 羽	4/20 から雌雄が入り 5 月末まで滞在
1994. 12. 18	砧公園	1 羽	木に止まっていた
1996. 08. 12	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄がカラス 3 羽に威嚇されながら上流から飛来
2000. 11. 09	多摩川	1 羽	雌がオギ原に飛び降り、再び飛び立ち去る 獲物を捕まえていた
2003. 04. 25	成城みつ池緑地	2 羽	雌雄が鳴き交わっていた
2006. 01. 28	奥沢 6	1 羽	雌が庭のモチノキの上部の枝に止まり休んでいる 1 時間後飛び去る
2007. 06. 12	成城三丁目緑地	2 羽	カラス類、オナガと 3 つ巴の争い
2010. 04. 08	千歳台 5	1 羽	雄がアカマツに 10 分ぐらい止まって鳴いていたが、東へ飛ぶ
2011. 02. 06	馬事公苑	1 羽	雄が自然林の中に止まっていた
2012. 07. 17	祖師谷公園	1 羽	東から公園上空を飛翔、ツバメと遭遇し上下左右に追跡
2013. 04. 26	蘆花恒春園	1 羽	雄がヒヨドリを襲ったが、逃げられてクヌギに止まる
2014. 08. 11	多摩川(鎌田 1)	1 羽	低空で飛来しグラウンドのハクセキレイ幼鳥を捕る
2014. 08. 18	高源院	1 羽	雄が弁天池の上を低く飛んでいたアブラコウモリを後方上から襲った
2014. 09. 29	多摩川(玉堤 1)	1 羽	散策路脇のサクラで鳴いているセミを捕る
2015. 06. 23	仙川	1 羽	雄がセキレイ橋〜宮下橋間右岸の電線に止まっていた
2015. 09. 22	野川(喜多見 5)	1 羽	イソシギを捕食
2018. 09. 17	駒沢オリンピック公園	1 羽	サンクチュアリ内から飛び出す
2019. 06. 01	羽根木公園	2 羽	毎年営巣する林内で番が赤松にいる所を確認、巣の発見には至らず
2020. 09. 21	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄が河畔林のトウネズミモチで休んでいるとモズの成鳥雌から頭部周辺を 3 度威嚇されて上流へ飛び立つ

355. ハイタカ *Accipiter nisus* Eurasian Sparrowhawk

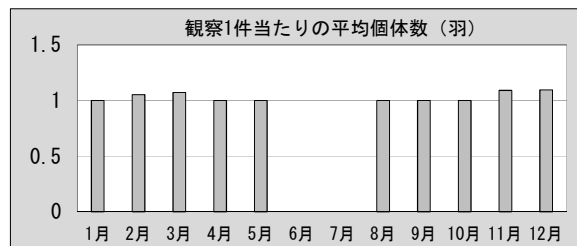
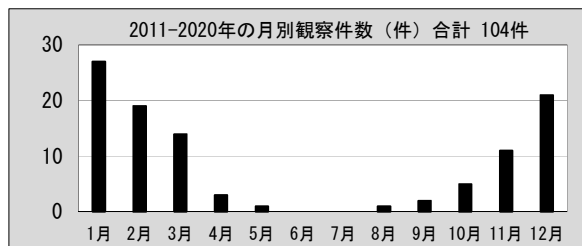
タカ科

ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯地方、北アフリカ、小アジア、モンゴルや朝鮮半島、日本にかけて広く繁殖し、冬には温暖な地域に移動する。日本では、北海道、本州、佐渡では留鳥として繁殖している。冬は大陸から渡来するものが加わり全国的に広く観察される。

亜高山から平地の林に生息し、林内、林縁、草地などで獲物を捕らえる。主にツグミくらいの小鳥やネズミやリス、モグラなどを捕ることもある。雌の体重は雄の 2 倍あり、雌の方が大きめの鳥を捕る。産卵期は 5 月、一夫一妻で繁殖する。カラマツの枝を主材に針葉樹上に枯れ枝を積んで皿形の巣をつくる。

世田谷区では、9 月から 11 月に飛来し、翌年の 3 月から 4 月頃に去る。主に多摩川と砧公園で観察されるが、野川や桜丘すみれば自然庭園、高源院、下馬、瀬田などで市街地で観察されることもある。獲物としてハト類やスズメ、ヒヨドリ、ホンセイインコなどを襲うが成功例は少ない。ヒメアマツバメ、カラス

類、ヒヨドリ、ハクセキレイ、タヒバリなどからモビングされることがある。(東京都区部：絶滅危惧ⅠB類 環境省：準絶滅危惧 全記録数 179 件 1958～2020 年)



○主な観察記録

1958. 08. 23	等々力溪谷公園	1羽	
1986. 10. 04	馬事公苑	1羽	
1991. 10. 20	岡本静嘉堂周辺	1羽	
2005. 11. 25	多摩川(野毛2)	2羽	雌が滑翔しているところに雄が途中から加わり一緒になる
2007. 11. 09	多摩川(鎌田1)	1羽	雄がハクセキレイ 20羽に追われて河原へ
2008. 09. 19	下馬4	1羽	ホンセイインコ 5羽を追い飛び回る
2011. 04.	桜丘すみれ自然庭園	1羽	雄 林内の木で羽づくろい
2011. 11. 08	多摩川(鎌田1)	2羽	1羽が草原の細道でキジバトの羽根をむしっていたが、人が近づくと掴んで上流へ飛び立つ
2012. 09. 29	南鳥山2	1羽	住宅地の上空を帆翔 下面が黒っぽく尾が長く見える
2012. 10. 10	砧公園	1羽	幼鳥 サンクチュアリ内池の上、樹々間を2～3回移動
2013. 02. 12	高源院	1羽	雄 弁天池の周りの葉が落ちた木に止まっていた
2013. 03. 15	野川(宇奈根3)	1羽	ヒヨドリを襲ったが捕食せず飛び去った
2013. 09. 20	瀬田4	1羽	カラスとヒメアマツバメがモビング、キーキー鳴きながら逃げ回っていた
2013. 11. 05	多摩川(鎌田1)	1羽	成鳥雄がグラウンド上空 5m 位を横切ったときにハクセキレイから威嚇される
2014. 03. 16	瀬田4	2羽	上空を2羽で旋回
2015. 10. 27	砧公園	1羽	小鳥を襲うが逃げられる その後木々の間をすり抜けるように飛んで行った
2017. 02. 10	多摩川(玉堤1)	1羽	成鳥が草原のエノキから飛び立ったヒヨドリ 1羽を襲い捕え深い草原に落ちる
2020. 02. 07	野川(大蔵6)	1羽	ムクドリを狙っていたが逃げられた

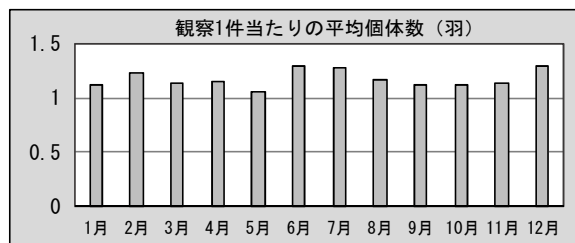
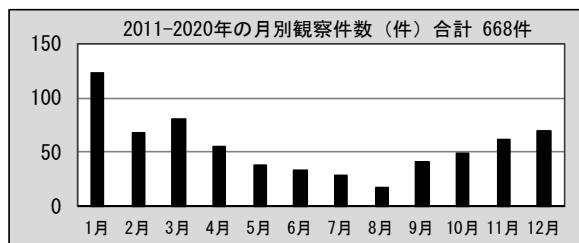
356. オオタカ *Accipiter gentilis* Northern Goshawk

タカ科

ユーラシア大陸や北アメリカ大陸、北アフリカの温帯から亜寒帯南部で広く分布し繁殖する。寒地のもものは南下して越冬する。日本では、北海道、本州、四国、九州の一部で繁殖する。九州以南では冬鳥。

亜高山から平地の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息し、農耕地や牧草地、河川などの開けた場所にも飛来する。繁殖期は4～7月。巣づくりは早いものでは2月上旬に始まり、年に1回、一夫一妻で繁殖する。営巣木はアカマツが多く、枝などを積み重ねて厚みのある皿形の巣をつくる。1巣卵数は2～4個。抱卵はほとんど雌が行う。ヒナは36～41日で孵化し、全身に白色の幼綿羽が密生する。ヒナは孵化後約40日で巣立つ。獲物として小鳥やハト類、カモ類、シギ類など小型から大型の鳥や、ネズミ、ウサギなども捕る。

世田谷区では一年中見られるが、夏期は少なくなる。主に多摩川と砧公園で観察される。野川や仙川、蘆花恒春園、祖師谷公園、駒沢オリンピック公園、馬事公苑などでも見られることがある。1987年に馬事公苑で初記録。当時は冬期に観察されていたが2000年頃から夏期にも見られるようになる。2012、2013年に多摩川の中州ヤナギ樹林帯で繁殖する。砧公園、等々力溪谷公園では2015年に交尾が観察されている。獲物はカモ類やササゴイ、コサギ、コアジサシのヒナや幼鳥、オオバン、ハト類、カラス類、イソシギ、ユリカモメ、ネズミなどで、オオタカと同等のカラス類やカモ類、ササゴイなどを水に沈めてから食べる姿が見られている。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 環境省：準絶滅危惧 全記録数 1,417 件 1987～2020 年)



○繁殖記録

2012. 06. 04	多摩川(玉堤 1)	1 巢	成鳥雄が上流から低空で飛来し葉が茂ったヤナギに入ると中から「キッキッキッ」という鳴き声（7/23 幼鳥 1 羽が巣近くの中州のヤナギで休んでいたが上流から成鳥が飛来し餌をもらう）
2013. 08. 13	多摩川(玉堤 1)	1 巢	成鳥雌、幼鳥 1 羽 雌が中州の 15m 位高さのヤナギにいたが 10m 離れたヤナギから幼鳥が移ってきてムクドリと思われる餌をもらう
2017. 06. 02	砧公園	1 巢	巣に 3 羽の雛、側に親 1 羽が止まっていた
2018. 06. 12	砧公園	1 巢	親がヒナ 3 羽に給餌
2019. 07. 15	砧公園	1 巢	サンクチャリの中で巣立った 2 羽が弱々しい飛び方で木々を移動・休息

○主な観察記録

1987. 04. 15	馬事公苑	1 羽	上空通過
1994. 02. 13	砧公園	1 羽	幼鳥 木に止まっていた（3/16 も見られた）
1997. 08. 08	多摩川(玉川 1)	1 羽	中州の大きなヤナギで休んでいる
2000. 02. 01	多摩川(玉堤 2)	1 羽	川面にいるコガモ約 100 羽の群れに突っ込むが捕れない
2003. 01. 31	砧公園	1 羽	(10/19 までほぼ連続して観察)
2004. 01. 06	多摩川	1 羽	中州の河畔林でカラス約 40 羽に囲まれている（6/17 までほぼ連続して観察）
2008. 07. 21	多摩川(玉堤 1)	1 羽	コアジサシ調査 コアジサシの雛と幼鳥を捕食
2010. 03. 12	砧公園	1 羽	カワラバトを捕食
2011. 03. 27	砧公園	1 羽	カラスを池に沈めて捕食
2011. 05. 03	多摩川(鎌田 1)	1 羽	成鳥雄が中州でイソシギを左足で押さえ羽をむしり取っているがイソシギは首を時々伸ばして逃げようとする
2011. 12. 12	多摩川(玉堤 1)	3 羽	成鳥雄が中州でカルガモを足で押さえ周囲を見回しながら羽をむしる
2011. 12. 27	岡本静嘉堂周辺	1 羽	クスノキで休んでいた 虹彩黄色
2012. 09. 03	多摩川(野毛 2)	1 羽	雄成鳥 左岸の浅瀬でササゴイの上に乗る水に沈めている。しばらくして岸に引き上げて腹部の羽をむしり始める
2012. 12. 03	多摩川(野毛 2)	1 羽	雄が左岸でユリカモメの腹部を食べている
2013. 01. 17	成城みつ池緑地	1 羽	ネズミを足にとらえて出て行った
2013. 04. 22	多摩川(玉堤 1)	2 羽	成鳥雌雄が川面及び中州の上空で振り子状のディスプレイフライト、雌は時々キッキッと鳴く
2013. 11. 26	多摩川(野毛 2)	1 羽	成鳥雄が川原でコサギの羽をむしり取っている
2014. 02. 17	多摩川(玉堤 1)	2 羽	成鳥雄 1 羽が寄り州でオオバンを捕食
2015. 02. 11	駒沢オリンピック公園	1 羽	定例調査 樹林内でハト類が急に逃げ出すとオオタカがその後を追って北に向う
2015. 03. 09	多摩川(野毛 2)	1 羽	成鳥雄が散策路脇のトウネズミモチ上部でキジバトの羽根をむしり取る
2015. 03. 31	仙川	1 羽	中州でヒドリガモ雄 1 を捕捉し第一生命樹林に持ち去る（みどり橋）
2015. 05. 09	等々力溪谷公園	2 羽	交尾 成鳥、若鳥
2015. 05. 18	祖師谷公園	1 羽	カラスの巣を襲撃、巣にいるのを確認
2017. 11. 20	上祖師谷 3	1 羽	宮下橋下流の樹林帯からオナガ 16 羽の群れにモビングされ下流へ飛び去る
2019. 02. 13	野川	1 羽	雌が新二子橋傍の野川左岸でコサギを捕食、内臓をほぼ食べ終え、飛び去る
2020. 03. 23	上祖師谷 3	1 羽	オオタカ 1 羽が、モビングする約 20 羽ほどのハシボソガラスとハシブトガラスの群れを引き連れ、セキレイ橋上空を左岸側から右岸側へ通過する

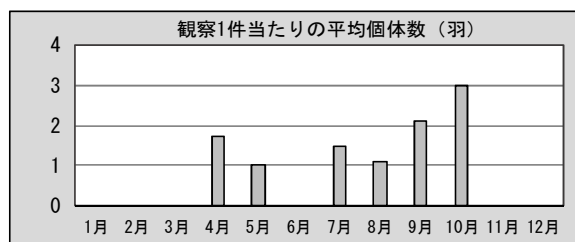
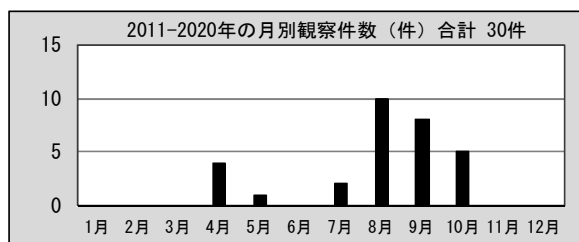
357. サシバ *Butastur indicus* Grey-faced Buzzard-eagle

タカ科

ロシア沿海州、ウスリー地方、中国東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬は中国南部、東南アジアに移動する。日本には夏鳥として渡来し、本州、佐渡、隠岐、四国、九州、伊豆諸島で繁殖する。冬は東南アジアに移動するが、一部、琉球諸島で越冬するものもいる。

低山から丘陵地帯の森林に生息し、周辺の水田などの開けた環境で狩りをする。主にヘビ、トカゲ、カエルだがバッタなどの昆虫も食べる。秋の渡りの時期は昆虫が主食になる。繁殖期は4～7月、年に1回、一夫一妻で繁殖するが、稀に2羽の雄が給餌に参加する。森林や丘陵地でマツやスギの枝に枯枝を積み重ねて皿形の巣をつくる。

世田谷区では、春は4月頃、秋は8月から10月に通過する。多くは多摩川で観察されるが、砧公園、松原1、上野毛3など公園や住宅地上空を通過するのも見られている。川岸に降りていた例もある。(東京都区部：非分布 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 52件 1983～2020年)



○主な観察記録

1983. 09. 16	松原	2羽	明大前駅上空
2000. 10. 06	多摩川(野毛2)	4羽	4羽が世田谷から川崎側へ。
2002. 09. 20	多摩川(玉堤2)	6羽	6羽が川崎側に上空通過
2003. 04. 22	多摩川(玉堤1)	2羽	2羽が川崎側から飛来し上流へ
2005. 04. 21	多摩川(玉堤2)	3羽	3羽が川崎側から飛来し世田谷の街方面へ
2006. 05. 15	多摩川(鎌田1)	2羽	上空、羽ばたきと滑空を繰り返して南方へ
2007. 03. 31	多摩川(玉堤2)	1羽	川崎側からカラス類に追われて飛来。世田谷区内へ
2010. 04. 25	上野毛	2羽	上空を北へ飛ぶ
2011. 10. 23	多摩川(鎌田1)	11羽	新二子橋上空を南下
2012. 09. 26	多摩川(玉川3)	8羽	住宅地上空から3、1、1、3羽が次々と新二子橋上空100～150mを西に向かって通過する
2013. 08. 05	多摩川(野毛2)	1羽	成鳥が川岸の草地に降りている
2014. 10. 04	砧公園	1羽	環八方向の上空を旋回
2015. 09. 28	多摩川(上野毛2)	1羽	河川上空50～70mを西方向へ
2017. 08. 11	砧公園	1羽	若鳥 サンクチャリの木に止まっていた
2019. 04. 15	多摩川(鎌田1)	1羽	雄が南方向からカラス類2羽に威嚇されながら飛来し北方向へ
2020. 09. 03	砧公園	2羽	成鳥が上空を飛翔

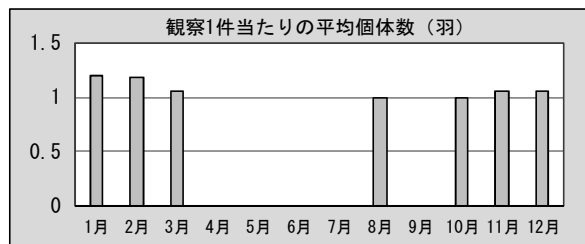
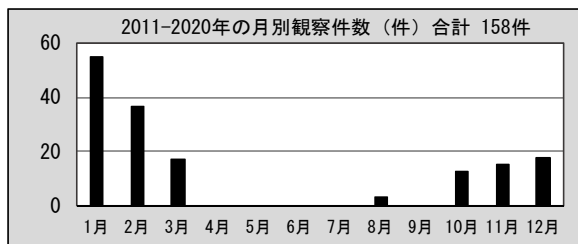
358. ノスリ *Buteo buteo* Common Buzzard

タカ科

ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯、日本などで広く繁殖し、冬は寒地のものが温暖な地域へ移動する。日本では、北海道、本州、佐渡、隠岐、四国、九州で留鳥として繁殖するほか、小笠原群島には亜種オガサワラノスリが留鳥として生息している。冬は寒地や高地にいる一部が暖地や低地に移動する。南は琉球諸島までほぼ全国的に広く観察されるが、小笠原諸島、大東諸島では見られない。

亜高山から平地の林に生息。繁殖期は5～8月、一夫一妻で繁殖し、林内の大木の枝の叉に枯枝を積み重ねて皿形の巣をつくる。荒れ地、河原、耕地、干拓地でネズミ、モグラ、カエル、ヘビ、昆虫類、鳥などを捕る。

世田谷区では、10月頃飛来し、翌年の3月頃去る。主に砧公園、多摩川で観察されるが、野川や蘆花恒春園、岡本静嘉堂周辺で観察されることもある。砧公園では2007～2012年の冬期は頻繁に観察されていた。2010、2014、2015年には8月にも観察されたが2016年以後は観察されていない。区内での観察件数は2010年頃から連続的に減少傾向にあり、2020年の観察件数は、多数観察された2011年の10分の1以下になっている。獲物はネズミやカエルである。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 364件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 11. 12	野毛	1羽	
1996. 11. 14	多摩川	1羽	カラス類 50羽に追われて中州の樹林に止まる
1997. 02. 08	多摩川(玉川1)	1羽	滑翔しながら高度を上げていく
1999. 01. 26	砧公園	2羽	
2000. 03. 07	多摩川(鎌田1)	1羽	バンの池付近 カラス類に追われ上流へ飛び去る
2002. 12. 20	多摩川(野毛2)	1羽	帆翔しているところにハヤブサに数度威嚇され川崎方面に去る
2007. 01. 05	砧公園	1羽	バードサンクチャーでカエルを捕食
2009. 02. 11	砧公園	1羽	ネズミを捕食
2011. 01. 04	砧公園	1羽	カラスを採食
2011. 01. 21	蘆花恒春園	1羽	カラス 2~3羽にモビングされ、公園の上空を低く飛び回っていた
2011. 12. 27	岡本静嘉堂周辺	1羽	カラス数羽に追いかけていた
2012. 10. 31	砧公園	1羽	サンクチャー池内の木止まる (10月中9回観察、同じ個体と思われる)
2013. 01. 28	多摩川(上野毛2)	1羽	河畔林のエノキから飛び立ち散策路にいるツグミを襲うが失敗する
2014. 01. 29	多摩川	3羽	定例調査 オギの海と本流上空を 2羽が飛翔、別個体が宇奈根寄り州灌木に止まる1羽
2015. 01. 10	野川(喜多見6)	1羽	カラスとバトル
2017. 02. 06	多摩川(鎌田1)	1羽	成鳥雌が草原のヤナギで周囲を見廻す
2020. 11. 09	多摩川(玉堤1)	1羽	成鳥がグランドや草地上空を旋回する

360. ケアシノスリ *Buteo lagopus* Rough-legged Buzzard

タカ科

ユーラシア大陸の極北部からカムチャツカ半島、千島列島やアメリカ大陸北部で繁殖し、冬には中部ヨーロッパ、中国東北部、ウスリー地方、日本に移動する。日本には、冬鳥として少数が北海道、本州、佐渡、九州、対馬、琉球諸島に渡来する。

主に海岸沿いの草地に生息する。獲物は主にウサギ、ネズミ、小鳥などである。脚が足指の付け根まで羽毛に覆われていることから「毛脚ノスリ」と呼ばれる。繁殖は、海岸の断崖の岩棚とかツンドラ地帯の地上や低木に営巣する。

世田谷区では、過去に観察された下記1例の記録がある。(全記録数 1件 1977年)

○観察記録

1977. 02. 13 多摩川 1羽

364. クマタカ *Nisaetus nipalensis* Mountain Hawk-Eagle

タカ科

ヒマラヤ、マレー半島、中国南部、台湾、日本などアジアの温帯や熱帯に分布する。日本では、北海道、本州、四国、九州に留鳥として繁殖する。

亜高山帯から低山帯の針葉樹林、広葉樹林に生息する。樹林帯の上空を帆翔旋回し、少しずつ位置を変えて獲物を探す。獲物はノウサギ、タヌキ、テン、リス、ネズミなどの哺乳動物やヤマドリ、カケスなどを捕る。繁殖期は4~7月頃、一夫一妻で繁殖する。巣はモミやコメツガなどの枝上に木の枝を積んで皿状の巣をつくる。1組のつがいが複数の巣をもち、繁殖にはその内の1巣を使う。巣づくりや求愛行動は1~2月頃から始まる。

世田谷区では下記 1 例の記録がある。(東京都区部：非分布 環境省：絶滅危惧 IB 類 全記録数 1 件 2010 年)
○観察記録

2010. 12. 15 多摩川(玉堤 2) 1 羽 若鳥、腹部が白い 川面上空を帆翔しながら上流へ

◆ フクロウ科 STRIGIDAE

366. オオコノハズク *Otus lempiji* Collared Scops Owl

フクロウ科

ウスリー川地方から中国東北部、日本、東南アジアに分布する。日本では、北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島に留鳥として繁殖するほか、琉球諸島にはリュウキュウオオコノハズクが留鳥として生息している。

平地や低山帯の色々なタイプの樹林に生息し、大きな木のある公園や社寺林などに現れる。繁殖期は 5～7 月。巣は樹洞や巣箱を利用する。夜行性で日中は茂った針葉樹の中で休息する。昆虫、小哺乳類、小鳥、トカゲ類、カエル類などを捕食する。

世田谷区では、稀に冬期に渡来する。1960 年代までは時々等々力溪谷公園や野毛で見られた。2000 年に桜、2001 年豪徳寺、2002 年経堂、砧公園など社寺や公園などで見られている。2012 年に区内で観察したのを視聴者がテレビ放送局に投稿した記録がある。(東京都区部：情報不足 全記録数 16 件 1948～2012 年 2011 年以降 1 件)

○主な観察記録

1948. 10. 24	野毛	1 羽	谷沢松山(天神山) 所見
1951. 03. 03	等々力溪谷公園	1 羽	不動公園崖下にいた
1954. 11. 20	等々力溪谷公園	1 羽	不動公園崖下に止まっていた
1957. 01. 11	野毛	1 羽	谷沢倉のうら(崖)にて見る
1963. 03. 30	等々力溪谷公園	1 羽	谷沢山タケに止まっていた
1966. 11. 05	野毛	1 羽	18 時 30 分自宅付近で鳴く
2000. 12. 08	桜 1	1 羽	早朝カラスに襲われて弱っている所を住職が保護 もう 1 羽の姿を確認
2001. 02. 28	豪徳寺	1 羽	ケヤキの大木の樹洞から上半身を見せていた
2002. 01. 11	経堂	1 羽	落鳥 天祖神社
2002. 12. 01	砧公園	1 羽	シュロの上から飛び出す
2012. 12. 17	区内	1 羽	NHK テレビ放映 12/17 11:50 視聴者応募写真公開 世田谷区内を明記 場所不明コンクリートビルの一面に止まっている写真を放映

367. コノハズク *Otus sunia* Oriental Scops Owl

フクロウ科

パキスタンから東部のユーラシア大陸、インド、東南アジア、日本にかけて分布する。日本では、夏鳥として北海道、本州、四国、九州で繁殖する。

スギ、ヒノキなどの針葉樹林、ブナなどの落葉広葉樹林、亜高山針葉樹林など色々な樹林に生息する。産卵は 5～6 月頃で、とくに巣はつくらず、樹洞の中に直接産卵する。夜行性で、飛んでいる甲虫類、直翅類、双翅類などの昆虫を脚でつかみとり採食する。その他、アリやクモ、ミミズ、トカゲ、カエル、小鳥、小哺乳類なども捕食する。個体には褐色型と赤色型があり、褐色型の方が多い。4～8 月に「キョッ、キョッ、コー」と聞こえる声で鳴き、古来「ブッポウソウ(仏法僧)」と聞きなしされている。

世田谷区では、下記 2 例の記録がある。(東京都区部：非分布 全記録数 2 件 1910、1997 年)

○観察記録

1910. 10. 23	区内	1 羽	雄 二子玉川 (採集)
1997. 08. 06	桜 1	1 羽	23:05 時 鳴き声を聞く 勝光院にて

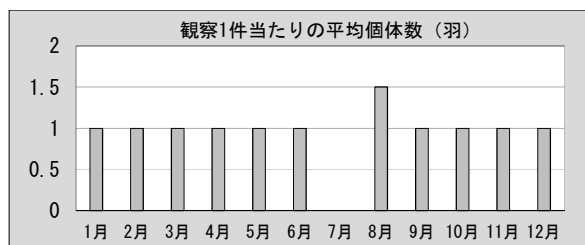
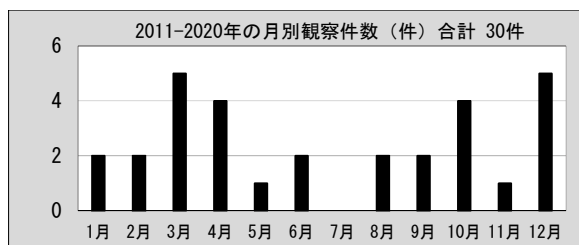
372. フクロウ *Strixuralensis* Ural Owl

フクロウ科

スカンジナビア半島から日本にかけてのユーラシア大陸の中、高緯度地方、朝鮮半島、日本に分布する。日本では北海道、本州、四国、九州にかけて見られる留鳥。北海道には亜種エゾフクロウが、本州中・北部には亜種フクロウ・亜種モミヤマフクロウ・亜種キュウシュウフクロウが、本州南部・四国・九州・伊豆諸島には亜種キュウシュウフクロウが留鳥として生息している。

低地、低山帯から亜高山帯にかけて色々なタイプの樹林に生息し、とくに大きい樹木のある落葉広葉樹林や混交林を好む。繁殖期は3～5月頃、一夫一妻で繁殖する。雄は求愛期に盛んに鳴き、巣は樹洞やカラスなどの古巣、巣箱も利用する。夜行性で夕暮れから活動し、ネズミ、小鳥、両生類、爬虫類、昆虫などを捕る。

世田谷区では、10月から翌年の5月に散発的に飛来する。成城みつ池緑地では2004年に初めて観察され、2010年には砧公園でも観察された。2015年11月に十一山市民緑地に飛来した個体は翌年の4月中旬まで観察された。（東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 38件 1989～2020年）



○観察記録

1989. 12. 17	等々力溪谷公園	1羽	ペットショップより引き取って放鳥
2004. 12. 23	成城みつ池緑地	1羽	11時30分頃カラス類に追われているのを発見（翌年1/8まで観察）
2008. 01. 26	成城みつ池緑地	1羽	3羽のカラスに追われる 約2時間観察
2010. 12. 17	砧公園	1羽	飛翔
2011. 03. 24	成城みつ池緑地	1羽	
2012. 03. 22	成城みつ池緑地	1羽	
2013. 01. 17	成城みつ池緑地	1羽	カラスに追われて下から上へ、また下へとみつ池を1周していた
2014. 10. 18	成城みつ池緑地	1羽	
2015. 05. 14	成城みつ池緑地	1羽	カラスに追われて見えなくなる
2015. 11. 15	成城4	1羽	多数のカラスに追われる（十一山市民緑地 翌年4/6まで観察された）
2017. 08. 01	岡本静嘉堂周辺	1羽	スダジイの樹上、フンの量からはあまり長い滞在ではなさそう
2020. 06. 25	砧公園	1羽	サンクチュアリの枝に止まる 水浴び（8/30、9/7にも観察された）

374. アオバズク *Ninoxscutulata* Brown Hawk-Owl

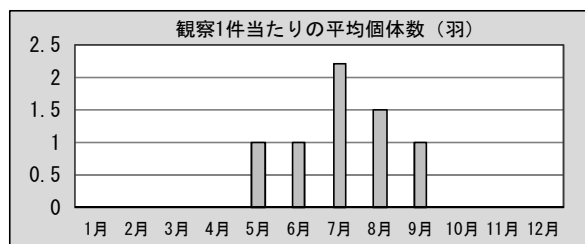
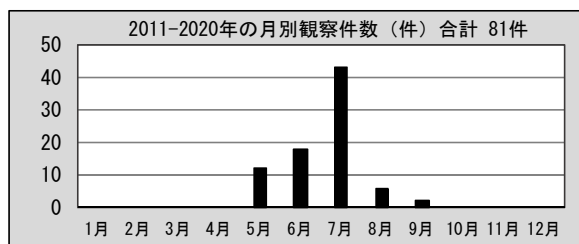
フクロウ科

ユーラシア大陸東部のウスリーからインド、東南アジア、東アジアに分布し、北部のものは冬に東南アジアに移動する。日本では、大部分の地域で夏鳥として渡来し、繁殖する。奄美諸島、琉球諸島では亜種リュウキュウアオバズクが留鳥として生息する。

平地や低山帯の大きい樹木のある樹林に生息し、常緑広葉樹林を特に好む。繁殖期は5～8月、一夫一妻で繁殖する。巣は主に樹洞を使うが、巣箱を利用することもある。内装はない。1巣卵数は2～5個、雌のみが抱卵し、ヒナは25日ぐらいで孵化する。抱雛も雌のみで行う。ヒナは幼綿羽に覆われる。育雛は雌雄で行い、28日ぐらいで巣立つ。繁殖期に「ホッホウ ホッホウ…」と聞こえる声で鳴く。夜行性で夕方や明け方に、セミ、タガメ、カミキリムシ、トンボ類などの大型昆虫を空中で飛びながら捕らえて食べる。その他、小鳥、カエル、コウモリなども捕食する。

世田谷区では、稀に夏期に観察される。1944年から1981年までは国分寺崖線近くの岡本、瀬田、上野毛、中町、砧など多くの町や等々力溪谷公園での繁殖が記録されていたが、1988年以降は豪徳寺でのみと

なった。豪徳寺での繁殖は2004年まで見られた後に中断したが、2016年から2019年までは毎年繁殖している。生息は豪徳寺、等々力溪谷公園以外は極めて稀で、玉堤、奥沢、粕谷、南烏山で数例の観察記録があるのみである。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 402件 1938～2019年)



○繁殖記録

1944.	池尻	繁殖の詳細不明	東京都アオバズク調査
1946.	太子堂	繁殖の詳細不明	東京都アオバズク調査
1948～1949	奥沢	繁殖の詳細不明	東京都アオバズク調査
1950～1971	岡本、瀬田、上野毛、中町、等々力溪谷公園では毎年繁殖 そのほか尾山台、砧、経堂、奥沢でも繁殖	繁殖の詳細不明	東京都アオバズク調査
1980. 08. 04	喜多見 3	1 巣 成鳥 2、雛 1 羽	氷川神社
1981. 08. 10	喜多見 4	1 巣 幼鳥 3 羽	須賀神社ムクノキ
1998. 08. 04	豪徳寺	1 巣 成鳥 1、幼鳥 3 羽	
2001. 07. 26	豪徳寺	1 巣 成鳥 2、雛 1 羽	
2004. 07. 24	豪徳寺	1 巣 成鳥 2、雛 4 羽	
2016. 07. 16	豪徳寺	1 巣 親 2 羽と巣立ち雛 2 羽が木止まり	
2018. 07. 24	豪徳寺	1 巣 雄 1、雌 1 羽、巣立ちヒナ 2 羽を確認 地上に落ちている餌の残骸を見ると、カブトムシ、セミが主食である	
2019. 08. 07	豪徳寺	1 巣 雄 1 羽、雌 1 羽、巣立ちヒナ 1 羽。6/16 雄を初認して以来 53 日でヒナ 1 羽が巣 立った。ハシブトガラスが 5～6 羽営巣木周辺に群れて、ヒナを狙っているよう だが、雌がヒナにぴったり寄り添っているため、手出しができない	

○主な観察記録

1938. 08. 10	太子堂	1 羽	
1948. 07. 07	野毛	1 羽	天神山にて鳴く ポウポウ 1 回
1952. 04. 18	野毛	1 羽	20 時 45 分 寺の森で鳴く 初認
1959. 05. 20	経堂	1 羽	
1969. 09. 14	多摩川	1 羽	コジキッタナ
1970. 05. 14	野毛	1 羽	善養寺に飛来
1981. 07. 08	喜多見 4	1 羽	成鳥 須賀神社ムクノキ 写真あり
1997. 07. 04	岡本	1 羽	午前 0:37 に 1 回鳴く (八幡神社の森)
1999. 07. 07	豪徳寺	1 羽	成鳥
2002. 05. 14	豪徳寺	1 羽	初認 日暮れ時低空を飛ぶ 夜、大木の天端で尾を振り鳴く シルエット
2003. 05. 19	豪徳寺	1 羽	初認 高木の樹冠にシルエット ホウホウと鳴き続ける
2005. 05. 24	豪徳寺	1 羽	高木にとまり、雨の中鳴き声と飛行の繰り返し
2010. 08. 17	多摩川(玉堤 1)	1 羽	川崎側から飛来し川岸の葉が茂ったエノキに入る
2012. 08. 01	南烏山 2	1 羽	アオバズクの声を確認 3:30～4:00 までの間 3 回鳴く
2017. 06. 17	粕谷	1 羽	午前 2 時、4 時、その後午後 11 時、6/18 午前 1 時、2 時、4 時にも鳴声を確認
2017. 07. 17	奥沢	1 羽	ケヤキの大木群で「ホッ ホー」と聞こえる声で 3 度鳴く
2018. 09. 13	等々力溪谷公園	1 羽	早朝鳴き声

375. トラフズク *Asio otus* Long-eared Owl

フクロウ科

ユーラシア及び北アメリカの温帯、亜寒帯で繁殖し、寒地のものは南下して越冬する。日本では、本州中部から北海道にかけて局地的に繁殖する。冬は、積雪の少ない地方に移動する。

平地から山地の林、農耕地、河畔林などに生息する。積雪が多くなると数羽から十数羽の群れで常緑樹などをねぐらにして越冬する。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。針葉樹林や雑木林の中の大木の樹

洞や、カラス類、タカ類の古巣などに営巣する。夜間に活動し、ネズミなどの小哺乳類や小鳥を捕らえる。

世田谷区では、冬期に稀に観察される。1995年から1999年までは多摩川で毎年観察されていたが、2000年以降稀になった。河畔林縁や中州のヤナギで休息しているのが見られている。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 34件 1995～2018年 2011年以降 6件)

○主な観察記録

1995. 02. 13	多摩川	5羽	中州のヤナギに止まっていた
1995. 12. 26	多摩川(玉堤1)	2羽	中州のヤナギに止まっていた
1996. 12. 27	多摩川(玉堤1)	1羽	右岸のヤナギに止まっている
1997. 03. 17	多摩川(玉堤1)	1羽	右岸のヤナギに止まっている
1998. 01. 23	多摩川(玉堤1)	1羽	アズマネザサの藪の川側のエノキに止まりほとんど目を閉じている (4/11まで観察)
1999. 02. 08	多摩川(玉堤1)	1羽	右岸のヤナギに止まっている
2009. 01. 27	多摩川(玉堤1)	1羽	中州のヤナギで休息
2011. 02. 07	多摩川(玉堤1)	1羽	中州の草が茂ったヤナギに止まり休息
2014. 01. 02	多摩川(玉堤1)	1羽	左岸河畔林エノキで休息
2018. 02. 11	多摩川(玉堤1)	1羽	林縁で休息

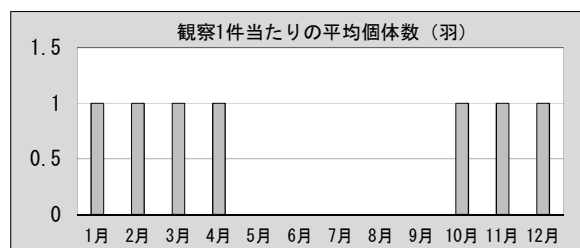
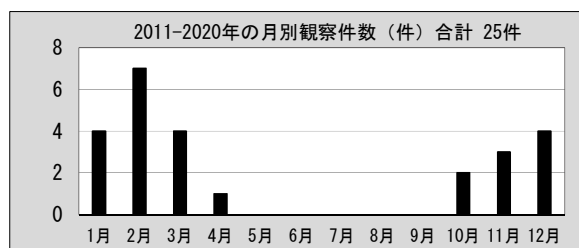
376. コミミズク *Asio flammeus* Short-eared Owl

フクロウ科

ユーラシア大陸、北アメリカの寒帯、亜寒帯で広く繁殖し、冬は温帯地方に移動し越冬する。日本には、冬鳥として北海道、本州、佐渡、四国、九州に渡来する。

干潟の埋立地、河原、水田などなど広々と開けた荒れ地状の環境に生息する。夜行性だが昼間にも活動する。ねぐらは通常、丈の低い草が茂った中にあり、昼間はそこで身を伏せるようにして休んでいる。生息数の多い場所では10羽ぐらいが集まってねぐらを取り、各々の個体は数メートルの距離を置いて休息する。この集団ねぐらは人為的な影響や周辺環境が変わらない限り数年間は継続する。夕暮れから活動しヨシ原や草原の上を低く飛び主としてネズミ類や小鳥を捕らえる。

世田谷区では、10～12月に渡来し、翌年の2月頃去る。主に多摩川で観察されるが、1991年岡本静嘉堂周辺、2013年に鳥山で観察された例がある。多摩川の河川敷で日中ねぐらにいたり、カラス類に追われたり、草原に猟犬が入って飛び立つ様子が観察されている。2001～2004年の12月から翌年の3月に、同じ中州草地をねぐらにしていた。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 327件 1961～2019年)



○ねぐら記録

2001. 12. 23～2002. 03. 22	多摩川(玉堤1)	1羽	中州の草地
2002. 12. 13～2003. 03. 02	多摩川(玉堤1)	1羽	前年と同じ場所
2003. 12. 08～2004. 03. 09	多摩川(玉堤1)	1羽	前年と同じ場所 オギの陰になり、姿勢を変えた時に見られる

○主な観察記録

1961. 11. 26	多摩川(玉堤)	1羽	川ダレ下流の河原に降りていた
1968. 02. 20	多摩川(鎌田)	2羽	二子橋上流読売飛行場先多摩川で見る
1988. 12. 21	多摩川(玉堤)	5羽	(翌年5/5終認)
1991. 10. 20	岡本静嘉堂周辺	1羽	
1995. 10. 30	多摩川	2羽	初認 河原に降りていた (翌年4/23終認)
1998. 10. 28	多摩川	1羽	初認 (翌年3/8終認)

1999. 02. 13	多摩川	1羽	ハシブトガラス 15羽に威嚇され飛び去る
2000. 03. 03	多摩川(野毛 2)	1羽	上流から飛来、川岸の藪に入る
2003. 11. 12	多摩川(玉堤 1)	1羽	中州の草地で休んでいるところにゴルフの打放し練習 コミミズクは飛立つ
2005. 10. 26	多摩川(鎌田 1)	1羽	オギの海エノキの上空 上流へ飛び去る
2006. 11. 22	多摩川(野毛 2)	1羽	上空でカラス 3羽に追われながら下流へ飛び去る
2008. 10. 15	多摩川(鎌田 1)	1羽	河川敷運動場上空を多摩川沿いに上流方向へ通過
2010. 01. 15	多摩川(玉堤 1)	1羽	草地と砂礫地が混在した中州
2011. 12. 22	多摩川(玉堤 1)	1羽	渡し場付近草地 低空をカラスにモビングされ上空へ
2013. 02. 03	烏山	1羽	ハシブトガラス数羽に追われて上空を旋回 自宅ベランダから観察
2016. 02. 16	多摩川(玉堤 1)	1羽	草地のオギが倒れている間に埋もれ顔だけ表に出している
2018. 11. 21	砧公園	1羽	砧公園サンクチャリ上空を数分間旋回
2019. 12. 16	多摩川(玉堤 1)	1羽	草原上空をハシボソガラスに追われ右、左と交わしながら下流へ

◆ カワセミ科 ALCEDINIDAE

378. アカショウビン *Halcyon coromanda* Ruddy Kingfisher

カワセミ科

インド北東部、ネパール、バングラデシュ、東南アジア、北東アジアで繁殖し、北部のものは冬に熱帯地域に南下する。日本には、夏鳥として北海道から琉球諸島まではほぼ全国に渡来し繁殖するが、特に本州中部から西南部や種子島、屋久島に多い。トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島ではリュウキュウアカショウビンが生息、繁殖している。

平地から山地の溪流や湖沼のある落葉広葉樹林、常緑広葉樹林で生活する。葉が茂り薄暗い谷間の樹林を好み、西表島ではマングローブ林に多い。繁殖期は5～7月で、樹洞や崖の洞穴を利用する。1巢の卵数は5～7個で雌雄交代で抱卵する。繁殖初期にはよくさえずり「キョロロロ」と聞こえる声で鳴く。小魚、サワガニ、カエル、オタマジャクシなどを食べる。

世田谷区では下記3例の記録がある。(東京都区部：非分布 全記録数 3件 2006、2017、2018年)

○観察記録

2006. 05. 30	多摩川(野毛 2)	1羽	数度鳴いて下流へ飛び立つ
2017. 10. 31	多摩川(玉堤 1)	1羽	成鳥が川岸入り江の流木から飛び降りザルガニを捕る 近くのヤナギに移り頭部を数度横枝に数度打ち付けた後食べる
2018. 05. 14	多摩川(玉堤 2)	1羽	川岸斜面草地の枯れ木で「キョロロ」と鳴く その後飛び立ち上流へ

383. カワセミ *Alcedo atthis* Common Kingfisher

カワセミ科

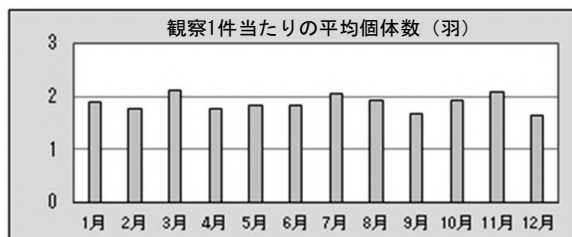
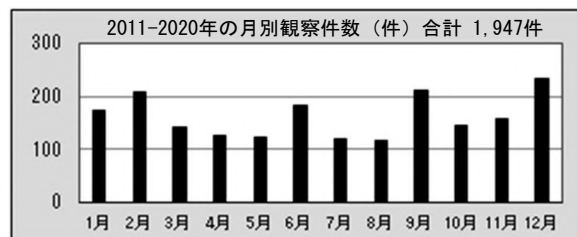
西ヨーロッパからオホーツクに至るユーラシア大陸や東南アジア、日本、オーストラリア、北アフリカなどで繁殖し、北方のものは冬期にアフリカ、インドネシア、フィリピンに渡って越冬する。日本では、北海道では夏鳥、本州以南から琉球諸島では留鳥として全国で繁殖する。

平地から標高 900m以下の河川、湖沼、池、水田、小川に生息し、水辺の土質の崖にくちばしを使って雌雄交代で 50～100cm ぐらいの深さの巣穴を掘る。3～8月に年1～2回繁殖する。1巢の卵数は4～7個。雌雄交代で抱卵し、約19日で孵化した後、約23日で巣立つ。水面上空でホバリングしたあと水面に飛び込み、小魚や小ぶりのザリガニ、カエルなどを捕らえ枝や杭に叩きつけて一気に呑み込む。魚の骨の塊をペリットとして吐き出す習性がある。1960年頃から営巣地となる土手のコンクリート化、水質悪化やそれに伴う小魚の減少など生息環境の悪化により日本各地で生息域や個体数の減少が報告された。東京都においても1960年代ころには青梅や高尾近辺でしか観察されなくなっていたが、環境の改善により1970年代の中頃から23区内でも生息が確認されるようになり、1980年代からは広く見られるようになった。

世田谷区では、一年を通して観察される。1960年頃から河川環境の悪化により激減したが、1980年代後半から再び増加した。多摩川や野川、仙川、砧公園をはじめ河川や水辺のある公園で見られ、繁殖例も多い。仙川や野川で護岸壁の排水パイプに営巣した例がある。野川で何回か同じ巣が使われた例もある。水

面に飛び込んで小魚を捕食したり、繁殖期に求愛給餌する姿が多く観察されている。

(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 5435 件 1946～2020 年)



○主な繁殖記録

1953. 05. 05	野毛	1 巣	7 卵	巣の中に手を入れたらくわえた
1997. 05. 28	多摩川(玉堤 1)	1 巣		崖の巣穴に小魚をくわえて入る
2000. 06. 08	野川	1 巣		巣立ち雛 1 羽
2004. 10. 07	砧公園	1 巣		巣立ち雛 1 羽 谷戸川
2008. 05. 25	野川(成城 4)	1 巣		巣立ち雛 3 羽 給餌
2009. 06. 09	多摩川(玉堤 1)	1 巣		巣立ち雛 2 羽が川岸の横枝に止まり成鳥から給餌をうける
2010. 06. 04	野川(成城 4)	1 巣		成鳥 1 羽が巣立ち雛 2 羽に給餌
2012. 06. 11	野川(宇名根 3)	1 巣		親 2 羽から巣立ち雛 3 羽が給餌を受けていた
2013. 04. 08	祖師谷公園	1 巣		仙川宮下橋下流護岸右岸の上段排水管に雌雄が出入りする
2014. 05. 29	野川(大蔵 5)	1 巣		昨年に続き同じ排水水抜きパイプ中で営巣
2016. 06. 27	多摩川(玉堤 1)	1 巣		雌成鳥、巣立ち雛 3 羽 雌が川岸のヤナギから川面に飛び込み小魚を捕り、巣立ち雛に給餌する
2019. 07. 19	野川(喜多見 5)	1 巣		排水パイプから 2 番子が巣立ち、川辺の木に止まっていた

○主な観察記録

1946. 08. 24	野毛	1 羽		
1948. 05. 04	等々力溪谷公園	1 羽		谷沢川
1964. 10. 31	多摩川(玉堤)	1 羽		等々力 多摩川から飛び立ち上流に飛び去った
1986. 11. 29	馬事公苑	1 羽		池
1991. 05. 19	高源院	1 羽		弁天池
1994. 06. 22	野川	8 羽		定例調査
1998. 09. 05	野川	3 羽		小さいザリガニを食べていた
2002. 02. 20	多摩川	13 羽		定例調査
2005. 02. 03	砧公園	1 羽		サンクチュアリ内
2007. 04. 09	多摩川(鎌田 1)	2 羽		雄 1、雌 1 羽 オギの海脇の中州 求愛給餌 かなり大きい魚
2009. 02. 19	岡本静嘉堂周辺	2 羽		
2010. 01. 23	多摩川(玉川 3)	1 羽		ホバリングして小魚を捕らえ、近くの石の上で頭部から飲み込む
2011. 03. 01	多摩川(玉堤 1)	8 羽		雌雄 2 羽が中州のヨシに向かい合ってとまり、雄が頭を上下に振ると少し遅れて雌も振り、その後交尾した
2012. 10. 13	野川(喜多見 5)	2 羽		2 羽でテリトリー争い
2013. 03. 01	仙川	3 羽		3 羽が鳴き交わし飛びまわる
2015. 06. 15	高源院	1 羽		雌 かなり長い間弁天池で採餌
2016. 04. 09	砧公園	1 羽		ペリットを吐いた
2017. 05. 28	野川(成城 4)	1 羽		幼鳥がペリットを吐いた
2018. 06. 12	仙川	1 羽		雄、みどり橋上流左岸の流れで小魚を採食
2019. 02. 13	野川	13 羽		定例調査
2020. 08. 02	野川(喜多見 7)	1 羽		幼鳥が飛び込んで小エビを捕食

◆ ブッポウソウ科 CORACIIDAE

387. ブッポウソウ *Eurystomus orientalis* Common Dollarbird

ブッポウソウ科

アジア、オーストラリア地域に広く分布する。インドから中国、東南アジア、北方では満州、アムール湾、サハリン、日本までの範囲、またマレー半島、フィリピンからオーストラリアの範囲で繁殖する。北

方のもはインドネシアなど南方へ移動して越冬する。日本には本州、四国、九州へ夏鳥として飛来し繁殖する。

低山帯の常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、スギ林、ヒノキ林、モミ林など巨木の多い樹林に住む。市街地では社寺の境内林で見られることもある。繁殖期は5～7月で、主に樹洞に営巣するが、最近では巣箱に営巣すること多い。食性は昆虫食で、大型昆虫を空中や地上でとらえ採食する。

世田谷では下記1例の記録がある。(東京都区部：非分布 環境省：絶滅危惧IB類 全記録数1件 2020年)

○観察記録

2020.06.26 砧公園 1羽 サンクチャリ内を何回も飛翔

◆ キツツキ科 PICIDAE

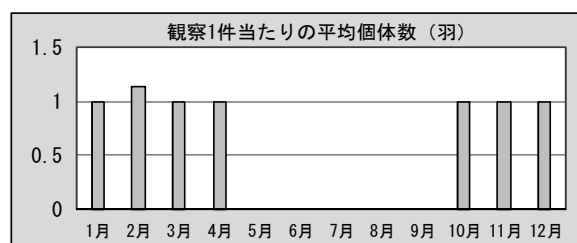
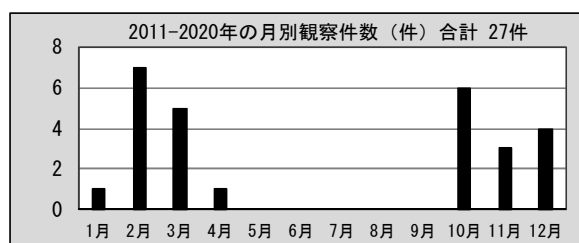
388. アリスイ *Jynx torquilla* Eurasian Wryneck

キツツキ科

ユーラシア大陸の中緯度地方、オホーツク海沿岸、朝鮮半島や日本などで繁殖し、北方のものは冬にアフリカの熱帯地方、南アジアなどで越冬する。日本では、北海道、東北の一部で夏鳥として繁殖し、北方のものは冬は本州中部から九州にかけて移動する。

平地から低山の開けた森林、草原、ヨシ原、農耕地に生息する。特に湿地林や川辺林を好む。繁殖期は4～7月で樹幹の割れ目や穴、キツツキの古巣、壁や土手の穴などを利用する。1巢の卵数は5～12個で12～14日で孵化する。地上や木の枝や幹に止まってトビイロケアリ、クロアリ、コガネムシ、クモなどを捕食する。アリスイの体色や模様は木の幹に似ている。

世田谷区では、10月頃から翌年の春4月頃までに少数が観察されている。主に多摩川で見られ、ヤナギ、ハリエンジュ、イチョウの木やオオブタクサの茎などに止まっている姿が観察されている。2010年には砧公園でも観察されている。(全記録数50件 1997～2020年)



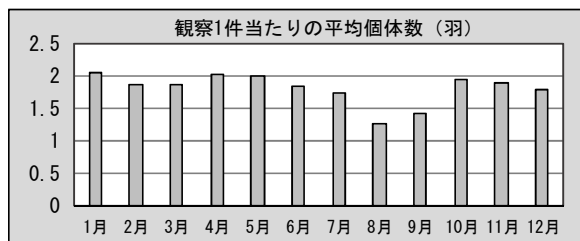
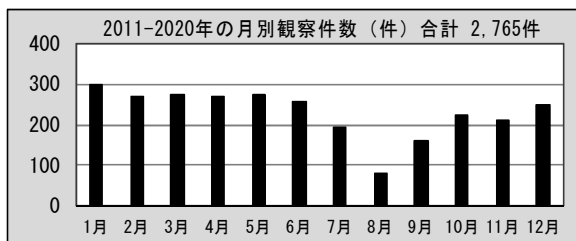
○主な観察記録

1997.10.06	多摩川(玉川1)	1羽	草地の中州の小さなヤナギに止まる
1998.10.22	多摩川(玉川1)	1羽	中州のヤナギにいて時々地面に降りる
2002.12.05	多摩川(鎌田1)	1羽	ハリエンジュ横枝
2004.11.16	多摩川(鎌田1)	1羽	刈草集積場のニセアカシアに止まる (11/19まで観察できた)
2007.11.27	多摩川(玉堤2)	1羽	草地の大きなヤナギの枝に止まる
2009.01.19	多摩川(玉川3)	1羽	兵庫島河川公園のハリエンジュ
2010.04.20	砧公園	1羽	イチョウに止まっていたが、西に飛んで行く
2011.03.01	多摩川(玉堤1)	1羽	川岸のエノキで「キィー」と鳴く
2013.10.28	多摩川(玉堤1)	1羽	川崎側から飛来し左岸のエノキに止まる
2014.04.08	多摩川(玉堤1)	1羽	ヨシ原内幼木に止まる 地面に飛び降り枯草内に隠れる
2015.02.10	多摩川	1羽	下流方向から飛来し川岸近くのおオブタクサ茎に止まる
2016.03.08	多摩川(玉堤2)	1羽	草原を「キッキキ」と鳴きながら飛び回る
2018.02.05	多摩川(玉堤1)	1羽	林縁のエノキで胸を反らせモズを威嚇する
2019.11.13	多摩川(玉堤1)	1羽	定例調査 エノキの幼木にとまり休息
2020.02.17	多摩川(玉堤1)	2羽	2羽の内1羽が川岸のエノキで「キィー」と鳴くとモズが飛来し追われる

ロシア南東部、サハリン、中国東北部、朝鮮半島、日本に分布する。日本では、亜種コゲラが本州北・中部で留鳥として生息、繁殖するほか、全国に地方ごとの亜種（全9亜種）が生息する。

低地や低山帯、亜寒帯の針広葉樹の混じった林やナラ、サクラなどの落葉広葉樹林、雑木林、マツ林などに生息するが、近年では都市の緑地や自然林、公園、住宅地にも生息しており、1980年代以降、東京などの都市部でも繁殖するようになった。繁殖時は雌雄で枯れ木や生木に直径3 cmぐらいの樹洞を掘って巣をつくる。1巣の卵数は5〜7個。抱卵は雌雄で行い、夜間は雄が行う。12日くらいで孵化し、その後22日ほどで巣立つ。「ギイーッ」または「キッキッキッ」と聞こえる声で鳴き、木をくちばしで突いてドラミングを行う。樹木の幹から枝に向かって登りながら左右に細かく動いて樹皮を突き、表面や内側にいるアリ、シャクトリムシ、カミキリムシの幼虫、クモ類など節足動物を食べる。ヤマウルシ、ヌルデ、ミズキなどの種子も食べる。

世田谷区では区内全域で1年を通して観察される。1984年に砦公園で初めて観察され、1987年には馬事公苑で初めて繁殖が確認された。2000年頃からは砦公園、馬事公苑、岡本静嘉堂周辺、成城みつ池緑地、希望丘公園、羽根木公園、次大夫堀公園などの公園や緑地、社寺、住宅地などで繁殖している。シロアリを食べている姿が確認されている。（全記録数5,096件 1984〜2020年）



○主な繁殖記録

1987. 04. 03	馬事公苑	1 巣	抱卵（4/20 雛に給餌するが後日死ぬ）
1990. 05. 14	羽根木公園	1 巣	巣立ち雛1羽、成鳥1羽
1994. 05. 26	世田谷公園	1 巣	巣立ち雛4羽 成鳥が給餌
2003. 05. 20	砦公園	1 巣	巣立ち雛1羽
2006. 05. 25	千歳台5	1 巣	巣立ち雛1羽 巣から出て成鳥と一緒に虫を採る 巣を確認
2008. 06. 10	瀬田四丁目旧小坂緑地	1 巣	かなり大きくなったヒナが巣穴から顔を出し親が餌を運ぶ
2010. 05. 01	蘆花恒春園	1 巣	1 雛 蘆花恒春園の中庭の小さな木に営巣
2012. 06. 18	多摩川(玉川3)	1 巣	兵庫島公園の樹木で成鳥2羽 巣立ち雛2羽の家族群 巣立ち雛1羽が鳴きながら成鳥に近寄り給餌を受ける
2015. 06. 27	駒沢オリンピック公園	1 巣	定例調査 サンクチュアリ内で巣立ち雛2羽 他に巣立ち雛1羽
2016. 05. 16	上野毛2	1 巣	成鳥1羽 成鳥が餌を巣に運ぶと巣穴から雛の声 上野毛自然公園
2018. 06. 20	砦公園	1 巣	①雛3羽巣立つ 成鳥1羽 ②巣立ち雛2羽 親1羽から餌をもらう
2020. 05. 19	喜多見6	1 巣	巣立ち雛に餌を与えていた

○主な観察記録

1984. 02. 18	砦公園	1 羽	
1987. 12. 07	船橋5	1 羽	
1991. 05. 20	深沢8	1 羽	深沢八丁目無原罪特別保護区
1997. 03. 02	下馬4	2 羽	子の神公園
1999. 06. 02	桜丘すみれ自然庭園	1 羽	
2001. 02. 24	桜上水3	3 羽	自宅の植込みと遊歩道を移動
2004. 01. 12	奥沢6	2 羽	
2007. 05. 14	蘆花恒春園	2 羽	
2008. 07. 02	砦公園	18 羽	定例調査
2009. 03. 31	希望丘公園	3 羽	
2009. 04. 29	岡本静嘉堂周辺	1 羽	竹をドラミング
2010. 02. 08	桜上水3	1 羽	北沢川緑道の並木で採餌しながら移動

2013. 12. 08	羽根木公園	2羽	定例調査
2014. 08. 10	次大夫堀公園	1羽	公園のエノキを突っついてた
2017. 07. 24	多摩川(玉堤 1)	1羽	川岸の枯れたヤナギの皮を剥いでシロアリを食べる
2020. 12. 24	砧公園	2羽	2羽の内の1羽はエナガ8羽、シジュウカラ6羽との混群で移動

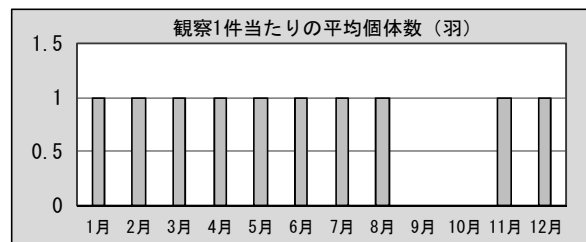
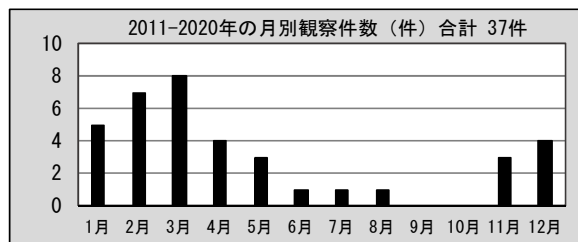
393. アカゲラ *Dendrocopos major* Great Spotted Woodpecker

キツツキ科

北アフリカ、ヨーロッパからユーラシア大陸中緯度地域を経てカムチャツカ、東アジア、インドシナ北部に広く分布する。日本では留鳥で北海道、本州に分布している。四国、九州では稀。北海道のものは亜種エゾアカゲラである。

低地、低山帯、亜高山帯の落葉広葉樹林、アカマツ林などの比較的明るい林を好むが、農耕地の雑木林、樹木の多い公園や集落でも繁殖する。繁殖期は5～7月。枯れ木に雌雄共同で樹洞を掘って巣にする。1巣の卵数は4～6個、雌雄交代で抱卵し14～16日で孵化する。秋から冬にかけては、稀に市街地の公園や林などにも飛来することもある。常に森林で単独に生活し、警戒時には「キョッ、キョッ」と聞こえる声で頭を振りながら鳴く。春先は盛んにドラミングをする。木の幹から大枝によじ登りながら、樹皮の表面や割れ目で採食をしたり、地上に降りて枯れ枝をつついて中にいる甲虫の幼虫を採ったり、アリやクモ、ハチ類を食べる。また、ヌルデ、ウルシ、ノイバラ、ヤマブドウ、カキノキなどの実も食べる。

世田谷区では個体数は多くないがほぼ毎年、11月頃から翌年の5月頃まで観察されている。観察記録は毎回1羽である。古木や大きな木の多い砧公園で見られることが多いが、祖師谷公園、馬事公苑、多摩川、仙川、次大夫堀公園、成城みつ池緑地、駒沢オリンピック公園でも観察されている。ドラミングや鳴き声も聞かれている。(東京都区部：非分布 全記録数69件 1964～2020年)



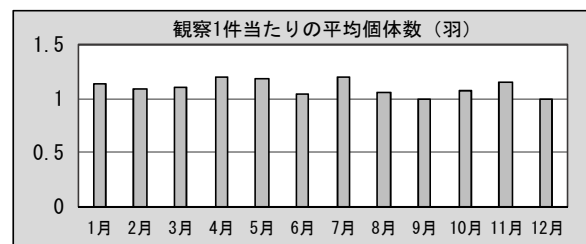
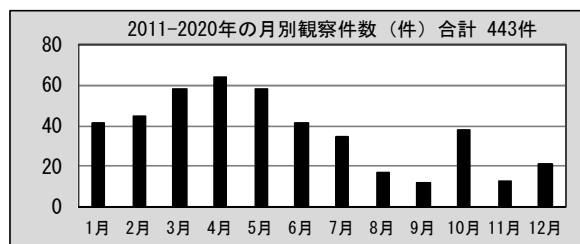
○主な観察記録

1964. 10. 30	野毛	1羽	雄	自宅前の谷沢の松に止って鳴く (11/20まで観察できた)
1966. 11. 27	岡本	1羽		
1976. 02. 01	馬事公苑	1羽		
1997. 10. 01	砧公園	1羽	雌	
2004. 01. 10	仙川周辺	1羽		宮前橋下流右岸の樹林で観察す
2007. 02. 08	砧公園	1羽		ドラミング
2009. 04. 30	祖師谷公園	1羽		祖師谷公園セキレイ橋近くで鳴き声を聞く 仙川の右岸樹林帯にて
2009. 07. 05	次大夫堀公園	1羽		古木へ飛翔してきた
2010. 12. 06	多摩川(玉川3)	1羽		兵庫島河川公園の樹木から飛び立ち野川の林に入る
2011. 02. 03	砧公園	1羽		地面で採食
2012. 03. 08	駒沢オリンピック公園	1羽		
2014. 12. 21	上野毛自然公園	1羽		盛んに枝をつつく
2015. 01. 19	多摩川(玉堤1)	1羽		雄が何かに驚き川岸のエノキから中州のエノキに移る (3/30まで継続して観察)
2015. 02. 23	砧公園	1羽		木々を移動して虫を捕食 (3/17まで継続して観察)
2017. 07. 06	豪徳寺	1羽		ムクノキに一時とどまり飛び去る
2020. 05. 02	成城みつ池緑地	1羽		

日本固有種で、留鳥として本州、四国、九州、大隅諸島に分布する。四国、九州のものは亜種カゴシマアオゲラ、大隅諸島のものは亜種タネアオゲラである。

落葉広葉樹や針葉樹などの森林に生息するが、住宅地などにも出現する。硬い尾羽を利用して幹に縦に止まり、幹の周囲を回りながら梢に登り餌を採る。甲虫、クモ、ムカデなどを食べるが、地上に降りてアリを採食することもある。繁殖は4～6月でサクラ、マツ、クリ、ナラなどの生木の幹に穴を掘って巣をつくる。1巣の卵数は7～8個。繁殖の頃は一夫一妻で生活し、抱卵も育雛も共同で行う。繁殖期には「ピョー、ピョー」または「ケレ、ケレ」と聞こえる鳴き声や枯れ木を突くドラミングが聞かれる。繁殖期以外は単独でいることが多い。

世田谷区では1年を通して見られる。1962年に始めて観察されて以来、冬期に飛来していたが、2005年頃から観察件数が増え始め、2008年ころからは多くの公園で一年中観察されるようになった。2009年7月に砧公園で幼鳥が観察され、2011年7月には馬事公苑で、2016～2018年には砧公園、祖師谷公園でも繁殖が確認された。砧公園、成城みつ池緑地、馬事公苑などでの観察例が多いが、祖師谷公園、蘆花恒春園や成城三丁目緑地、次大夫堀公園などの公園や多摩川など河川でも見られる。岡本、豪徳寺、野毛、成城、大蔵、桜上水、千歳台などの住宅地、社寺で見られることもある。(東京都区部：絶滅危惧IB類 全記録数662件 1962～2020年)



○繁殖記録

2011. 06. 18	馬事公苑	1 巣	馬事公苑内の芝馬場そばの桜並木に営巣 (7/5に幼鳥確認)
2016. 07. 28	砧公園	1 巣	まだ全身グレーい雛。巣穴から出てきて一度下に落ちるがまた低木に上がり木の上に乗っていき鳴くと親が飛んできた
2017. 06. 17	砧公園	1 巣	親は餌を持って巣立ちを促していた
2018. 06. 02	祖師谷公園	1 巣	♀が巣穴を覗きくと中から1羽が飛出し、♀が巣に入った(抱卵の模様)

○主な観察記録

1962. 11. 25	等々力溪谷公園	1 羽	雄 岸の寮
1986. 08. 13	岡本2	1 羽	雄が電柱の頂に止まって鳴く
1991. 04. 01	馬事公苑	1 羽	
1995. 06. 21	成城3	1 羽	小学校校庭脇の電柱で鳴いたりドラミングする
1997. 02. 14	多摩川(玉堤2)	1 羽	雄がヤナギに止まって鳴く
2001. 12. 23	砧公園	1 羽	
2004. 02. 25	豪徳寺	1 羽	高木の頂で鳴き、ドラミング
2006. 03. 22	成城みつ池緑地	1 羽	鳴き声
2007. 03. 20	喜多見6	1 羽	小学校のサクラを鳴きながら採餌移動
2008. 03. 16	駒沢オリンピック公園	1 羽	
2009. 04. 30	祖師谷公園	1 羽	祖師谷公園セキレイ橋近くで鳴き声を聞く 仙川左岸樹林帯にて
2009. 07. 28	次大夫堀公園	1 羽	桜の木に飛来
2009. 07. 29	砧公園	3 羽	雌親1羽がクマノミズキの実を食べ、近くに幼鳥2羽すぐ飛び去る
2010. 01. 07	成城三丁目緑地	2 羽	
2011. 07. 05	馬事公苑	3 羽	自然林の中にアオゲラ幼鳥と思われるのと親鳥がいました
2012. 07. 03	岡本静嘉堂周辺	2 羽	1羽はドラミングをしていた
2014. 06. 04	野川	1 羽	定例調査
2015. 04. 21	等々力溪谷公園	1 羽	ケヤキの太木でキョッ キョッ キョッと鳴き飛び去る
2017. 04. 19	蘆花恒春園	2 羽	木に止まって鳴き合わせたりドラミングを繰り返す
2020. 10. 26	多摩川(玉川1)	1 羽	雄が川岸草地のヤナギで「ピョー ピョー」と聞こえる声で鳴く

◆ ハヤブサ科 FALCONIDAE

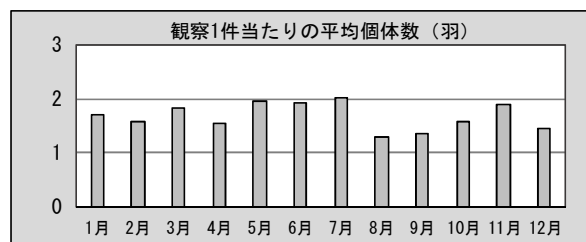
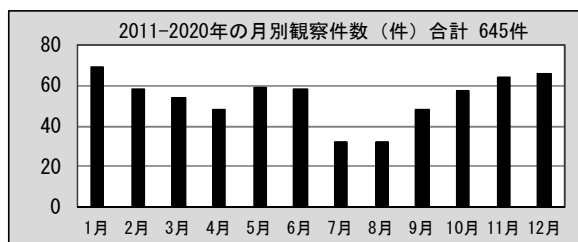
401. チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* Common Kestrel

ハヤブサ科

ユーラシア大陸の亜寒帯から亜熱帯、サハラを除くアフリカ大陸全域で広く繁殖し、北方のものは冬期に温帯、熱帯地方へ移動する。日本では、北海道中部、本州北部から中部では留鳥として繁殖するが、冬は一部が移動するので全国で冬鳥として広く観察される。

農耕地、野原、川原、干拓地、丘陵地帯で生活し、木や杭、電線など見張り場に止まる。狩は次々と場所を移動し、ホバリングしながら地上の獲物を探す。獲物はネズミ、昆虫、小鳥が多い。捕らえた場所で獲物を食べる。繁殖期には求愛のディスプレイフライトが観察されることがある。4～7月、断崖の横穴や岩棚に巣材を用いず直接卵を産む。カラス類の古巣を流用することもある。1巣の卵数は4～7個で雌雄で抱卵する。27～29日で孵化し、その後27～30日で巣立つ。近年は橋桁や建物などで営巣することが多くなっている。

世田谷区では、過去には冬期にのみ見られたが、1996年ころから1年を通して観察されるようになった。多摩川では、2005年から2012年にかけて第三京浜道多摩川橋の橋桁内部、2007年には東名高速道橋桁、2012年からは新二子橋の橋桁内部でほぼ毎年繁殖が観察されている。また、2007年には八幡山2丁目でも繁殖の記録がある。区内ではカラスの古巣を利用した例以外には殆ど人工物の上に営巣している。カワラバトの糞の堆積上に営巣した例もある。河川で多く見られるが公園や住宅地でも観察されており、スズメ、カワラヒワ、モズなど小型の鳥やカマキリ、バッタなどを捕食する姿が観察されている。特に秋には幼鳥や若鳥も含めて一時的に個体数が増加する。(東京都区部：絶滅危惧IB類 全記録数件 2,375件 1953～2020年)



○主な繁殖記録

2005. 04. 20	多摩川(野毛 2)	1 巣	第三京浜橋の梁のハトの糞溜まりで抱卵
2007. 06. 21	多摩川(宇奈根 2)	1 巣	巣立ち間際の雛 3、成鳥雄 1 羽 東名高速道橋桁に営巣
2007. 08. 10	八幡山 2	1 巣	成鳥雌 1、幼鳥 1 羽 幼鳥は成鳥雌より小さく遠目には黒っぽく見える 清掃工場の塔の A2 信号灯の所 (8/29 まで継続して観察)
2010. 05. 12	多摩川(野毛 2)	1 巣	雄成鳥 1 羽、雛 4 羽 第三京浜橋桁のハシボソガラス古巣で繁殖
2012. 05. 01	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雄が餌を掴んで来ると雌は橋下面から現れてスズメ大の鳥を橋脚で食べる。食べると雌はすぐ橋下面に消える
2012. 05. 16	多摩川(野毛 2)	1 巣	定例調査 1 羽が第三京浜橋下面の桁で抱卵
2013. 05. 21	多摩川(鎌田 1)	1 巣	成鳥雌 1 羽、幼鳥 2 羽 成鳥は橋桁から上流を見る
2014. 06. 09	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雄が小鳥を掴んで橋桁に降り幼鳥 1 羽に給餌する
2015. 05. 18	多摩川(鎌田 1)	1 巣	成鳥雌雄 橋桁で巣立ち雛 3 羽に雌雄の親が、バッタを頻繁に給餌
2016. 06. 06	多摩川(鎌田 1)	1 巣	成鳥 2、巣立ち雛 3 羽。巣立ち雛 1 羽が下流側の橋側面排水管用いて雌親からバッタをもらう 雄がネズミを掴んで橋中の橋脚隙間の巣立ち雛 1 羽に給餌
2017. 06. 22	多摩川(玉川 3)	1 巣	親 2 羽、巣立ち雛 3 羽、落下していた雛 1 羽救出して橋桁に戻した
2020. 04. 21	多摩川(玉川 3)	1 巣	雌雄成鳥 雄が下流側から小鳥を掴んで橋桁に降りると、橋中から雌が現れ小鳥を掴んで橋中に戻ると雛の音が鳴き続ける

○主な観察記録

1953. 11. 01	多摩川(野毛)	1 羽	渡し場の河原
1969. 11. 13	多摩川(鎌田)	1 羽	河原に降りていた
1974. 02. 01	馬事公苑	1 羽	
1985. 02. 08	桜上水	1 羽	雄 日大文理学部

1992. 01. 21	喜多見	1 羽	
1999. 02. 08	多摩川(玉堤 1)	2 羽	河原のスズメの群れに突っ込み 1 羽を捕まえて鉄塔に運び食べる
2001. 04. 16	多摩川(上野毛 2)	1 羽	雌が中州の岸で周りを警戒し川に入り浴びる
2003. 07. 07	奥沢 6	1 羽	民家樹林スレスレに北方に飛ぶ 小鳥が騒ぐ
2007. 06. 20	多摩川	10 羽	定例調査
2011. 08. 09	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雄成鳥がグランドポールから降りてオオカマキリを捕る
2011. 10. 11	多摩川(鎌田 1)	1 羽	成鳥雄 1 羽がグランドにいるハクセキレイを追いかけてフェンスに追い込む 両種とも一旦地面に落ちるがその後ハクセキレイを掴んで 100m 位離れたポールに止まり食べ始める
2013. 08. 22	桜上水	1 羽	密蔵院上空 長時間ハシブトガラス 2 羽のモビングを受ける
2014. 12. 15	多摩川(玉堤 2)	1 羽	雌が散策路脇のオニグルミやヤナギに移りながら木の下を見回しその後降下しモズを捕食する
2014. 12. 22	多摩川(野毛 2)	2 羽	雄 1 羽が橋桁でカワラヒワを捕食
2015. 10. 07	砧公園	1 羽	グランドの照明塔間を行ったり来たりする
2017. 07. 03	成城三丁目緑地	1 羽	上空高いところに張り付いたようにホバリング 周囲をハクセキレイ 2 羽がモビング
2020. 07. 16	野川(鎌田 4)	1 羽	アンテナから獲物を狙って飛び出していった

403. コチヨウゲンボウ *Falco columbarius* Merlin

ハヤブサ科

ユーラシア大陸や北アメリカ大陸の北部で繁殖する。日本には、冬鳥として北海道、南千島から本州、四国、九州、伊豆諸島、琉球諸島にかけて少数が渡来する。

越冬地では、農耕地、野原、干拓地、丘陵地などの開けた所に生息する。繁殖は、主に地上に小枝を積んで巣をつくるが、森林地帯ではカラスなどの古巣を利用することが多い。低木や杭、電線、地上の高みなどに止まり、飛んでいる小鳥を見つけると自在に急旋回して獲物を捕捉する。昆虫やネズミを地上で捕ることもある。捕らえた獲物は地上の安全な場所に運んで食べる。

世田谷区には冬期に稀に渡来し、多摩川で観察されている。河川上空を飛翔する姿が多く見られるが、中州の林やグランドのバックネットにとまって羽づくろいする姿も観察されている。(東京都区部：情報不足 全記録数 15 件 1995～2013 年 2011 年以降 2 件)

○観察記録

1995. 01. 11	多摩川	2 羽	
1995. 04. 05	多摩川	1 羽	
1995. 05. 19	多摩川	1 羽	
1996. 01. 24	多摩川(玉堤 1)	1 羽	上流より飛来し林に降りる
1997. 11. 14	多摩川	1 羽	
1998. 03. 09	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄が下流から上流へ飛行
1999. 09. 28	多摩川(玉川 1)	1 羽	上流より飛来、林の木に降りる 脇腹の下に丸い斑がある
2000. 02. 16	多摩川	1 羽	
2000. 11. 06	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌 1 羽が上流から飛来し河原の流木に降りる
2001. 11. 02	多摩川(玉川 3)	1 羽	雌 1 羽が上流から飛来しマンション屋上の手すりに止まる
2002. 10. 08	多摩川(玉堤 1)	1 羽	幼鳥と思われる 1 羽が大きな中州で休む
2008. 12. 02	多摩川	1 羽	
2013. 01. 28	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雄成鳥 グランドのバックネットに止まり羽づくろい
2013. 12. 09	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄成鳥 中州のヤナギで休息

404. チゴハヤブサ *Falco subbuteo* Eurasian Hobby

ハヤブサ科

アフリカ大陸の北岸とユーラシア大陸の亜寒帯から温帯地方や日本で広く繁殖し、北方のものは冬期には熱帯地域に移動する。日本には、夏鳥として北海道、南千島、本州中部以北に渡来し繁殖する。本州中・南西部から琉球諸島では旅鳥である。

繁殖期は5～6月、カラスやハイタカ、カケスなどの樹上の古巣を利用し、産座に小枝を敷き2～3個の卵を産む。28日程度で孵化。平地の疎林に生息し、周辺の耕地や原野などの広い空間で狩をする。飛翔中の小鳥を上空から急降下して攻撃したり、逃げ惑う小鳥を急旋回して巧みに追跡して捕捉する。小鳥のほかにトンボなどの昆虫も捕らえ、飛びながら食べる。小鳥などの大きな獲物は一定の場所に運んで食べる。

世田谷区では春は3月から5月、秋は9月から10月に見られる。12月に観察された例がある。多摩川と砧公園で観察されている。多くの記録は上空通過である。(東京都区部：情報不足 全記録数 12件 1998～2014年 2011以降7件)

○観察記録

1998. 04. 21	多摩川(玉川3)	1羽	新二子橋付近上流より飛来し街方面へ
2002. 12. 30	多摩川(玉川1)	1羽	上流から飛来し旋回しながら川崎側へ
2005. 05. 06	多摩川(玉堤1)	1羽	カラス類3羽に追われて逃げ回り上流へ
2007. 10. 10	多摩川(鎌田1)	1羽	オギの海調査
2008. 10. 05	砧公園	1羽	木止まり
2011. 09. 26	多摩川(野毛2)	1羽	ムクドリ4羽を追いかけて、1羽を水面ギリギリまで追い込むが失敗
2011. 09. 30	多摩川(玉堤1)	1羽	区境 ハシブトガラス数羽にモビングされていた
2012. 03. 12	多摩川(玉堤2)	1羽	若鳥 高水敷上空をカラス類1羽に追われながら上流から飛来
2012. 04. 15	多摩川(鎌田1)	1羽	上空を猛スピードで方向転換を繰り返しながら飛び去る
2013. 09. 17	多摩川(玉堤2)	1羽	成鳥雌雄不明 高水敷の上空約10mを上流から飛来し下流へ
2014. 04. 24	多摩川(鎌田1)	1羽	あまり高くない上空を早い飛翔で上流に向かう
2014. 10. 14	砧公園	1羽	上空飛翔通過

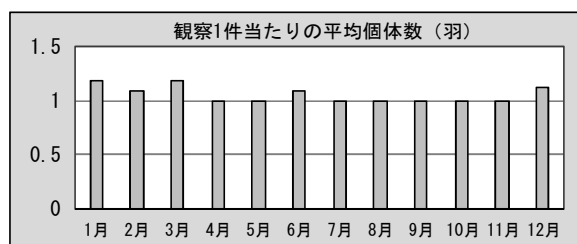
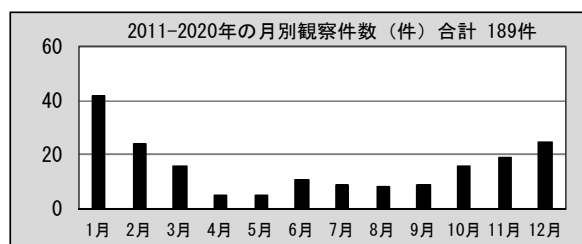
407. ハヤブサ *Falco peregrinus* Peregrine Falcon

ハヤブサ科

熱帯雨林帯、砂漠地帯、ニュージーランド、南極を除き、ほぼ全世界に広く分布して繁殖している。冬期には北部のものは気候温暖な地域に移動する。日本では、北海道、南千島、本州、四国、九州で繁殖し、その大部分は留鳥であるが、冬は一部暖地に移動するものや国外から渡来する個体も加わり増加する。

繁殖期は3～4月で、海岸の岸壁や海岸に近い崖などの岩棚に直接産卵し、巣材は使用しない。1巣の卵数は3～4個で30～33日で孵化する。崖の上や見晴らしのよい木や杭の上に止まって見張り、飛んでいる鳥を見つけると上空より急降下し獲物を脚で蹴落として捕捉する。捕らえた獲物を一定の場所に運んで食べる。獲物の殆どはカモ、ハト、ヒヨドリなどだが、稀にネズミやウサギを捕えることもある。

世田谷区では一年を通して観察されるが、夏期は少なくなる。主に多摩川で見られるが、多摩川から離れた砧公園や蘆花恒春園、次大夫堀公園で見られた例もある。カワラバト、スズメ、カワラヒワ、タヒバリを捕食したり、カルガモやカワウなど大型の鳥を襲う姿も観察されている。オオタカを襲った例もある。中州で水浴や休息している姿がよく観察されている。(東京都区部：絶滅危惧ⅠB類 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数578件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 09. 29	野毛	1羽	自宅で目撃
1952. 11. 10	多摩川(玉川)	1羽	二子橋下流にて下流より上流に飛行
1960. 02. 19	多摩川(野毛)	1羽	赤岩上空
1969. 12. 04	等々力溪谷公園	1羽	上空 岸の山

1980. 01. 17	玉川	1羽	成鳥
1992. 11. 11	砧公園	1羽	
1999. 12. 20	多摩川(野毛2)	1羽	中州の水辺で顔と胸を水面に浸し水浴びする
2001. 01. 06	多摩川(野毛2)	2羽	雌雄の成鳥が中州で休んでいる
2005. 03. 24	多摩川(玉川3)	2羽	兵庫島上空 雌雄2羽が上空を飛び雄が波状ディスプレイ飛行
2006. 01. 23	多摩川(上野毛2)	1羽	成鳥が中州の流木の陰で休んでいるオオタカの成鳥を襲う
2009. 08. 03	蘆花恒春園	1羽	上空通過 東から西方向へ
2010. 01. 21	次大夫堀公園	1羽	
2011. 07. 24	蘆花恒春園	1羽	この時期に見るのは珍しい 蘆花恒春園の上空を低く飛んだ
2012. 01. 23	多摩川(玉川3)	1羽	若鳥 低空で飛来し中州で休息しているカワウを襲うが失敗し、その後中州で水浴びする
2013. 03. 19	多摩川(玉堤1)	1羽	若鳥 低空で飛来し中州縁のタヒバリを襲い捕った後に急上昇
2013. 12. 09	多摩川(上野毛2)	1羽	雄成鳥 カワラバトを掴んで川面上空4~5mを上流に向かう
2014. 10. 08	祖師谷4	1羽	雌 スズメを捕まえた
2015. 03. 02	多摩川	1羽	成鳥雄が浅瀬にいるセグロカモメを威嚇した後浅瀬で水浴び
2015. 11. 06	多摩川(鎌田1)	1羽	新二子橋上流 カワラヒワの群れを襲い、捕らえて上流へ
2017. 01. 29	多摩川(玉川3)	1羽	成鳥が下流方向から飛来し川岸草地のカワラバトの群れを襲い1羽を捕える。近くの橋桁まで運び食べる
2018. 10. 15	多摩川(玉川3)	1羽	成鳥が兵庫島公園の樹木から西へ飛び立ったヒヨドリ群れを襲い1羽を捕らえる 一旦川面近くまで落ちるが橋桁まで運ぶ
2019. 07. 02	多摩川(鎌田1)	1羽	成鳥が上流方向から飛来しグランドのムクドリ群れを襲って1羽を捕らえ、下流の橋桁に降る
2020. 07. 05	多摩川(野毛1)	1羽	成鳥が上流方向から飛来し排水樋管周辺でパン屑を食べているカワラバトの群れを襲い1羽を捕る。暫らく掴んだまま下流方向へ行ったが戻ってきて排水樋管水門上部で食べ始める

◆ サンショウクイ科 CAMPEPHAGIDAE

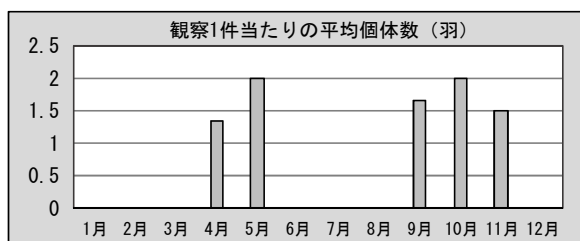
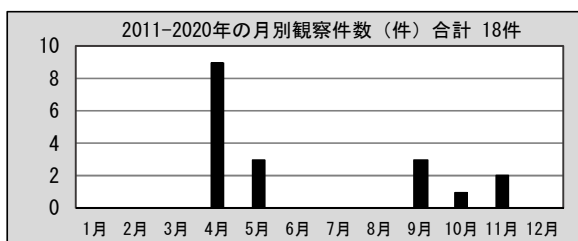
412. サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* Ashy Minivet

サンショウクイ科

ロシア沿海部、中国東北部、東アジアで繁殖し、冬期は中国南部、フィリピン、マレー半島、ボルネオに渡る。日本には夏鳥として本州、四国、九州に渡来し繁殖する。伊豆諸島、対馬には渡り途中に通過する。トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島には亜種リュウキュウサンショウクイが留鳥として生息しており、亜種サンショウクイが個体数を減らしているのと対照に、最近分布域を広げて九州北部や四国、関東でも観察されている。

山地の雑木林や農耕地の高い木のある広葉落葉樹林を好んで生息し、木の葉や枝が茂る下側でホバリングしながら、昆虫やクモ類を採る。また、樹冠の下部の枝の間をヒラヒラ舞うように飛びながらフライングキャッチして採食する。繁殖期は5~7月で、高木の上部の枝に浅い碗型の巣をつくる。外部にウメノキゴケをクモの糸を使って貼り付けるので木の瘤のように見える。1巣の卵数は4~5個、17~18日で孵化する。昔は市街地の社寺林などでも生息し繁殖していたが、都市化の進行とともに平地から姿を消した。山地では、地上にはほとんど降りることはなく「ヒリヒリ」と聞こえる声で鳴きながら集団で飛ぶ。

世田谷区には渡りの途中に春は4月と5月、秋は9月から11月頃に稀に立ち寄る。1949年に野毛で繁殖した例がある。1973年まではほぼ毎年春と秋に観察されていたが、1974年から2001年までは観察されなかった。2002、2008、2010年に観察された後、2013年からは毎年観察されている。木に止まって休息したり、鳴いている姿が観察されている。(東京都区部：絶滅 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数133件 1938~2020年)



○繁殖記録

1949. 06. 23 野毛 1 巢 民家のケヤキに営巣 (6/26 に 1 卵確認)

○主な観察記録

1938. 08. 16	太子堂	1 羽	
1948. 04. 27	等々力溪谷公園	2 羽	
1951. 04. 30	岡本	2 羽	
1953. 06. 14	野毛	1 羽	自宅付近に来て鳴く
1962. 08. 30	野毛	5 羽	自宅付近を南から北に飛び去る
1969. 04. 23	等々力溪谷公園	1 羽	さえざり 滝の山
1973. 04. 01	馬事公苑	1 羽	
2002. 10. 16	弦巻 5	1 羽	6 時半頃、公園のスギの高木でヒリヒリと鳴く
2002. 10. 25	多摩川(鎌田 1)	1 羽	草原のハリエンジュに止まっている
2008. 10. 04	駒沢オリンピック公園	1 羽	
2010. 05. 18	多摩川(玉堤 1)	2 羽	「ヒリヒリ」と鳴きながら上流へ
2013. 04. 28	砧公園	1 羽	初め止まって鳴いていたが、鳴きながら飛んで行った
2013. 09. 29	多摩川(玉堤 1)	2 羽	河畔林内から左岸の堤防方向へ飛び出す
2014. 04. 27	砧公園	1 羽	木々を移動
2015. 05. 04	多摩川	1 羽	世田谷区側の住宅地方面から飛来し川岸のエノキに止まる
2016. 04. 21	砧公園	1 羽	鳴き声
2017. 09. 24	上野毛 1	1 羽	地鳴き
2018. 04. 28	玉堤 1	2 羽	右岸方向から飛来し散策路脇のクワ並木に入る
2019. 04. 21	砧公園	1 羽	公園中央の樹林帯で 1 時間ほど滞在
2020. 11. 06	豪徳寺	2 羽	豪徳寺上空を「ヒリリン・ヒリリン」と鳴きながら上空を波状飛行通過

◆ コウライウグイス科 ORIOLIDAE

413. コウライウグイス *Oriolus chinensis* Black-naped Oriole コウライウグイス科

インドから東南アジア、台湾、中国南部・東北部、朝鮮半島で繁殖する。中国南部以北で繁殖したものは冬季に東南アジアに渡る。日本では旅鳥として全国で記録されているが数は少ない。日本海の離島での記録が多い。1996 年には埼玉県で繁殖した例が記録されている。

世田谷では下記 1 例の記録がある。(全記録数 1 件 2014)

○観察記録

2014. 04. 28 多摩川(玉堤 1) 1 羽 雄成鳥 河畔林周囲を飛び回りオニグルミ横枝に止まる

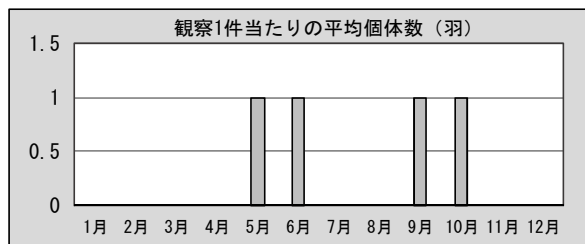
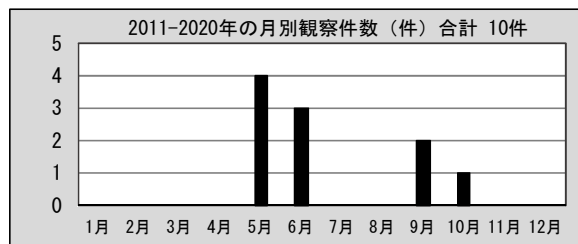
◆ カササギヒタキ科 MONARCHIDAE

418. サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata* Japanese Paradise Flycatcher カササギヒタキ科

台湾、フィリピン、日本で繁殖し、冬は中国南部、マレー半島、スマトラ島へ渡る。日本へは、夏鳥として本州から四国、九州までの各地に渡来し繁殖する。日本のものは冬期にアジアの熱帯地方へ渡って越冬する。奄美諸島、琉球諸島には亜種リュウキュウサンコウチョウが夏鳥として生息している。

夏は標高 1000m 以下のスギ、ヒノキなどの人工林や落葉広葉樹の密生した雑木林に生息し、薄暗い林の樹上に営巣する。昔は市街地の公園や平地の林でも繁殖しており、1970 年頃までは東京都内での繁殖が記録されている。繁殖期は 5~8 月で、つがいごとに縄張りを持ち、育雛も雌雄共同で行う。雌もさえずる。木の枝の叉に樹皮、葉、苔などとクモの糸を使って巣をつくる。1 巢の卵数は 3~5 個。雌雄で抱卵し 12~14 日で孵化する。雄は翼を緩やかに動かし、長い尾をヒラヒラさせて飛翔し、低い灌木の間や立ち木の下枝を飛ぶ。樹上生活が主で飛翔中にセミ、コガネムシ、コオロギやアリを捕食する。

世田谷区では、1970年代までは5月から10月にかけて毎年観察されていた。蘆花恒春園(1940、1941)、等々力溪谷公園(1965)での繁殖も観察されているが、その後、初夏と秋にのみ渡りの途中に観察されるようになった。主に大規模な公園や社寺で観察されている。(東京都区部：絶滅 全記録数86件 1940～2020年)



○繁殖記録

1940.	蘆花恒春園	月日及び繁殖の詳細不明 (東京都産鳥類目録、1975)
1941.	蘆花恒春園	月日及び繁殖の詳細不明 (東京都産鳥類目録、1975)
1965. 07. 11	等々力溪谷公園	1 巣 抱卵 (7/14 餌運び 7/15 雛4羽) 滝の山

○主な観察記録

1949. 05. 03	等々力溪谷公園	1 羽	10時頃、さえずりを5～6回聞く 岩の山
1952. 05. 13	野毛	1 羽	5:50 自宅付近でさえずる
1958. 05. 18	等々力溪谷公園	1 羽	谷沢山に来て鳴く
1961. 07. 23	等々力溪谷公園	2 羽	雄
1963. 09. 13	北鳥山	1 羽	雌
1968. 08. 15	等々力溪谷公園	1 羽	雄 滝の山
1978. 06. 05	池尻	1 羽	教育大学付近
1988. 05. 09	馬事公苑	2 羽	雌雄
1992. 05. 05	馬事公苑	1 羽	雌
2003. 06. 10	成城みつ池緑地	1 羽	雌 さえずり
2007. 05. 22	豪徳寺	1 羽	雄 墓地北側のヒノキ林
2009. 05. 21	蘆花恒春園	1 羽	雄の若い個体 盛んに囀っていた
2009. 09. 18	三宿の森緑地	1 羽	9:30 に西側スクノキの暗い茂みの中で動いていた鳥を発見 雄 1 羽(尾は短い)を確認 3秒ほど観察したが見失う
2010. 09. 17	成城4	1 羽	14:00 木々を移動
2011. 06. 03	駒沢オリンピック公園	1 羽	囀り
2013. 06. 22	駒沢オリンピック公園	1 羽	定例調査 短い囀りを3度聞く
2015. 06. 07	大蔵三丁目公園	1 羽	木々を移動
2017. 05. 19	砧公園	1 羽	谷戸川で川沿いを移動
2020. 05. 09	砧公園	1 羽	砧公園サンクチャリ裏樹上に移動

◆ モズ科 Laniidae

419. チゴモズ *Lanius tigrinus* Tiger Shrike

モズ科

ロシア沿海部や中国北東部、東アジアで繁殖し、冬期はマレー半島やインドネシアに渡る。日本には、夏鳥として本州北・中部に渡来し、繁殖する。分布は局地的で、個体数も少ない。1980年頃までは、各地の公園や庭園でも繁殖していた。

山地のアカマツ林や雑木林、落葉広葉樹の林に生息する。繁殖期は5～7月で、巣材集めや交尾、採食、繁殖は縄張り内で行う。小枝、樹皮、ビニール紐などで作った碗型の巣に3～6個の卵を産む。空中や地上でバッタ、トンボなどの昆虫やカエル、ヘビ、小鳥、モグラ、ネズミなども捕食する。とがった小枝や針金に食べ物を突き刺す‘はやにえ’をつくることもある。

世田谷区には5月から8月にかけて渡来した記録がある。国分寺崖線沿いの野毛、等々力溪谷公園で1960年まで繁殖が観察され、その他岡本、多摩川、馬事公苑、駒沢オリンピック公園でも観察されたが1974年を最後に区内では観察されていない。(東京都区部：絶滅 環境省：絶滅危惧ⅠA類 全記録数102件 1949～)

1974 年)

○繁殖記録

1952. 06. 27	野毛	1 巢	雛 5 羽	巣立ち	スギの枝に営巣	谷沢川
1953. 07. 12	等々力溪谷公園	1 巢	滝のすぐ上流	巣立つ		
1953. 07. 12	野毛	1 巢	巣立ち雛 5 羽	成鳥 2 羽	が虫を給餌より 6.4m	
1955. 05. 30	野毛	1 巢	1 卵	谷沢天神山のクロマツに営巣	地上	
1960. 07. 19	等々力溪谷公園	1 巢	雛 5 羽	滝の山		

○主な観察記録

1949. 05. 18	野毛	1 羽				
1953. 05. 27	等々力溪谷公園	1 羽	岸の山にて鳴く			
1955. 08. 20	野毛	1 羽				
1959. 05. 20	野毛	1 羽				
1961. 07. 23	野毛	4 羽				
1962. 08. 16	野毛	2 羽				
1964. 05. 23	野沢	1 羽				
1966. 05. 24	等々力溪谷公園	2 羽				
1968. 06. 04	駒沢オリンピック公園	1 羽				
1968. 06. 17	岡本	1 羽				
1968. 06. 23	野毛	2 羽	六所神社裏			
1972. 06. 01	馬事公苑	1 羽				
1974. 05. 01	馬事公苑	1 羽				

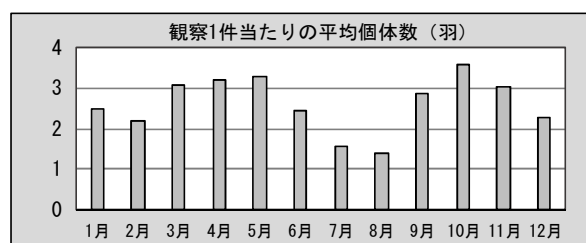
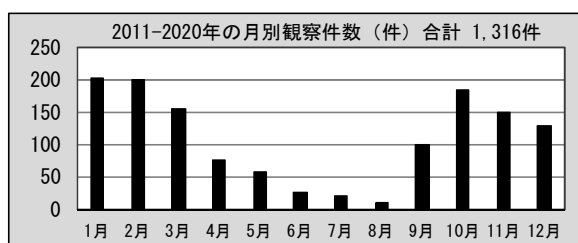
420. モズ *Lanius bucephalus* Bull-headed Shrike

モズ科

ユーラシア大陸東部の中国東部・北東部、ウスリー地方、東アジアなどで繁殖する。北方のものは冬期に韓国、日本、中国東部へ移動する。日本では、全国各地で留鳥として繁殖している。北海道や雪の多い地域の場合は、冬期に温暖な地域に移動する。奄美諸島、琉球諸島では冬鳥である。

平地から山地の林、公園や農耕地の周辺、川原や高原などで、低木のある開けた環境を好む。繁殖期は 2～7 月で雌は雄のなわばりに入りつがいになる。低木や藪の中に小枝、枯草、ビニール紐などで椀型の巣をつくり 3～6 個の卵を産む。雌のみが抱卵し 14～15 日で孵化する。9 月から 10 月頃に雌雄ともに高い所に止まり、「キーキー」または「キチキチキチ」と聞こえる声で高鳴きをして単独の採食縄張りをつくる。ガ、コガネムシ、バッタなど昆虫、ヘビ、トカゲ、カエルなど爬虫類や両生類、モグラ、ネズミなど小哺乳類、小鳥までも餌とする。尖った小枝や針金に捕らえた獲物を刺しておく‘はやにえ’をつくる。

世田谷区では 1946 年から繁殖が確認されている。一時期途切れたが 2006 年からは毎年のように河川や住宅地、公園などで繁殖が見られている。観察例は 9 月から翌年の 3 月頃までが多く、夏は少なくなる。多摩川で多く、砧公園、祖師谷公園、馬事公苑などの公園や、畑、住宅地の庭などでも見られる。秋から初冬にかけて草地や農地の木々や杭に止まって高鳴きする姿や、ウグイス、オオヨシキリ、ヒヨドリ、メジロなど他の鳥の鳴き真似、スズメガの幼虫やスズメ、ウグイスの‘はやにえ’、昆虫のほかカヤネズミを捕る行動なども観察されている。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA 類 全記録数 4,401 件 1946～2020 年)



○主な繁殖記録

1946. 03. 21	等々力溪谷公園	1 巢	4 卵	女竹に営巣	谷沢山
1957. 04. 17	野毛	1 巢	4 雛	孵化後 8 日位	

1968. 03. 17	上野毛	1 巢	5 卵 (3/29 雛 3 羽 4/3 雛 4 羽 1 卵孵らず)
1978. 05. 01	馬事公苑	1 巢	雛 3 羽
1982. 04. 22	中町 3	1 巢	巣立ち前の雛 5 羽
2006. 05. 12	多摩川(玉堤 1)	1 巢	巣立ち雛 6 羽は草原にいる 成鳥雌 1 羽は近くのヤナギで警戒の声
2007. 04. 21	成城みつ池緑地	1 巢	巣立ち雛 2 羽と成鳥雌雄が林から住宅地の木々に移動
2008. 04. 21	成城 4	1 巢	親 2 羽が雛 4 羽に給餌
2012. 05. 09	大蔵 5	1 巢	親 2 羽が巣立ち雛 3 羽に給餌
2013. 05. 10	野川(玉川 4)	1 巢	2 羽 対岸小さな樹木で雄親が幼鳥に給餌
2014. 04. 14	多摩川(玉堤 1)	1 巢	雌雄成鳥、巣立ち雛 2 羽 雌成鳥が河畔林脇の草地で巣立ち雛に給餌する
2015. 05. 08	喜多見 6	1 巢	雛に蝶を給餌
2017. 04. 24	野川(成城)	1 巢	親 2 羽、巣立ち雛 3 羽親から給餌
2020. 04. 21	多摩川(玉川 3)	1 巢	雌雄成鳥、巣立ち雛 3 羽 雌親が兵庫島公園西側のサクラで巣立ち雛に給餌

○主な観察記録

1948. 09. 06	多摩川	2 羽	
1958. 09. 01	等々力溪谷公園	1 羽	高鳴き始める
1969. 12. 23	駒沢オリンピック公園	1 羽	
1982. 04. 20	中町 3	1 羽	雄
1991. 10. 20	奥沢	3 羽	
1994. 02. 22	野川	4 羽	
1999. 01. 22	多摩川(野毛 2)	3 羽	首のないスズメが枝に刺さっている
2001. 09. 30	岡本 3	1 羽	雄 高鳴きをして縄張りを主張 ムクドリ数羽を追い出す
2002. 05. 06	豪徳寺	1 羽	(一週間ほど同場所に)
2005. 03. 18	蘆花恒春園	1 羽	雄
2007. 04. 11	多摩川(鎌田 2)	1 羽	ヨシの茎に挟んだカヤネズミを食べる 近くの巣へ十数回運ぶ
2007. 11. 17	祖師谷公園	1 羽	雌 バラ科の棘にスズメガの大きな幼虫を刺し食べていた
2011. 02. 22	多摩川(玉堤 1)	10 羽	雄 1 羽が川岸のエノキで「ギョギョシ」とオオヨシキリの鳴きまね
2013. 03. 05	多摩川(野毛 2)	17 羽	雄 1 羽がウグイスの鳴き真似
2014. 04. 08	多摩川(玉堤 1)	2 羽	オギ原のエノキで「ヒーヨヒーヨ」とヒヨドリの鳴き真似をする
2014. 11. 17	多摩川(鎌田 1)	12 羽	雄 1 羽が草原細道でオギの先に死んでいるウグイスを刺し、人が去るとそれを咥えて草原の中に消える
2015. 03. 02	多摩川	9 羽	雄 1 羽が河畔林縁のオニグルミでメジロの囀り真似をする
2017. 03. 07	祖師谷公園	1 羽	雄 カワラヒワの「ビーン・コロコロ」とヒバリの「リートル・リートル」を器用に真似ていた。
2019. 10. 23	多摩川(玉川 3)	1 羽	兵庫島の木々の中で「キーキー」と高鳴き
2020. 02. 10	仙川	1 羽	セキレイ橋左岸の少し上流 雄、ぐぜりを続けていた

421. アカモズ *Lanius cristatus* Brown Shrike

モズ科

ロシア北東部、モンゴル、ウスリー地方、東アジアで繁殖し、東南アジアで越冬する。日本には夏鳥として北海道、本州、佐渡などへ渡来し繁殖するが、やや局地的である。四国、九州、対馬では旅鳥だが、熊本県、鹿児島県では亜種シマアカモズが生息、繁殖している。

平地から山地のアカマツなどの明るい林や低木のある草原で見られる。5～7 月に一夫一妻で繁殖する。モズと同じように縄張りを持ち、巣材集め、交尾、営巣を行う。密に茂った樹木や藪の中に枯草、枯葉などで椀型の巣をつくり 4～6 個の卵を産む。14 日ほどで孵化する。採食はモズに似ているが、モズより飛翔中の昆虫や木の葉に止まっている昆虫を捕える割合が多い。コガネムシ、カミキリムシ、カマキリ、バッタなどいろいろな昆虫を好み、カエルやヘビ、スズメなども捕る。また、‘はやにえ’を作るという習性がある。

世田谷区では、1970 年代までは夏に渡来し、住宅地や公園などで生息、繁殖していた。しかし繁殖は 1969 年、生息は 1974 年以來永らく観察されていなかったが、2019 年に多摩川での生息が観察された。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 環境省：絶滅危惧 IB 類 全記録数 16 件 1962～2019 年 2011 年以降 1 件)

○繁殖記録

1964. 06. 30	代田	1 巣	繁殖の詳細不明
1968. 07. 02	深沢 4	1 巣	巣立ち雛 5 羽
1968. 07. 05	岡本	1 巣	雛 5 羽 シイの木 (7/6 巣立ちして巣の近くにいた)
1968. 07. 11	用賀	1 巣	巣立ち雛 6 羽
1968. 07. 22	砧公園	1 巣	巣立ち雛 4 羽
1969. 06. 23	駒沢オリンピック公園	1 巣	雛 6 羽 常緑樹(マテバシイ)で抱雛 (6/30 巣立ち)

○観察記録

1962. 05. 19	野毛	1 羽	自宅付近に飛来した
1962. 09. 23	馬事公苑	1 羽	
1966. 05. 01	岡本	1 羽	
1968. 07. 15	等々力	1 羽	
1968. 07. 17	岡本	1 羽	
1969. 06. 30	駒沢オリンピック公園	1 羽	成鳥 マツの横枝
1969. 08. 04	駒沢オリンピック公園	1 羽	幼鳥
1974. 06. 01	馬事公苑	1 羽	
2019. 02. 12	多摩川(玉堤 1)	1 羽	亜種シマアカモズ 雌第一回冬羽 頭部から背が灰褐色、喉から脇は鱗模様 クズやオギの枯れた草原を時々移動

◆ カラス科 CORVIDAE

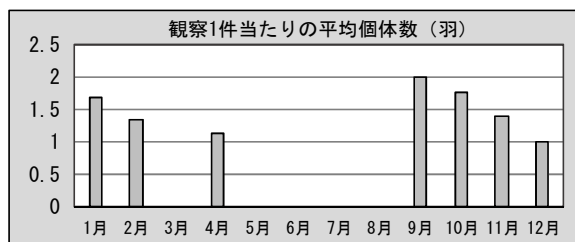
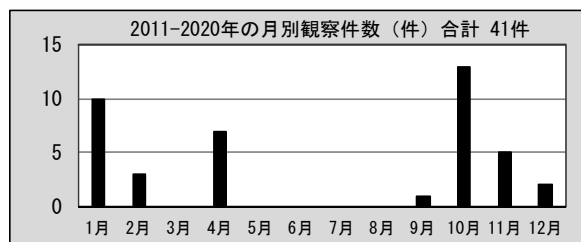
427. カケス *Garrulus glandarius* Eurasian Jay

カラス科

ユーラシア大陸の中緯度地域、北アフリカ、東南アジア、東アジアに広く分布し繁殖してる。日本では、本州、四国、九州、対馬、伊豆諸島で留鳥である。冬期は暖地へ移動する個体もいる。北海道には亜種ミヤマカケスが留鳥として生息するほか、佐渡、屋久島にも個別の亜種が生息する。

低山帯の雑木林、マツ林、落葉広葉樹林、常緑広葉樹林、亜高山帯の針広混交林など色々なタイプの樹林に生息する。特に、シイ、カシ、ナラ類の林を好む。林縁の農耕地、果樹園、樹木の多い公園や集落にも現れる。繁殖期は4～6月で、雌雄共同で樹上の高所の幹近くの枝の上に小枝、コケ類、泥などで巣をつくり4～8個の卵を産む。雌のみが抱卵し16～20日で孵化する。林内の樹上や地上で採食する。雑食性で昆虫、クモ類、小型の脊椎動物、果実、種子、木の実などを食べる。繁殖期以外は小群で生活する個体が多い。初冬の頃にドングリ類を木の隙間や土の中に隠す習性があり、隠したドングリ類は冬から春にかけて食物として利用する。「ジェー、ジェー」と聞こえるしわがれ声で鳴くほか、他の鳥の鳴き真似もする。

世田谷区へは10月頃に飛来し、翌年の4月頃に去るが、6月と7月に観察された例もある。砧公園、駒沢オリンピック公園、祖師谷公園などで観察されている。年によって飛来する個体数に変動があり2006年秋から2007年の春にかけては特に観察例が多く、公園や河川でも観察された。ドングリを採食したりホンセイインコやアオゲラの鳴きまねをする姿が観察されている。(全記録数350件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 09. 15	野毛	3 羽	
1953. 10. 07	多摩川(野毛)	24 羽	渡し場上空を東北方向へ飛ぶ
1962. 09. 30	馬事公苑	6 羽	
1966. 02. 07	等々力溪谷公園	6 羽	オナガの群れと行動を共にしていた

1972. 09. 30	北鳥山	1羽	
1989. 11. 12	岡本静嘉堂周辺	2羽	林内を移動
1995. 10. 21	馬事公苑	1羽	
2002. 07. 06	砧公園	1羽	
2005. 01. 23	奥沢8	1羽	ギャーと、ひと鳴きして飛び去る
2006. 12. 24	仙川	2羽	セキレイ橋上空を通過
2007. 01. 23	瀬田4	1羽	ホンセイインコの鳴きまねをしていた
2007. 03. 06	蘆花恒春園	1羽	
2007. 04. 14	瀬田4	1羽	アオゲラの囀りを鳴き真似 国分寺崖線内
2008. 01. 13	駒沢オリンピック公園	1羽	
2009. 12. 20	祖師谷公園	1羽	セキレイ橋上空を通過 公園内の樹林帯へ
2010. 01. 11	岡本静嘉堂周辺	1羽	
2014. 12. 20	成城三丁目緑地	1羽	飛来して松の枝にとまり暫く見え隠れする
2015. 01. 13	砧公園	3羽	ドングリを採食
2016. 10. 06	等々力溪谷公園	2羽	
2017. 04. 24	浄真寺	1羽	
2020. 10. 03	成城みつ池緑地	2羽	

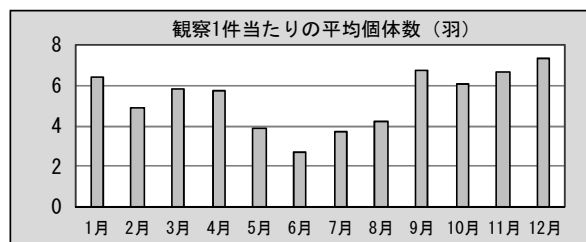
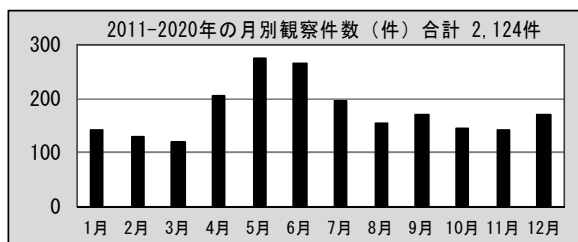
429. オナガ *Cyanopica cyanus* Azure-winged Magpie

カラス科

ユーラシア大陸の極東部とユーラシア大陸西端部のイベリア半島のみで生息する特異な分布をしている。遺伝子分析や化石の研究により、およそ120万年前に分岐し、今ではそれぞれ別種として考えられている。日本では、本州中部以北で留鳥として生息しているが北海道には生息していない。1980年以前には本州西部と九州でも繁殖していた。

平地や低山帯の果樹園、農耕地のある集落、村落周辺の雑木林、樹木の多い市街地や公園などに生息する。一定の行動圏を持っていて群れで動き回る。冬のねぐらではいくつかの群れが集まり複合群を形成する。繁殖期は5～8月で、群れの中で一夫一妻のつがい形成する。雌雄共同で2～6m位の樹上の大枝の上に枯れ枝、木の根、コケ類などで巣をつくる。1巣の卵数は5～8個。雌のみが抱卵し17～20日で孵化。その後18日ほどで巣立つ。繁殖期につがいになれなかった個体や未熟鳥は、巣づくり、他のつがいの育雛などの手伝いをするヘルパーとなる。雑食性で樹上や地上で昆虫や果実を採食する。また、鳥のヒナや卵も食べる。朝夕は庭先や公園などの目立つ場所での採餌が多いが、日中は林内での行動が多い。一年中群れで生活する個体が多く、1羽が鳴いて移動すると、次から次へと他の個体も移動する。

世田谷区では、区の鳥に指定されている。1年を通して観察され、8～30羽位の群れで生活している。砧公園、馬事公苑、蘆花恒春園、岡本静嘉堂緑地、等々力溪谷公園、豪徳寺、多摩川、仙川、野川などの他、大きい樹木のある住宅地などでよく見られる。1946年から繁殖の記録があり、2014年からは毎年、祖師谷公園など公園や千歳台、船橋、桜上水など市街地で繁殖が観察されている。果実や木の実、木の芽、花の蕾、昆虫やスズメを捕食した例もある。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 4,482件 1946～2020年)



○主な繁殖記録

1946. 08. 13	等々力溪谷公園	1巣	雛5羽	巣材(土、コケ、細い枝、杉皮、カヤの根、シュロ皮、綿)
1951. 06. 20	岡本	1巣	雛5羽	地上から8m イチョウに営巣
1963. 05. 23	中町3	1巣	5卵	玉川消防署裏のサクラに営巣
1969. 07. 02	砧公園	1巣	7卵	

1975. 05. 01	馬事公苑	1 巢	営巢中
1982. 06. 22	野毛 1	1 巢	雛 4 羽 カキノキ
2000. 08. 28	弦巻 4	1 巢	巢立ち雛 3 羽 成鳥 2 羽と飛ぶ練習
2001. 08. 05	上用賀 3	1 巢	巢立ち雛 5 羽 農家の出荷用の低木に営巢
2005. 05. 17	豪徳寺	1 巢	ツバキに営巢
2007. 06. 19	千歳台 4	1 巢	イチョウの上 1 羽抱卵中 交代で暖める
2014. 06. 15	千歳台 6	1 巢	1 羽が巢立ち雛に給餌する (民家の低木に営巢)
2015. 06. 04	祖師谷公園	1 巢	ツミの営巢近くのエノキに営巢 抱卵中
2018. 06. 18	等々力 1	1 巢	庭の金木屋の木に架けた巢から雛 2 羽巣立ち、別に親 2 羽
2020. 08. 30	粕谷 1	1 巢	巣立ち雛 2 羽が給餌をしてもらう成鳥 7 羽

○主な観察記録

1946. 10. 01	等々力溪谷公園	1 羽	谷沢山で鳴く
1953. 08. 04	野毛 2	2 羽	スズメとニイニイゼミを食べる
1961. 03. 22	用賀	30 羽	
1968. 01. 01	等々力溪谷公園	60 羽	滝の山
1987. 07. 01	馬事公苑	1 羽	スズメをくわえてきて内臓から食べる
1991. 07. 28	岡本静嘉堂周辺	2 羽	
2001. 02. 03	馬事公苑	37 羽	群れて上空通過
2003. 10. 01	砧公園	20 羽	定例調査
2006. 03. 21	祖師谷 6	12 羽	ホンセイインコをモビング
2008. 01. 10	下馬 2	25 羽	子供の広場公園の遊具がある周囲の樹林
2009. 09. 24	千歳台 5	51 羽	23 羽と 28 羽の 2 群
2010. 06. 29	砧 5	1 羽	スズメを襲い食べる
2014. 11. 06	下馬 4	7 羽	子の神公園。桜樹冠のハシブトガラス古巣に出入り、付近で騒ぐ
2015. 09. 06	祖師谷公園	7 羽	ヤマボウシの実を採食
2015. 11. 29	浄真寺	14 羽	参道のエノキの実を食べる
2016. 09. 11	世田谷 1	180 羽	塀へ移動途中と思われる群が電線に集まった
2017. 03. 04	瀬田 4	15 羽	ムクの実を採食
2018. 05. 05	桜上水 3	2 羽	オナガの雌が雄から求愛給餌をうけていた。雌がヒナのようなしぐさで翼を震わせ餌をねだっていた
2019. 04. 20	豪徳寺	36 羽	か細い声 犬のクンクンみたいな グゼリ
2020. 12. 26	野川(喜多見 7)	10 羽	アオサギの前で威嚇を繰り返していた

435. ハシボソガラス *Corvus corone* Carrion Crow

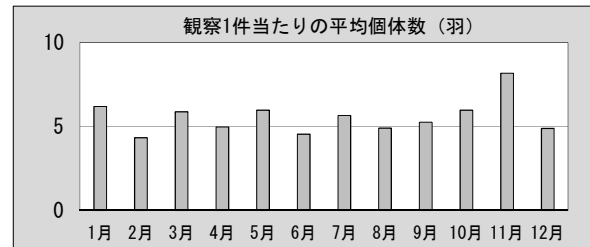
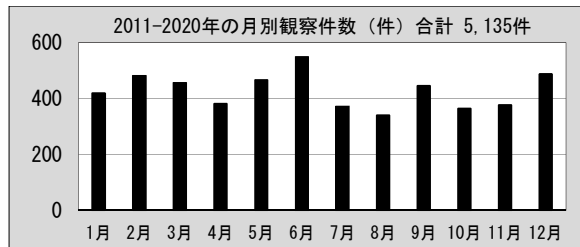
カラス科

熱帯と寒帯を除くユーラシア大陸のほぼ全域に広く分布し繁殖している。日本では、北海道、本州、佐渡、四国、九州、対馬に留鳥として一年中生息する。九州以南の島嶼部では稀である。

平地や低山帯の集落、農耕地、河川敷、市街地、雑木林などに生息する。繁殖期は3～6月で、巣は樹上の幹近くの枝の上に、雌雄共同で枝を集めて碗形につくり、内装に羽毛や獣毛を使う。1巣の卵数は3～5個で雌のみが抱卵する。19～20日で孵化し、その後30～35日で巣立つ。地上で採餌することが多い。雑食性だがハシブトガラスほどではなく草木の実や種子、昆虫類を主として採食する。ゴミ捨て場を漁ったり、動物や魚の死骸、鳥の卵やヒナも食べる。繁殖期以外は群れで生活することが多く、集団ねぐらをつくる。遊びと思われるような行動をすることが知られている。

世田谷区では、1年を通して観察される。1949年に繁殖記録がある。その後も時々生息は記録され、1987年からは毎年観察されている。2001年以後、巣材運びや巣立ち雛などの記録はあるが、営巣の記録は少なかった。2010年頃からは繁殖の記録が多くなった。多摩川、仙川、野川、砧公園、馬事公苑、盧花恒春園、岡本静嘉堂緑地、等々力溪谷公園など川原や田園的な所に多く、市街地や小規模な公園などではあまり見かけないが、少しずつ生息範囲を広げてきている。個体数は区全体ではハシブトガラスより少ないが2013年以降増加し続けている。多摩川ではハシブトガラスの減少が著しく、2011年以後ハシボソガラスの個体数がハシブトガラスを上回っている。カツラなど木の実、ミミズやセミ、河川ではコイの死骸やザリガニ

などを採食する姿も観察されている。多摩川の川原でクルミを上空から落として割る行動や砂利の中に食物を隠す貯食行動も観察されている。集団ねぐらを形成するが世田谷区内でははっきりとした集団ねぐらは確認されていない。最近では一部に針金のハンガーを使った巣での営巣も観察されている。(全記録数 10,149 件 1949～2020 年)



○繁殖記録

1949. 04. 08	玉堤	1 巣	雛 1 羽 巣立ち 2～3 日前の雛 川向畑
2000. 06. 10	多摩川(玉川 1)	1 巣	巣立ち雛 4 羽が河原で親が捕ってきた約 20 cmの魚を奪い合う
2001. 04. 14	祖師谷 2	1 巣	抱卵中 巣材は自然材のみ (5/20 2 羽巣立ち)
2004. 03. 26	駒沢 1	1 巣	ネット柱の上で営巣 巣は木の枝のみ 駒沢大学グラウンド
2007. 06. 02	千歳台 5	1 巣	巣立ち雛 5 羽
2009. 05. 14	多摩川(鎌田 1)	1 巣	成鳥 1 羽が新二子橋桁で抱卵 巣材は小枝やヨシの茎
2010. 07. 02	千歳台 5	1 巣	雛 3 羽が巣の上で羽ばたき成鳥が餌を給餌
2014. 03. 24	多摩川(玉堤 1)	1 巣	1 羽が川岸のエノキで抱卵 巣はハンガーと枯れ枝で構成
2014. 06. 18	祖師谷公園	3 巣	3 箇所の巣で共に巣立ち
2015. 06. 04	祖師谷公園	1 巣	巣立ちの幼鳥に親鳥が給餌
2018. 03. 26	野川(成城 4)	1 巣	野川神明橋下流左岸河川敷のアカメヤナギに昨年と同じ古巣を補強し抱卵 巣材にハンガーも使用しているが、鳴き声はハシボソガラス
2020. 05. 06	祖師谷公園	2 巣	5 羽地面で採食、2 羽川の浅瀬で採食、2 羽抱卵中

○主な観察記録

1949. 09. 26	多摩川(玉堤)	1 羽	
1963. 01. 27	等々力溪谷公園	16 羽	岸の山
1973. 01. 17	岡本	1 羽	
1998. 11. 18	多摩川	60 羽	
2001. 12. 18	馬事公苑	10 羽	群れで東側走路の砂をほじくって食べていた
2003. 05. 28	仙川	1 羽	アオダイショウを襲うが逆襲に遭い退散 打越橋下
2006. 02. 05	蘆花恒春園	2 羽	
2006. 10. 13	多摩川(玉堤 1)	1 羽	河原の上空からクルミを 3 度落として割って食べる
2006. 12. 05	多摩川(鎌田 1)	2 羽	倒れたオオブタクサに乗り茎をつついて中の黄色い幼虫を採食
2012. 03. 12	多摩川(野毛 1)	28 羽	12 羽が芝生地で地面に嘴を刺す 1 羽がミミズを引き出して食べる
2014. 12. 13	駒沢オリンピック公園	8 羽	7 羽がカツラ林床で実を採食
2015. 04. 06	多摩川	28 羽	浅瀬で死んでいるコイを採食
2015. 04. 09	仙川	6 羽	黒橋付近でザリガニ捕食、写真に撮る
2015. 08. 03	多摩川(玉堤 1)	30 羽	8 羽が中州砂礫地に集まり死んでいるコイを採食
2015. 08. 04	祖師谷公園	8 羽	高木と地面で採餌(セミ)
2018. 02. 07	野川	2 羽	1 羽が中州水際で 40 cm程のライギョ死骸を啄んでいる (水道橋)
2020. 12. 24	砧公園	30 羽	1 羽がドングリを連続して飲み込み、嘴下部の喉が大きく膨らんでいた

436. ハシボソガラス *Corvus macrorhynchos* Large-billed Crow

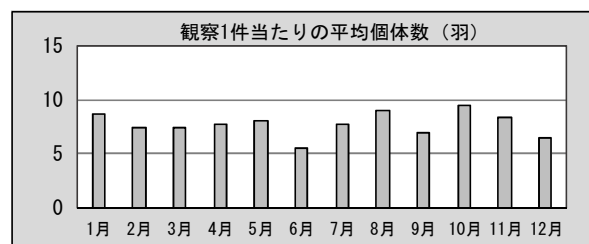
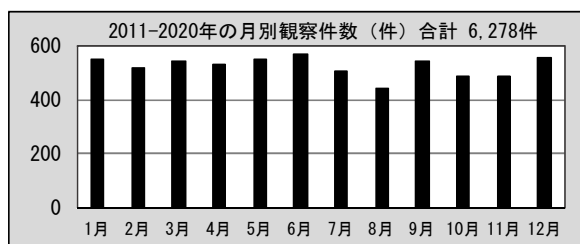
カラス科

アフガニスタンより東部、インド、ロシア極東南部、千島、サハリン、東南アジア、東アジアに分布する。日本では、北海道、本州、佐渡、四国、九州、伊豆諸島に一年中生息し繁殖している。八重山諸島には亜種オサハシボソガラス、奄美・琉球諸島には亜種リュウキュウハシボソガラスが留鳥として生息する。

平地や低山帯の集落、農耕地、漁村、市街地等の樹林、亜高山帯の樹林で繁殖している。最近では観光開発に伴い高山帯まで姿を見せるようになってきた。繁殖期は 3～7 月で、巣はマツ、スギなどの高木の上層

の幹に近い枝につくる。枝を集めて碗形にし、内装には羽毛、獣毛、シュロの毛、スギ皮などを使う。1 巢の卵数は 3～6 個で雌のみが抱卵する。20～22 日で孵化し、その後 34～36 日で巣立つ。公園や河畔林、神社林などの樹木で繁殖する以外に橋桁や鉄塔などの人工の構築物でも営巣し、巣材に針金のハンガーやビニール紐などを多く使用した巣を見かけることが多くなってきた。地上で採食することが多く、漁港、魚市場、ゴミ集積場、家畜飼育場などの人のゴミが出る所に集まり採食する。雑食性で動物の死肉や鳥の卵、ヒナなども食べる。縄張りを形成するが繁殖期以外は群れで生活する。一定のねぐらに集まり、早朝に各採食場へ分散する。都内では明治神宮に大きな集団ねぐらがある。普通は羽ばたき飛行をするが、風を利用して帆翔もする。フクロウ類やタカ類を見つけると威嚇する習性がある。また、遊びと思われるような行動をすることが知られている。

世田谷区では、1950 年からいくつかの記録はあるが、1970 年代以前は稀であったと思われる。毎年観察されるようになったのは 1970 年代に入ってからで、1977 年以降繁殖が記録されている。現在では通年、大小の公園、河川敷、寺院の境内、緑地、住宅街など区内の殆どの環境で生息する。個体数は区全体ではハシボソガラスより多いが、区内各地で減少傾向にある。多摩川では 2011 年以後ハシボソガラスの個体数はハシボソガラスを下回るようになった。砧公園、馬事公苑などで 100～500 羽の集団ねぐらが観察されている。朝、家庭ゴミや飲食店の生ゴミの集積場に集まって採食している姿がよく見られる。ツバメ、ムクドリ、ヒヨドリなどのヒナやカルガモ、ハトの死骸を食べる姿も観察されている。針金のハンガーを使った巣での営巣も観察されている。(全記録数 13,432 件 1950～2020 年)



○主な繁殖記録

1977. 05. 01	馬事公苑	1 巢	巣立ち雛 4 羽
1987. 04. 01	馬事公苑	2 巢	2 組が抱卵
2000. 05. 21	野川	1 巢	巣立ち雛 1 羽
2005. 05. 20	多摩川	1 巢	雛 5 羽 第三京浜道橋桁内部 巣材は枯れ枝、ヨシ、オギなど
2006. 06. 12	次大夫堀公園	1 巢	巣立ち雛 2 羽 成鳥と鳴き交わす
2007. 06. 24	駒沢オリンピック公園	2 巢	巣立ち雛 5 羽
2008. 05. 05	砧公園	2 巢	成鳥 1 羽が抱卵中
2009. 05. 12	上祖師谷 2	1 巢	雛 3 羽が巣に座っている
2010. 05. 12	多摩川(玉堤 1)	1 巢	成鳥 1 羽が中州のヤナギで抱卵
2010. 06. 29	砧公園	5 巢	1 巣雛 2 羽と 2 巣雛 3 羽と 2 巣雛 1 羽 それぞれ親にえさをもらう
2013. 04. 09	多摩川	1 巢	1 羽が対岸のヤナギで抱卵 巣材は枯れ枝、草の茎、ハンガー
2015. 04. 18	羽根木公園	1 巢	定例調査 スギの木の巣にいる雛 1 羽に成鳥 1 羽が給餌 巣材は枯枝のみ
2018. 03. 29	桜上水 5	1 巢	桜上水公園のケヤキの巨木に営巣し抱卵していた
2020. 05. 15	祖師谷公園	2 巢	6 羽飛翔、2 羽高木で繁殖 (抱卵)

○集団ねぐら記録

1987. 11. 01	馬事公苑	100 羽	
1989. 06. 01	馬事公苑	239 羽	
1990. 07. 24	馬事公苑	183 羽	
2002. 04. 28	砧公園	350 羽	夕方集団で帰ってきた サンクチュアリの真ん中の樹
2002. 05. 01	馬事公苑	120 羽	用賀側の外側の樹木に集合 17:00 時入りする
2003. 04. 29	砧公園	448 羽	時入り
2007. 02. 02	砧公園	461 羽	16:20 頃
2009. 01. 28	蘆花恒春園	80 羽	小規模な時 16:40 頃から蘆花恒春園の中庭の高木に入る
2020. 02. 22	蘆花恒春園	115 羽	ねぐら

○主な観察記録

1950. 01. 07	等々力溪谷公園	1羽	
1961. 03. 22	用賀	1羽	
1996. 12. 15	多摩川	1羽	キジ(成鳥雄)を襲い内蔵を食べる
1998. 11. 30	多摩川	118羽	中州で弱っているユリカモメを襲い引っ張り合っていた
2001. 02. 15	多摩川	47羽	カルガモの死体を食す
2001. 05. 28	桜丘2	1羽	ツバメの巣で親につつかれながら雛を食べた
2002. 11. 06	砧公園	150羽	定例調査
2003. 05. 27	弦巻5	1羽	ヒヨドリの巣立ち直前の雛2羽を襲い1羽を食べる
2003. 05. 28	仙川	1羽	ハトを食べていた。(東宝脇中州)
2005. 06. 13	上用賀6	1羽	ムクドリの幼鳥を襲う
2008. 02. 15	大蔵運動公園	34羽	
2009. 03. 18	世田谷公園	34羽	
2009. 04. 24	馬事公苑	22羽	
2012. 11. 20	多摩川(玉川3)	132羽	122羽が川崎方面から群になって飛来し世田谷の街へ
2015. 10. 07	砧公園	90羽	定例調査
2017. 08. 07	祖師谷公園	8羽	2羽がセミを採食 2羽樹間飛翔 4羽休息
2020. 03. 13	砧公園	9羽	1羽が親指大の蛹を足で枝に押し付けてつつきながら採食していた

◆ キクイタダキ科 REGULIDAE

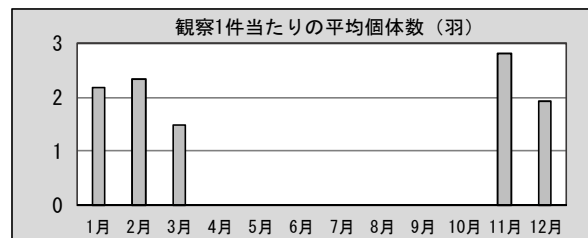
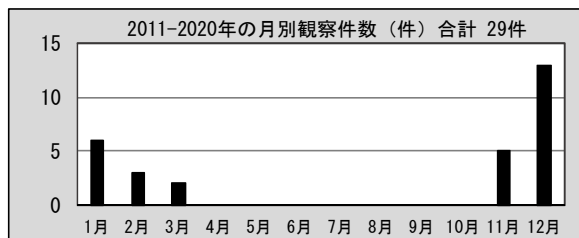
438. キクイタダキ *Regulus regulus* Goldcrest

キクイタダキ科

ユーラシア大陸の中・高緯度地方に、砂漠地帯をとり巻くように広く分布し繁殖している。冬期に温暖な地方へ移動するものもいる。日本では北海道、本州中部と北部亜寒帯の森林や林で留鳥として繁殖する。冬期には四国以南にも移動する。

日本最小の鳥である。亜寒帯針葉樹林、亜高山針葉樹林で繁殖し、特にトウヒやモミの樹林を好む。繁殖期は6～8月で、針葉樹の樹冠部の小枝にハンモック状に吊るした椀型の巣をつくり、5～8個の卵を産む。冬は低地や低山帯のマツ林、スギ林などの針葉樹林で見られ、特にスギ林を好む。他の鳥が入って行けないような枝や隙間に出入りしたり、ホバリングして餌を探しハムシ、アリマキなどの昆虫類やクモ類などを捕る。また、クロマツ、アカマツ、ヒノキ、スギの種子も食べる。

世田谷区では、11月頃から翌年の3月頃に観察されている。砧公園、駒沢オリンピック公園などのマツやスギで採食しているのが観察されている。通常は短い期間の観察であるが、砧公園で2007年の12月から翌年の2月末まで2～4羽が継続して観察された例もある。(東京都区部：ランク外 全記録数 58件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 11. 26	等々力溪谷公園	6羽	不動公園
1954. 11. 30	野毛	6羽	自宅付近に来る
1979. 03. 01	若林	1羽	
1995. 03. 21	岡本静嘉堂周辺	2羽	
1995. 04.	深沢8	1羽	無原罪保護区
1998. 12. 16	多摩川	1羽	道路沿いのマツで採餌

2002. 02. 10	砧公園	1 羽	強風で雪混じりの日にスギで採餌
2004. 10. 09	砧公園	2 羽	木の上から下に飛び回る
2007. 12. 27	砧公園	2 羽	エナガと共につり橋付近の針葉樹に (翌年 2/28 まで継続観察)
2008. 01. 13	駒沢オリンピック公園	4 羽	(1/25 まで継続して観察)
2012. 11. 10	砧公園	4 羽	樹上で採食
2014. 03. 08	羽根木公園	1 羽	定例調査
2015. 12. 08	成城三丁目緑地	1 羽	木々を移動
2016. 02. 04	岡本静嘉堂周辺	1 羽	カラ類と混群
2018. 12. 24	多摩川(玉川 3)	2 羽	兵庫島公園北西のアカマツ上部でホバリング採食
2020. 01. 01	用賀 2	2 羽	神社本殿前の松の木の枝々を忙しく動き回る 時折枝や幹の割れた樹皮の隙間に嘴を突っ込み餌を探していた

◆ ツリスガラ科 REMIZIDAE

439. ツリスガラ *Remiz pendulinus* Eurasian Penduline Tit ツリスガラ科

ヨーロッパ、中央アジアからモンゴル、ロシア極東中部、中国北東部で繁殖し、イラクからインド北西部、中国南部、朝鮮半島、日本南西部で越冬する。日本には、冬鳥として本州、四国、九州の主として海岸地方に渡来する。1980 年代までは、冬に九州の一部で稀にしか見られなかったが、渡来する個体数が増加するとともに北進し、関東地方や北陸の海岸部に毎年渡来するようになった。

繁殖地では河川、湖沼のヤナギなどの樹木の多いヨシ原に生息する。越冬地では川辺や湖沼のヨシやガマの草原で見られ、ヨシの茎から茎を伝い歩き、葉の付け根を突いて穴をあけ隠れているワタムシなどを取り出して食べる。その他、昆虫やクモ類を主に、冬は種子も採食する。冬には群生することが多い。

世田谷区では、11 月頃から翌年の 4 月頃に見られる。全て多摩川で観察され、川岸や草原のヨシやオギ、オオブタクサなどが密生している所で見られる。1992 年 4 月に初めて記録されて以降ほぼ毎年観察されていた。2000 年頃から個体数が減少し、2014 年からは永らく観察されなかったが 2019 年に久しぶりに観察された。(全記録数 269 件 1992～2019 年 2011 年以降 8 件)

○主な観察記録

1992. 04. 03	多摩川	1 羽	
1995. 12. 28	多摩川	2 羽	
1996. 12. 30	多摩川	15 羽	
1999. 04. 17	多摩川(玉堤 2)	4 羽	オオブタクサに止まり茎をつついて
2000. 04. 19	多摩川	10 羽	
2001. 01. 11	多摩川(鎌田 1)	4 羽	藪の中を鳴き交わしながら移動 バンの池
2002. 03. 31	多摩川(鎌田 1)	3 羽	雄 1、雌 2 羽 オギの海
2005. 04. 18	多摩川(鎌田 1)	12 羽	6 羽が草原でアシの茎を剥ぐ
2006. 12. 05	多摩川(鎌田 1)	5 羽	川岸に近いヨシ原でオオブタクサの茎をつついて
2007. 04. 26	多摩川(鎌田 1)	2 羽	ヨシの茎に止まり採餌 オギの海
2010. 03. 26	多摩川	2 羽	
2011. 02. 22	多摩川(玉堤 1)	3 羽	3 羽が中州のヨシの茎を啄む
2012. 02. 08	多摩川(玉堤 1)	3 羽	川岸のオギの茎を移動しながら採食
2013. 01. 16	多摩川(玉堤 2)	3 羽	排水樋管口のアシで採食
2019. 02. 18	多摩川(玉川 1)	2 羽	1 羽がヨシ群生地でヨシの茎の皮を剥ぎ採食

◆ シジュウカラ科 PARIDAE

441. コガラ *Poecile montanus* Willow Tit シジュウカラ科

ヨーロッパから東アジアまでのユーラシア大陸中緯度地域と日本に広く分布し繁殖している。日本では、北海道、本州、四国、九州に留鳥として生息している。

低山帯上部から亜高山帯の落葉広葉樹林、針葉樹林、針広混交林に生息し、北海道では針葉樹林に多い。特に枯れ木が多い原生林や湿地周辺の林に多い。冬期には低地へ移動する個体もいる。繁殖期は5～7月頃で、巣は朽ちた木に自分で穴を掘る。1巣の卵数は5～9個で、13～15日で孵化する。樹林内の中・下層部で幹や枝あるいは低木や藪の枯れた小枝にぶら下がり、小昆虫の幼虫などを取り出して食べる。秋には草や樹木の種子、小果実を食べ、種子を樹木の中や下層部の幹の割れ目などに貯える習性がある。

世田谷区では稀に冬期、仙川や砧公園、蘆花恒春園、成城みつ池緑地、若林などで観察されている。(全記録数 23 件 1957～2019 年 2011 年以降 5 件)

○主な観察記録

1957. 11. 20	野毛	2 羽	シジュウカラの群れと一緒に行動
1992. 01. 16	等々力溪谷公園	1 羽	
2001. 01. 10	砧公園	1 羽	
2003. 10. 16	仙川	4 羽	
2007. 10. 11	若林 4	1 羽	
2007. 12. 11	仙川	1 羽	
2008. 02. 07	仙川	1 羽	
2008. 03. 06	仙川	1 羽	
2009. 01. 29	蘆花恒春園	1 羽	シジュウカラの混群と一緒に行動していた
2009. 03. 12	成城みつ池緑地	2 羽	
2009. 04. 09	成城みつ池緑地	1 羽	
2009. 11. 20	野川	2 羽	採食
2010. 02. 06	成城みつ池緑地	3 羽	
2012. 05. 07	蘆花恒春園	1 羽	蘆花恒春園横の樹林 シジュウカラより小さく小さな蝶ネクタイが目立つ
2014. 12. 24	蘆花恒春園	10 羽	
2017. 09. 15	砧公園	1 羽	
2019. 04. 19	仙川	3 羽	

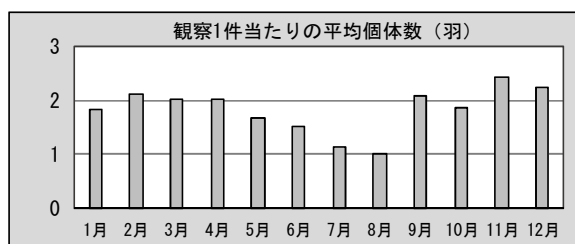
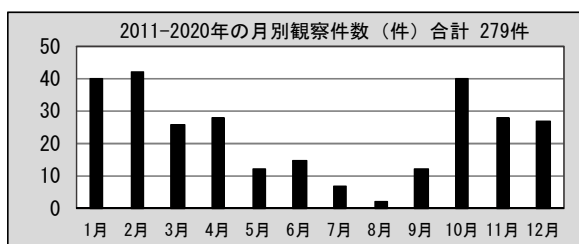
442. ヤマガラ *Poecile varius* Varied Tit

シジュウカラ科

南千島、朝鮮半島南部、中国東北部、台湾、日本に分布し繁殖している。日本では、北海道南西部、本州、佐渡、四国、九州、伊豆諸島に留鳥として生息する。伊豆諸島のものは亜種ナミエヤマガラと亜種オーストンヤマガラである。また大隅諸島、トカラ列島、八重山諸島にもそれぞれ個別の亜種が生息し繁殖している。

平地から低山帯の雑木林、マツ林など色々な樹林に生息するが、特にシイやカシの常緑広葉樹林を好み、西南日本に多い。大きい木が茂る公園や人家周辺でも見られる。繁殖期は4～7月頃で年に1～2回繁殖する。巣は樹洞でキツツキの古巣や巣箱もよく利用する。コガラやツグミの巣を奪いとることもある。1巣の卵数は6～7個で抱卵は雌のみが行う。12～14日で孵化し、その後15～21日で巣立つ。樹木の上・中層の外側や、樹冠部の小枝で採食することが多いが、地上でも落ちていた木の実を採食する。ガ類の幼虫、甲虫、クモ等も食べるが、特に樹木の種子を好む。シイ、カシ、ナラ類のドングリや、エゴノキ、ハシバミ等の堅い実を、木の枝の上で足指を使い押さえつけくちばしで叩き割る。秋にドングリや針葉樹の種子などを、樹木の幹や樹皮の割れ目、倒木の朽ちた部分等に貯蔵する習性がある。貯蔵した種子は厳冬期の餌とされるだけでなく、翌年のヒナの食物を補うのに役立つと言われている。

世田谷区では、1949年に始めて記録され、その後ほぼ毎年冬期に観察されてきた。2007年からは1年を通して観察されるようになった。砧公園、蘆花恒春園、駒沢オリンピック公園、静嘉堂緑地など公園や緑地、仙川などで見られる。2001年から砧公園、駒沢オリンピック公園で下記5例の繁殖が観察されている。非繁殖期にはメジロ、シジュウカラ、エナガなどとの混群で移動している姿が見られる。エゴノキやミズキの実、ドングリなどを採る姿も観察されている。2014年以降、年間の観察件数はそれまでの4分の1程度にまで減少している。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 680 件 1949～2020 年)



○繁殖記録

2001. 08. 29	砧公園	1 巣	雛 4 羽	エゴノキの樹洞	2 週間後巣立ち
2007. 06. 24	駒沢オリンピック公園	1 巣	巣立ち雛 2 羽	成鳥 2 羽と一緒にいた	
2010. 06. 29	砧公園	1 巣	巣立ち雛 3 羽	成鳥 2 羽と一緒に採餌	成鳥が雛に給餌
2011. 06. 03	駒沢オリンピック公園	1 巣	巣立ち雛 2 羽		
2018. 06. 20	砧公園	1 巣	巣立ち雛 3 羽	親 2 羽から餌をもらう	

○主な観察記録

1949. 10. 11	玉川田園調布	2 羽	10:35 頃玉川浄水場正門で見る
1952. 03. 30	野毛	1 羽	鳴きながら自宅付近に来て西へ行く
1962. 09. 28	等々力溪谷公園	1 羽	西より東に鳴きながら飛び矢沢山に降りる
1970. 03. 21	岡本	1 羽	
1978. 12. 13	砧公園	1 羽	
1994. 10. 14	馬事公苑	2 羽	武蔵野自然林
1999. 02. 17	多摩川	1 羽	
2004. 11. 16	豪徳寺	1 羽	
2006. 09. 19	仙川	1 羽	エゴの実を採食
2007. 01. 13	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	餌台
2007. 05. 03	岡本静嘉堂周辺	2 羽	
2009. 04. 19	砧公園	3 羽	地面に落ちて人間が靴でふんで割られたドングリを採餌
2010. 10. 16	蘆花恒春園	3 羽	ミズキの実を採食
2010. 11. 07	次大夫堀公園	6 羽	シジュウカラ 4 羽と混群
2012. 12. 06	祖師谷公園	1 羽	シジュウカラ等との混群
2014. 09. 27	砧公園	6 羽	木の実を採食
2015. 01. 17	駒沢オリンピック公園	1 羽	定例調査
2019. 02. 18	砧公園	3 羽	野草園手前桜樹上 2 羽、野草園樹上 1 羽鳴きながら飛びかう
2020. 11. 06	豪徳寺	1 羽	豪徳寺境内シジュウカラ、エナガ、メジロ、コゲラと混群

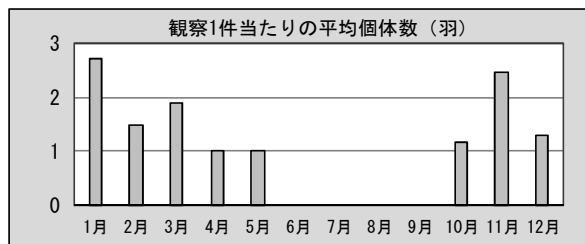
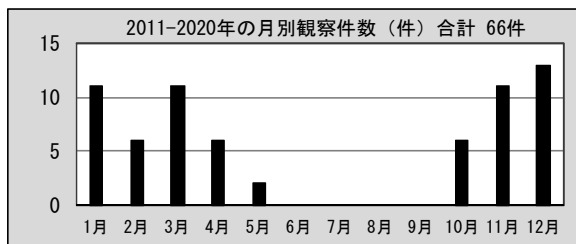
443. ヒガラ *Periparus ater* Coal Tit

シジュウカラ科

ヨーロッパから東アジアまでのユーラシア大陸、朝鮮半島、台湾、日本に広く分布し繁殖している。日本では、北海道、本州、佐渡、四国、九州、対馬に生息し、留鳥である。

低山帯上部の針広混交林から亜高山帯のブナ林上部などで繁殖し、冬期は低地のマツやスギなどの針葉樹林に下りてくる。亜高山針葉樹林では、特にコメツガ林に多く見られる。繁殖期は5～7月で、巣は樹洞やキツツキの古巣などを利用する。巣づくりは雌だけが行う。1 巣の卵数は5～8 個、14～15 日で孵化する。樹木の小枝や葉の多い樹冠部で採食する。針葉や小枝に止まり、しばしば逆さになって針葉の隙間や小枝の叉などに隠れている虫を見つけ出して食べる。木の冬芽や未熟なマツカサの中にくちばしを突き刺して虫を取り出すこともできる。主に昆虫やクモ類などを食べるが、針葉樹の種子やブナの種子なども食べる。小枝の叉などに種子を隠す貯蔵の習性も持っている。

世田谷区には10 月頃飛来し、翌年の5 月頃に去る。針葉樹のある砧公園、蘆花恒春園、駒沢オリンピック公園や、仙川、瀬田、成城みつ池緑地などで見られ、2012、2013 年には区内全域で多数が観察されている。メジロ、シジュウカラ、エナガ等と混群をつくり移動したりイヌシデの花やアカマツの実を食べる姿が観察されている。2016 年以降は観察されていない。(全記録数 119 件 1987～2015 年)



○主な観察記録

1987. 04. 27	松原 2	1 羽	
1991. 10. 20	奥沢	2 羽	
1995. 12. 13	馬事公苑	1 羽	武蔵野自然林内にて
1995. 03. 21	岡本静嘉堂周辺	1 羽	
1997. 03. 17	等々力溪谷公園	2 羽	
2001. 05. 07	砧公園	2 羽	シジュウカラと混群 さえずる
2004. 10. 07	砧公園	2 羽	少し離れて囀り
2006. 12. 05	仙川	3 羽	
2007. 03. 24	瀬田 4	2 羽	シジュウカラ、ヤマガラ、メジロ、コゲラと同行 イヌシデの花をついばむ
2007. 04. 12	成城みつ池緑地	2 羽	
2009. 04. 01	蘆花恒春園	1 羽	囀りながら飛行、移動
2010. 09. 20	砧公園	4 羽	
2012. 11. 12	馬事公苑	4 羽	
2012. 12. 05	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	アカマツの実を食べていた
2013. 01. 31	仙川	9 羽	大学庭園付近右岸の桜並木で9羽の群れで採食
2013. 03. 16	駒沢オリンピック公園	1 羽	定例調査
2013. 05. 05	砧公園	1 羽	囀りを確認
2014. 10. 09	蘆花恒春園	1 羽	囀っていた
2015. 10. 02	仙川	1 羽	

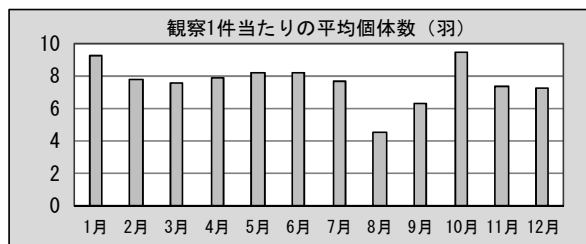
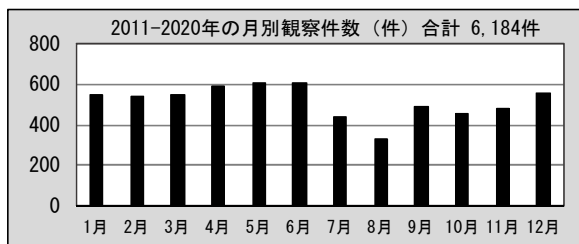
445. シジュウカラ *Parus minor* Japanese Tit

シジュウカラ科

チベットから中国北部、極東ロシア、韓国、日本、東南アジアに生息し、繁殖している。日本では、小笠原諸島以外の全国に分布する留鳥である。奄美諸島、沖縄諸島、八重山諸島にはそれぞれ個別の亜種が生息、繁殖している。

平地や低山帯の落葉広葉樹林、常緑広葉樹林、針葉樹林、針広混交林に棲息し、山地帯上部のものは冬期に平地へ移動する。樹木の多い市街地の公園や人家にまで幅広く生息している。繁殖期は4～7月頃。一夫一妻で繁殖するが、一夫二妻、一夫三妻も報告されている。巣は樹洞、キツツキの古巣、石垣の穴などで電柱の穴や巣箱も利用する。産卵回数は1～2回、1巣の卵数は8～10個で雌のみが抱卵する。12～13日で孵化し、その後20～22日で巣立つ。樹林内の下層部、樹木の幹や大枝、根元、林床、低木や藪の中などで採食していることが多い。地上では落ち葉等をくちばしでひっくり返し、隠れている虫などを探し出す。昆虫、クモ類、植物の種子や果実を食べる。

世田谷区では、1945年に等々力溪谷公園で初めて記録されて以来、毎年観察されている。1950年頃までは冬期の観察例が多かったが、1970年頃から1年を通して観察されるようになった。公園、緑地、河川や樹木の多い人家周辺などで普通に見られる。繁殖は1959年に観察されて以来ほぼ毎年観察され、特に2000年以降は毎年多くの観察例がある。樹洞やブロック塀の隙間、巣箱で繁殖した例がある。繁殖期には幼鳥を伴って家族で行動する姿が見られ、個体数も多い。非繁殖期にはヤマガラ、メジロ、コゲラなどと一緒に行動し、林の中の枝から枝へ移動しながら食べ物を探す姿がよく見られる。ハコベ、ミズキの実やオオブタクサの茎を割ってガの幼虫を食べた記録が報告されている。(全記録数 12,555件 1945～2020年)



○主な繁殖記録

1959. 05. 14	等々力溪谷公園	1 巣	谷沢山 朝巢立ち
1962. 04. 10	代田 1	1 巣	巣箱に出入り 雛の声が巣箱から聞こえる
1965. 04. 12	等々力	1 巣	巣づくり終了 (4/25 10 卵 5/17 雛の声 5/28 8 羽巣立ち)
1970. 05. 18	桜丘 5	1 巣	雛 5 羽 親は餌を運んでいる ブロック塀の穴
1980. 05. 22	世田谷 1	1 巣	巣立ち雛 4 羽
1997. 05. 13	下馬 4	1 巣	巣立ち雛 5 羽 自宅庭の巣箱
2005. 05. 24	瀬田 4	1 巣	巣立ち雛 3 羽 成鳥 2 羽と一緒にいた 国分寺崖線
2008. 05. 14	三宿の森緑地	1 巣	巣立ちヒナに給餌行動
2008. 07. 02	祖師谷 1	1 巣	巣立ち雛 2 羽、親から給餌を受ける
2009. 08. 28	砧公園	1 巣	巣立ち雛 3 羽 巣立ち雛 3 羽成鳥と一緒に移動
2010. 09. 06	蘆花恒春園	1 巣	巣立ち雛 2 羽 巣立ち雛 2 羽に成鳥 2 羽が毛虫や幼虫を給餌
2012. 05. 28	多摩川(野毛 1)	1 巣	成鳥 2 羽、巣立ち雛 4 羽の家族群 巣立ち雛は時々成鳥から給餌を受ける
2013. 05. 14	奥沢 6	1 巣	民家の庭の巣箱に雌雄が出入りし、雛に虫の餌を与えたり、ヒナの糞を運ぶ
2015. 06. 20	桜上水	1 巣	ソメイヨシノの自然樹洞に営巣し子育て (5/8 同じ樹洞で 2 回目)
2017. 06. 17	駒沢オリンピック公園	2 巣	2 組が繁殖 (巣立ちヒナ)
2020. 05. 25	深沢 7	1 巣	呑川沿いのイチョウの木の小さな樹洞 (地上 4m 程) を親鳥 1 羽とヒナ 2 羽が出たり入ったりしていた

○主な観察記録

1945. 10. 13	野毛	1 羽	自宅前電線に来て鳴く
1951. 09. 07	野毛	1 羽	
1967. 03. 29	野毛	1 羽	野毛町公園の街路灯の電気スイッチ穴に巣材運び
1986. 10. 01	馬事公苑	20 羽	
1991. 10. 15	成城みつ池緑地	6 羽	
1994. 06. 22	野川	9 羽	定例調査
1995. 01. 03	多摩川	31 羽	
2003. 01. 17	次大夫堀公園	10 羽	群
2008. 04. 17	羽根木公園	8 羽	
2009. 04. 06	大蔵運動公園	6 羽	地面でハコベ種子を食べる
2009. 08. 15	蘆花恒春園	10 羽	ミズキの実を採餌
2009. 10. 16	浄真寺	24 羽	
2011. 03. 08	多摩川(玉堤 1)	7 羽	1 羽が草原で枯れたオオブタクサの茎を突き黄色の幼虫を採食
2013. 01. 07	仙川	21 羽	大川橋～鞍橋間 中州で採餌
2014. 06. 12	喜多見 6	1 羽	幼鳥が青虫を捕食
2015. 03. 29	玉川野毛町公園	2 羽	
2015. 10. 07	砧公園	61 羽	定例調査
2017. 07. 22	桜上水 3	1 羽	雄、自宅前の路上でアブラゼミを追い回して捕捉し、サクラの木に運び採食
2020. 11. 30	等々力溪谷公園	2 羽	「ジュク ジュク」と鳴きながら、ミズキで採食

◆ ヒバリ科 ALAUDIDAE

450. ヒメコウテンシ *Calandrella brachydactyla* Greater Short-toed Lark

ヒバリ科

ヨーロッパ南部から中央アジア、モンゴル、中国東北部、北アフリカで繁殖し、地中海沿岸、アフリカ、インド、中国東部で越冬する。日本では、稀な旅鳥として長崎県の対馬や石川県の舭倉島などの日本海側の島嶼に少数が渡来する。北海道や新潟県、千葉県、神奈川県、長崎県等でも少数の記録がある。

低地や平地の農耕地、海岸の砂地の少し草のあるような所で見られる。空中高く飛び上がりながら静止したり輪を描いてさえずったりする。交互歩行しながら、つまむように昆虫や植物の種子を食べる。

世田谷区では下記2例の記録がある。(全記録数 2 件 2001、2019 年)

○観察記録

2001. 11. 15 多摩川 1 羽

2019. 03. 12 多摩川(鎌田1) 1 羽 成鳥 1 羽がグラウンド芝生でヒバリやハクセキレイ、タヒバリの群れと時折採食
全身やや濃いめの褐色、眉班は目の後方まで白い、嘴は太く長い、胸に細かい縦
斑はない 約2m 隣のヒバリと比較する

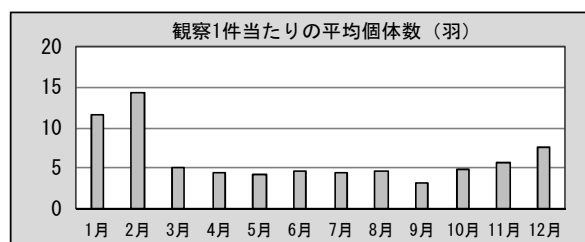
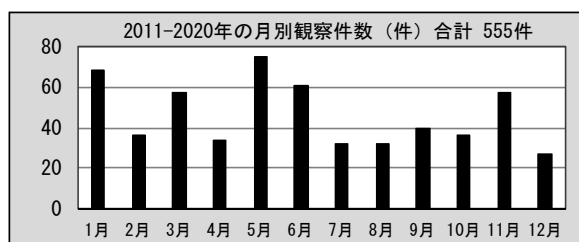
452. ヒバリ *Alauda arvensis* Eurasian Skylark

ヒバリ科

ヨーロッパ、北西アフリカの一部からユーラシア大陸、極東、東アジアに広く分布し、繁殖する。日本では、北海道、南千島では夏鳥で、本州から九州では留鳥である。積雪の多い地方では南下して越冬する。

農耕地、草原、牧場、川原や海岸の埋立地に生息し、丈の低い草がまばらに生え、土が露出している地面を好む。繁殖期は4月初旬から7月頃で、1~3回繁殖する。地上にヨモギ、ダイズ、ヒメシバなどの枯葉や茎で碗型の巣をつくり2~5個の卵を産み、雌のみが抱卵する。10日ほどで孵化し、雌雄から給餌を受けて9~10日で巣立つ。さえずりは「ピーチュク ピーチュク」など。空中高くホバリングしながらのさえずりと、大きな石や土盛の上に止まっのさえずりの二つのタイプがある。地上を歩きながらエノコログサ、イヌタデなどの雑草の種子やミツバチ、ハンミョウなどの昆虫、クモ類などを食べる。近年では環境の変化に伴い営巣する場所が全国的に減少している。

世田谷区では1年を通して生息し、繁殖している。主に多摩川で見られ、多摩川に近い野川(吉沢橋付近)や仙川で少数観察されている。繁殖はほぼ毎年多摩川で観察されているが、1966年に砧公園で繁殖した例もある。多摩川では広範囲にわたって繁殖が観察されていたが、2000年頃からは玉堤1や鎌田1など限られた地域のみとなった。さえずりは3月頃から始まり、7月下旬頃終わる。冬は北方や山地から飛来し個体数も多い。群で河川敷のグラウンドや草地、中州などに見られる。草地でイモムシを採食する姿が観察されている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 3,857 件 1948~2020 年)



○主な繁殖記録

1948. 04. 26	野毛	1 巣	5 卵	新田畑にて
1950. 05. 31	多摩川(鎌田)	1 巣	4 雛	(孵化後4~5日)
1957. 05. 29	多摩川(玉堤)	1 巣	4 卵	抱卵中 外径9.8cm 内径7.6cm 深さ4.5cm
1966. 06. 15	砧公園	1 巣	4 卵	芝の中で抱卵中
1970. 04. 12	多摩川	1 巣	3 卵	(4/13 卵は人にとられてない)
1995. 06. 30	多摩川	1 巣	巣立ち雛1羽	成鳥から給餌
2002. 06. 13	多摩川(上野毛2)	1 巣	雛1羽	コアジサシの親子に近づき激しく突つかれる
2005. 04. 18	多摩川(玉堤1)	1 巣	抱卵	中州の草の間
2010. 06. 30	多摩川(鎌田1)	1 巣	4 卵	グラウンド草地の巣 ハシボソガラスが卵を啜えて飛び立つ
2012. 06. 27	多摩川(宇奈根1)	1 巣	定例調査	1羽が19.3km 地点の芝生グラウンドで餌を啜え、近くの人を警戒しながら運ぶ
2014. 06. 17	多摩川(鎌田1)	1 巣	巣立ち雛2羽	が造成中の芝生グラウンドで成鳥から頻繁に給餌を受ける
2017. 05. 15	多摩川(鎌田1)	1 巣		
2020. 05. 05	多摩川(鎌田1)	1 巣	成鳥1羽、巣立ち雛2羽	グラウンドの草地からグラウンド芝生に親子が出る

○主な観察記録

1948. 10. 02	多摩川	1 羽	
1952. 02. 27	多摩川(野毛)	1 羽	初さえずり
1964. 07. 09	多摩川(鎌田)	1 羽	二子橋上流
1974. 12. 16	多摩川	31 羽	
1998. 01. 20	多摩川	253 羽	
2001. 01. 08	多摩川	110 羽	前夜降雪でほとんどが芝生グラウンドに集まる
2003. 06. 04	野川	1 羽	定例調査
2004. 03. 17	多摩川	50 羽	定例調査
2008. 01. 18	多摩川(鎌田 1)	38 羽	E 野球場とその付近
2008. 06. 01	仙川	1 羽	
2010. 09. 15	多摩川	28 羽	定例調査
2013. 10. 24	多摩川(鎌田 1)	21 羽	通路の野川側芝地で採餌 2~6 羽の小群
2014. 02. 23	駒沢オリンピック公園	1 羽	上空を「ピュルピュル」と聞こえる声で鳴きながら北方向に向かう
2015. 05. 13	多摩川	19 羽	定例調査
2016. 08. 15	多摩川(鎌田 1)	6 羽	成鳥 3 羽、幼鳥 1 羽 成鳥がグラウンド芝生で 3cm 位のイモムシを食べる
2018. 01. 29	多摩川(鎌田 1)	20 羽	新二子橋上流芝地グラウンド 1 群で採餌
2020. 06. 03	野川	1 羽	上空で囀り(吉沢橋)

453. ハマヒバリ *Eremophila alpestris* Shore Lark

ヒバリ科

ユーラシア大陸の極地地方から中緯度地域まで、中国東北部、北西アフリカ、メキシコ以北の北アメリカ、コロンビア以南の南アメリカと世界の広い範囲で繁殖し、北方のものは冬期に南下する。日本には、迷鳥または冬鳥として稀に渡来する。

北海道、本州、対馬、トカラ列島の海岸埋立地、干拓地の荒れ地、砂丘地帯、草がまばらな砂浜などに記録がある。雄が先に営巣地に渡来し、繁殖の頃はヒバリと同様に空中さえずりと地上さえずりがある。採食は地上を歩きながらメヒシバなどの草の種子をついばむ。繁殖期には昆虫、非繁殖期には植物の種子を食べる。

世田谷区では下記 1 例の記録がある。(全記録数 2 件 2003 年)

○観察記録

2003. 11. 05	多摩川(鎌田 1)	1 羽	グラウンドの芝生でタヒバリ、ハクセキレイの群と採餌(11/6 も観察)

◆ ツバメ科 HIRUNDINIDAE

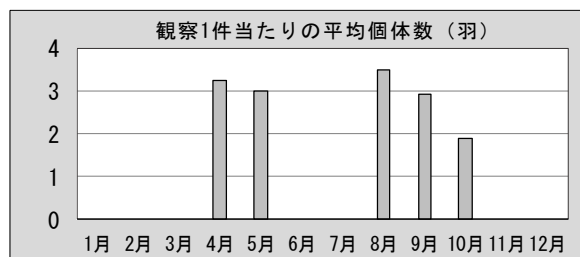
455. ショウドウツバメ *Riparia riparia* Sand Martin

ツバメ科

極地地方を除くユーラシア大陸や北アメリカ、北アフリカ、インドシナ半島で繁殖し、冬期は熱帯地域に移動する。日本には、夏鳥として北海道に渡来し繁殖する。本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島へは旅鳥として春と秋に渡来する。

湖沼、河川、海岸などの崖に穴を掘って集団で営巣する。巣穴は直径 5~9cm で、深さは 1m におよぶものもある。営巣地付近の原野、湿地、海岸などを飛翔し空中のウンカ、ミズムシ、ハエなどの昆虫を捕食する。秋は水辺のヨシ原や草原などの上空に群れて、ツバメの集団ねぐらに混じることもある。

世田谷区では、1968 年に観察され、その後 1995 年からは毎年観察されている。春は 4 月から 5 月頃、秋は 8 月から 10 月に多摩川で見られる。春は稀だが秋によく観察される。真冬に観察された例もある。ヒメアマツバメやツバメ、コシアカツバメの中に混じって飛翔しているのを観察されている。(全記録数 226 件 1968~2020 年)



○主な観察記録

1968. 05. 15	多摩川(野毛)	2羽	ツバメ 30羽の中にまじって渡し場下流に遊飛中
1989. 10. 21	多摩川(玉堤)	30羽	
1996. 10. 10	多摩川	13羽	
1998. 10. 19	多摩川	70羽	
2000. 01. 18	多摩川	2羽	低空で川面を飛ぶ（1/27まで継続して観察）
2001. 10. 12	多摩川	5羽	コシアカツバメの群れに混じって飛ぶ
2003. 09. 23	多摩川(野毛 1)	28羽	約20羽が川岸のイヌタデの群落をすれすれに飛び交う
2004. 04. 28	多摩川	34羽	雷雨の中、草地を低空でヒメアマツバメ、ツバメ、イワツバメ約60羽と飛翔
2005. 05. 06	多摩川(野毛 2)	3羽	小雨の中、川面をヒメアマツバメ、ツバメ、イワツバメ約60羽と飛び交う
2007. 09. 19	多摩川	10羽	定例調査
2008. 10. 02	多摩川(鎌田 1)	13羽	河川敷上空を飛翔
2010. 10. 01	多摩川(玉堤 1)	8羽	
2012. 05. 01	多摩川(野毛 2)	3羽	小雨時川岸のエノキ下に集まり飛翔しながら小さな虫を採食
2013. 04. 22	多摩川	7羽	
2015. 09. 27	多摩川(鎌田 1)	3羽	アマツバメ、ツバメ類の混群にまじって飛翔
2016. 09. 03	多摩川(鎌田 2)	1羽	宇奈根公園付近をツバメ約10羽と共に採餌飛翔
2017. 09. 04	多摩川(鎌田 1)	8羽	4羽がテニスコートのネット上で休息
2018. 08. 28	多摩川(鎌田 1)	4羽	グランド芝生刈り跡上空を低空で繰り返し飛翔
2020. 09. 21	多摩川(玉堤 1)	3羽	グランドの草地水溜まりを低空で繰り返し飛翔

457. ツバメ *Hirundorustica* Barn Swallow

ツバメ科

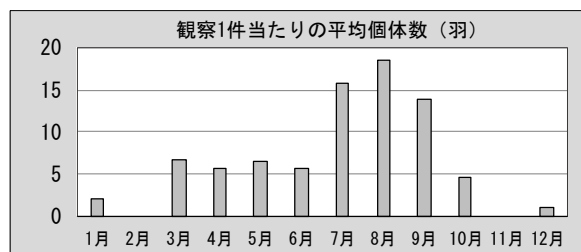
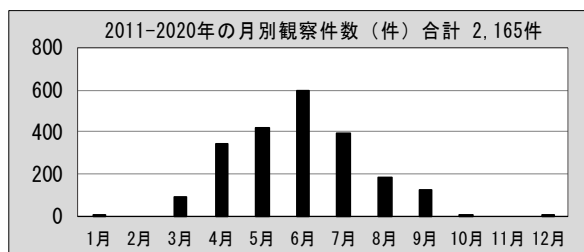
ヨーロッパ、北アフリカからユーラシアを経てカムチャツカ、南はイラン、ヒマラヤ、中国南部、台湾で繁殖し、北アメリカからメキシコでも繁殖する。冬期は熱帯地方さらに南半球まで移動する。日本へは、夏鳥として北海道南部から本州、四国、九州、奄美諸島に渡来し、琉球諸島では旅鳥である。関東、東海の太平洋沿岸や九州で少数が越冬する。

山間の村落、町や市街地に多く、田畑、草原、公園、河川などの営巣地付近を飛翔する。雌雄共同で人家や建物に泥土や糞と唾液を用いて巣をつくり、1～3回繁殖する。1巣の卵数は3～7個で雌雄共同で抱卵する。13～14日で孵化し、その後17～22日で巣立つ。ヒナが独立する夏から秋にかけて河川や河口のヨシ原に集合し、ねぐらを形成する。飛んでいるユスリカ、ハチ、ハエ、アブ、トンボなどの昆虫を捕食する。

世田谷区には、3月中旬頃に渡来し、9、10月頃渡去するが、稀に冬に観察されることもある。河川、住宅地、商業地、公園などで普通に見られ、野川、仙川、多摩川や主要幹線道路沿いの町に多い。営巣は事業所、商店、ガレージ、人家などで行われるが、2009年以降、タクシー会社、作業所、運送業のような常時人がいるところに集団営巣が見られ、2011年に玉堤2丁目の倉庫兼作業所で見られた営巣数19、繁殖件数25の例がある。また2019年には砧1丁目のタクシー会社で同程度の大きなものが見られた。緑地、河川上空での採餌や、水面を飛びながらの水飲み、また、グランド、川岸、畑などに降りて巣材を集める姿も観察されている。巣立ちしてから渡去するまで河川のヨシ原で集団ねぐらを形成する。区内では1960年代後半に2,000羽規模のねぐらが見られたがその後は見られなくなった。2001年から多摩川のヨシ原で集団ねぐらが継続して見られ、6月下旬から8月下旬のピーク時は1,000～3,500羽になったが2012年の900羽を最後に見られなくなった。水位低下や外来植物の侵入等によりヨシ原の規模がねぐら形成に充分

なものでなくなったためと思われる。

区内の営巣・繁殖数調査(1997～2001 年、2009～2011 年、2018～2021 年)や集団ねぐら調査(2001～2015)も行っている。営巣・繁殖調査の詳細については「世田谷区のツバメ 5 年間の記録(1997～2001)」、「世田谷区内ツバメ繁殖数調査報告書 2009～2011」を「一般財団法人 世田谷トラストまちづくり」のホームページ等でご参照いただきたい。(全記録数 6,411 件 1946～2020 年) *左記全記録数にはツバメ繁殖調査結果は含まず。



○主な繁殖記録

1962. 05. 24	瀬田	1 巣	4 雛	
1962. 08. 21	経堂	1 巣	巣立ち雛 4 羽	
1966. 04. 30	尾山台	1 巣	雛 5 羽 孵化 1 週間位	雛に餌運び 尾山台駅南側
1975. 05. 01	祖師谷	2 巣	祖師谷東宝通り	
1987. 06. 01	馬事公苑	1 巣	雛 4 羽	
1999 年	区内	294 巣	区内 277 町丁を調査し、130 町丁で繁殖 347 件を確認	(繁殖数調査)
2000 年	区内	286 巣	区内 277 町丁を調査し、123 町丁で繁殖 369 件を確認	(繁殖数調査)
2001 年	区内	284 巣	区内 277 町丁を調査し、129 町丁で繁殖 366 件を確認	(繁殖数調査)
2003. 08. 02	成城 2	1 巣	巣立ち雛 4 羽 18:00 過ぎ自宅前家から一度に巣立った	
2005. 08. 02	奥沢 6	1 巣	雛 4 羽巣立ち	
2006. 07. 31	粕谷 1	6 巣	5 巣 各雛 4 羽 1 巣 3 羽	
2009 年	区内	143 巣	区内 277 町丁の内 99 町丁を調査し、50 町丁で繁殖 172 件を確認	(繁殖数調査)
			集団営巣例として、玉堤 2 倉庫作業所 1 棟で 18 巣 26 繁殖があった	
2010 年	区内	191 巣	区内 277 町丁の内 126 町丁を調査し、67 町丁で繁殖 246 件を確認	(繁殖数調査)
2011 年	区内	199 巣	区内 277 町丁の内 141 町丁を調査し、74 町丁で繁殖 245 件を確認	(繁殖数調査)
			集団営巣例として、玉堤 2 倉庫作業所 1 棟で 19 巣 25 繁殖があった	
2012 年	区内	88 巣	区内 277 町丁の内 49 町丁を調査し、25 町丁で繁殖 107 件を確認	
2013 年	区内	74 巣	区内 277 町丁の内 49 町丁を調査し、26 町丁で繁殖 148 件を確認	
2014 年	区内	93 巣	区内 277 町丁の内 49 町丁を調査し、29 町丁で繁殖 115 件を確認	
2015 年	区内	108 巣	区内 277 町丁の内 49 町丁を調査し、33 町丁で繁殖 141 件を確認	
2016 年	区内	119 巣	区内 277 町丁の内 39 町丁を調査し、37 町丁で繁殖 154 件を確認	
2017 年	区内	148 巣	区内 277 町丁の内 74 町丁を調査し、35 町丁で繁殖 187 件を確認	
			集団営巣例として、喜多見 9 小田急ガード下 1 か所で 16 巣 18 繁殖があった	
2018 年	区内	149 巣	区内 277 町丁の内 83 町丁を調査し、54 町丁で繁殖 182 件を確認	(繁殖数調査)
2019 年	区内	197 巣	区内 277 町丁の内 89 町丁を調査し、64 町丁で繁殖 256 件を確認	(繁殖数調査)
			集団営巣例として、砧 1 タクシー会社 1 社で 17 巣 26 繁殖があった	
2020 年	区内	71 巣	区内 277 町丁の内 41 町丁を調査し、26 町丁で繁殖 90 件を確認	(繁殖数調査)

○集団ねぐら調査記録(各地、各年の最多数)

[多摩川河口から約 19.0km 左岸(鎌田 2) (水道局用地)]

2001. 06. 25	多摩川(鎌田 2)	1,000 羽	埵調査
2002. 07. 06	多摩川(鎌田 2)	1,500 羽	埵調査
2003. 08. 06	多摩川(鎌田 2)	2,000 羽	埵調査
2004. 07. 17	多摩川(鎌田 2)	1,500 羽	埵調査
2005. 07. 23	多摩川(鎌田 2)	1,000 羽	埵調査
2006. 07. 08	多摩川(鎌田 2)	1,800 羽	埵調査
2007. 07. 24	多摩川(鎌田 2)	2,500 羽	埵調査
2008. 07. 30	多摩川(鎌田 2)	3,500 羽	埵調査
2009. 07. 25	多摩川(鎌田 2)	2,300 羽	埵調査
2010. 07. 21	多摩川(鎌田 2)	400 羽	埵調査
2012. 07. 18	多摩川(鎌田 2)	900 羽	埵調査

[多摩川河口から約 14.2km 中州(玉堤 1 周辺)]

1964. 07. 04	多摩川(玉堤 1)	500 羽	
1967. 07. 01	多摩川(玉堤 1)	200 羽	
2003. 08. 06	多摩川(玉堤 1)	1,200 羽	埵調査
2004. 07. 17	多摩川(玉堤 1)	250 羽	埵調査
2005. 07. 23	多摩川(玉堤 1)	170 羽	埵調査
2006. 06. 28	多摩川(玉堤 1)	120 羽	埵調査
2007 年以降埵消滅			

2013. 07. 19 多摩川(鎌田 2) 100 羽 増調査

2014 年以降は観察されていない

○主な観察記録

1946. 03. 26	等々力	1 羽	本年渡来初認
1948. 09. 06	多摩川	35 羽	1 団 (渡り前らしき) 遊飛中を目撃す
1953. 08. 22	多摩川	1 羽	川だれ島上空 セキセイインコを追いかける
1964. 07. 13	多摩川(玉堤)	500 羽	19:03 ヨシに止る、19:45 飛来した群れが集まり、全部鳴きやむ
1969. 07. 13	多摩川(玉堤)	2,000 羽	ヨシ 増
1994. 09. 26	多摩川	300 羽	300 羽以上 年最多数 コシアカツバメとの混群
1999. 08. 06	多摩川(玉堤 1)	1 羽	1 羽が飛んでるイソシギを威嚇。イソシギは一瞬川に落ちるがすぐ飛立つ
2000. 02. 14	多摩川(玉川 1)	2 羽	二子橋の駅より 100m ほど下流付近、越冬固体と思われる
2003. 04. 22	多摩川	38 羽	1 羽が小さなガを数度宙返りをして捕らえるが逃す 5 度目に捕らえる
2005. 06. 09	多摩川(鎌田 1)	55 羽	8 羽がイワツバメ 7 羽とコケが生え湿ったコンクリート護岸に降りて採餌
2011. 08. 02	多摩川(野毛 2)	93 羽	12 羽が水面を低空で飛翔し時々水浴びする
2018. 09. 13	多摩川(鎌田 2)	9 羽	宇奈根公園 地面すれすれに採餌飛翔 時々地面に降りて休息
2020. 10. 20	多摩川(玉川 3)	10 羽	グランドの上空を飛翔

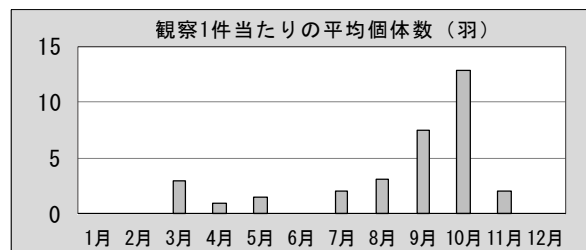
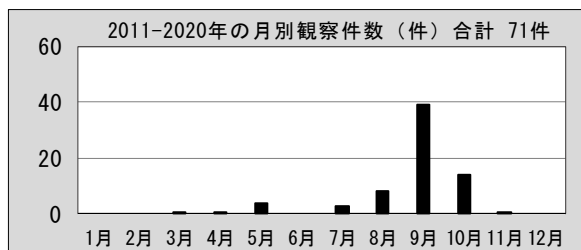
459. コシアカツバメ *Hirundo daurica* Red-rumped Swallow

ツバメ科

ユーラシア大陸の温帯地帯で繁殖し、インド、東南アジア、アフリカ大陸で越冬する。日本には夏鳥として渡来し、北海道、本州、四国、九州で繁殖する。奄美諸島、琉球諸島では旅鳥。

平野部の市街地に生息し、ハムシ、カ、ハエなどほとんどが昆虫食で、空中を飛びながら捕食する。昆虫を捕える習性はツバメと変わらない。繁殖は、太平洋側や日本海側の海岸線沿岸の平地の市町村に多く、内陸部にも進出している。市街地や村落のコンクリートの建造物を好み、軒下にとっくり形の巣をつくる。繁殖期は5~8月で年1~2回、4~6個の卵を産み、抱卵も育雛も雌雄共同で行う。かつては西南日本に多かったが、その後繁殖地域を広げ、1972年に北海道でも確認された。

世田谷区には、春は稀に、秋は7月下旬から11月に立ち寄る。9月、10月に観察例が多い。主に多摩川で見られ、2001年には野川でも観察されている。ツバメやイワツバメと群れになり、大群になることもある。2004年と2008年には冬にも観察されている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 470 件 1953~2020年)



○主な観察記録

1953. 10. 05	多摩川(野毛)	3 羽	
1968. 04. 23	多摩川(鎌田)	2 羽	
1991. 10. 15	喜多見 4	1 羽	氷川神社
1994. 09. 26	多摩川	1,000 羽	ツバメとの混群 かなり低空を飛翔
1995. 09. 23	岡本静嘉堂周辺	1 羽	
1999. 09. 24	多摩川	200 羽	
2001. 09. 05	野川	2 羽	定例調査
2001. 10. 12	多摩川(鎌田 1)	100 羽	1 群 ユスリカが異常発生してそれを捕食 オギの海
2003. 10. 02	多摩川	70 羽	
2004. 01. 23	多摩川(玉堤 2)	1 羽	低空で川原を旋回
2008. 01. 11	多摩川(鎌田 1)	7 羽	オギの海最上流部上空、水面水飲み、水浴も
2009. 09. 15	多摩川(鎌田 1)	5 羽	芝生グランド低空飛翔 ツバメ 30 羽、ヒメアマツバメ 10 羽と混群
2011. 08. 15	多摩川(鎌田 1)	3 羽	成鳥 1、幼鳥 2

2014. 10. 11	多摩川(鎌田 1)	50 羽	アマツバメ類と共に採餌飛翔 街中の電線で休息する個体あり
2015. 09. 27	多摩川(宇奈根)	30 羽	アマツバメ、ツバメと混群で、オギの海すれすれに採餌飛翔
2017. 09. 11	多摩川(鎌田 1)	16 羽	草原、特にオオブタクサ群落地上空を低空で飛翔を繰り返す
2018. 09. 19	野川	12 羽	上空を採餌飛翔
2020. 09. 01	多摩川(鎌田 1)	4 羽	グランド芝生をトラクターが刈り込んだ後を芝すれすれに飛び交って採食

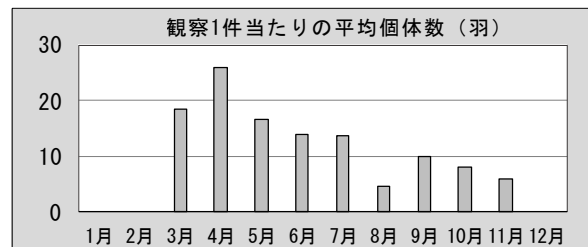
461. イワツバメ *Delichon dasypus* Asian House Martin

ツバメ科

ヒマラヤ、シベリア、中国、韓国、日本で繁殖し、冬期は、熱帯地方に渡る。日本では、夏鳥として九州以北に渡来し繁殖する。本州、四国、九州では少数が越冬もする。奄美諸島、琉球諸島では旅鳥である。

建物の軒下、山地の断崖、高山や海岸の岸壁に、数巣から数十巣をつなげて集団営巣をする。以前は、山の断崖に集団で営巣したが、近年は市街地の人工建造物でも多数が繁殖する。繁殖期は4～8月。ツバメと同じように泥と枯れ草と唾液を混ぜて巣をつくるが、巣の形もつくる場所も異なる。ツバメは単独で巣をつくるのに対し、イワツバメは市街地の橋桁、ダム、高速道路の下やトンネル内、マンションや学校の校舎のような建造物に集団営巣する。1巣の卵数は1～4個。雌雄交代で抱卵。約2週間で孵化し、その後26日くらいで巣立つ。餌は、ツバメと同様にカ、ガ、ハネアリ、トンボなど空中を飛んでいる虫である。

世田谷区には、3月に渡来し8月頃に渡去するが、稀に9月から翌年の1月頃まで見られることがある。1948年から記録があるが、繁殖は1970年代に入ってからである。多摩川、仙川、野川など河川で群れになって飛ぶ姿がよく見られる。岡本静嘉堂周辺、希望丘公園、神明の森みつ池、豪徳寺、野毛など住宅地や緑地でも見られる。玉川台や仙川、野川の東名高速道路下面、多摩川の第三京浜道路橋桁、粕谷、駒沢オリンピック公園などで繁殖した例がある。また多摩川右岸の川崎市東久地橋で1996年から毎年繁殖し、新二子橋上流周辺で数多く観察されている。(全記録数 1,688 件 1948～2020 年)



○主な繁殖記録

1977. 07. 16	多摩川(野毛 3)	1 巣	第三京浜橋下 成鳥 5 羽 雛 1 羽
1990. 06. 17	多摩川(野毛 2)	10 巣	第三京浜道多摩川橋桁
1998. 08. 02	玉川台 2	1 巣	9 階建ての屋上で親 2 羽と巣立ち雛 5 羽が飛び交う(東名下)
1999. 06. 03	多摩川(野毛 2)	6 巣	第三京浜道多摩川橋桁 盛んに巣に出入り 入っている時間長い
2003. 05. 28	仙川(大蔵)	4 巣	東名橋桁下 雛 2 羽 3 巣 子育て中
2004. 05. 26	仙川(大蔵)	2 巣	巣立ち雛 1 羽
2005. 05. 25	仙川(大蔵)	4 巣	雛 3 羽
2010. 06. 05	粕谷 1	1 巣	4 雛 巣立ちし、コンクリート建物の駐車スペースで営巣
2017. 06. 07	野川	2 巣	東名橋桁下 2 か所に営巣内上流側抱卵または抱雛中、巣から 2 羽飛び出した。
2020. 06. 03	野川	8 巣	東名橋桁下に 8 巣抱卵中

○主な観察記録

1948. 04. 16	多摩川	2 羽	
1957. 06. 07	多摩川(鎌田)	1 羽	ツバメの群れの中にいた
1961. 11. 15	深沢	1 羽	
1977. 05. 31	多摩川(野毛 3)	3 羽	第三京浜道多摩川橋下流
1990. 09. 29	馬事公苑	1 羽	
1997. 04. 28	多摩川	49 羽	今年は玉堤 1 でも数羽見られた
2005. 06. 01	仙川	34 羽	定例調査(清水橋)
2006. 04. 19	多摩川	472 羽	定例調査

2008.06.04	野川	17羽	定例調査
2010.05.19	多摩川	127羽	定例調査
2012.06.04	多摩川(鎌田1)	43羽	10数羽が代わるがわるに平瀬橋の巣に出入り 幼鳥8羽が芝生グラウンドで頻繁に降りたり飛び立ったりする
2014.05.07	砧公園	15羽	定例調査
2014.07.12	駒沢オリンピック公園	2羽	センサス外 陸上競技場上空で飛翔採食
2015.06.01	多摩川	58羽	3組の親が子に空中で給餌
2017.04.19	多摩川(鎌田1)	60羽	新二子橋上流上空 採餌飛翔
2019.06.11	多摩川(鎌田1)	28羽	頻繁に橋下の巣に出入り。幼鳥5羽がグラウンドで親鳥から給餌を受ける
2020.05.05	多摩川(鎌田1)	25羽	約10羽が橋下の中州に降り、泥を取って真上の巣に運ぶ

◆ ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

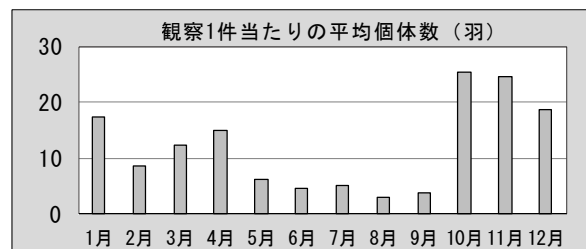
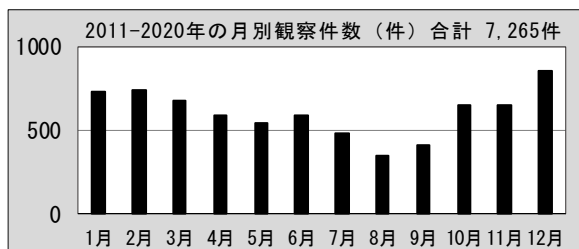
463. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* Brown-eared Bulbul

ヒヨドリ科

南サハリン、日本列島から朝鮮半島南部、台湾、フィリピン北部に分布し繁殖する。日本では、留鳥として北海道、本州、四国、九州、大隅半島、伊豆諸島、その周辺の島々の各地で繁殖する。奄美諸島、琉球諸島では冬鳥である。北海道や東北北部の個体は、秋に南下する。秋は10月から11月、春は4月から5月に数十から数百羽の群れで渡りをする。

低地の雑木林、針葉樹や落葉広葉樹林など色々なタイプの林に生息するが、ヤブツバキの多い常緑広葉樹林に多い。繁殖期は5〜7月ごろ、巣は碗形で葉のよく茂った樹木の枝の上に乗せるようにつくる。1巣の卵数は3〜4個で雌のみが抱卵する。13〜14日で孵化し、その後10〜11日で巣立つ。庭木の多い民家の庭、公園、学校、マンションの植え込みでも繁殖する。夏は主としてアブ、バッタ、セミなどの昆虫、冬はトウネズミモチ、ノイバラ、ナナカマド、センダン、イイギリなどの実を食べる。特に花蜜を好み、サクラ、ツバキなどの開花期は、花冠の中にくちばしを差し込み顔に花粉をつけながら蜜をなめとる。また、果物や葉物野菜なども食べる。

世田谷区では、以前は冬期に観察されたが1968年頃から一年を通して見られるようになり、1969年からは繁殖も観察されるようになった。繁殖期には個体数が少ないが、10月頃には北に生息していたものが多数飛来し、個体数が増える。砧公園、多摩川、世田谷公園、蘆花恒春園、仙川、野川、国分寺崖線などの公園や河川、緑地、住宅地で普通に見られ、公園や住宅地などで繁殖する。春は4月頃、秋は10月から11月に100羽以上の群れが移動するのが観察される。トウネズミモチやセンダンなど木の実、樹木の新芽、カキノキやユズなど果実、葉物野菜、花の蜜、昆虫など幅広く採食する。(全記録数 14,346件 1946〜2020年)



○主な繁殖記録

1969.06.10	野毛	1巣	巣立ち雛1羽	六所神社
1971.06.12	馬事公苑	1巣	巣立ち雛4羽	
1997.07.20	喜多見6	1巣	抱卵 (8/6孵化 8/15巣立ち)	
1998.06.01	玉川台2	1巣	巣立ち雛3羽	巣の外に出た時1羽が車にひかれる
2003.05.29	弦巻5	1巣	雛3羽	(巣立ち直前雛1羽が27日ハシトガラスに食べられる)
2009.08.29	祖師谷公園	1巣	ヒヨドリ巣立ち雛3羽	親の給餌を受ける
2010.06.02	成城4	1巣	巣立ち雛1羽	親にカナブンをもらう
2014.06.09	多摩川(玉堤1)	1巣	巣立ち雛1羽	羽が河畔林のエノキ樹冠部で成鳥から給餌を受ける
2015.09.14	桜上水2	1巣	巣立ち雛1羽	親が大きなショウリョウバッタを捕獲給餌

2016. 06. 19	駒沢オリンピック公園	1 巣	巣立ち雛 1 羽が親鳥から給餌を受ける
2019. 06. 28	蘆花恒春園	1 巣	飛べない巣立ち雛 1 羽に給餌
2020. 07. 02	砧公園	1 巣	桜の木に営巣 1 巣抱卵中 つがいの他の 1 羽は 1m 程離れた枝で警戒

○主な観察記録

1946. 09. 30	野毛	1 羽	鳴きながら寺の森に飛行 堤外の畑にて目撃
1952. 01. 22	野毛	1 羽	小松菜を食べる
1960. 04. 23	野毛	15 羽	1 群 自宅付近飛来
1978. 04. 22	馬事公苑	50 羽	
1991. 02. 28	野川	14 羽	
1997. 01. 22	仙川	69 羽	
1998. 10. 19	多摩川	625 羽	渡りの群れが 7 群、南の方角へ飛翔
2002. 04. 03	砧公園	300 羽	定例調査
2003. 01. 23	等々力溪谷公園	14 羽	
2005. 02. 21	豪徳寺	62 羽	
2007. 12. 18	岡本静嘉堂周辺	70 羽	
2008. 11. 26	蘆花恒春園	236 羽	
2011. 01. 31	多摩川(玉川 3)	26 羽	6 羽が川岸のセンダンの実を丸飲み
2011. 08. 04	駒沢オリンピック公園	3 羽	幼鳥 1 羽含む
2012. 08. 09	祖師谷公園	4 羽	1 羽のヒヨドリがアブラゼミを捕食していた
2013. 10. 17	成城みつ池緑地	30 羽	
2014. 01. 14	多摩川	283 羽	トウネズミモチを採食 野毛 2～玉川 3 間
2015. 01. 31	桜上水 1	40 羽	雪が積もった生産緑地、収穫後に残されたブロッコリーの葉とこれまで食べなかったカリフラワの葉に群がり採食
2015. 03. 14	羽根木公園	14 羽	定例調査 ウメの花の蜜を次々吸う
2016. 06. 20	多摩川(玉堤 1)		1 羽がヒヨドリの雛を啜えてオニグルミにいるハシボソガラスを威嚇し、河畔林から出たも追いかける
2019. 10. 30	将軍池公園	30 羽	群れでイイギリをはじめ、エノキ、ケヤキ等の実を採食
2020. 11. 14	桜上水 2	10 羽	ねぐら入りした オナガ、ヒヨドリの混合ねぐら 小規模孟宗竹林

◆ ウグイス科 CETTIIDAE

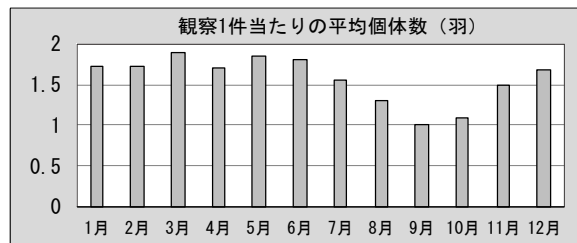
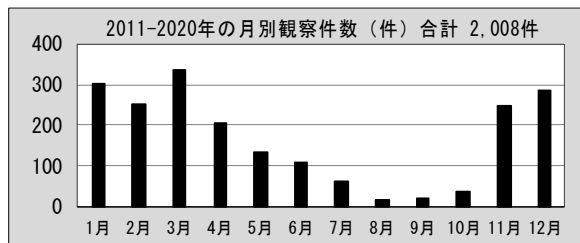
464. ウグイス *Cettia diphone* Japanese Bush Warbler

ウグイス科

中国東北部から揚子江流域、朝鮮半島、サハリン、日本など日本海を囲む地域で繁殖する。移動性のもものと留鳥性のものがあり、北方のものは日本、中国南部、タイ、台湾、フィリピンで越冬する。日本では、北海道から南は九州、屋久島、種子島、その他伊豆諸島、対島などで繁殖する。北海道では夏鳥、他の地域では留鳥だが冬は温暖な地域に移動するものもいる。

低山帯から亜高山帯までの林縁、林内の密生した藪、またはササ藪に生息する。秋冬は暖地、低地へ移動し、平地の藪の中で生息する。公園や庭の生け垣などでも見られる。繁殖期は4～8月で、年に1～2回繁殖する。つがいの関係が極めて希薄な一夫多妻である。雄は繁殖期を通して樹木の上部でさえずり続け、ソングエリアをつくり、なわばりを形成する。「ホーホケキョ」と聞こえる雄のさえずりは繁殖初期に特に多く、1日に2,000回以上にもなる。抱卵、子育ては雌だけがを行い雄は関係しない。1巣卵数は4～6個。採食は、藪の中を枝渡りしながら活発に移動し、葉の裏側につく昆虫を下から飛びつくように捕食。冬は熟したリンゴ、カキノキ、ノイバラなどの実を食べる。

世田谷区では、1年中観察される。2000年頃までは主に11月から3月まで観察されていたが、それ以降は繁殖期にも観察されるようになった。市街地を含め区内全体に生息しているが、この10年間の記録で見ると、公園緑地での記録が多く、成城みつ池緑地、桜丘すみれば自然庭園、砧公園、祖師谷公園、岡本静嘉堂周辺などで多い。河川では多摩川、仙川で多く観察されている。区内での繁殖は、2008年に成城三丁目緑地で、放棄された巣が見つかり、2013年には多摩川で巣立ったと思われる幼鳥が見られ、2016年以降は毎年繁殖している。(東京都区部：ランク外 全記録数 4,373件 1945～2020年)



○繁殖記録

2008. 05. 15	成城三丁目緑地	1 巣	5 卵 放棄と思える 場所は崖線斜面ササ藪内 刈り取り作業中発見
2013. 07. 30	多摩川(鎌田 1)	1 巣	成鳥 1 羽と巣立って間もない幼鳥 1 羽が草原のササ藪上部で見られた
2016. 07. 18	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立ち雛 2 羽が河畔林内からでてきてエノキの根元にくる。雌親が枝から降りてきて巣立ち雛 1 羽に給餌する。雄は河畔林内で囀っている
2017. 07. 17	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雌親が川岸の地上 1m 落葉樹横枝に姿を見せると巣立って間もない巣立ち雛 1 羽も続いて現れる。雄は河畔林内で囀る
2018. 06. 12	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雌親が川岸斜面藪で巣立ち雛 1 羽に給餌後藪に入り、巣立ち雛 3 羽も続いて藪に入る
2019. 06. 11	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立ち雛 2 羽が河畔林内の地上で羽を震わせ鳴きながら親鳥の後を付いていく
2020. 06. 27	喜多見ふれあい広場	1 巣	親の近くに巣立った幼鳥が垣根の植え込みで見られた

○主な観察記録

1945. 10. 31	野毛	1 羽	自宅垣根に来て鳴く
1949. 04. 20	野毛	1 羽	本年終認
1967. 06. 11	岡本	1 羽	さえずり
1976. 11. 02	馬事公苑	3 羽	
1994. 03. 11	宮坂 1	1 羽	さえずり 世田谷八幡境内
1999. 01. 15	砧公園	8 羽	
2002. 08. 01	上用賀 3	1 羽	さえずる
2004. 02. 12	豪徳寺	2 羽	
2006. 01. 04	蘆花恒春園	6 羽	
2007. 11. 20	桜丘すみれば自然庭園	10 羽	
2008. 07. 13	奥沢 6	1 羽	庭のモチノキの上部でホーホケキョと数回鳴く
2008. 12. 09	桜上水	1 羽	カキの木でスズメと一緒に熟した実を突いていた
2009. 06. 28	瀬田 4	6 羽	さえずり
2012. 01. 05	岡本静嘉堂周辺	6 羽	
2013. 02. 26	砧公園	1 羽	木の虫を捕食
2014. 03. 25	仙川	5 羽	ほぼ全域で囀りを聞く 1 羽だけ地鳴き
2016. 06. 27	多摩川(玉堤 1)	3 羽	笹藪内のオニグルミの樹などでさえずる
2018. 01. 07	等々力溪谷公園	3 羽	「チャッ チャッ」と聞こえる声で、茂みや竹林の中で鳴く
2020. 12. 05	成城みつ池緑地	3 羽	

465. ヤブサメ *Urosphena squameiceps* Asian Stubtail

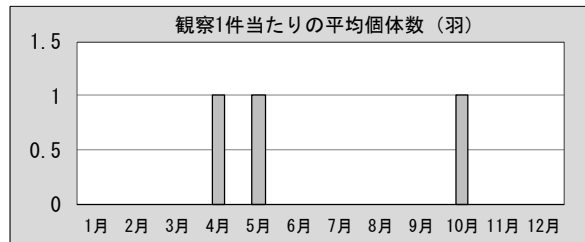
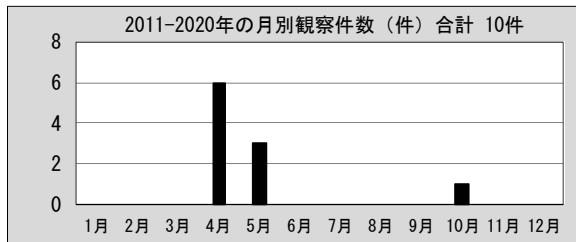
ウグイス科

中国東北部、ウスリーランド、サハリン南部、韓国、日本など日本海周辺地域で繁殖し、冬はミャンマー東部からインドシナ半島、中国南東部、海南島、台湾で越冬する。日本では、北海道から屋久島まで夏鳥として全国各地で繁殖する。奄美諸島、琉球諸島では冬鳥。

低山や丘陵の雑木林、杉林などの林床に藪やササが密に生い茂った林に生息する。西日本にはごく普通にいるが東日本には少ない。4 月下旬から 8 月にかけて、年に 1~2 回繁殖する。一夫一妻で繁殖するが、一妻多夫の場合もある。灌木林や落葉広葉樹林の地上に営巣し、巣は草または樹木の根元、倒木の下などに多い。巣づくり、抱卵は雌だけが行い、ヒナへの給餌は雌雄とも行う。給餌頻度は雄の方が多い。1 巣卵数は 4~7 個。灌木の茂みの中や広葉樹林の下草の中を、身体を左右に振りながら動き回り、植物につく昆虫の幼虫や成虫を採食する。

世田谷区では、春の移動時期の 4 月から 5 月に観察されるが、秋にも少数が観察されている。砧公園での記録が多いが、成城みつ池緑地、駒沢オリンピック公園、多摩川、岡本静嘉堂周辺でも見られている。

(東京都区部：非分布 全記録数 30 件 1992～2019 年)



○主な観察記録

1992. 04. 21	岡本静嘉堂周辺	1羽	ブッシュの中で鳴いていた
1995. 04. 25	岡本静嘉堂周辺	1羽	
2003. 04. 20	砧公園	2羽	1羽はサツキの中 1羽は低木で「シーシー」とさえずる
2007. 04. 15	砧公園	1羽	水飲み
2008. 04. 14	駒沢オリンピック公園	1羽	
2009. 05. 02	成城みつ池緑地	1羽	
2010. 10. 27	砧公園	1羽	
2013. 05. 14	多摩川(玉堤1)	1羽	河畔林内の川岸近くで「シー シー」と聞こえる声が出て近づくと藪の細道を10m位移動して隠れる
2015. 04. 25	駒沢オリンピック公園	1羽	定例調査 バードサンクチュアリ内から囀る声
2016. 10. 10	多摩川(玉川3)	1羽	成鳥と思われる1羽が兵庫島東斜面の植え込みで見え隠れする
2017. 04. 29	駒沢オリンピック公園	1羽	サンクチュアリ内から囀る声
2018. 04. 22	蘆花恒春園	1羽	さえずり
2019. 04. 15	多摩川(玉堤1)	1羽	川岸斜面の笹藪で「シー シー」と聞こえる声で鳴き、グラウンドから排出の水溜まりにきて浴びる

◆ エナガ科 AEGITHALIDAE

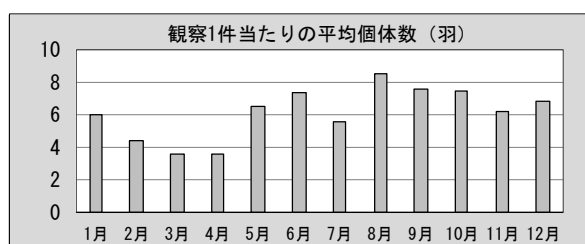
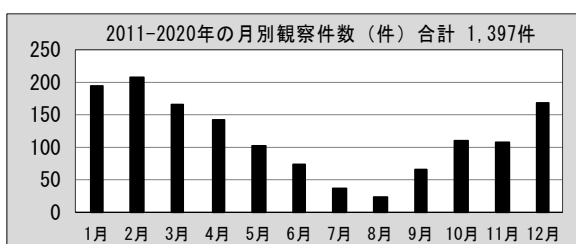
466. エナガ *Aegithalos caudatus* Long-tailed Tit

エナガ科

西ヨーロッパから東はカムチャツカまで、南はコーカサス、イラン、モンゴル、中国の揚子江流域、雲南省、朝鮮半島、日本で繁殖している。日本では全国に留鳥として生息、繁殖している。北海道には亜種シマエナガが、四国、九州にはキュウシュウエナガが生息、繁殖している。

平地や低山帯のいろいろな樹林に生息するが、原生林よりも二次林に多く生息する。林縁の低木や藪にも現れる。近年は、都市部の公園などでも繁殖が確認されるようになっている。繁殖期は4～6月、一夫一妻で繁殖する。樹木の枝の又などに雌雄共同して藨類やクモの糸などで袋状の楕円体の巣をつくる。抱卵は、昼間は雌が行い、夜間は雌雄が巣に入り行う。育雛も共同で行う。1巣卵数は7～12個と多い。採食は樹木の上・中層部や藪の小枝など葉が茂るところで行う。小枝や葉の表面から鱗翅類の卵、幼虫、成虫、アブラムシ類の卵、成虫、クモ類を食べるが、熟した果実、樹液なども食べる。冬期は群れで採食移動することが多く、シジュウカラやメジロなどと混群をつくる。

世田谷区では、1986年に初めて観察され、2003年頃から頻繁に観察されるようになった。1年中見られるが、7、8月は観察例が少ない。仙川、成城みつ池緑地、砧公園、祖師谷公園で多く観察され、その他市街地の公園緑地や住宅街などいろいろな場所で観察されている。1987年に馬事公苑で初めて繁殖が記録された。その後2006年以降は毎年のように繁殖している。(全記録数 1,983 件 1986～2020 年)



○主な繁殖記録

1987. 07. 01	馬事公苑	1 巣	巣立ち雛
2006. 04. 30	砧公園	1 巣	エノキの樹冠部小枝に巣立ち雛がメジロ押し 親が給餌に大忙し
2007. 04. 20	瀬田 4	1 巣	雛 9 羽 ケヤキの枝に並び餌をもらっていた 国分寺崖線内
2008. 06. 25	蘆花恒春園	1 巣	巣立ち雛 6 羽まだあまり飛べない 親 2 羽と一緒にいて採餌練習 (メジロと混群)
2010. 05. 01	砧公園	1 巣	成鳥 2 羽 巣立ち雛 3 羽に餌をあげてから、一緒に飛んでいく
2010. 05. 05	成城 4	1 巣	巣立ち雛 6 羽(まだ灰色で模様は無く少し小さい) と成鳥 2 羽が、サクラの木と一緒に採餌 1 羽小さい蛾の幼虫を親にもらう (4 丁目公園)
2015. 04. 10	次大夫堀公園	1 巣	巣に餌を運んでいた (4/21 雛が顔を出した 5/1 巣立ち 5 羽を確認後順次巣立ち合計 9 羽 5/2 巣立ち雛 12 羽を確認)
2017. 04. 19	成城三丁目緑地	1 巣	親が餌運び、雛 12 羽確認
2018. 04. 23	多摩川(玉堤 1)	1 巣	成鳥 2、巣立ち雛 8 羽が川岸の樹々で成鳥から給餌を受ける
2019. 04. 14	成城三丁目緑地	1 巣	アカマツの枝に巣を発見、盛んに給餌の様子なれど位置の関係でヒナの姿見られず
2020. 05. 06	桜上水 5	1 巣	北沢川緑道、5 羽の内、目の周囲が薄桃色の巣立ちヒナ 3 羽

○主な観察記録

1986. 01. 24	馬事公苑	2 羽	
1989. 02. 22	成城 4	2 羽	
1992. 01. 16	等々力溪谷公園	2 羽	世田谷区緑の環境センサス
1994. 01. 15	南鳥山	11 羽	
2001. 03. 18	砧公園	2 羽	巣材と思われる小さな枝、木の皮などを集めていた
2002. 10. 04	成城みつ池緑地	2 羽	
2002. 11. 26	岡本静嘉堂周辺	3 羽	国分寺崖線保全調査
2004. 11. 17	北鳥山 5	6 羽	寺町では初めて見る鳥 夕方 (妙寿寺)
2007. 10. 23	祖師谷公園	10 羽	
2008. 05. 23	馬事公苑	8 羽	親 2 羽、巣立ち雛 6 羽のエナガの親子 まだ皆一緒に動いている
2010. 01. 29	蘆花恒春園	16 羽	シジュウカラと混群を形成
2011. 06. 19	桜上水 3	26 羽	北沢川緑道で次々と鳴き交わし下流方向へ通過して行く
2012. 06. 04	多摩川	3 羽	
2014. 02. 02	浄真寺	2 羽	白梅の木で採餌
2016. 09. 01	喜多見 9	20 羽	メタセコイヤの並木でエナガの大きな単群が採食移動するのを観察
2017. 03. 25	桜丘すみれ自然庭園	1 羽	
2019. 04. 27	成城三丁目緑地	2 羽	巣がツミに襲われ巣を壊されていて、雛が犠牲になったが 1 羽の雛が落下していて助かった
2020. 06. 02	仙川	11 羽	竜沢寺橋電線 5 羽、セキレイ橋上流 6 羽

◆ ムシクイ科 PHYLLOSCOPIDAE

470. ムジセツカ *Phylloscopus fuscatus* Dusky Warbler

ムシクイ科

シベリアからオホーツク海岸、モンゴル、中国北部・中央部などで繁殖し、冬は東南アジア、中国南部に移動し、稀に西ヨーロッパ、日本に渡る。日本では、北海道、本州、九州、琉球諸島では稀な旅鳥、四国では迷鳥である。一部は越冬することもある。

森林よりも灌木や藪を好み、湿地の草原で見られることも多い。ほとんど声を立てないが、地鳴きは「チャッ、チャッ」と聞こえる声で鳴く。食性は主に小さな昆虫を主食とする。

世田谷区では下記 2 例がある。(全記録数 2 件 2017 年、2019 年)

○観察記録

2017. 03. 08	多摩川	1 羽	二子玉川付近
2019. 11. 07	桜上水 3	1 羽	「チョッ・チョッ・チョッ」とウグイスの地鳴きとは明らかに異なる声を聞く You Tube (野鳥動画図鑑) の動画と同じであった

474. キマユムシクイ *Phylloscopus inornatus* Yellow-browed Warbler

ムシクイ科

シベリアからオホーツク海岸、モンゴル、中国北部などで繁殖し、冬は東南アジア、中国南部に移動する。日本では北海道から九州まで旅鳥として見られ、日本海側の島嶼部では稀な旅鳥、奄美諸島、琉球諸島では冬鳥である。

渡り期には海岸や島嶼のマツ林でよく見られる。繁殖地では必ずしも針葉樹林にいるわけではなく、いろいろな林にいる。松林では、樹冠部の小枝や葉の多いところで活発に小枝の間を渡り歩きながら採食する。昆虫が主要食である。渡り期、越冬地では単独または2羽ぐらいでいることが多い。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数2件 2020年)

○観察記録

2020. 04. 29	砧公園	1羽	谷戸川の樹上に短時間出た
2020. 05. 02	砧公園	1羽	谷戸川の樹上に短時間出た

476. オオムシクイ *Phylloscopus examinandus* Kamchatka Leaf Warbler

ムシクイ科

カムチャツカ、サハリン、千島列島で繁殖し、冬は熱帯アジアの島々に渡る。日本では、北海道知床半島で繁殖している。その他の北海道、本州、四国、九州、琉球諸島では旅鳥である。

森林に生息し、亜高山帯の針葉樹林や落葉広葉樹林で繁殖する。2012年まではメボソムシクイの亜種コメボソムシクイとして分類されていたが、日本鳥類目録改訂第7版(2012)から独立した種オオムシクイとなった。姿だけではメボソムシクイとの区別が難しいが、鳴き声で区別ができる。オオムシクイは濁った声で「ジジロジジロジジロ」と聞こえる声で鳴く。メボソムシクイは「ジュリジュリジュリ、ジョリジョリ」と聞こえる弱い声で鳴く。オオムシクイは、春の通過は他の夏鳥より遅く、5月中旬から6月上旬に日本列島を通過する。秋の渡りは8月中旬から10月上旬まで続く。平地林や公園の植え込みなどでもさえずりを聞くことができる。

世田谷区では観察記録は少ないが、下記10例がある。(環境省:情報不足 全記録数10件 1983~2019年 2011年以降8件)

○観察記録

1983. 10. 06	上野毛	1羽	
2008. 06. 08	駒沢オリンピック公園	1羽	
2011. 06. 03	駒沢オリンピック公園	1羽	囀り
2013. 05. 26	駒沢オリンピック公園	1羽	定例調査
2015. 06. 01	多摩川	1羽	河畔林内のエノキで「チチロ チチロ」と鳴く
2016. 06. 14	蘆花恒春園	1羽	ジジロ、ジジロ、ジジロと囀った 姿確認
2017. 06. 04	蘆花恒春園	1羽	雄
2018. 06. 04	多摩川(玉堤1)	1羽	川岸の樹々から3~4度「チチロチチロ」と聞こえる声で囀る
2019. 09. 19	砧公園	1羽	公園西口付近の樹上に出た
2019. 10. 22	砧公園	1羽	美術館付近の桜の下枝と芝生に出た

477. メボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas* Japanese Leaf Warbler

ムシクイ科

日本の本州、四国、九州の亜高山帯で繁殖し、冬は中国東南部、台湾、フィリピン、インドネシアの島々に移動する。日本では、北海道には生息せず、本州で夏鳥として繁殖しているほか、四国の徳島、愛媛、九州の大分でも繁殖している。そのほかの地域では旅鳥である。

繁殖地は亜高山針葉樹林や森林限界のダケカンバ林、日本海側ではブナ帯の上部で、渡り期には平地や低山帯のマツ林や雑木林などで見られる。繁殖期は6~8月。さえずりは5月下旬から10月上旬までと長い。巣は地上で、樹木の根の間など隠れたところに藓類で球形につくる。1巣卵数は4~5個。採食は針葉樹林では藪や低木で行い、ダケカンバなどの広葉樹下枝を移りながら、周辺を飛んでいる虫や葉や枝に止

まっている虫を飛びついて捕食する。渡りのときにも「ジュリジュリジュリ、ジョリジョリ」と聞こえる弱い声で盛んにさえずる。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は8月から10月の渡りの季節に少数が観察される。観察は砧公園が多く、桜丘すみれば自然庭園、駒沢オリンピック公園、羽木公園などでも見られている。(東京都区部：非分布 全記録数 49 件 1948～2019 年 2011 年以降 5 件)

○主な観察記録

1948. 10. 03	野毛	1 羽	自宅にて見る (10/4 も見られた)
1953. 05. 19	野毛	1 羽	朝、自宅付近でよく鳴く
1962. 10. 08	桜3	1 羽	
1975. 04. 23	馬事公苑	1 羽	
1989. 09. 10	馬事公苑	1 羽	(9/27 まで観察された)
2001. 05. 17	成城みつ池緑地	1 羽	姿は確認できなかったが、10 時 30 分から 12 時まで囀っていた
2005. 05. 25	等々力溪谷公園	1 羽	
2008. 05. 04	駒沢オリンピック公園	1 羽	
2010. 08. 31	砧公園	2 羽	コナラの木を飛び回る
2012. 05. 15	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	暗い林ゾーン
2017. 05. 06	砧公園	1 羽	囀り
2019. 06. 01	羽根木公園	1 羽	

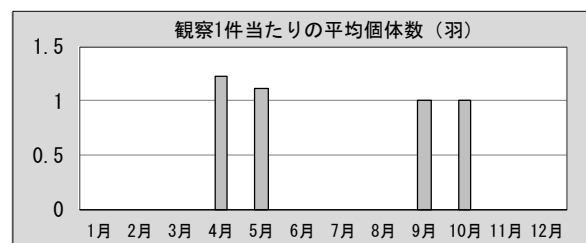
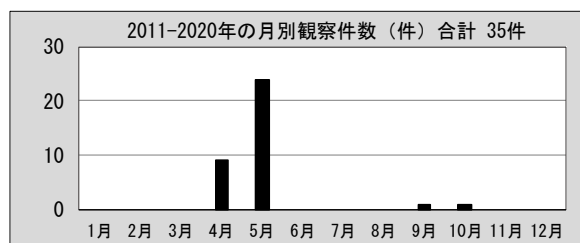
479. エゾムシクイ *Phylloscopus borealoides* Sakhalin Leaf Warbler

ムシクイ科

サハリンと南千島、日本で繁殖し、冬は中国南東部からタイ、インドシナ半島へ移動する。日本では北海道と本州中部以北、四国の一部に夏鳥として渡来して繁殖する。その他の地域では旅鳥である。

亜高山の針葉樹林で繁殖し、谷間に近いよく繁った急斜面の樹林を好む。渡りのときには平地の林や公園にも現れる。繁殖期は5～7月。一夫一妻で繁殖する。巣は急斜面の谷間のオーバーハングした下面の奥の方のくぼみや根の間につくる。1 巣卵数は4～6 個。採食は樹林内の下枝や小枝を渡り歩き、葉の裏のガなど鱗翅類の幼虫などを捕る。採食形態はメボソムシクイとよく似ている。「ヒーツーキー ヒーツーキー」と聞こえる金属的な声でさえずる。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は9月から10月に見られる。2003 年からは毎年見られているが観察件数は多くはない。砧公園での観察記録が多く、駒沢オリンピック公園、蘆花恒春園、桜丘すみれば自然庭園、成城みつ池緑地のほか市街地などでも見られている。さえずりがよく聞かれている。(東京都区部：非分布 全記録数 85 件 1937～2020 年)



○主な観察記録

1937. 10. 20	太子堂	1 羽	
1955. 04. 30	野毛	1 羽	六所神社森にて見る
1963. 05. 13	等々力溪谷公園	1 羽	囀る 滝の山
1974. 05. 01	馬事公苑	1 羽	
1995. 05. 06	砧公園	1 羽	
2003. 04. 25	岡本静嘉堂周辺	2 羽	
2004. 04. 22	瀬田4	1 羽	さえずり (4/24 にもさえずり)
2006. 09. 24	千歳台5	1 羽	
2007. 04. 28	駒沢オリンピック公園	1 羽	

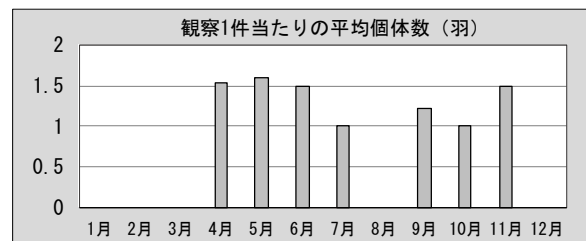
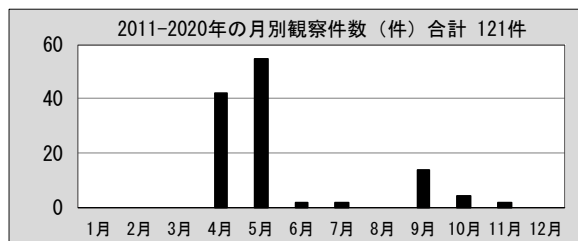
2008. 04. 28	砧公園	4 羽	いろいろな所で囀る
2010. 05. 02	蘆花恒春園	1 羽	
2012. 04. 24	多摩川(玉堤 1)	1 羽	アズマネザサの多い混交林から囀りの声
2014. 05. 02	桜上水 3	1 羽	自宅向かいの桜の巨木で囀っていた
2015. 10. 04	羽根木公園	1 羽	定例調査
2017. 05. 05	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	
2018. 04. 28	成城みつ池緑地	1 羽	
2020. 05. 02	砧公園	2 羽	囀りながら飛んでいく

480. センダイムシクイ *Phylloscopus coronatus* Eastern Crowned Leaf Warbler ムシクイ科

バイカル湖南東部、アムール川下流、中国東北部、ウスリー、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬はインドのアッサム地方、東南アジアに渡る。日本には夏鳥として渡来し、九州以北で繁殖するが、奄美諸島、琉球諸島では稀な旅鳥である。

主に低山帯の落葉広葉樹林に生息し、繁殖する。渡りの時期には平野部でも見られる。産卵期は5～6月、草の根元や崖のくぼみに球形の巣をつくる。1 巣卵数は4～6 個。繁殖期は常に林の中で生活し、さえずる場合でも茂みの中に限られ、目立つ場所に出てこない。樹上で採食することが多く地上で採食するのはまれである。枝から枝へ移動しながら、葉や枝についている昆虫を主食にする。さえずりは繁殖地だけでなく渡りの移動途中でもよくさえずる。「チョ チョ ビー」と聞こえる声でさえずる。

世田谷区では春は4月から5月、秋は9月から10月に観察されるが、春に多い。真冬に観察された例もある。ムシクイ科としては観察例がもっとも多く、1949年から現在までほぼ毎年観察されている。砧公園、蘆花恒春園、駒沢オリンピック公園、成城みつ池緑地など公園や緑地の他、河川や市街地など広い範囲で観察されている。(東京都区部：絶滅 全記録数 336 件 1949～2020 年)



○主な観察記録

1949. 04. 22	等々力溪谷公園	1 羽	谷沢山にて目撃
1952. 05. 02	野毛	3 羽	自宅付近で鳴く
1995. 04. 26	岡本静嘉堂周辺	1 羽	
2000. 05. 03	弦巻 4	1 羽	民家の大きな木のある庭で6日間さえずっていた
2002. 06. 07	八幡山 2	1 羽	6:40 道路沿いの庭の高い樹木の頂上で鳴いていた
2003. 04. 20	瀬田 4	1 羽	囀っている姿を観察
2004. 04. 23	桜上水 3	1 羽	自宅前のオオシマザクラでさえずり
2006. 05. 04	豪徳寺	1 羽	さえずり
2008. 05. 09	馬事公苑	1 羽	
2010. 02. 05	蘆花恒春園	1 羽	中庭 1/29 から滞在 頭央線を確認 木の間を飛び回り採餌
2011. 05. 04	駒沢オリンピック公園	7 羽	囀り
2013. 11. 05	多摩川(上野毛 2)	1 羽	堤近くのサクラで枝移りしながら採食
2014. 05. 02	岡本静嘉堂周辺	2 羽	
2016. 05. 08	羽根木公園	1 羽	囀る
2017. 05. 05	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	
2019. 04. 21	砧公園	4 羽	
2020. 04. 21	成城みつ池緑地	1 羽	

◆ メジロ科 ZOSTEROPIDAE

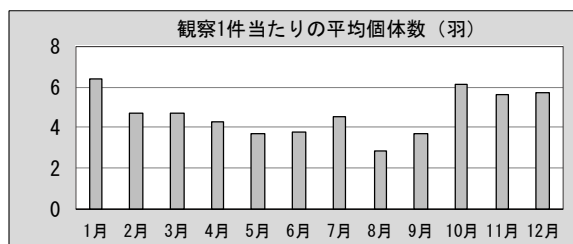
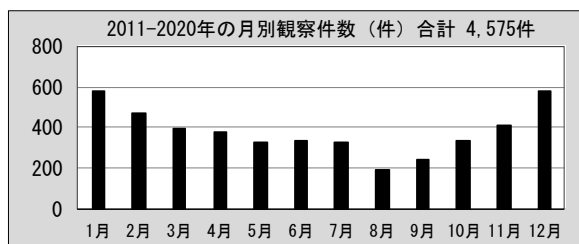
485. メジロ *Zosterops japonicus* Japanese White-eye

メジロ科

南サハリン、東アジア、インドシナ半島などで繁殖。日本では日本全国で見られ繁殖するが北海道では夏鳥、他の地域では留鳥である。屋久島、種子島、伊豆諸島、奄美諸島、沖縄諸島などの島嶼には別の亜種が繁殖している。

平地から山地までいろいろな林に生息するが、特によく繁った常緑広葉樹林に多い。本州中部以北で繁殖するものは、秋冬は暖地に移動し、市街地の公園や庭にも姿を見せる。樹上生活が主である。繁殖期は5～8月。年に1～3回、一夫一妻で繁殖する。巣づくりは雌雄とも行い、雑木林、広葉樹林内の灌木に碗型の巣をつくる。1巣卵数は4～5個。ヒナへの給餌は雌雄とも行う。枝から枝へ渡り歩き、昆虫、クモ、熟したカキノキやハゼノキの実などを食べるが、ウメ、サクラ、ツバキなどの花蜜も吸う。

世田谷区では繁殖期に見られることは稀であったが、2000年以降は年間を通して見られるようになり、繁殖も観察されるようになった。繁殖は公園、緑地および市街地の広範囲で見られるが河川での繁殖は少ない。営巣木は、マテバシイ、キンモクセイ、ネズミモチなどである。主な観察地は、砧公園、駒沢オリンピック公園、蘆花恒春園、次大夫堀公園、羽根木公園などの公園、および多摩川、仙川などである。そのほか市街地でも広い範囲で数多く観察されている。サンゴジュの赤く熟した実、ミズキの実などを食べたりサクラ、ウメ、ツバキなどの花蜜を吸うのが観察されている。(全記録数 8,417件 1945～2020年)



○主な繁殖記録

2000. 06. 06	奥沢 7	1 巣	雛が路上に落下、親鳥悲痛に鳴きつづける やがて雛は民家の庭へ
2001. 06. 10	次大夫堀公園	1 巣	巣立ち雛 1 羽が常緑樹の枝で鳴いていた
2003. 07. 10	弦巻 2	1 巣	雛 3 羽 街路樹に営巣 (7/28 に巣立ち)
2007. 06. 27	祖師谷 4	1 巣	雛の声 民家の木に巣があり成鳥が餌を運ぶ
2008. 05. 01	蘆花恒春園	1 巣	路上の巣立ち雛を清掃人が保護 カラスを追払い、カラスから見えない藪の中に置いた すぐに親鳥が給餌
2008. 06. 30	砧公園	1 巣	雛 4、成鳥 2 羽 巣をハシブトガラスに襲われたが、とっさに親が大きな声で鳴き、雛巣から脱出して助かる
2009. 07. 17	千歳台 5	1 巣	キンモクセイから親 1 羽出てくる 雛がしきりに鳴く声をする
2010. 07. 10	粕谷 1	1 巣	道路街路樹のマテバシイ内で営巣。雛 3 羽が大きな声で鳴く
2012. 06. 30	砧公園	1 巣	ヒナ 6 羽 (ネズミモチの巣) 親と一緒に木にとまり、親から給餌を受ける あまり飛ばない
2014. 06. 01	羽根木公園	3 巣	定例調査 3 組 7 羽の巣立ち雛
2016. 06. 19	駒沢オリンピック公園	1 巣	1 組巣立ち雛 3 羽
2019. 06. 11	多摩川(上野毛 2)	1 巣	巣立ち雛 6 羽 川岸斜面のトウネズミモチで親鳥から給餌をうける

○主な観察記録

1945. 10. 19	野毛	1 羽	鳴きながら自宅付近を通過
1970. 03. 13	瀬田	6 羽	
1986. 10. 08	馬事公苑	15 羽	
1999. 03. 16	多摩川	14 羽	松林付近に 14 羽の群れ
2004. 01. 23	松原 1	2 羽	ツバキの蜜を吸っていた
2006. 12. 06	野川	21 羽	定例調査
2008. 03. 25	等々力溪谷公園	5 羽	サクラの花の蜜を吸っている
2011. 02. 27	奥沢 6	4 羽	ウメ、ツバキに止まり蜜を吸う

2012. 10. 20	上北沢 2	10 羽	將軍池公園 ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、コゲラ、エナガの混群の中にいた
2013. 01. 07	仙川	28 羽	
2014. 12. 23	奥沢 6	1 羽	鉢植えのソシンロウバイの蜜を吸う
2015. 03. 12	祖師谷公園	3 羽	満開の梅で採餌
2016. 10. 05	砧公園	77 羽	58 羽の群が 1 本の木から次々に飛び立つ
2016. 12. 11	成城三丁目緑地	12 羽	ヒヨドリと共に盛んに柿の実を啄む
2018. 11. 27	喜多見 6	2 羽	水鉢で水浴び
2019. 07. 25	等々力 1	6 羽	内 5 羽はサンゴジュの赤い実を食べる
2020. 11. 29	蘆花恒春園	44 羽	6 羽と 10 羽と 12 羽の群れを含む

◆ センニュウ科 LOCUSTELLIDAE

487. シマセンニュウ *Locustella ochotensis* Middendorff's Grasshopper Warbler センニュウ科

オホーツク沿岸からカムチャツカ、サハリン、南千島、北海道で繁殖する。冬期はフィリピン、ボルネオ、スラウェシで越冬する。日本では、北海道で夏鳥として繁殖し、本州以南で旅鳥である。

平地の草原に生息するが、北海道では海岸の草原で繁殖する。繁殖期は6～8月。一夫一妻で繁殖する。イネ科の葉や茎を主材にして草原の地上や草本類の低い枝の上に巣をつくる。採食は、草から草へと移動しムカデ、ヤスデ、アブラムシ、カメムシ、バッタなどの昆虫を食べる。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数 1 件 2003 年)

○観察記録

2003. 09. 12	多摩川(野毛 2)	1 羽	河原のイヌタデなどが群生している湿地でヨモギに止まっていて時々チッチッと鳴く 飛来してきたハクセキレイに追われる

490. オオセツカ *Locustella pryeri* Japanese Marsh Warbler センニュウ科

中国東北部、東部で繁殖し日本の本州、ウスリーランド、韓国でも繁殖している。中国のものは冬は揚子江流域まで移動する。日本では、青森、秋田で夏鳥、茨城、千葉で留鳥、その他本州の岡山より東方、四国の一部では稀な旅鳥である。九州以南では見られない。

ヨシなどが密集する湿原に生息する。繁殖期は6～8月で、年1回一夫一妻で繁殖する。ヨシの中などの地上から10 cmあたりに鉢形、楕円形、球形の粗雑な巣をつくる。1 巣の卵数は5～6 個である。食性はヨシの枝を移動して昆虫を捕食する。繁殖期にはつがいごとになわばりをもって分散する。雄はなわばりの中の草むらから舞い上がり、空中で「チュルチュルチュル」とか「クチュクチュクチュ」とさえずりながら、半円形を描いて舞い降りるさえずり飛翔を行いなわばりを宣言する。

世田谷区では下記1例の記録がある。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数1 件 2018 年)

○観察記録

2018. 03. 26	多摩川(野毛 2)	1 羽	左岸脇細い流れのヨシ群生地で「ジュジュイ」や「ジュクジュク」と轉るような声が続き暫くしてヨシの茎に現れる 眉斑は不鮮明、背に黒斑、尾は長く先端が丸い

491. エゾセンニュウ *Locustella fasciolata* Gray's Grasshopper Warbler センニュウ科

南シベリア、中国東北部、ウスリー沿岸、朝鮮半島、サハリン、南千島、北海道で繁殖する。冬期はフィリピン、スラウェシ島、マルク諸島、ニューギニアで越冬する。日本では、北海道で夏鳥として渡来し繁殖する。本州以南では旅鳥である。

繁殖地では湿原の縁や川辺の背の高い草の茂みや低木林に生息する。藪の根元や低い木の枝に鉢型の巣をつくる。1 巣卵数は 3～5 個。草むらの中を歩きながら昆虫類を採食する。繁殖期には盛んにさえずり、移動途中でも「トッピンカケタカ」と聞こえる声で鳴く。

世田谷区では、下記 2 例の記録がある。(全記録数 2 件 2015 年、2017 年)

○観察記録

2015. 05. 11 多摩川(玉川 1) 1 羽 10:20 頃中州草地のヤナギから「トッピンカケタカ」と弱い声で約 1 分囀る
2017. 05. 08 多摩川(玉堤 1) 1 羽 川岸のヤナギから囀る声がつづく

◆ ヨシキリ科 ACROCEPHALIDAE

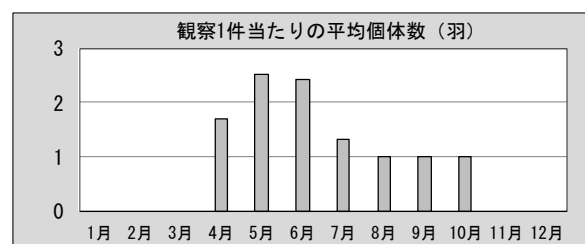
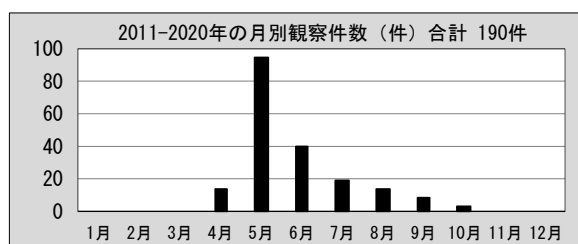
492. オオヨシキリ *Acrocephalus orientalis* Oriental Reed Warbler

ヨシキリ科

モンゴル東部、バイカル湖東、アムール川流域、中国東北部、ウスリーランド、朝鮮半島、日本、中国東部から南は福建省で繁殖する。冬はインドのアッサム地方、マレー半島、フィリピン、スマトラ、マルク諸島で過ごす。日本では北海道から九州まで夏鳥として各地で繁殖するが、奄美諸島、琉球諸島では旅鳥で、琉球諸島では一部は越冬する。

全国各地の水辺のヨシ原に生息し、海岸や河口などの平地の湿原や、山地の湖岸や川岸の湿地で普通に繁殖する。繁殖期は 5～8 月、年に 1～2 回繁殖するが、本州中部以北では 1 回が普通。一夫多妻で繁殖する。ヨシの茎にイネ科の葉や茎を使って碗型の巣を雌だけが作る。1 巣卵数は 4～6 個で、抱卵、抱雛は雌だけが行う。ヒナへの給餌は雄も加わるが雌より頻度は少ない。巣立ち後のヒナは 2 週間ほどなわばりの近くで養われる。繁殖シーズン末期には、雄は次々と繁殖場所から姿を消し、雌やヒナはそこに残される。採食は、茎から茎へと移動しながら昆虫を捕まえるが、フライングキャッチすることもある。ヒナの餌には鱗翅類の幼虫とクモ類が多い。

世田谷区では、4 月下旬から渡来し 9 月頃までには渡去する。古くは 1940 年 6 月の繁殖の記録がある。その後多摩川での繁殖が観察されていたが、2011 年以降は、かつて繁殖した場所でのさえずりは聞かれているものの繁殖の記録は 2018 年の 1 件だけである。観察件数も減少傾向にあり、特にここ数年の減少が目立つ。観察記録はほとんどが多摩川であるが、稀に野川や市街地で通過個体が確認されている。(東京都区部：絶滅危惧 IA 類 全記録数 1,424 件 1940～2020 年)



○主な繁殖記録

1940. 06. 00	上北沢	3 巣	繁殖
1958. 06. 16	多摩川	1 巣	5 卵 ヨシの地上 84 cm 外径 9.5 cm 深さ 6.9 cm (6/30 孵化せず)
1969. 06. 12	多摩川(玉堤)	3 巣	1 巣 4 卵、1 巣雛 4 羽、1 巣雛 3 羽 コジキッタナ
1998. 06. 23	多摩川(野毛 2)	1 巣	巣立ち雛 3 羽 右岸のヨシの中ほどに止まっている
2001. 07. 27	多摩川(鎌田 1)	1 巣	巣立ち雛 1 羽 ヨシ原を移動しながらジョッジョッと鳴き、親は遠くから飛んできて給餌
2003. 07. 10	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立ち雛 3 羽 中州でヨシに止まっているが、親鳥が来ると少し飛立ち移動する
2005. 06. 19	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立ち雛 2 羽 中州のヨシ原で親の後を追う
2007. 08. 22	多摩川(鎌田 2)	1 巣	巣内に雛死骸 1 羽
2009. 07. 07	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立ち雛 1 羽が中州の草地で成鳥から給餌を受ける
2010. 06. 30	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立ち雛 1 羽に成鳥 1 羽が給餌
2018. 06. 18	多摩川(玉川 1)	1 巣	親鳥がヨシ群落地のオオブタクサで羽を振るわせている巣立ち雛に給餌する

○主な観察記録

1948. 05. 05	多摩川	1羽	小杉にてさえずりを聞く
1953. 05. 05	等々力	5羽	鳴く
1994. 06. 03	多摩川	10羽	
1996. 05. 06	祖師谷公園	1羽	
1997. 06. 24	多摩川	29羽	年最多数
2000. 05. 21	桜新町2	1羽	7:30に空地でさえずり、5分で飛び去る
2001. 08. 25	砧公園	1羽	サンクチュアリのヨシの上を渡るように飛びまわっていた
2002. 05. 17	多摩川	21羽	
2008. 07. 31	砧公園	1羽	サンクチュアリ内のオギの中でさえずり
2009. 06. 10	多摩川	4羽	ツバメ増調査時ヨシ原で盛んに鳴く 日没後の19:20にも二声鳴く
2011. 06. 15	多摩川	9羽	定例調査 水道局用地で6羽観察された
2012. 05. 12	桜上水3	1羽	北沢川緑道で轉りを聞く 通過途上の立寄りと思われる
2013. 05. 12	多摩川(鎌田1)	2羽	オギの海内 1羽はさえずる 1羽は黙ってオギ原内下部を移動
2014. 05. 24	多摩川(鎌田1)	4羽	3羽が川岸で轉る
2015. 05. 25	多摩川	3羽	1羽が中州草地のヤナギで轉る
2016. 05. 16	多摩川(玉堤2)	1羽	ベンチ・元船着場間 轉り
2017. 08. 13	野川(成城4)	1羽	ヨシの中で虫を捕食
2018. 06. 13	多摩川	5羽	定例調査 ギョギョシ ギョギョシと聞こえる声で鳴く
2019. 06. 19	多摩川	2羽	定例調査 ギョシ、ギョシと鳴く
2020. 06. 01	多摩川(玉川1)	3羽	川原ヨシ群生地のヤナギで2羽が轉り、1羽が枯れ草を啜ってヨシの間に入る

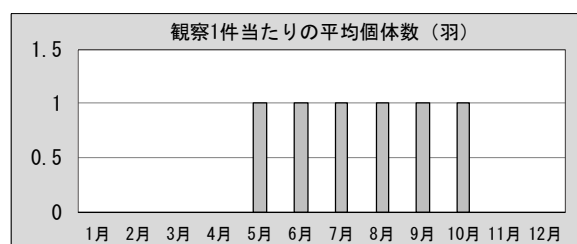
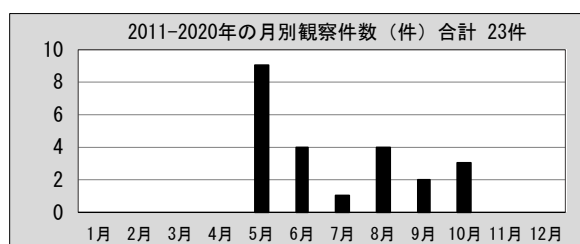
493. コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* Black-browed Reed Warbler

ヨシキリ科

モンゴル北東部とバイカル湖東から、東はアムール川下流域、中国北東部、ウスリーランド、サハリン、日本にかけて繁殖し、南は朝鮮半島、中国東部から揚子江下流域にかけて繁殖する。冬期はミャンマーからインドシナ半島、中国南東部で越冬する。日本では、北海道、本州、四国の一部、九州の一部で夏鳥として繁殖し、それ以外では旅鳥として通過する。

北海道では平地の草原で普通に繁殖するが、本州以南では主に標高の高い草原で繁殖し、少数は平地の草原にも生息する。生息地はオオヨシキリと同様各地の水辺のヨシ原であるが、ススキ、ヒメジオンなどが繁った乾いた草原が多い。またオオヨシキリと共存するところでは、オオヨシキリが樹木の上部からヨシまでを、コヨシキリがそれより下の地面までの空間を選択している。繁殖期は5月中旬から8月。ヨモギ、ヒメジオンなど丈の高くなる植物の茎にイネ科の枯葉を使って碗型の巣をつくり産座に羽毛を利用する。1巣卵数は4~6個。採食は茎から茎へと移動しながら昆虫類を捕食する。

世田谷区では、5月から10月にかけて移動途中に立ち寄るのが見られるが、観察例は少ない。1997以降では2007年を除いて毎年見られているが、観察件数は少なく、個体数も1件を除いてすべて1羽の記録である。多くは多摩川で観察され、野川、仙川、砧公園でも稀に見られている。(東京都区部：非分布 全記録数74件 1949~2020年)



○主な観察記録

1949. 05. 06	多摩川	1羽	さえずり
1966. 06. 11	多摩川(玉堤)	1羽	さえずり (6/12も見られた)
1997. 07. 07	多摩川(玉堤2)	1羽	川原の草地でオギに止まってさえずる
1999. 05. 17	多摩川(玉堤2)	1羽	川岸のヤナギに止まりさえずる

2002. 07. 13	多摩川(玉堤 1)	1 羽	川岸の倒れたオギでさえずる (7/15 まで2回見られた)
2004. 09. 10	多摩川(鎌田 1)	1 羽	ハリエンジュの横枝で羽づくろいや頭かきをする
2007. 07. 29	野川(成城 4)	2 羽	採食 (8/1 まで見られた)
2009. 04. 22	砧公園	1 羽	枝止まり
2011. 05. 15	仙川	1 羽	
2013. 08. 14	多摩川(鎌田 2)	1 羽	水道局管理地 オオブタクサやオギにとまる
2014. 10. 07	多摩川(多摩川 1)	1 羽	散策路下のヨシの間を出入り
2015. 05. 18	多摩川(上野毛 2)	1 羽	川岸のエノキ頂で囀る
2017. 06. 05	多摩川(玉川 1)	1 羽	ヨシ群生地のヨシ先で囀る
2020. 10. 06	野川(喜多見 7)	1 羽	ヨシの中を移動

◆ セツカ科 CISTICOLIDAE

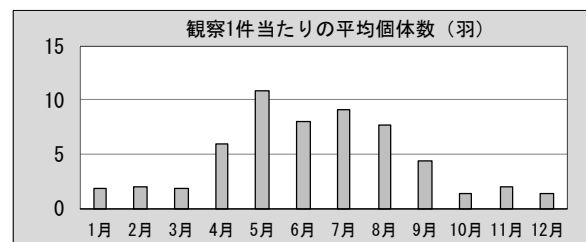
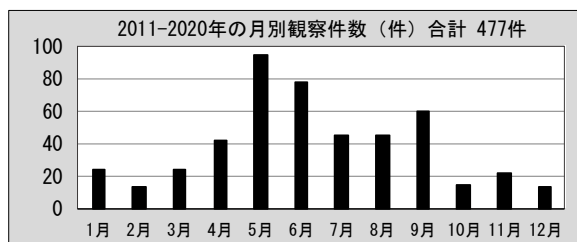
499. セツカ *Cisticola juncidis* Zitting Cisticola

セツカ科

ヨーロッパ南部と地中海沿岸から東はインド、さらに東南アジア、オーストラリア北部、北は中国揚子江流域、台湾、日本中・南部、またアフリカ、アラビアと広範囲に繁殖する。日本では北海道には生息せず、本州北部で夏鳥として繁殖し、本州中・南西部、四国、九州以南では留鳥として繁殖している。

平地から山地の草原、水田に生息し繁殖する。海岸や河口のやや湿った草原や河原の草原に多い。繁殖期は4月から9月中旬と長い。「ヒッヒッヒッ、チャッチャッチャッ」とさえずりながら縄張りを主張する。巣をイネ科の若葉とクモの糸でつくり雌を誘う。雌が気に入ると、交尾をして雌が巣の内装と産座を作り産卵する。交尾後雄はほかの雌のために別の求愛巣をつくり、次々と雌を獲得して一夫多妻となる。雌も繁殖の成功失敗にかかわらず繁殖後は別の雄とつがいとなる。繁殖回数は2~3回。1巣卵数は4~8個。抱卵、ヒナへの給餌は雌だけが行う。その年生まれの雌のヒナは巣立ち後約1か月で成熟し、繁殖に参加する。ヒナが小さいうちはクモ類や、鱗翅類の幼虫を、大きくなるとバッタなどの直翅類を給餌する。成鳥は、茎を移動しながら、昆虫やクモ類を食べる。

世田谷区では、年間を通して観察されているが、繁殖期の4~9月は他の月より多く観察されている。観察地は多摩川とその隣接地であり、野川で観察されているのはほとんどが多摩川と一体の合流地付近である。繁殖期の多摩川では、成鳥が虫をくわえて草むらに入ったり、フンをくわえて草むらから飛び出てくる姿や、高い草の上にいる巣立ち雛への給餌が観察されている。(東京都区部：絶滅危惧ⅠA類 全記録数 3,111件 1948~2020年)



○主な繁殖記録

1949. 05. 31	多摩川(野毛)	1 巣	雛5羽 地上48.5cm 赤岩
1960. 07. 19	多摩川(玉堤)	1 巣	5卵 コジキッタナ下流の島
1968. 06. 02	多摩川(野毛)	1 巣	6卵 谷沢川先にて発見 (6/3 親鳥雛に虫を食べさせていた 6/4 18:00 巣立ちした後であった)
1995. 06. 30	多摩川	1 巣	成鳥が餌をくわえて草地の同じ所へ入る
1999. 06. 11	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雛2羽が草原を移動し高い草に止まり鳴く 時々親から餌をもらう
2009. 06. 09	多摩川(玉堤 1)	1 巣	草地から糞を咥えて飛び出しヨモギに止まるがすぐ飛び立つ
2011. 05. 25	多摩川(野毛 2)	1 巣	1羽は散策路近くの草地にクモを咥えて入り、暫くして糞を咥えて飛び立つ
2015. 08. 18	多摩川(鎌田 2)	1 巣	成鳥1羽が草原のオオブタクサ先にいる巣立ち雛1羽に給餌する 近くに巣立ち雛1羽が羽根を震わせている
2018. 06. 12	多摩川(玉堤 1)	1 巣	親鳥がクモを咥えて川岸斜面草地の高草で羽を振るわせている巣立ち雛に給餌

2020. 07. 05 多摩川(玉堤 2) 1 巣 親鳥 1 羽が黒い虫を咥えて散策路脇から 1m 位の草原に入ると雛の声。親鳥がヨモギ茎に逆さになって巣の中の雛に給餌中

○主な観察記録

1948. 04. 04	多摩川(野毛)	1 羽	
1958. 06. 23	多摩川(喜多見)	1 羽	白いガを咥えている
1993. 06. 25	野川	1 羽	定例調査
2003. 06. 18	多摩川	33 羽	定例調査
2006. 06. 28	多摩川	23 羽	定例調査
2010. 05. 19	多摩川	44 羽	定例調査
2011. 09. 07	野川	2 羽	定例調査
2014. 05. 14	多摩川	29 羽	定例調査 野毛 1 の玉川排水樋管前で 1 羽が巣材を運んでいた オギの海周辺
2015. 05. 13	多摩川	30 羽	定例調査
2017. 05. 17	多摩川	49 羽	定例調査
2019. 05. 15	多摩川	39 羽	定例調査
2020. 09. 09	多摩川	12 羽	定例調査 「ヒッ ヒッ ヒッ ヒッ」と草地で鳴く

◆ レンジャク科 BOMBYCILLIDAE

500. キレンジャク *Bombycilla garrulus* Bohemian Waxwing

レンジャク科

スカンジナビアからオホーツク沿岸、カムチャツカに至るユーラシア大陸北部、南はアルタイ山脈、バイカル湖、さらに北アメリカ北部という広い範囲で繁殖する。冬はヨーロッパ全域、イラン、中国など暖かい地方に移動する。日本では北海道から九州まで冬鳥として越冬するものと旅鳥としてさらに南方へ行くものがある。奄美大島、琉球諸島では冬鳥で越冬する。

平野部の落葉広葉樹林や市街地の公園、農耕地などで生息する。冬は群れを成し、餌を求めて広く移動する。東日本に多く、西日本では少ない。ヒレンジャクと混群になることもある。渡来数は年によって大きく変化する。ナナカマド、ズミ、カキノキ、ヤドリギなどの実を食べる。つがいは冬の群れの中で形成され、木の実などを雌雄で相互に何度も受け渡す求愛給餌に似た行為をする。

世田谷区では、1 月から 4 月に観察される。ヒレンジャクより観察件数が少なく、全部で 12 件しかない。そのうち 1997 年の冬に見られたものが 6 件あり、個体数も多く 200 羽を超えるのが観察されている。住宅地、公園、多摩川で観察されている。ヤナギの新芽を採食する姿も観察されている。(全記録数 13 件 1986～2011 年 2011 年以降 2 件)

○観察記録

1986. 04. 02	岡本 2	15 羽	
1989. 02. 12	太子堂	40 羽	目青不動
1997. 02. 23	北鳥山 6	150 羽	(2/26 まで見られた)
1997. 02. 25	北沢 5	12 羽	
1997. 02. 27	太子堂 1	221 羽	(3/10 まで見られた)
1997. 03. 14	多摩川(玉堤 2)	6 羽	6 羽が川岸のシダレヤナギの新芽を食べる
1997. 03. 21	弦巻 4	15 羽	弦巻電話局付近のヤナギに休んでいた
1997. 03. 21	弦巻 3	22 羽	(3/26 まで見られた)
2003. 02. 15	岡本静嘉堂周辺	1 羽	
2009. 04. 22	砧公園	1 羽	サクラに止まるがすぐ飛んでいく
2011. 01. 24	多摩川(玉堤 1)	1 羽	中州上空を飛翔
2011. 01. 29	成城 4	5 羽	野川脇の公園で木止まり

501. ヒレンジャク *Bombycilla japonica* Japanese Waxwing

レンジャク科

極東の特産種で、シベリア南東部からアムール川下流域、中国東北部、ウスリーランド北部で繁殖する。冬は、中国東部から揚子江流域まで、中国東北部、朝鮮半島、サハリン、日本で越冬する。稀に中国福建

省、台湾でも越冬する。日本では、北海道で旅鳥、本州以南では冬鳥として越冬するものと旅鳥としてさらに南方へ行くものがある。奄美大島、琉球諸島では冬鳥で越冬する。

平野部の落葉広葉樹林や市街地の公園、農耕地などで生息する。冬は群れを成し、餌を求めて広く移動する。西日本に多く、東日本では少ない。キレンジャクと混群になることもある。渡来数は年によって大きく変化する。群れで採食し、トウネズミモチ、ヤドリギなどの実をよく食べる。

世田谷区では、1月から4月に見られる。多摩川、街の中の公園や緑地で群れが見られる。冬はトウネズミモチの実、春先はヤナギやサクラの新芽を採食しているのが観察されている。(全記録数 24 件 1942～2017 年 2011 年以降 7 件)

○主な観察記録

1942. 03. 19	駒沢	1 羽	
1967. 03. 25	岡本	1 羽	
1972. 05. 05	祖師谷	12 羽	(5/12 まで観察された)
1986. 04. 02	岡本静嘉堂周辺	15 羽	八幡神社裏ニセアカシアの高いところに止まっていた
1991. 04. 09	馬事公苑	20 羽	
1999. 03. 19	多摩川(玉堤 2)	3 羽	川岸の大きなヤナギで新芽を食べる
2000. 02. 15	奥沢 7	12 羽	(2/19 まで観察された)
2003. 02. 13	岡本静嘉堂周辺	5 羽	
2003. 02. 28	玉川 1	8 羽	ネコタマ
2003. 03. 24	多摩川(玉堤 2)	18 羽	18 羽が緑地の大きなヤナギの新芽を食べる
2006. 03. 15	多摩川	3 羽	定例調査
2007. 03. 11	砧公園	5 羽	
2009. 04. 13	桜上水 2	2 羽	密蔵院境内の保存木ケヤキに飛来し止まる
2010. 03. 03	多摩川(玉堤 2)	5 羽	散策路脇の大きなヤナギの新芽を食べる
2011. 01. 09	成城 4	8 羽	野川脇の公園で木止まり (1/11、3 羽がトウネズミモチの実を採食)
2011. 01. 31	多摩川(玉堤 2)	4 羽	4 羽が草地のトウネズミモチの実を採食
2013. 03. 10	砧公園	15 羽	サクラの新芽を採食・飛翔
2017. 03. 06	多摩川(玉堤 2)	3 羽	散策路脇のヤナギで新芽を食べる

◆ ミソサザイ科 TROGLODYTIDAE

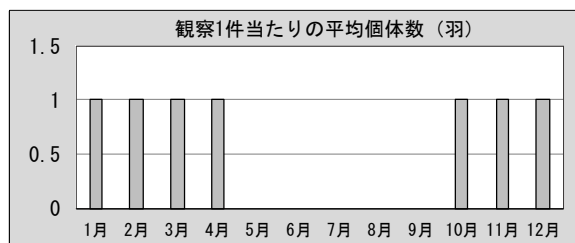
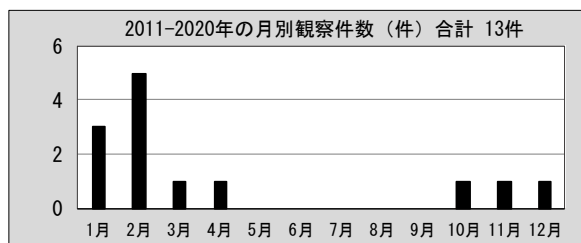
504. ミソサザイ *Troglodytes troglodytes* Eurasian Wren

ミソサザイ科

ヨーロッパおよびアフリカ北西部からユーラシア大陸を経てシベリア南東部、カムチャツカ、コマンダー諸島まで、南はヒマラヤ、中国北・西部、朝鮮半島、ウスリーランド、サハリン、南千島、日本、台湾、さらに北アメリカ北部で生息し繁殖している。日本では北海道から九州まで留鳥で繁殖しているが、琉球諸島では冬鳥であり繁殖はしていない。

低山帯から亜高山帯のよく繁った薄暗い樹林帯にすみ、コケ類が多い岩地、倒木の多い林、溪谷の急斜面、沢筋を好む。巣は倒木の下や根株の隙間など暗いくぼみにつくる。繁殖期は4～7月で、雄は強いなわばりをもち求愛用の巣をつくり、尾羽を跳ね上げ上下に振って、盛んにさえずって雌を呼ぶ。雌が巣を選択すると、雌が内装、産座を作り、産卵する。多くは一夫一妻で繁殖するが、産卵後に雄は別の求愛巣をつくり、別の雌を誘い、一夫多妻で繁殖することもある。林床でコケの上をはねながら移動したり、藪の中や樹木の根の中へもぐりこんで虫を採食する。冬は平地に移動し、暗い林の林床、大きな公園の小さい流れ、時には人家近くでも見られる。

世田谷区では、10月から翌年4月に少数が見られる。観察羽数はすべて1羽である。多摩川、野川、仙川などの河川のほか、砧公園、成城みつ池緑地などの水場で観察されている。(東京都区部：ランク外 全記録数 73 件 1938～2020 年)



○主な観察記録

1938. 11. 18	駒沢	1 羽	
1948. 12. 13	等々力	1 羽	15 : 00 時頃 3 鳴き聞く
1952. 04. 11	野毛	1 羽	自宅に来る 終認
1955. 01. 18	等々力溪谷公園	1 羽	午後 4 時頃 滝の山で見る
1964. 11. 24	岡本静嘉堂周辺	1 羽	岩崎邸にて目撃した
1989. 02. 19	太子堂	1 羽	(~2/20)
2000. 01. 24	多摩川(玉堤 1)	1 羽	アズマネザサの藪の川岸を鳴きながら移動
2005. 02. 28	仙川	1 羽	スイセンの株を出入りしながら地鳴き
2007. 03. 08	成城 4	1 羽	喜多見不動付近で囀りか警戒音
2009. 01. 19	砧公園	1 羽	川のそばで動く
2011. 11. 28	野川(成城 4)	1 羽	川辺を移動
2012. 01. 09	多摩川(玉堤 1)	1 羽	アズマネザサの藪でチョッちょつと鳴きながら川岸に降りてくる
2012. 02. 04	成城みつ池緑地	1 羽	
2015. 12. 15	仙川	1 羽	セキレイ橋下の中州にひさびさに入る
2017. 04. 09	等々力溪谷公園	1 羽	稚児大師像の前の土手で地鳴き
2019. 03. 10	成城三丁目緑地	1 羽	湧水の近く、枝から薄暗い藪の中に飛び降りるがすぐ姿見えなくなる
2019. 10. 17	祖師谷公園	1 羽	仙川の中州から下流へ飛び立った、今年 2 回目の出現
2020. 01. 30	祖師谷公園	1 羽	鞍橋上流の寄州で確認 枯草の中をすばしこく移動

◆ ムクドリ科 STURNIDAE

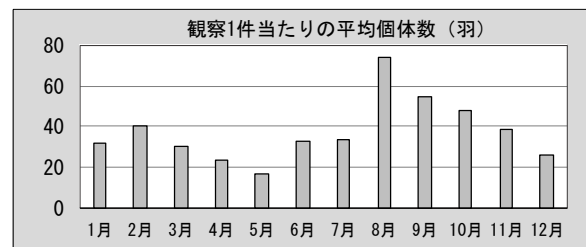
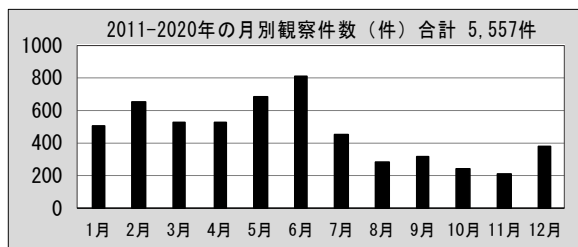
506. ムクドリ *Spodiopsar cineraceus* White-cheeked Starling

ムクドリ科

バイカル湖東南部、モンゴル東部、アムール川中流域、中国北部・東北部、朝鮮、サハリン、日本で繁殖する。日本では、北海道で夏鳥のほか全国で留鳥として繁殖する。奄美大島、琉球諸島では冬鳥であるが、沖縄で少数が繁殖している。

農耕地、公園、庭園、山麓の林、牧場、村落付近の林、果樹園、ゴルフ場などに生息する。樹木の洞や建物の屋根または間隙、石垣の間、巣箱、キツツキの古巣穴などで繁殖する。繁殖期は 3 月下旬から 7 月、年に 1~2 回繁殖する。1 巣卵数は 5~7 個。抱卵と子育ては雌雄共同で行い、巣立ち雛は親鳥とともに家族群で生活し、約 1 か月後には独立して夕方は成鳥と一緒に集団で夏ねぐらに入る。採食地は、農耕地、公園、果樹園、ゴルフ場など人の手が入っている環境が多い。雑食性で、動物食ではミミズ、両生類や昆虫を食べ、植物食では、農作物のコムギ、エンドウや果樹のモモ、リンゴ、カキノキなど多岐にわたる。秋から冬には突発的に出現し、短期間に消失する大集団のねぐらをつくる。

世田谷区では年間を通して普通に見られ、市街地で多く繁殖している。2005 年以降は毎年繁殖が観察されている。営巣場所は、古い記録では樹洞、神社などがあるが記録のほとんどが人家であり、使われていない雨戸の戸袋、屋根の隙間、換気口などが多い。身近な場所での採食の記録も多く、動物食では、イモムシ、ムカデ、カナブン、コガネムシの幼虫など。また植物食ではサクラ、ミズキ、ビワ、ヤマモモ、クワ、エノキ、カキノキ、ピラカンサ、アオギリ、センダン、ムクノキなどの実の採食が記録されている。生息状況は年間を通じて様ではなく、繁殖期は市街地で多く見られ、繁殖を終えたあとは秋の初めごろまでは多摩川など河川でも多く見られる。夏から翌年の春まで市街地の竹やぶなどで数千羽にもなる集団ねぐらを形成することがある。ねぐらに移動途中の、電線にびっしり隙間なく止まっている大集団も観察されている。(全記録数 12,185 件 1948~2020 年)



○主な繁殖記録

1957. 05. 21	中町	1 巣	巣立ち雛 1 羽
1963. 05. 19	野毛	1 巣	雛が孵化していた 六所神社
1963. 07. 13	中町	1 巣	巣立ち雛 3 羽 戸袋に営巣 (7/15 巣立ち)
1966. 04. 18	野毛	1 巣	6 卵 シイに営巣
2002. 09. 13	砧公園	1 巣	雛 2 羽 樹洞で営巣
2005. 06. 20	奥沢 7	1 巣	雛 3 羽 巣立ち、内 1 羽地上へ落下しまもなく親鳥が救出
2005. 06. 20	千歳台 4	1 巣	巣のある木が伐採され雛 2 羽が落下、拾って畑に置くと群れのいる竹林へ飛ぶ
2007. 04. 20	砧 8	1 巣	マンションの換気口に餌を運ぶ 雛の声
2009. 05. 14	南鳥山 5	1 巣	民家の雨戸の戸袋の穴で営巣 成鳥が餌を運んでいた
2012. 05. 30	千歳台 5	1 巣	巣立ち雛 6 羽 巣立ったところをハシブトガラスに襲われて内 1 羽が食べられてその後 2 日で計 3 羽食われる
2012. 06. 02	桜上水 4	1 巣	団地ダストシュート換気口、給餌を繰り返す 桜の実を盛んに食べさせていた
2015. 05. 15	千歳台 5	1 巣	民家 2 階の戸袋で営巣 3 羽 巣立ち親からのエサを 2 羽で取り合う
2018. 05. 14	多摩川(玉川 3)	1 巣	2 羽が交代で二子橋の配管繋ぎ隙間に餌を咥えて入ると中から雛の声
2020. 05. 20	粕谷 2	1 巣	小学校のグラウンド柱の土管の中を親が出入りする。雛の顔が見える

○主な集団ねぐら記録 (1,000 羽以上の主なねぐら入り記録 23 件を 6 月から月日順 移動途中は除く)

6 月	2009. 06. 25	千歳台 4	3,200 羽	埼玉。近所の畑で採餌後、東の希望が丘や東南の桜丘北や北西の鳥山方面から集まりサクラやケヤキ、ヤナギなど公園内の木に止まって眠る
7 月	2008. 07. 13	桜上水 3	1,000 羽	民家の竹藪へ次々にねぐら入り 1,000 羽を超えらると思われる
8 月	2006. 08. 01	千歳台 5	2,385 羽	ねぐら最多羽数 千歳台 4 から移動
	2007. 08. 05	等々力 8	1,000 羽	ねぐら
9 月	2018. 09. 28	桜上水 1	1,000 羽	UR 赤堤経堂団地のケヤキ並木と近くの 2 カ所の屋敷林の大ケヤキに合計約 1000 羽のムクドリがねぐら入り
10 月	2007. 10. 02	桜上水 1	1,200 羽	民家の竹林 17:15 ねぐら入り
	2004. 10. 09	上用賀 5	1,200 羽	電線に止まり、後近くの農家の庭の木に眠る
	2018. 10. 13	桜上水 1	1,000 羽	UR 赤堤経堂団地のケヤキ並木と近くの 2 カ所の屋敷林の大ケヤキに合計約 1000 羽のムクドリがねぐら入り
	2007. 10. 23	上用賀 6	1,500 羽	ねぐら
	2007. 10. 25	桜丘 4	4,000 羽	ねぐら 久成院、稲荷神社あたり その周辺ぐるっと電線にとまる あまりの多さで数えられず 一時的に集合か
	2007. 10. 31	千歳台 5	1,000 羽	ねぐら 北西方向にも 600 羽移動した
11 月	2005. 11. 07	桜 1	1,500 羽	勝光院 16:20 ごろ 200~300 羽飛行 10 分後埼玉(竹やぶ)入り 17 時ごろまで鳴き続ける
	1968. 11. 12	尾山台	1,000 羽	夕方尾山町のねぐらに飛来した。
	2006. 11. 18	桜 1	4,500 羽	16:00 頃より近くの電線に集結 16:30 一気に竹林にねぐら入り
	1966. 11. 19	尾山台	1,000 羽	モウソウ竹山に寝に飛来
	2005. 11. 23	桜 1	2,000 羽	勝光院 埼玉入り(竹林)
12 月	1963. 12. 01	大蔵	1,000 羽	夕方集団で止まる。(12/2 も見られた)
	1969. 12. 03	尾山台	1,000 羽	ねぐらに飛来
	2012. 12. 08	上祖師谷 4	1,000 羽	前日より広域の電線で確認→5 時前に集団埼玉入り
	1965. 12. 13	尾山台	1,000 羽	尾山町のモウソウ竹山にねぐら飛来した
	2000. 12. 22	弦巻 4	1,000 羽	竹林の周辺にすごい大群が、うるさくなり一帯が黒い帯びに、17 時頃に寝る
1 月	2014. 01. 27	桜丘 4	2,000 羽	ねぐら入り
2 月	2015. 02. 21	奥沢 4	2,000 羽	黒くて長い絨毯 2 枚がたなびくように上空を旋回しながら飛び、竹林に入り込み、埼玉をとる
	2013. 02. 24	上祖師谷 4	1,500 羽	埼玉
3 月	2008. 03. 04	桜丘 3	4,500 羽	電線に集まってからねぐら入り

○主な観察記録

1948. 03. 29	多摩川	2 羽	
1952. 10. 14	野毛	2,000 羽	一団となって上空を南西方より東北方に飛行
1991. 07. 14	馬事公苑	14 羽	
1999. 08. 16	多摩川(鎌田 1)	1,064 羽	約 800 羽、冠水したグラウンドのネットに付着したゴミに集まった虫を採餌
2002. 10. 12	桜上水 3	100 羽	八幡神社裏の電線に止まる
2003. 08. 30	次大夫堀公園	1 羽	アブラゼミを捕食
2004. 06. 17	多摩川(玉川 3)	1,010 羽	約 850 羽が緑地の草を機械で刈っているすぐ後ろに群がり採餌
2005. 05. 10	多摩川(玉堤 1)	57 羽	1 羽が堤のサクラから垂れ下がっている青虫をホバーリングして捕り去る
2010. 06. 23	多摩川(鎌田 1)	850 羽	芝生グラウンド 400、450 羽の 2 群が採餌(幼鳥も含む)
2010. 07. 02	蘆花恒春園	53 羽	ヤマモモの実に集まっていた
2012. 01. 31	野川(喜多見 5)	8 羽	亜種オオアカハラと一緒にピラカンサの実を採食
2012. 05. 07	馬事公苑	42 羽	サクラの実を食べに来た
2012. 06. 18	多摩川(玉川 3)	302 羽	内成鳥 1 羽がムカデを咥えてきて兵庫島公園通路で幼鳥 1 羽に与える
2013. 02. 14	仙川(上祖師谷 4)	5,000 羽	仙川宮下橋神明神社にムクドリが各方面より集結後一斉に飛び立ち、西方向に飛び去った その間 15 分ほど
2013. 12. 02	奥沢 6	6 羽	ムクノキの実を食べる(浄真寺別院)
2015. 08. 17	多摩川(野毛 2)	2,000 羽	刈ったばかりの芝地で採餌
2017. 05. 15	仙川	25 羽	ヤマグワ、サクランボの実に集まり始めた 1 羽がニホントカゲを捕食
2019. 10. 06	深沢 7	2,100 羽	深沢高校のグラウンド周辺のネットのワイヤー63本(柱間21、各3段)、周辺の電線6本に集合しぎっしり並んで盛んに鳴く
2020. 11. 11	玉堤 1	3 羽	民家のカキノキの実を啄ばんでいる

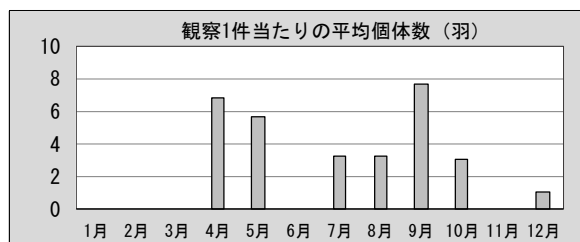
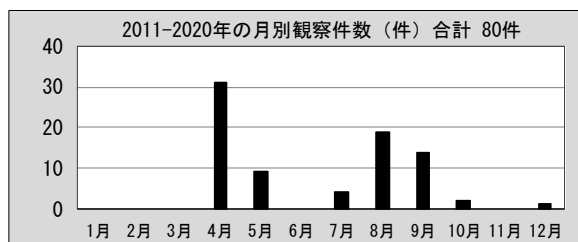
508. コムクドリ *Agropsar philippensis* Chestnut-cheeked Starling

ムクドリ科

サハリン南部、日本の北部で繁殖し、冬は琉球諸島南部、フィリピン、ボルネオで越冬する。日本では、北海道、本州北・中部で夏鳥として繁殖し、本州南西部でも稀に繁殖する。本州南西部以南では旅鳥であるが、琉球諸島では越冬もする。

北海道や東北地方では平地の落葉広葉樹の明るい林や村落近くに、本州中部では主に山地の村落及び市街地に生息し繁殖する。本州中部以南では、9～10月の渡去の時期には大群で通過するのが見られる。繁殖期は4月中旬から7月、年に1～2回一夫一妻で繁殖する。営巣は樹洞、建築物の屋根及び間隙、キツツキ類の古巣穴、巣箱などで行われる。繁殖行動は雌雄共同で行われ、巣づくりは主に雄が行い、抱卵は主に雌、ヒナへの給餌は両方が同じくらい行う。採食は、動物質ではクモ類と昆虫が主で、植物質ではサクラ、カキノキ、ブドウなどの果実をついばみエノキやムクノキの実なども食べる。ムクドリと異なり、地上ではなく樹冠部で餌を探し、枝から枝へ移動して採食することが多い。

世田谷区では、主に春は4月から5月、秋は8月から9月に見られる。ムクドリの群れに混じることが多く、滞在は短い。多摩川での観察記録が多く、野川、公園、市街地でも見られるが、少ない。多摩川では2000年以降毎年観察されている。(全記録件数 160 件 1949～2020 年)



○主な観察記録

1949. 04. 22	野毛	20 羽	
1986. 09. 11	岡本静嘉堂周辺	1 羽	ムクドリに混じって裏の電線に止まっていた
1994. 08. 25	多摩川	200 羽	
1996. 09. 17	多摩川(野毛 1)	1 羽	雌 緑地でムクドリ 7 羽と採餌

2000. 02. 02	成城 4	1 羽	庭木の枝に止まっていた
2002. 09. 10	多摩川	4 羽	野川の林でムクドリの群れの中にいた (9/13 にもいた)
2005. 09. 13	多摩川(玉川 3)	5 羽	雄 2、雌 3 羽がムクドリ約 60 羽と兵庫島公園の木々から中州の岸へ移動し水
2008. 05. 06	多摩川(玉川 3)	1 羽	兵庫島樹林 ムクドリ小群に交じっていた
2010. 05. 05	多摩川	36 羽	
2010. 09. 24	駒沢オリンピック公園	6 羽	雄 2 羽 雌 4 羽
2011. 08. 03	野川(喜多見 5)	16 羽	川の上の電線に止まっていた
2014. 10. 20	多摩川(野毛 1)	4 羽	川岸のエノキで実を採食
2018. 04. 23	多摩川(野毛 2)	28 羽	28 羽が川岸の早咲サクラ並木に群れ、6 羽が赤黒い実を食べる
2020. 09. 14	多摩川(玉堤 1)	16 羽	16 羽が散策路脇のオニグルミの葉に群れて毛虫を捕る

511. ホシムクドリ *Sturnus vulgaris* Common Starling

ムクドリ科

ヨーロッパから東はユーラシア大陸を経てバイカル湖、アルタイ山脈、モンゴル西部、ヒマラヤ西部など広い範囲に生息し繁殖する。人間によって北アメリカ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ポリネシアに持ち込まれ生息域を拡大した。日本では日本海側の島嶼で旅鳥のほか、不定期または迷鳥として全国各地で観察されているが、繁殖記録はない。

10 月から翌年 3 月頃に観察されることが多く、ムクドリの群れの中に単独または数羽で混じっていることが多い。地上で採食することが多く、くちばしを地面に差し込むようにして昆虫や種子を食べる。小・中群で移動しながら採食する。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(全記録件数 1 件 2012 年)

○観察記録

2012. 10. 25	多摩川(玉川 3)	1 羽	木の梢近くにムクドリ 3 羽とともに飛来して 2 分くらいいてまたムクドリ 3 羽と一緒に飛び去った

◆ ヒタキ科 MUSCICAPIDAE

513. マミジロ *Zoothera sibirica* Siberian Thrush

ヒタキ科

中国北東部からロシア極東南部、サハリンにかけて繁殖し、冬期は中国南部や東南アジアに渡る。日本には夏鳥として渡来し、北海道や本州中部以北の山地で繁殖する。そのほかの地域では旅鳥である。

平地から山地のよく繁った広葉樹林、混交林、亜高山帯のシラビソ、トウヒ、コメツガなどの針葉樹林に生息する。渡りの時期は市街地の林や公園で観察されることがある。雌は雄に遅れて渡来し縄張りをもつ雄とつがいになる。繁殖期は 5～7 月、雑木林などに営巣し、1 巣卵数は 3～4 個。雄は営巣地で早朝から、「キョロツリーツ」と聞こえる声でさえずる。落ち葉をかき分けて餌を探し、ミミズ、昆虫、ミヤマザクラの実などを食べる。

世田谷区では、下記 1 例の記録がある。(東京都区部：非分布 全記録件数 1 件 1976 年)

○観察記録

1976. 05. 24	馬事公苑	1 羽	鳴き声

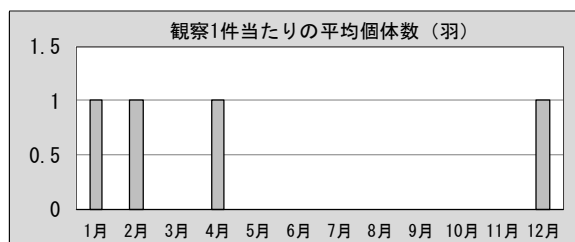
514. トラツグミ *Zoothera dauma* Scaly Thrush

ヒタキ科

ユーラシア大陸東部、ヒマラヤ、インド、東南アジア、オーストラリアで繁殖し、北方のものは冬に中国南部や東南アジアに渡る。日本では北海道で夏鳥、本州以南では留鳥、琉球諸島では冬鳥である。冬は北方や高地のものは暖地へ移動する。日本固有の亜種オオトラツグミが奄美大島、加計呂間島に生息する。

丘陵から低山の薄暗い林で繁殖する。繁殖期は4～8月で、木の枝の上にコケ類や枯れ枝で碗形の巣をつくる。1 巣卵数は3～5 個。冬は市街地の林や公園に飛来することもある。曇天の日や夜間、薄暗い林で、口笛を吹くように「ヒョーヒョー」と聞こえる声で鳴く。林の中で、ミミズ、ゴミムシ、カメムシ、ガの幼虫、ムカデのほかノブドウ、ヒサカキなどの実も食べる。

世田谷区では、10 月頃から翌年の4 月頃まで散発的に見られる。砧公園、蘆花恒春園などの公園や、寺社、住宅地の樹木の多い暗めの場所で、歩いたり、木に止まっている姿が観察されている。冬にさえずりが聞かれた例や、窓ガラスに衝突したのが観察されている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 66 件 1947～2020 年)



○主な観察記録

1947. 02. 28	野毛	1 羽	畑に来る
1955. 01. 04	等々力溪谷公園	1 羽	鉄橋下流の崖が崩れ、落葉が多く溜まっている所 滝の山
1976. 10. 01	馬事公苑	1 羽	(翌年5 月まで継続して観察された)
1996. 02. 25	瀬田 4	1 羽	午前6 時頃に囀りが3～4 日続く 藪の中で動く 国分寺崖線
2001. 03. 28	大蔵 3	1 羽	古い死骸(大蔵3 丁目崖線の中の車道横の方面)
2004. 11. 09	豪徳寺	1 羽	
2007. 02. 21	大原 2	1 羽	和田堀給水場の代田橋駐輪場隣の緑地で採餌
2008. 02. 09	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	窓ガラスに衝突死
2008. 04. 12	成城 4	1 羽	鳴き声
2009. 03. 17	砧公園	1 羽	地面を歩く
2010. 01. 08	蘆花恒春園	1 羽	中庭の笹藪から近くの中木の下枝に止まる
2010. 01. 17	砧公園	1 羽	採食
2010. 12. 09	北烏山 9	1 羽	市民緑地の隣の民家のガラス戸にぶつかり地面に落ちたが、しばらくして姿が見えなくなった
2011. 02. 08	駒沢オリンピック公園	1 羽	
2015. 12. 28	砧公園	1 羽	サンクチュアリ池の縁
2016. 12. 12	多摩川(玉堤 1)	1 羽	河畔林細道入口
2017. 12. 16	成城三丁目緑地	1 羽	暗い藪の中から飛び上がり暫く竹の根元に居る
2020. 12. 19	成城みつ池緑地	1 羽	

518. クロツグミ *Turdus cardis* Japanese Thrush

ヒタキ科

日本、中国中部の揚子江流域で繁殖し、中国南部からインドシナ北部で越冬する。日本では、夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来し、繁殖する。

夏は本州の標高 1000m 以下の山地の林などで繁殖し、生息する。渡りの時は、平地にも現われ、公園や市街地でも見られることがある。繁殖期は5～7 月、年に1～2 回繁殖する。1 巣卵数は3～5 個。ミミズやゴミムシなどの昆虫を食べる。植物ではヤマザクラ、ノブドウ、ヒサカキなどの実なども食べる。

世田谷区では、春は3 月から5 月、秋は10 月に立ち寄る。砧公園、馬事公苑、蘆花恒春園、駒沢オリンピック公園などで観察され、千歳台や成城など住宅地で見られた例もある。春はさえずりが聞かれ、木の枝に止まったり、薄暗い林や笹藪を移動しているのが観察されている。2009 年4 月には、1 週間に5 カ所で観察されている。(東京都区部：非分布 全記録数 23 件 1955～2019 年 2011 年以降 5 件)

○主な観察記録

1955. 10. 01	代田 1	1 羽	
1972. 10. 01	馬事公苑	1 羽	
2006. 05. 01	蘆花恒春園	1 羽	雌 カラスに追われ逃げ回る
2007. 04. 24	等々力溪谷公園	1 羽	
2009. 03. 25	千歳台 5	1 羽	雌 農家の植木の下や藪を鳴きながら移動する
2009. 04. 16	蘆花恒春園	1 羽	さえずっていた
2009. 04. 18	成城 4	1 羽	世田谷まちづくりのビジターセンター駐車場 成城みつ池緑地方面の崖線で 囀る
2009. 04. 22	砧公園	1 羽	雌 木に止まる
2009. 04. 22	成城みつ池緑地	1 羽	
2010. 05. 02	蘆花恒春園	1 羽	雌
2011. 10. 07	駒沢オリンピック公園	1 羽	雄
2013. 04. 16	蘆花恒春園	1 羽	中庭の高木で囀っていた
2013. 04. 20	駒沢オリンピック公園	1 羽	雌 混交林の林床で採食
2017. 04. 25	砧公園	1 羽	雌
2019. 04. 21	砧公園	1 羽	雌

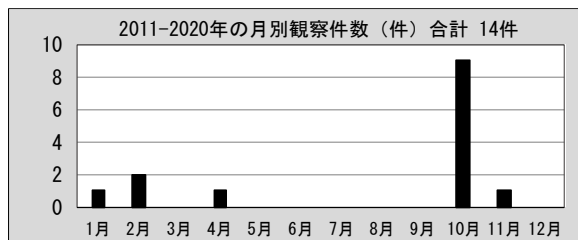
520. マミチャジナイ *Turdus obscurus* Eyebrowed Thrush

ヒタキ科

シベリア中・東部、アムール川流域で繁殖し、台湾、東南アジアで越冬する。日本では、旅鳥として北海道に渡来するが、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、琉球諸島では冬鳥である。

下草の少ない地上や林縁を歩き、主に昆虫を捕る。ヤマザクラ、ノイバラ、ミズキなどの実も食べる。

世田谷区では、10 月から翌年 4 月ごろに見られる。砧公園、等々力溪谷公園、駒沢オリンピック公園、蘆花恒春園などの公園で観察されている。10 月ごろに観察件数が多い。多摩川では、兵庫島斜面でムクノキの実を採食しているのが観察されている。(全記録数 54 件 1953～2019 年)



○主な観察記録

1953. 10. 15	野毛	2 羽	自宅で見る
1962. 10. 20	等々力溪谷公園	8 羽	滝の山
1971. 10. 16	馬事公苑	10 羽	
1991. 10. 09	駒沢オリンピック公園	2 羽	
2003. 04. 20	砧公園	1 羽	雌 木に止まる
2006. 04. 26	等々力溪谷公園	3 羽	
2008. 02. 09	砧公園	1 羽	木止まり(写真で確認済み)
2009. 04. 23	蘆花恒春園	1 羽	雌 眉斑と顎線が明瞭 胸から腹は白。
2010. 11. 01	駒沢オリンピック公園	1 羽	
2012. 10. 15	多摩川(玉川3)	2 羽	兵庫島斜面のムクの実を採食
2014. 02. 12	砧公園	1 羽	三の橋西側の疎林帯の地面を歩く
2014. 10. 11	羽根木公園	1 羽	定例調査
2014. 11. 17	砧公園	1 羽	三の橋・四の橋間の谷戸川 その付近の樹木間
2016. 10. 13	成城みつ池緑地	1 羽	「ツィー ツィー」と鳴く声
2017. 04. 28	等々力溪谷公園	1 羽	
2019. 01. 04	砧公園	1 羽	二の橋西側金網付近で採餌

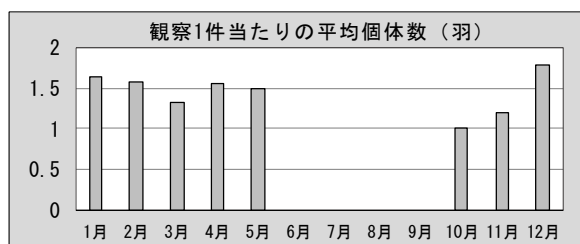
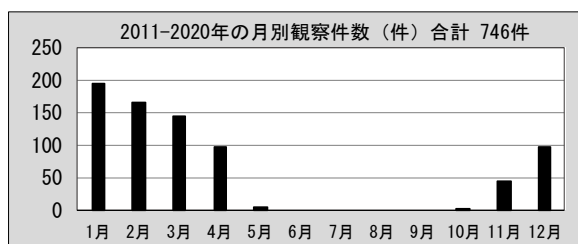
521. シロハラ *Turdus pallidus* Pale Thrush

ヒタキ科

シベリアのウスリー、アムール川下流域で繁殖し、朝鮮半島、台湾、中国南部で越冬する。日本には冬鳥として全国に渡来するが、積雪の少ない地方で越冬し、本州中部以南で多い。1991、1993、1994年に広島県で繁殖した例がある。

冬は高山から平地の林や市街地、樹木の多い公園で観察される。地上で落ち葉をひっくり返し、ミミズ、ゴムシ、ガの幼虫などを採食し、ノイバラ、ナナカマド、エノキなどの木の実やカエデ、クロマツの種子も食べる。

世田谷区では、10月から11月頃渡来し、翌年の4月から5月頃に渡去する。砧公園、岡本静嘉堂、馬事公苑をはじめ公園緑地、河川、住宅地など区内の広い範囲で見られている。草木の実を採食したり、落ち葉をひっくり返して食べ物を探しているのが観察されている。また、3月、4月にはさえずりが聞かれている。(全記録数 1310 件 1952～2020 年)



○主な観察記録

1952. 10. 24	野毛	3羽	
1971. 10. 01	馬事公苑	1羽	
2002. 02. 18	豪徳寺	1羽	(1月から本日まで5回観察)
2005. 02. 07	砧公園	25羽	
2006. 12. 19	蘆花恒春園	1羽	トウカエデに止まっていた
2007. 12. 25	馬事公苑	3羽	
2009. 01. 27	桜丘すみれば自然庭園	1羽	ツグミを追いかける
2010. 01. 12	高源院	1羽	
2010. 12. 27	等々力溪谷公園	1羽	サクラから繁みに入り込む
2011. 04. 26	次大夫堀公園	1羽	
2012. 02. 27	駒沢オリンピック公園	2羽	
2012. 12. 08	岡本静嘉堂周辺	17羽	
2013. 03. 03	羽根木公園	1羽	定例調査 野球場東側の植込み下
2014. 12. 30	砧公園	2羽	池で水飲み
2015. 12. 15	成城三丁目緑地	3羽	2羽が水場近く、1羽高い梢
2016. 03. 04	祖師谷公園	2羽	枯葉をはじいて採餌
2017. 04. 09	等々力溪谷公園	1羽	囀る
2018. 01. 07	祖師谷5	1羽	釣鐘池公園 ヒサカキの枝に止まりヒサカキの熟れた黒い実を盛んに採
2019. 04. 09	世田谷城址公園	1羽	地面をつついて餌をさがしていた
2020. 01. 13	砧公園	1羽	ツグミに飛び掛かりながら争い

522. アカハラ *Turdus chrysolaus* Brown-headed Thrush

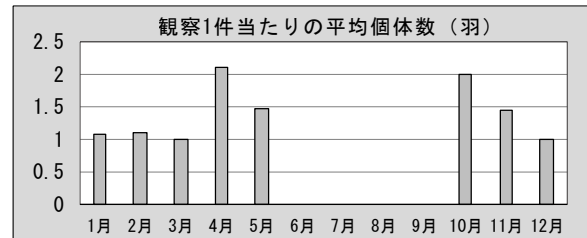
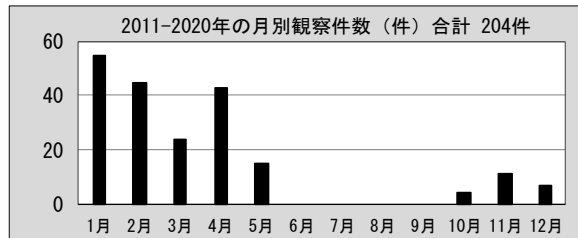
ヒタキ科

サハリン、南千島で繁殖し、台湾、中国南部、フィリピンで越冬する。日本では北海道と本州で夏鳥として繁殖する。本州、四国、九州、琉球諸島で越冬する。亜種オオアカハラは神奈川、静岡、愛知に稀に渡来する。

夏は、北海道や本州の山地に生息し、特にカラマツ、ブナ、シラカバなどの林や針葉樹林を好む。冬は山地や北地のものは南下し、関東以南の平地や丘陵で越冬する。明るい林を好み、公園の林や民家の庭や竹林にも生息する。繁殖期は5～7月で、雑木林、落葉広葉樹林などに営巣する。1巣卵数は3～4個。地

上で木の葉を引っくり返して、ミミズやコガネムシ類、毛虫など動物食の他に、ミズキ、ムクノキ、ナナカマドなどの木の実も食べる。春には「キョロン キョロン ツリー」と聞こえる声でさえずる。

世田谷区には、10月頃飛来し、翌年の4月から5月頃渡去する。砧公園、馬事公苑、岡本静嘉堂周辺などのほか、羽根木、瀬田、桜上水、深沢、豪徳寺、大蔵、千歳台などの公園、緑地、住宅地などでも見られている。春にはさえずりが聞かれる。野川ではピラカンサの実を採食しているのが観察されている。亜種オオアカハラも観察されている。(全記録数 867 件 1945～2020 年)



○主な観察記録

1945. 10. 13	野毛	1羽	
1952. 04. 01	野毛	8羽	自宅付近に来る
1970. 05. 06	等々力溪谷公園	1羽	滝の山
1986. 10. 01	馬事公苑	10羽	
1992. 01. 18	深沢 8	3羽	
1996. 05. 07	豪徳寺	1羽	雄 境内
2003. 04. 29	砧公園	6羽	亜種オオアカハラを含む
2004. 01. 18	羽根木 2	1羽	玄関先の庇の上を移動 早朝の小雪で迷い込んだものと思われる
2008. 11. 28	瀬田 5	1羽	フラワーランド管理棟 2 階の窓ガラスに激突、落鳥 全長 23cm 体重 76g
2010. 04. 25	桜上水 3	1羽	向かいのオオシマザクラの梢で高らかに囀る
2011. 01. 21	蘆花恒春園	1羽	蘆花恒春園の中庭。竹藪にいた
2012. 01. 24	野川(喜多見 7)	1羽	亜種オオアカハラ、ピラカンサの実を採食
2013. 03. 01	仙川	1羽	みどり橋上流 佼成学園横の中州で採餌
2014. 01. 23	野川(喜多見 9)	2羽	亜種オオアカハラ 生垣の中で採餌。1羽は羽を痛めている
2015. 05. 14	南鳥山 2	1羽	世田谷文学館横の樹林で囀っていた
2016. 01. 31	多摩川(鎌田 1)	1羽	オギの海 散策路側の樹木
2017. 03. 27	奥沢 6	1羽	民家の庭で落ち葉を引っくり返し採食中
2018. 04. 22	砧公園	29羽	9羽1群と17羽1群(亜種オオアカハラ1羽含む)と他3羽
2020. 03. 05	成城三丁目緑地	1羽	藪の近くの暗がりです落ち葉を舞い上げながら採食

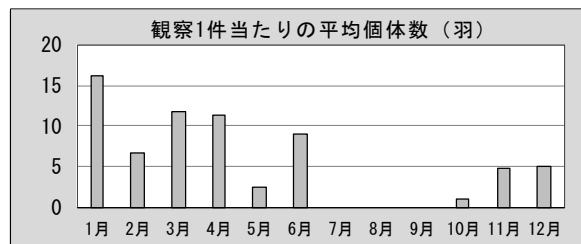
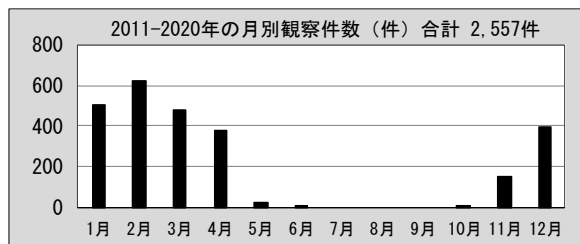
525. ツグミ *Turdus naumanni* Naumann's Thrush

ヒタキ科

シベリア中・東部で繁殖し、中国南東部、韓国、台湾、ミャンマーで越冬する。日本へは、冬鳥として北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島などに渡来する。亜種ハチジョウツグミは北海道を通過し、冬鳥として全国に渡来する。

平地から山地の林、農耕地、河川敷、干潟など様々な環境に生息し、明るく見通しの良い林や河原など開けた場所を好む。地上では、数歩進んで立ち止まる行動を繰り返しながら、ミミズ、昆虫類、ムカデなどを捕食する。樹上では、木の実を採食する。

世田谷区へは11月頃渡来し、翌年の4月頃渡去する。多摩川、砧公園、野川、仙川などで多く見られ、その他公園、寺社、畑地、民家周辺など区内全域で広く観察される。河川敷や草地グラウンドでミミズ、ムカデ、トウネズミモチ、ピラカンサ、エノキ、カキノキの実などを採食しているのが見られている。1月上旬に、200羽が群がってトウネズミモチの実を採食するのが見られた。渡去の頃には、多摩川河川敷で100羽を超える群になる。亜種ハチジョウツグミが多摩川、野川、砧公園で観察されている。(全記録数 6,305 件 1947～2020 年)



○主な観察記録

1947. 03. 14	野毛	1 羽	自宅で見撃する
1959. 03. 01	等々力溪谷公園	26 羽	南方より飛来し、谷沢山大ケヤキに止まる
2003. 01. 28	多摩川	129 羽	
2006. 04. 19	多摩川	284 羽	定例調査
2007. 01. 06	桜上水 3	12 羽	雨で無人の日大グラウンドの芝生に降りて採餌
2011. 01. 11	多摩川(野毛 2)	1,754 羽	約 200 羽が草地のトウネズミモチの実を採食し、60 羽が川岸で水飲み
2011. 04. 18	多摩川(鎌田 1)	150 羽	104 羽が芝生グラウンドで採食
2013. 02. 13	野川	40 羽	定例調査
2014. 03. 03	多摩川(玉堤 1)	128 羽	内 1 羽は亜種ハチジョウツグミ 第 1 回冬羽と思われる 体下面に赤褐色と黒褐色の斑 散策路脇のヤマグワで羽づくろい
2014. 03. 15	砧公園	1 羽	亜種ハチジョウツグミ
2014. 04. 14	多摩川(玉堤 1)	145 羽	1 羽が草地でムカデ、1 羽が草地でミミズを採食
2014. 12. 04	岡本静嘉堂周辺	71 羽	エノキの実に集まる
2015. 04. 04	祖師谷公園	11 羽	単独又はムクドリ群れに入って草原 4 カ所で採餌
2016. 04. 18	多摩川(玉川 3)	139 羽	1 羽が兵庫島ムクの木の上で囀る
2017. 01. 18	多摩川	82 羽	定例調査
2020. 12. 02	仙川	8 羽	稲荷山橋下流の早瀬に降りて水浴をしていた

530. コマドリ *Luscinia akahige* Japanese Robin

ヒタキ科

サハリンや南千島、日本で繁殖し、中国南部で越冬する。日本では、北海道、本州、四国、九州、夏鳥として渡来し繁殖する。屋久島、種子島、伊豆諸島のものは亜種タネコマドリである。

亜高山のササのある針葉樹林や山地の落葉針葉混交樹林で繁殖し、渡りの時期には低山や低地の公園などにも現われる。山地の奥の急斜面や苔むした巨岩が折り重なるところや、巨木の根があらわとなり根の間に窪地があるようなところを好み、椀形の巣をつくる。繁殖期は6～8月、1巣卵数は4～5個で雌だけが抱卵する。昆虫類、クモ類、ミミズなどを採食し、スイカズラ、サンザシなどの小さい果実も食べる。見通しの良い所で、尾を高々と立てて、「ヒン カララー」と聞こえる声でさえずる。

世田谷区には、春は4月中旬から5月に、秋は10月に少数が観察されている。砧公園、駒沢オリンピック公園、成城みつ池緑地、多摩川で見られ、春はさえずりが聞かれる。2015年と2019年の4月には多摩川でさえずりが聞かれている。2010年には砧公園で20日間ほど、観察された。(東京都区部：非分布 全記録数 22件 1995～2019年 2011年以降7件)

○主な観察記録

1995. 04. 29	砧公園	1 羽	(5/6 まで観察された)
2004. 04. 30	砧公園	1 羽	
2008. 04. 28	砧公園	1 羽	ササ藪から急に出てくる。その後囀り
2009. 04. 18	成城みつ池緑地	1 羽	さえずり (成城4丁目の住宅地から4/22 まで観察)
2010. 05. 01	大蔵 2	1 羽	雄 円光院でさえずっているのを観察
2010. 10. 03	砧公園	1 羽	水場に出てきた (10/23 まで観察)
2010. 10. 08	駒沢オリンピック公園	1 羽	雄
2013. 04. 26	粕谷	1 羽	さえずり
2015. 04. 21	瀬田 4	1 羽	さえずり 当地初認
2015. 04. 27	多摩川(玉川 3)	1 羽	河畔林内から囀り

2016. 04. 27 砧公園 1羽 さえずり
 2019. 04. 15 多摩川(玉堤 1) 1羽 河畔林内から2度さえずる声

533. ノゴマ *Luscinia calliope* Siberian Rubythroat

ヒタキ科

シベリアから千島やサハリン、中国北東部、日本で繁殖し、冬はインド、東南アジア、中国南部に渡る。日本では北海道で夏鳥として繁殖する。

北海道では低地から高山の草原やハイマツ帯まで広く生息し、巣は地上の草株や藪の根元の脇などで、ドームのある球状の形につくる。1 巣卵数は3～5 個。渡り期には、低地から亜高山の林縁、疎林の灌木密生地などに現れ、春の渡り途上では、しばしばさえずる。地上で昆虫やミミズなどに飛びついて採食し、小果実も食べる。

世田谷区では、10 月から11 月に見られた下記7 件の記録がある。(全記録数 7 件 1957～2018 年 2011 年以降 1 件)

○観察記録

1957. 10. 05	上北沢	1羽	雌
1977. 10. 17	桜	1羽	雄
1990. 10. 14	奥沢 7	1羽	雄 植込みの中、1 時間ほどで姿を消す
2001. 10. 19	多摩川(玉堤 1)	1羽	雄 緑地の花畑の柵にとまっている
2007. 10. 00	砧公園	1羽	
2010. 11. 08	多摩川(玉堤 1)	1羽	雄 草地の花畑の杭にとまっていたが、川崎方面へ飛び立つ
2018. 10. 09	多摩川(玉堤 1)	1羽	成鳥雄が植え込みから飛び立つ

534. コルリ *Luscinia cyane* Siberian Blue Robin

ヒタキ科

シベリア南東部からサハリン、朝鮮半島、日本で繁殖し、インド北東部から東南アジアで越冬する。日本では、夏鳥として北海道から本州、四国に渡来し、繁殖する。九州以南では旅鳥である。

笹藪のある低山から亜高山の落葉広葉樹林で、5～7 月に草木の根元、倒木の下に巣をつくり繁殖する。1 巣卵数は3～5 個。暗い密林や藪を好み、下藪の中を潜行することが多いので、姿を見せることは少ない。主に昆虫やクモ類を採食し、ヒナには蝶類の幼虫、アリ、アブ、クモ、ミミズなどを与える。渡りの途中は低山市街地でもまれにさえずることがある。さえずりは、「ツツツ・・・」と聞こえる声の前奏のあと、コマドリに似て、「ヒンカララララ」と聞こえる声で鳴く。

世田谷区では、春は4 月から5 月、秋は8 月から9 月に立ち寄る。春に観察例が多い。砧公園、駒沢オリンピック公園や深沢、千歳台などの住宅地で観察される。さえずりも聞かれている。(東京都区部：非分布全記録数 15 件 1949～2017 年 2011 年以降 6 件)

○主な観察記録

1949. 04. 26	等々力溪谷公園	1羽	不動公園
1963. 05. 01	北鳥山	1羽	墓地
1995. 05. 06	砧公園	1羽	
2000. 08. 04	深沢	1羽	成鳥雄
2003. 04. 27	砧公園	1羽	
2006. 04. 23	千歳台 5	1羽	竹藪で囀る (4/26 まで)
2008. 09. 11	駒沢オリンピック公園	1羽	
2011. 05. 11	瀬田 4	1羽	国分寺崖線内 雨の中囀り
2013. 04. 28	砧公園	1羽	雄 藪の古木の根本でじっとしている
2014. 04. 28	砧公園	1羽	地面を移動 (5/1 にも観察)
2017. 04. 29	砧公園	1羽	谷戸川に一時出た

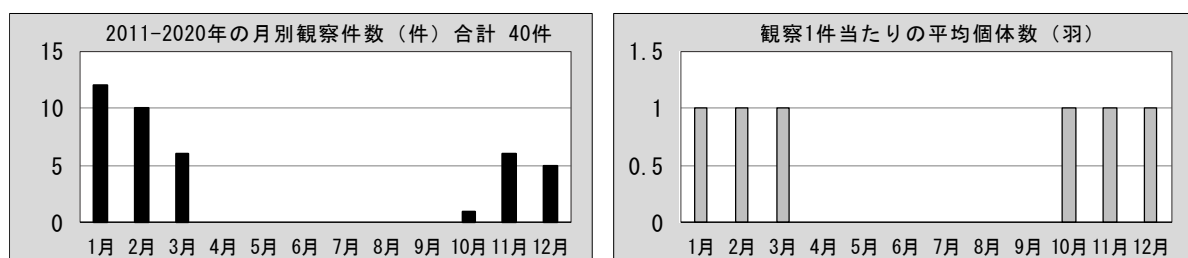
536. ルリビタキ *Tarsiger cyanurus* Red-flanked Bluetail

ヒタキ科

シベリア南部、カムチャツカ、サハリン、中国西部、日本で繁殖し、中国南部や東南アジアで越冬する。日本では、留鳥として、本州や四国の亜高山の針葉樹林で生息し、繁殖する。北海道では夏鳥である。

繁殖期には、本州や四国、九州の一部では亜高山帯の針葉樹林に生息する。北海道では幅広く生息し、平地や大雪山のハイマツ帯、トドマツ帯で見られる。繁殖期は5～8月、1巣卵数は3～6個。冬は本州中部以南の低山帯のマツ林や針広混交林で観察される。薄暗い林を好み、樹木の下枝を枝から枝へ飛び移りながら、周りの空間や地表面で、ガの幼虫、アブなどの昆虫類やクモ類を採食する。また、ノイバラ、ナナカマド、ヤマウルシ、ヘクソカズラなどの実や種子も食べる。

世田谷区では、11月から翌年の3月にかけて見られる。砧公園、岡本静嘉堂周辺、成城3丁目緑地、尾山台や瀬田の住宅街などの国分寺崖線沿い、駒沢オリンピック公園、馬事公苑、蘆花恒春園、豪徳寺などの茂みでさえずりやミミズを採食しているのが観察されている。(全記録数111件 1955～2020年)



○主な観察記録

1955. 01. 03	等々力溪谷公園	1羽	雌	滝の山鉄橋下流で見る
1961. 01. 01	等々力溪谷公園	1羽		滝の山
1989. 12. 23	馬事公苑	1羽	雌	
1999. 12. 30	砧公園	1羽		木の上で鳴いていた
2003. 01. 11	尾山台2	1羽		自宅の餌台に来る
2007. 02. 08	駒沢オリンピック公園	1羽	雌型	
2007. 12. 24	馬事公苑	1羽		日本庭園手前のヒマラヤスギの辺りからさえずり
2008. 01. 24	蘆花恒春園	1羽	雌	庭にいた
2010. 12. 29	砧公園	1羽	雌	枯れ草をかき分け甲虫を採餌
2011. 01. 21	砧公園	1羽		木止まり 地面に降りて採餌
2012. 02. 03	蘆花恒春園	1羽	雌	中庭の竹藪の地面で採餌
2012. 10. 11	野川(成城4)	1羽		ヨシを移動し採食
2014. 02. 18	瀬田4	1羽	雄	地上で採餌
2016. 11. 28	多摩川(玉堤1)	1羽		第二回冬羽. 河畔林縁を「カッカッ」と鳴きながら動き回る
2017. 01. 24	成城4	1羽		成城4丁目緑地でミミズを捕食
2018. 12. 31	桜上水4	1羽	雌	松原高校の境界植え込みでヒッ・ヒッと地鳴きを繰り返す。
2019. 01. 18	成城三丁目緑地	1羽		木にとまる
2020. 02. 27	成城みつ池緑地	1羽		シラヤマギク丘下

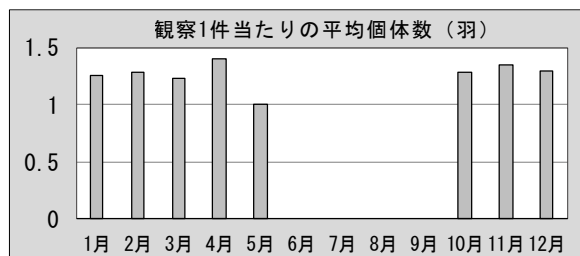
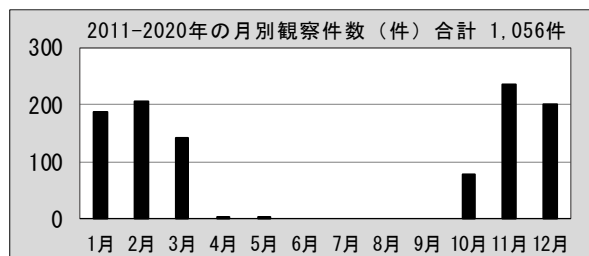
540. ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus* Daurian Redstart

ヒタキ科

シベリア南東部のモンゴル東北部、チベット南東部、中国西部などで繁殖し、冬はインド北東部からインドシナ、中国南部、日本、台湾に渡る。日本には、冬鳥として北海道から九州に渡来する。

平地や低山の草原や雑木林、農耕地、海岸や河畔林、住宅地や公園に生息する。越冬期には1羽ずつが採食なわばりを持ち、灌木の上や見晴らしの良い高所にとまって鳴く。1983年に北海道大雪山で5羽のヒナが巣立ちして、日本で初めて繁殖が観察され、その後、八ヶ岳周辺(長野県、山梨県)、岐阜県、鳥取県(大山周辺)での繁殖事例などその広がりが確認されている。木の実や種子、昆虫類、クモ類を食べる。なわばり性が強く、車のミラーなどに写った自分の姿を攻撃したり、2羽が向かい合って鳴き交わしたり、争いや追いかけ合いも観察される。

世田谷区では、10月頃渡来し、翌年の3月頃渡去する。渡来初期と渡去の頃には個体数が多い。多摩川、野川、仙川で多く見られるが、砧公園、祖師谷公園や、桜新町、上用賀の住宅地など区内各地で幅広く観察されている。ピラカンサ、コムラサキ、ノイバラ、ヘクソカズラの実をついばんでいるのが見られている。渡来時は、「ヒッヒッ」「カッカカッ」と聞こえる声でよく鳴き、民家のテレビアンテナ、マンションの植込みや民家の庭などでも観察されている。(全記録数 2,686件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 03. 29	多摩川	1羽	
1960. 11. 06	野毛	4羽	雄3、雌1羽
1997. 01. 17	多摩川	6羽	
2001. 11. 01	桜上水3	1羽	自宅で声を聞く
2004. 11. 12	上用賀4	1羽	雄 自宅付近のアンテナに止まって鳴く
2007. 11. 03	奥沢6	1羽	電線に止まり、カッカッと鳴いている
2009. 02. 11	下馬4	1羽	雌 センリョウの実をついばむ
2011. 03. 04	浄真寺	1羽	雌 イロハモミジから水場、セイヨウシャクナゲへ移動、糞を二度す
2012. 01. 26	野川(喜多見7)	2羽	ピラカンサの実を採食
2012. 11. 12	奥沢6	1羽	雌 盆栽のベニシダンの赤い実を2個啄み飛び去る
2012. 11. 29	多摩川(鎌田1)	1羽	ノイバラの実を採食
2013. 10. 26	下馬4	1羽	雌 自宅庭のコムラサキの実をついばむ
2014. 02. 16	仙川	4羽	雌ばかり4羽 降雪のためか多かった
2015. 01. 18	祖師谷公園	3羽	3カ所で雌、雄、雌を観察
2017. 01. 09	桜上水1	1羽	建築前の宅地の草地に下りて地上で採食 小さな虫を食べていた
2018. 10. 23	桜新町1	1羽	雌1羽。建築前の宅地の草地に下りて地上で採食 小さな虫を食べているようであった
2019. 12. 03	喜多見6	1羽	ヘクソカズラの実を採食
2020. 11. 28	桜新町1	1羽	雌 電線にとまりヒッヒッヒッ・カカカカと繰り返し鳴き続ける 11/26にも同じ場所・同じ鳴き方で鳴いていた
2020. 12. 29	野川(鎌田3)	1羽	タチバナモドキの実を採食

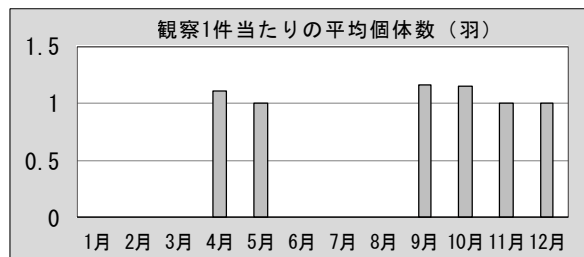
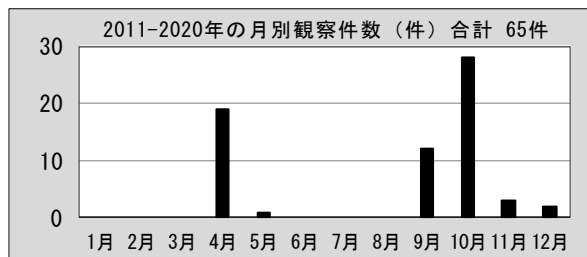
542. ノビタキ *Saxicola torquatus* African Stonechat

ヒタキ科

ヨーロッパ西部からオホーツク海沿岸、サハリン、中央アジア、中国西部、日本、アフリカで繁殖し、冬はアフリカ方面から東南アジア、中国南部へ渡る。日本には、夏鳥として本州中部以北に渡来する。四国、九州、奄美諸島などでは旅鳥。八重山諸島では少数が越冬する。

高原の草原や北海道の平地の草地、牧場、農耕地、灌木林に生息し、繁殖する。繁殖期は5～8月、巣は草むらの中の窪みなどにつくる。1巣卵数は3～7個。渡りの時期には、全国の水田、畑、河川、湖沼などに現れる。草の穂先や枯れたススキなどの茎の上、灌木の頂などの目立つところに止まり、空中で飛びついたり地上に降りたりして、昆虫類を捕食する。

世田谷区では、春は4月頃、秋は9月から10月頃に立ち寄る。主として多摩川で見られ、野川でも稀に観察される。河川敷でセイタカアワダチソウなど草木の穂先に止まり、アブ、バッタ、トンボ類を捕食しているのが、観察されている。(全記録数 252件 1951～2020年)



○主な観察記録

1953. 04. 11	多摩川(野毛)	1羽	夏羽	渡し場
1968. 10. 12	多摩川(野毛)	6羽	冬羽	二子橋下流松山下
1969. 09. 29	多摩川	20羽		
1999. 04. 08	多摩川	1羽	中州の草地	夏羽に換羽中
2000. 10. 06	多摩川	1羽	中間羽の1羽がオギの上に止まる	
2001. 10. 12	多摩川	2羽	雌雄が低木に止まる	
2005. 10. 20	多摩川(鎌田 1)	2羽	雄2羽が花にいるアブ類を採食中	夏羽が少し残っている
2006. 10. 03	多摩川(鎌田 1)	2羽	草原のセイタカアワダチソウに止まっている	
2010. 10. 06	野川(成城 4)	1羽	草木止まり	飛翔
2011. 04. 25	多摩川(玉堤 1)	2羽	雌雄	
2011. 10. 20	野川(鎌田 4)	1羽	草木を移動	バッタを捕食
2012. 04. 24	多摩川(玉堤 2)	1羽	雄 生殖羽	川原斜面のカラシナの茎に止まる
2013. 10. 28	多摩川(玉堤 1)	2羽	1羽が左岸でイヌタデの種子を採食	
2014. 10. 09	多摩川(鎌田 2)	2羽	雌雄がオオマツヨイグサの天辺に止まり、採餌を繰り返す	
2017. 04. 24	多摩川(野毛 1)	1羽	雄夏羽が河原でカラシナの先で周囲を見ている	
2019. 04. 15	多摩川(野毛 1)	1羽	雄が斜面草地のカラシナ先で休む	
2019. 10. 16	野川(喜多見 9)	1羽	トンボを捕食	
2020. 04. 27	多摩川(野毛 2)	1羽	雄が川岸斜面のセイヨウカラシナで轉る	

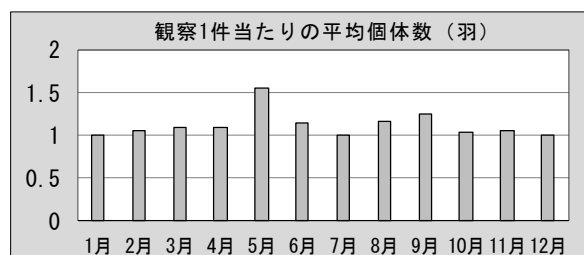
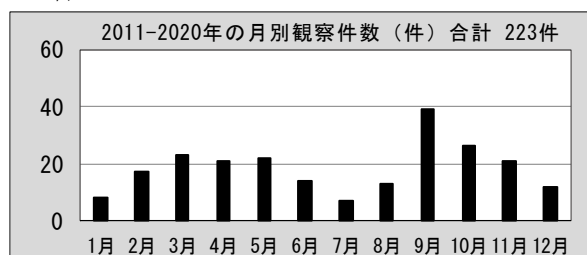
549. イソヒヨドリ *Monticola solitarius* Blue Rock Thrush

ヒタキ科

ヨーロッパ南部から中国に至るユーラシア大陸南部、サハリン南部、日本、アフリカ北西部で繁殖し、東南アジアで越冬する。日本では、北海道で夏鳥で、冬に暖地に移動する。本州以南では留鳥として全国各地で生息し、繁殖する。亜種アオハライソヒヨドリは、本州、九州、琉球諸島の一部で生息している。

崖や岩場がある海岸に生息し、コンクリートブロック、海岸沿いの民家の屋根、アンテナなどの見晴らしの良いところに止まりさえずる。近年は海岸から遠く離れた内陸部でも見られるようになった。海岸沿いの岩場や崖、人家の屋根の隙間に枯草などで碗形の巣をつくる。繁殖期は2～8月、年に2回ほど繁殖し、1巣卵数は4～6個。2000年代に入って、山間部のダムや市街地のビルや工場などの建造物の屋上や屋根の隙間、通風口、および橋樑などでも繁殖が確認されるようになった。多様な食性を持ち、トンボ、バッタ、チョウ、ガなどの昆虫類やフナムシ、ムカデ、ヤモリ、トカゲ、ミミズ、草木の実(ヘビイチゴ、ピラカンサほか)などを食べる。

世田谷区では、2006年までは2件の観察記録しかなかったが、2007年以降毎年、1年を通して、多摩川や野川で見られるようになった。鉄橋、橋脚、水門などで休息したり、さえずっているのが観察され、バッタ、トカゲ、ミミズを捕食しているのが確認されている。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 239件 1973～2020年)



○繁殖記録

2017. 06. 07	玉川 1	1 巣	餌運び
2018. 05. 21	多摩川(野毛 3)	1 巣	成鳥雌雄、巣立ち雛 3 羽 雌親、巣立ち雛 1 羽が橋中から上流側の川岸斜面オニグルミ降りる。オニグルミにはすでに巣立ち雛 2 羽いる。雄が巣立ち雛に黒い虫を給餌。第三京浜橋で営巣していたものと思われる
2018. 06. 13	野川(喜多見 3)	1 巣	ヒナに給餌
2018. 06. 14	野川(大蔵 5)	1 巣	ヒナに給餌 (6/13 の個体と同じ)

○主な観察記録

1973. 10. 15	多摩川(野毛)	1 羽	第三京浜道多摩川橋
2002. 10. 15	多摩川(玉川 1)	1 羽	雄 対岸の川岸の流木にいる
2007. 01. 03	野川(玉川 3)	1 羽	雄 工事現場の斜面を移動、ムクドリの群れに飛び立つ
2009. 02. 14	野川(鎌田 1)	1 羽	雄 工事用鉄橋 トラックの通過で上流より移動
2011. 01. 24	多摩川(野毛 2)	1 羽	橋脚で休息
2012. 10. 22	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雌が新二子橋桁で休息
2013. 04. 29	多摩川(野毛 1)	1 羽	雄 玉川排水樋管水門上で囀る
2014. 11. 14	野川(鎌田 2)	1 羽	バッタを捕食
2015. 04. 01	野川(喜多見 7)	1 羽	高水敷を移動
2015. 10. 26	多摩川(玉川 3)	1 羽	雄が田園都市線ホーム端から少し離れた鉄塔で囀る
2016. 05. 09	多摩川(玉川 3)	2 羽	雌雄が堤を越えて世田谷の住宅地方面へ
2016. 06. 20	多摩川(玉川 1)	1 羽	雄が住宅地から飛来し草地のヤナギ梢で囀る
2017. 05. 30	野川(大蔵 6)	1 羽	橋の欄干で採食
2017. 06. 10	野川(喜多見 3)	1 羽	橋下の高水敷でトカゲを捕食
2018. 02. 03	野川(喜多見 6)	1 羽	高水敷でミミズを捕食
2019. 05. 07	多摩川(野毛 3)	2 羽	雄が橋下の中州草地で青虫 2 匹を咥え橋脚に止まり橋中から現れた雌に給餌
2020. 06. 21	多摩川(野毛 3)	2 羽	雄が橋脚から橋下の裸地に降りミミズを捕って戻り 2 度橋脚に打ち付けた後食べる

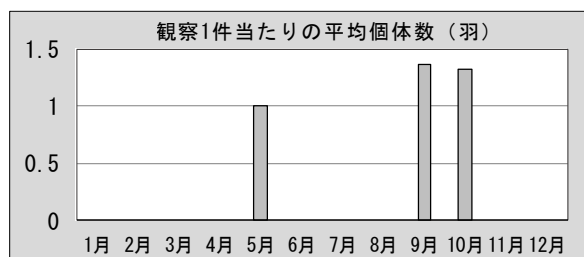
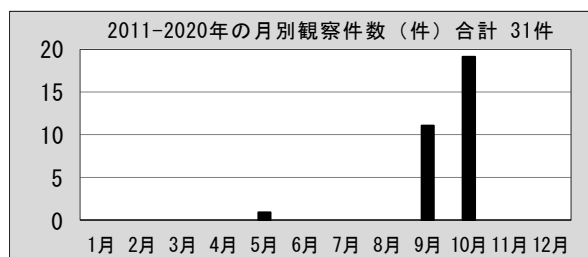
552. エゾビタキ *Muscicapa griseisticta* Grey-spotted Flycatcher

ヒタキ科

アムール川流域、カムチャツカ、サハリン、中国東北部、日本で繁殖し、台湾、フィリピン、スラベシ、ニューギニア島北西部で越冬する。日本では、北海道と岩手県では夏鳥、それ以外は旅鳥として全国に渡来する。

渡り途中に、低山や平地の明るい林、市街地の公園に現れる。秋は、コサメビタキとの混群になることもある。木の枝から飛び上がり、フライングキャッチして、チョウ、ガ、アブなどの昆虫類を捕り、また元の枝に戻る。樹上の青虫類、秋には木の実も食べる。

世田谷区には、春は稀だが、秋は 9 月から 10 月に渡来する。砧公園、馬事公苑、蘆花恒春園、桜丘すみれば自然庭園、駒沢オリンピック公園などの公園や緑地、多摩川や仙川、弦巻などの住宅地でも見られている。コサメビタキとの混群やフライングキャッチなどが観察されている。仙川、蘆花恒春園ではミズキの実を食べているのが見られ、砧公園では谷戸川沿いの木々にとまるのが確認されている。(全記録件数 92 件 1971～2020 年)



○主な観察記録

1971. 10. 02	馬事公苑	6 羽	(10/23 まで見られた)
1982. 10. 04	桜丘 3	1 羽	

1998. 10. 02	多摩川	1羽	ハリエンジュの樹上でフライングキャッチを繰り返す
2001. 10. 05	馬事公苑	8羽	幼鳥を含めコサメビタキとの混群
2003. 05. 15	弦巻5	2羽	
2006. 10. 03	多摩川(玉川3)	1羽	野川の林を移動
2008. 10. 07	仙川	1羽	稲荷山橋〜大石橋間右岸街路樹 通過中の立寄り
2009. 09. 23	桜丘すみれ自然庭園	3羽	サクラの枝に止まっていた
2010. 10. 02	砧公園	3羽	木止まり 飛翔 虫をキャッチ
2010. 10. 15	多摩川(玉川3)	2羽	兵庫島左岸の樹林帯でフライングキャッチを繰り返し飛び去る
2012. 09. 25	仙川	2羽	さくら橋下流左岸のミズキの実を食べていた
2012. 10. 20	駒沢オリンピック公園	2羽	
2014. 10. 09	蘆花恒春園	3羽	ミズキの木の中で採餌
2015. 09. 28	多摩川	1羽	
2016. 09. 28	砧公園	1羽	谷戸川付近の川沿いの木々に止まる (10/22迄)
2018. 09. 18	多摩川(玉川3)	1羽	兵庫島西側斜面の樹木
2019. 09. 21	砧公園	1羽	谷戸川付近の川沿いの木々に止まる (10/28迄)
2020. 10. 06	多摩川(玉川3)	1羽	林縁のトウネズミモチから飛び立つが元に戻る

553. サメビタキ *Muscicapa sibirica* Dark-sided Flycatcher

ヒタキ科

シベリア南部、モンゴル、中国南部からウスリー、サハリン、日本で繁殖し、冬は主として東南アジアに渡る。日本では、夏鳥として北海道と本州中部以北に渡来し繁殖する。本州南西部、四国、九州、対馬、屋久島、奄美諸島、琉球諸島では、旅鳥である。

夏は亜高山帯の針広混交林に生息する。大木の多い林で見られ、立ち枯れの林を好む。渡りの時期は、低地や低山のマツ林や広葉樹林に立ち寄る。繁殖期は 6〜8 月で、巣は樹木の横枝の中ほどの又の上などに、雌雄共同でつくる。巣は浅い椀形で表面に地衣類をとりつけ、枝のこぶのように見せかける。1 巣卵数は 3〜5 個。樹林内でも見通しのよい場所に止まり、空中に飛び出すハチ、ハエを狙い、フライングキャッチする。また、空中で追い回して捕らえる。

世田谷区では、9 月から 10 月に立ち寄った記録がある。砧公園の他に、成城みつ池緑地、岡本静嘉堂周辺、蘆花恒春園、駒沢オリンピック公園でも観察されている。(東京都区部：非分布 全記録数 15 件 2006〜2020 年 2011 年以降 4 件)

○主な観察記録

2006. 10. 02	成城みつ池緑地	1羽	
2006. 10. 11	多摩川(玉川1)	1羽	道路脇の灌木に止まったり飛んだりを繰り返す
2007. 09.	砧公園	1羽	
2007. 10. 02	岡本静嘉堂周辺	1羽	
2007. 10. 03	砧公園	1羽	定例調査 (10/1、2、4 も観察)
2007. 10. 16	蘆花恒春園	2羽	
2010. 10. 08	駒沢オリンピック公園	1羽	
2016. 10. 14	砧公園	1羽	野草園で5分程枝渡り
2017. 09. 22	蘆花恒春園	3羽	
2019. 10. 10	成城みつ池緑地	1羽	
2020. 10. 15	砧公園	1羽	シジュウカラ、メジロ、エナガなどの混群についてきた

554. コサメビタキ *Muscicapa dauurica* Asian Brown Flycatcher

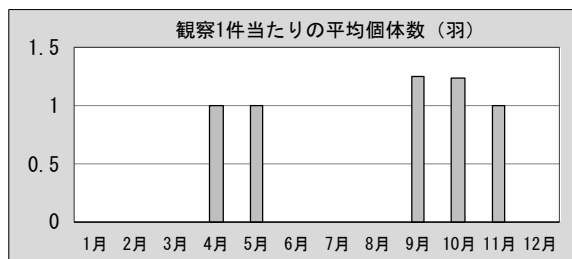
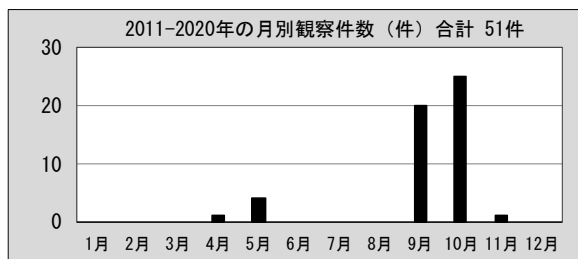
ヒタキ科

シベリアのエニセイ川から南東部、中国東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬はインドから東南アジアで越冬する。日本へは夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来し繁殖する。伊豆諸島、琉球諸島では旅鳥。

平地から高山の落葉広葉樹林やカラマツ林、雑木林に生息する。渡りの頃は、市街地の公園などにも現われる。繁殖期は 5〜7 月で、明るい林の水平な枝に樹皮などで椀形の巣をつくり、外装をウメノキゴケな

どで覆い、木のこぶのように見せる。1 巣卵数は4～5 個。枝から飛び出し、チョウ、ガ、アブなどの昆虫類をフライングキャッチする。また、葉についている青虫類も食べる。

世田谷区では、春には稀だが、秋は9 月、10 月頃に立ち寄る。砧公園でよく見られ、馬事公苑、蘆花恒春園、駒沢オリンピック公園、多摩川などでも観察されている。砧公園では、2007 年の秋から翌年の1 月まで断続的に観察された。ベニシジミをフライングキャッチしたり、ミズキやムクノキの実を採食しているのが見られている。5 月に団地の樹林帯でさえずりが聞かれている。1948 年に奥沢で繁殖した例がある。(東京都区部：絶滅 全記録数 140 件 1948～2020 年)



○繁殖記録

1948. 04. 26 奥沢 1 巣 繁殖 7/11 まで見られた

○主な観察記録

1962. 09. 22	馬事公苑	3 羽	
1993. 10. 10	下馬 4	1 羽	下馬中央公園や学芸大学附属高校の樹林に2～3 日滞在
1996. 09. 07	多摩川(鎌田 1)	1 羽	オギの海
2001. 10. 05	馬事公苑	4 羽	エゾビタキと混群
2002. 09. 18	桜丘 4	5 羽	笹原小学校の屋上の金網の柵に次々と飛来し飛び去った
2004. 10. 07	砧公園	6 羽	群れで三の橋の上通過
2007. 09. 15	砧公園	1 羽	(翌年1/13 まで1～2 羽が断続的に見られた)
2007. 10. 15	蘆花恒春園	1 羽	シジュウカラ、メジロ、コゲラと一緒にミズキの実を食べていた
2008. 10. 04	駒沢オリンピック公園	3 羽	
2009. 09. 25	次大夫堀公園	1 羽	目の前の小枝に止まっていた
2011. 10. 18	多摩川(玉川 3)	1 羽	兵庫島公園でベニシジミを地面近くまで追ってフライングキャッチ
2012. 10. 16	祖師谷公園	1 羽	ケヤキの最上部の枝に止まっていた
2013. 05. 03	桜上水 4	1 羽	桜上水団地の樹林帯で囀っていた
2014. 10. 09	蘆花恒春園	2 羽	ミズキの木の中で採餌
2014. 10. 11	多摩川(玉川 3)	1 羽	兵庫島樹林帯 歌碑上方の樹間
2015. 10. 04	羽根木公園	3 羽	定例調査
2016. 10. 03	多摩川(玉川 1)	1 羽	兵庫島西斜面のムクノキの実を食べる
2017. 10. 09	多摩川(玉川 3)	2 羽	1 羽が兵庫島公園西斜面で虫をフライキャッチする
2018. 09. 27	砧公園	2 羽	
2019. 04. 21	上野毛自然公園	1 羽	
2020. 09. 30	蘆花恒春園	2 羽	コナラで虫を食べる

558. キビタキ *Ficedula narcissina* Narcissus Flycatcher

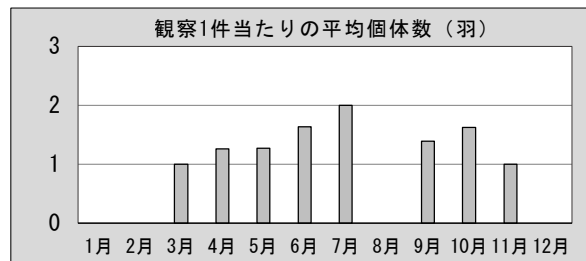
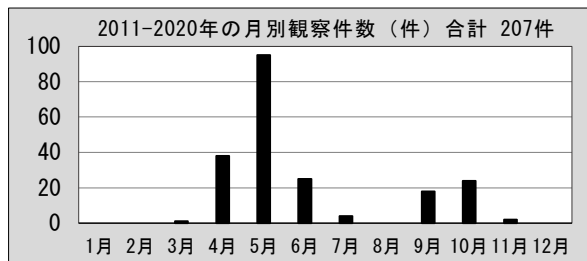
ヒタキ科

サハリン、中国北部、日本で繁殖し、東南アジアで越冬する。日本では、夏鳥として北海道、本州、四国、九州のほぼ全国に渡来し繁殖する。大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島のものは、亜種リュウキュウキビタキである。

山地や丘陵地の落葉広葉樹林に棲み、葉のよく繁った薄暗い林を好む。北海道では、平地の林にもよく生息する。渡りの時期には、市街地の公園や林でも見かける。繁殖期は5～8 月、年に1～2 回繁殖する。巣は樹洞や樹木の裂け目、茂った葉や蔭の間などに深い碗形の巣をつくる。1 巣卵数は4～5 個。林の中層の枝に止まり、木の葉の裏にいるガ、アブ、ハエなどの昆虫類を採食する。また、空中の昆虫をフライングキャッチする。秋の渡りの頃は、ミズキ、ツルマサキ、モッコクなどの実も食べる。

世田谷区には、春は4月から6月、秋は9月から10月にかけて立ち寄る。砧公園、馬事公苑、蘆花恒春園などの公園、弦巻、瀬田、大蔵などの住宅地、多摩川や仙川で見られる。ミズキやエノキの実を採食したり、水飲みしているのが観察されている。2017年には初めて等々力溪谷公園で繁殖が確認された。

(全記録数 561件 1946～2020年)



○主な繁殖記録

2017.06.22	等々力溪谷公園	1 巣	雄が巣立ち雛に給餌、雌も見られた
2018.06.08	等々力溪谷公園	1 巣	巣立ち雛に雌が給餌
2019.06.19	砧公園	1 巣	雛3羽の巣立ちを確認
2019.07.19	砧公園	1 巣	ヒナ3羽、オスメス(親鳥)確認、翌日以降確認なし

○主な観察記録

1946.10.18	野毛	1 羽	雌 目撃する
1950.10.09	野毛	2 羽	雌雄 自宅のウメに来て夕方までいた
1989.10.21	太子堂4	1 羽	
2001.05.01	弦巻5	1 羽	雄 目の縁が黒くなっていた
2004.06.24	成城みつ池緑地	1 羽	樹間でさえずっていた また湧水に水を飲みに来て来た
2005.04.30	砧公園	2 羽	雌雄 雄は盛んにさえずり
2006.10.25	大蔵2	7 羽	雄4羽、雌3羽
2007.10.11	蘆花恒春園	1 羽	雄 メジロ、シジュウカラと一緒にミズキの実を採食していた
2009.05.02	成城みつ池緑地	1 羽	さえずり 成城4丁目の住宅地から観察
2010.05.12	馬事公苑	1 羽	公園内から鳴き声を確認
2010.10.02	砧公園	2 羽	虫を捕食
2011.10.12	成城4	1 羽	木止まり 地面に降りて虫を捕食
2014.10.09	蘆花恒春園	1 羽	雌 ミズキの木の中で採餌
2015.10.13	多摩川(鎌田3)	4 羽	雌4羽が兵庫島西斜面の混交林からひょうたん池に次々に降りて水飲み
2016.04.26	仙川	1 羽	大石橋上流右岸の観音堂樹林帯で、盛んに囀っていた
2016.10.04	岡本静嘉堂周	6 羽	雌雄でエノキの木の実を採食
2017.04.30	等々力溪谷公園	2 羽	囀る声
2018.10.09	多摩川(玉川3)	3 羽	成鳥雄、雌、幼鳥1羽が兵庫島西斜面のサクラにシジュウカラと群れる
2019.04.21	砧公園	4 羽	雄3 雌1
2019.07.19	砧公園	5 羽	ヒナ3羽、オスメス確認、翌日以降確認なし
2020.06.15	砧公園	3 羽	ケヤキのトイレ裏 3羽と一緒に樹木内の移動を繰り返していた 1羽が新しい枝に移る度に囀った

559. ムギマキ *Ficedula mugimaki* Mugimaki Flycatcher

ヒタキ科

シベリア南東部、サハリンで繁殖し、中国南部やマレー半島などの東南アジアで越冬する。日本では、旅鳥として北海道、本州、四国、九州、五島列島、種子島、伊豆諸島などを通過する。

低地から山地のマツ林や雑木林に渡来し、枝葉の間をあちこちと移動し餌を探すことが多い。時々樹上から飛び上がり、飛んでいるハエ、アブ、ガガンボなどの昆虫をフライングキャッチする。秋の渡りの頃は、ミズキ、ツルマサキなどの木の実を食べる。

世田谷区には、砧公園、蘆花恒春園などに10月、11月、4月に立ち寄り、モッコクの実を採食しているのが観察されている。下記4例の記録がある。(全記録数 5件 1967～2018年 2011年以降3件)

○観察記録

1967. 10. 06	羽根木公園	1羽	雌
1973. 10. 01	馬事公苑	1羽	
2016. 11. 06	砧公園	1羽	モッコクの実を採食して木々を移動
2016. 11. 07	砧公園	1羽	公園西口付近の松林に出て、7日迄確認した
2018. 04. 22	蘆花恒春園	1羽	雄 サクラやエノキを囀りながら飛ぶ

560. オジロビタキ *Ficedula albicilla* Taiga Flycatcher

ヒタキ科

ウラルからカムチャツカにかけてのユーラシア大陸で繁殖し、インド、東南アジアで越冬する。日本では、旅鳥として少数が北海道、本州、四国、九州から琉球諸島に渡来する。

平地から山地の落葉広葉樹林の明るい林を好み、渡りの頃は森林や農耕地、村落、市街地の公園などに渡来する。地表でハエ、カなどの昆虫類を採食する。ノイバラの実なども食べる。

世田谷区では、下記3例の記録がある。(全記録数3件 1996年、2007年、2016年)

○観察記録

1996. 11. 11	砧公園	1羽	雌
2007. 09. 10	砧公園	1羽	
2016. 12. 12	多摩川(玉川3)	1羽	第1回冬羽 大雨覆縁に白い斑 芝生で頻繁に尾を上下しながら採食 時々5~6m飛ぶ

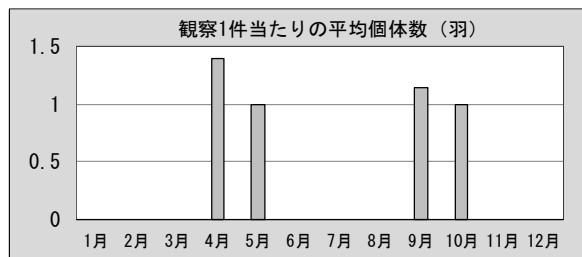
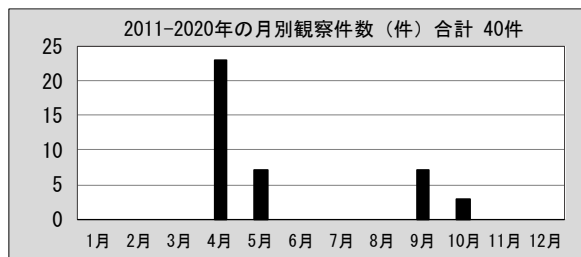
561. オオルリ *Cyanoptila cyanomelana* Blue-and-white Flycatcher

ヒタキ科

アムール、ウスリー、中国東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬はインドシナ、台湾、フィリピンに渡る。日本では、夏鳥として北海道から九州までの全国各地に渡来し繁殖する。琉球諸島には旅鳥として渡来する。九州(黒島)で見られるのは、亜種チョウセンオオルリである。

亜高山、山地、丘陵地に広がる針広混交林の主に溪流沿いに生息し、アカマツ、カラマツ林にも現われる。林の中の湖畔や、牧場と林の境などでも見られる。繁殖期は5~8月、年に1回繁殖する。崖地、溪流近くの落葉広葉樹林内の岩や土の崖地に営巣する。コケ類を多量に用い、少量の樹根や落葉を交えて碗形の巣をつくる。1巣卵数は3~5個で、育雛期には、ヒナに昆虫の成虫や幼虫、ムカデなどを与える。樹木の梢に止まり、空中を飛翔するカ、ハエ、コガネムシ、チョウ、羽化した水生昆虫などをフライングキャッチする。渡りの頃は、市街地の公園の林などでも観察される。

世田谷区では、春は4月から5月、秋は9月から10月に立ち寄る。砧公園、駒沢オリンピック公園、蘆花恒春園、成城みつ池緑地などの公園や緑地のほか、社寺や住宅地の樹木でも見られている。春の渡りの頃は、高木の先端に止まりさえずっている姿が観察されている。ムクノキの実の採食、水飲み、水浴びなどが見られている。(東京都区部：非分布 全記録数127件 1955~2019年)



○主な観察記録

1955. 10. 01	代田1	1羽	
1969. 04. 26	等々力溪谷公園	1羽	雄 さえずり 滝の山
1987. 05. 05	馬事公苑	2羽	雌雄
2000. 04. 18	若林4	1羽	松陰神社

2006. 05. 01	砧公園	3羽	雄1、雌1羽	東名高速道路側の林の中
2008. 09. 23	砧公園	2羽	バードサンクチュアリ	
2009. 04. 23	成城みつ池緑地	1羽	囀り	
2010. 04. 25	岡本静嘉堂周辺	1羽	雄	
2010. 09. 24	駒沢オリンピック公園	1羽	幼鳥雄	
2011. 04. 27	砧公園	2羽	1羽サンクチュアリ内で囀る	1羽樹林帯で姿見せる
2011. 05. 05	蘆花恒春園	1羽	囀りを確認	
2013. 04. 28	砧公園	5羽	雄2 雌3羽(雌は1群)	
2014. 10. 12	多摩川(玉川3)	1羽	雄幼鳥	兵庫島公園西側斜面のムクノキの実を採食後すぐ下のひょうたん池に降り、水飲み
2016. 09. 25	砧公園	1羽	♂若鳥	
2017. 05. 05		1羽	♂、カシワの木に	
2018. 05. 11	等々力溪谷公園	1羽	雄	
2019. 10. 02	砧公園	1羽	雌	三の橋付近

◆ イワヒバリ科 PRUNELLIDAE

566. カヤクグリ *Prunella rubida* Japanese Accentor

イワヒバリ科

南千島と日本でのみ繁殖し、生息する。南千島、北海道、本州の亜高山低木林で繁殖する。四国、九州、伊豆諸島では冬鳥である。

夏は、亜高山から高山帯のハイマツなどの低木林に生息する。冬期は、低地に移動する。繁殖期は6～9月、年に1回ないし2回繁殖する。ハイマツなどの低木の枝上に、コケ類を主な材料に枯草や小枝を混ぜて椀形の巣をつくる。1巣卵数は2～4個で、抱卵日数は13～14日。低木林の枝間を移動しながら、昆虫や種子を食べる。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(東京都区部：非分布 全記録数1件 2008年)

○観察記録

2008. 02. 11 駒沢オリンピック公園 1羽

◆ スズメ科 PASSERIDAE

568. ニュウナイスズメ *Passer rutilans* Russet Sparrow

スズメ科

インド北西部、中国南部、台湾、サハリン南部、日本で繁殖し、北方のものは冬に南へ渡る。日本では、北海道と本州中部以北に夏鳥として渡来し繁殖するが、冬は本州中部以南、四国、九州で越冬する。

低山帯の落葉広葉樹林から亜高山帯の針広混交林に生息する。比較的明るい樹林で、大きい樹木のある所を好む。繁殖期は5～7月、巣は樹洞や電柱の穴で、雌雄共同で枯れ草などの巣材を運び込む。1巣卵数は5～7個。主にイネ科などの雑草の種子を地上で採食するが、繁殖期には樹上で昆虫類、クモ類なども捕る。夏の終わりから秋にかけては、イネの実り直前の種子も食べる。

世田谷区では、下記2例の記録がある。(全記録数2件 1941、2001年)

○観察記録

1941. 11. 00 砧6 1羽

2001. 01. 19 多摩川(鎌田1) 3羽 雄2、雌1羽 池の岸でヨシの穂をついばむ

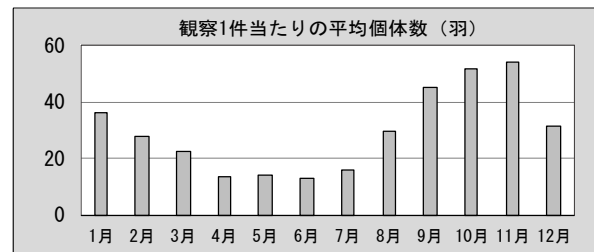
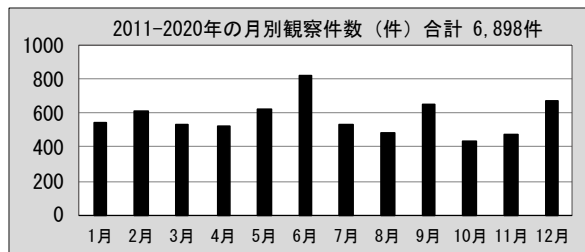
569. スズメ *Passer montanus* Eurasian Tree Sparrow

スズメ科

ユーラシア大陸の温帯と亜熱帯、日本、台湾に広く分布する。日本では、留鳥でほぼ全土に生息しているが、小笠原群島、硫黄列島にはいない。

人の生活に密着して生息している野鳥で、人家とその周辺の樹林、農耕地、草地、川原に生息する。深い森林の中、廃村などにはいない。繁殖期は2～9月で、年に1～3回繁殖する。巣は人家の屋根、壁などの隙間、樹洞、電柱などに、わらくずなどでつくる。1巣卵数は4～8個。抱卵日数は12～14日、育雛日数は13～14日。巣立ちした幼鳥は巣の周辺の樹木に集まり、8月頃から特定の夏ねぐらに集合する。晩秋には市街地や住宅地から移動し、大きな群れになり川原などで生息する。成鳥の大部分は、つがいになって人家に分散し、それぞれ1年中テリトリーを持っている。主にイネ科、タデ科などの種子、花の蜜、小型昆虫類、クモ類などを採食する。秋には集団で水田に出かけイネの未熟な種子を食べる。秋から冬にかけては、稲刈りが終わった水田で落ち穂を採食する。

世田谷区では、河川敷、人家やその周辺、公園、緑地などで1年中見られる。繁殖は3月から9月まで行なわれているのが観察されている。営巣場所は電柱のトランスが多く、その他に換気口、橋桁の隙間、信号機、屋根の隙間、電線カバー、グラウンドのバックネットのパイプなどである。幼鳥がアオダイショウに飲み込まれた例がある。水浴び、砂浴び、泥浴びも見られている。秋から冬にかけて多摩川や野川の草地に集結し、かつては1,000～3,000羽が飛び交っていたが、この5年間は大きな集団は見られなくなり、観察される個体数も漸減している。昆虫、イヌタデ、セイバンモロコシ、ケイヌビエなどの草の種子、カキノキなどの木の実など多種多様な採食物が観察されている。また、集団ねぐらとして、環状八号線の街路樹モジバフウ(650羽の埒入り)ほかで見られている。(全記録数 14,343件 1950～2020年)



○主な繁殖記録

1950. 06. 15	野毛	1 巣	巣立ち雛6羽 クロマツに営巣 孵化3日くらい 谷沢松山
1975. 05. 07	馬事公苑	1 巣	巣立ち雛1羽 5/7 雛孵化 5/20 巣立ち
2007. 06. 07	用賀4	1 巣	雛3羽 電柱トランスの下に成鳥が餌を運ぶ、雛の声
2008. 04. 04	蘆花恒春園	1 巣	2羽が電柱の部品下で出たり入ったりして餌を運ぶ
2010. 08. 30	多摩川(鎌田1)	1 巣	成鳥1羽巣立ち雛1羽は新二子橋下面の隙間から地面に降りる すぐに成鳥が来て給餌する
2012. 03. 28	千歳台6	1 巣	古い電柱の穴の中で営巣 抱卵中の親鳥の顔が少し見える
2013. 06. 06	祖師谷公園	1 巣	草原で採餌、電柱の変圧器支台の巣に出入り確認
2015. 05. 17	羽根木公園	1 巣	親鳥が餌を咥えてグラウンドバックネット上部の金属筒に入ると中から雛の声
2016. 05. 16	多摩川(玉川3)	2 巣	2羽がガや青虫を咥えて兵庫島東斜面のそれぞれの巣箱に入る
2017. 07. 25	砧公園(砧公園1)	1 巣	子スズメが枝上で親に餌をねだる姿あり
2018. 05. 18	成城1	1 巣	信号機のパイプの中で営巣
2019. 05. 20	桜新町2	1 巣	タクシー会社のビル下の外壁隙間に親鳥が餌を咥えて出入りし、中から雛の音がする
2020. 06. 23	仙川	1 巣	稲荷山橋上流左岸の電線でスズメの交尾を見る

○主な観察記録

1952. 07. 21	多摩川(野毛)	3 羽	
1992. 10. 11	上用賀	3,360 羽	埒
1999. 11. 22	多摩川	1,230 羽	内約200羽が河原の浅瀬で水浴びする
2001. 09. 17	多摩川(鎌田1)	690 羽	1羽がアゲハチョウの幼虫を杭に何度も打ち付けたあと食べる
2009. 10. 14	多摩川	3,773 羽	
2010. 05. 21	喜多見6	3 羽	うち幼鳥1羽がアオダイショウに捕食される
2012. 08. 28	多摩川(野毛1)	105 羽	内26羽が川岸でイヌタデの種子を採食
2012. 09. 21	玉川田園調布2	300 羽	環八沿い街路樹モジバフウ3本に埒入り
2013. 02. 12	多摩川(上野毛2)	1,082 羽	ハヤブサが下流から飛来し約800羽が草地中州上空を低空で飛び回ると約400羽の群れが二つに分かれ逃げ惑う

2014. 09. 27	多摩川(玉川 1)	2,800 羽	田園都市線から下流 30m 以内草原 1,300 羽と 1,500 羽の 2 群が何かに驚いて飛び立つ
2015. 11. 03	多摩川(玉川 1)	294 羽	うち 250 羽が中州草でセイバンモロコシの種子を採食
2016. 08. 08	多摩川(上野毛 2)	52 羽	成鳥 1 羽が散策路でアゲハチョウの幼虫(7~8cm)を咥えてきて地面に数度打ち付けた後巣立ち雛 1 羽にを給餌する
2016. 08. 29	玉川田園調布 2	423 羽	環八沿いの街路樹アメリカフウ 2 本に罅入り
2016. 10. 10	多摩川(玉川 1)	245 羽	164 羽が川岸のセイバンモロコシ種子を採食
2016. 12. 09	奥沢 6	15 羽	カキノキの実をムクドリ 1 羽と一緒に食べている(奥沢 6 丁目緑地)
2017. 08. 27	玉川田園調布 2	650 羽	環八沿いのモミジバフウ 5 本とケヤキ 1 本に罅入り、盛んに「チュンチュン」と聞こえる声で鳴く
2018. 11. 14	多摩川	474 羽	150 羽の二群れほか(定例調査)
2019. 09. 04	野川(喜多見 8)	120 羽	アキノエノコログサの実を採食
2019. 09. 21	野川(喜多見 8)	150 羽	ケイヌビエの実を採食
2020. 12. 02	仙川	147 羽	仙川沿いの植込み、中州の藪に集まり、オオブタクサの実と昆虫類を採食
2020. 12. 13	深沢 8	22 羽	呑川の水溜まりで 8 羽が水浴び、護岸上部の砂地で 6 羽が砂浴び、同場所のドウダンツツジの中を 8 羽が鳴きながら行ったり来たり

◆ セキレイ科 MOTACILLIDAE

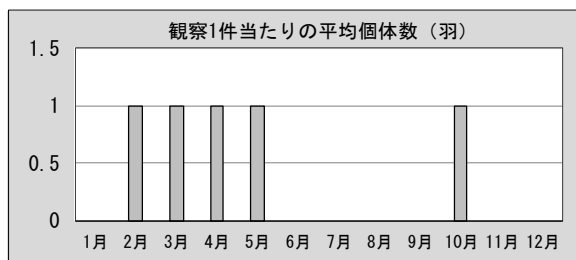
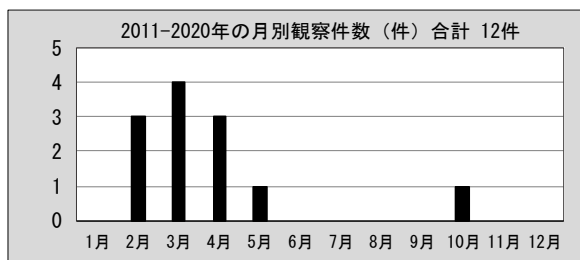
571. ツメナガセキレイ *Motacilla flava* Yellow Wagtail

セキレイ科

ユーラシア大陸の中・高緯度地方、日本、アラスカの西海岸で繁殖し、冬はアフリカからインド、東南アジアに渡る。日本では、夏鳥として北海道北部で繁殖する。本州、四国、九州では旅鳥、琉球諸島では冬鳥である。

草原、農耕地、海岸、水辺などの荒れ地状の草原に生息する。繁殖期は 5~7 月で、1 巣卵数は 4~5 個。地面を歩き回り、蝶、トンボ、バッタなど昆虫類やクモ類などを採食する。木の上で、尾を絶えず上下に振り動かし、飛ぶ時は、「チチ」と鳴きながら、波のように波形を描く。

世田谷区では、9 月末から翌年の 5 月初めに稀にみられる。冬期に多摩川の芝生グラウンドなどで見られている。観察される多くは亜種ツメナガセキレイ(旧称:キマユツメナガセキレイ)であるが、2013 年には亜種マミジロツメナガセキレイが 2/4~5/8 まで断続的に観察された。(全記録数 15 件 1999 年~2019 年)



○主な観察記録

1999. 10. 26	多摩川(鎌田 1)	1 羽	人が近づき驚いてクルミの枝に止まる
2005. 09. 27	多摩川(玉川 1)	1 羽	草原の小さなヤナギにいたが、飛び立ち川岸に降りる
2010. 10. 01	多摩川(鎌田 1)	1 羽	第 1 回冬羽、残土置き場脇の空き地にいたがハクセキレイに時々追われる
2012. 10. 19	多摩川(鎌田 1)	1 羽	
2013. 02. 04	多摩川(鎌田 1)	1 羽	冬羽 グラウンド芝生 (3/19 まで断続的に見られた)(後に亜種マミジロツメナガセキレイと判別された)
2013. 03. 28	多摩川(鎌田 1)	1 羽	亜種マミジロツメナガセキレイ 新二子橋上流 50~100m 付近採餌 (5/8 まで断続的に観察された)
2017. 04. 03	多摩川(鎌田 1)	1 羽	夏羽 亜種キマユツメナガセキレイ 川岸のヤナギに止まる
2018. 03. 12	多摩川(玉川 3)	1 羽	夏羽に換羽中 喉と眉斑が黄色
2019. 04. 15	多摩川(鎌田 1)	1 羽	夏羽 グラウンド芝生育成地で採食 亜種キマユツメナガセキレイ

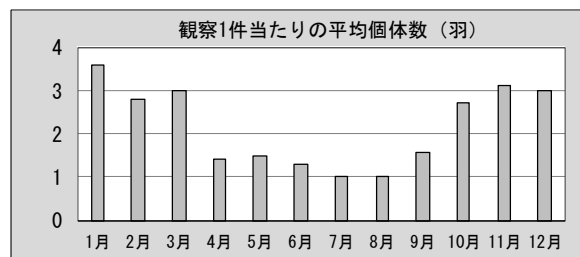
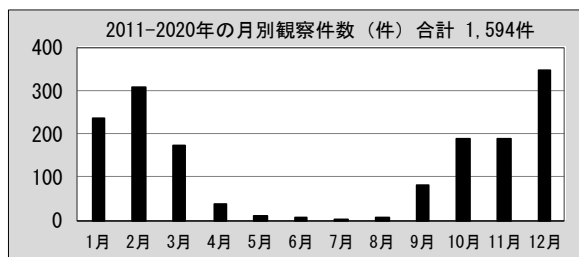
573. キセキレイ *Motacilla cinerea* Grey Wagtail

セキレイ科

ユーラシア大陸、アフリカ北西部、日本などで繁殖し、北方のものは、冬にインド、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアに渡る。日本では、北海道で夏鳥、本州、四国、九州、伊豆諸島で留鳥として生息し、繁殖する。大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島では冬鳥である。

平地や低山帯に多く、亜高山帯から高山帯にも生息する。河川の水辺に生息し、山麓や山間の溪流や清流を好む。繁殖期は4～8月、巣は崖の窪みや樹木の枝につくるが、家屋の隙間などの人工物も利用する。1巣卵数は4～6個、雌雄交代で抱卵し、11～14日で孵化し、ヒナは11～14日ぐらいで巣立つ。ヒナの糞を水辺に運んで捨てる習性がある。常に尾を上下に振りながら、主に水辺を歩き、ユスリカ、トビケラ、トンボなどをフライングキャッチし、バッタ、クモ類も採食する。

世田谷区では、9月から10月に飛来し、翌年の3月から4月に去るが、夏期に観察されることもある。1970年代までは1年中生息し、繁殖していたが、1990年頃から夏期は少なくなり、主に冬期に見られるようになる。多摩川、野川、仙川で見られ、特に仙川では個体数が多い。ほかに川や池のある等々力溪谷公園、砧公園、岡本静嘉堂周辺、高源院、駒沢オリンピック公園などでも観察されている。ミミズ、ハチ、エビを捕食しているのが見られている。2007、2008、2010年の10～11月にかけて、環八通り沿いの砧2丁目街路樹では40～80羽のねぐらが観察された。(全記録数 4,061件 1946～2020年)



○繁殖記録

1948. 04. 27	等々力溪谷公園	1 巣	3 卵	谷沢川(滝の上流)石垣	水面より 70cm
1950. 06. 09	多摩川	1 巣	4 卵	焼け跡倉庫	丸穴市場 地上より 4.48m 雌抱卵中
1952. 05. 04	等々力溪谷公園	1 巣		ゴルフ橋付近に営巣中	
1966. 05. 03	野毛	1 巣	雛 5 羽	谷沢川石垣で営巣	5/4 雛に給餌 5/9 巣立ち
2016. 05. 14	野毛 2	1 巣	成鳥 1 羽、巣立ち雛 2 羽	丸子川で成鳥が巣立ち雛 1 羽に給餌	
2016. 05. 31	多摩川(玉堤 1)	1 巣	成鳥雌、巣立ち雛 1 羽	細い流れ脇で親鳥が巣立ち雛に時々給餌する	

○ねぐら観察記録

2007. 11. 20	砧 2	85 羽	環八通り街路樹のクスノキに壱形成	(11/26 まで見られた)
2008. 10. 02	砧 2	37 羽	環八通り街路樹のクスノキに壱形成	(11/7 まで見られた)
2010. 10. 11	砧 2	43 羽	環八通り街路樹のクスノキに壱形成	(10/14(52 羽) まで見られた)

○主な観察記録

1946. 08. 24	野毛	1 羽		
1998. 11. 30	多摩川	9 羽		
2001. 09. 24	岡本 2	1 羽	岡本民家園前の丸子川	
2006. 01. 18	多摩川	17 羽	定例調査	
2006. 01. 30	仙川	24 羽	定例調査	
2009. 02. 04	野川	14 羽	定例調査	
2010. 06. 04	野川(喜多見 7)	1 羽	採食	
2011. 11. 21	多摩川(玉川 3)	2 羽	内 1 羽は排水樋管脇でミミズを食べる	
2011. 12. 07	仙川	18 羽		
2013. 12. 30	野川(宇奈根 3)	1 羽	川辺で移動して採餌	
2014. 10. 31	仙川	11 羽		
2015. 10. 25	野川(喜多見 7)	1 羽	ハチを捕食	
2016. 02. 23	仙川	10 羽		
2017. 11. 25	祖師谷公園	3 羽	2 羽法面で採食、1 羽は中洲などを飛翔	
2017. 12. 09	仙川	20 羽	土曜班体験会記録	
2018. 10. 04	野川(喜多見 5)	1 羽	エビを捕食	

2019. 12. 06 喜多見 7 1羽 自動車のフロントガラスに攻撃を加えていた
2020. 03. 09 仙川 12羽

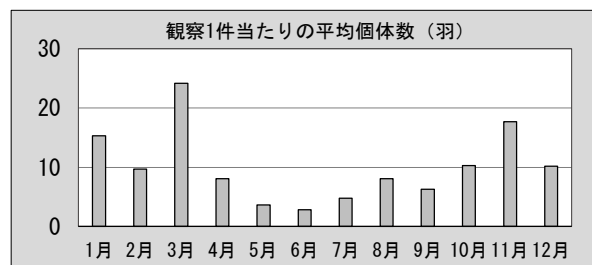
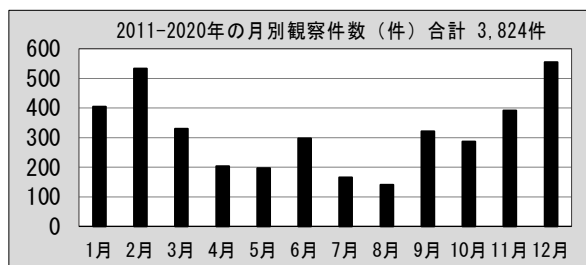
574. ハクセキレイ *Motacilla alba* White Wagtail

セキレイ科

ユーラシア、アフリカ北西部、日本で広く繁殖している。冬期には北中部アフリカ、アラビア半島、インド、東南アジアに渡る。日本では、留鳥として、北海道から九州で繁殖する。伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島、大東諸島では冬鳥。亜種ホオジロハクセキレイは本州南西部、九州で稀に繁殖し、琉球諸島では冬鳥である。

低地の海岸や河川、湖沼などの水辺を中心に、その周辺の水田、集落、市街地などに生息する。繁殖期は5～7月。枯草などで椀型の巣を建造物、換気扇の中、軒下の窪みなどにつくる。1巣卵数は4～5個。抱卵は、日中は雌雄交代して行ない、夜は雌がする。雛は12～13日ぐらいで孵化し、14～15日ほどで巣立つ。1950代は北海道や東北の海岸地方で繁殖していたが、近年は繁殖地が南下し、関東から関西さらに九州でも繁殖している。フライングキャッチしてユスリカ、トビケラ、ハエ、トンボなどを捕食したり、地面で歩きながら昆虫類、クモ類も食べる。冬に数百から千数百羽もの大群で、駅前の街路樹、工場の屋根やデパートなどの看板や外壁で集団ねぐらを形成する。「チチン チチン」と聞こえる声で鳴きながら、波型に飛ぶ。

世田谷区では、1年中見られ、繁殖は5月から8月まで観察される。多くは9月頃に飛来し、翌年の4月頃去り、夏期は少なくなる。多摩川、野川、仙川では年中見られるが、蘆花恒春園、祖師谷公園、次大夫堀公園、砧公園などでは、冬に観察されることが多い。営巣場所は建築物の屋根や橋の隙間、玄関先、換気口、屋根裏などである。蝶類の成虫や幼虫、コオロギ、トンボ、チョウ、ハチ、ユスリカ、バッタ、などの採食が観察されている。1989年の冬に、世田谷清掃工場の廃熱を利用した約1万羽の集団ねぐら、また2018年11月には玉川3の1本のクスノキへの250羽のねぐら入りが確認されている。2017年から個体数が減少している。オオタカ、チョウゲンボウ、ハヤブサに対しモビングするのが観察されている。亜種ハクセキレイの他に、2005年4月に亜種ホオジロハクセキレイ、2015年4月に亜種シベリアハクセキレイが記録されている。(全記録数 9,541件 1948～2020)



○主な繁殖記録

1996. 06. 28	多摩川	1 巣	巣立ち雛 1 羽
2001. 07. 17	仙川	1 巣	巣立ち雛 5 羽 成鳥 1 羽 その他 2 羽と川原で 大蔵橋下
2004. 08. 09	多摩川(野毛 2)	1 巣	巣立ち雛 2 羽が川原で餌を探していたが、雌親が離れた所でガを捕えると幼鳥が走り寄る
2007. 07. 07	野川(喜多見 6)	1 巣	巣立ち雛 3 羽に成鳥 1 羽が給餌
2009. 06. 09	多摩川(鎌田 1)	1 巣	巣立ち雛 1 羽が中州縁で成鳥から給餌を受ける
2010. 05. 10	砧 1	1 巣	倉庫の屋根の隙間に営巣 親が出てくると雛が動いている
2014. 06. 09	多摩川(野毛 3)	1 巣	1 羽が橋下の中州でハチを捕り橋桁の隙間に運ぶ
2014. 08. 16		1 巣	定例調査 野球場フェンスで成鳥が巣立ち雛に給餌する
2016. 05. 16	多摩川(鎌田 1)	3 巣	成鳥 1 羽、巣立ち雛 2 羽。 親鳥が中州で巣立ち雛に給餌する。玉堤 1. 成鳥雌 1 羽、巣立ち雛 2 羽。 親鳥が玉川排水樋管で巣立ち雛 1 羽に給餌する
			野毛 1. 餌を吐いて新二子橋橋中に入る。玉川 3. 1 羽が餌を吐いてチョウゲンボウの巣から 30m 離れた川崎市寄りの橋中に入る。成鳥 1 羽、巣立ち雛 2 羽
			成鳥がグランド芝生で巣立ち雛 1 羽に給餌する
2019. 05. 12	野川(成城 3)	1 巣	巣立ち雛に給餌

2020.05.25	多摩川(玉川3)	1 巢	雌成鳥 1 羽、巣立ち雛 3 羽
○主な観察記録			
1948.10.22	多摩川	1 羽	
1989.	大蔵 1	10,000 羽	世田谷清掃工場で 1989 年頃ゴミ焼却炉から発生する熱を求めて、数千羽から 1 万羽が集まり、埤として利用
1992.01.16	等々力溪谷公園	3 羽	
2004.03.17	多摩川	159 羽	定例調査
2005.04.23	多摩川(鎌田 1)	1 羽	亜種ホオジロハクセキレイ オギの海脇の中州
2006.04.08	多摩川(野毛 3)	3 羽	チョウゲンボウをモビング
2008.07.25	大蔵三丁目公園	6 羽	成鳥 1 羽に幼鳥 5 羽が広場で遊ぶ
2009.03.10	祖師谷 5	1 羽	畑のミミズを食べる
2010.11.24	多摩川	111 羽	定例調査
2011.12.12	多摩川	99 羽	1 羽が排水口で採餌しているセグロセキレイを威嚇する(玉堤 1) 15 羽が芝生グラウンドで採食(鎌田 1)
2012.08.14	野川(喜多見 5)	1 羽	シオカラトンボを捕食
2012.12.03	多摩川(玉川 3)	121 羽	内 34 羽が川岸から飛び立ち川面上空の水生昆虫を採食
2013.10.22	多摩川(鎌田 1)	1 羽	アマツバメを追いかけて飛翔
2014.03.12	多摩川	267 羽	定例調査 本流水面、砂礫地、グラウンド芝地共に数が多かった
2015.03.09	多摩川	215 羽	内 40 羽が川岸から飛び立ち空中でユスリカを採食
2015.07.07	多摩川(玉川 3)	13 羽	成鳥 1 羽が草地から散策路にコオロギを咥えて来て食べる 玉川 1 成鳥が 芝地で飛翔しているモンシロチョウを捕える 玉川 3
2015.10.13	多摩川(玉川 3)	61 羽	内 1 羽が草地でオンブバッタを採食
2015.10.26	多摩川(鎌田 1)	115 羽	内 1 羽が芝生グラウンドで飛び立ってアキアカネを捕り、トンボを地面にこす るようにして羽根を取り除いた後食べる
2016.02.02	多摩川(鎌田 1)	118 羽	30 羽位が川岸から頻りに飛び立って羽化した昆虫を捕る
2016.03.22	多摩川(鎌田 1)	192 羽	約 25 羽が川岸や川岸の木から飛び立って虫を採食する
2017.03.01	多摩川(鎌田 1)	150 羽	新二子橋上流中州水際付近 採餌飛翔・水浴・羽づくろい
2018.11.16	玉川 3	250 羽	調査開始時刻 16:20 終了時刻 17:10 埤入り開始時刻 16:48 埤入り完了時 刻 17:02 日の入時刻 17:02 天候 晴 埤入り場所：二子玉川高島屋本館西側 タクシー乗り場傍の 1 本のクスノキに 5 羽、2 羽、3 羽と埤入りし合計 250 羽
2019.11.11	仙川	24 羽	
2020.01.29	多摩川	156 羽	定例調査

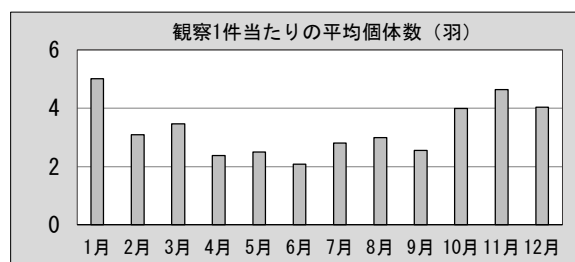
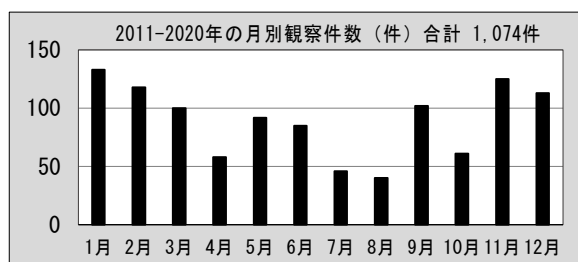
575. セグロセキレイ *Motacilla grandis* Japanese Wagtail

セキレイ科

北海道では夏鳥、本州から九州まで留鳥として繁殖する。日本以外でも、一部朝鮮半島南部で繁殖した記録がある。大隅諸島、伊豆諸島では冬鳥である。

低山帯、低地の河川とその周辺に生息する。ハクセキレイやタヒバリよりも水辺を好む。繁殖期は 3～7 月。巣は川の堤防の窪み、河原の石や流木の下、人家の石垣や屋根、瓦の隙間などにつくる。1 巣卵数は 4～6 個、抱卵日数は 12～13 日ぐらいで、ヒナは 13～15 日ぐらいで巣立つ。多くのつがいは 2 度繁殖する。水辺の岸を歩きながら、トビケラ、カワゲラ、カゲロウ、双翅類など昆虫の幼虫や成虫を地上で又はフライングキャッチして食べる。雄は、春になると水際で尾を振りながら、さえずりを繰り返す、「ジジッ、ジジッ」と聞こえる濁った声で飛びながら、よく鳴く。

世田谷区では、1 年を通して観察される。多摩川、野川、仙川で主に見られ、他では祖師谷公園、砧公園、次大夫堀公園などでも観察される。多摩川で年中生息し、繁殖する。祖師谷公園では 1996 年に繁殖、野川では 2008 年より時々繁殖するようになる。仙川は冬期に見られる。ハクセキレイは区内の殆どの公園や緑地で観察されるのに対し、セグロセキレイの生息地は限られ、河川の水際に生息する。営巣地は河原や河川近くの建築物である。巣立ち雛が見られるのは 4 月下旬から 7 月である。カマキリ、トンボ、ミミズを採食した記録がある。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 4,337 件 1948～2020 年)



○主な繁殖記録

1950. 04. 30	多摩川	1 巣	雛 6 羽 孵化 5 日位 コンクリートの引っ掛けの下に営巣 二子橋上流河原
1966. 04. 27	多摩川(野毛)	1 巣	巣立ち雛 4 羽 谷沢川流れ出し
1996. 05. 11	祖師谷公園	1 巣	巣立ち雛 3 羽 成鳥 2 羽 (5/12 も観察)
2008. 07. 03	成城 4	1 巣	巣立ち雛 1 羽 世田谷トラストまちづくりのビジターセンターの屋根瓦の下に営巣 親が給餌 巣は屋根瓦の下
2012. 05. 14	多摩川(野毛 2)	1 巣	巣立ち雛 1 羽 中州で巣立ちして間もない雛が成鳥雄から頻繁に給餌を受ける
2013. 04. 20	野川(喜多見 7)	1 巣	幼鳥 2 羽 親に餌を求めながら水辺を歩き回る
2015. 05. 18	多摩川(上野毛)	1 巣	巣立ち雛 2 羽 小さな流れ脇で成鳥雄が給餌する
2016. 04. 26	野川(喜多見 7)	1 巣	交尾、橋桁下で営巣準備
2017. 04. 24	多摩川(玉堤 1)	1 巣	巣立ち雛 2 羽が川岸で親鳥の後をついて歩き時々給餌を受ける
2018. 05. 01	多摩川(野毛 1)	1 巣	親鳥が水門内から玉川排水樋管水路に降りると、続いて巣立ち雛 1 羽が水門上部の下穴から落ちてくるように降りる
2019. 05. 08	野川(成城 3)	1 巣	親が巣立ち雛 2 羽に給餌
2020. 06. 01	多摩川(野毛 1)	1 巣	成鳥 1 羽、巣立ち雛 3 羽 巣立ち雛 1 羽が玉川排水樋管水門内部下穴から次々と降りてきて親鳥と巣立ち雛 2 羽のいる水路に集まる

○主な観察記録

1948. 09. 02	多摩川	2 羽	
1951. 08. 04	多摩川	1 羽	カワラヒワを鳴きながら追う
1991. 02. 28	野川	6 羽	
1999. 12. 20	多摩川	21 羽	内 1 羽がタヒバリを威嚇する 玉堤 1
2000. 06. 22	多摩川(鎌田 1)	7 羽	幼鳥どうしが中州で飛び上がって争う
2002. 11. 20	多摩川	45 羽	定例調査
2006. 11. 12	多摩川	11 羽	
2007. 11. 07	野川(喜多見 7)	1 羽	流れの浅瀬でエサ捕り中
2010. 04. 29	次大夫堀公園	2 羽	プレハブ物置小屋の上で
2012. 03. 12	多摩川(玉堤 1)	8 羽	1 羽が岸から飛び立って水面の虫を捕り岸に戻る
2012. 10. 16	野川(喜多見 5)	1 羽	カマキリを捕食
2014. 10. 26	次大夫堀公園	2 羽	広場で採食
2015. 03. 23	多摩川(玉堤 1)	1 羽	1 羽が枯草を啜って草が疎らに生えている砂礫地の石の脇に運ぶ
2016. 06. 05	野川(成城 3)	1 羽	親がトンボを捕食
2017. 02. 03	仙川	3 羽	黒橋〜宮前橋間 2 羽、京王線ガード〜大川橋間 1 羽
2018. 10. 19	多摩川(野毛 2)	4 羽	砂礫中洲で採餌
2019. 11. 13	多摩川	25 羽	定例調査
2020. 01. 29	多摩川	30 羽	定例調査
2020. 11. 28	野川(喜多見 8)	2 羽	水辺を「ジジッ ジジッ」と鳴きながら飛び回る

580. ビンズイ *Anthus hodgsoni* Olive-backed Pipit

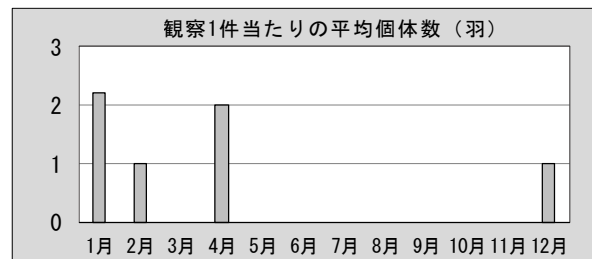
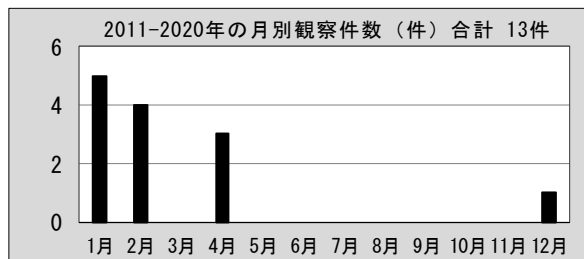
セキレイ科

シベリア西部、中国西部・東部、カムチャツカ、日本などで繁殖する。冬はインドから東南アジア、中国南部、台湾に渡る。日本では、本州中部の山地から北海道にかけて繁殖し、北海道や本州北部では、海岸近くから山地まで観察される。冬は本州中部以南に移動し、四国の山地でも一部繁殖。伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島でも見られる。北海道、本州および九州の一部のものは、亜種カラフトビンズイである。

低地から亜高山の明るい林を好み、特に木が疎らに生える草原や花畑などに生息する。繁殖期は5〜8月

で、年に2回繁殖する。1巣卵数は3～5個。カッコウに托卵されることがある。地上で小群をつくって、歩行しながら、蝶類の幼虫や甲虫、クモ類などを捕食し、冬は主にマツ、タデなどの種子を食べる。

世田谷区には、11月頃に飛来し、翌年の4月頃去る。主に砧公園で2016年まで見られたが、その後は確認されていない。河川や市街地でも同様である。松林の地面での採食や、砧公園や野川での水浴びが観察されている。(全記録数 145 件 1946～2016 年)



○主な観察記録

1946. 04. 13	野毛	1羽	
1954. 10. 25	多摩川(野毛)	5羽	
1960. 12. 28	等々力溪谷公園	1羽	
1985. 05. 08	馬事公苑	1羽	
2003. 11. 12	多摩川	1羽	
2005. 01. 25	砧公園	5羽	松林の下で餌を探している
2006. 11. 29	大原2	1羽	和田堀給水場の北東側の草地で採食
2007. 12. 20	多摩川(鎌田1)	2羽	散策路脇草地の灌木に止まり、すぐ飛び立つ
2008. 12. 21	砧公園	4羽	東名高速柵斜面の下で採食
2010. 12. 08	駒沢オリンピック公園	2羽	
2011. 01. 25	砧公園	3羽	最西側の樹林帯で採餌
2013. 02. 05	桜丘すみれば自然庭園	1羽	初記録 16時頃草地で採食
2014. 02. 17	野川(鎌田3)	1羽	川で水浴び
2014. 02. 18	岡本静嘉堂周辺	1羽	
2014. 04. 22	仙川(給田3)	2羽	京王線ガード直ぐ上流左岸
2014. 12. 02	多摩川(玉川3)	1羽	兵庫島の北西斜面
2015. 04. 01	砧公園	1羽	定例調査
2016. 01. 11	砧公園	1羽	

583. ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus* Red-throated Pipit

セキレイ科

スカンジナビア北部、シベリア、カムチャツカ、アラスカ北西部で繁殖し、インドや東南アジアで越冬する。日本には、北海道では不定期、本州から九州にかけては稀な旅鳥、奄美・琉球諸島には冬鳥として渡来する。

水田、畑、草地、川原、海岸などで見られ、タヒバリより乾いた場所を好む。両足を交互に動かして歩き、地上で採食することが多い。カメムシ、ハチなどの昆虫を好み、冬には雑草の種子も食べる。

世田谷区では稀に冬期に飛渡来する。多摩川の芝生グラウンドや中州で採食しているのが観察されている。(全記録数 17 件 2003～2018 年 2011 年以降 6 件)

○主な観察記録

2003. 11. 18	多摩川(鎌田1)	1羽	グラウンド芝生でヒバリ、ハクセキレイ、タヒバリの群れと採餌 (12/5 まで見られた)
2009. 01. 27	多摩川(鎌田1)	1羽	グラウンドでヒバリ、ハクセキレイ、タヒバリの群れと採食 (2/3 まで見られた)
2013. 12. 09	多摩川(鎌田1)	1羽	第一回冬羽 中州の縁を移動しながら採食
2013. 12. 17	多摩川(鎌田2)	1羽	寄り州でエサを探して動き回っていた
2014. 01. 02	多摩川(鎌田1)	1羽	グラウンド芝地
2018. 03. 06	多摩川(鎌田1)	1羽	冬羽から夏羽へ換羽中 グラウンド芝生でタヒバリ、ハクセキレイの群れの中を時々歩く

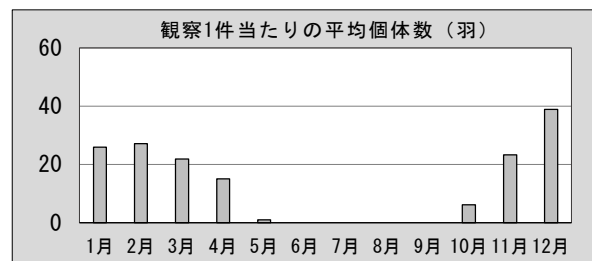
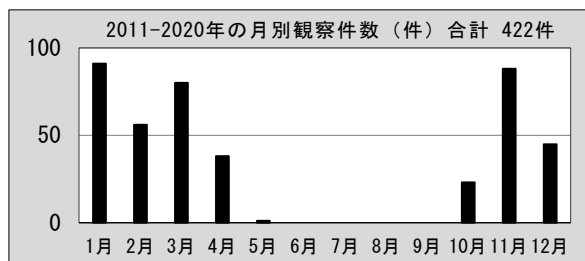
584. タヒバリ *Anthus rubescens* Buff-bellied Pipit

セキレイ科

シベリア中部、カムチャツカ、サハリンやグリーンランド西部、北アメリカで広く繁殖する。冬は東南アジア、インドに渡る。日本には、北海道では旅鳥、本州、四国、九州、琉球諸島など全国に冬鳥として渡来する。

河川、湖沼などの水辺や海岸の波打ち際、農耕地、草原などに多く、水田や雪解けの水溜りにも現われる。渡りの頃は山地の草原に立ち寄り、露出した地面のある所などで見られる。冬は単独か小群でいることが多いが、春には大群になることがある。地上を歩いて採食し、川原では、オサムシ、アブ、バッタなどの昆虫類を採食する。冬には、イネ科、マメ科、キク科など地上に落ちている種子を食べる。

世田谷区では、10月から11月に渡来し、翌年の4月に渡去する。多摩川や野川でよく見られる。その他に仙川、砧公園、浄真寺、桜上水、奥沢など河川、公園、住宅地で観察されている。特に多摩川では個体数が多く、川岸やグラウンドで見られる。グラウンドに飛来したチョウゲンボウやハヤブサを群れて飛翔威嚇した例がある。芝生グラウンドで青虫やイモムシを採食しているのが観察されている。2016年から個体数が減少している。(全記録数 2,263件 1948~2020年)



○主な観察記録

1948. 11. 09	野毛	1羽	
1955. 04. 19	多摩川(野毛)	4羽	一群を見る
1996. 02. 06	仙川	2羽	定例調査
1999. 12. 27	多摩川(上野毛2)	44羽	8羽がハヤブサを上空高くまで追いかける
2002. 05. 06	砧公園	1羽	
2003. 11. 19	多摩川	198羽	定例調査
2006. 11. 15	多摩川	195羽	定例調査
2011. 12. 05	多摩川(鎌田1)	40羽	1羽が芝生グラウンドで2cm位のイモムシを採食
2012. 12. 23	野川(鎌田4)	1羽	川辺を飛翔
2013. 05. 05	奥沢7	1羽	サルスベリの木から隣家の屋根に移動(庭で)
2013. 11. 28	多摩川(鎌田1)	54羽	新二子橋・大エノキ間約500m内の芝生グラウンドで採餌
2014. 01. 14	浄真寺	1羽	地面で採食し、飛び立つ
2014. 02. 17	桜上水3	1羽	雪解けの日大陸上グラウンドに下りていた
2014. 11. 10	多摩川(鎌田1)	33羽	1羽がグラウンド芝生で青虫を採食
2014. 11. 28	多摩川(鎌田1)	60羽	チョウゲンボウがグラウンドの高さ10m位に飛来すると、12羽が芝地から飛び立ち威嚇する
2015. 11. 17	多摩川(鎌田1)	64羽	新二子橋上流芝地一帯に広がって採餌
2016. 03. 22	多摩川(鎌田1)	55羽	内22羽が生殖羽に変わっている。
2018. 11. 10	多摩川(鎌田1)	41羽	新二子橋上流芝グラウンド サッカー場立ち入り禁止ロープ内で採餌移動
2020. 11. 11	多摩川	29羽	定例調査

◆ アトリ科 FRINGILLIDAE

586. アトリ *Fringilla montifringilla* Brambling

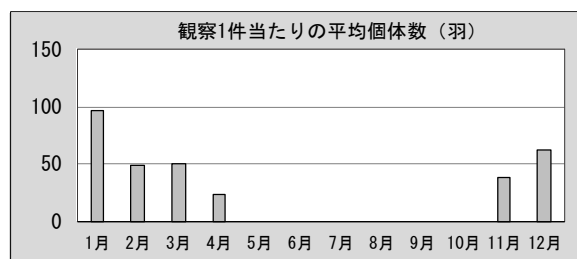
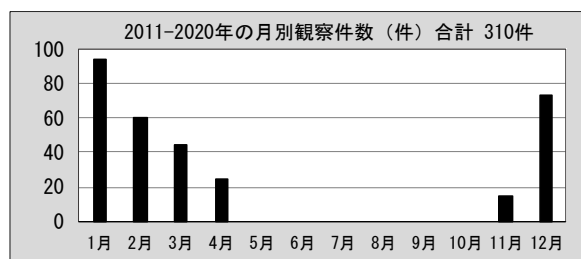
アトリ科

スカンジナビアからカムチャツカ、サハリンにかけての亜寒帯で繁殖し、北アフリカ、ヨーロッパから小アジア、中央アジア、ロシア沿海地方、中国南部、日本で越冬する。日本には、冬鳥として本州、佐渡、

四国、九州、対馬、伊豆諸島、奄美大島、琉球諸島に渡来し、北海道では旅鳥である。

渡来初期には山地の森林で過ごし、その後雑木林や農耕地に移動する。時には数千、数万の大きな群れになることがある。ナナカマド、ズミなどの実を好み、カエデ類、ケヤキ、モミなどの種子も食べる。水田や川原では雑草の種子を採食することもある。

世田谷区では、11月頃から翌年の4月頃に見られる。砧公園、次大夫堀公園、豪徳寺、蘆花恒春園などで群れをなしているのが観察されている。渡来数は年によって変動が大きく、観察されない年もある。2008年から2009年にかけての冬には、大きな群れが見られ、特に砧公園では500羽を超える観察記録がある。フウの実、ケヤキやヤマグワの新芽、カエデの花などの採食や水浴びしているのが観察されている。(全記録数 456件 1951～2019年)



○主な観察記録

1951. 03. 18	等々力溪谷公園	8羽	谷沢山
1999. 01. 13	砧公園	1羽	
2001. 01. 30	多摩川(玉堤 1)	8羽	カワラヒワ約 60羽の群れと川原の草地を移動
2003. 01. 06	砧公園	180羽	
2003. 03. 03	仙川	10羽	
2004. 01. 07	砧公園	30羽	定例調査
2008. 12. 01	次大夫堀公園	12羽	
2008. 12. 21	砧公園	230羽	三橋周辺で主に地面に降りて採食、時々一斉に飛び立ち樹上に
2009. 01. 02	蘆花恒春園	70羽	トンボ池で水浴びしたり、高木樹林帯(フウ)にぶら下がり実を採食
2009. 01. 07	砧公園	583羽	定例調査
2009. 03. 08	大蔵運動公園	20羽	群れでケヤキの新芽をついばむ
2009. 04. 10	蘆花恒春園	2羽	モミジの花を食べていた
2013. 03. 19	多摩川(玉堤 1)	5羽	雄2、雌3羽 散策路のヤマグワの新芽を採食
2015. 01. 19	砧公園	170羽	サンクチュアリ 100羽一の橋近く 70羽がカワラヒワ、シメと共に
2016. 11. 23	成城 4	150羽	アトリの約 150羽の群れが神明橋上空を通過しビジターセンター駐車場のケヤキに下り採食
2016. 12. 12	多摩川(鎌田 1)	164羽	135羽が中州河原でイヌタデ種子を採食、上野毛 2. 18羽が散策路脇のエノキ頂で冬芽を採食
2016. 12. 29	浄真寺	500羽	地面で 1群になりケヤキの実などを採食。そのご一斉に飛び上がり桜の木々に止まる
2017. 01. 31	砧公園	1,524羽	
2019. 02. 18	砧公園	128羽	120羽の群れが中央林の地面で採食

587. カワラヒワ *Chloris sinica* Oriental Greenfinch

アトリ科

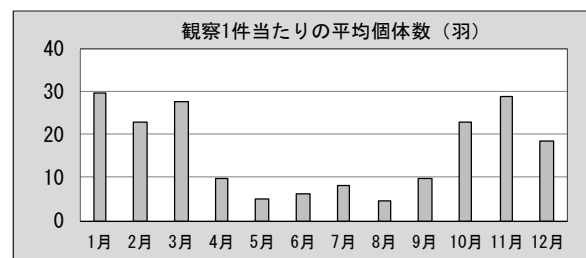
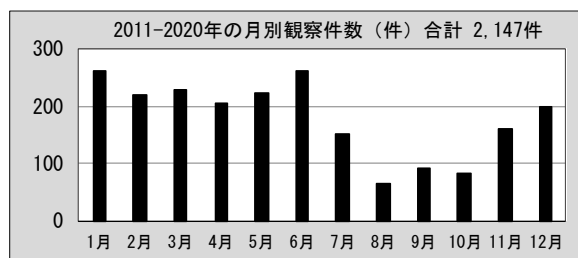
カムチャツカ、サハリン、中国北東部、日本で繁殖し、冬には南へ渡る。日本では、北海道では夏鳥で、冬は温暖な地方に移動する。本州、佐渡、四国、九州では留鳥である。小笠原諸島、硫黄列島のものは亜種オガサワラカワラヒワである。

疎林、農耕地、雑木林、河川敷、住宅地に生息する。繁殖期には、平地から低山帯の林で見られるが、非繁殖期には、主な生息地を河原に移す。繁殖期は3～7月で年に1～2回繁殖する。1巣卵数は2～5個。巣づくりは雌が行ない、縄張りの中のスギ、ヒノキ、マツ、モミ、サクラなどの樹木につくる。街路樹にも営巣することがあり、動物の毛や草などの他にビニール、毛糸のような人工物も巣材として使われる。

抱卵は雌だけが行い、雄は抱卵中の雌に餌を運ぶ。抱卵日数は12～15日、ヒナは12～17日で巣立つ。キク科、イネ科、タデ科、マメ科などの種子を主として採食し、ヒナには種子の胚乳を主に与える。

世田谷区では、一年中見られ、繁殖もしている。砧公園、馬事公苑、駒沢オリンピック公園、蘆花恒春園、次大夫堀公園、岡本静嘉堂周辺などの公園や多摩川、野川、仙川、樹木の多い住宅地など広い範囲で見られる。1948年から生息記録はあるが、1972年に初めて繁殖が記録され、1997年からはほぼ毎年繁殖が確認されている。個体数は冬に多くなり、多摩川では大きな群れが見られる。街路樹や住宅地の低木、多摩川の草地で繁殖し、草地にあるトウネズミモチの巣にいる雛に給餌しているのが観察されている。5月下旬から6月中旬には、巣立ち雛が見られ、夏期は一時的に個体数が増加する。草地でスズメノカタビラ、タンポポ、カラシナ、イヌタデ、オオブタクサなどの種子などを採食しているのが観察されている。

(全記録件数 6,882件 1948～2018年)



○主な繁殖記録

1972. 09. 01	瀬田 1	1 巣	雛 4 羽	写真	環状 8 号線街路樹のトウカエデで繁殖	給餌
1999. 06. 21	玉川台 2	1 巣	巣立ち雛 3 羽		樹上の巣で雛の鳴き声	
2007. 06. 07	駒沢オリンピック公園	1 巣	巣立ち雛 4 羽			
2008. 06. 25	蘆花恒春園	1 巣	ジンチョウゲに成鳥 1 羽が飛び込み、中で雛が盛んに鳴く			
2010. 08. 06	千歳台 4	1 巣	巣立ち雛 3 羽		街路樹の巣から巣立ちし成鳥 2 羽から給餌を受け、飛んでいく	
2014. 07. 03	赤堤 5	1 巣	巣立ち雛 3 羽		木の低い所を飛んだり落ちたりする。街路樹のトウネズミモチに営巣	
2015. 06. 08	多摩川(野毛 2)	1 巣	草地のトウネズミモチに枯草の巣あり、大きくなった雛 4 羽に雌雄親が代る		がわる給餌	
2016. 06. 14	多摩川(玉堤 2)	1 巣	1 羽が草地のサクラ茂みの中に入ると巣があり抱卵している。巣は枯草や小枝、羽毛などからできている			
2017. 05. 15	多摩川(野毛 2)	1 巣	成鳥雌雄、雛 4 羽。雌 1 羽が川原でカラシナ種子を食べ、草地のトウネズミモチの巣に入り雛に給餌する。雄は巣から 10m 位離れたオニグルミ頂で轉る。巣は約 15cm の椀型。枯草、羽毛			
2018. 05. 21	多摩川(野毛 2)	1 巣	雌が川岸斜面草地のトウネズミモチの巣で抱卵 6/4 に雛 3 羽			
2020. 06. 08	多摩川(玉堤 1)	1 巣	雄が散策路脇のサクラの横枝に一旦止まり葉の陰の巣に入り抱卵中と思われる雌に給餌する 6/29 巣立ち雛			

○主な観察記録

1948. 09. 30	等々力	47 羽	
1968. 09. 14	野毛	35 羽	等々力ゴルフ場付近のケヤキに飛来
1992. 06. 29	野川	49 羽	定例調査
2001. 01. 10	砧公園	250 羽	
2003. 11. 06	多摩川	1,072 羽	イヌタデの種子を啄む
2006. 11. 10	多摩川(鎌田 1)	100 羽	オオブタクサの先に止まり種子を採餌 オギの海
2010. 01. 22	祖師谷公園	2 羽	1 羽が樹上でビーンと何度も轉る
2011. 04. 18	多摩川(鎌田 1)	143 羽	うち 70 羽の群れがグラウンドでタンポポの種子を採食
2012. 11. 30	多摩川(玉川 3)	120 羽	中州のアカザ、タデの群落に止まり、次へと移動
2014. 05. 08	野川(喜多見 5)	3 羽	セイヨウカラシナの実を採食
2014. 11. 17	多摩川(野毛 2)	219 羽	うち 12 羽が散策路脇でヨモギの種子を採食
2015. 01. 10	成城三丁目緑地	17 羽	群れて地面に落ちている木の実、草の実など漁っている
2015. 02. 07	砧公園	150 羽	野球場の芝地に降りて採餌中、飛び上がって近くのケヤキに止まる
2015. 04. 06	多摩川	74 羽	うち 46 羽が芝地グラウンドでスズメノカタビラの種子を採食
2016. 01. 04	多摩川(鎌田 1)	120 羽	10 羽が草地でコセンダングサの種子を採食
2016. 04. 03	多摩川(鎌田 1)	252 羽	新二子橋上流芝地グラウンド 1 群で採餌移動

2017. 03. 28	多摩川(鎌田 1)	198 羽	新二子橋上流芝地 1 群または2 群で採餌 時々一斉に飛び移動
2017. 11. 08	多摩川	201 羽	定例調査
2018. 01. 28	砧公園	110 羽	ケヤキ・アキニレの巨木の下で種子を採食
2019. 03. 26	多摩川(鎌田 1)	165 羽	B 野球場近くの芝地 1 群で採餌・飛翔移動を繰り返す
2019. 11. 13	多摩川	130 羽	定例調査
2020. 12. 30	喜多見 7	10 羽	イチョウの木に止まっていた

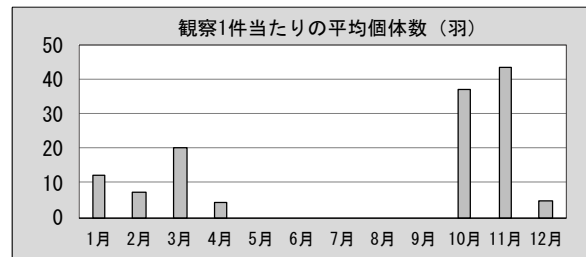
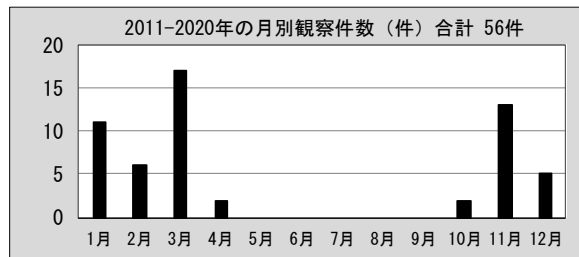
588. マヒワ *Carduelis spinus* Eurasian Siskin

アトリ科

ヨーロッパ北部からシベリア西部、サハリン、本州北部にかけて繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ北西部、西南アジア、中国南東部で越冬する。日本では、北海道で留鳥、本州北部・中部では少数が繁殖するが、本州南部、四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島では冬鳥である。

渡来初期には、亜高山帯のシラビソ、コメツガなどの針葉樹林で大群が見られる。冬期には山麓のカラマツ林や落葉広葉樹林、雑木林などに群れて生息する。繁殖期は5～7月、1 巣卵数は6～7 個。カバノキ、モミなどの林に枯れ草で碗形の巣をつくる。越冬期には、ハンノキ類の木や草の種子を採食する。数十羽の群れて採食することが多い。

世田谷区では、11 月頃から翌年の3 月頃にかけて見られる。渡来数は年によって変動が大きく見られない年もある。砧公園、蘆花恒春園、祖師谷公園、多摩川などではヨモギ、サルスベリ、カツラ、フウ、コスモス、アカジソなどの実や種子を採食しているのが観察されている。(全記録数 129 件 1953～2018 年)



○主な観察記録

1953. 04. 14	野毛	12 羽	
1976. 03. 01	馬事公苑	20 羽	
1995. 03. 14	多摩川(鎌田 1)	150 羽	群れが草原を移動
2003. 12. 05	多摩川(鎌田 1)	6 羽	草原でカワラヒワの群れと一緒に飛び回る
2004. 04. 03	仙川	22 羽	
2007. 03. 17	多摩川(鎌田 1)	4 羽	草原をカワラヒワと飛び交う
2011. 02. 25	祖師谷公園	16 羽	樹林帯の細流で水浴び
2011. 03. 01	駒沢オリンピック公園	32 羽	カツラの実を採食後移動
2011. 03. 15	桜上水 5	18 羽	養木林のサルスベリの実に群がり採食
2012. 11. 02	成城 4	90 羽	コスモスの種を採食 近くの電線に止まっていた
2012. 11. 07	野川	60 羽	ビジターセンター横の野川の木に群れが飛来、水飲みに来たのか落ち着かない内に飛び去った
2012. 11. 16	祖師谷 6	200 羽	集団で畑のアカシソの実を食べていた (11/26 まで観察)
2012. 11. 25	千歳台 6	150 羽	塚戸小近くの栗とアカジソ畑 アカジソの実を採食
2013. 01. 17	蘆花恒春園	30 羽	フウの木で採餌 何かに驚くと一斉に飛び立ち、また元の所に戻る
2013. 03. 05	多摩川(鎌田 1)	25 羽	8 羽が草原のヤナギで羽づくろい 10 羽は草原のヨモギの種子を採食
2016. 12. 05	多摩川(上野毛	4 羽	中州の草地に降りる。
2017. 01. 16	砧公園	7 羽	7 羽が一斉に枝から飛び立った
2018. 01. 15	多摩川(玉堤 1)	3 羽	雄 1、雌 2 羽 (玉堤 1)

589. ベニヒワ *Carduelis flammea* Common Redpoll

アトリ科

ヨーロッパ北部からカムチャツカにかけて北半球の亜寒帯から寒帯に広く繁殖し、ヨーロッパ南部など中緯度地方で越冬する。日本には冬鳥として、主に北海道に渡来し、本州中部以南では稀である。渡来する個体数は、年による変動が大きく、ほとんど渡来しない年もある。

明るい林や草原、農耕地に飛来し、十数羽から数十羽の群れで行動する。ハンノキ、シラカシなどの堅果をつついて、中の種子を食べる。また、雪の積もった草原でシソ科、アカザ科、タデ科、キク科などの草の種子も食べる。

世田谷区では、下記4例の記録がある。(全記録数 4 件 2004、2009、2012 年 2011 年以降 2 件)

○観察記録

2004. 04. 03	仙川	1 羽	マヒワの群れの中
2009. 11. 05	多摩川(鎌田 1)	1 羽	成鳥雄 草地の広がるヨモギの先端に止まっていたが、「ジュジュ」と鳴いて飛び立つ
2012. 12. 10	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雄、雌 川岸のヨシやヨモギの種子を啄む (12/18 には雄 1、雌 3 を観察)
2012. 12. 18	多摩川(玉堤 1)	4 羽	雄 1 羽、雌 3 羽

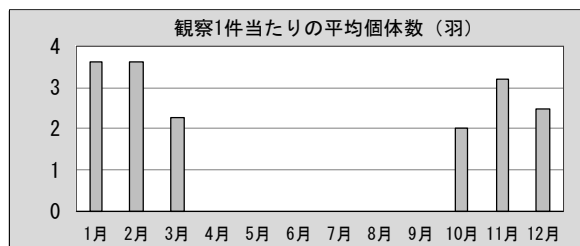
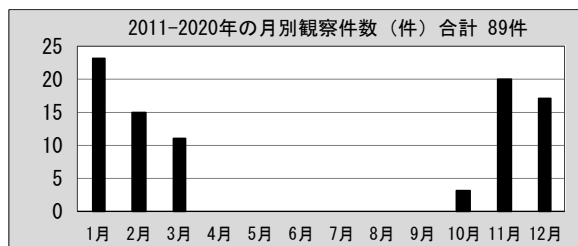
592. ベニマシコ *Uraquus sibiricus* Long-tailed Rosefinch

アトリ科

シベリア南部、モンゴル北部、中国東・中部、ウスリー、サハリン、日本北部で繁殖し、冬に南に渡る。日本では、北海道と下北半島で夏鳥として繁殖し、本州、四国、九州では冬鳥である。

繁殖地では、平地や低山帯の河川沿い、湿原周辺の雑木林、広葉樹の疎林内のやぶ、農耕地や牧草地周辺に生息している。繁殖期は5～7月、1巣卵数は3～6個。冬期は、低山帯の林縁、疎林、農耕地や川辺などのやぶの多い所で、数羽の小群で行動する。セイタカアワダチソウ、イタドリ、イネ科などの種子、ヤナギの花穂、昆虫類などを採食する。

世田谷区では、11月頃から翌年の3月頃まで観察されている。以前は稀であったが、2007年から毎年多摩川で観察されるようになり、野川で観察された例もある。川原の草地でヨモギ、セイタカアワダチソウ、オオバクサの種子の採食が見られている。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 103 件 1984～2020 年)



○主な観察記録

1984. 11. 03	上野毛	1 羽	雌
1992. 11. 09	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌
1996. 11. 22	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雌 (12/8 まで観察)
2002. 11. 09	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雌 オギの海
2004. 03. 29	多摩川(玉川 1)	2 羽	雌雄 中州の草地を移動
2007. 01. 18	多摩川(玉川 1)	1 羽	雄が中州の草地を移動
2009. 12. 02	多摩川(野毛 1)	1 羽	雌 散策路脇のサクラの枝に止まり「フィッヒッポガ」と鳴く
2011. 12. 05	多摩川(鎌田 1)	2 羽	雌が草原の枯れたヨモギの先でフィッフィッと鳴き飛び立つ 雄が川岸近くのアシの穂に止まってッピッポッと鳴く
2012. 12. 10	多摩川(鎌田 1)	3 羽	雄 1、雌 2 羽 雄 1 羽は草原のヨモギの種子を啄む
2013. 01. 07	多摩川	14	
2014. 01. 02	多摩川	18	6 羽が草原でセイタカアワダチソウの種子を採食
2015. 02. 04	野川	1 羽	定例調査
2015. 11. 24	多摩川(鎌田 1)	4 羽	雄 1、雌 3 羽が草原でヨモギの種子を採食

2016. 03. 27	多摩川(鎌田 1)	3 羽	オギの海最下流草原付近散策路の樹木
2017. 10. 31	多摩川(玉堤 1)	3 羽	雄 1 羽、雌 2 羽が草原縁のヨモギ種子を採食
2019. 02. 12	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雌が草原で倒れたオオブタクサの種子を採食
2020. 12. 07	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌雄が草地でヨモギ種子を食べる

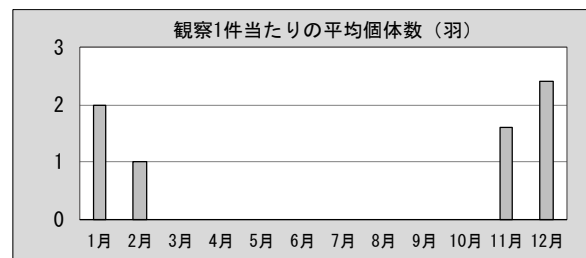
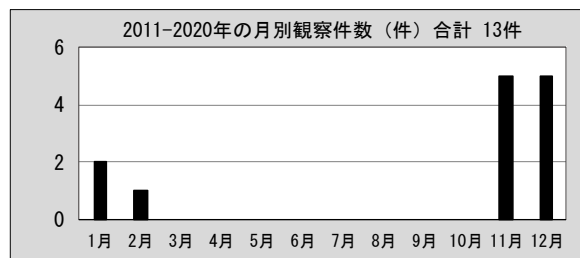
599. ウソ *Pyrhula pyrrhula* Eurasian Bullfinch

アトリ科

ヨーロッパ西部からウスリー、カムチャツカに至るユーラシア大陸の中緯度、日本北部で繁殖する。冬期には温暖なユーラシア大陸南部に渡る。日本では、北海道、本州北部・中部で留鳥、本州南西部、佐渡、四国、九州で冬鳥である。北海道、本州および九州の一部のものは亜種ベニバラウソ、北海道、本州、四国、九州、対馬、伊豆諸島のものは亜種アカウソである。

針葉樹林や針広混交林に生息し、冬は標高の低い山地や丘陵地、市街地の公園などに移動する。本州中部以北の亜高山針葉樹林帯から北海道にかけて繁殖する。繁殖期は 5～8 月で、1 回ないしは 2 回繁殖する。巣づくりは雌だけが行い、亜高山帯のオオシラビソやコメツガなどの針葉樹の地上から 1～3m 位の所に、枯れ草やサルオガセなどで碗形の巣をつくる。1 巣卵数は 4～6 個で、抱卵は雌だけが行なう。春先は数羽から十数羽の群れになり、サクラやウメの花のつぼみを採食し、ほかに木の芽も食べる。

世田谷区では、11 月頃から翌年の 3 月頃まで見られる。2006 年～2007 年の冬期に砧公園や桜丘すみれば自然庭園など区内各地で観察されている。個体数は少ない。その後 2012、2014、2015 年に観察されている。サクラの芽、トウネズミモチやムラサキシキブの実を採食しているのが見られている。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 35 件 2006～2019 年)



○主な観察記録

2006. 11. 26	砧公園	8 羽	サンクチュアリ内の垂れ下がる枯れたクス付近で飛び回る
2007. 01. 13	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	
2007. 01. 26	多摩川(玉川 3)	4 羽	雄 3、雌 1 羽が兵庫島公園の木々を鳴きながら移動
2007. 02. 02	砧公園	2 羽	亜種アカウソ
2007. 02. 08	駒沢オリンピック公園	2 羽	
2007. 03. 19	等々力溪谷公園	1 羽	
2012. 12. 02	砧公園	3 羽	桜の芽を採食
2012. 12. 11	砧公園	5 羽	トウネズミモチの実や桜の芽を採食
2014. 11. 14	砧公園	1 羽	木止まり 休息
2014. 11. 29	成城三丁目緑地	3 羽	ムラサキシキブの実を採食
2015. 01. 05	高源院	2 羽	
2016. 12. 05	多摩川(野毛 2)	2 羽	亜種アカウソ雌雄が堤のサクラ冬芽を次々に食べる。野毛 2。
2019. 01. 07	多摩川(玉川 3)	2 羽	雌 亜種ベニバラウソ 兵庫島南西斜面でサクラの冬芽を食べる
2019. 02. 18	砧公園(西地区)	1 羽	野草園川沿い奥からフィフィフィと鳴く声

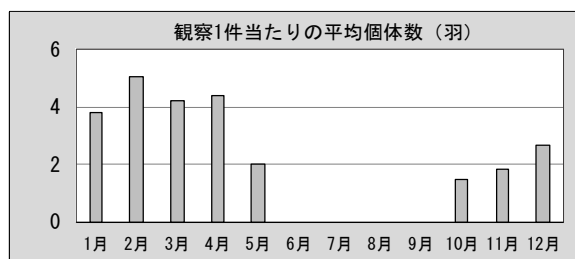
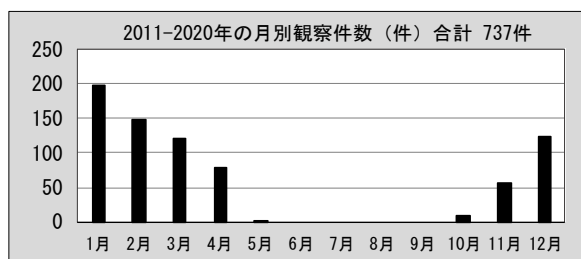
600. シメ *Coccothraustes coccothraustes* Hawfinch

アトリ科

西ヨーロッパから北西アフリカ、ユーラシア大陸北部、サハリン、カムチャツカ南部、日本北部で繁殖し、冬期に南へ渡る。日本では、北海道では夏鳥。本州、佐渡、四国、九州、対馬、伊豆諸島、奄美大島、琉球諸島では冬鳥である。北海道、本州の一部のものは、亜種シベリアシメである。

主に落葉広葉樹林や雑木林などの明るい林や農耕地で越冬するが、市街地の公園や庭にも飛来する。繁殖期は5～8月、年に2回繁殖し、1巣卵数は3～6個。堅い木の実や種子を太い嘴で割って食べ、甲虫類も採食する。渡来初期や渡去前には数十羽の群れをなすことがあるが、冬期には単独で行動することが多い。

世田谷区では、11月頃渡来し、翌年の4月頃渡去する。年によって渡来する個体数の変動が大きい。公園、河川、住宅地などで広範囲にわたり観察されている。サクラ、イヌシデ、エノキ、ケヤキ、ムクノキ、オオブタクサなどの実や種子を採食しているのが見られている。(全記録件数 2,232件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 03. 29	多摩川	1羽	
1996. 02. 27	野川	1羽	定例調査
2000. 03. 23	成城みつ池緑地	2羽	
2003. 12. 24	瀬田4	2羽	国分寺崖線の中 ムクノキの堅く乾燥した実を食べていた
2008. 11. 30	等々力渓谷公園	3羽	イヌシデの実を食べている
2009. 05. 05	砧公園	1羽	雌 サクラの実を種をはずして食べる
2009. 12. 30	砧公園	10羽	地上で嘴で枯れ葉をはねのけて採食
2010. 04. 01	成城三丁目緑地	36羽	
2011. 02. 08	駒沢オリンピック公園	5羽	
2012. 11. 04	上北沢2	4羽	将軍池公園 エノキの実を食べていた
2013. 03. 25	多摩川(玉川3)	6羽	1羽がハリエンジュの幹の皮を剥ぐ
2014. 03. 26	次大夫堀公園	1羽	公園の最北部の樹木にとまる 嘴が鉛色に移行中
2014. 11. 28	多摩川(玉堤1)	3羽	2羽が草地でオオブタクサの種子を採食
2015. 04. 01	砧公園	34羽	定例調査
2016. 01. 06	砧公園	23羽	定例調査
2016. 02. 19	砧公園	16羽	地上で採餌
2017. 03. 13	砧公園	13羽	内8羽が1群で行動
2018. 12. 03	仙川	3羽	セキレイ橋よこの桜の木で地鳴きを繰り返す
2019. 01. 04	祖師谷公園	2羽	ケヤキの実を採食
2019. 01. 13	砧公園	38羽	30羽の群れが木々を移っていった
2019. 02. 15	砧公園	216羽	内、204羽(写真で確認)が群れで木々を移動し、2本の樺の枝にとまってから「地面に降りて採食・枝に戻る」を繰り返す
2020. 01. 25	祖師谷公園	2羽	1羽は地面で、1羽はハリエンジュの木の枝で採食
2020. 12. 29	将軍池公園	1羽	エノキの残り実を採食

601. コイカル *Eophona migratoria* Chinese Grosbeak

アトリ科

アムール川流域、中国北東部で繁殖し、中国南部、朝鮮半島、日本、台湾で越冬する。日本には、冬鳥として本州、四国、九州、屋久島に渡来する。

平地の疎林や農耕地に生息する。習性はイカルに似ていて、10～20羽の群れで生活するが、イカルの群れの中に少数のコイカルが混じることもある。冬は、大きな嘴で樹上のあるいは地上に落ちたヌルデ、ハゼ、サクラ、カエデ等の実や種子を食べる。

世田谷区では、下記4例の記録がある。(全記録数 5件 1995～2015年 2011年以降 2件)

○観察記録

1995. 12. 25	大蔵 4	1 羽	区総合グラウンド西側の雑木林の木の実を食べていた
1999. 05. 13	多摩川(玉川 1)	1 羽	雄 細い声で囀る 2〜3 分で飛び去る
2015. 03. 09	多摩川	1 羽	雄 細い流れにせり出したエノキで休息
2015. 04. 09	砧公園	1 羽	木止まり

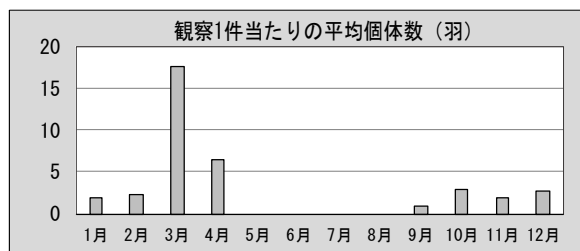
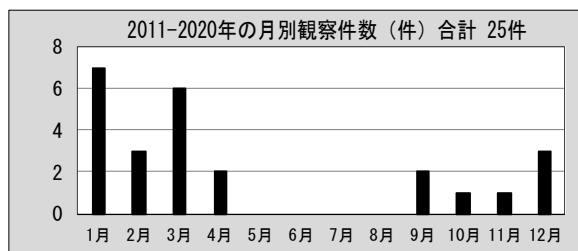
602. イカル *Eophona personata* Japanese Grosbeak

アトリ科

アムール川流域、中国東北部、日本で繁殖し、冬期は暖地へ移動する。日本では、北海道、本州、四国、九州で留鳥である。屋久島では冬鳥。

落葉広葉樹林、針広混交林で繁殖し、冬は疎林、低木林、農耕地などに生息する。繁殖期は5〜7月で、広葉樹の高さ5〜7m位の枝上に小枝、枯れ草、コケ類を用いて碗形の巣をつくる。1巣卵数は3〜4個。雌雄で育雛する。繁殖期には雌もさえずる。大きな嘴で樹上または地上に落ちたヌルデ、ハゼ、サクラ、カエデなどの木の実や種子を主に食べる。マメ科の鞘、ヒマワリなどの堅い種子などを嘴に挟んで割って採食したり、繁殖期には昆虫も食べる。

世田谷区では、9月頃から翌年の5月頃まで見られる。馬事公苑、砧公園、蘆花恒春園など各地で観察されており、さえずりも聞かれている。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 56 件 1966〜2020 年)



○主な観察記録

1966. 12. 28	岡本 1	1 羽	水田上空を飛翔
1978. 03. 06	駒沢オリンピック公園	1 羽	
1992. 02. 08	馬事公苑	1 羽	
2001. 11. 08	砧公園	2 羽	暖かい日に鳴き合っていた
2003. 03. 05	成城 2	1 羽	庭木の樹冠部 カワラヒワの中にいた
2005. 04. 26	蘆花恒春園	13 羽	囀っている個体もいた
2006. 10. 04	大蔵 3	1 羽	ケヤキの樹冠部で鳴いていた
2006. 10. 14	野毛 2	9 羽	
2009. 01. 08	砧公園	20 羽	
2009. 03. 24	桜丘すみれ自然庭園	1 羽	紅葉の下にいた
2011. 01. 21	砧公園	4 羽	地面で採食
2011. 10. 26	多摩川(玉堤 2)	3 羽	川崎側から飛来
2012. 09. 22	駒沢オリンピック公園	1 羽	さえずり
2016. 02. 19	砧公園	4 羽	常緑樹中で長時間鳴いた後、4羽飛び立つ。1羽が隣の枯れ枝にとまる。
2016. 03. 15	砧公園	66 羽	何かに驚き雑木林から四の橋方向 40羽が飛び立つ 26羽が雑木林に残った
2017. 02. 13	多摩川(玉川 3)	2 羽	河畔林のトウネズミモチ枝先
2018. 03. 19	多摩川(玉堤 1)	14 羽	群れが世田谷市街方向から飛来し中州のヤナギに降りる
2020. 01. 27	多摩川(鎌田 1)	2 羽	草地灌木から西方向へ飛び立つ

◆ ツメナガホオジロ科 CALCARIIDAE

603. ツメナガホオジロ *Calcarius lapponicus* Lapland Bunting

ツメナガホオジロ科

ユーラシア大陸北部から北アメリカ大陸北部、グリーンランドにかけて繁殖し、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の中緯度地方に渡って越冬する。日本には、北海道、本州、九州に渡来する稀な冬鳥である。

比較的本州中部以北に多い。

農耕地、水田、干拓地など露出土の多い草付きの荒れ地状の所や海岸部の草地等に渡来する。地上で草の種子をついばむ。ユキホオジロやハギマシコの群れに混じって採食することが多い。

世田谷区では、下記3例の記録がある。(全記録数7件 1943、1998、2016年)

○観察記録

1943. 04. 06	多摩川(玉堤)	1羽	雄
1998. 01. 10	多摩川(上野毛2)	1羽	雄、降雪後の散策路や杭に止まる (1/21まで観察された(鎌田1))
2016. 11. 07	多摩川(鎌田1)	1羽	成鳥雄冬羽がグランド芝生で採餌するがハクセキレイに威嚇される

◆ ホオジロ科 EMBERIZIDAE

609. シラガホオジロ *Emberiza leucocephalos* Pine Bunting

ホオジロ科

ロシア、モンゴル、中国西北部で繁殖し、イラン南西部から中央アジア南部、アフガニスタン、インド北西部、中国北部、モンゴルで越冬する。日本はシラガホオジロの越冬地の外れにあたり、ごく少数が冬鳥として渡来する。北海道、本州、九州で10月頃から翌年5月頃にかけて観察される。

開けた藪地、林縁、林内の空地や草原状の所で見られる。繁殖地では草原、灌木草原、疎林に生息し、地上でイネ科などの種子を採食する。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数1件 2002年)

○観察記録

2002. 12. 20	多摩川(鎌田1)	3羽	雄1、雌2羽が草原の裸地でホオジロ5羽と採餌

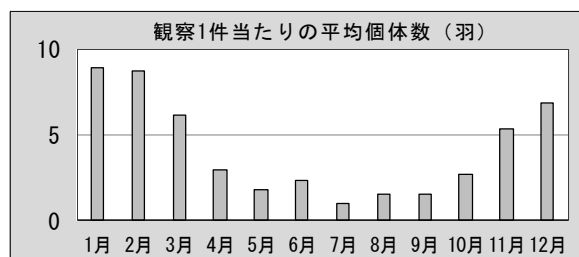
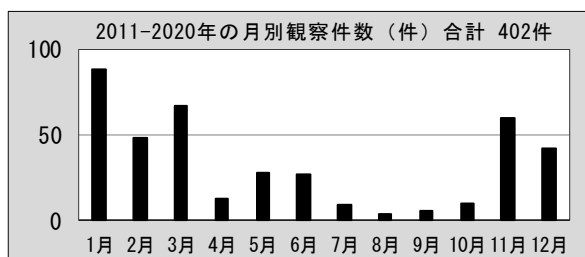
610. ホオジロ *Emberiza cioides* Meadow Bunting

ホオジロ科

モンゴル、ウスリー、サハリン南部、中国東部、朝鮮半島、日本に分布・繁殖する。日本では、北海道で夏鳥。本州、佐渡、四国、九州、対馬、伊豆諸島で留鳥。小笠原諸島や奄美大島、琉球諸島では稀である。

平地や低山帯の、特に山麓の斜面のような所に多い。集落、農耕地、牧草地などの周辺の藪地や疎林、植林、色々なタイプの樹林の林縁で見られる。繁殖地では、冬でもつがいにいる個体が多い。繁殖期は4～9月で年に1～3回繁殖する。1巣卵数は3～5個、抱卵は雌のみが行い、雄は警戒にあたり盛んにさえずる。地上や藪の小枝の又に置くように、枯れ草、草の根、枯れ葉などで碗形の巣をつくる。地上で採食することが多くイネ科、タデ科、キク科、マメ科などの種子や昆虫も食べる。

世田谷区では一年中生息しているが、多くは10月から11月に飛来し、2月から3月に移動が始まり、夏期は少数のみが見られる。主に多摩川と野川下流で見られるが、仙川や砧公園、盧花恒春園、次大夫堀公園、千歳台、桜上水などで観察されたこともある。繁殖は1940～1960年代に等々力溪谷公園や深沢などで3例の記録があるが、1996年から2013年の繁殖期にさえずりや巣材運び、幼鳥が観察されているので繁殖していた可能性がある。2015年に多摩川で約50年ぶりに繁殖が確認されたのに続き、2016、2018、2019年にも観察された。河原や草地、林縁で見られる。(東京都区部：絶滅危惧IB類 全記録数 2,286件 1946～2020年)



○繁殖記録

1947. 04. 25	等々力溪谷公園	1 巣	1 卵 ツゲに営巣 滝の山
1959. 05. 13	深沢 5	1 巣	1 巣 3 雛孵化後 2 日目くらい 園芸高校茶畑で発見
1962. 05. 19	等々力溪谷公園	1 巣	雛 4 羽 孵化 滝の山
2015. 06. 08	多摩川(玉川 1)	1 巣	雄は草地のヤナギで囀り、雌は草地から虫を咥えてヤナギ近くの草地に 2 度入る(6/23 幼鳥を観察)
2016. 06. 27	多摩川(鎌田 2)	1 巣	雌が巣立ち雛に白く細い幼虫を採り給餌する(8/28 草原の細道に雌と幼鳥 1 羽観察)
2018. 06. 12	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雌雄と鹿立ち雛 3 羽、草原を歩きながら雌が時々給餌
2019. 06. 17	多摩川(鎌田 1)	1 巣	雌がエノキ下部の藪に虫を咥えて 2 度入る。複数の雛の鳴き声が続く

○主な観察記録

1946. 04. 01	等々力溪谷公園	2 羽	雌雄 谷沢山にて見る
1951. 07. 02	野毛 2	1 羽	幼鳥自宅付近に来る
1968. 07. 18	岡本	1 羽	囀りを聞く
1996. 07. 13	多摩川	1 羽	幼鳥(7 月末まで観察)
1997. 04. 03	多摩川(野毛 2)	5 羽	雌 1 羽が草地で枯れ草をロー杯に咥えている
2000. 06. 12	成城 2	1 羽	テレビアンテナの上で囀る
2003. 05. 01	砧公園	2 羽	1 羽囀る
2005. 04. 17	千歳台 4	1 羽	囀り
2007. 12. 18	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	
2008. 02. 07	仙川	1 羽	
2009. 11. 15	桜上水 3	2 羽	北沢川緑道のカツラの木で地鳴きを繰り返す
2010. 12. 30	蘆花恒春園	1 羽	調査開始以来の初
2012. 07. 18	多摩川(鎌田)	1 羽	雄 草原の 4m 位のヤナギ先で囀る
2014. 02. 17	多摩川	75 羽	
2016. 12. 07	野川	10 羽	定例調査
2017. 12. 20	砧公園	1 羽	
2019. 12. 24	多摩川(鎌田 1)	3 羽	流木に 3 羽 1 群でとまる。雄 2、雌 1、すぐに土手方向の樹木に移動
2020. 05. 05	多摩川(鎌田 1)	2 羽	雄が草地のオニグルミ頂で囀り、雌が動物の毛を咥えている

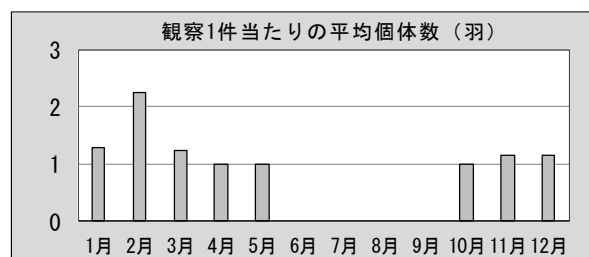
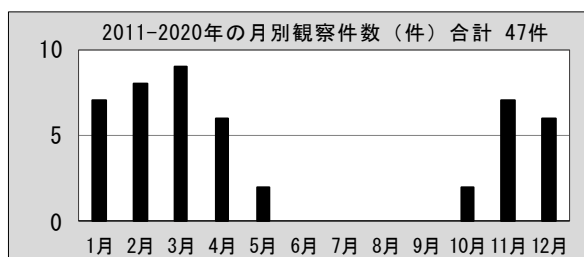
614. ホオアカ *Emberiza fucata* Chestnut-eared Bunting

ホオジロ科

ヒマラヤ西部、中国北東部および南部、シベリア南東部、モンゴルで繁殖し、朝鮮半島南部、日本からインドシナ北部で越冬する。日本では、夏鳥として北海道に渡来し繁殖する。本州と九州の一部では留鳥として繁殖するほか冬鳥とした渡来するものもある。四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美大島、琉球諸島では冬鳥である。

平地、低山帯、亜高山帯の草原に生息する。山地草原、牧草地、河川敷の草原、海岸草原、干拓地、藪のまばらな草原など、あらゆる草原で見られるが比較的草丈の低い乾いた所に多い。繁殖期は 5～7 月で、草むらの間や草株の上、藪の枝の上などに碗形の巣をつくる。ヒナへの給餌はほとんど昆虫で、チョウ類やバッタ類が多い。草が茂る地上や低木、藪の茂みなどでイネ科、タデ科などの種子を食べる。

世田谷区では、10～11 月に飛来し、翌年の 3～4 月に去る。過去に住宅地の岡本で観察されたことがあるが、1990 年以降は全て多摩川で観察された。ほぼ毎年数羽が河川敷の草丈が低い草地で見られる。2006 年 4 月下旬にさえずりが聞かれたことがある。(全記録数 221 件 1952～2020 年、2011 年以降 47 件)



○主な観察記録

1952. 11. 18	多摩川(玉堤)	1羽	
1957. 10. 25	多摩川(野毛)	1羽	新田多摩川にて見る
1966. 11. 04	岡本	1羽	
1993. 04. 12	多摩川	1羽	雄
1997. 10. 24	多摩川(玉堤 2)	1羽	散策路で採餌
1998. 10. 26	多摩川	2羽	雌雄 散策路脇の草地
2000. 02. 07	多摩川(鎌田 1)	2羽	2羽が草原でオギの茎に止まっている
2002. 11. 18	多摩川(鎌田 1)	1羽	オギの海
2006. 04. 28	多摩川(鎌田 1)	1羽	オギの海、盛んにさえずる
2009. 02. 28	多摩川(野毛 3)	1羽	第3京浜橋上流の草原 カワラヒワ数羽といた
2012. 01. 11	多摩川	2羽	定例調査
2014. 02. 17	多摩川	6羽	
2016. 03. 29	多摩川(鎌田 1)	2羽	雌雄がグラウンド隅の刈り取った草上で飛び交っている虫を採食
2018. 01. 08	多摩川(玉堤 2)	1羽	雄
2019. 03. 29	多摩川(鎌田 1)	1羽	河原から宇奈根公園の植え込みに止まった後すぐに飛び去る
2020. 02. 10	多摩川(野毛 3)	1羽	雄

615. コホオアカ *Emberiza pusilla* Little Bunting

ホオジロ科

ユーラシア大陸北部で繁殖し、ネパール東部、インド北東部からインドシナ北部、中国南部、台湾で越冬する。日本では、数少ない旅鳥または稀な冬鳥として北海道、本州、四国に渡来する。九州、奄美大島では冬鳥である。日本海の離島では春と秋に毎年記録されている。

春の渡りの時期には群れて渡ることが多いが、秋の渡りの時期や越冬期は1羽か数羽の小群で行動することが多い。水田、干拓地、川原、造成地等の荒地地状の草原に生息し、地上で採餌する。エノコログサなどのイネ科の種子や、灌木の枝上で昆虫類を食べる。

世田谷区では、下記3例の記録がある。河川敷の丈の低い草地で観察されている(全記録数 7件 2005～2019年 2011年以降 2件)

○観察記録

2005. 03. 02	多摩川(野毛 1)	1羽	第1回冬羽と思われる 散策路脇の草地で採餌 (3/24まで観察)
2015. 01. 13	多摩川(野毛 3)	1羽	
2019. 04. 15	多摩川(玉堤 1)	1羽	夏羽、右岸寄りの草地で倒れたヤナギの周囲を動き回る

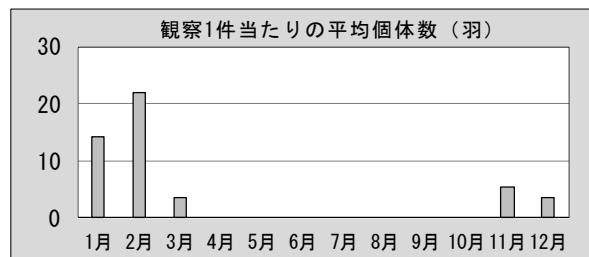
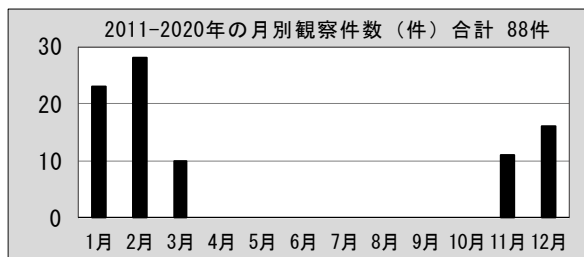
617. カシラダカ *Emberiza rustica* Rustic Bunting

ホオジロ科

スカンジナビア半島からカムチャツカ半島までのユーラシア高緯度地方で繁殖し、中国東部で越冬する。日本では、北海道で旅鳥。本州、四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島へ冬鳥として渡来する。青森、佐賀、対馬で夏の観察記録がある。

冬は平地や低山帯の農耕地、雑木林、疎林、湖畔や川辺のヨシ原や藪地で見られる。繁殖地では針葉樹林帯の湿地周辺の雑木林や藪地に生息する。冬は主として地上で群れて採食することが多く、水田に大群で降りてイネの落ち穂やイネ科の種子を採食する。その他カヤツリグサ科、タデ科、マメ科などの種子や昆虫も食べる。

世田谷区では、11月から12月に飛来し、翌年の3月頃に去るが、年によって変化が大きい。多摩川や野川、仙川、砧公園でよく観察されるほか、高源院、羽根木公園、桜丘すみれば自然庭園、住宅地の祖師谷などでも観察されたことがある。2014年2月の大雪時には、多摩川、野川、仙川、祖師谷公園、次大夫堀公園、浄真寺で観察された。(東京都区部：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 394件 1948～2020年)



○主な観察記録

1948. 03. 28	等々力溪谷公園	1 羽	谷沢山ケヤキで囀る
1952. 12. 28	多摩川(野毛)	10 羽	
1963. 11. 09	祖師谷	1 羽	
1964. 04. 13	北鳥山	1 羽	
1968. 02. 20	多摩川(鎌田)	50 羽	二子橋上流
1998. 01. 19	多摩川	41 羽	積雪の後、土の現れている所に多い
2001. 01. 09	多摩川	153 羽	大雪の後、グラウンドなどの土が露出している所で採餌
2005. 02. 02	野川	2 羽	定例調査
2008. 02. 07	砧公園	2 羽	
2009. 03. 11	多摩川(鎌田 1)	1 羽	オギの海
2012. 12. 05	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	
2013. 11. 02	羽根木公園	1 羽	定例調査
2014. 02. 17	多摩川	321 羽	降雪後の土が露出した散策路や芝地で採食
2015. 01. 14	多摩川	14 羽	定例調査 4 羽がオギの海 2 羽が宇奈根寄り州 8 羽は中流
2016. 01. 19	仙川	3 羽	駒大グラウンド横 1 羽、祖師谷橋上流 2 羽
2017. 01. 18	多摩川	1 羽	定例調査 平瀬川合流点付近左岸の草むら小灌木の枝にとまる
2018. 01. 08	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌雄
2019. 01. 16	多摩川	7 羽	定例調査 河口より 20.3 km 付近左岸寄り州 ホオジロ類が集まっていた
2020. 02. 17	多摩川(鎌田 1)	3 羽	

618. ミヤマホオジロ *Emberiza elegans* Yellow-throated Bunting

ホオジロ科

ウスリー、中国北東部および中部、朝鮮半島で繁殖し、中国南東部、台湾で越冬する。日本では、北海道で旅鳥。本州、四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島へ冬鳥として渡来する。1993 年、1996 年に広島県、その後対馬で繁殖した例がある。隠岐諸島、中国山地での繁殖記録があるので、分布が拡大していると考えられている。

繁殖期以外には小群で生息する。平地や低山帯の樹林で、林縁、水辺や湿地縁などの藪の多い所で見られる。藪の下などの地上で草の種子、昆虫類、クモ類などを採食する。

世田谷区では、下記 9 例の記録がある。（全記録数 10 件 1998～2019 年 2011 年以降 6 件）

○観察記録

1998. 01. 17	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雌が河原の草地で採餌
2002. 12. 10	多摩川(玉川 3)	1 羽	雌 前日 2.5 cm の降雪
2004. 02. 13	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雄が草原の縁を移動しながら採餌 (2/16 も観察された)
2011. 12. 27	多摩川(鎌田 1)	3 羽	雄 1、雌 2 羽
2013. 01. 07	多摩川	2 羽	
2014. 02. 10	多摩川(玉堤 1)	2 羽	雌雄
2018. 01. 29	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄
2019. 01. 16	多摩川	1 羽	河口より 20.3 km 付近左岸寄り州、ホオジロ類が集まっていた
2019. 03. 05	多摩川(鎌田 1)	1 羽	雄

622. チャキンチョウ *Emberiza bruniceps* Red-headed Bunting

ホオジロ科

中央アジアに生息し、日本には野生個体が稀に迷行するとされ、日本海の離島や対馬、与那国島で記録されている。飼い鳥としても輸入されており、飼育個体の一時的な逸出の可能性も考えられる。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数 1件 1995年)

○観察記録

1995. 05. 19 多摩川 1羽

623. ノジコ *Emberiza sulphurata* Yellow Bunting

ホオジロ科

日本のみで繁殖し、台湾、中国南部、フィリピン北部で越冬する。日本では、夏鳥として主に本州以北の多雪地帯に分布する。特に新潟県と長野県の県境の山地に多い。本州南西部以南で旅鳥。

低山帯の林縁、藪地に生息し沢筋や湿っぽい遊水地、ハンノキ林を好む。繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。巣は地上1～2mの所で、よく葉に覆われた樹上や藪の中に作る。巣づくりは雌だけで行い、草の枯葉、茎、木の根などで外装をつくり、細根、草の細い茎、獣毛などで産座をつくる。1巣卵数は2～5個、抱卵日数は14日ぐらいで雌雄交代で行う。ヒナは雌雄の給餌で育ち、7～8日ぐらいで巣立する。藪の地上で草の種子や甲虫、鱗翅類の幼虫などを採食する。

世田谷区では、下記2例の記録がある。(環境省：準絶滅危惧種) 全記録数 2件 2012、2018年)

○観察記録

2012. 10. 29 多摩川(鎌田1) 1羽 雄が草原と草地を往き来する

2018. 11. 05 多摩川(玉堤1) 1羽 雄が草原と散策路を出入り

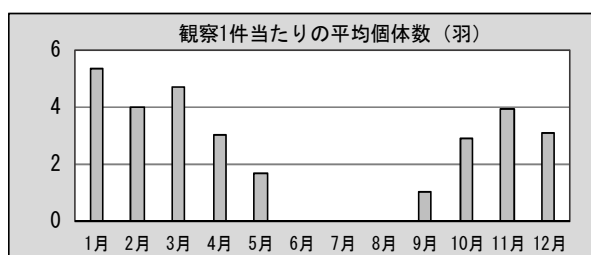
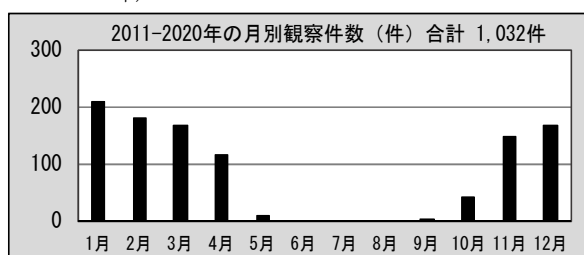
624. アオジ *Emberiza spodocephala* Black-faced Bunting

ホオジロ科

西シベリアからオホーツク海沿岸南部、南千島、アムール、サハリン、中国北東部及び南西部、モンゴル、朝鮮半島北部で繁殖し、台湾、中国南部、インドシナ北部で越冬する。日本では、北海道と本州の中部以北で繁殖し、冬期は南下する。本州西南部、四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島で冬鳥。亜種シベリアアオジが稀な旅鳥として本州、九州、対馬で見られる。

山地帯上部から亜高山帯下部にかけての乾いた明るい林に生息し、疎林で藪の多い所、林縁などに多い。北海道では針広混交林、針葉樹林の林道脇、二次林、林縁などの藪地に多く、原生林の内部にはいない。越冬地では平地の常緑樹林の林縁、人家の生垣、溝や河川の堤防沿いの藪、ヨシ原などで見られる。繁殖期は5～7月で、巣づくりは雌だけが行い地上1～2m位の藪の中の枝の叉にのせるように巣をつくる。ほとんど地上で採食する。タデ科、イネ科などの種子、ズミ、イボタノキなどの実を採食し、夏には昆虫の成虫や幼虫も食べる。

世田谷区では、10月下旬から11月に飛来し、翌年の4月中旬から5月初旬に去る。多摩川で多いほか、仙川や野川、砧公園、蘆花恒春園など大小の公園、緑地、住宅地などで普通に観察される。草原や藪、人家の生垣、植え込みなどで見られ、4月頃にはシラカシやエノキ、ヨシの先端でさえずるのが聞かれる。雄が草地から飛び立ってハチを捕る様子や水飲み、水浴びなどが見られている。(全記録数 3,854件 1946～2020年)



○主な観察記録

1946. 03. 18	等々力溪谷公園	2羽	雌雄 滝の山
1969. 03. 14	中町	1羽	轉る
1978. 05. 01	馬事公苑	1羽	
1998. 02. 11	野川	5羽	定例調査
2000. 01. 23	成城3	2羽	住宅の生垣の中を飛び回っていた
2002. 04. 06	桜上水3	1羽	シラカシの頂で轉る
2005. 02. 05	豪徳寺	5羽	
2006. 11. 15	多摩川	46羽	定例調査
2008. 04. 17	祖師谷5	3羽	釣鐘池にて
2009. 04. 23	蘆花恒春園	6羽	地鳴き
2012. 03. 24	野川	2羽	遊歩道の水たまりで水浴び
2014. 04. 01	多摩川(野毛2)	9羽	雄1羽が川岸の草地から飛び立ち小さなハチをフライキャッチする
2015. 12. 06	羽根木公園	1羽	定例調査
2016. 01. 02	上北沢	3羽	将軍池公園の隣接緑地、美しい雄3羽
2017. 01. 04	岡本	2羽	岡本静嘉堂周辺
2017. 10. 30	砧公園	1羽	鳴き声
2018. 02. 20	砧公園	3羽	サンクチュアリ観察ボード脇地面で採餌
2019. 01. 21	次大夫堀公園	3羽	
2020. 02. 05	仙川	12羽	定例調査

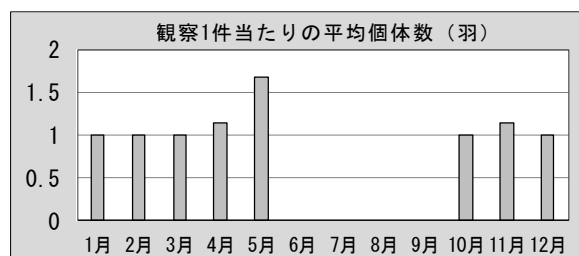
625. クロジ *Emberiza variabilis* Grey Bunting

ホオジロ科

カムチャツカ半島南部、千島、サハリンで繁殖し、中国東部で越冬する。日本では、本州中部以北と北海道で繁殖する。本州では日本海側の山地に多く生息し、特に新潟、長野、群馬の県境地方に多い。本州南西部、四国、九州、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、琉球諸島で越冬する。

繁殖地では低山帯上部から亜高山帯下部にかけての落葉広葉樹林、針広混交林、針葉樹林に生息し、樹林に覆われたササ藪が密生している所に多い。繁殖期は5～8月、巣づくりは雌が行い地上1～2m位の藪の中やササ藪の中につくる。ヒナにはチョウ類などの幼虫を与える。茂った暗い林の林床を移動しながら、タデ科、イネ科などの草の種子をついばむ。越冬地では常緑樹林やスギ林に潜み、藪、特にササ藪の下の地上で採食する。

世田谷区では、11月頃に飛来し、翌年5月頃去る。4～5月の渡去時に観察例が多い。多摩川、野川、砧公園、馬事公苑、駒沢オリンピック公園、等々力溪谷公園などで観察されている。ササ藪や林床などの茂みの中を動き回って青虫を捕るのが観察されている。4～5月にはさえずりも聞かれている。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数 111件 1946～2019年)



○主な観察記録

1946. 11. 09	野毛	1羽	原氏本家にて目撃する
1978. 05. 01	馬事公苑	3羽	雄1、雌2羽
1995. 05. 04	砧公園	1羽	雄 地鳴きしながらササ藪内を移動
2000. 02. 02	桜丘すみれば自然庭園	1羽	
2004. 04. 06	多摩川(鎌田1)	1羽	雄 草原のクコの茂みの中で青虫を食べる
2004. 04. 24	瀬田4	1羽	崖線の中 芽吹いたばかりのクヌギでさえずっていた

2008. 04. 14	等々力溪谷公園	3 羽	
2010. 05. 01	砧公園	1 羽	雄 川沿いの地面を鳴きながら歩き回る
2011. 05. 04	駒沢オリンピック公園	2 羽	雌雄
2013. 04. 28	砧公園	1 羽	雄 谷戸川 三の橋と四の橋間 すぐ藪の中に消える
2014. 11. 22	成城三丁目緑地	1 羽	斜面で採食
2015. 11. 15	野川(成城 4)	1 羽	草木に止まっていた
2016. 04. 14	成城みつ池	1 羽	定例調査、地鳴き
2017. 04. 15	羽根木公園	1 羽	定例調査、雄
2018. 11. 05	多摩川(玉堤 1)	1 羽	雄が林縁を出入り
2019. 11. 10	多摩川(玉川 3)	1 羽	雄が兵庫島西斜面の林床

626. シベリアジュリン *Emberiza pallasi* Pallas's Reed Bunting ホオジロ科

シベリア、モンゴル、中国北東部で繁殖し、冬期は朝鮮半島から中国東部に渡り、越冬する。日本では、稀な旅鳥または冬鳥として北海道から鹿児島県まで渡来するが数は少ない。

草地、休耕田、アシ原などを好み、行動はオオジュリンによく似る（ヨシの茎に斜めに止まって上下に移動など）が、体長は小さい。小昆虫類、その幼虫、草の実（イネ科植物の種子など）などを採食する。

世田谷区では、下記の 1 例の記録がある。（全記録数 1 件 2004 年）

○観察記録

2004. 04. 06 多摩川(鎌田 1) 1 羽 夏羽 池付近のヨシ原でオオジュリンと採食

627. コジュリン *Emberiza yessoensis* Japanese Reed Bunting ホオジロ科

中国北東部、ウスリー、南千島で繁殖し、朝鮮半島南部、中国南東部で越冬する。日本では、本州と九州のごく限られた地域で繁殖し、これまで青森、秋田、宮城、茨城、千葉、長野、群馬、新潟、富山、山梨、静岡、熊本県などで繁殖が確認されている。冬は関東以南で過ごし、特に東海地方、近畿地方、中国地方、四国の沿岸地帯に多い。

スゲ類などが茂る草原、干拓地の湿った草原、休耕地として放置された水田、牧牛に踏まれた丈の低い草原などで繁殖する。草原環境の変化に敏感で、休耕地や牧草地ではヨシや草が茂りすぎるといなくなる。繁殖期は 6～8 月、一夫一妻で繁殖するが、雌は子育ての途中でつがい相手の雄を変えることがある。巣は草株の上や脇、藪の小枝の上など葉に覆われた下につくる。巣づくりは雌だけが行う。草原の中の地上を歩きながら採餌する。繁殖期にはチョウ類の幼虫、バッタ類、クモ類などの動物質をヒナに与え、成鳥も昆虫を食べる。冬はタデ科、イネ科などの草の種子をついばむ。

世田谷区では、10 月から翌年の 4 月に観察される。多摩川の川岸や草原のヨシやオギの多い場所で見られる。ヨシやオギの茎の皮を剥いているのや水浴びが観察されている。2010 年以降観察されていない。（東京都区部：情報不足 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 全記録数 26 件 1995～2009 年）

○主な観察記録

1995. 10. 30 多摩川 1 羽
 1998. 01. 10 多摩川(玉堤 1) 1 羽 川岸のヨシに止まっている
 1999. 03. 19 多摩川(野毛 2) 1 羽 雄夏羽 1 羽が右岸のアシに止っている
 2000. 12. 24 多摩川(鎌田 1) 1 羽 オオジュリン 3 羽とアシの茎を啄む
 2001. 04. 29 多摩川(野毛 2) 1 羽 雄夏羽 1 羽が右岸で水浴び
 2002. 02. 27 多摩川(野毛 2) 2 羽 2 羽が右岸のアシにいたが川岸に降り水浴び
 2003. 03. 21 多摩川(鎌田 1) 1 羽 池の岸でアシの茎を啄む
 2004. 11. 16 多摩川 1 羽
 2009. 03. 27 多摩川(鎌田 1) 1 羽 草地でオオジュリンの群れとオギの茎を剥いていた

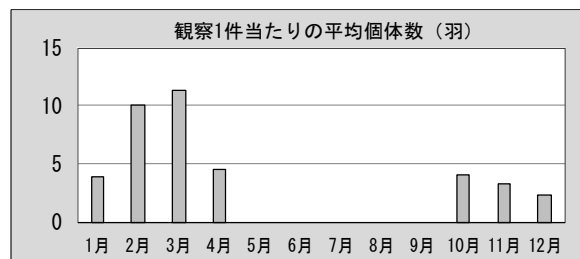
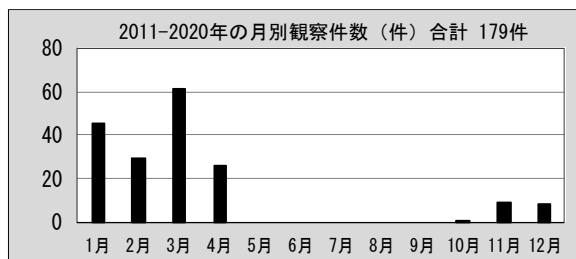
628. オオジュリン *Emberiza schoeniclus* Common Reed Bunting

ホオジロ科

ヨーロッパから東はシベリア、南は小アジア、中央アジア、モンゴル、中国北東部・中部、ウスリー、カムチャッカ半島、南千島、北西アフリカで繁殖し、アフリカ北部、西南アジア、中国南部で越冬する。日本では、夏鳥として本州北部と北海道で繁殖する。本州中部、四国、九州、伊豆諸島、琉球諸島では冬鳥である。特に関東地方以南に多い。

湿地帯とその周辺の草原に生息する。繁殖地では湿地のヨシ草原からその周辺の丈の低いクサヨシやスゲの草原に生息し、繁殖期以外は小群で行動し湖沼や河川の沿岸のヨシやマコモ草原で過ごす。繁殖期は5～7月で、巣づくりは雌だけがいき、草株の根元の地上や草株の上、藪の小枝の中につくる。繁殖地では草や灌木で主に昆虫類を、越冬地では枯れたヨシやオギなどの茎に寄生するガやハチの幼虫を採食する。

世田谷区では、10月から12月に飛来し、翌年の4月中旬から下旬に去る。多摩川で観察され、ヨシやオギが生えている川岸や草原で見られる。ヨシやオギ、オオブタクサの茎に止まり、皮や、茎から葉鞘をむしって中の虫を食べるが、ヤナギの花穂を採食した例もある。3月上旬から4月に雄の頭部が黒くなる。2017年頃から観察件数、個体数ともに急激に減少している。(東京都区部：準絶滅危惧 全記録数1,168件 1953～2020年)



○主な観察記録

1953. 11. 01	多摩川(野毛)	2羽	新田多摩川にて
1963. 01. 20	多摩川(野毛)	21羽	渡し場下流島
1969. 03. 08	多摩川(玉堤)	1羽	川原で見る
1996. 03. 26	多摩川	14羽	
1999. 11. 02	多摩川(鎌田 1)	3羽	1羽が草原でオギの茎を突き皮を剥ぐ
2001. 04. 02	多摩川(野毛 2)	20羽	11羽がワンドでアシの皮を剥いている
2003. 03. 19	多摩川	36羽	定例調査
2005. 02. 12	多摩川(野毛 3)	7羽	1羽が散策路脇に倒れているオオブタクサの茎を突き黄色い 1cm 位の幼虫を食べる
2009. 12. 30	多摩川(鎌田 1)	8羽	オギの海最下流地点のヨシ、オギで採餌
2011. 04. 01	多摩川(玉堤 1)	3羽	中州のヨシで採餌 1羽の頭部がかなり黒い
2012. 04. 02	多摩川(玉堤 1)	11羽	1羽が中州のヤナギの花を食べる
2013. 03. 12	多摩川(玉堤 1)	56羽	19羽が川岸のアシやオギの茎を啄む
2014. 03. 12	多摩川	20羽	定例調査
2015. 02. 16	多摩川(鎌田 1)	5羽	オギの海入り口草地 2羽が水溜りで水浴後近くで羽づくろい
2017. 03. 08	多摩川	2羽	頭部が黒くなっていた
2019. 03. 29	多摩川(鎌田 1)	3羽	オギの海最上流地点、宇名根公園脇、オギの茎にかじりついて採食
2020. 01. 13	多摩川(鎌田 1)	1羽	土手・散策路間草地に2羽のスズメに続き草藪に隠れる 頭部真っ黒な夏羽

633. サバンナシトド *Passerculus sandwichensis* Savannah Sparrow

ホオジロ科

北アメリカ北部・中部、メキシコ北西部・中部からグアテマラ南西部で繁殖し、北方のものは冬期に北アメリカ南部、メキシコ、バハマ諸島に南下する。日本では、稀な冬鳥として北海道から沖縄県まで局所的に少数が記録されている。

草地、農耕地、裸地に生息し、耕起した農地、農耕地の水のない水路や溝などを好んで歩き地上に落ちた主にイネ科植物の種子を採食する。

世田谷区では、下記の1例の記録がある。(全記録数 1件 2006年)

○観察記録

2006.12.05 多摩川(鎌田1) 1羽 グランドの芝生でタヒバリ、カワラヒワ、スズメの群れと採食

◇ 外来種(移植種・逸出種)

外来種とは、本来の分布地から人間の媒介によって本来生息しない他の地域に移入されたものをいう。外来種は移植種と逸出種に分けられる。移植種とは、増殖を目的に輸入されたものが放された種で世田谷区ではコジュケイが該当する。逸出種(かご抜け鳥)とは、愛玩用や鑑賞用として輸入されたものが飼育中に逃げたのや、野外に放してしまったことで起きる。外来種の内、人間の助けを借りずに野外で個体群を持続させたものを帰化種という。

代表的な帰化種として、コウライキジ、コブハクチョウ、カワラバト、ホンセイインコ、ガビチョウ、カオグロガビチョウ、ソウシチョウ、ハッカチョウ、ベニスズメなどがある。

◆ キジ科 PHASIANIDAE

1. コジュケイ *Bambusicola thoracicus* Chinese Bamboo Partridge

キジ科

中国東南部に分布し、日本では1919年から数年の間に東京都港区青山と横浜市保土ヶ谷でそれぞれ放鳥したものが自然に繁殖し、数を増やす。その後各地で狩猟用の放鳥と相まって急速に全国へ広まったとされている。

本州、四国、九州などの河川敷や標高のあまり高くない山地、下草が茂る雑木林や竹藪に好んで年中生息する。植物ではタデ、アワ、スギ、マツ、昆虫類ではコガネムシ、バッタなどを採食する。繁殖は年に2回。4～6月に地面の窪みに枯れ草を敷いた巣に7～8個の卵を産む。メスのみが抱卵し、抱卵期間は17～19日。雛は孵化直後に巣立つ。雌雄ともに育雛を行う。生後1年で成熟する。

世田谷区では移植種として観察されている。1948年から等々力溪谷公園、野毛、岡本、砧公園などで1989年まで繁殖する。国分寺崖線沿いの等々力溪谷公園や野毛、岡本静嘉堂周辺、成城やその付近で観察されたが、2001年以降は成城みつ池緑地および多摩川で観察された2件だけである。1968年から1976年まで毎年区内に10～30羽が放鳥された。(全記録数 319件 1948～2017年 2011年以降1件)

○主な繁殖記録

1948.08.02	等々力溪谷公園	1 巣	幼鳥を目撃する
1952.07.04	野毛	1 巣	成鳥2、幼鳥8羽 自宅前
1953.05.07	等々力溪谷公園	1 巣	3 卵 (5/8 4 卵、5/14 7 卵 抱卵中、5/15 7 卵の内、2 卵壊されている 成鳥が巣を放棄 谷沢 竹山)
1956.08.15	野毛	1 巣	5 卵 (8/16 抱卵中、8/29 孵化して3 羽落鳥、1 卵は穴があいていて中で死んでいた 1 羽は巣から4m 位遠くにいた 生きていた雛 1 羽も 17:00 頃落鳥 親鳥2羽が近くにいた 谷沢木小屋うら畠)
1958.08.15	野毛	1 巣	5 卵
1967.05.29	等々力溪谷公園	1 巣	雛1羽 滝の山
1968.07.03	岡本	1 巣	幼鳥を連れている
1975.07.08	砧公園	1 巣	雛2羽
1988.08.20	岡本静嘉堂周辺	1 巣	成鳥1羽、雛5羽
1989.06.13	成城4	1 巣	雛連れ

○放鳥記録

1968～1972年	区内	10 羽	放鳥記録
1974年	区内	20 羽	放鳥記録
1975、1976年	区内	30 羽	放鳥記録

○主な観察記録

1949. 11. 15	等々力溪谷公園	11 羽	滝の山
1953. 07. 21	多摩川	2 羽	成鳥及び幼鳥がさえずる
1960. 11. 20	多摩川	7 羽	
1967. 04. 18	上野毛	1 羽	雄が山林内にてテングスのワナにかかって死亡
1975. 03. 01	馬事公苑	10 羽	
1980. 09. 15	深沢	1 羽	
1989. 05. 01	馬事公苑	1 羽	
1991. 10. 20	深沢 8	1 羽	深沢八丁目無原罪特別保護区
1995. 06. 30	砧公園	2 羽	砧公園
2003. 06. 10	成城みつ池緑地	1 羽	鳴き声
2017. 05. 17	多摩川	1 羽	多摩川定例調査で初めて記録される 宇奈根排水樋管寄州にて

3. キジ(亜種コウライキジ) *Phasianus colchicus karpowi* Common Phntesa キジ科

中国東北部・河北省、韓国に分布。日本には、移植種として対馬(九州)、その後北海道、本州、四国、九州などに狩猟用として放鳥された。

低木林や農耕地に生息。繁殖習性はキジと似ていて産卵期は5～6月頃、1巣卵数は6～10個である。食性もキジに似ていて、イネ、オオムギ、アワ、ソバ、イヌタデの種子、ノイバラの実などを食べる。雌はキジに似ているが、雄は白い首輪のような模様が特徴。

世田谷では下記1例の記録がある。(全記録数2件 1990年)

○観察記録

1990. 06. 22 喜多見 7 1 羽 雄 (同じ個体と思われるものが6/25に観察)

◆ カモ科 ANATIDAE

7. コブハクチョウ *Cygnus olor* Mute Swan カモ科

ヨーロッパ北部からシベリア南東部にかけて繁殖し、ヨーロッパ南東部およびアジア南西部で越冬する。韓国には毎冬20～30羽渡来している。

日本には、1933年11月に八丈島で1例の繁殖記録があることから日本産種として扱われている。各地の湖沼、池、河川、公園などで飼育している。観賞用として移入されたものがその地から抜け出し、繁殖している。繁殖期は3～6月で草や小枝を積み上げた大きな巣を雌雄共同でつくる。雌雄で育雛し、ヒナが飛べるようになるまで孵化後125～150日を要する。北海道ウトナイ湖で繁殖したものの一部が茨城県北浦や霞ヶ浦で越冬しているのが標識調査により確かめられている。水生植物の葉状部を主食とし、軟体動物、昆虫などを食べることもある。

世田谷区では、下記の2例の記録がある。(全記録数2件 1984、1996年)

○観察記録

1984. 11. 18 多摩川(玉堤1) 2 羽 成鳥、幼鳥の親子
1996. 02. 14 多摩川 1 羽 羽根を切られた個体

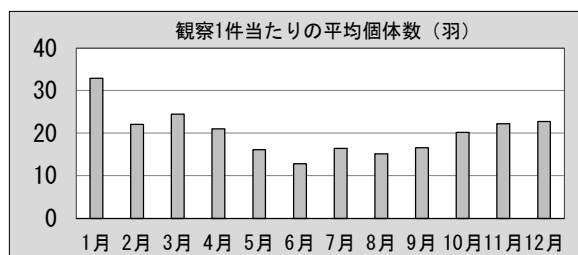
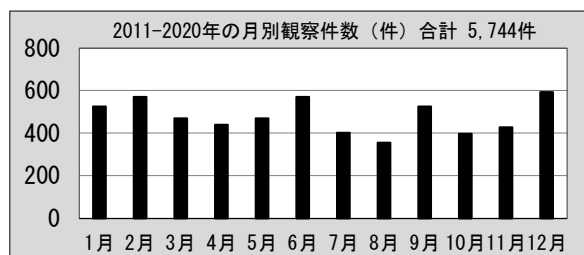
◆ ハト科 COLUMBIDAE

8. カワラバト *Columba livia* Rock Dove ハト科

地中海から中近東に分布し、日本には通信、愛玩、レース、食用など様々な目的のために輸入された。家禽化されたものが野生化し、全国で繁殖している。

平地から山地の市街地、公園、駅、社寺、河川、農耕地などに生息する。繁殖は、ピジョンミルクの給餌によって1年中可能であるが、春に多い。建物の隙間、道路や鉄道の高架、窓などに直接または小枝などを置き、交尾後4～5日で2個の卵を産む、日中雌雄交代して抱卵するが、夜は雌が行う。16日前後で孵化し、28～35日で巣立つ。ヒナが小さい頃は、ピジョンミルクにより給餌が行われる。ヒナが成長すると、普通の吐き戻しによる給餌も行う。ヒナは約半年後成熟し、繁殖が可能になる。雌雄のどちらかが死んだりいなくなったりしない限り、一生を連れ添う。主に植物食で木の実や草の種子などを採食するが、人から菓子類をもらって食べることもある。水を飲む時はハト類共通の嘴を水に浸けたまま飲む特徴がある。市街地の鳥としては数が多く、オオタカ、ハヤブサなどの猛禽類やカラス類の獲物になることから都市生態系の中で重要な位置を占めている。

世田谷区では、河川や公園、社寺、住宅地などで多く普通に見られる。昔から生息していたと思われるが観察記録は1966年から、繁殖記録は2007年からである。繁殖場所は橋桁の隙間や護岸の穴、駅舎、タクシー会社の軒下、マンションのベランダなど建造物で行われる。食べ物は、下記の観察例に挙げてはいないがサクラ、ハリエンジュ、ムクノキ、エノキ、カツラなどの実やハコベ、スズメノカタビラなどの種子やコガネムシなどの幼虫、人からポテトチップスやコーンなどをもらって食べる記録がある。2006年4月に蘆花恒春園で約90羽が餌に農薬を混ぜて毒殺されたことがある。個体数、平均個体数とも2001年をピークに漸減傾向が続いている。(全記録数11,837件 1966～2020年)



○主な繁殖記録

2007. 09. 02	船橋	1 巣	巣立ち雛2、内1羽が成鳥から餌をもらう、他成鳥3
2007. 10. 24	宮坂3	1 巣	雛2羽 小田急線高架経堂図書館前、雛に餌を与える ←削除候補
2008. 07. 03	経堂1	1 巣	経堂駅のホームの鉄骨の隙間に巣。親が入るとピーピーと騒ぐ声とどたばたと暴れる音がする
2009. 08. 24	経堂4	1 巣	線路降下の巣 雛1羽が鳴き、親が餌を与える
2010. 08. 12	砧1	1 巣	タクシー会社の軒下に営巣 1羽生まれて育つ
2011. 05. 25	仙川	1 巣	小田急線下の水抜き穴で営巣
2012. 07. 30	多摩川(野毛2)	1 巣	成鳥1羽が橋桁の柵の中に入ると中から雛の声
2013. 04. 17	瀬田4	1 巣	国道246道路の下のコングリートの隙間に親鳥が入ると雛の声
2014. 06. 10	千歳台6	1 巣	高層マンションのベランダに営巣(雛の声)
2015. 08. 15	駒沢オリンピック公園	1 巣	定例調査 巣立ち雛2羽に親鳥が給餌する
2016. 07. 25	多摩川(野毛1)	1 巣	成鳥1羽が玉川排水樋管水門に戻ると排水樋管上部の穴から巣立ち雛が降りて給餌を受ける
2017. 06. 05	多摩川(野毛2)	1 巣	親鳥が橋中のスキ間に入り、口移しに雛に給餌する
2019. 06. 18	若林4	1 巣	団地のベランダに1羽飛び込むと雛の声がする
2020. 05. 14	船橋4	1 巣	マンションのベランダに成長が飛び込むと雛の声がする

○主な観察記録

1966. 03. 29	多摩川(野毛)	1 羽	
1975. 01. 01	馬事公苑	30 羽	
1991. 05. 25	奥沢	66 羽	
1999. 01. 15	砧公園	431 羽	
2004. 01. 21	多摩川	665 羽	定例調査
2004. 02. 04	野川	88 羽	定例調査
2004. 02. 04	仙川	115 羽	定例調査
2005. 01. 03	蘆花恒春園	120 羽	
2009. 05. 12	仙川(祖師谷4)	34 羽	1羽が巣材の枯れ枝をくわえ仙川護岸の土管に入る
2009. 12. 16	世田谷公園	64 羽	
2011. 01. 12	多摩川	241 羽	定例調査

2011. 02. 02	野川	121 羽	定例調査
2011. 02. 02	仙川	52 羽	定例調査
2013. 05. 01	砧公園	45 羽	定例調査
2014. 03. 08	羽根木公園	43 羽	定例調査
2015. 07. 19	高源院	3 羽	橋の欄干の上で、つがいがお互いに頭部をこすり合わせた後、交尾
2015. 12. 26	駒沢オリンピック公園	183 羽	定例調査 44 羽が林床でカツラの実を採食。
2016. 02. 29	多摩川 (鎌田 1)	204	154 羽がオギを刈り取った跡地で群れでイモムシやコガネムシ幼虫を捕食
2017. 07. 29	赤堤 1	300 羽	北沢川緑道赤堤小裏新井橋付近大きな群れが定着している
2018. 12. 24	仙川	21 羽	竜沢寺橋下で 1 羽がオオタカに捕食された食痕があり、直後のようで少なかった
2019. 04. 16	尾山台 1	6 羽	タクシー会社の駐車場で、洗車後の水溜まりで水を飲む
2020. 01. 05	砧公園	46 羽	一の橋下流草地 24, 22 羽の 2 群、落葉を蹴散らして採食

◆ インコ科 PSITTACIDAE

13. セキセイインコ *Melopsittacus undulatus* Budgerigar

インコ科

オーストラリアのほぼ全域に自然分布。自然分布地では、草原、灌木林に生息する。日中は林や藪の中で休み、早朝と夕方に活発に活動し、草の種子を好んで食べる。樹洞に営巣し、年 2 回繁殖する。雨の少ない年には、食物と水不足のため繁殖に失敗することがある。日本には愛玩用に輸入されており、逸出した鳥が野外で見られることがあり、繁殖した例もある。

世田谷区では 1963 年から記録があり、多摩川、馬事公苑、砧公園、浄真寺、野川周辺で観察されている。2004 年に多摩川で約 3 か月間見られ、スズメの群れと川原の草原、林で行動を共にしていた。2006 年から観察が途切れていたが 2013 年に再び観察された。(全記録数 74 件 1963～2019 年 2011 年以降 4 件)

○主な観察記録

1963. 09. 01	多摩川	1 羽	
1972. 10. 01	馬事公苑	1 羽	
1975. 09. 13	砧公園	2 羽	
1996. 01. 14	多摩川	1 羽	(1/21 まで観察)
1998. 10. 21	多摩川	1 羽	(12/10 まで観察)
2002. 10. 06	多摩川	1 羽	(10/20 まで観察)
2003. 07. 10	多摩川	1 羽	グラウンドの芝生でムクドリと採餌
2004. 09. 01	多摩川	1 羽	スズメの群れと行動 (11/22 まで観察)
2005. 10. 04	多摩川(上野毛 2)	1 羽	中州でスズメ約 150 羽とオオブタクサに止まり休んでいる
2013. 02. 16	浄真寺	2 羽	ケヤキの大木で「キーキー」と鳴く
2014. 11. 12	砧公園	1 羽	木止まり カラスに追われて飛翔
2019. 09. 07	成城 3	1 羽	籠抜けのインコが屋根の上で飛び回っていた

14. オオホンセイインコ *Psittacula eupatria* Alexandrine Parakeet

インコ科

アフガニスタン東部、インド、スリランカからインドシナ半島に分布し、自然分布地では、標高 1,600m 以下の深い森などに群れで生息するものが多い。日本では愛玩用に輸入されており、逸出した鳥が樹木の多い住宅地や農耕地に生息している。

世田谷区では、下記 2 例の記録がある。(全記録数 2 件 1976 年、2002 年)

○観察記録

1976. 11. 21	多摩川	1 羽	
2002. 05. 27	弦巻 4	2 羽	ワカケホンセイインコよりかなり大きく全体に濃緑色でピンクのような赤(後側が太い)と黒の首輪のような模様があり、肩羽に濃いピンクのような赤色の模様があるインコ メスは模様がでないが、濃い緑。約 20m のエノキの木の上部で休息するワカケホンセイインコ約 25 羽と一緒に東南に飛ぶ

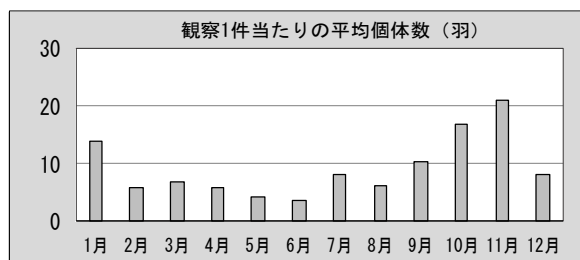
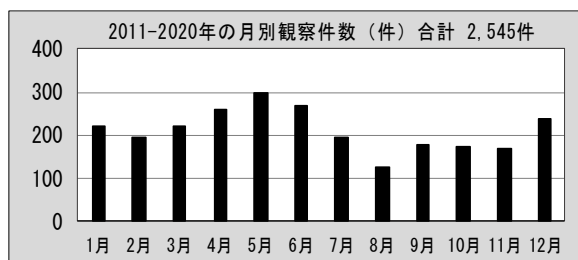
15. ホンセイインコ *Psittacula krameri* Rose-ringed Parakeet

インコ科

アフリカと南アジアに生息する。日本に輸入されている亜種ワカケホンセイインコはインド中部・南部、スリランカに分布する。

古くから愛玩用として輸入されたが 1960 年代末東京都西南部で約 100 羽がペットショップから逃げ出したものが野生化したものであるといわれている。その後関東、東海、近畿などに広まって市街地の公園などで見られるようになった。野生化した個体群は、樹木の多い住宅地や農耕地に生息するようになり、大田区に約 1,000 羽～1,500 羽の集団ねぐらがあったが、2015 年前後に消滅した。繁殖期は 4～7 月で、一夫一妻で行い営巣は樹木の樹洞の例が多く、巣箱を使った例もある。雌雄共に営巣地とねぐらへ毎日通うが、抱卵が始まると雌は巣に残る。樹木の実を採食する。

世田谷区では、住宅地や公園、河川などで 1 年中見られる。1971 年に馬事公苑で初めて観察された以降ほぼ毎年観察され、繁殖は 2008 年桜上水が初記録。営巣地は、団地のダストシュートやイチョウなど樹洞で行っている。エノキ、ムクノキ、カキノキ、ビワ、イチョウなどの実やサクラの花びら、若タケの茎、クヌギやケヤキの芽、ヤドリギの葉などを採食するのが見られている。ハシブトガラスから攻撃され尾羽を抜かれた例もある。早朝や夕方は大群で街中や公園、河川の上空を移動する。多摩川では早朝に川崎側に向い、日没頃川崎側から飛来するのが観察されている。観察件数、個体数、平均個体数は 2001～2018 年漸増傾向がみられたが、個体数、平均個体数は 2019 年、2020 年に急増している（観察件数は 2020 年）（全記録数 4098 件 1971～2020 年）



○主な繁殖記録

2008. 05. 22	桜上水 4	1 巣	雄が見はり雌が巣についている
2009. 06. 19	桜上水 4	1 巣	桜上水団地 10 号棟ダストシュート換気口より雛 2 羽顔を出す
2010. 03. 08	桜上水 4	1 巣	桜上水団地で番が巣穴の前に止まり巣穴のガードに入っている
2010. 07. 03	千歳台 5	1 巣	巣立ち雛 1 羽 かなり小さく細い 親 1 羽に 3～4 回給餌を受ける 親は口の中から吐き出して給餌する 農家の庭のサクラの木に営巣したと思われる
2012. 04. 16	桜上水 4	1 巣	桜上水団地 8 号棟ダストシュートの換気口で雛が巣籠り
2013. 06. 06	祖師谷公園	1 巣	ケヤキに 2 羽と電線で 4 羽を確認、幼鳥 1 羽に給餌していた
2015. 06. 07	羽根木公園	1 巣	定例調査 巣立ち雛 1 羽が落葉広葉樹の枝にいて雌雄の親から代わる代わりに給餌を受ける
2016. 05. 31	砧公園	1 巣	幼鳥 3 羽生まれて巣から出てきて木にとまっていた
2017. 06. 26	多摩川(玉堤 1)	1 巣	大きくなった幼鳥 2 羽が洞から出ていて、アカマツ横枝で周囲を見ている
2018. 05. 14	浄真寺	1 巣	うち 1 羽はケヤキの木の洞に頭部を突っ込み、雛に給餌
2019. 06. 19	若林 4	1 巣	ほとんど飛べない幼鳥 3 羽に親 2 羽が口うつしで餌をあげる

○主な観察記録

1971. 06. 01	馬事公苑	1 羽	
1973. 01. 22	深沢	3 羽	餌台で採食
1986. 08. 01	馬事公苑	16 羽	夕方、群れで北から南へ
1991. 05. 20	深沢 8	12 羽	深沢八丁目無限罪特別保護区
2000. 07. 30	奥沢 3	11 羽	奥沢小学校前の電線に
2003. 09. 07	喜多見 4	40 羽	電線に止まり、5～6 分で神社ムクノキへ飛び、ばらけて民家の屋根や電線へ
2004. 07. 28	多摩川(玉堤 1)	125 羽	夕方、川崎側から 20 羽位の群れが次々に飛来し北東へ
2005. 09. 21	祖師谷 6	32 羽	畑のカキの実をオナガと争いながら食べる
2007. 10. 25	桜丘	234 羽	38 羽、24 羽、18 羽、9 羽、120 羽、25 羽の群れが南東へ飛ぶ
2008. 07. 07	下馬 4	200 羽	自宅の屋根すれすれに 100 羽が 2 度南方向に飛び去る

2011. 01. 01	浄真寺	5 羽	2 羽がケヤキに寄生しているヤドリギの葉を食べている
2012. 09. 10	多摩川(玉堤 1)	57 羽	6 時頃、河川上空を 8、40、2、2、3、2 羽が川崎方面へ向かう
2013. 08. 31	等々力溪谷公園	8 羽	竹林で若い茎を食べている
2014. 03. 21	浄真寺	3 羽	2 羽がケヤキの新芽を食べている
2014. 03. 31	桜上水	1 羽	ハシブトガラスの営巣木に接近したようで、ハシブトガラスに攻撃され、嘴で尾羽 2 枚を抜き取られる
2015. 08. 22	千歳台 4	117 羽	23、12、22、28、4、28 羽の 6 群が鳴きながら低空飛行で東北に飛ぶ
2015. 12. 20	瀬田 4	8 羽	ムクノキの実を採食
2016. 03. 15	多摩川(野毛 2)	3 羽	堤の早咲きサクラの花びらを食い散らかす
2017. 09. 16	奥沢 8	193 羽	10 群れ (25, 10, 15, 20, 5, 35, 13, 23, 25, 18, 4 羽) が小雨降る中キーキーと聞こえる声で、鳴きながら南方 (多摩川方面) へ移動 (ぼかぼか広場)
2018. 08. 30	等々力溪谷公園	10 羽	うち 3 羽はサンゴジュの実を採食
2020. 01. 13	蘆花恒春園	103 羽	竹林で一斉に鳴き、徐々に周囲の林に散会、その後東南方面に飛翔
2020. 07. 10	粕谷 2	464 羽	集団 (10 群) で上空旋回飛翔し、18 羽は電線に止まる
2020. 10. 13	玉川田園調布 1	621 羽	150 羽, 60, 100, 30, 150, 6, 20, 35, 70 羽の 9 群れが 5 分間ほどの間に多摩川方面に飛ぶ (ぼかぼか広場で)

16. ダルマインコ *Psittacula alexandri* Red-breasted Parakeet

インコ科

東南アジアに分布している。自然分布地では、山麓、低地の林縁や草原に生息し、群れていることが多い。草の種子、果実、花などを食べ、時にイネに被害を与えることがある。

日本には愛玩用に輸入されている。逸出した鳥は樹木の多い住宅地や農耕地に生息する。繁殖した例もある。

世田谷区では、下記 6 例の記録がある。(全記録数 6 件 1976～2019 年 2011 年以降 2 件)

○観察記録

1976. 11. 21	多摩川	1 羽	
1991. 05. 20	深沢 8	4 羽	深沢八丁目無限罪特別保護区
1992. 01. 18	深沢 8	7 羽	深沢八丁目無限罪特別保護区
2002. 05. 27	弦巻 4	2 羽	ホンセイインコと一緒に移動
2011. 12. 28	駒沢オリンピック公園	8 羽	大きな木の上で 4 羽と 4 羽が止まっていた 鳴かず
2019. 01. 19	駒沢オリンピック公園	8 羽	公園主催観察会時梅園付近で観察。ホンセイインコとは別の小群を作って行動 ホンセイインコより飛翔姿勢もずんぐりし、鳴き声もホンセイインコより濁りがあり、太い感じ出る。大きさはホンセイインコを太くしたイメージ

◆ チメドリ科 TIMALIIDAE

21. ガビチョウ *Garrulax canorus* Chinese Hwamei

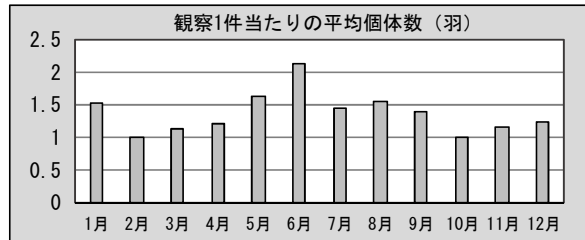
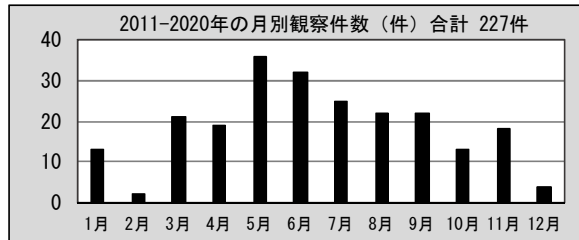
チメドリ科

台湾、中国南部、インドシナに分布し、日本には、愛玩用として輸入された。

逸出した鳥は、丘陵地や平野部の低木林に生息する。1980 年代から宮城県、福島県、関東地方、長野県、山梨県、静岡県、愛知県、九州などで野生化し、繁殖するようになり、生息域を急速に広げつつある。繁殖は、4 月頃に林縁部の灌木、あるいは農耕地周辺で木や枯草などに営巣する。年 1 回繁殖、1 巣 4～5 個、抱卵は約 15 日で雌が行い、育雛は雌雄で行われ 13 日ほどで巣立ちする。雄は巣の周囲で警戒にあたる。7 月上旬に巣立ちした幼鳥が見られる。さえずりは「ガビガビキョロロピピロロピロロ…」や「フィチフィチピーピーフィチピー」と色々な声で鳴き、イカルやクロツグミ、サンコウチョウなどの鳴き真似もする。

世田谷区では、2002 年に初めて観察された。一年中観察され、一度に 1～5 羽が見られる。2007 年に多摩川(宇奈根 1)で観察されて以来、多摩川下流や住宅地に広がり、毎年観察されるようになった。最近で

は多摩川のほぼ全域で観察されており川岸の樹木や草原、ささ藪で見聞きされている。仙川(大石橋付近)や砧公園、桜丘すみれば自然庭園、成城みつ池緑地、等々力溪谷公園、喜多見6、玉川1 草地の茂みなどで見られる。クロツグミやコジュケイに似た鳴き声が聞かれており、クワノキの実を採食している姿も確認されている。(全記録数 275 件 2002～2020 年)



○繁殖記録

2016. 06. 20 多摩川(鎌田 1) 1 巣 成鳥2、巣立ち雛2羽。雄1羽が草地で囀る 雌と思われる1羽が散策路脇の草地にいて、戻って来た巣立ち雛2羽に給餌する

○主な観察記録

2002. 07. 04	多摩川	1 羽	
2007. 06. 20	多摩川	1 羽	定例調査
2008. 07. 31	桜新町 1	1 羽	鳴きながら飛び回り民家のベランダや電線にも止まる
2010. 03. 17	多摩川	1 羽	定例調査
2010. 04. 10	多摩川(宇奈根 2)	1 羽	宇奈根排水樋管のササ藪で囀る
2010. 06. 21	多摩川(野毛 2)	2 羽	川原の法面でさえざる
2010. 10. 19	多摩川	2 羽	1羽が野川の林で囀る(玉川 3)、1羽がアズマネザサの藪で囀る(玉堤 1)
2011. 04. 03	仙川	1 羽	大石橋付近サクラの木で囀る
2011. 08. 02	桜丘すみれば自然庭園	1 羽	園内で囀る
2011. 08. 06	成城みつ池緑地	1 羽	
2012. 05. 16	多摩川(宇奈根 2)	5 羽	定例調査 5羽が宇奈根排水樋管付近より上流部で囀る
2012. 08. 10	喜多見 6	1 羽	庭の水飲み場に来て、その後羽繕い
2012. 08. 20	玉川 1	1 羽	住宅地庭の地面とミズキを上がり降りし「ガビガビキョロロ・・・」と10分間位囀る
2013. 09. 02	多摩川(鎌田 1)	1 羽	草地の細道から飛び立ち約 30m 北の草地のヤナギに飛ぶ
2014. 07. 14	多摩川(野毛 2)	1 羽	法面の藪からクロツグミに似た声で囀る
2015. 09. 16	多摩川	3 羽	定例調査
2016. 05. 02	多摩川(玉堤 1)	2 羽	1羽が中州縁で水浴びと水飲みしたあと草地に入る 1羽が河畔林内から囀る声
2016. 05. 12	砧公園	1 羽	囀る
2016. 08. 15	多摩川(鎌田 1)	3 羽	1羽が草原を約 2m 幅で刈り取った跡地を採食しながら歩く。
2017. 05. 14	等々力溪谷公園	1 羽	鳴き声
2019. 08. 03	成城 3 丁目緑地	1 羽	囀る声
2020. 06. 01	多摩川(玉堤 1)	2 羽	草原のクワの木で実を食べる

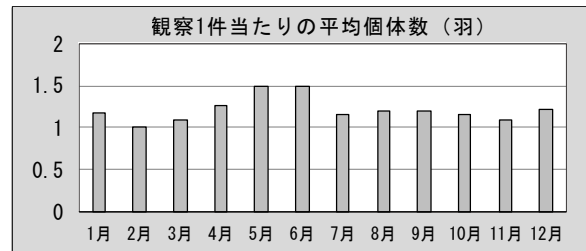
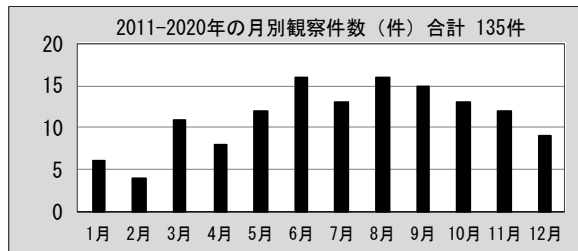
23. カオグログビチヨウ *Garrulax perspicillatus* Masked Laughingthrush

チメドリ科

中国東南部、ベトナム北部に分布し、日本には、愛玩用として輸入されている。

逸出した鳥は、平地から低山の林、竹林に生息し、常に数羽から十数羽の群れで行動。ヒナは群れ全体の鳥から給餌される。1980 年代から群馬県、東京都、神奈川県などで野生化し、繁殖している。

世田谷区では、1 月から 10 月まで観察されている。1996 年に初めて観察され、多摩川の玉堤 1・2、上野毛 2 及び二子玉川公園の狭い範囲で観察される。堤のサクラ並木と河畔林を往き来し「カッカカッ」「ピューピュー」「キョッキョッ」と聞こえる声が聞かれている。水飲みや水浴び、クワの実、サクラの花を採食するのが見られている。また、枯草運び(2002 年)や求愛給餌(2012 年)、幼鳥(2013 年)が見られることから繁殖の可能性があったが、2019 年に巣立ち雛への給餌がみられ、繁殖が確認された。2006 年まで毎年見られていたがその後一時途絶え、2010 年から再び姿や鳴き声が観察されるようになる。(全記録数 311 件 1996～2020 年)



○繁殖記録

2019. 05. 13 多摩川(上野毛2) 1 巣 1羽が散策路脇のエノキしたで動物の羽毛を咥え真上のエノキ中程でもう1羽に渡す。渡された1羽がすぐ上の巣に入る (6/11 親鳥が虫を咥えて川岸斜面のエノキ上部に入ると複数の雛の鳴き声が続く(6/17 巣立ち雛は散策路脇の斜面で親鳥から給餌を受ける)

○主な観察記録

1996. 08. 27	多摩川(玉堤 1)	1 羽	アズマネザサの藪でさえずる
1998. 03. 13	多摩川(玉堤 1)	1 羽	川岸のムクノキにいた
2000. 05. 11	多摩川(玉堤 1)	1 羽	ムクノキでヒューヒューヒューと鳴く
2002. 07. 19	多摩川(玉堤 1)	1 羽	枯れ草をくわえてアズマネザサの藪に入る
2003. 07. 29	多摩川(玉堤 1)	1 羽	堤のサクラで花を食いちぎる
2004. 04. 09	多摩川(玉堤 1)	1 羽	アズマネザサの藪近くの地面で枯れ葉をめくり、虫を捕る
2004. 05. 22	多摩川(玉堤 1)	1 羽	オニグルミから降りて散策路の水溜りで水を飲む
2005. 06. 03	多摩川(玉堤 1)	2 羽	緑地でホッピングしながら移動して採餌
2010. 08. 02	多摩川(玉堤 1)	2 羽	2羽が散策路脇のオニグルミにいてその内の1羽が「キョッキョッ」と鳴く
2011. 07. 25	多摩川(玉堤 1)	2 羽	2羽がエノキの樹冠部にいて、その内の1羽が「カッカカッ」「ピューピューピュー」と鳴く
2012. 06. 04	多摩川(玉堤 1)	2 羽	河畔林縁のオニグルミにいる個体に、もう1羽がクワから実を咥えて給餌を2度する
2012. 07. 09	多摩川(玉堤 2)	1 羽	散策路脇の水たまりで水浴び
2013. 08. 21	多摩川(玉堤 1)	3 羽	成鳥2羽、幼鳥1羽 対岸から飛来し川岸のムクノキに入る
2014. 08. 11	多摩川(玉堤 1)	1 羽	
2016. 11. 20	二子玉川公園	1 羽	
2018. 05. 28	多摩川(上野毛2)	4 羽	東方向から飛来し川岸のエノキに入る。1羽がエノキの実を食べる
2018. 10. 24	二子玉川公園	3 羽	二子玉川公園内のプラタナスの木にとまっている
2020. 06. 15	多摩川(上野毛2)	4 羽	成鳥2羽、幼鳥2羽が川岸のクワの木で実を食べる

25. ソウシチヨウ *Leiothrix lutea* Red-billed Leiothrix

チメドリ科

中国中南部、ミャンマー、ベトナム北部に分布している。日本には昔から愛玩用とし輸入されている。

逸出した鳥は、低山から山地の林床をササが覆う落葉広葉樹林、混交林に生息する。さえずりは「キュルキュルピルル」「ピーヨピーヨビーコビーコ」と複雑である。1980年代から1990年にかけて、茨城県、東京都、神奈川県、静岡県、兵庫県や九州で野生化し、繁殖するようになった。

世田谷区では、11月から翌年の3月の冬期に観察されているが、2008年砧公園、2011年多摩川では7月に観察された。1972年に初記録。2004年から多摩川、野川、仙川、砧公園、蘆花恒春園、岡本静嘉堂周辺、成城みつ池緑地、瀬田などで観察されている。河畔林や林、池の縁などに生息し、メジロやシジュウカラと群れる姿やさえずりも聞かれている。2015年以降観察されていない。(全記録数 26件 1972～2014年 2011年以降6件)

○主な観察記録

1972. 05. 01	馬事公苑	2 羽	かご抜け
2004. 04. 06	野川(玉川3)	1 羽	兵庫島近くの林で声のみ
2006. 11. 23	瀬田 4	5 羽	時々鳴いていた
2006. 11. 26	砧公園	1 羽	谷戸川吊り橋付近の地面

2006. 12. 19	蘆花恒春園	1 羽	初列風切基部が暗紅色になっているので雄と思われる シジュウカラ、メジロの混群と行動をともにしていた
2006. 12. 27	瀬田 4	3 羽	メジロと同行
2007. 01. 04	蘆花恒春園	1 羽	カラ類やメジロと行動を共にしていた
2007. 01. 27	瀬田 4	1 羽	本格的ではないが囀っていた
2007. 02. 01	仙川(給田 1)	5 羽	河川沿いの樹林帯 (3/12 まで観察)
2008. 07. 01	砧公園	1 羽	
2010. 03. 22	仙川	10 羽	
2011. 02. 08	岡本静嘉堂周辺	13 羽	
2011. 02. 10	成城みつ池緑地	10 羽	
2011. 07. 18	多摩川(玉堤 1)	3 羽	3 羽が河畔林藪付近のオニグルミやエノキを伝って移動し、1 羽が囀る
2013. 01. 05	砧公園	4 羽	サンクチャリ池の縁
2014. 11. 17	多摩川(玉堤 1)	5 羽	川岸のエノキ

◆ ムクドリ科 STURNIDAE

26. ハッカチョウ *Acridotheres cristatellus* Crested Myna

ムクドリ科

中国中部・南東部、台湾、ラオス北部に分布。日本には愛玩用として江戸時代より輸入されている。自然分布地では、平坦な低地を好み、牧場などでウシの足元にて、追い出された昆虫や果実、種子も食べる。樹洞や建物の隙間に巣をつくる。

東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、香川県などで野生化し繁殖したものが観察されている。牧草地、草地、農耕地、住宅地などに生息する。

世田谷区では、下記 3 例の記録がある。(全記録数 6 件 2001、2002 年)

○主な観察記録

2001. 06. 29	多摩川(鎌田 1)	1 羽	グランドのバックネットで休んでいる
2001. 07. 18	多摩川	1 羽	観察
2002. 04. 30	多摩川(鎌田 1)	1 羽	上流から飛来し河原の木に止まる (5/30 まで観察)

◆ カエデチョウ科 ESTRILDIDAE

34. カエデチョウ *Estrilda troglodytes* Black-rumped Waxbill

カエデチョウ科

アフリカ東部中央に分布している。自然分布地では、林縁、湿地、農耕地に生息する。草の茎に止まりまたは地上で草の種子を採食、昆虫も捕る。草の根元の地上に巣をつくる。

日本には愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は湿地や河川敷に生息し、繁殖した例もある。

世田谷区では、繁殖含め下記 3 例の記録がある。採食や鳴き声が観察されている。(全記録数 7 件 1980、2003、2005 年)

○繁殖記録

1980. 11. 14	多摩川	1 巣	巣と 2 羽 多摩川河原にて

○観察記録

1980. 11. 27	多摩川	3 羽	多摩川河原にて (12/8 同所観察)
2003. 12. 05	多摩川(鎌田 1)	1 羽	1 羽がオギに止まって鳴く
2003. 12. 12	多摩川(鎌田 1)	1 羽	1 羽がベニスズメ 3 羽と一緒に行動
2003. 12. 29	多摩川(鎌田 1)	1 羽	2 羽が草地で採餌
2005. 06. 19	多摩川(玉堤 2)	2 羽	玉川排水樋管のヤナギに止まり時々鳴く

35. ベニスズメ *Amandava amandava* Red Avadavat

カエデチヨウ科

パキスタン西部、インド、ネパール南部、バングラデッシュに基亜種が分布。自然分布地では、主にヨシなどの高茎草が茂る川原や湿地に生息。草の種子を採食し、ヒナには半熟の種子を与えることが多い。

日本には、江戸時代から愛玩用として輸入されている。逸出した個体は野生化し、主に関東から四国、九州の広い範囲に分布し、繁殖することが知られている。川原、湿地、農耕地、ヨシ原などに生息する。繁殖は、主食となる草の種子が生息地域で豊富に得られる季節に行われるので、日本では、秋から冬にかけて繁殖する。草の茎に側面に入り口のある球形の巣をつくる。繁殖の後、雄は赤い体羽の部分換羽により、雌に似たより暗灰色のエクリプスの羽になる。

世田谷区では、1960年代からほぼ年中観察されていた。多摩川の全域で見られ、特に草原が広がる鎌田1、2丁目で観察例が多い。1969年に2例の繁殖記録がある。その後1999～2001年の秋に羽毛や枯草の巣材運びが見られているので繁殖していた可能性がある。2004年4月に雄のエクリプス羽が見られている。2006年まで頻繁に観察されていたが、2007年以降観察されていない。ヌマガヤの種子を採食するのや水飲み、さえずりが観察されている。(全記録数 989 件 1961～2006 年)

○繁殖記録

1969. 10.	多摩川	11 巣	(10/18 付新聞)
1969. 11. 12	多摩川(鎌田)	2 巣	①5 卵、②雌5 羽 川原のカヤ

○主な観察記録

1961. 07. 16	多摩川(玉堤)	7 羽	宮内多摩川
1963. 10. 08	多摩川(玉堤)	1 羽	雄 巣材を運ぶ
1964. 06. 24	多摩川(野毛)	4 羽	谷沢川流れ出し先で4羽、多摩川島で1羽が轉っていた
1969. 01. 18	野川(鎌田3)	6 羽	玉電吉沢駅付近の野川の岸にて
1970. 02. 24	多摩川(鎌田)	50 羽	
1986. 10. 15	多摩川	1 羽	
1994. 12. 01	多摩川	20 羽	
1999. 09. 16	多摩川(鎌田1)	4 羽	雄1羽が白い羽毛2枚くわえて飛び去る
2000. 04. 14	多摩川(鎌田1)	8 羽	8羽が池で水を飲む
2000. 10. 15	多摩川	2 羽	1羽が枯れ草をくわえて飛んでいる
2001. 10. 15	多摩川(鎌田1)	2 羽	1羽が枯れ草をくわえて飛んでいる
2002. 11. 20	多摩川	6 羽	定例調査
2003. 04. 04	多摩川(鎌田1)	12 羽	12羽がグラウンドの芝生で採餌
2003. 05. 02	多摩川(鎌田1)	16 羽	1羽が枯れたアシでさえずる
2004. 04. 25	多摩川(鎌田1)	28 羽	5～6羽の小群、計28羽が草原を移動 雄はエクリプス
2004. 06. 02	多摩川(鎌田1)	3 羽	雌雄の2羽が池の縁でヌマガヤの種子を食べる 食べた後オギの茎に寄り添って止まり羽づくろい 雄は頭部や上尾筒付近が赤く白斑
2005. 04. 19	多摩川(鎌田1)	16 羽	雌雄が鳴き交わす
2005. 05. 18	多摩川(鎌田1)	8 羽	オギの海調査
2006. 11. 15	多摩川	4 羽	定例調査

38. ギンパラ *Lonchura malacca* Tricolored Munia

カエデチヨウ科

インドから東南アジア、台湾に分布している。自然分布地では、ヨシ原、湿地、サトウキビ畑などに生息し、地上で草の種子を採食。高茎草の茎に球形の巣をつくる。

日本では古くから愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は農耕地、草地、ヨシ原、低木林に生息する。東京都、兵庫県、沖縄県で繁殖例もある。

世田谷区では、下記4例の記録がある。(全記録数 10 件 1963～1998 年)

○観察記録

1963. 08. 17	多摩川	1 羽	小杉
1968. 11. 01	多摩川(玉川)	15 羽	二子橋上流多摩川にて野生化しているのを発見 (11/29 まで1～10羽を観察)

1969. 07. 19 多摩川 2羽 二子橋上流
1998. 05. 23 多摩川(鎌田 1) 1羽 スズメ数羽と オギの海

39. キンバラ *Lonchura atricapilla* Chestnut Munia

カエデチヨウ科

インドから東南アジア、台湾に分布している。自然分布地では、ヨシ原、湿地、サトウキビ畑などに生息し、地上で草の種子を採食。高茎草の茎に球形の巣をつくる。

日本には古くから愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は農耕地、草地、ヨシ原、低木林に生息する。本州、四国、九州、沖縄県で繁殖例もある。

世田谷区では、繁殖を含め下記4例の記録がある。(全記録数 7件 1967～1969年)

○繁殖記録

1969. 10. 多摩川 1巣 (東京都産鳥類目録昭和45年版による。繁殖の詳細や日は不明)

○観察記録

1967. 08. 02 多摩川(野毛) 1羽 谷沢川流れ出し
1968. 11. 02 多摩川(鎌田) 13羽 幼鳥12羽が親鳥と行動しているのを二子橋上流多摩川川原にて発見(1～15羽を11/29まで観察)
1969. 11. 08 多摩川(鎌田) 20羽 二子橋上流の草原

40. ヘキチヨウ *Lonchura maja* White-headed Munia

カエデチヨウ科

マレー半島、大スンダ列島に分布している。自然分布地では、草原、農耕地、公園などに生息し、草の種子を採食。

日本には愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は休耕地やヨシ原に生息する。東京都、兵庫県、徳島県で繁殖例もある。

世田谷区では、下記4例の記録がある。1998年と2000年に記録された個体は約1か月見られた。(全記録数 16件 1969～2000年)

○観察記録

1969. 11. 08 多摩川(鎌田 1) 3羽 二子橋上流の川原草地
1980. 11. 14 多摩川 3羽 宮内の多摩川河原にて
1998. 11. 30 多摩川(玉川 1) 1羽 二子橋下流約100mで草の種子を採食(12/28まで観察)
2000. 12. 14 多摩川(鎌田 1) 1羽 スズメの群れと(翌年1/6まで観察)

41. ブンチヨウ *Lonchura oryzivora* Java Sparrow

カエデチヨウ科

ジャワ島とバリ島に自然分布している。自然分布地では、疎林、藪のある草原、住宅地などに生息し、地上で種子を採食する。大群でイネを食害することもある。樹洞や建物の穴などに営巣する。

日本には、江戸時代初期に中国から愛玩用として持ち込まれたと言われている。逸出した鳥は東京都、大阪府、兵庫県、福岡県で繁殖している。

世田谷区では、下記2例の記録がある。(全記録数 3件 1969年)

○観察記録

1969. 11. 04 瀬田 2羽
1969. 11. 08 喜多見 8羽 東名高速道下の田(11/9にも2羽観察)

◇ 第7版の外来種に記載されていない種

◆ フラミンゴ科 PHOENICOPTERIDAE

1. チリーフラミンゴ *Phoenicopterus chilensis* Chilean Flamingo フラミンゴ科

南アメリカ大陸のアルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ブラジル南部、ペルー南部、ボリビアに生息する高山帯の湖沼(塩湖)や海岸に生息し、数百から数千羽の大規模な群れを形成し生活する。雑食性で水生昆虫、甲殻類、藻類、植物の種子などを食べる。泥ごと食物を口に含み、嘴と舌を使い食物のみを濾して食べる。

日本には、各地の動物園などに輸入されている。

世田谷区では、逸出したと思われる下記の1例の記録がある。(全記録数 1件 1974年)

○観察記録

1974. 04. 06 多摩川(玉堤1) 1羽 大田区境

◆ オウム科 CACATUIDAE

2. オカメインコ *Nymphicus hollandicus* Cockatiel オウム科

オーストラリアのほぼ全域に分布するが、オーストラリア北部で多い。自然分布地では、開けた土地に多く、特に水場の近くを好む。大群も見られるが、普段はつがいが小群で行動する。草の実や穀類、果実などを食べる。

イギリス人が本国に持ち帰り、ペットとして広めたものである。日本には愛玩用に1910年代に輸入されている。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数 1件 2010年)

○観察記録

2010. 08. 31 祖師谷2 1羽 焼却炉の階段に止まって鳴く 全体が白く顔の部分は黄色で頬にオレンジのような赤い円の模様があり、頭上部羽と尾は長い

◆ コンドル科 CATHARTIDAE

3. クロコンドル *Coragyps atratus* Black Vulture コンドル科

アメリカのワシントン州、オハイオ州南部、アリゾナ州南部や南アメリカのパタゴニア中央部などに分布し、渡りはしないといわれているが、11月頃にパナマを通して南へ移動する個体もある。自然分布地では、荒れ果てた草原や砂漠などに生息し、獣や鳥などの腐肉を食べ、時々哺乳類や家禽なども襲って食べることがある。ほかのコンドルに比べて翼が短いのであまり広い範囲にわたって餌を探し求めて飛ぶことはないといわれている。樹上や切株上に巣をつくる。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数 2件 2010年)

○観察記録

2010. 10. 31 砧公園 1羽 木止まり・飛翔 (11/1も同じ公園で観察)

◆ ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

4. オウゴンチョウ *Euplectes afer* Golden Bishop ハタオリドリ科

アフリカ中南部に分布している。自然分布地では、沼地や川辺の草地に生息。一夫多妻で雄はさえずり

ながら腰の羽をふくらませてディスプレイをする。ヨシなどに卵形の巣をつくる。

日本には愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は草地や農耕地などで見られることがある。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数 1件 2004年)

○観察記録

2004. 08. 03 多摩川(野毛2) 1羽 雄が河原の草地でスズメ約150羽と一緒に行動

5. ベニビタイキンランチョウ *Euplectes hordeaceus* Red-crowned Bishop ハタオリドリ科

アフリカ中部に分布している。自然分布地では、草原に生息する。一夫多妻で縄張りを持ち、上空で体羽をふくらませたまま羽ばたき、ゆっくり飛ぶディスプレイが知られている。丈夫な草の茎に球形の巣をつくり、入り口は脇にある。

日本には愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は川原、埋立地、農耕地などで見られることがある。

世田谷区では、下記1例の記録がある。(全記録数1件 2000年)

○観察記録

2000. 09. 01 多摩川(野毛2) 1羽 雄が河原で草の種子を啄む

6. キンランチョウ *Euplectes orix* Red Bishop ハタオリドリ科

アフリカ中南部に分布している。自然分布地では、穀物の畑、背の高い草地や水辺の植生などに生息する。一夫多妻で丈夫な草の茎に巣をつくり、入り口は脇にある。

日本には愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は草地、農耕地などで見られることがある。

世田谷区では、下記4例の記録がある。(全記録数 4件 1973～2004年)

○観察記録

1973. 10. 11	多摩川	1羽	野生化した雄 谷沢川先
1986. 10. 30	多摩川(鎌田1)	1羽	雄
2003. 09. 05	多摩川(上野毛2)	1羽	雄が散策路脇の背の高い草に止まり鳴く
2004. 09. 30	多摩川	1羽	

◆ テンニンチョウ科 VIDUIDAE

7. テンニンチョウ *Vidua macroura* Pin-tailed Whydah テンニンチョウ科

アフリカ中南部に分布している。自然分布地では、サバンナに生息。カエデチョウ属の4種に托卵する。雄は宿主のさえずりを模倣する。ヒナも宿主のヒナに姿、鳴き声や食物をねだる姿勢が似て、宿主のヒナとともに育てられる。

日本には、愛玩用として輸入されている。逸出した鳥は川原や埋立地、農耕地などに生息し、繁殖例もある。

世田谷区では、下記の6例の記録がある。(全記録数 6件 1979～2004年)

○観察記録

1979. 10. 16	多摩川(玉川1)	2羽	木の枝で交尾 二子橋下流
1979. 10. 26	多摩川(玉川1)	1羽	雄 木の枝で休息 二子橋下流
1997. 10. 17	多摩川(鎌田1)	1羽	雄が草原で長い尾を垂らして低空で飛ぶ
2001. 08. 03	多摩川(玉堤1)	1羽	雌が中州の草地にいた
2002. 09. 29	多摩川(玉川1)	1羽	雄が川崎側から尾を垂らして飛来し松林に入る
2004. 11. 12	多摩川	1羽	

第Ⅳ章

多摩川、野川、仙川、成城みつ池緑地、砧公園、
駒沢オリンピック公園、羽根木公園における定例調査結果の分析

野鳥ボランティアは、区内における鳥類の個体数やその増減について基礎資料を得る目的で、多摩川、野川、仙川、砧公園における定例調査を2002年より開始した。続いて2013年より駒沢オリンピック公園と羽根木公園、2016年から成城みつ池緑地を加え、現在7か所で定例調査を実施している。

表IV-1に示すように多摩川では年6回(*2002年は2月の記録を同年1月の記録とみなした。5月は2007年から調査開始したが、2005、2006年の4月の記録は5月とみなして合わせて集計した)、野川では年4回、仙川では年4回(2006年1月の記録を同年2月の記録とみなした)、成城みつ池緑地では毎月1回、砧公園では2009年より年5回、駒沢オリンピック公園と羽根木公園では毎月1回調査を実施している。

ただし、雨天時の調査中止に加え、多摩川では2020年5月、成城みつ池緑地では2020年4、5月、駒沢オリンピック公園では2020年4、5、7月、羽根木公園では2020年4、6、8月の調査が新型コロナウイルス感染症予防のために中止され、それらの記録は欠落している。

本章では、それら定例調査から得られたデータに基づき、定例調査実施地における 1. 鳥相(*1)、2. 個体数の推移、3. 主な種の個体数推移について述べる。

(*1)「鳥相」とは特定の場所に生息する鳥の全種類、及びその構成をいう

各分析においては、それぞれの目的に応じて「冬期」、「夏期」、「年間」とそれぞれの種が主にみられる季節に分けて分析している。冬期とは1～3月と11～12月、夏期とは4～10月の期間とする。

表IV-1. 調査地と調査実施月 (○は調査実施月)

調査地	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
多摩川	○		○		○	○			○		○	
野川		○				○			○			○
仙川		○				○			○			○
成城みつ池緑地	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
砧公園	○			○	○		○			○		
駒沢オリンピック公園	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
羽根木公園	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

1. 定例調査実施地における鳥相

多摩川、野川、仙川、成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園の7か所における定例調査結果からみられる各調査地の鳥相の特徴を以下に述べる。グラフは冬期(1～3月と11～12月)、夏期(4～10月)に実施された直近5年間(2016～2020年)の調査で得られたデータを基に作成した。

1) 定例調査実施地での出現種

①多摩川、野川、仙川における出現種

多摩川、野川、仙川において2016～2020年の5年間に実施した定例調査において確認された全ての種をグラフで示した(図IV-1-1、図IV-1-2)。グラフ下段の暗グレー色の部分は3か所の河川すべてで出現した種、明グレー色の部分は2か所の河川、白色の部分は1か所の河川のみで観察された種を示す。種の並べ方は河川3か所すべてで見られた種と2か所また1か所で見られた種に分け、種番号の順に並べた。

2016～2020年の5年間に、冬期には多摩川で76種、野川で50種、仙川では43種が観察され、この内36種は河川3か所共通で見られた種である。また、夏期には多摩川で56種、野川で39種、仙川で29種が観察され、この内24種が河川3か所共通で見られた種である。多摩川での種数の多さはその多様な環境によるものと思われ、水鳥のほか広大な草地や樹木を有する高水敷にはアマサギ、アリスイ、セッカ、ミヤマホオジロ、オオジュリンなども見られる。冬期のカモ類では多摩川で10種(スズガモ、キンクロハジロ、ホシハジロなどスズガモ属の潜水ガモ3種を含む)、野川では3種、川幅の狭い仙川でも多摩川で見られる10種の内、潜水ガモを除く7種が観察されており、コンクリート護岸に囲まれて安全な仙川がカモ類に好まれていると思われる。また、水深の浅い野川や仙川では潜水ガモは採食できないことが両河川で潜水ガモが見られない理由と考えられる。夏期に多摩川、仙川でマガモ、オナガガモ、コガモが観察されているが、これらは怪我などによる越夏個体である。

カモ類を含む全ての水辺の鳥の種数は、冬期には多摩川で 22 種、野川で 15 種、仙川で 14 種、夏期では多摩川で 13 種、野川で 9 種、仙川で 7 種と、各河川ごとの環境の差異を反映した結果となっている。冬期には多摩川と野川でカイツブリが観察される。仙川において冬期、夏期ともにエナガ、冬期にアトリが観察されているが、仙川の両側に位置する祖師谷公園が生息する野鳥の生活の一部になっていることからと思われる。

冬期			* 太文字は解説で取り上げた種
76種			
キン			
オカヨシガモ			
ヒドリガモ			
ハシビロガモ			
オナガガモ			
ホシハシロ			
キンクロハジロ			
スズガモ			
カイツブリ			
アカエリカイツブリ			
カンムリカイツブリ			
アマサギ			
チュウサギ			
バン			
アマツバメ			
ヒメアマツバメ			
イカルチドリ			
コチドリ			
イソシギ			
セグロカモメ			
アジサシ			
クロハラアジサシ			
ミサゴ			
トビ			
ハイタカ			
オオタカ			
ノスリ			
アリスイ			
チョウゲンボウ			
ハヤブサ			
ヒバリ			
イワツバメ			
セッカ			
アカハラ			
イカル			
カンラタカ			
ミヤマホオジロ			
オオジュリン			
ガビチョウ			
カオグロガビチョウ			
マカモ			
カルガモ			
コガモ			
キンバト			
カワウ			
ゴイサギ			
アオサギ			
ダイサギ			
コサギ			
オオバン			
ユリカモメ			
カワセミ			
コゲラ			
モズ			
オナガ			
ハシボソガラス			
ハシブトガラス			
シジュウカラ			
ヒヨドリ			
ウグイス			
メジロ			
ムクドリ			
シロハラ			
ツグミ			
ジョウビタキ			
スズメ			
ギセキレイ			
ハクセキレイ			
セグロセキレイ			
タビバリ			
カワラヒワ			
シメ			
ホオジロ			
アオジ			
カワラバト			
ホンセイインコ			
カイツブリ			
クイナ			
バン			
イカルチドリ			
タシギ			
イソシギ			
トビ			
ツミ			
ハイタカ			
オオタカ			
チョウゲンボウ			
ハヤブサ			
アカハラ			
イソヒヨドリ			
マカモ			
カルガモ			
コガモ			
キンバト			
カワウ			
ゴイサギ			
アオサギ			
ダイサギ			
コサギ			
オオバン			
ユリカモメ			
カワセミ			
コゲラ			
モズ			
オナガ			
ハシボソガラス			
ハシブトガラス			
シジュウカラ			
ヒヨドリ			
ウグイス			
メジロ			
ムクドリ			
シロハラ			
ツグミ			
ジョウビタキ			
スズメ			
ギセキレイ			
ハクセキレイ			
セグロセキレイ			
タビバリ			
カワラヒワ			
シメ			
ホオジロ			
アオジ			
カワラバト			
ホンセイインコ			
オカヨシガモ			
ヒドリガモ			
ハシビロガモ			
オナガガモ			
タシギ			
エナガ			
アトリ			
マカモ			
カルガモ			
コガモ			
キンバト			
カワウ			
ゴイサギ			
アオサギ			
ダイサギ			
コサギ			
オオバン			
ユリカモメ			
カワセミ			
コゲラ			
モズ			
オナガ			
ハシボソガラス			
ハシブトガラス			
シジュウカラ			
ヒヨドリ			
ウグイス			
メジロ			
ムクドリ			
シロハラ			
ツグミ			
ジョウビタキ			
スズメ			
ギセキレイ			
ハクセキレイ			
セグロセキレイ			
タビバリ			
カワラヒワ			
シメ			
ホオジロ			
アオジ			
カワラバト			
ホンセイインコ			
多摩川			
野川			
仙川			

図IV-1-1. 多摩川・野川・仙川での出現種（冬期）

夏期			* 太文字は解説で取り上げた種		
56種					
キン					
マカモ					
オナガガモ					
アマサギ					
オオバン					
ヒメアマツバメ					
イカルチドリ					
コチドリ					
タシギ					
アオアジサシ					
タカフシギ					
キアジサシ					
コアジサシ					
ミサゴ					
トビ					
オオタカ					
チョウゲンボウ					
ハヤブサ					
モズ					
ヒバリ					
コシアカツバメ					
イワツバメ					
ウグイス					
エナガ					
オオヨシキリ					
セッカ					
ノビタキ					
イソヒヨドリ					
セグロセキレイ					
ホオジロ					
コジュケイ					
ガビチョウ					
カルガモ					
キンバト					
カワウ					
ゴイサギ					
アオサギ					
ダイサギ					
コサギ					
イソシギ					
カワセミ					
コゲラ					
オナガ					
ハシボソガラス					
ハシブトガラス					
シジュウカラ					
ツバメ					
ヒヨドリ					
メジロ					
ムクドリ					
スズメ					
キセキレイ					
ハクセキレイ					
カワラヒワ					
カワラバト					
ホンセイインコ					
39種					
カイツブリ					
ヒメアマツバメ					
イカルチドリ					
コチドリ					
トビ					
オオタカ					
チョウゲンボウ					
モズ					
ヒバリ					
コシアカツバメ					
イワツバメ					
オオヨシキリ					
セッカ					
イソヒヨドリ					
セグロセキレイ					
カルガモ					
キンバト					
カワウ					
ゴイサギ					
アオサギ					
ダイサギ					
コサギ					
イソシギ					
カワセミ					
コゲラ					
オナガ					
ハシボソガラス					
ハシブトガラス					
シジュウカラ					
ツバメ					
ヒヨドリ					
メジロ					
ムクドリ					
スズメ					
キセキレイ					
ハクセキレイ					
カワラヒワ					
カワラバト					
ホンセイインコ					
27種					
オナガガモ					
コガモ					
エナガ					
カルガモ					
キンバト					
カワウ					
ゴイサギ					
アオサギ					
ダイサギ					
コサギ					
イソシギ					
カワセミ					
コゲラ					
オナガ					
ハシボソガラス					
ハシブトガラス					
シジュウカラ					
ツバメ					
ヒヨドリ					
メジロ					
ムクドリ					
スズメ					
キセキレイ					
ハクセキレイ					
カワラヒワ					
カワラバト					
ホンセイインコ					
多摩川		野川		仙川	

②成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園における出現種

2016年から2020年までの5年間に、冬期に成城みつ池緑地では31種、砧公園では36種、駒沢オリンピック公園では30種、羽根木公園では26種が観察されている。この内、23種は4つの公園・緑地共通で見られた種である。また夏期には成城みつ池緑地で29種、砧公園で48種、駒沢オリンピック公園で33種、羽根木公園では29種が観察されている。この内、23種は4か所の公園・緑地共通で見られた種である（23種の構成は冬期と異なる）。夏期には冬期に比べ成城みつ池緑地では9種、砧公園では12種、駒沢オリンピック公園では3種、羽根木公園では3種多く見られており、これには夏期、繁殖地への行き来の途中に立ち寄るツツドリ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、エゾビタキ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリなどが含まれている。砧公園では2019年に初めてキビタキが繁殖した。成城みつ池緑地や砧公園など樹木の密度が高い公園・緑地ではアカゲラ、アオゲラ、ガビチョウなども見られ、成城みつ池緑地ではフクロウも観察されている。各公園での種の構成には樹林帯の密度や草地、土の露出、舗装面の広さなど観察地特有の環境が反映されている。

グラフ下段の暗グレー色の部分は観察地4か所すべてで出現した種、明グレー色の部分は観察地2または3か所、白色の部分は1か所のみで観察された種を示す。種の並べ方は観察地4か所すべてで見られた種と3～1か所で見られた種に分け、それぞれ種番号の順に並べた。

冬期				*太文字は解説で取り上げた種			
				36種			
				カルガモ	カワウ	アオサギ	ツミ
				オオタカ	カワセミ	アオゲラ	カケス
				アカゲラ	アオゲラ	ヤマガラ	ツミ
				アオゲラ	アカハラ	オオタカ	ウソ
				ハヤブサ	キセキレイ	イカル	オナガ
				キンバト	キンバト	キンバト	キンバト
				コゲラ	コゲラ	コゲラ	コゲラ
				モズ	モズ	モズ	モズ
				オナガ	オナガ	オナガ	オナガ
				ハシボソガラス	ハシボソガラス	ハシボソガラス	ハシボソガラス
				ハシブトガラス	ハシブトガラス	ハシブトガラス	ハシブトガラス
				シジュウカラ	シジュウカラ	シジュウカラ	シジュウカラ
				ヒヨドリ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	ヒヨドリ
				ウグイス	ウグイス	ウグイス	ウグイス
				エナガ	エナガ	エナガ	エナガ
				メジロ	メジロ	メジロ	メジロ
				ムクドリ	ムクドリ	ムクドリ	ムクドリ
				シロハラ	シロハラ	シロハラ	シロハラ
				ツグミ	ツグミ	ツグミ	ツグミ
				ジョウビタキ	ジョウビタキ	ジョウビタキ	ジョウビタキ
				スズメ	スズメ	スズメ	スズメ
				ハクセキレイ	ハクセキレイ	ハクセキレイ	ハクセキレイ
				アトリ	アトリ	アトリ	アトリ
				カワラヒワ	カワラヒワ	カワラヒワ	カワラヒワ
				シメ	シメ	シメ	シメ
				アオジ	アオジ	アオジ	アオジ
				カワラバト	カワラバト	カワラバト	カワラバト
				ホンセイインコ	ホンセイインコ	ホンセイインコ	ホンセイインコ
成城みつ池緑地	砧公園	駒沢オリンピック公園	羽根木公園				

図IV-1-3. 公園・緑地4か所における出現種（冬期）

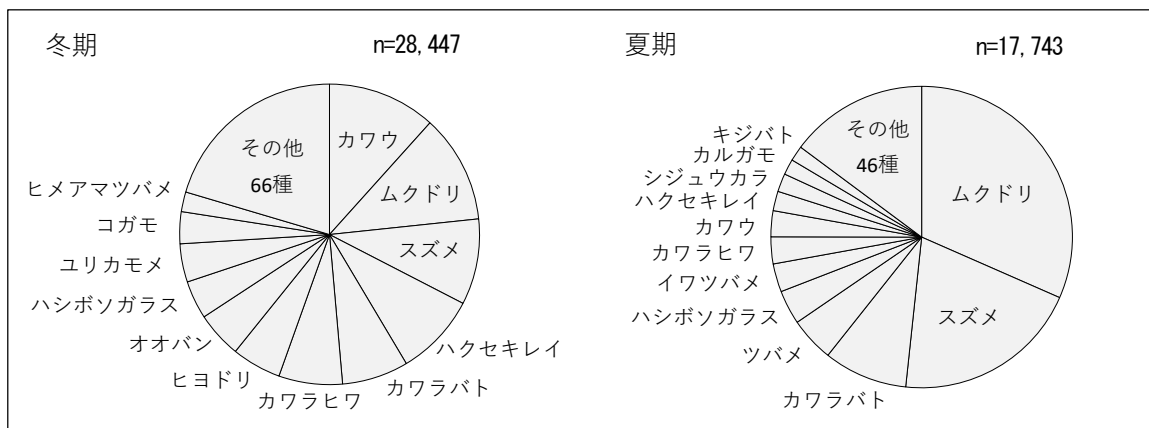
夏期				*太文字は解説で取り上げた種			
				48種			
				カルガモ	コガモ	カワウ	アオサギ
				ツツドリ	ヒメアマツバメ	トビ	オオタカ
				カワセミ	アカゲラ	アオゲラ	カケス
				フクロウ	イワツバメ	エゾムシクイ	シロハラ
				アカゲラ	アオゲラ	アカハラ	エゾビタキ
				アオゲラ	エゾムシクイ	コサメビタキ	キビタキ
				マミチャジナイ	シロハラ	サメビタキ	オオルリ
				コサメビタキ	キビタキ	アトリ	キセキレイ
				アトリ	シメ	クロジ	ガビチョウ
				シメ	イカル	キンバト	ツミ
				クロジ	ガビチョウ	ツミ	コゲラ
				ガビチョウ	キンバト	ツミ	コゲラ
				キンバト	ツミ	コゲラ	モズ
				ツミ	コゲラ	モズ	オナガ
				コゲラ	モズ	オナガ	ハシボソガラス
				モズ	オナガ	ハシボソガラス	ハシブトガラス
				オナガ	ハシボソガラス	ハシブトガラス	ヤマガラ
				ハシボソガラス	ハシブトガラス	ハシブトガラス	シジュウカラ
				ハシブトガラス	ハシブトガラス	ハシブトガラス	ツバメ
				ヤマガラ	ヤマガラ	ヤマガラ	ヒヨドリ
				シジュウカラ	シジュウカラ	シジュウカラ	ウグイス
				ツバメ	ツバメ	ツバメ	エナガ
				ヒヨドリ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	メジロ
				ウグイス	ウグイス	ウグイス	ムクドリ
				エナガ	エナガ	エナガ	ツグミ
				センダイムシクイ	センダイムシクイ	センダイムシクイ	スズメ
				メジロ	メジロ	メジロ	ハクセキレイ
				ムクドリ	ムクドリ	ムクドリ	カワラヒワ
				ツグミ	ツグミ	ツグミ	アオジ
				スズメ	スズメ	スズメ	カワラバト
				ハクセキレイ	ハクセキレイ	ハクセキレイ	ホンセイインコ
				カワラヒワ	カワラヒワ	カワラヒワ	
				アオジ	アオジ	アオジ	
				カワラバト	カワラバト	カワラバト	
				ホンセイインコ	ホンセイインコ	ホンセイインコ	
成城みつ池緑地	砧公園	駒沢オリンピック公園	羽根木公園				

図IV-1-4. 公園・緑地4か所における出現種（夏期）

2) 定例調査実施地ごとの鳥相

7 か所の定例調査地ごとの鳥相を調査地が有する自然環境と関連付けながら見る。グラフは直近 5 年間 (2016～2020 年) の調査で得られたデータから、調査地ごとに冬期、夏期それぞれ優占度 (全個体数にその種が占める個体数の割合) 上位 12 位以下の種について示した。上位 12 位以下の種は「その他」としてまとめた。種の並べ方は優占度の高い順に右回りとした。グラフ右肩の n=〇〇 は 5 年間に観察された冬期、夏期それぞれの総個体数である。

①多摩川

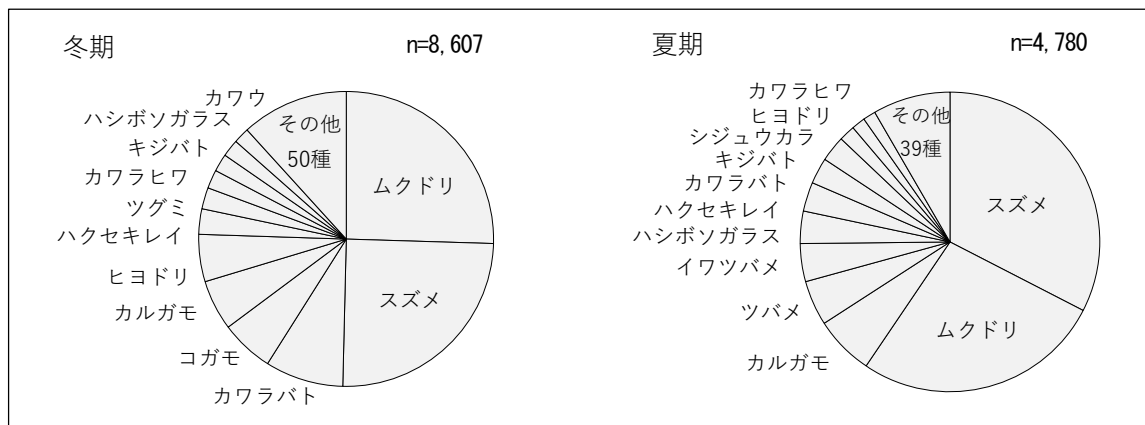


図IV-1-5. 多摩川の優占度グラフ

多摩川定例調査の調査範囲は、狛江市境から大田区境までの 6.9km、川幅約 380～700m の全域で、多摩川本流、中州、寄り州、低・高水敷の草地・樹木・砂地のグラウンド、堤防の土手内面まで広範囲な野鳥生息環境が含まれている。

2016～2020 年の冬期 (11 月～3 月) と夏期 (4 月～10 月) の優占度を見ると、冬期の上位 12 種、夏期の上位 12 種には合わせて 17 種が見られ、冬期にはオオバン、ユリカモメ、コガモ、夏期にはツバメ、イワツバメが含まれる。冬期では種ごとの優占度に差があまり見られないが、他にも多くの冬鳥が含まれるため「その他」の割合が大きくなっている。冬期に群れをなすカワウ、ユリカモメ、ヒメアマツバメは調査 1 回あたりの個体数が多く、優占度上位に含まれている。夏期ではムクドリとスズメで過半を占め、これにカワラバト、ツバメ、ハシボソガラスを加えると全体の 2/3 を占める。夏期にもカルガモ以外の水辺の鳥も見られるが、個体数が少なく優占度上位には含まれない。夏冬を通してハクセキレイが見られるが、特に冬期には個体数が多くなり優占度 4 位である。また住宅地に囲まれず、密な樹林帯も無いため冬期、夏期ともにハシボソガラスが上位 10 種に含まれないのも本調査地の特徴である。

②野川

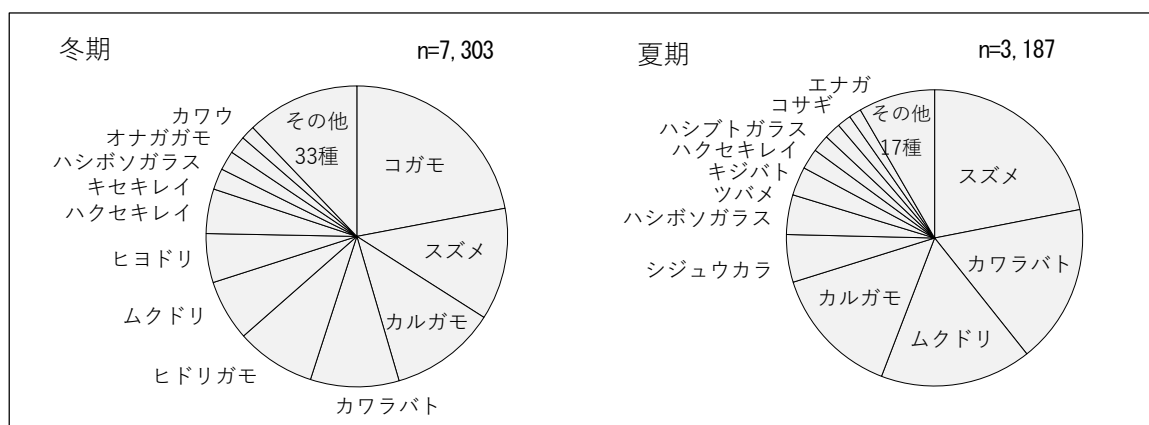


図IV-1-6. 野川の優占度グラフ

野川定例調査の調査範囲は、狛江市谷戸橋から二子橋までの 5.4km、遊歩道を含む川幅 34～49m の全域で、野川本流、寄り州、草地の高水敷が含まれている。土手内面は調査範囲の多くの部分が草地、残りがコンクリート系ブロックであるが、ほぼ全域にわたって草の生えた高水敷あるいは寄り州が続いている。

2016～2020 年の冬期（11 月～3 月）と夏期（4 月～10 月）の優占度を見ると、冬期の上位 12 種、夏期の上位 12 種には合わせて 15 種が見られ、冬期にはコガモ、ツグミ、夏期にはツバメ、イワツバメが含まれる。両時期ともムクドリ、スズメ、カルガモで過半を占めるのが大きな特徴で、これに冬期にはコガモ、カワラバト、夏期にはツバメ、イワツバメが加わって 2/3 を占める。スズメやムクドリが多いのは比較的に広い高水敷とその豊かな植生、及び周辺に点在する畑地の影響であると考えられる。

③仙川

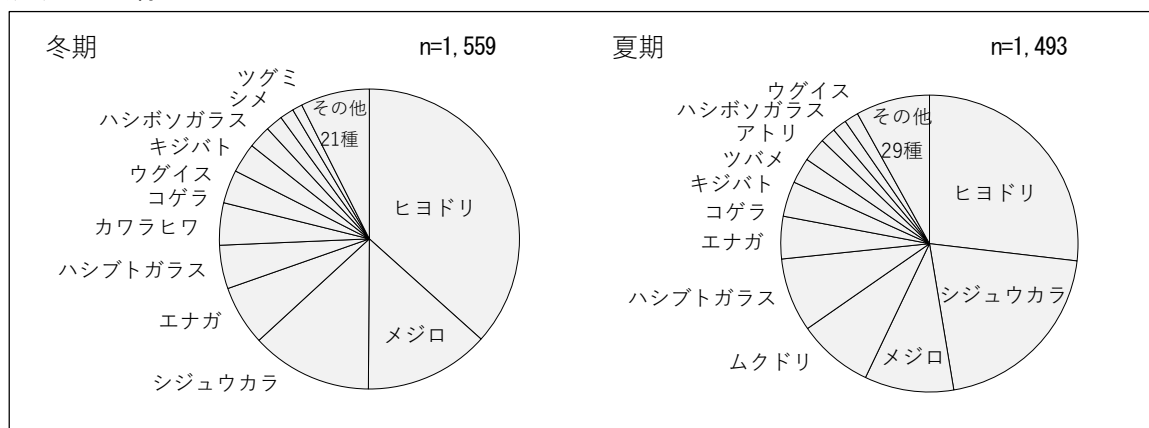


図IV-1-7. 仙川の優占度グラフ

仙川定例調査の調査範囲は、仙川橋から鎌田橋までの約 6.2km、遊歩道を含む川幅 17～25m の全域である。両岸は垂直コンクリート壁であるが、川底は土のままで大規模ではないものの中州や寄り州も見られ、カモ類のエサになるナガエミクリなどの抽水性植物や沈水性植物、蘚苔類が多く見られる。

2016～2020 年の冬期（11 月～3 月）と夏期（4 月～10 月）の優占度を見ると、冬期の上位 12 種、夏期の上位 12 種には合わせて 18 種が見られ、冬期にはコガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、キセキレイが、夏期にはツバメが含まれる。冬期にカモ類が多く見られることから、冬期と夏期で優占度上位を占める種の構成が大きく変わっているのが特徴である。夏期にも換羽のため集まるカルガモが多いためカルガモの優占度は 14%を超える。

④成城みつ池緑地

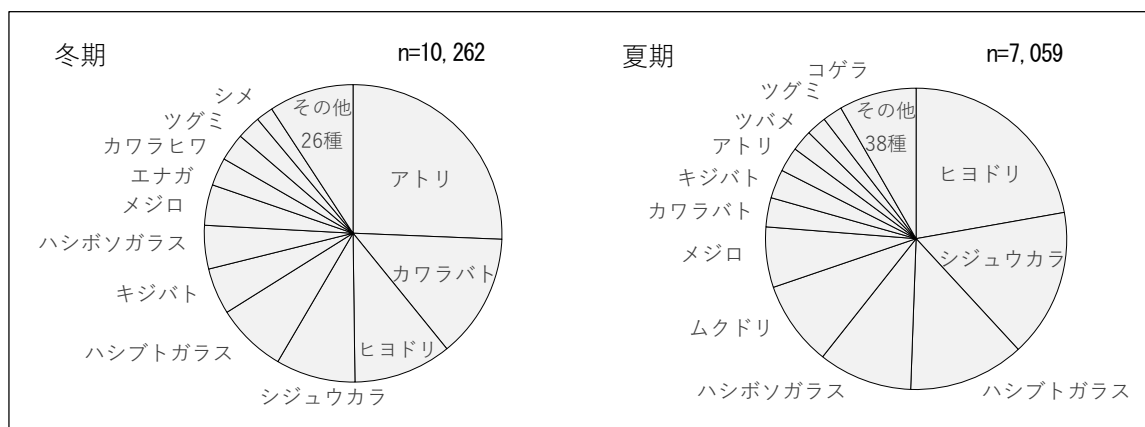


図IV-1-8. 成城みつ池緑地の優占度グラフ

成城みつ池緑地は国分寺崖線の中にあり、森林性の環境である。東京都の緑地保全地区、世田谷区の特別保護区に指定されており、普段は関係者以外の立ち入りができない。野鳥調査は継続されている当緑地の環境調査の一環として、緑地全域 2 万 3 千㎡の中で地形的な特徴の異なる 3 地点を選んで、半径 50m 程度のスポットセンサスで行っている。

2016～2020 年の冬期（11 月～3 月）と夏期（4 月～10 月）の優占度を見ると、冬期の上位 12 種、夏期の上位 12 種には合わせて 16 種が見られ、冬期にはツグミ、シメ、アトリが、夏期にはツバメや渡去前のアトリが含まれる。アトリは 2017 年 4 月に渡去前の個体 25 羽が観察されたもので特異的な記録である。冬期、夏期ともヒヨドリ、シジュウカラ、メジロの 3 種で 60%以上を占める。留鳥に関しては年間の鳥相にあまり変化はない。樹上を好むハシブトガラスがハシボソガラスより多く見られる。夏期に市街地で個体数の減るヒヨドリが多く見られること、コゲラやエナガが優占度上位に入ることは他の観察地にはない特徴である。緑地内に開けた場所が無いためスズメやカワラバトはほとんど見られない。これらは樹林の密度が高い本観察地ならではの特色である。

⑤砧公園

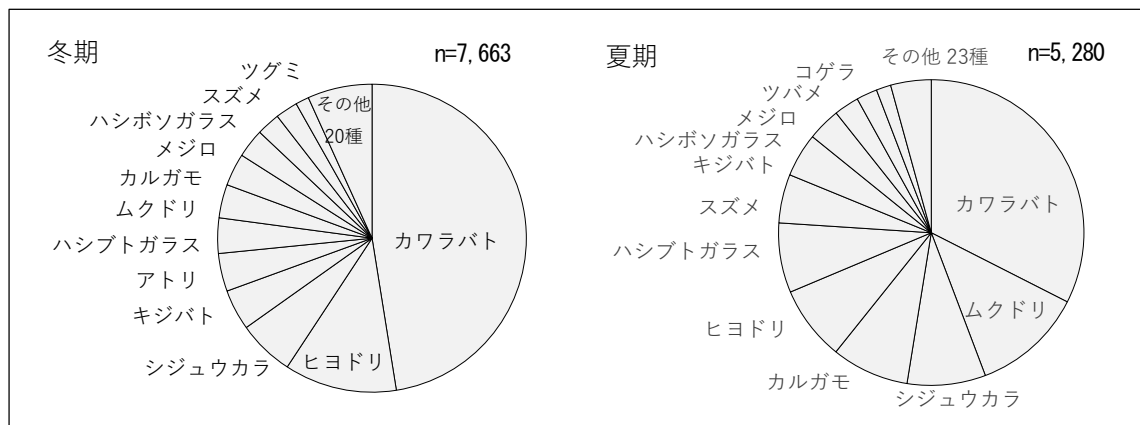


図IV-1-9. 砧公園の優占度グラフ

砧公園定例調査の調査範囲は、公園面積約 39 万㎡の約 80%をカバーしている。樹林帯、芝地、ブッシュ、谷戸川やバードサンクチュアリの池など水面もあり、開けた樹林、林縁部の様相を呈する環境である。

2016～2020 年の冬期（11 月～3 月）と夏期（4 月～10 月）の優占度を見ると、冬期の上位 12 種、夏期の上位 12 種には合わせて 15 種が見られ、冬期にはツグミ、シメ、アトリが、夏期にはツバメが含まれる。冬期のアトリは 2015、2017、2019 年にのみ見られたものが集団の規模が大きいため優占度 1 位を占める結果となっており、毎年の事ではない点に留意すべきである。夏期のアトリは渡去前のものが観察されたものである。アトリを除けば冬期、夏期ともカワラバト、ヒヨドリ、シジュウカラ、ハシブトガラス、ハシボソガラスが優占度上位を占め、キジバト、メジロが続く。特にカワラバトは冬期に急増し優占度 2 位である。

⑥駒沢オリンピック公園



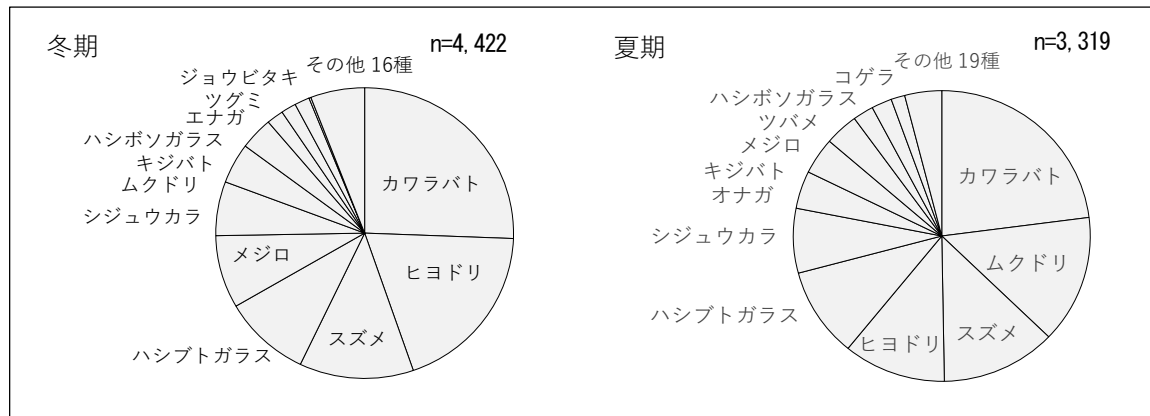
図IV-1-10. 駒沢オリンピック公園の優占度グラフ

駒沢オリンピック公園は周囲を住宅地、商業地に囲まれた平坦な都市公園で、全体面積の 3 割以上を占める運動施設、周辺道路とそれに沿った樹木、まばらに樹木が植えられた広場などからなる。バードサンクチュアリとして保護された部分もあり、記念広場にある人工池にはカルガモが生息している。約 40 万㎡

の公園は世田谷区と目黒区にまたがっているが、世田谷区に属する部分に5地点を設定し、スポットセンサスで調査している。

2016～2020年の冬期（11月～3月）と夏期（4月～10月）の優占度を見ると、冬期の上位12種、夏期の上位12種には合わせて14種が見られ、冬期にはツグミ、アトリ、夏期にはツバメが含まれる。冬鳥、夏鳥を除けば種の構成は冬期、夏期ともほとんど同じである。街中にある人工池にカルガモが年中生息して繁殖もしている点、都市鳥の代表格であるカワラバトが一年を通して優占度1位を占める点、ハシブトガラスがハシボソガラスより多い点などが特徴として挙げられる。

⑦羽根木公園



図IV-1-11. 羽根木公園の優占度グラフ

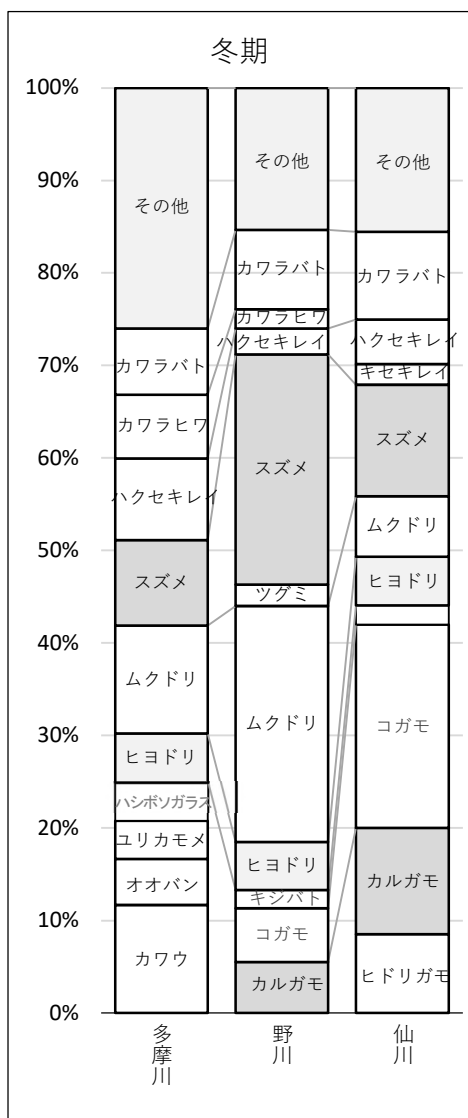
羽根木公園は周囲は商業地、住宅地、小・中学校などの公共施設に囲まれた区立公園で、約8万㎡の公園全体が小高い丘になっており、北に広場と野球場、中央にテニスコート、南東にプレイパーク、南斜面に梅林と針葉樹林が広がる。公園全体をカバーする5地点を設定し、スポットセンサスで調査している。

2016～2020年の冬期（11月～3月）と夏期（4月～10月）の優占度を見ると、冬期の上位12種、夏期の上位12種には合わせて15種が見られ、冬期にはツグミ、ジョウビタキ、夏期にはツバメが含まれる。上位12種にジョウビタキが含まれるのは他の観察地にはない特徴である。留鳥の種の構成は冬期、夏期とも大きく変わらない。夏冬を通してスズメが優占度3位を占めるのも本公園の特徴である。

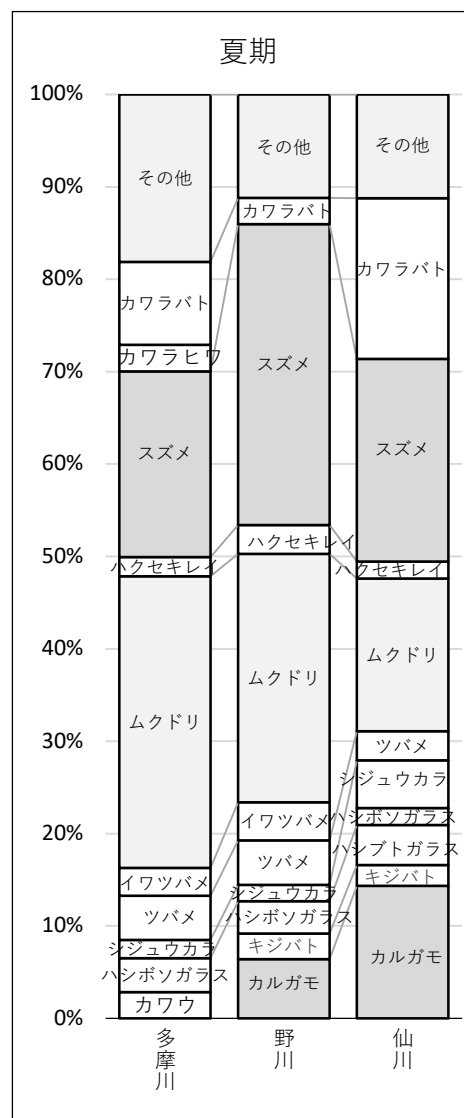
3) 定例調査実施地の鳥相比較

7か所の定例調査地ごとの鳥相を3か所の河川、4か所の公園・緑地間で比較し、調査地が有する自然環境の違いが鳥相にどのように影響を与えているのかを見る。グラフは直近5年間（2016～2020年）の調査で得られたデータからをもとに、各観察地の冬期、夏期それぞれの優占度上位10種を選び、「100%積み上げ棒グラフ」で比較した。グラフ上の種の並べ方は種番号順とした。

①多摩川、野川、仙川の鳥相比較



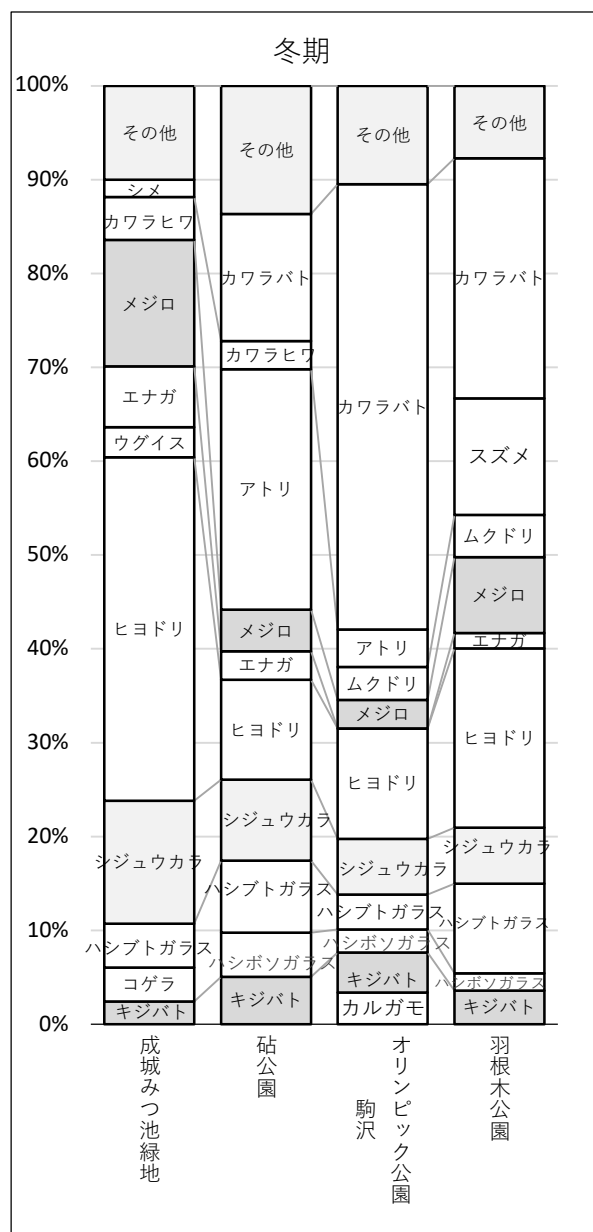
図IV-1-12. 多摩川、野川、仙川の鳥相比較(冬期)



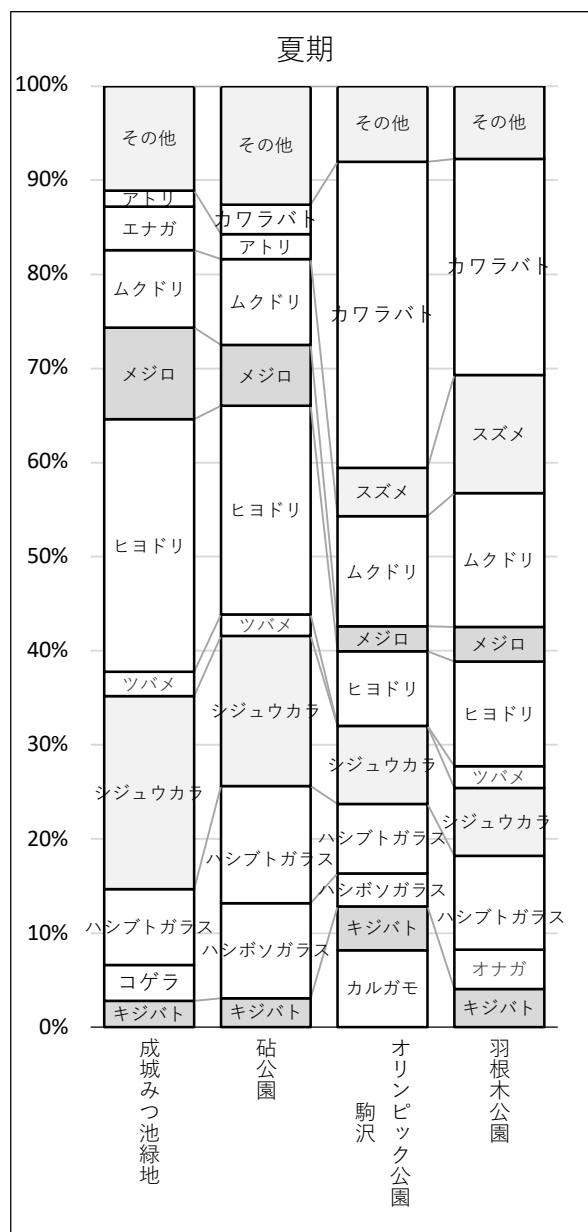
図IV-1-13. 多摩川、野川、仙川の鳥相比較(夏期)

“2) 定例調査実施地ごとの鳥相”で示した2016年～2020年における3つの河川での優占度の構成を各河川の上位10種について比較してみる。冬期では多摩川でカモ類は優占度10位に入らないが、野川、仙川での優占度は高く、特に仙川では40%以上を占める。冬期、夏期を通じて「その他」の比率が多摩川で大きいのは、多摩川における幅広い生息環境を反映した出現種の多さによると考えられる。カワウやオオバンが優占度10位に入るのも水深の深い多摩川の特徴である。冬期ではカモなど水鳥と「その他」を除くと各河川とも優占度の大きい種の構成は大きく変わらないといえる。夏期においても冬期と同様、留鳥のカルガモは多摩川では10位に入らず、野川、仙川では上位10位の一角を占めるが、水鳥と「その他」を除くと冬期同様、各河川とも優先度の大きな種の構成は大きく変わらないといえる。冬期、夏期ともスズメとムクドリの多さは、豊かな植生を持つ高水敷の存在と比例しているように見える。

②成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園の鳥相比較



図IV-1-14. 成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園の鳥相比較(冬期)



図IV-1-15 成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園の鳥相比較(夏期)

“2) 定例調査実施地ごとの鳥相”で示した2016年～2020年における4つの公園・緑地での優占度の構成を各公園・緑地間の上位10種について比較してみる。都市部でも多く見られるカワラバトは、駒沢オリンピック公園で冬期に48%、夏期で33%、羽根木公園でもそれぞれ26%、23%と高い優占度を示している。地面の露出や舗装面の多さなど、都市公園、スポーツ公園としての環境によるものと考えられる。冬期には成城みつ池緑地のヒヨドリ、砧公園のアトリ、駒沢オリンピック公園のカワラバト、羽根木公園のカワラバト、スズメ、ヒヨドリと際立って優占度の高い種があることがわかる。また、夏期には樹林の密度が高い成城みつ池緑地と砧公園ではヒヨドリとシジュウカラが、密度の低い樹林と舗装面などもある駒沢オリンピック公園と羽根木公園のカワラバトやムクドリ、スズメが多いなど環境の違いをはっきり反映した結果となっている。

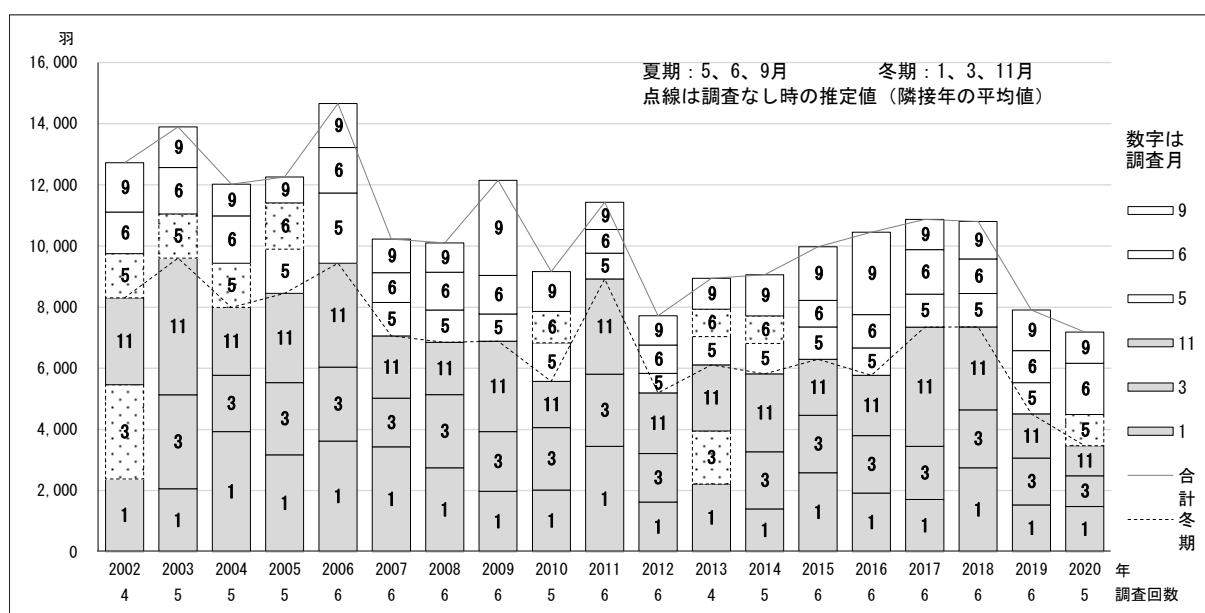
2. 定例調査実施地の個体数推移

多摩川、野川、仙川、成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園の7カ所における定例調査結果について、調査地ごとの年別の個体数推移を以下に述べる。

調査地ごとに年間の個体数がどのように変化しているかを、冬期、夏期、年間ごとにわかるグラフを作成し分析した。ここで、冬期とはその年の1～3月と11～12月の記録の合計、夏期とは4～10月の記録の合計である。調査ができなかった月はその隣接年の該当する月の平均値を推定値として表示した。

次に、年ごとの合計個体数の変化に大きな影響を及ぼす種が何であるかを見るため、冬期と夏期に分けて優占度（全個体数にその種が占める個体数の割合）の高い種について個体数の構成比がわかるグラフを作成して分析した。調査ができなかった月の数値は、前述の方法で算出した個体数合計の推定値をまとめてグラフの上端に点線で表示した。

1) 多摩川定例調査の個体数推移

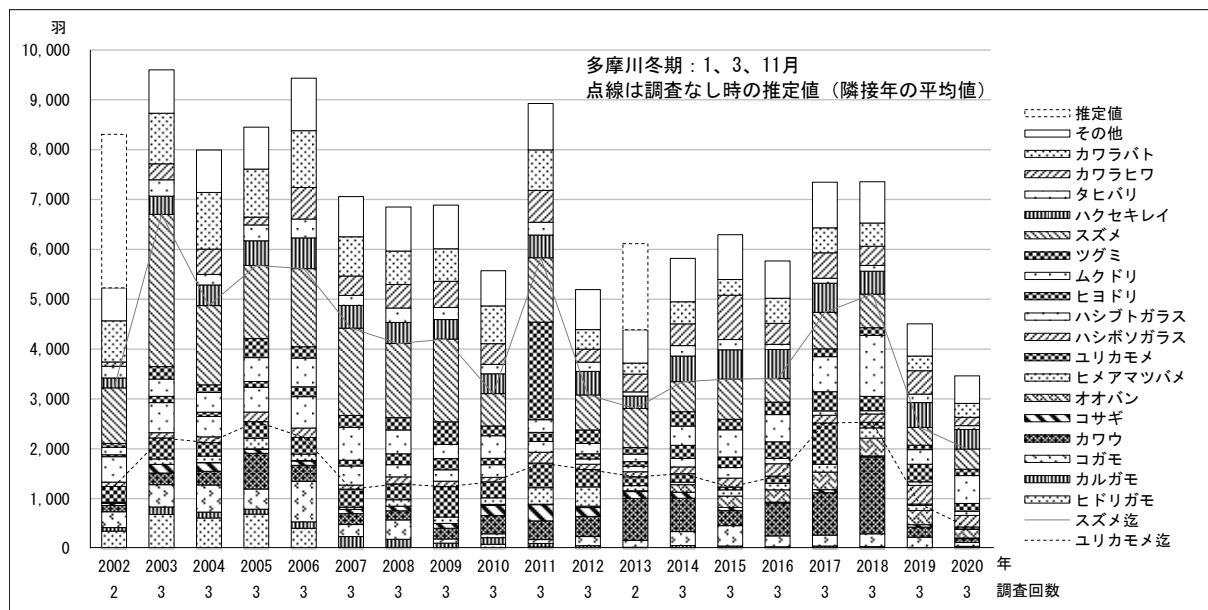


図IV-2-1. 多摩川定例調査の年・月別個体数

2002年～2020年まで19年間で104回調査を行い、外来種を含めて19目42科121種187,027羽が観察され、調査1回あたり43.7種1798.3羽となった。調査は1、3、5、6、9、11月の年間6回が基本であるが調査が行われなかった月があり、それらはグラフの該当月に推定値（隣接年の平均値）を点線で入れた。

総個体数は2006年の14,660羽をピークに減少傾向になり2012年を底に徐々に回復してきたが、2019年10月の19号台風による大規模な地形変更などにより2019年以降減少している。

①冬期の個体数推移

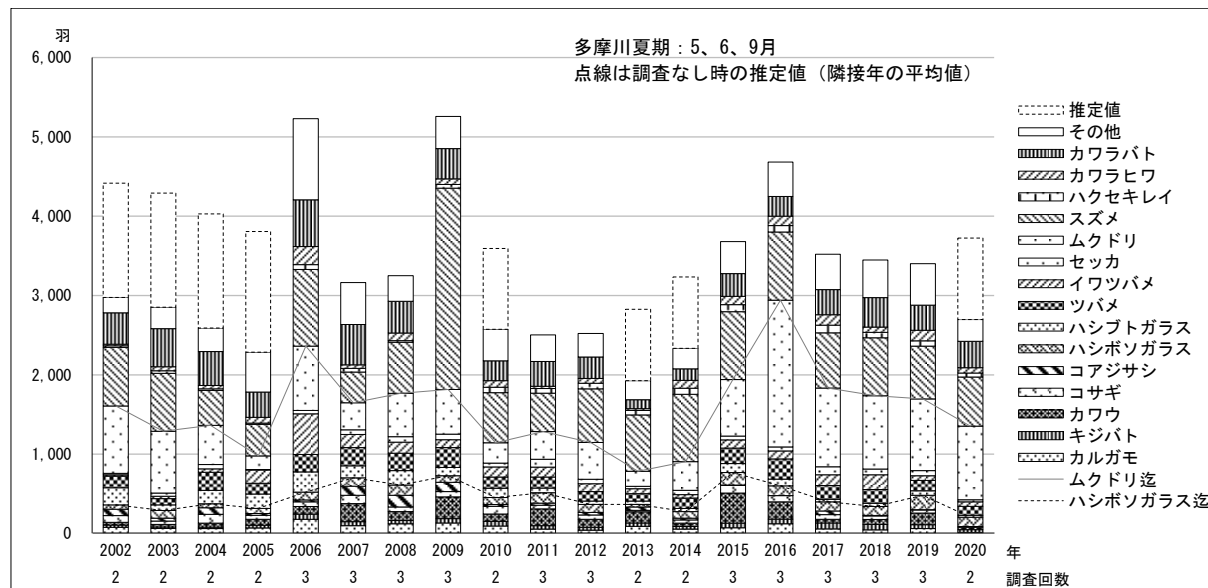


図IV-2-2. 多摩川定例調査の冬期種別個体数

冬期調査期間を通じて優占度の高い種について、19年間の推移をグラフ化すると図IV-2-2になる。

2011年のツグミ（例外的に多い約2,000羽）を除くと2007年から2012年頃まで総個体数は8,000羽から6,000羽くらいまで徐々に減少し、その後2018年頃まで7,000羽程度まで回復したが、2019年、2020年は激減した。2018年までの変化を種別に見ると、スズメの個体数の減少が総個体数の減少に大きく影響している。またヒドリガモ、コガモが減少し、ヒドリガモは上位に見られなくなった。カワウは徐々に増加していたが2019年以降激減している。

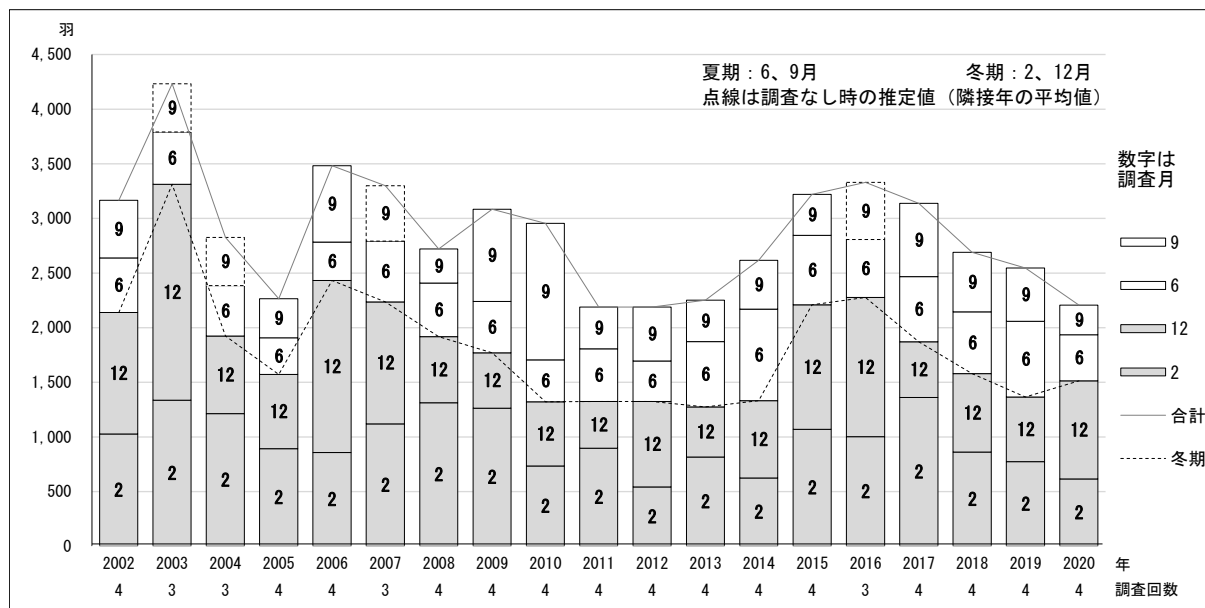
②夏期の個体数推移



図IV-2-3. 多摩川定例調査の夏期種別個体数

観察される個体数の半数をスズメとムクドリが占め、しかも年による変動幅が大きい。その2種により増加した2006年、2009年、2016年を除くと、2012年頃までは全体の個体数が徐々に減少しそののちは回復傾向にあり、冬期に見られた2019年2020年の減少は見られない。2006年のその他が多いのは、本来5月の調査を4月に実施したためツグミ（284羽）、コガモ（162羽）などが観察されたことによるものである。

2) 野川定例調査の個体数推移

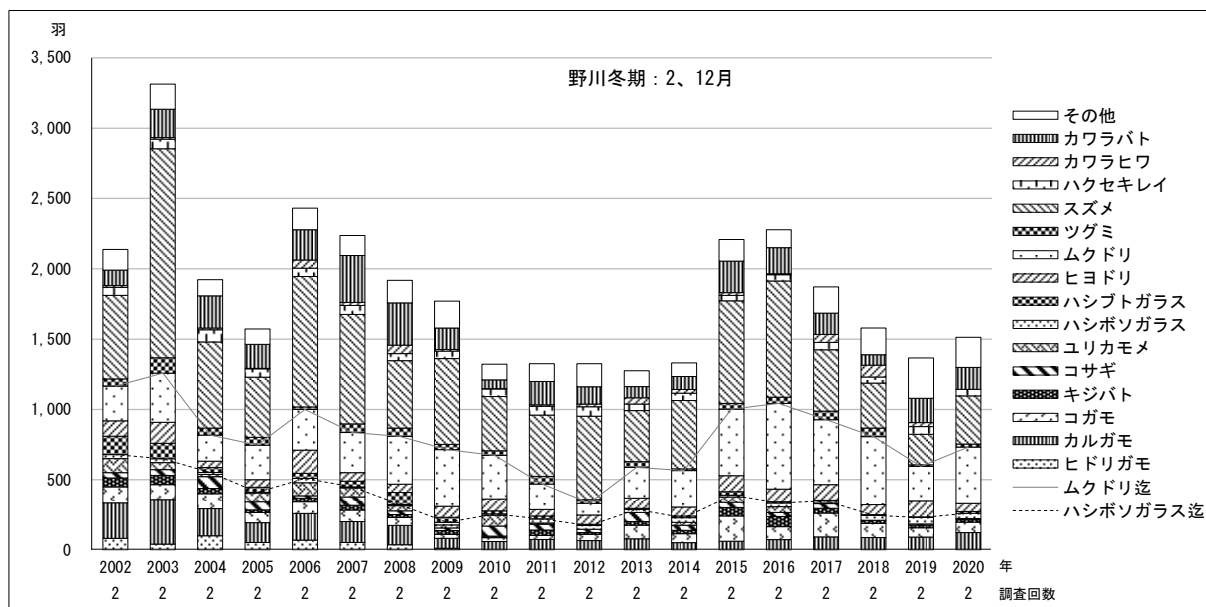


図IV-2-4. 野川定例調査の年・月別個体数

2002年～2020年まで19年間で72回調査を行い、外来種を含めて15目32科68種52,497羽が観察され、調査1回あたり29.3種729.1羽となった。調査は2、6、9、12月の年間4回が基本であるが調査が行われなかった月があり、それらはグラフの該当月に推定値を点線で入れた。

各年の総個体数の変化は冬期の個体数変化によるところが大きい。年間の合計個体数が2,500羽から3,500羽の間で増減を繰り返して推移し、この5年間は減少傾向にある。

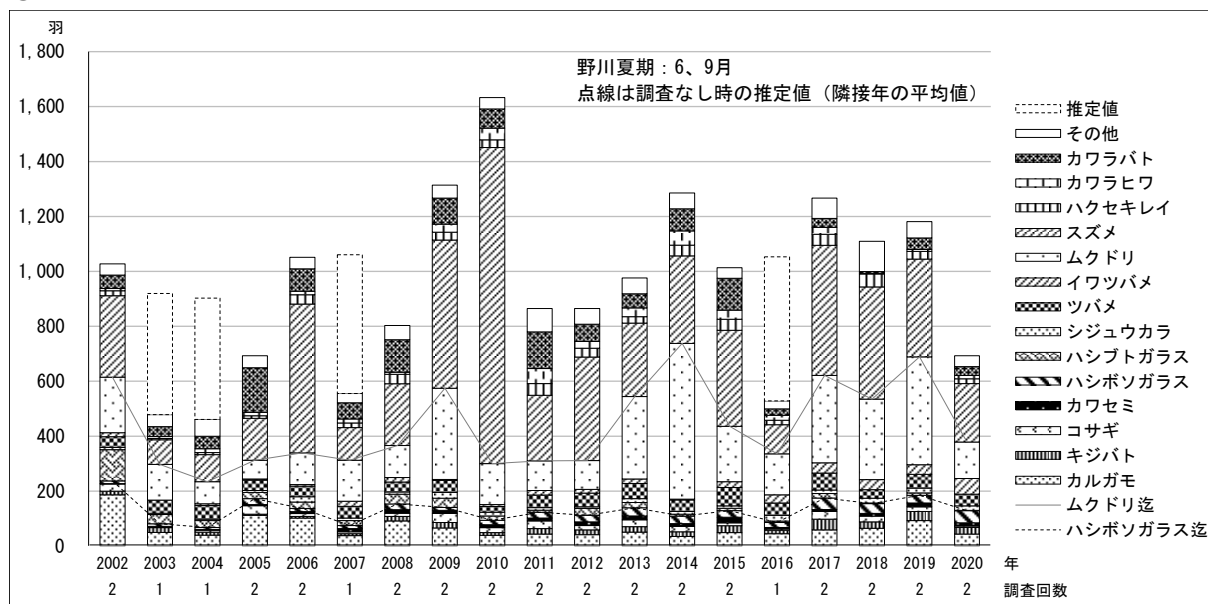
①冬期の個体数推移



図IV-2-5. 野川定例調査の冬期種別個体数

2014年までは減少傾向が見られたが、2015年、2016年に急増し、その後減少してきている。急増の主因はムクドリ、スズメで、両種がともに多かった。その後の減少要因もムクドリとスズメである。カモ類は2002年から漸減傾向、2010年を底に微増傾向がみられ、以前の半数くらいまで復活した。

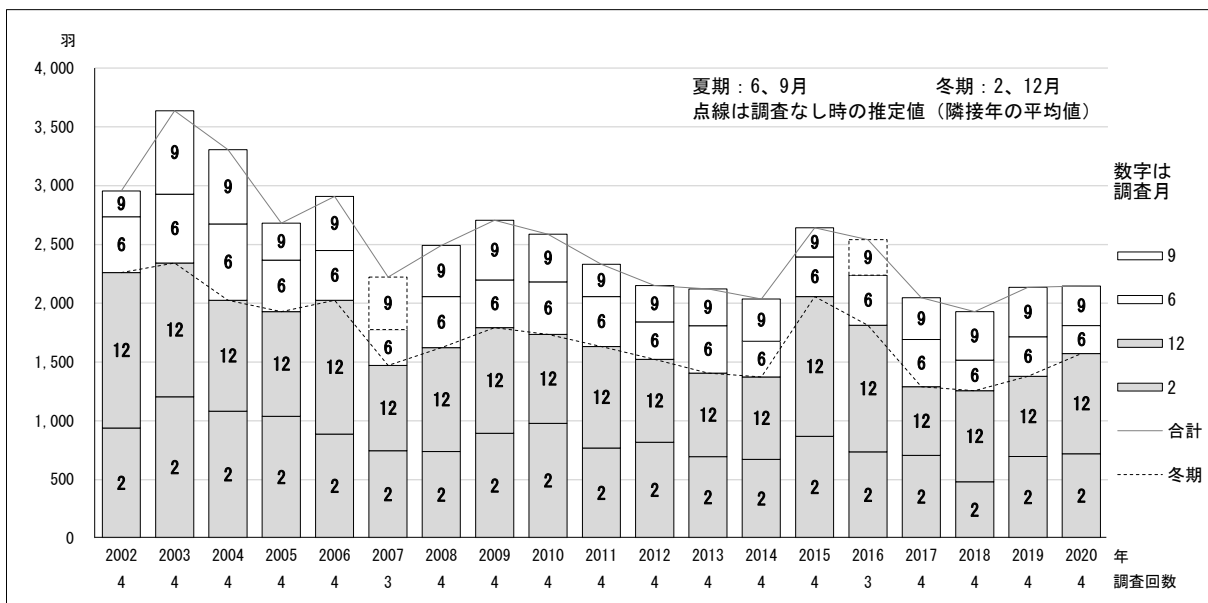
②夏期の個体数推移



図IV-2-6. 野川定例調査の夏期種別個体数

夏期の総個体数は700羽から1,600羽の間で大きく変動している。その要因はムクドリとスズメの個体数の変動である。この2種を除くと変動は少ない。

3) 仙川定例調査の個体数推移

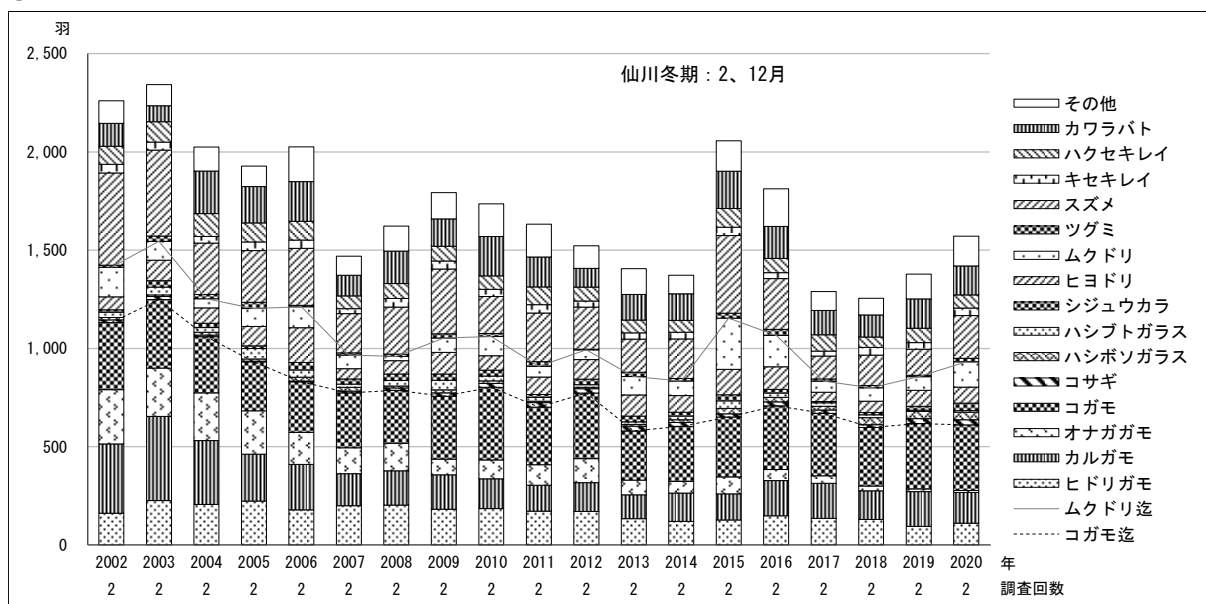


図IV-2-7. 仙川定例調査の年・月別個体数

2002年～2020年まで19年間で74回調査を行い、外来種を含めて15目30科63種46,820羽が観察され、調査1回あたり26.4種632.7羽となった。調査は2、6、9、12月の年間4回が基本であるが、調査が行われなかった月があり、それらはグラフの該当月に推定値を点線で表示した。

年間の総個体数は概略2,000羽から3,000羽の間で増減を繰り返し、2018年は最も少ない年になっている。各年の総個体数の変化は冬期の総個体数変化によるところが大きい。

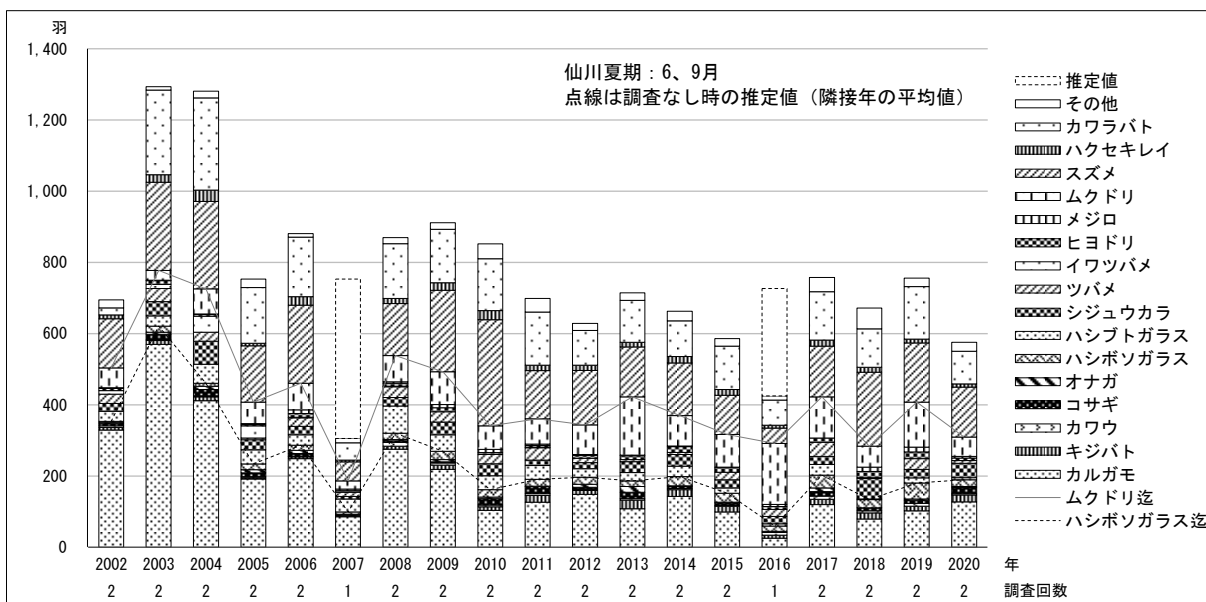
①冬期の個体数推移



図IV-2-8. 仙川定例調査の冬期種別個体数

年間の個体数は1,300羽から2,000羽程度の範囲で増減を繰り返して推移している。カモ類の個体数は2000年代初期と比べると半数程度まで徐々に減少してきており、全体に占める比率も約2分の1になっている。カモ類の中でコガモ以外はすべて減少したため、コガモの比率が相対的に高くなりカモ類の約半数を占める。ほかに個体数の変動要因になる種はスズメとムクドリである。2015年、2016年はこの2種がほかの年より多いため総個体数が突出した。

②夏期の個体数推移



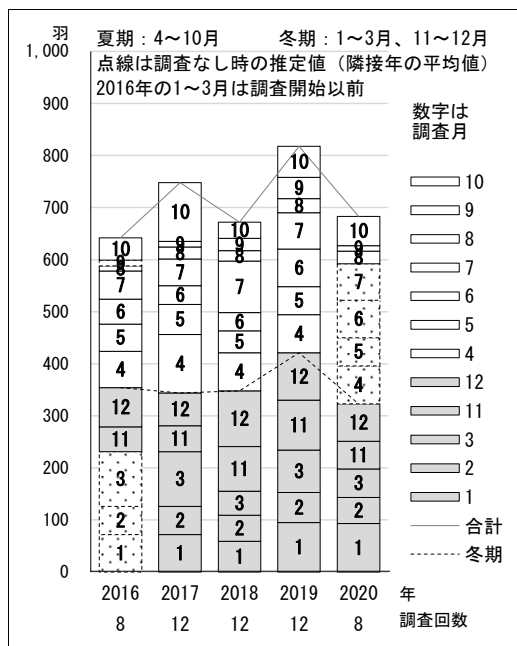
図IV-2-9. 仙川定例調査の夏期種別個体数

総個体数は年ごとに漸減傾向にある。その要因は2010年までのカルガモの減少である。それを除いて評価すると、年間個体数は、600羽から800羽の間で増減をしている。個体数の増減要因はスズメとムクドリであるが、他の河川と比べると年によるそれらの個体数変化は少ない。カワラバトの個体数も2005年以降は変化が少ないといえる。

4) 成城みつ池緑地定例調査の個体数推移

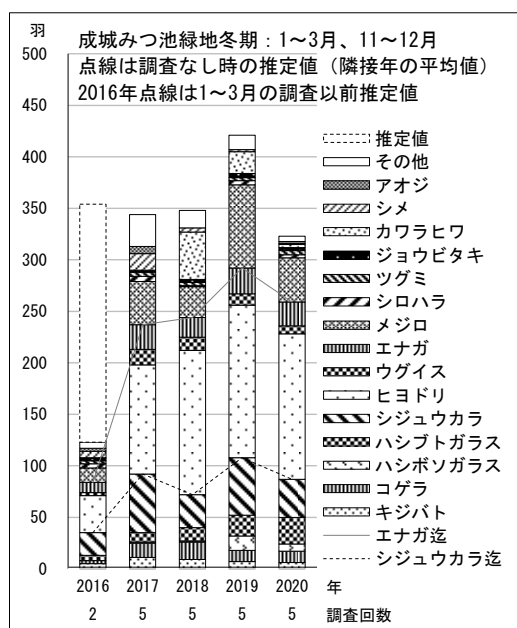
2016年～2020年まで5年間で52回調査を行い、外来種を含めて12目26科43種3,052羽が観察され、調査1回あたり14.9種58.7羽となった。調査は毎月実施し年間12回が基本であるが、調査が行われなかった月があり、それらはグラフの該当月に推定値を点線で表示した。

総個体数が650羽から900羽の間で増減しており比較的变化が少ない。総個体数は冬期と夏期ではほぼ同じである。また、8月、9月を除くと月ごとの個体数も大きな差はない。



図IV-2-10. 成城みつ池緑地定例調査の年・月別個体数

①冬期の個体数推移

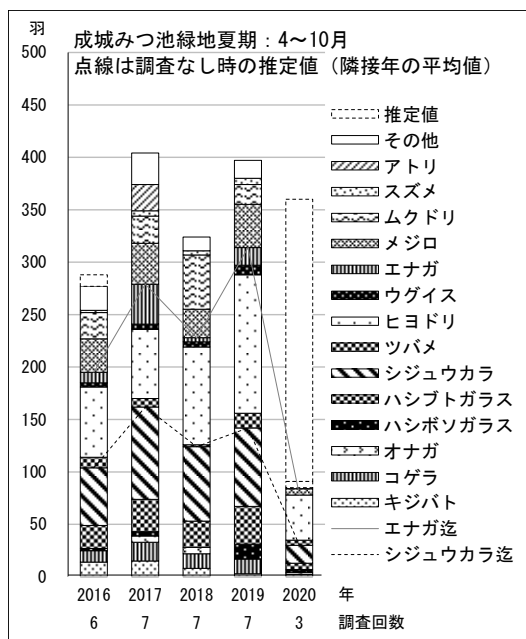


図IV-2-11. 成城みつ池緑地定例調査の冬期種別個体数

各年の総個体数は、メジロが多かった2019年を除くと350羽前後で安定している。ヒヨドリは優占度が大きい割に年ごとの個体数の変動が少ない。

環境が森林性のため、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、メジロの個体数が多くを占め、ムクドリ、スズメ、カワラバトなど大きな群れになる種が多い河川や公園に比較すると年ごとの個体数変動が少ない。

②夏期の個体数推移

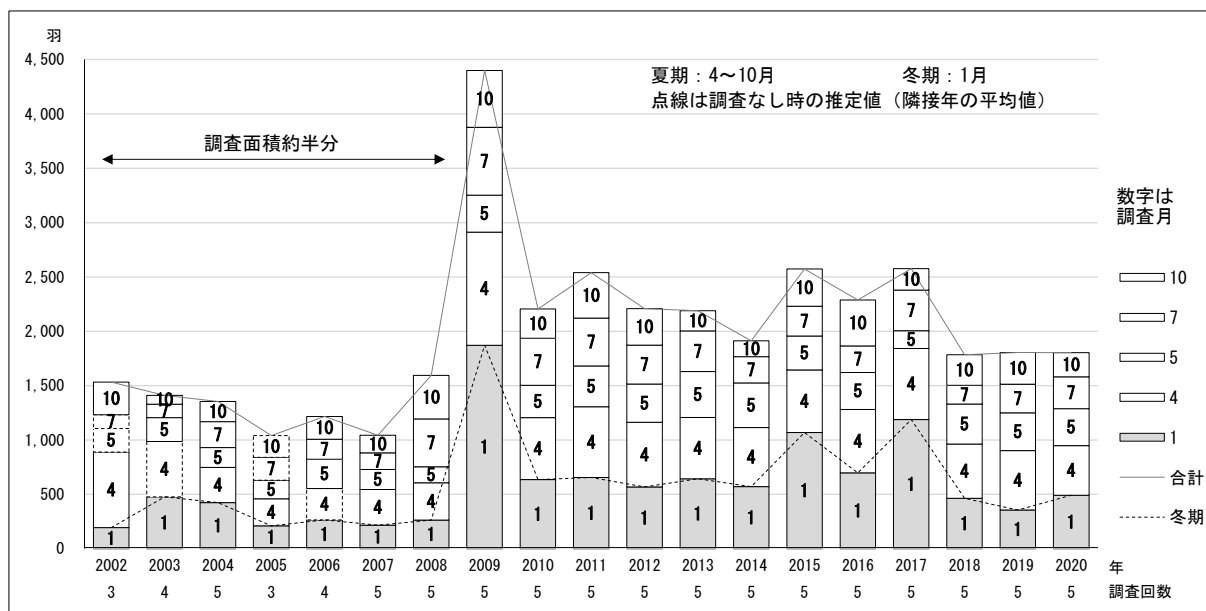


図IV-2-12. 成城みつ池緑地定例調査の夏期種別個体数

環境が森林性のため冬期と同様、個体数はシジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、メジロが多くを占め、300羽から400羽の間で安定している。冬期と同様、ムクドリ、スズメ、カワラバトという群れになる種が見られず、また区内の多くの調査地でアトリが多く見られた2017年にも当地での個体数が少なかったため、総個体数の変化が少なかった。

5) 砦公園定例調査の個体数推移

(2009年から調査範囲が増えたため、2009年以降の推移をみる)

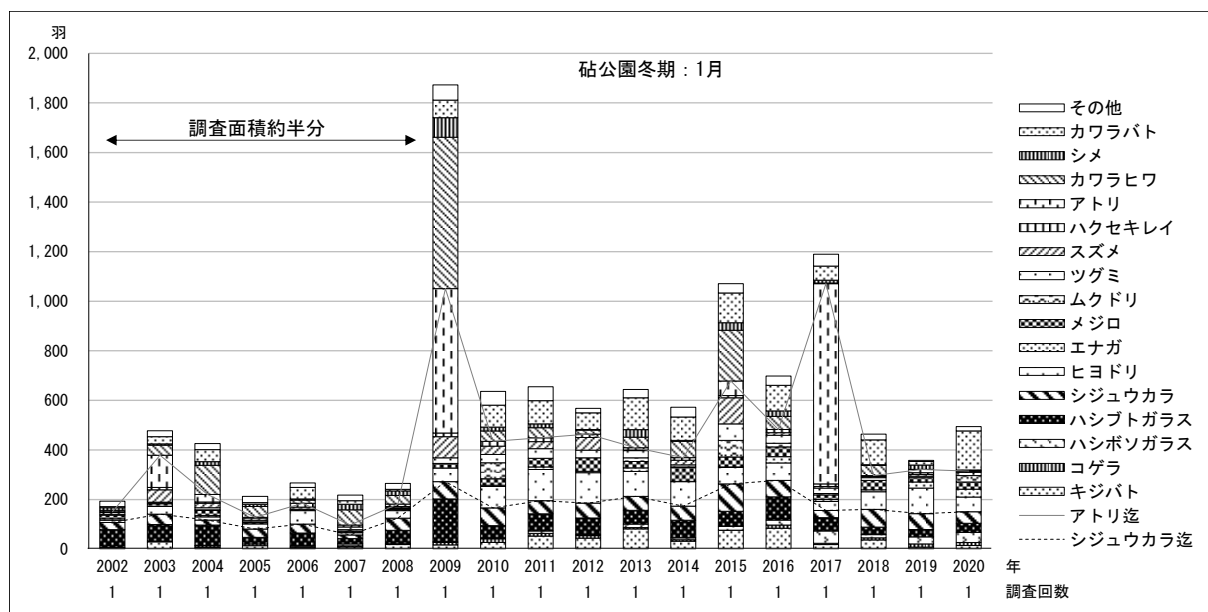


図IV-2-13. 砦公園定例調査の年・月別個体数

2009年～2020年まで12年間で60回調査を行い、外来種を含めて14目29科58種28,292羽が観察され、調査1回あたり24.0種471.5羽となった。調査は1、4、5、7、10月の年間5回が基本であるが、調査が行われなかった月があり、それらはグラフの該当月に推定値を点線で表示した。

2009年の総個体数が突出して大きい、これは5月を除いて各月とも平常時の倍近い個体数が観察されたためである。2015年、2017年は1月の観察数が多かったことによる。具体的な種については冬期、夏期別の個体数推移を参照。

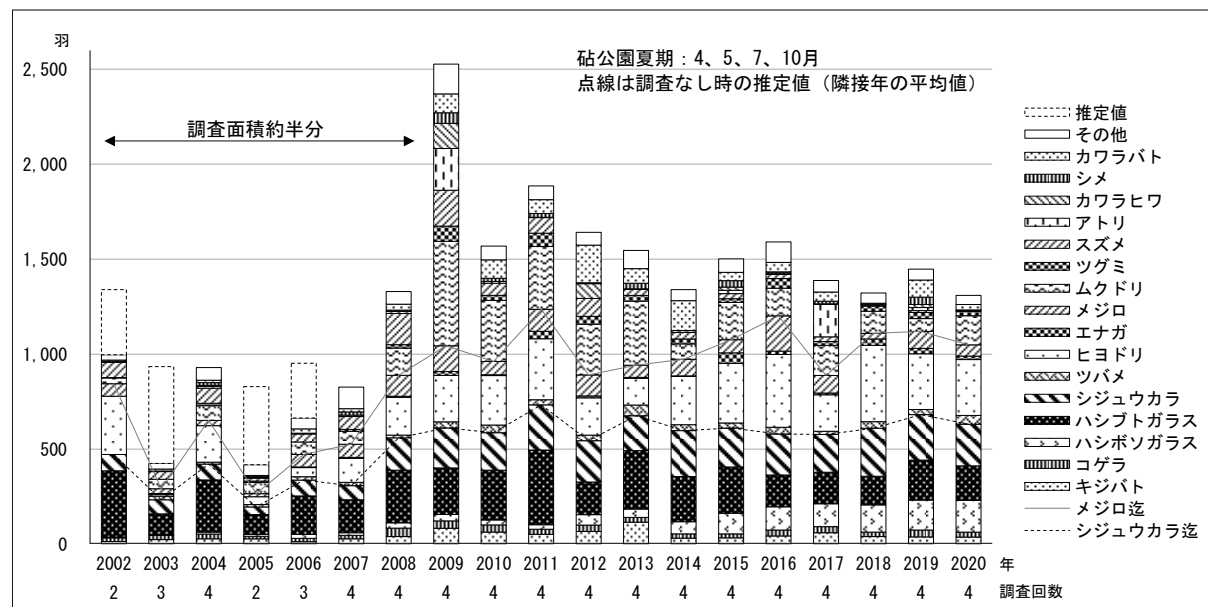
①冬期の個体数推移



図IV-2-14. 砧公園定例調査の冬期種別個体数

2009年、2015年、2017年に冬期総個体数が著しく多いのは、2009年はアトリとカワラヒワの突発的増加、2015年はムクドリ、ツグミ、スズメ、カワラヒワの増加、2017年はアトリの増加によるものである。これら突発的な出現や増加を除くと、総個体数は、2016年までは600羽前後で推移し、それ以降は400羽前後に減少した。

②夏期の個体数推移

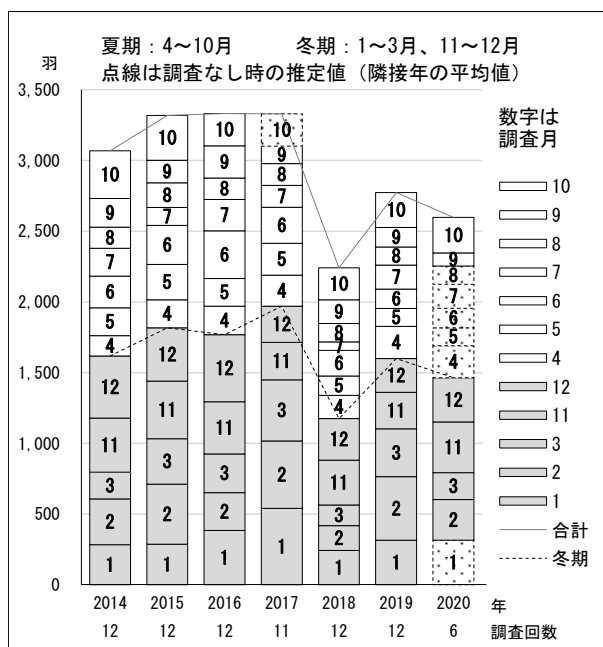


図IV-2-15. 砧公園定例調査の夏期種別個体数

2009年、2017年冬期に見られたアトリの大群は、夏期の4月にも見られたがその数は少なくなり、総個体数への影響は少なかった。総個体数は2009年以降減少傾向にある。ハシブトガラス、ムクドリ、スズメがほぼ継続的に減少しており、これが総個体数の減少に影響している。一方、ハシボソガラスは2009年以降継続的に増加しているが、ハシボソガラス、ハシブトガラスの合計個体数はあまり変わらない。さらにシジュウカラを加えた3種の合計個体数もほぼ一定である。

6) 駒沢オリンピック公園定例調査の個体数推移

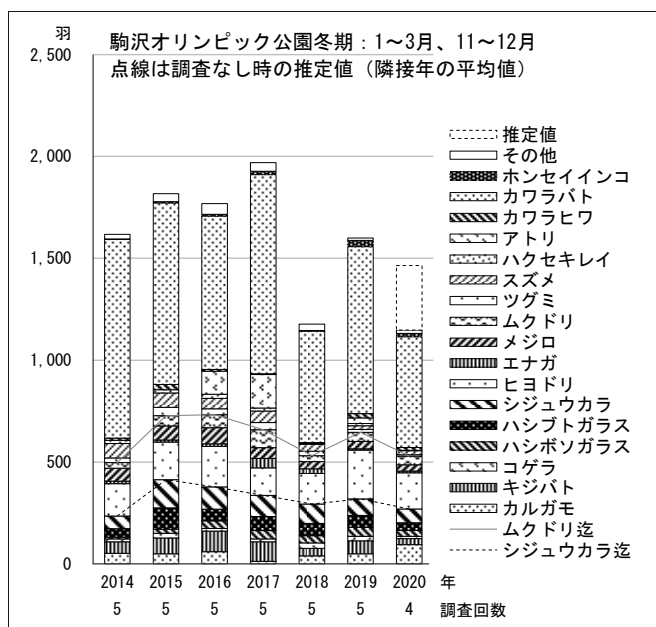
2014 年～2020 年まで 7 年間で 77 回調査を行い、外来種を含めて 10 目 24 科 45 種 19,331 羽が観察され、調査 1 回あたり 18.9 種 251.1 羽となった。調査は毎月実施し 12 回が基本であるが、調査が行われなかった月があり、それらはグラフの該当月に推定値を点線で表示した。



図IV-2-16. 駒沢オリンピック公園定例調査の年・月別個体数

2014 年から 2017 年までは総個体数の変化がほとんどないが、以降は減少傾向がみられる。2018 年は年間を通じて各月とも個体数が少なかった。2020 年は 6 回しか調査が出来なかったため評価が困難である。

①冬期の個体数推移

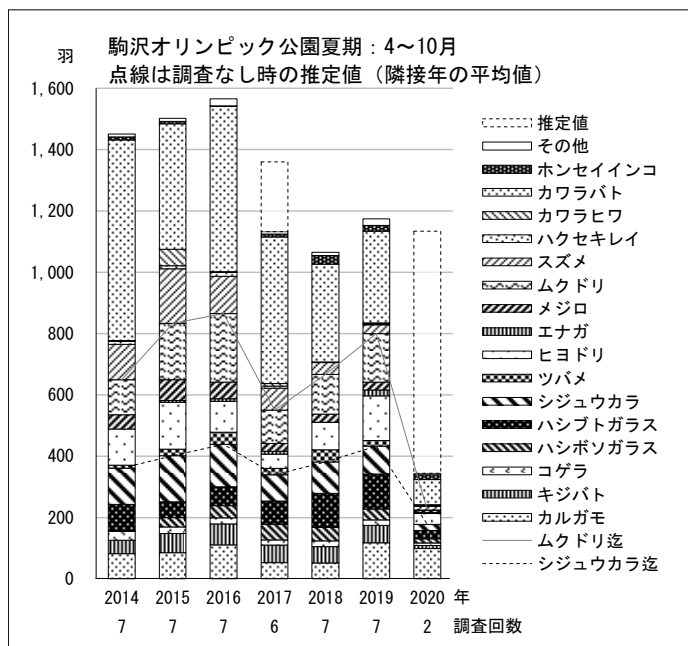


図IV-2-17. 駒沢オリンピック公園定例調査の冬期種別個体数

カワラバトが約半数を占め、その増減が総個体数の増減に大きく影響する。

年ごとの総個体数は 2017 年まで変化が少なかったが 2018 年以降減少している。キジバト、ハシブトガラス、シジュウカラ、メジロが継続的に減少している。

②夏期の個体数推移

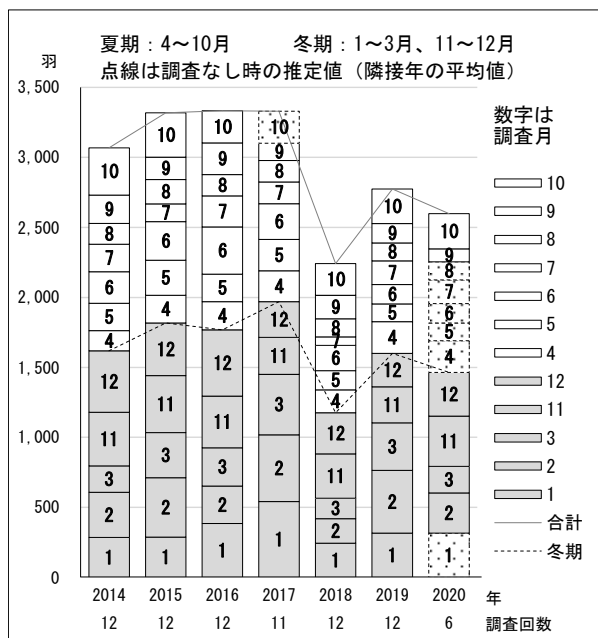


図IV-2-18. 駒沢オリンピック公園定例調査の夏期種別個体数

2020 年は調査回数が少なく評価が困難。2015 年～2016 年と 2018 年～2019 年の総個体数を比較すると、シジュウカラ、ムクドリ、スズメ、カワラバトが減少し、ハシブトガラスが増加している。その結果総個体数では約 1,500 羽から約 400 羽減少し約 1,100 羽になっている。

7) 羽根木公園定例調査の個体数推移

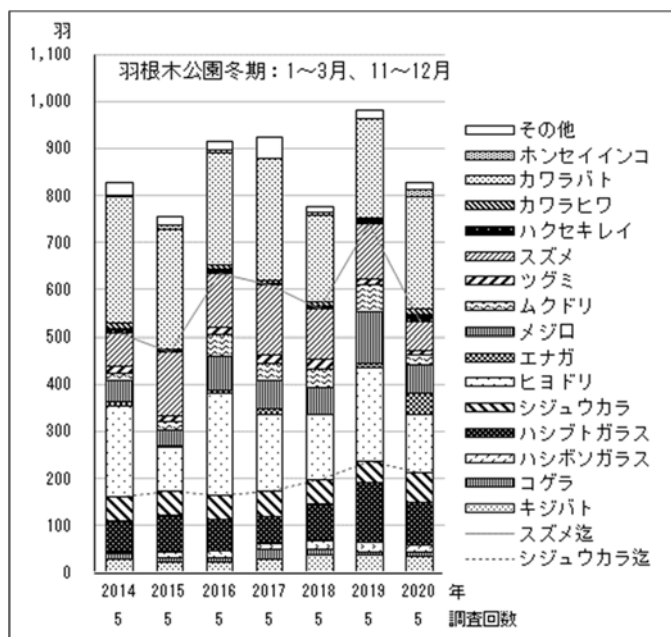
2014 年～2020 年まで 7 年間で 77 回調査を行い、外来種を含めて 9 目 25 科 41 種 10,960 羽が観察され、調査 1 回あたり 16.7 種 142.3 羽となった。調査は毎月実施し 12 回が基本であるが、調査が行われなかった月があり、それらはグラフの該当月に推定値を点線で表示した。



図IV-2-19. 羽根木公園定例調査の年・月別個体数

推定値を含む数値であるが、総個体数は 1,500 羽から 1,800 羽の間で増減を繰り返している。また冬期の変化の傾向がそのまま年ごとの変化の傾向になっており、夏期の総個体数の変化は大きくない。1 年間を見たときの月別個体数は 8 月、9 月が少ないが、ほかの月の個体数は大きく変わらない。

①冬期の個体数推移

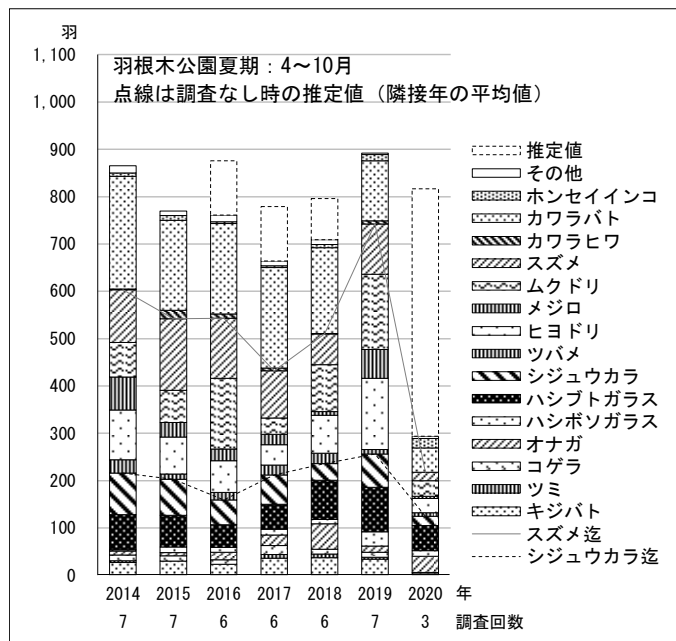


図IV-2-20. 羽根木公園定例調査の冬期種別個体数

総個体数は750羽から950羽の間で不規則に増減している。増減の要因になっているのはヒヨドリ、スズメ、カワラバトの3種である。

ハシブトガラスは増加傾向にある。ムクドリは一般には大きな群れになり変動要因になりやすいが、ここでは個体数が少なく影響は小さい。

②夏期の個体数推移



図IV-2-21. 羽根木公園定例調査の夏期種別個体数

総個体数は推定値を含むが、750羽から900羽の間で変化しており大きな変化はなく安定している。

個々の種は年ごとに多少の変化が見られるが、種ごとに増減が組み合わさって、総個体数に大きな変化が見られない結果となっている。年によって増減している種は、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、カワラバトなど主に群になる種である。

3. 主な種の個体数推移

多摩川、野川、仙川、成城みつ池緑地、砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園の7カ所の定例調査実施地で2002～2020年の19年間（調査地によって期間は異なる）に観察された種は、多摩川で121種、野川で68種、仙川で63種、成城みつ池緑地で43種、砧公園で58種、駒沢オリンピック公園で45種、羽根木公園で41種であり、全観察地では144種になる。その中で継続して観察された43種について、上記7カ所の中から代表的な調査地を選び、定例調査結果のデータに基づいて個体数の推移をまとめた。

個体数の推移については当該種の観察個体数の多い観察地を中心に述べ、個体数の少ない調査地は省略した。また、種別の個体数だけでなく、「アオサギ・ダイサギ・コサギ」、「ハシボソガラス・ハシブトガラス」、「ムクドリ・スズメ」など生態上関係深い種の平均個体数比較をグラフに示し考察を行った。

個体数年変化は下記の通り、「観察1回当たりの平均個体数」をグラフ化して表した。

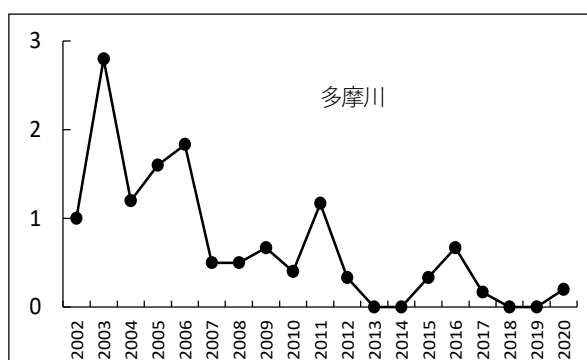
○冬によく見られる種については 冬期(1～3月と11～12月)調査の合計個体数 ÷ 冬期の調査回数

○夏によく見られる種については 夏期(4～10月)調査の合計個体数 ÷ 夏期の調査回数

○年中見られる種については 年間(1～12月)調査の合計個体数 ÷ 年間の調査回数

1) 主な種の個体数推移

5. キジ（年間）

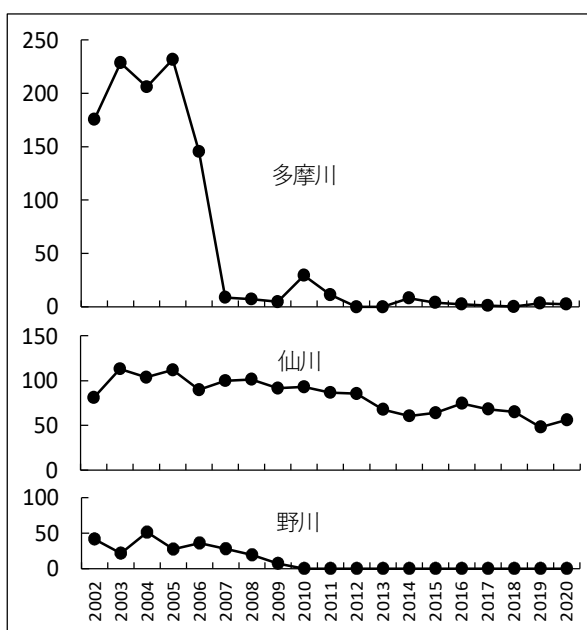


図IV-3-1. キジの個体数推移

1968年から1990年にかけて、岡本、大蔵、等々力溪谷公園、多摩川など、区内の主な緑地に放鳥され生息するようになった。放鳥後は、区内各地で見られたが、現在では多摩川だけが残された生息地となっている。

多摩川では、2002年以降、増減を繰り返しながら、全体としては急激に減少しつつある。

28. ヒドリガモ（冬期）



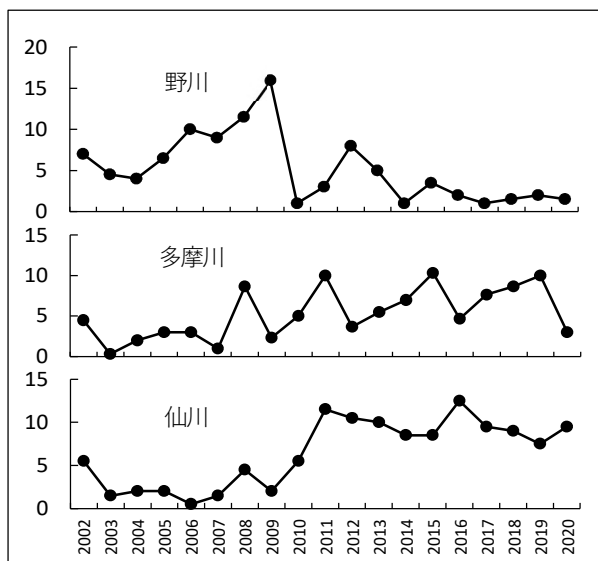
図IV-3-2. ヒドリガモの個体数推移

多摩川では、2005年のピークまでは、増加傾向であったが、2006年から急激に減少し、その後不定期に少数が観察されるだけとなり、2012年以降は10羽未満の記録となっている。

仙川は2003年をピークに微減傾向で推移2013年以降減少し、2016年やや回復したが、以降再び緩やかな減少傾向で推移している。2020年50羽レベルを維持してはいるが、全体の流れは減少傾向にある。

野川は2006年までは50羽前後で推移していたが、2007年から徐々に減少して、2011年以降は記録されていない。

30. マガモ（冬期）



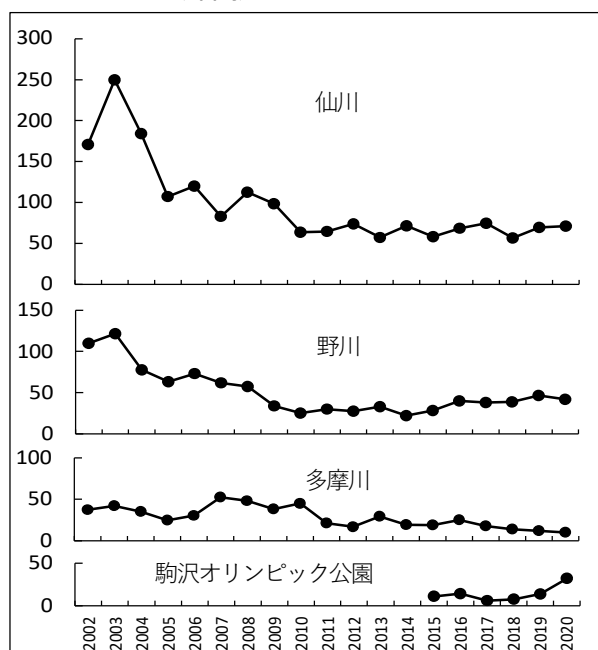
図IV-3-3. マガモの個体数推移

野川では、2009 年まで増加傾向であったが、2010 年急減した。その後 2012 年まで回復ペースであったが、それ以降減少傾向で推移している。

多摩川では、年による増減はあるが、微増傾向で推移している。

仙川では、2003～2007 年は 5 羽未満で推移したが、2010～2011 年増加傾向に転じ、その後ほぼ横ばいである。

32. カルガモ（年間）



図IV-3-4. カルガモの個体数推移

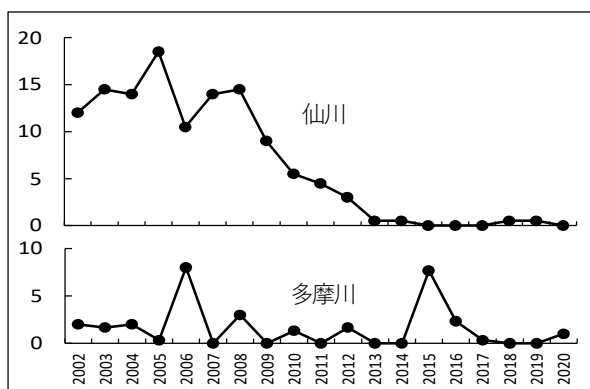
仙川では、2004～2010 年にかけて急速に減少し、以降の 10 年間はほぼ横ばいが続いている。

野川では、2003 年をピークに減少傾向であったが、2014 年を底にやや回復し、2016 年以降は横ばいで推移している。

多摩川では、個体数が 2010 年まで 50 羽前後で推移していたが、2011 年以降は微減傾向が続いている。

駒沢オリンピック公園では噴水のある人工の池で見られる。2014～2019 年は 10 羽前後で推移していたが、2020 年はおおよそ 30 羽に増加している。

34. ハシビロガモ（冬期）

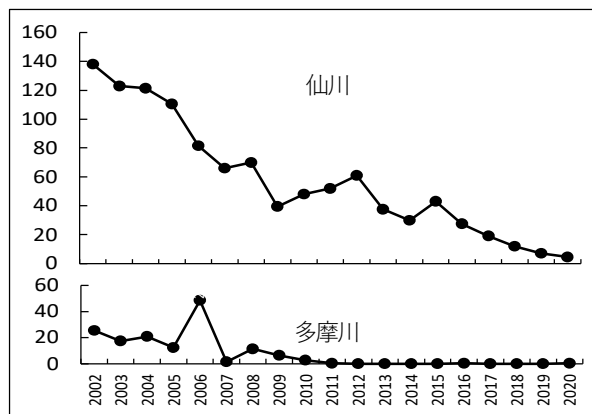


図IV-3-5. ハシビロガモの個体数推移

仙川では、2008 年までは毎年 15 羽前後が観察されてきたが、2009 年より急激に減少し、2013 年以降ほとんど記録されていない。

多摩川では、少数が観察されていたが、2006 年と 2015 年には 10 羽前後が観察されたものの、その後ほとんど記録がない。

35. オナガガモ（冬期）

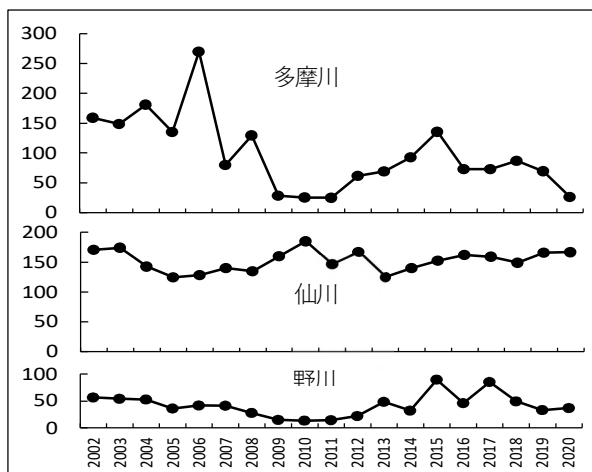


図IV-3-6. オナガガモの個体数推移

仙川では、2002 年から減少傾向が続き、2020 年には2~3羽となった。

多摩川では、2006 年の突発的な増加はあるが、2011 年以降はほとんど記録されていない。

38. コガモ（冬期）



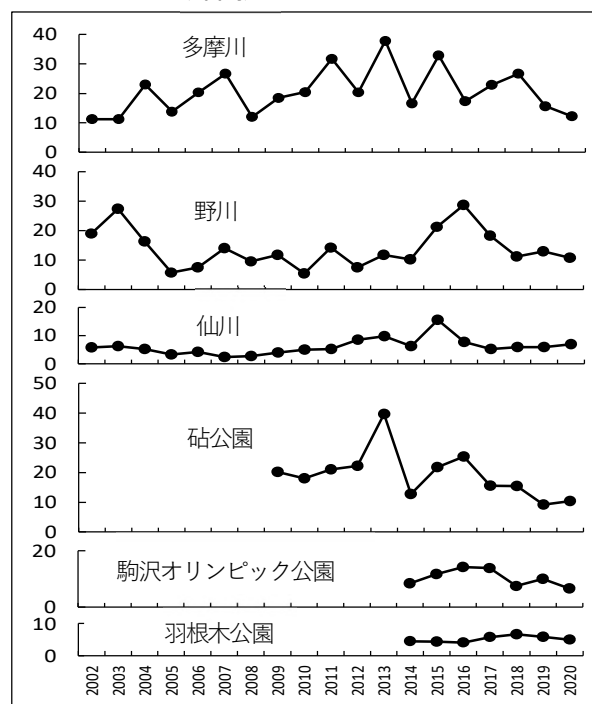
図IV-3-7. コガモの個体数推移

多摩川では、2006 年の突発的な増加はあるが、2007 年から 2011 年まで減少が続いた。2012 年以降は増加傾向が見られたが、2015 年をピークに再び減少傾向である。

仙川では、150 羽前後を中心に緩やかな増減を繰り返しているが、ほぼ横ばいで推移し安定している。

野川では、2010 年まで緩やかな減少傾向が続いた。2011 年以降は増加傾向に転じたが、2017 年をピークに再び減少傾向が見られる。

74. キジバト（年間）



図IV-3-8. キジバトの個体数推移

多摩川では、増減はあるが、およそ 30 羽前後で推移し安定している。多摩川の場合は河畔林ではあるが、区内では個体数が一番多い生息地である。

野川では、2003 年と 2016 年 30 羽前後の急増はあるが、個体数はほぼ横ばいで推移している。

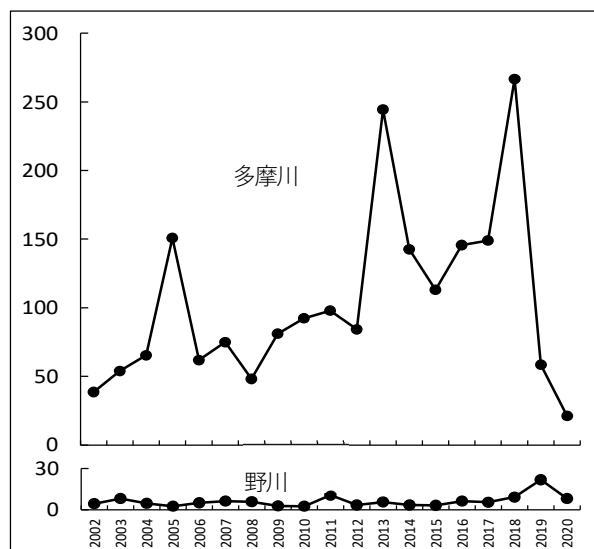
仙川では、10 羽未満と少ないが、個体数はほぼ横ばいで推移している。

砦公園では、2013 年単年の急増はあるが、2016 年まではほぼ横ばいであった。2017 年以降は減少傾向である。区内では多摩川に次いで、個体数が多い。

駒沢オリンピック公園では、10 羽前後で推移し、ほぼ横ばいである。

羽根木公園では、10 羽未満で横ばいである。

127. カワウ（年間）



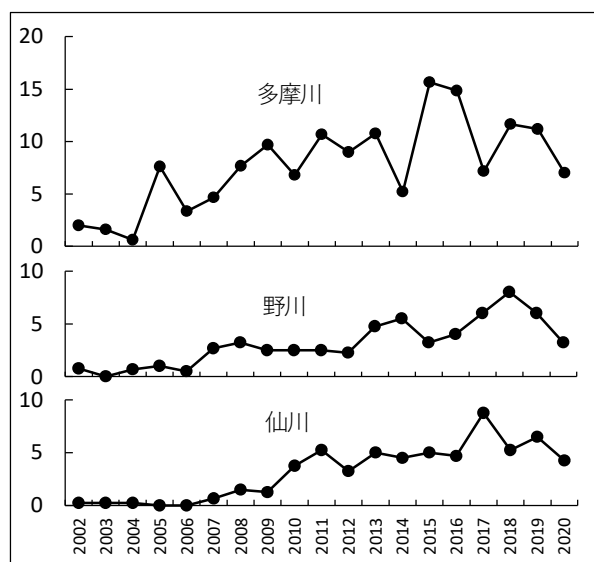
図IV-3-9. カワウの個体数推移

多摩川では、2003年～2018年まで増減はあるが、増加傾向であった。2005年、2013年、2018年の個体数突出は、秋から初冬に見られる大群の行動が調査で記録されたものである。

また、2019年～2020年にかけて急激に減少したが、これは2019年10月12日、関東地方を襲った19号台風による河川環境激変のためと推察される。

野川では少数だが、ほぼ横ばいで推移している。野川のような小河川では、多摩川のように大きな影響を受けていないようである。

144. アオサギ（年間）



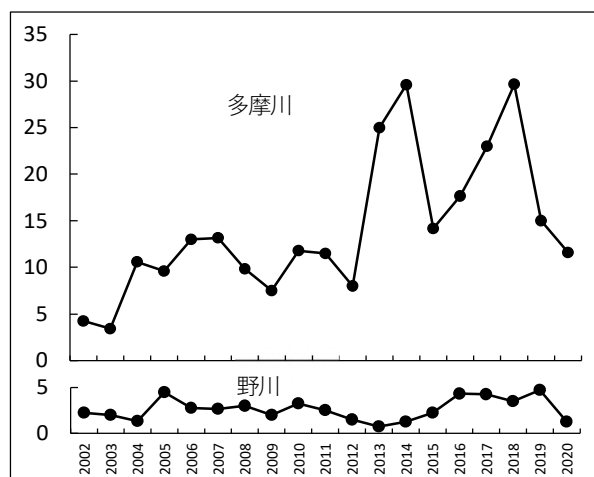
図IV-3-10. アオサギの個体数推移

多摩川では、2005年頃より2015年までは増加傾向であったが、2016年より減少傾向が見られる。

野川では、2007年以降緩やかに増加し、その後多摩川と同じく減少傾向が見られる。

仙川では、2008年より増加し始め、2011年以後ほぼ横ばいである。

146. ダイサギ（年間）

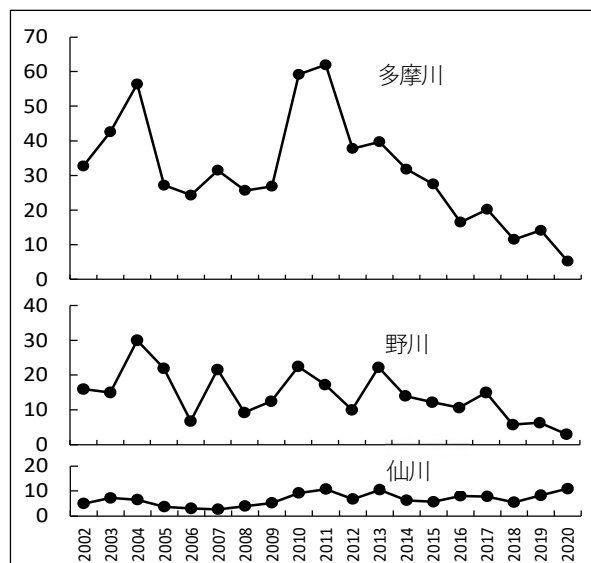


図IV-3-11. ダイサギの個体数推移

多摩川では、2004年～2012年までは10～15羽で横ばいであったが、2013～2014年にかけて、およそ2倍に増加した。2015年急減したが、再び2018年には2014年レベルまで回復した。2019年から減少傾向である。

野川では、5羽未満の少数ながら、多摩川のような大きな変動はなく横ばいがつづいている。

148. コサギ（年間）



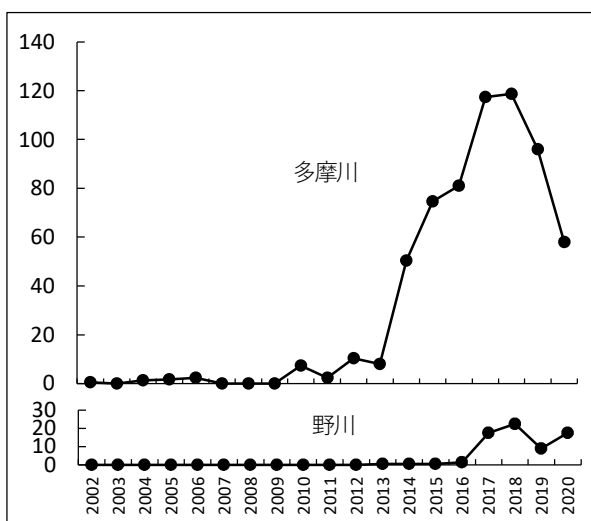
図IV-3-12. コサギの個体数推移

多摩川では、2004年までは増加傾向であったが、2005年から減少し2009年まではほぼ横ばい、2010年、2011年と急増したが、2012年より減少傾向になり、2020まで減少の一途をたどっている。

野川では、2013年までは20羽前後で増減を繰り返し、ほぼ横ばいで推移したが、2014年以降は減少傾向が続いている。

仙川では、10羽未満でほぼ横ばいで推移し、少数ながら安定している。

175. オオバン（冬期）

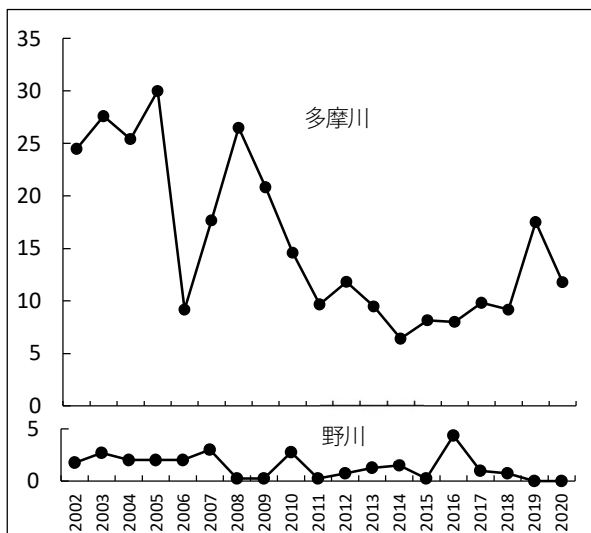


図IV-3-13. オオバンの個体数推移

多摩川では、2009年までは1～4羽ほどが散見されていたが、その後2013年にかけて微増し始めた。2014年から一気に増加し始め、およそ120羽に達した。しかし、2019からは減少傾向に入っている。

野川では、2017年頃より見られるようになり、10～20羽程度で推移している。

202. イカルチドリ（年間）

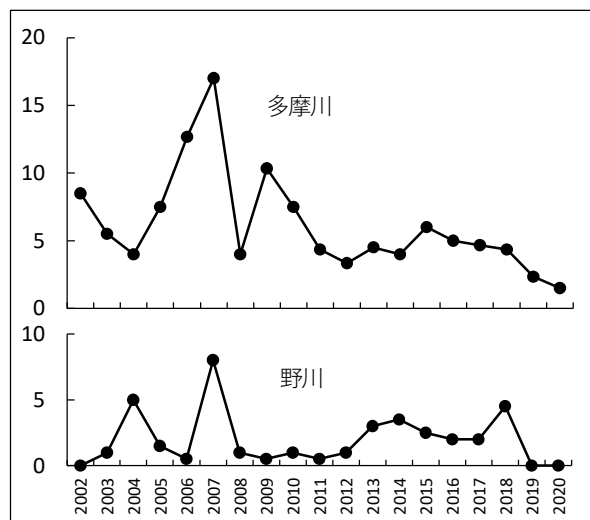


図IV-3-14. イカルチドリの個体数推移

多摩川では、2002年～2008年までは増減はあるが、25～30羽が記録されていた。2009年以降、急激に減少2014年には10羽未満となった。しかし、2015年からは、徐々に回復傾向が見られる。

野川では、記録されない年もあるが5羽未満でほぼ横ばいである。

203. コチドリ（夏期）

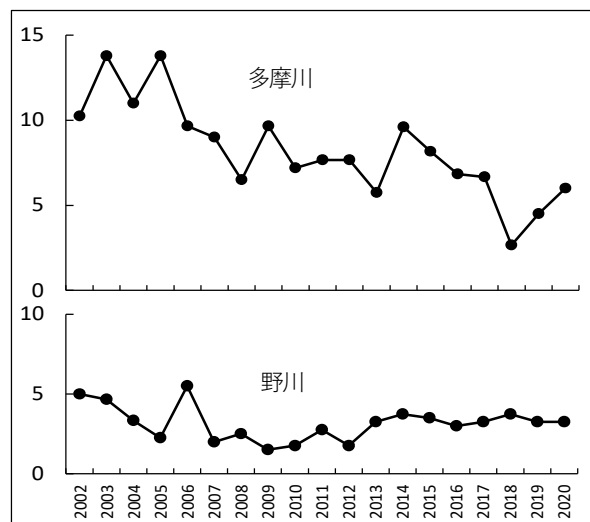


図IV-3-15. コチドリの個体数推移

多摩川では、2004年から2007年まで、増加傾向にあったが、それ以降は2012年5羽未満まで減少した。以降5羽前後で横ばいであったが、2019年より再び減少しつつある。

野川では、年により増減はあるが、おおむね5羽未満で推移してきた。2013～2018年にかけて増加したのは、野川で繁殖した結果である。2019年以降の記録はない。

244. イソシギ（年間）

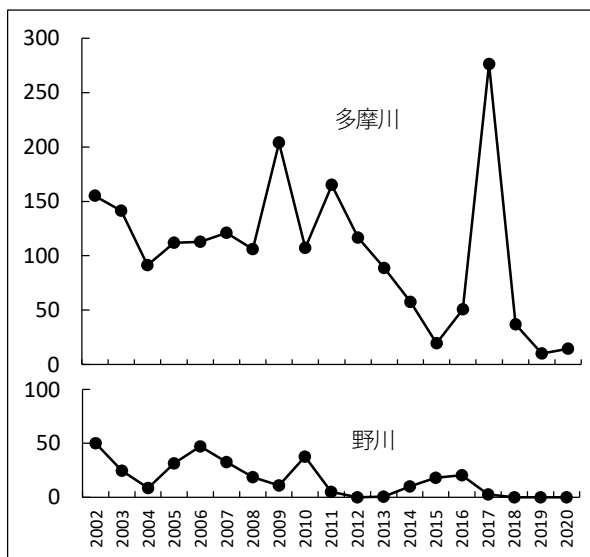


図IV-3-16. イソシギの個体数推移

多摩川では、2002～2005年には10～15羽で推移したが、2006年より増減を繰り返しつつ減少を続け、2018を底にやや回復しつつあるとも見えるが、全体の流れとしては減少傾向である。

野川では、5羽未満の推移で、ほぼ横ばいで安定している。

286. ユリカモメ（冬期）

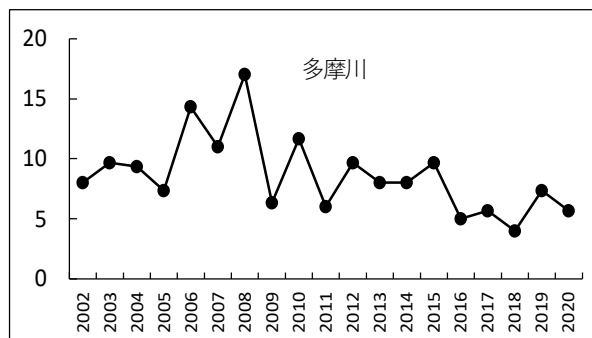


図IV-3-17. ユリカモメの個体数推移

多摩川では、2002年～2012年までは100～150羽でほぼ横ばいで推移したが、2013年から2015年まで急激に減少した。2017年に、突発的な増加は見られるが、その後も減少が続いている。多摩川は年によって、増減幅が極めて大きい。

野川では増減を繰り返しながらやや減少傾向であり、2018年以降は全く見られなくなった。

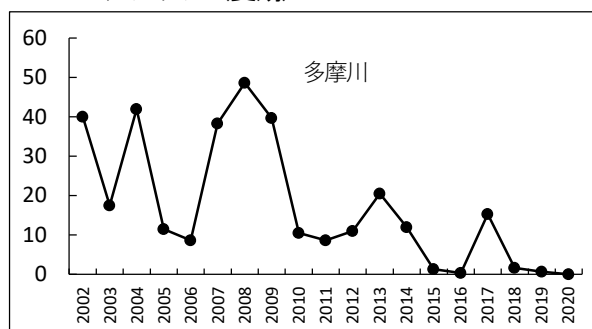
299. セグロカモメ（冬期）



図IV-3-18. セグロカモメの個体数推移

多摩川では、2002年～2008年までは増加傾向であったが、2009年からは緩やかな減少傾向が見られる。全体としては5～10羽前後で推移している。

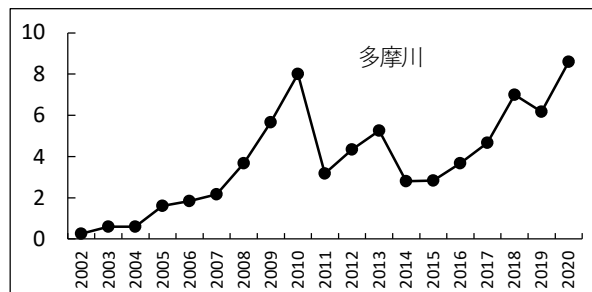
307. コアジサシ（夏期）



図IV-3-19. コアジサシの個体数推移

多摩川では、4月から7月にかけて見られる。2009年までは年による変動はあったが40羽前後で推移していた。2010年から激減し、その後10羽前後の増減はあるが、減少傾向が続いている。

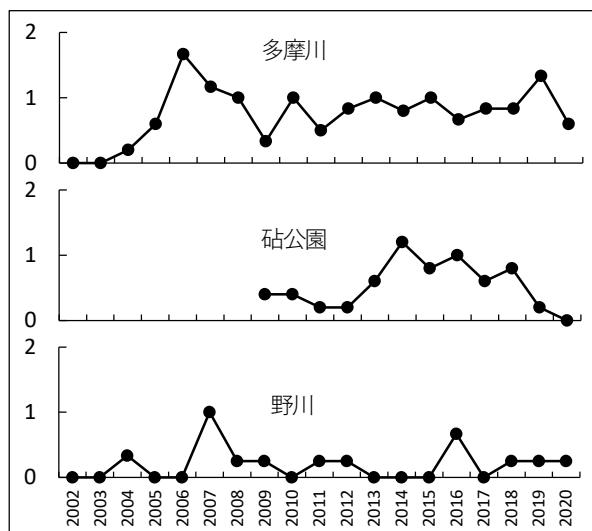
342. トビ（年間）



図IV-3-20. トビの個体数推移

多摩川では、2002～2004年にはほとんど見られなかったが、2005年頃から個体数が毎年増加し2010年第1回目のピークを迎えた。2011年に急減し、2012～2013年やや回復したが、2014～2015年には再び減少した。2016年から再度増加傾向に入り、2020年には2010年のピークまで回復した。

356. オオタカ（年間）



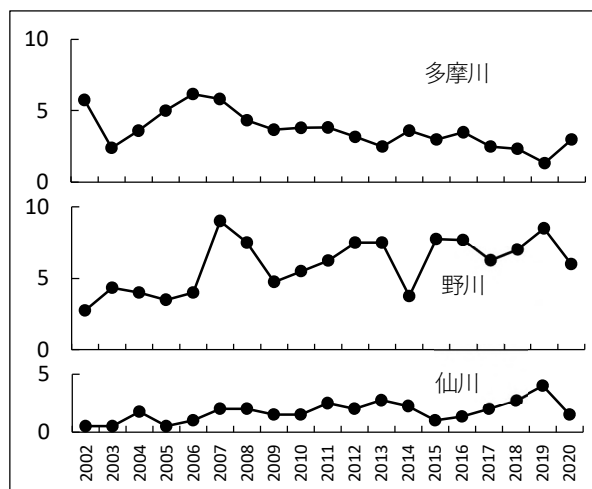
図IV-3-21. オオタカの個体数推移

多摩川では、2004年頃より観察されるようになり、ほぼ横ばいで推移している。

砧公園では、2013年頃から増加傾向にあったが、2014年をピークに以降減少傾向である。

野川では、少数が断続的に観察されているが、2018年以降、毎年記録されている。

383. カワセミ（年間）



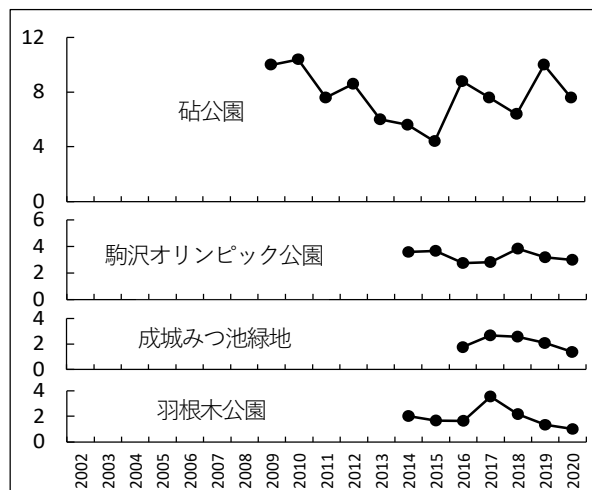
図IV-3-22. カワセミの個体数推移

多摩川では、2003年から2006年までは増加傾向であったが、以降は緩やかな減少傾向が見られる。

野川では、2006年頃までは5羽未満で推移したが、2007年以降、5～10羽の間で推移し、ほぼ横ばいである。

仙川は個体数が5羽未満で少ないが、微増傾向で推移している。

390. コゲラ（年間）



図IV-3-23. コゲラの個体数推移

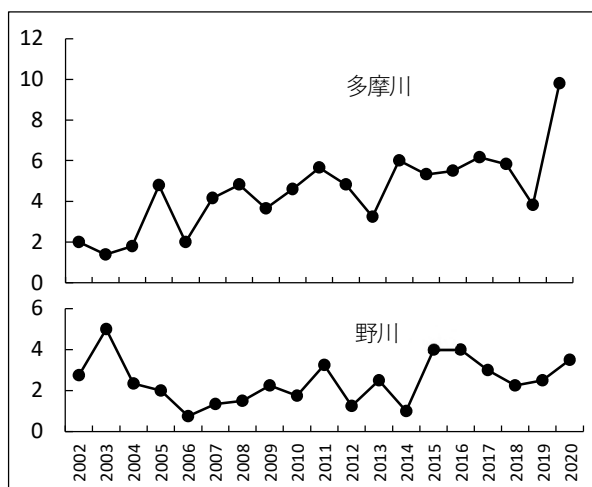
砧公園では、2010年から2015年までは減少傾向であったが、2016年以降は増加傾向が見られる。砧公園は個体数が区内では一番多い。

駒沢オリンピック公園では、2～4羽で推移し横ばいで安定している。

成城みつ池緑地では、ほぼ2羽前後で推移している。

羽根木公園では、ほぼ2羽前後で推移している。

420. モズ（年間）



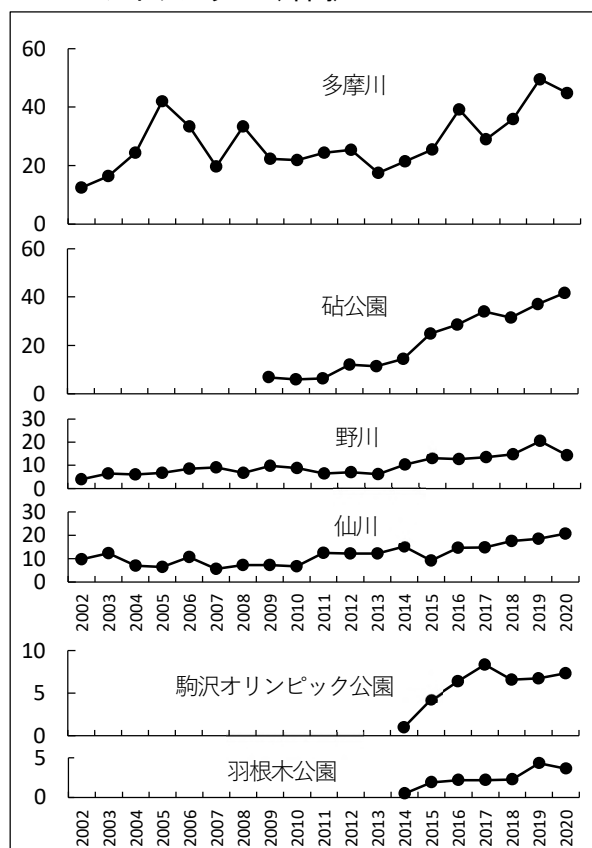
図IV-3-24. モズの個体数推移

多摩川では、年により増減を繰り返しているが、総じて増加傾向である。2002年個体数平均2羽程度が2020年には10羽を記録した。

野川では、2003年約5羽をピークに2006年まで減少したが、2007年より上昇し2015年以降は、2～4羽で推移しほぼ横ばいである。

モズは砧公園、駒沢オリンピック公園、羽根木公園では、記録が断続的で個体数も少なく、個体数推移の評価はできなかった。

435. ハシボソガラス（年間）



図IV-3-25. ハシボソガラスの個体数推移

多摩川では、2002～2005年にかけて、約40羽まで増加したが、2006～2007年20羽台に減少、以降2015年まで横ばいであったが、2016年頃から再び増加傾向にある。

砧公園では、2009年以降、2020年まで急速に増加し2020年には約40羽を超えた。

野川では、2002年～2013年まではほぼ10羽前後の横ばいで推移したが、2014年以降は緩やかな上昇傾向である。

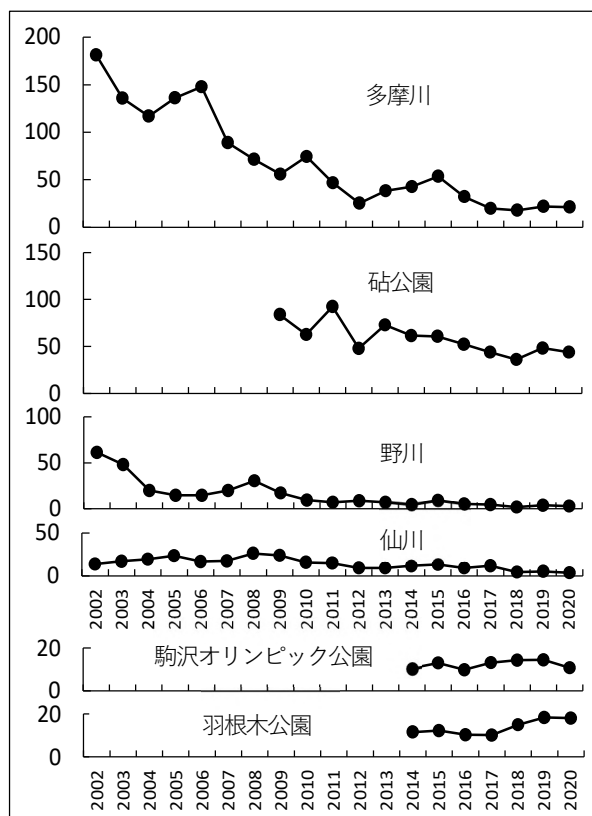
仙川では、2002年から2015年にかけて、ほぼ10羽前後の横ばいであったが、2016年頃より緩やかな上昇傾向が見られる。

駒沢オリンピック公園では2017年まで急上昇したが、その後横ばいで推移している

羽根木公園では、2014年～2020年にかけて、緩やかな上昇傾向である。

全体的に個体数の緩やかな増加傾向が見られる。

436. ハシブトガラス（年間）



図IV-3-26. ハシブトガラスの個体数推移

多摩川では、2003年以降、急速な減少傾向が見られる。

砧公園では、2010年以降、緩やかな減少傾向が続いている。

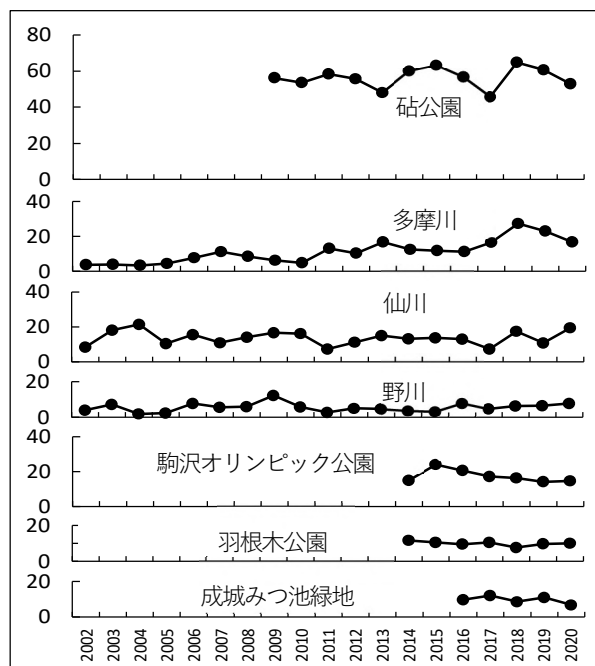
野川では、2003年以降、緩やかな減少が続いている。

仙川では、2009年頃より減少し、微減傾向である。

駒沢オリンピック公園では、ほぼ横ばいで変化は見られない。

羽根木公園では、2018年頃より微増傾向が見られる。

445. シジュウカラ（年間）



図IV-3-27. シジュウカラの個体数推移

砧公園では、60 羽前後で推移し、ほぼ横ばいである。

多摩川では、2011 年頃より緩やかな上昇傾向が見られる。

仙川では、20 羽未満で推移し横ばいで安定している。

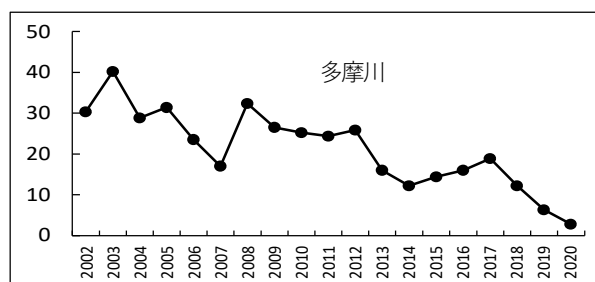
野川では、10 羽未満で推移し、安定している。

駒沢オリンピック公園では、2016 年から漸減傾向が見られる。

羽根木公園は 10 羽未満で推移し、安定している。

成城みつ池緑地では、10 羽前後で推移し、安定している。

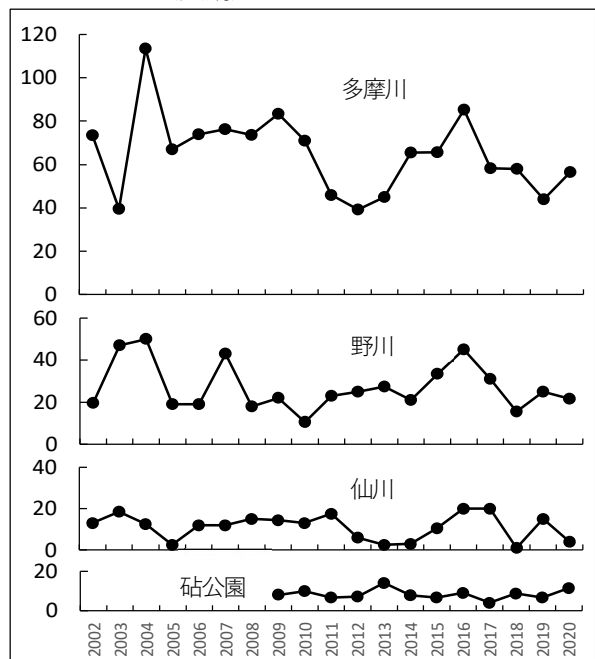
452. ヒバリ（年間）



図IV-3-28. ヒバリの個体数推移

区内唯一の生息地である多摩川では、増減を繰り返しつつ急速に減少してきている。

457. ツバメ（夏期）



図IV-3-29. ツバメの個体数推移

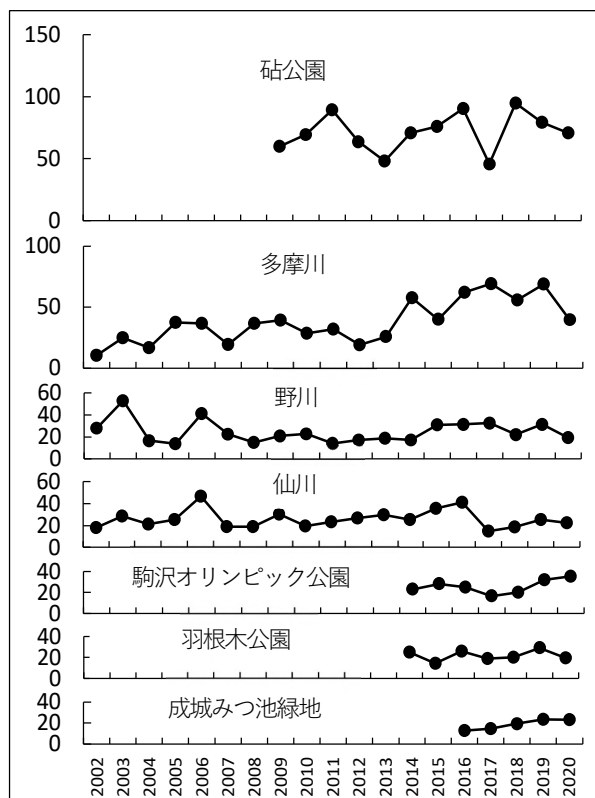
多摩川では、増減を繰り返しつつ、全体では微減傾向である。

野川では、増減はあるが、横ばいで個体数に大きな変化は見られない。

仙川では、2005 年、2013 年、2014 年、2019 年に個体数が極めて少なかったが、20 羽未満で推移している。

砧公園では、10 羽前後で推移しほぼ横ばいである。

463. ヒヨドリ（年間）



図IV-3-30. ヒヨドリの個体数推移

砦公園では、増減を繰り返しているが、全体としてはほぼ横ばいで推移し、区内で一番個体数が多い。
多摩川では、増減を繰り返しつつ、総じて増加傾向にある。

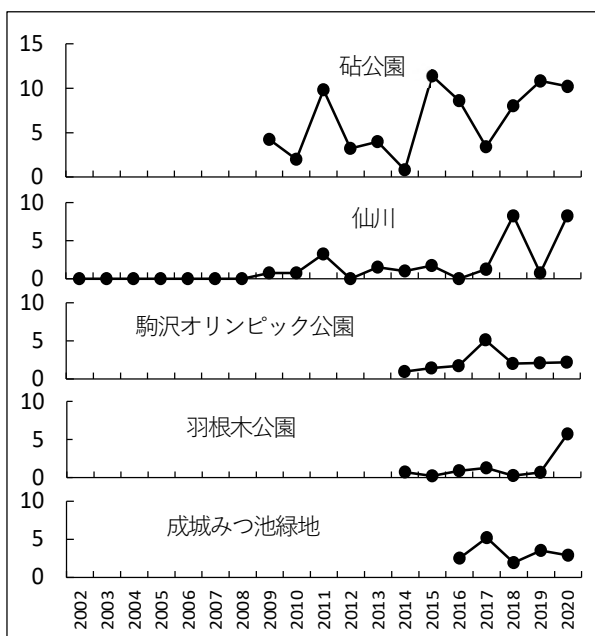
野川では、2003年、2006年約40～60羽と増加したが、全体としては、20～30羽で推移し安定している。

仙川では、2016年までは30羽前後で推移し微増傾向であったが、2017年以降は20羽未満に減少している。

駒沢オリンピック公園では、20～40羽前後で推移し微増傾向である。

羽根木公園では、20羽前後でほぼ横ばいである。
成城みつ池緑地では、個体数は少ないが微増傾向である。

466. エナガ（年間）



図IV-3-31. エナガの個体数推移

砦公園では、増減はあるが微増傾向で、区内で個体数が一番多い。

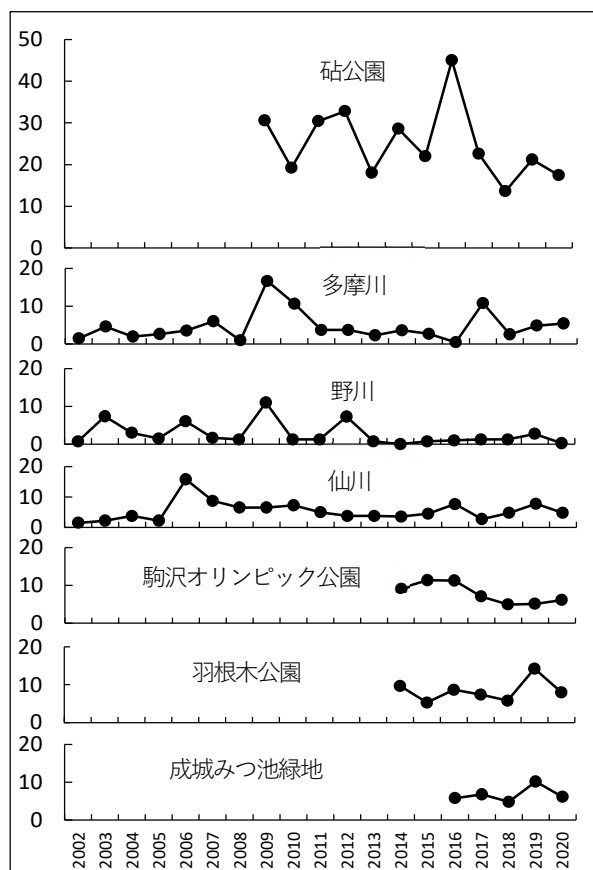
仙川では、2009年頃から見られるようになり、個体数は少ないが増加傾向である。

駒沢オリンピック公園では、少数ながら微増傾向が見られる。

羽根木公園では断続的に観察されてきたが、2020年急増した。

成城みつ池緑地では、5羽未満で推移している。

485. メジロ（年間）



図IV-3-32. メジロの個体数推移

砧公園では、増減はあるが、全体として微減傾向が見られる。

多摩川では、増減はあるが、ほぼ横ばいで推移している。

野川では、2013 年以降、増減もなく、個体数が極めて少ない状況で推移している。

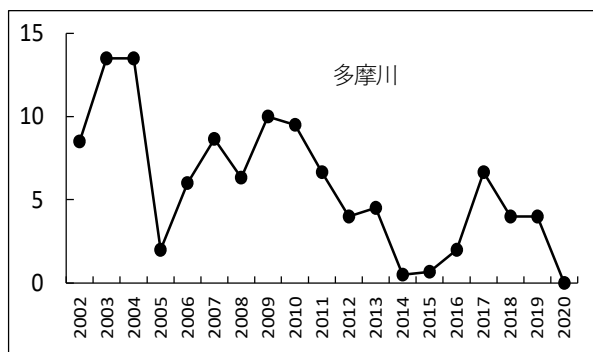
仙川では、約 10 羽未満で横ばいの状況が続いている。

駒沢オリンピック公園では、2017 年頃より微減傾向が見られる。

羽根木公園では、個体数が 10 羽前後で推移、ほぼ横ばいである。

成城みつ池緑地ではおよそ 5 羽前後で推移し横ばいである。

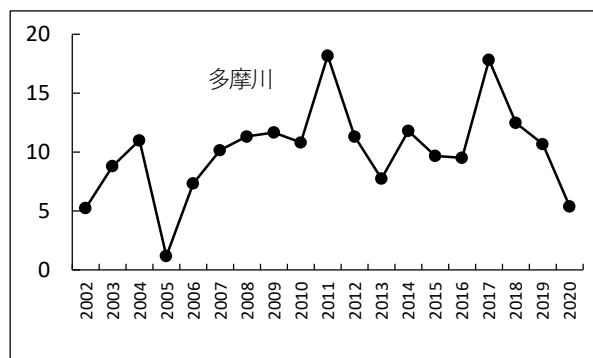
492. オオヨシキリ（夏期）



図IV-3-33. オオヨシキリの個体数推移

多摩川では、増減を繰り返しながら減少傾向にある。多摩川のヨシ原の減少に大きな影響を受けている。

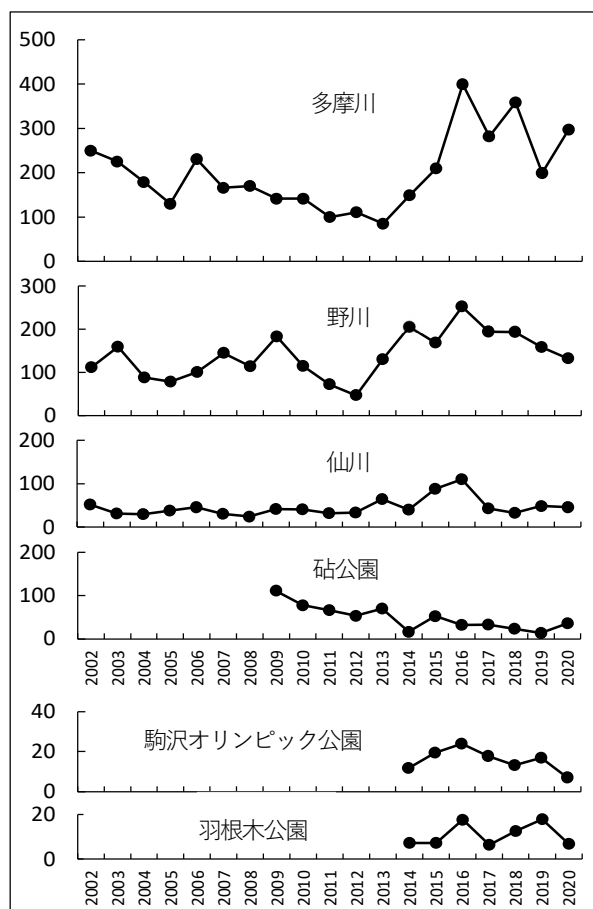
499. セッカ（年間）



図IV-3-34. セッカの個体数推移

多摩川では、増減はあるが、2019 年頃までは、およそ 10 羽前後で推移し、2020 年には急減した。台風によるオギ原、ヨシ原の砂礫地化の影響が大きい。

506. ムクドリ（年間）



図IV-3-35. ムクドリの個体数推移

多摩川では、2013 年までは緩やかな減少が続いたが、2014 年より増加傾向に入り、2017 年以降、再び減少傾向が見られる。

野川では、増減を繰り返し 2016 年まで微増傾向であったが、2017 年以降は減少傾向である。

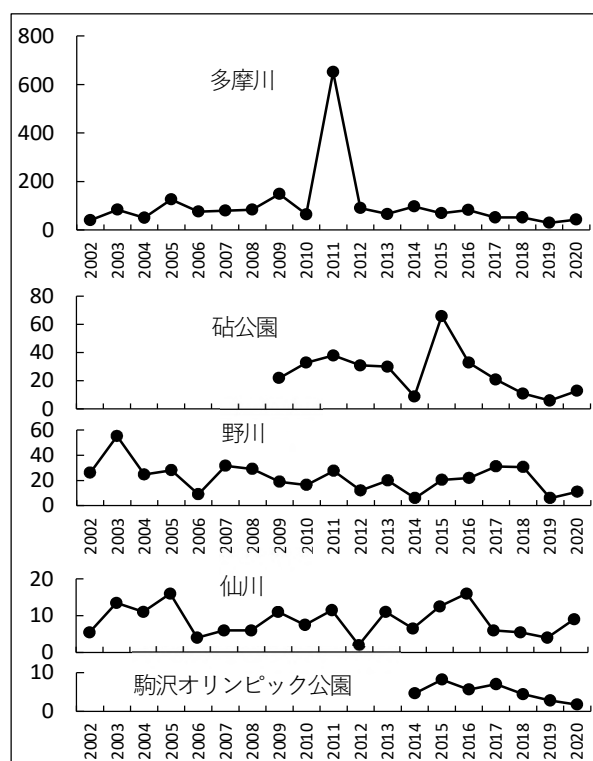
仙川では、2016 年までは緩やかな増加傾向であったが、2017 年以降は 2012 年のレベルに戻っている。

砧公園では、緩やかな減少傾向が見られる。

駒沢オリンピック公園では、20 羽前後でほぼ横ばいで推移している。

羽根木公園では 10 羽前後でほぼ横ばいで推移している。

525. ツグミ（冬期）



図IV-3-36. ツグミの個体数推移

多摩川では、2011 年およそ 600 羽の記録はあるが、若干の増減はあるものの、ほぼ横ばいである。

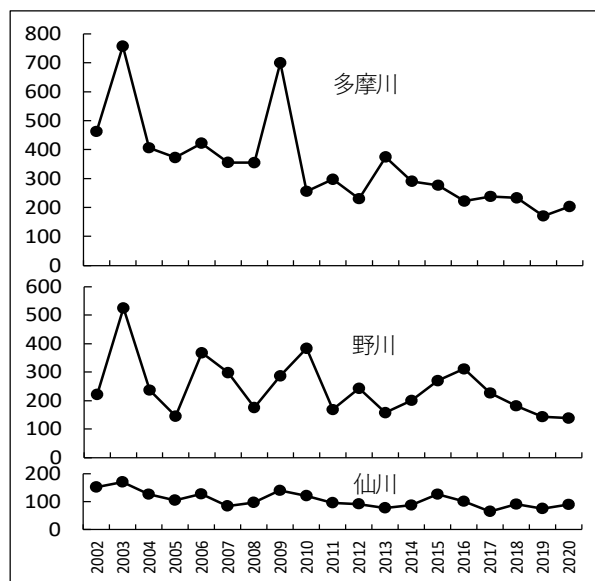
砧公園では、2015 年 60 羽台のピークはあるが以降、減少傾向である。

野川では、2018 年まではほぼ横ばいであったが、2019 年以降減少傾向である。

仙川では、10 羽前後と少数ではあるが、ほぼ横ばいで推移している。

駒沢オリンピック公園では、2015 年をピークに減少傾向が続いている。

569. スズメ（年間）



図IV-3-37. スズメの個体数推移

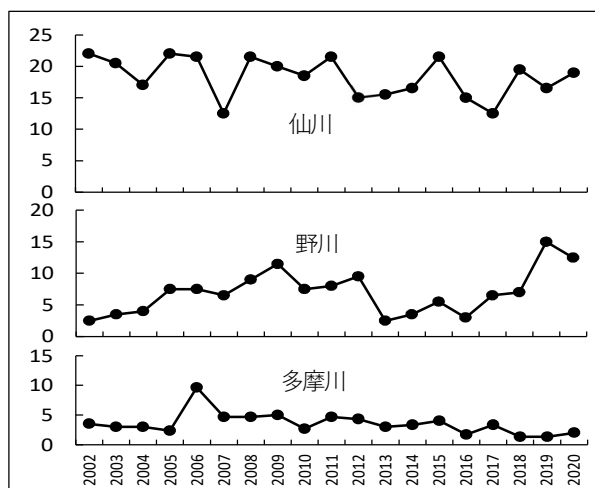
多摩川では、増減を繰り返しながら減少傾向が続いている。

野川では、2016 年ごろまでは増減を繰り返しつつ、ほぼ横ばいであったが、2017 年以降、減少傾向である。

仙川では、大きな変動は見られないが、緩やかな減少傾向が見られる。

全体としては、個体数の減少傾向が顕著である。

573. キセキレイ（冬期）



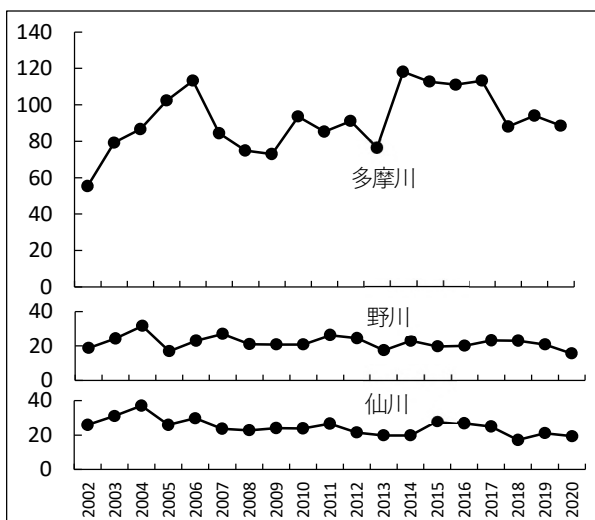
図IV-3-38. キセキレイの個体数推移

区内で一番個体数が多い仙川では、20 羽前後で推移している。年により変動はあるが、やや微減傾向にある。

野川では、2009 年まで増加傾向であった。2010 年から 2013 年にかけて急減した後、増加傾向で推移している。

多摩川では、年により多少の増減はあるものの、微減傾向である。

574. ハクセキレイ（年間）



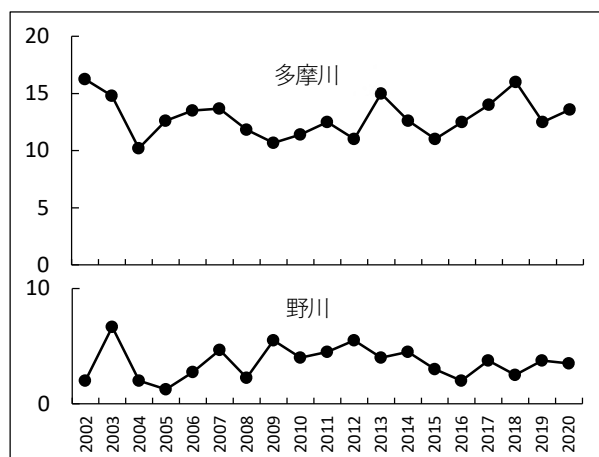
図IV-3-39. ハクセキレイの個体数推移

多摩川では、2002～2006 年にかけて急増し、120 羽台に達したが、以降 100 羽前後で推移しほぼ横ばいである。

野川では、およそ 20 羽前後で、安定した推移で横ばいである。

仙川では、およそ 20 羽前後で、安定した推移で横ばいである。

575. セグロセキレイ（年間）

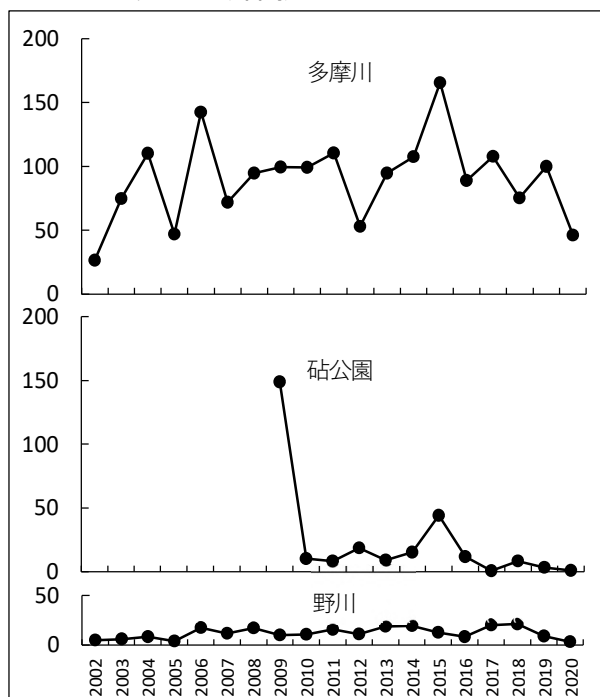


図IV-3-40. セグロセキレイの個体数推移

多摩川では、10～15 羽の小幅な増減を繰り返しながら、ほぼ横ばいで推移している。

野川では、およそ 5 羽前後で推移しほぼ横ばいである。

587. カワラヒワ（年間）



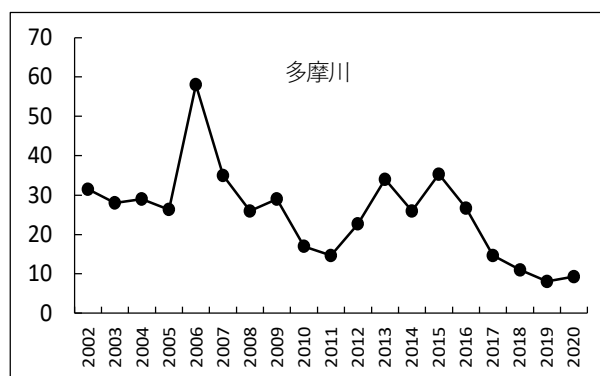
図IV-3-41. カワラヒワの個体数推移

多摩川では、2004 年～2014 年までおよそ 100 羽前後で推移し、2015 年急増して 150 羽を超えたが、以降、減少傾向である。

砧公園では、2009 年、個体数が突出して多かったが 2010 年には急減し、2015 年まで増加傾向が見られた。しかし、2016 年以降は 10 羽未満で推移している。

野川では、個体数は少ないが、微増傾向が見られた。しかし、2019 年以降は微減傾向である。

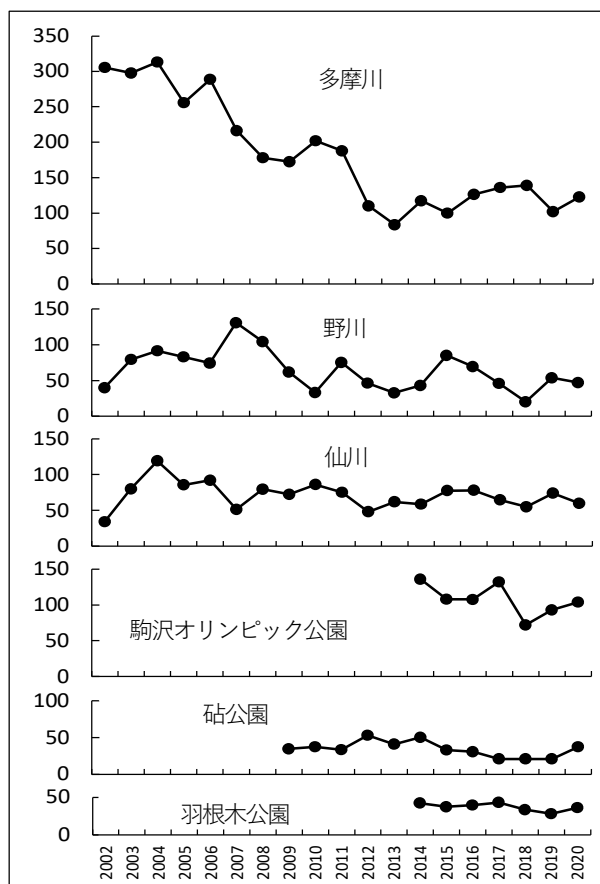
610. ホオジロ（冬期）



図IV-3-42. ホオジロの個体数推移

ホオジロは多摩川のみで見られる。増減はあるが、2015 年までは 30 羽前後で推移していたものの 2016 年より減少傾向である。河畔林、オギの生育状況などの影響を大きく受けたためと思われる。

外来種 8. カワラバト (年間)



図IV-3-43. カワラバトの個体数推移

多摩川では、2004 年までおよそ 300 羽で推移したが、2005 年より減少傾向にはいり 2013 年には 100 羽まで減少した。以降、微増傾向で推移している。

野川では、2007 年までは増加傾向で約 150 羽に達したが、以降、増減を繰り返しながら減少傾向である。

仙川では、2004 年およそ 100 羽を記録したが、以降 50～100 羽前後で緩やかな増減を繰り返し、ほぼ横ばいで推移している。

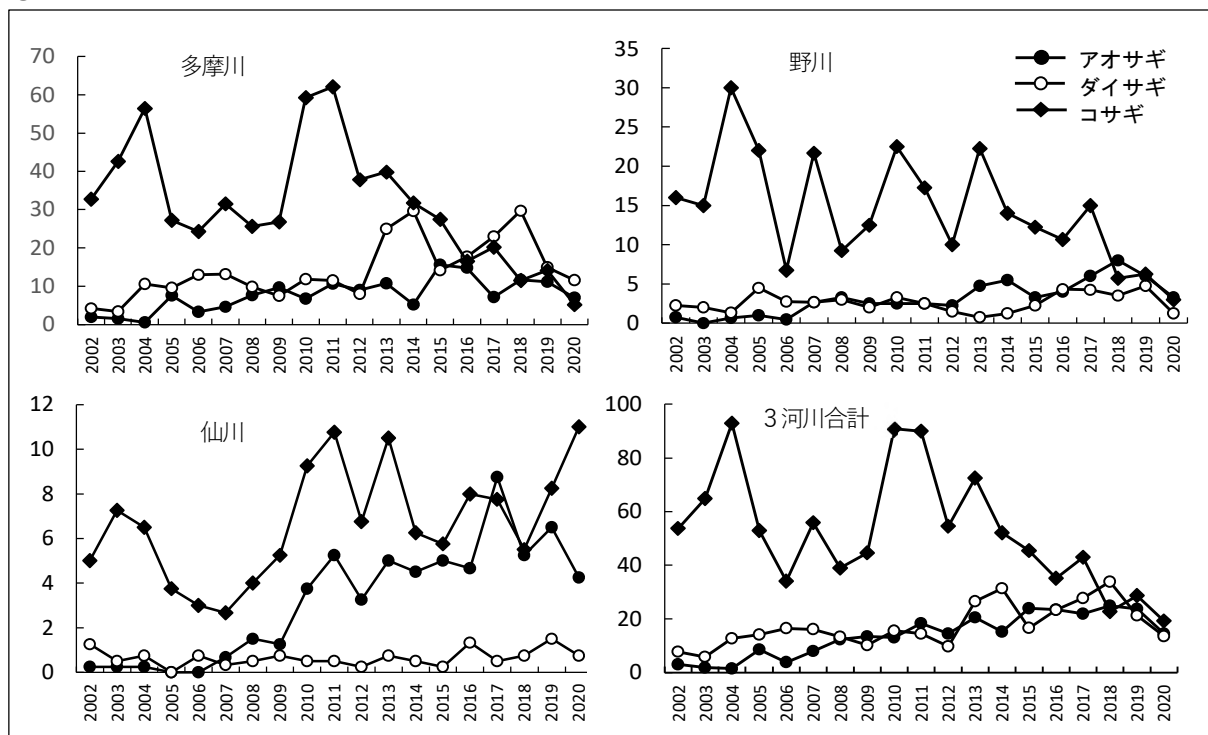
駒沢オリンピック公園では、2014～2017 年まではおよそ 100 羽を超えていたが、2018 年には約 70 羽まで減少し、以降増加傾向が見られる。

砧公園では、2014 年までは 50 羽前後で推移したが、2015 年以降微減傾向が続いている。

羽根木公園では 50 羽未満であるが、ほぼ横ばいで推移している。

2) 生態上の類似点がある種の個体数比較

① アオサギ、ダイサギ、コサギの個体数推移比較

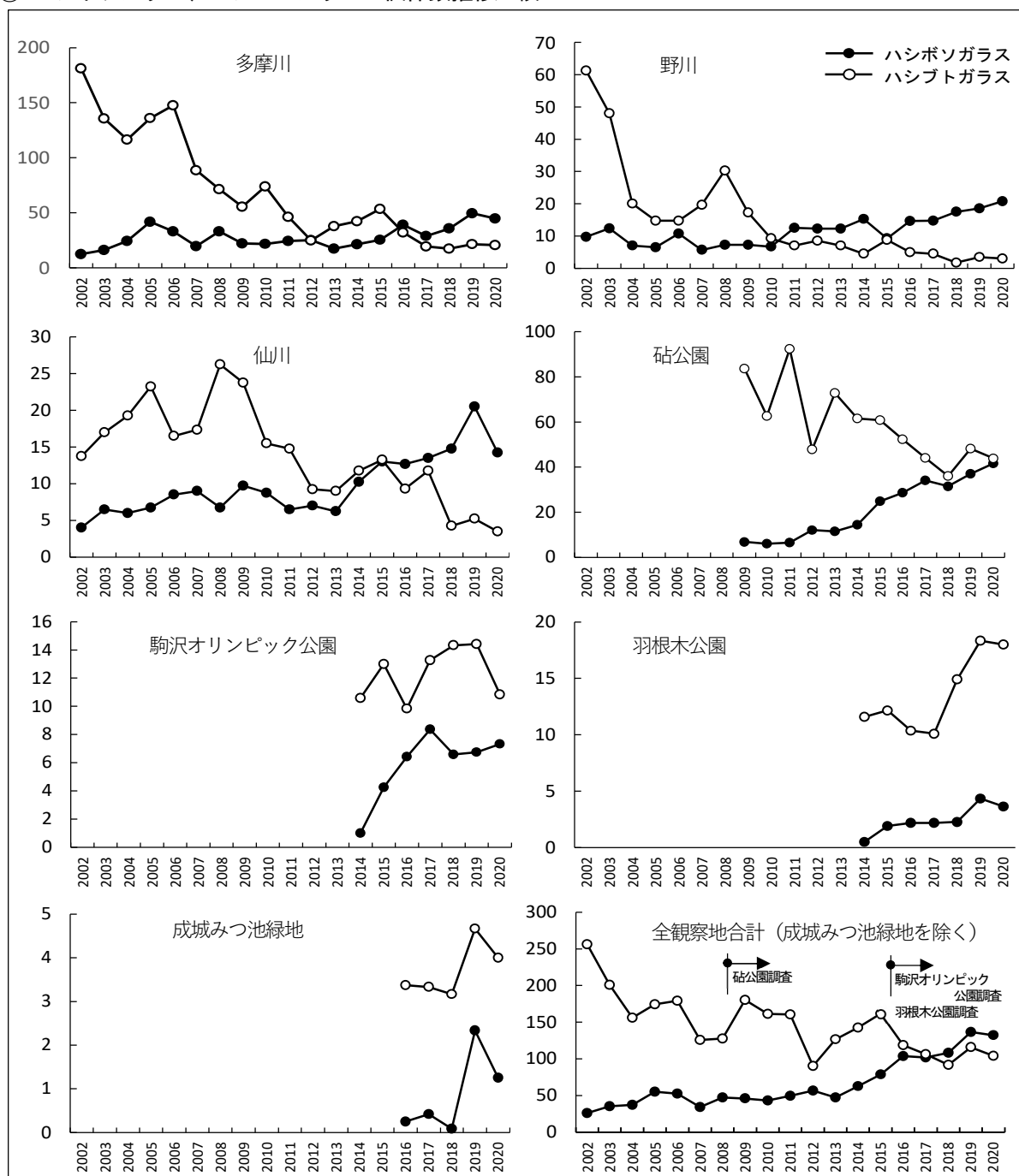


図IV-3-44. アオサギ、ダイサギ、コサギの個体数推移比較

3河川合計では、

1. アオサギは、2005 年ごろより 2015 年ごろまで増加傾向が見られ、以降 2019 年まで横ばいで推移、2020 年減少傾向が見られる。
2. ダイサギは、2013 年頃より増加傾向がみられたが、2018 年をピークに以降減少傾向である。
3. コサギは、個体数が多く、増減幅が大きい。2011 年頃までは、増減を繰り返しおよそ 60 羽前後で推移していたが、2012 年頃より急速に減少してきている。

② ハシボソガラス、ハシブトガラスの個体数推移比較

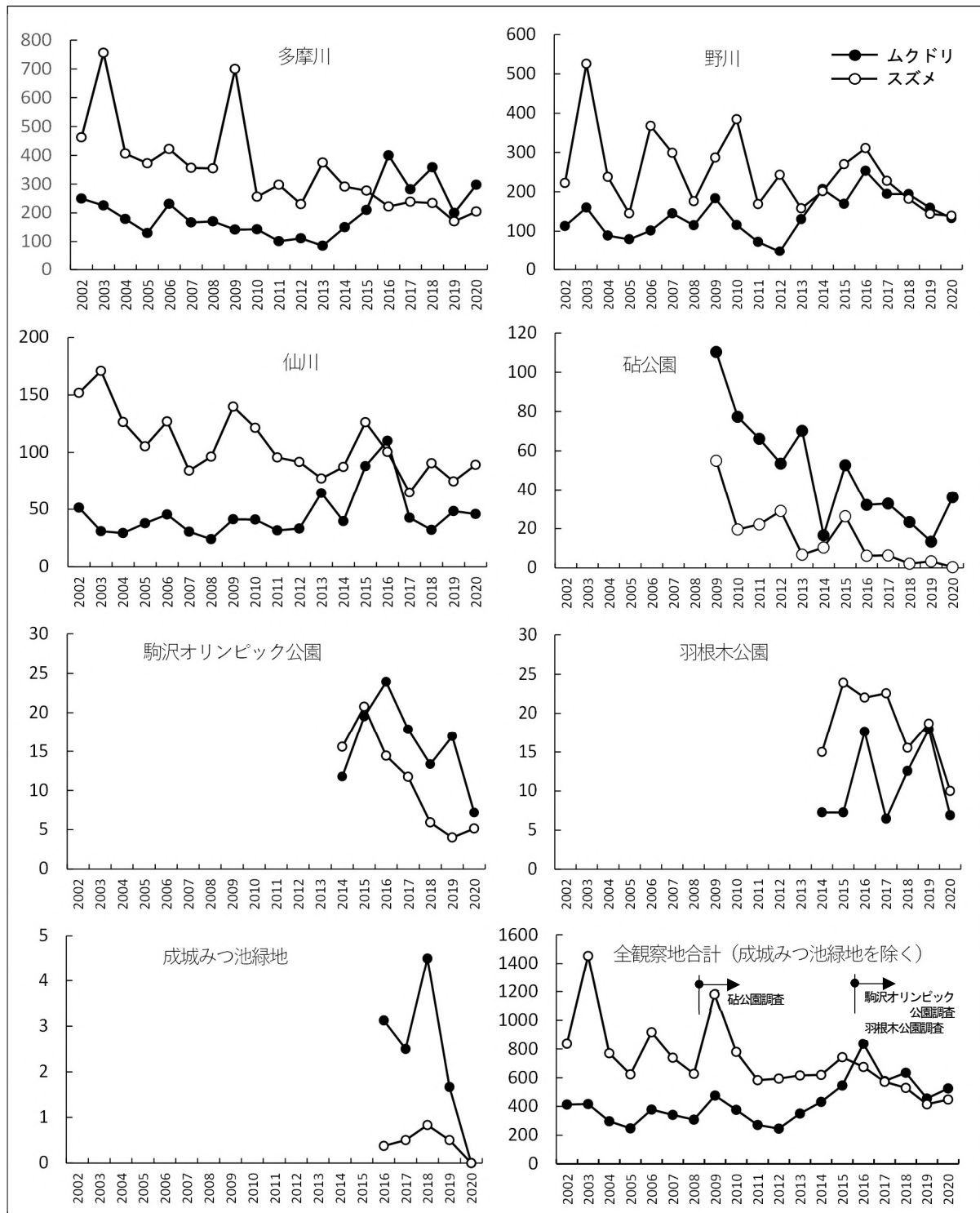


図IV-3-45. ハシボソガラス、ハシブトガラスの個体数推移比較

観察地合計では、ハシボソガラスが 2013 年頃までは微増傾向であったが、2014 年頃から急激に個体数を増やしてきた。そして、数が多いが、急激に減少してきているハシブトガラスに対し、急増してきたハシボソガラスの個体数が 2018 年に逆転した。ハシブトガラスとハシボソガラスの個体が逆転した調査地

は多摩川(2016 年)、野川(2011 年)、仙川(2016 年)である。個体数の多い砦公園では、ハシボソガラスとハシブトガラスの個体数が 2020 年、丁度交差するところである。駒沢オリンピック公園では、砦公園と似た傾向が見られる。その他、羽根木公園、成城みつ池緑地では両種とも個体数が同じ傾向で推移し、交差する傾向は見られない。

③ ムクドリ、スズメの個体数推移比較



図IV-3-46. ムクドリ、スズメの個体数推移比較

観察地合計では、減少傾向のスズメと増加傾向のムクドリの個体数が 2016 年逆転した。しかし、2017 年以降、ムクドリも個体数はスズメよりやや多いものの、同様に減少傾向にある。

各章データ集計

- 集計表 1. 1910～2020 年の生息状況（○生息 ●繁殖）
【第Ⅱ章】【第Ⅲ章】
- 集計表 2. 2011～2020 年の観察地別記録件数
【第Ⅰ章】
- 集計表 3. 2011～2020 年の河川・地域別記録件数
【第Ⅰ章】

集計表1. 1910～2020年の生息状況(○生息 ●繁殖)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

種番号	科名	種名	1 9 0	1 9 4	1 9 5	1 9 6	1 9 7	1 9 8	1 9 9	1 9 0	1 9 1	1 9 2	1 9 3	1 9 4	1 9 5	1 9 6	1 9 7	1 9 8	1 9 9	1 9 0	1 9 1	1 9 2	1 9 3	1 9 4	1 9 5	1 9 6	1 9 7	1 9 8	1 9 9
374	フクロウ科	アオバズク	○38、●44	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
375		トラフズク																											
376		コミミズク																				○		○	○		○	○	○
378	カワセミ科	アカショウビン																											
383		カワセミ		○	○	○	○	○	○	●	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○					
387	ブッポウソウ科	ブッポウソウ																											
388	キツツキ科	アリスイ																											
390		コゲラ																											
393		アカゲラ																					○		○		○	○	
397		アオゲラ																				○	○	○					
401	ハヤブサ科	チョウゲンボウ								○															○	○	○		○
403		コチョウゲンボウ																											
404		チゴハヤブサ																											
407		ハヤブサ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
412	サンショウウイ科	サンショウウイ	○38			○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
413	コウライウグイス科	コウライウグイス																											
418	カササギヒタキ科	サンコウチョウ	●41、●42				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
419	モズ科	チゴモズ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
420		モズ		●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
421		アカモズ																				○	○	○	○	○	○	○	○
427	カラス科	カケス				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
429		オナガ		●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
435		ハシボソガラス				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
436		ハシブトガラス				○																○	○	○	○	○	○	○	○
438	クイタダキ科	クイタダキ			○				○																				○
439	ツリスガラ科	ツリスガラ																											
441	シジュウカラ科	コガラ										○																	
442		ヤマガラ				○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
443		ヒガラ																											
445		シジュウカラ	○45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
450	ヒバリ科	ヒメコウテンシ																											
452		ヒバリ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
453		ハマヒバリ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
455	ツバメ科	ショウドウツバメ																					○						
457		ツバメ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
459		コシアカツバメ								○												○							
461		イワツバメ			○				○																			●	
463	ヒヨドリ科	ヒヨドリ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
464	ウグイス科	ウグイス	○45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
465		ヤブサメ																											
466	エナガ科	エナガ																											
470	ムシクイ科	ムシクイ																											
474		キマユムシクイ																											
476		オオムシクイ																											
477		メボソムシクイ				○	○	○	○		○	○	○																
479		エゾムシクイ	○37																										
480		センダイムシクイ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
485	メジロ科	メジロ	○45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
487	センニュウ科	シマセンニュウ																											
490		オオセッカ																											
491		エゾセンニュウ																											
492	ヨシキリ科	オオヨシキリ	●40		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
493		コヨシキリ			○																								
499	セッカ科	セッカ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
500	レンジャク科	キレンジャク																											
501		ヒレンジャク	○42																				○			○			
504	ミソサザイ科	ミソサザイ	○38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
506	ムクドリ科	ムクドリ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
508		コムクドリ				○				○																			
511		ホシムクドリ																											
513	ヒタキ科	マミジロ																										○	
514		トラツグミ			○																					○	○	○	○
518		クロツグミ																								○	○	○	○
520		マミチャジナイ								○																○	○	○	○
521		シロハラ							○	○															○	○	○	○	○
522		アカハラ	○45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
525		ツグミ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
530		コマドリ																											
533		ノゴマ																										○	
534		コルリ				○																					○		
536		ルリビタキ								○															○	○			
540		ジョウビタキ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
542		ノビタキ							○	○	○													○	○	○			
549		インヒヨドリ																								○			

[illegible]

[illegible]

集計表2. 2011～2020年の観察地別記録件数 灰色セル内の数値は繁殖件数を含む。

種 番 号	科名	種名 \ 観察地	多 摩 川	野 川	仙 川	野 川 周 辺	仙 川 周 辺	高 源 院	蘆 花 恒 春 園	将 軍 池 公 園	桜 丘 す み れ ば 自 然 庭 園	祖 師 谷 公 園	つ り が ね 池 公 園	成 城 み つ 池 緑 地	成 城 三 丁 目 緑 地
3	キジ科	ウズラ	1												
5		キジ	197												
8	カモ科	ヒシクイ	1												
10		マガン	2												
15		シジュウカラガン	1												
19		コハクチョウ	3												
20		オオハクチョウ	1												
24		オシドリ	6	1											
26		オカヨシガモ	117	1	24										
27		ヨシガモ	19	2	131							25			
28		ヒドリガモ	165	9	757							232			
29		アメリカヒドリ	1												
30		マガモ	322	171	513					15		12			
32		カルガモ	593	893	1,642			45	2	30	20	471	5	2	1
34		ハシビロガモ	119	5	190							16			
35		オナガガモ	57	13	538							67			
36		シマアジ	12	2	1										
37		トモエガモ	5	5											
38		コガモ	558	448	1,092			2			1	281			
42		ホシハジロ	36	5	3							1			
43		アカハジロ	1												
46		キンクロハジロ	36	12	9							1			
47		スズガモ	20	8											
57		ホオジロガモ	10												
59		カワアイサ	14												
60		ウミアイサ	3												
62	カイツブリ科	カイツブリ	381	86	22							1			
63		アカエリカイツブリ	11	4											
64		カンムリカイツブリ	77												
65		ミミカイツブリ	1												
66		ハジロカイツブリ	6												
74	ハト科	キジバト	591	458	1,047		2	71	327	24	297	466	21	214	70
78		アオバト	13								4				
81	アビ科	アビ	1												
98	ミズナギドリ科	オオミズナギドリ	1												
119	コウノトリ科	コウノトリ	2												
127	ウ科	カワウ	745	333	908			1	2	3	5	238		5	5
132	サギ科	サンカノゴイ	1												
133		ヨシゴイ	7												
137		ミゾゴイ	2								6				
139		ゴイサギ	202	183	134			3	1			15		1	
141		ササゴイ	33	8											
142		アカガシラサギ	3	3											
143		アマサギ	38												
144		アオサギ	673	450	940	1	6	28		17	10	218		1	
146		ダイサギ	611	248	302			11	2	11	1	77		1	
147		チュウサギ	83	11	11										
148		コサギ	641	633	1,140				7	4	4	358		1	1
154	トキ科	クロツラヘラサギ	1												
166	クイナ科	クイナ	44	125	5										
170		ヒクイナ	2												
174		バン	145	65	75			1				7			
175		オオバン	419	125	80							3			
184	カッコウ科	ジュウイチ													
185		ホトトギス	2											1	
187		ツツドリ	15	1					1		1	1			
188		カッコウ	1												
191	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	1												
192		アマツバメ	63												
193		ヒメアマツバメ	392	22	1									1	
194	チドリ科	タゲリ	29												
195		ケリ	18												
197		ムナグロ	32												
199		ダイゼン	1												
202		イカルチドリ	560	176	2										
203		コチドリ	269	203											
204		シロチドリ	2												
205		メダイチドリ	2												
210	セイタカシギ科	セイタカシギ	4												
212	シギ科	ヤマシギ	1											1	
216		オオジシギ	5												
219		タシギ	87	356	11									1	
223		オグロシギ	1												
227		チュウシャクシギ	12												
231		ホウロクシギ	2												
232		ツルシギ	2												
233		アカアシシギ	1												

次大夫堀公園	砧公園	馬事公苑	岡本静嘉堂周辺	瀬田四丁目旧小坂緑地	二子玉川公園	上野毛自然公園	玉川野毛町公園	等々力溪谷公園	浄真寺	駒沢オリンピック公園	豪徳寺	羽根木公園	北沢川緑道	その他区内	合計	観察地 / 種名	種番号	
															1	ウズラ	3	
														1	198	キジ	5	
															1	ヒシクイ	8	
															2	マガン	10	
															1	シジュウカラガン	15	
															3	コハクチョウ	19	
															1	オオハクチョウ	20	
	11														18	オシドリ	24	
														1	143	オカヨシガモ	26	
															177	ヨシガモ	27	
														2	1,165	ヒドリガモ	28	
															1	アメリカヒドリ	29	
2	1	4	6					9							3	1,058	マガモ	30
178	105	69	80		6			78		115		1	3	114	4,453	カルガモ	32	
															2	332	ハシビロガモ	34
										1					2	678	オナガガモ	35
															15	シマアジ	36	
														1	11	トモエガモ	37	
	29													4	2,415	コガモ	38	
										1				1	47	ホシハジロ	42	
															1	アカハジロ	43	
										2				4	64	キンクロハジロ	46	
															28	スズガモ	47	
															10	ホオジロガモ	57	
															14	カワアイサ	59	
															3	ウミアイサ	60	
														11	501	カイツブリ	62	
															15	アカエリカイツブリ	63	
	1														78	カンムリカイツブリ	64	
															1	ミミカイツブリ	65	
															6	ハジロカイツブリ	66	
155	326	85	119	45	65	55	28	97	153	344	3	330	4	590	5,987	キジバト	74	
	5							1				1		1	25	アオバト	78	
															1	アビ	81	
															1	オオミズナギドリ	98	
															2	コウノトリ	119	
5	35	2	4		5		4	3	5	24		4		56	2,392	カワウ	127	
			1												1	サンカノゴイ	132	
															8	ヨシゴイ	133	
															8	ミゾゴイ	137	
	3		1										1	13	557	ゴイサギ	139	
	1														42	ササゴイ	141	
															6	アカガシラサギ	142	
															38	アマサギ	143	
6	87	1	7	1						5		2		61	2,514	アオサギ	144	
1	4				1					6				38	1,314	ダイサギ	146	
															105	チュウサギ	147	
15	6		14		1		1	6	1	2		1	4	35	2,875	コサギ	148	
															1	クロツラヘラサギ	154	
															174	クイナ	166	
															2	ヒクイナ	170	
															293	バン	174	
														2	629	オオバン	175	
														1	1	ジュウイチ	184	
					1	3		2	1					6	16	ホトトギス	185	
1	20							1				1		1	43	ツツドリ	187	
											1				2	カッコウ	188	
															1	ハリオアマツバメ	191	
	1														64	アマツバメ	192	
	20		8			2		1		8		1		5	461	ヒメアマツバメ	193	
															29	タゲリ	194	
															18	ケリ	195	
															32	ムナグロ	197	
															1	ダイゼン	199	
														1	739	イカルチドリ	202	
1														21	494	コチドリ	203	
															2	シロチドリ	204	
															2	メダイチドリ	205	
								2							4	セイタカシギ	210	
								2							4	ヤマシギ	212	
															5	オオジシギ	216	
															455	タシギ	219	
															1	オグロシギ	223	
															12	チュウシャクシギ	227	
															2	ホウロクシギ	231	
															2	ツルシギ	232	
															1	アカアシシギ	233	

種 番 号	科名	種名 \ 観察地	多 摩 川	野 川	仙 川	野 川 周 辺	仙 川 周 辺	高 源 院	蘆 花 恒 春 園	将 軍 池 公 園	桜 丘 す み れ ば 自 然 庭 園	祖 師 谷 公 園	つ り が ね 池 公 園	成 城 み つ 池 緑 地	成 城 三 丁 目 緑 地
234	シギ科	コアオアシシギ	2												
235		アオアシシギ	34												
239		クサシギ	9	5											
240		タカブシギ	20												
241		キアシシギ	121	38		1									
244		イソシギ	514	325	51										
246		キョウジョシギ	3												
247		オバシギ	1												
251		トウネン	10												
253		オジロトウネン	26												
254		ヒバリシギ	1												
258		ウズラシギ	4												
259		サルハマシギ	6												
261		ハマシギ	23												
264		キリアイ	1												
266		エリマキシギ	3												
268		アカエリヒレアシシギ	13	1											
269		ハイロヒレアシシギ	2	2											
271	タマシギ科	タマシギ	4	1											
273	ツバメチドリ科	ツバメチドリ	7												
278	カモメ科	ミツユビカモメ	2												
286		ユリカモメ	318	67	6										
293		ウミネコ	81	1	1										
294		カモメ	10	1											
296		シロカモメ	2												
299		セグロカモメ	305	28	5				1						
301		オオセグロカモメ	13												
307		コアジサシ	232	1											
314		アジサシ	5												
316		クロハラアジサシ	18												
317		ハジロクロハラアジサシ	3												
322	トウゾクカモメ科	シロハラトウゾクカモメ	1												
339	ミサゴ科	ミサゴ	75								1				
340	タカ科	ハチクマ	3												
342		トビ	476	27	5	2	1					1		6	
349		チュウヒ	3												
354		ツミ	68	3	55		7	2	16		4	59		19	1
355		ハイタカ	52	8				1			5				
356		オオタカ	306	36	30		3	1	3	1	9	12		52	2
357		サシバ	11												
358		ノスリ	92	3	1				3					1	
366	フクロウ科	オオコノハズク													
372		フクロウ		1								1		11	
374		アオバズク													
375		トラフズク	6												
376		コミミズク	22												
378	カワセミ科	アカショウビン	2												
383		カワセミ	485	633	594			9		6		120		2	
387	ブッポウソウ科	ブッポウソウ													
388	キツツキ科	アリスイ	27												
390		コゲラ	146	15	502			12	225	8	297	149	10	372	25
393		アカゲラ	6											9	
397		アオゲラ	5	1	9		7		15	1	9	21		102	5
401		チョウゲンボウ	501	47	3	2			8	1	1	3			2
403	ハヤブサ科	コチョウゲンボウ	2												
404		チゴハヤブサ	6												
407		ハヤブサ	153	7					5					1	
412	サンショウクイ科	サンショウクイ	6												
413	コウライウグイス科	コウライウグイス	1												
418	カササギヒタキ科	サンコウチョウ													
420	モズ科	モズ	564	237	64	2	9		20	3	37	110		10	2
421		アカモズ	1												
427	カラス科	カケス	3						1		1			4	4
429		オナガ	81	51	484	1	5	36	118	25	210	212	6	131	21
435		ハシボソガラス	645	523	1,339	1	4	39	290	12	218	468	20	197	69
436		ハシブトガラス	574	244	1,154			89	369	54	334	465	31	439	61
438		キクイタダキ	4												1
439	ツリスガラ科	ツリスガラ	8												
441	シジュウカラ科	コガラ			2				2						
442		ヤマガラ	5		13		1	1	22		5	18		24	5
443		ヒガラ	2		8				10		8	2		3	
445		シジュウカラ	541	156	1,073	3		79	356	42	330	420	24	500	69
450		ヒメコウテンシ	1												
452	ツバメ科	ヒバリ	544	8											
455		ショウドウツバメ	37												
457		ツバメ	493	314	350	3	2	13	48	2	68	98	1	45	16
459		コシアカツバメ	66	3											
461		イワツバメ	261	107	7	2									

次大夫堀公園	砦公園	馬事公苑	岡本静嘉堂周辺	瀬田四丁目旧小坂緑地	二子玉川公園	上野毛自然公園	玉川野毛町公園	等々力溪谷公園	浄真寺	駒沢オリンピック公園	豪徳寺	羽根木公園	北沢川緑道	その他区内	合計	観察地 / 種名	種番号	
															2	コアオアシシギ	234	
															34	アオアシシギ	235	
	1														15	クサシギ	239	
															20	タカブシギ	240	
															160	キアシシギ	241	
	2							3						1	896	イソシギ	244	
															3	キョウジョシギ	246	
															1	オバシギ	247	
															10	トウネン	251	
															26	オジロトウネン	253	
															1	ヒバリシギ	254	
															4	ウズラシギ	258	
															6	サルハマシギ	259	
															23	ハマシギ	261	
															1	キリアイ	264	
															3	エリマキシギ	266	
															14	アカエリヒレアシシギ	268	
															4	ハイロヒレアシシギ	269	
															5	タマシギ	271	
															7	ツバメチドリ	273	
															2	ミツユビカモメ	278	
3										2					396	ユリカモメ	286	
															83	ウミネコ	293	
															11	カモメ	294	
															2	シロカモメ	296	
														1	340	セグロカモメ	299	
															13	オオセグロカモメ	301	
														1	234	コアジサシ	307	
															5	アジサシ	314	
															18	クロハラアジサシ	316	
															3	ハジロクロハラアジサシ	317	
															1	シロハラトウゾクカモメ	322	
	3									1				2	82	ミサゴ	339	
															3	ハチクマ	340	
4	8		1		7					6		1		18	563	トビ	342	
															3	チュウヒ	349	
20	12	2	1			9		11	7	25	12	29		62	424	ツミ	354	
3	24		2												9	104	ハイタカ	355
6	153		7			1		6	2	13		3		22	668	オオタカ	356	
	19														30	サシバ	357	
1	52		2	1						1				1	158	ノスリ	358	
														1	1	オオコノハズク	366	
	3		2											12	30	フクロウ	372	
								7	1		69				4	81	アオバズク	374
															6	トラフズク	375	
	2														1	25	コミミズク	376
															2	アカショウビン	378	
5	43	1	20		3			3						23	1,947	カワセミ	383	
	1														1	ブッポウソウ	387	
															27	アリスイ	388	
55	281	59	73	27	2	7	3	23	19	212	1	164		78	2,765	コゲラ	390	
	17	1				1				1	1	1			37	アカゲラ	393	
8	139	29	24	2		5		34	3	3	1			20	443	アオゲラ	397	
6	3	3	1		8	1		1	1	2		1		50	645	チョウゲンボウ	401	
															2	コチョウゲンボウ	403	
	1														7	チゴハヤブサ	404	
1	13									1				8	189	ハヤブサ	407	
	9										1			2	18	サンショウクイ	412	
															1	コウライウグイス	413	
	6									2				2	10	サンコウチョウ	418	
14	53	4	13	2	18	2		5	6	23	2	46		70	1,316	モズ	420	
															1	アカモズ	421	
	21		4					1	1					1	41	カケス	427	
47	64	46	29	6	1	10	1	31	47	40	3	63		355	2,124	オナガ	429	
212	325	78	50	11	23	19	40	22	22	230	1	184	5	88	5,135	ハシボソガラス	435	
64	353	91	140	123	37	66	71	111	237	380	6	463	30	292	6,278	ハシブトガラス	436	
	7		5							1		7		4	29	キクイタダキ	438	
															8	ツリスガラ	439	
	1														5	コガラ	441	
	81	18	25	2		1				23	1	15		19	279	ヤマガラ	442	
	5	6	6	2						6				8	66	ヒガラ	443	
194	366	87	137	111	37	52	41	95	159	419	4	444	12	433	6,184	シジュウカラ	445	
															1	ヒメコウテンシ	450	
										1				2	555	ヒバリ	452	
															37	ショウドウツバメ	455	
38	116	26	14		39	2	5	11	26	74	1	66	1	695	2,567	ツバメ	457	
															2	71	コシアカツバメ	459
	7		9								3				399	イワツバメ	461	

種 番 号	科名	種名 \ 観察地	多 摩 川	野 川	仙 川	野 川 周 辺	仙 川 周 辺	高 源 院	蘆 花 恒 春 園	将 軍 池 公 園	桜 丘 す み れ ば 自 然 庭 園	祖 師 谷 公 園	つ り が ね 池 公 園	成 城 み つ 池 緑 地	成 城 三 丁 目 緑 地
463	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	608	442	1,308	1		88	326	55	335	442	32	520	80
464	ウグイス科	ウグイス	358	31	323	3	26	19	51	19	148	73	4	282	22
465		ヤブサメ	4						1					1	
466	エナガ科	エナガ	15	6	318	1	5	5	77	10	88	111	8	198	33
470	ムシクイ科	ムジセッカ	1												
474		キマユムシクイ													
476		オオムシクイ	2						2						
477		メボソムシクイ									2				
479		エゾムシクイ	2						2		5			7	
480		センダイムシクイ	9		3		2		17		5	2		13	
485	メジロ科	メジロ	320	69	799	1		56	229	40	317	279	24	403	32
490	センニュウ科	オオセッカ	1												
491		エゾセンニュウ	2												
492	ヨシキリ科	オオヨシキリ	159	26	2										
493		コヨシキリ	19	3	1										
499	セッカ科	セッカ	472	4											
500	レンジャク科	キレンジャク	1												
501		ヒレンジャク	4												
504	ミソサザイ科	ミソサザイ	4	1	1							3		1	1
506	ムクドリ科	ムクドリ	716	677	1,116	3	3	68	251	34	264	414	12	98	41
508		コムクドリ	57	15				1							
511		ホシムクドリ	1												
514	ヒタキ科	トラツグミ	1						4					2	3
518		クロツグミ							1						
520		マミチャジナイ	2											1	
521		シロハラ	15	1	18		14	2	37	3	90	24		85	20
522		アカハラ	16	7	6				5		10			11	3
525		ツグミ	395	266	358	1	3	24	92	19	140	161	3	80	34
530		コマドリ	2												
533		ノゴマ	1												
534		コルリ													
536		ルリビタキ	3	1			1	1	1		5			4	4
540		ジョウビタキ	194	107	188	2	4	2	8	3	55	68		38	8
542		ノビタキ	53	11											
549		イソヒヨドリ	55	50		4									
552		エゾビタキ	4	1	1		1		2						
553		サメビタキ							1					1	
554		コサメビタキ	12	1	3		1		6		4	2		2	
558		キビタキ	10		1		3		10	2	11			15	1
559		ムギマキ							1						
560		オジロビタキ	1												
561		オオルリ	1						7		5				1
569	スズメ科	スズメ	773	806	1,524			63	242	18	157	457	7	43	62
571	セキレイ科	ツメナガセキレイ	12												
573		キセキレイ	275	270	763			4	1	1	1	173		1	2
574		ハクセキレイ	741	731	1,290			6	55	17	65	236		9	5
575		セグロセキレイ	595	276	182							9			
580		ピンズイ	1	1	1						1				
583		ムネアカタヒバリ	6												
584		タヒバリ	388	25	4										
586	アトリ科	アトリ	15	2	26	1	4	4	7	1	16	21		9	4
587		カワラヒワ	664	270	302	1	5	8	72	13	51	57		81	24
588		マヒワ	22	1	4				3			1			1
589		ベニヒワ	2												
592		ベニマシコ	88	1											
599		ウソ	2					1			1			1	2
600		シメ	148	6	58		8	4	26	11	52	28	2	63	4
601		コイカル	1												
602		イカル	6												
603	ツメナガホオジロ科	ツメナガホオジロ	1												
610	ホオジロ科	ホオジロ	364	31	2						4				
614		ホオアカ	47												
615		コホオアカ	2												
617		カシラダカ	67	6	4			1			1	1			
618		ミヤマホオジロ	6												
623		ノジコ	2												
624		アオジ	311	88	135	2		9	32	2	58	31		41	3
625		クロジ	17	1										2	1
628	(以下外来種)	オオジュリン	179												
G001	キジ科	コジュケイ	1												
G008	ハト科	カワラハト	624	401	1,522		4	69	331	13	269	460	2	16	52
G013	インコ科	セキセイインコ				1									
G015		ホンセイインコ	117	37	609	1	3	2	106	11	141	156	10	40	6
G016		ダルマインコ													
G021	チメドリ科	ガビチョウ	202		1						2			13	1
G023		カオグロガビチョウ	80												
G025		ソウシチョウ	2											1	
合計	56科	232種	25,895	12,631	26,207	40	134	881	3,860	531	4,189	7,858	222	4,239	810

次大夫堀公園	砧公園	馬事公苑	岡本静嘉堂周辺	瀬田四丁目旧小坂緑地	二子玉川公園	上野毛自然公園	玉川野毛町公園	等々力溪谷公園	浄真寺	駒沢オリンピック公園	豪徳寺	羽根木公園	北沢川緑道	その他区内	合計	観察地 / 種名	種番号
261	336	86	142	126	54	67	42	110	215	397	3	451	29	709	7,265	ヒヨドリ	463
14	97	21	71	26		35		44	27	55		38		221	2,008	ウグイス	464
	2									2					10	ヤブサメ	465
53	154	27	50	12		7	1	14	23	53	3	34		91	1,397	エナガ	466
														1	2	ムジセッカ	470
	2														2	キマユムシクイ	474
	2									2					8	オオムシクイ	476
	2											1			5	メボソムシクイ	477
	6		1					1		3		3		5	35	エゾムシクイ	479
	23	1	6	2		7		3		13		6		9	121	センダイムシクイ	480
114	322	71	129	80	24	28	24	66	77	273	1	331	6	460	4,575	メジロ	485
															1	オオセッカ	490
															2	エゾセンニュウ	491
												1		2	190	オオヨシキリ	492
															23	コヨシキリ	493
														1	477	セッカ	499
														1	2	キレンジャク	500
	1													2	7	ヒレンジャク	501
								2							13	ミソサザイ	504
172	214	50	27	8	90	13	46	33	86	215	2	275	10	619	5,557	ムクドリ	506
1	1									2		1		2	80	コムクドリ	508
															1	ホシムクドリ	511
	4									1					15	トラツグミ	514
	2									2					5	クロツグミ	518
	4							4		2		1			14	マミチャジナイ	520
27	117	22	53	24		5	1	19	23	47		19		80	746	シロハラ	521
37	33	2	14	1		4		3	6	12		1		33	204	アカハラ	522
59	175	43	37	9	22	9	17	16	69	131		120	2	272	2,557	ツグミ	525
	1													4	7	コマドリ	530
															1	ノゴマ	533
	5													1	6	コルリ	534
	5		6	2					1					6	40	ルリビタキ	536
37	22	8	8		17	1	1	5	9	19	1	30	2	219	1,056	ジョウビタキ	540
														1	65	ノビタキ	542
					1			1						112	223	イソヒヨドリ	549
	19									3					31	エゾビタキ	552
	2														4	サメビタキ	553
	12					1				3		3		1	51	コサメビタキ	554
	55	1	10	1	1	4		34	2	8		4		34	207	キビタキ	558
	2														3	ムギマキ	559
															1	オジロビタキ	560
	20							1		3		1		1	40	オオルリ	561
192	183	88	37	23	143	50	73	30	111	284	1	406	45	1,080	6,898	スズメ	569
															12	ツメナガセキレイ	571
1	37		31	1		1		12	2	3		1		14	1,594	キセキレイ	573
52	182	41	30	3	42	6	18	4	11	120		98	2	60	3,824	ハクセキレイ	574
2	2				4	1		1						2	1,074	セグロセキレイ	575
	7		1							1					13	ビンズイ	580
															6	ムネアカタヒバリ	583
									1					4	422	タヒバリ	584
4	60	3	3	2		5		6	30	23	1	5		58	310	アトリ	586
12	176	21	33	9	57	4	9	5	22	73	1	66		111	2,147	カワラヒワ	587
	12		1							4				7	56	マヒワ	588
															2	ベニヒワ	589
															89	ベニマシコ	592
	5									1					13	ウソ	599
9	147	23	33	11		4	1	5	8	43		11		32	737	シメ	600
	1														2	コイカル	601
	16									3					25	イカル	602
															1	ツメナガホオジロ	603
	1														402	ホオジロ	610
															47	ホオアカ	614
															2	コホオアカ	615
1	3								1			1		2	88	カシラダカ	617
															6	ミヤマホオジロ	618
															2	ノジコ	623
26	89	13	38	3	1	3		11	1	56		37		42	1,032	アオジ	624
	11									2		1			35	クロジ	625
															179	オオジュリン	628
															1	コジュケイ	G001
230	238	88	21	4	4	5	57	82	205	397		443	34	173	5,744	カワラバト	G008
	1								1					1	4	セキセイインコ	G013
23	184	16	60	15		8	11	28	295	105	4	81	2	474	2,545	ホンセイインコ	G015
										2					2	ダルマインコ	G016
	2							1						5	227	ガビチョウ	G021
					37									18	135	カオグログビチョウ	G023
	2		1												6	ソウシチョウ	G025
2,372	5,845	1,237	1,648	695	751	504	495	1,105	1,917	4,340	124	4,298	192	8,237	121,257	232種	合計

集計表3. 2011～2020年の河川・地域別記録件数

種番号	科名	種名	河川			区内地域						合計
			多摩川	野川	仙川	世田谷	北沢	玉川	砧	烏山	不明	
3	キジ科	ウズラ	1									1
5		キジ	197					1				198
8	カモ科	ヒシクイ	1									1
10		マガン	2									2
15		シジュウカラガン	1									1
19		コハクチョウ	3									3
20		オオハクチョウ	1									1
24		オシドリ	6	1					11			18
26		オカヨシガモ	117	1	24			1				143
27		ヨシガモ	19	2	131					25		177
28		ヒドリガモ	165	9	757				1	221	12	1,165
29		アメリカヒドリ	1									1
30		マガモ	322	171	513	1		15	9	19	8	1,058
32		カルガモ	593	893	1,642	22	23	297	382	551	50	4,453
34		ハシビロガモ	119	5	190			1		16	1	332
35		オナガガモ	57	13	538			1		69		678
36		シマアジ	12	2	1							15
37		トモエガモ	5	5					1			11
38		コガモ	558	448	1,092	1		1	32	268	15	2,415
42		ホシハジロ	36	5	3			2		1		47
43		アカハジロ	1									1
46		キンクロハジロ	36	12	9			3	1	3		64
47		スズガモ	20	8								28
57		ホオジョロガモ	10									10
59		カワアイサ	14									14
60		ウミアイサ	3									3
62	カイツブリ科	カイツブリ	381	86	22				1	11		501
63		アカエリカイツブリ	11	4								15
64		カンムリカイツブリ	77						1			78
65		ミミカイツブリ	1									1
66		ハジロカイツブリ	6									6
74	ハト科	キジバト	591	458	1,047	310	362	1,260	930	892	137	5,987
78		アオバト	13			4	1	1	5	1		25
81	アビ科	アビ	1									1
98	ミズナギドリ科	オオミズナギドリ	1									1
119	コウノトリ科	コウノトリ	2									2
127	ウ科	カワウ	745	333	908	7	12	79	60	232	16	2,392
132	サギ科	サンカノゴイ	1									1
133		ヨシゴイ	7						1			8
137		ミゾゴイ	2			6						8
139		ゴイサギ	202	183	134	1	6	3	8	19	1	557
141		ササゴイ	33	8					1			42
142		アカガシラサギ	3	3								6
143		アマサギ	38									38
144		アオサギ	673	450	940	10	11	18	110	273	29	2,514
146		ダイサギ	611	248	302	1	2	10	9	118	13	1,314
147		チュウサギ	83	11	11							105
148		コサギ	641	633	1,140	5	9	20	39	371	17	2,875
154	トキ科	クロツラヘラサギ	1									1
166	クイナ科	クイナ	44	125	5							174
170		ヒクイナ	2									2
174		バン	145	65	75					7	1	293
175		オオバン	419	125	80				1	4		629
184	カッコウ科	ジュウイチ						1				1
185		ホトトギス	2				5	3	1		5	16
187		ツツドリ	15	1		1	2		21	2	1	43
188		カッコウ	1				1					2
191	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	1									1
192		アマツバメ	63						1			64
193		ヒメアマツバメ	392	22	1		1	12	30	1	2	461

種番号	科名	種名	河川			区内地域						合計
			多摩川	野川	仙川	世田谷	北沢	玉川	砧	烏山	不明	
194	チドリ科	タゲリ	29									29
195		ケリ	18									18
197		ムナグロ	32									32
199		ダイゼン	1									1
202		イカルチドリ	560	176	2			1				739
203		コチドリ	269	203					22			494
204		シロチドリ	2									2
205		メダイチドリ	2									2
210	セイタカシギ科	セイタカシギ	4									4
212	シギ科	ヤマシギ	1					2	1			4
216		オオジシギ	5									5
219		タシギ	87	356	11				1			455
223		オグロシギ	1									1
227		チュウシャクシギ	12									12
231		ホウロクシギ	2									2
232		ツルシギ	2									2
233		アカアシシギ	1									1
234		コアオアシシギ	2									2
235		アオアシシギ	34									34
239		クサシギ	9	5					1			15
240		タカブシギ	20									20
241		キアシシギ	121	38					1			160
244		イソシギ	514	325	51			2	2		2	896
246		キョウジョシギ	3									3
247		オバシギ	1									1
251		トウネン	10									10
253		オジロトウネン	26									26
254		ヒバリシギ	1									1
258		ウズラシギ	4									4
259		サルハマシギ	6									6
261		ハマシギ	23									23
264		キリアイ	1									1
266		エリマキシギ	3									3
268		アカエリヒレアシシギ	13	1								14
269		ハイイロヒレアシシギ	2	2								4
271	タマシギ科	タマシギ	4	1								5
273	ツバメチドリ科	ツバメチドリ	7									7
278	カモメ科	ミツユビカモメ	2									2
286		ユリカモメ	318	67	6			2	3			396
293		ウミネコ	81	1	1							83
294		カモメ	10	1								11
296		シロカモメ	2									2
299		セグロカモメ	305	28	5			1			1	340
301		オオセグロカモメ	13									13
307		コアジサシ	232	1					1			234
314		アジサシ	5									5
316		クロハラアジサシ	18									18
317		ハジロクロハラアジサシ	3									3
322	トウゾクカモメ科	シロハラトウゾクカモメ	1									1
339	ミサゴ科	ミサゴ	75			1		1	5			82
340	タカ科	ハチクマ	3									3
342		トビ	476	27	5		3	25	24	2	1	563
349		チュウヒ	3									3
354		ツミ	68	3	55	22	61	48	62	77	28	424
355		ハイタカ	52	8		5		6	31	2		104
356		オオタカ	306	36	30	12	6	29	226	17	6	668
357		サシバ	11						19			30
358		ノスリ	92	3	1			2	57	3		158
366	フクロウ科	オオコノハズク									1	1
372		フクロウ		1				1	27	1		30
374		アオバズク					62	1		3	15	81
375		トラフズク	6									6

種番号	科名	種名	河川			区内地域						合計
			多摩川	野川	仙川	世田谷	北沢	玉川	砧	烏山	不明	
376	フクロウ科	コミミズク	22						2		1	25
378	カワセミ科	アカショウビン	2									2
383		カワセミ	485	633	594			17	74	131	13	1,947
387	ブッポウソウ科	ブッポウソウ							1			1
388	キツツキ科	アリスイ	27									27
390		コゲラ	146	15	502	309	180	362	835	327	89	2,765
393		アカゲラ	6				2	3	26			37
397		アオゲラ	5	1	9	9	5	71	278	34	31	443
401	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	501	47	3	1	12	34	29	15	3	645
403		コチョウゲンボウ	2									2
404		チゴハヤブサ	6						1			7
407		ハヤブサ	153	7		1		3	19	6		189
412	サンショウクイ科	サンショウクイ	6				1	2	9			18
413	コウライウグイス科	コウライウグイス	1									1
418	カササギヒタキ科	サンコウチョウ						2	8			10
420	モズ科	モズ	564	237	64	38	71	67	126	128	21	1,316
421		アカモズ	1									1
427	カラス科	カケス	3			1		2	33	2		41
429		オナガ	81	51	484	236	156	253	384	438	41	2,124
435		ハシボソガラス	645	523	1,339	225	205	469	869	699	161	5,135
436		ハシブトガラス	574	244	1,154	353	519	1,266	1,081	900	187	6,278
438	キクイタダキ科	キクイタダキ	4				7	2	16			29
439	ツリスガラ科	ツリスガラ	8									8
441	シジュウカラ科	コガラ			2				1	2		5
442		ヤマガラ	5		13	5	16	48	145	43	4	279
443		ヒガラ	2		8	8	2	17	15	14		66
445		シジュウカラ	541	156	1,073	358	479	1,235	1,348	823	171	6,184
450	ヒバリ科	ヒメコウテンシ	1									1
452		ヒバリ	544	8				2		1		555
455	ツバメ科	ショウドウツバメ	37									37
457		ツバメ	493	314	350	117	182	492	402	199	18	2,567
459		コシアカツバメ	66	3					2			71
461		イワツバメ	261	107	7			5	19			399
463	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	608	442	1,308	354	520	1,580	1,416	870	167	7,265
464	ウグイス科	ウグイス	358	31	323	158	102	294	529	158	55	2,008
465		ヤブサメ	4					2	3	1		10
466	エナガ科	エナガ	15	6	318	90	74	154	510	200	30	1,397
470	ムシクイ科	ムジセッカ	1				1					2
474		キマユムシクイ							2			2
476		オオムシクイ	2					2	2	2		8
477		メボソムシクイ				2	1		2			5
479		エゾムシクイ	2			6	4	6	15	2		35
480		センダイムシクイ	9		3	5	10	22	43	18	11	121
485	メジロ科	メジロ	320	69	799	341	354	970	1,070	577	75	4,575
490	センニュウ科	オオセッカ	1									1
491		エゾセンニュウ	2									2
492	ヨシキリ科	オオヨシキリ	159	26	2		2		1			190
493		コヨシキリ	19	3	1							23
499	セッカ科	セッカ	472	4				1				477
500	レンジャク科	キレンジャク	1						1			2
501		ヒレンジャク	4						3			7
504	ミソサザイ科	ミソサザイ	4	1	1				2	3	2	13
506	ムクドリ科	ムクドリ	716	677	1,116	287	393	821	631	785	131	5,557
508		コムクドリ	57	15			1	2	4	1		80
511		ホシムクドリ	1									1
514	ヒタキ科	トラツグミ	1					1	9	4		15
518		クロツグミ						2	2	1		5
520		マミチャジナイ	2				1	4	5		2	14
521		シロハラ	15	1	18	94	32	182	313	71	20	746
522		アカハラ	16	7	6	11	6	37	106	10	5	204
525		ツグミ	395	266	358	145	238	391	441	292	31	2,557
530		コマドリ	2					2	2	1		7

種番号	科名	種名	河川			区内地域						合計
			多摩川	野川	仙川	世田谷	北沢	玉川	砧	烏山	不明	
533	ヒタキ科	ノゴマ	1									1
534		コルリ						1	5			6
536		ルリビタキ	3	1		5	1	6	21	2	1	40
540		ジョウビタキ	194	107	188	72	90	95	205	89	16	1,056
542		ノビタキ	53	11					1			65
549		イソヒヨドリ	55	50				109	8		1	223
552		エゾビタキ	4	1	1			3	19	2	1	31
553		サメビタキ							3	1		4
554		コサメビタキ	12	1	3	4	4	4	14	8	1	51
558		キビタキ	10		1	11	8	45	87	13	32	207
559		ムギマキ							2	1		3
560		オジロビタキ	1									1
561		オオルリ	1			5	1	4	21	7	1	40
569	スズメ科	スズメ	773	806	1,524	167	499	1,591	625	853	60	6,898
571	セキレイ科	ツメナガセキレイ	12									12
573		キセキレイ	275	270	763	1	1	25	75	165	19	1,594
574		ハクセキレイ	741	731	1,290	67	115	263	296	289	32	3,824
575		セグロセキレイ	595	276	182			7	4	9	1	1,074
580		ビンズイ	1	1	1	1		1	8			13
583		ムネアカタヒバリ	6									6
584		タヒバリ	388	25	4		1	2	2			422
586	アトリ科	アトリ	15	2	26	23	18	89	93	37	7	310
587		カワラヒワ	664	270	302	54	102	233	360	148	14	2,147
588		マヒワ	22	1	4		1	4	20	4		56
589		ベニヒワ	2									2
592		ベニマシコ	88	1								89
599		ウソ	2			1		1	8	1		13
600		シメ	148	6	58	52	19	105	258	71	20	737
601		コイカル	1						1			2
602		イカル	6					3	16			25
603	ツメナガホオジロ科	ツメナガホオジロ	1									1
610	ホオジロ科	ホオジロ	364	31	2	4			1			402
614		ホオアカ	47									47
615		コホオアカ	2									2
617		カシラダカ	67	6	4	1	1	1	5	3		88
618		ミヤマホオジロ	6									6
623		ノジコ	2									2
624		アオジ	311	88	135	61	43	96	217	74	7	1,032
625		クロジ	17	1			1	2	14			35
628		オオジュリン	179									179
G001	キジ科	コジュケイ	1									1
G008	ハト科	カワラバト	624	401	1,522	289	491	954	567	770	126	5,744
G013	インコ科	セキセイインコ						1	3			4
G015		ホンセイインコ	117	37	609	153	134	779	368	274	74	2,545
G016		ダルマインコ						2				2
G021	チメドリ科	ガビチョウ	202		1	2		3	18		1	227
G023		カオグロガビチョウ	80					55				135
G025		ソウシチョウ	2						4			6
合計	56科	232種	25,895	12,631	26,207	4,536	5,673	15,159	16,323	12,788	2,045	121,257

Web からの冊子の入手および「データCD」の提供について

当目録のパソコンでの利用を考慮し、冊子と同内容の PDF ファイルを一般財団法人世田谷トラストまちづくりのホームページに掲載しておりますので無料でダウンロードすることができます。

データを希望される方には「データCD」を提供しております。データ集計の基となった野鳥観察記録のデータベースのほか、各種集計表の EXCEL データ版を収録しております。ご希望の方は発行者までお申し込みください。

データCDの内容 ◇調査観察記録データベース（EXCEL データ約31万件）
◇集計表（本編の「各章データ集計」その他）

◇データベースの概要

<項目>

連番	種番号	種名	渡り区分	個体数	観察年	月	日	時刻	観察地	地区	町名	丁目	観察区分	観察者	繁殖の有無	観察内容・他

種名・個体数・その右側の項目は入力項目、種番号・渡り区分は追加項目、連番はデータIDで観察年月日、観察者順に並んでいる。観察区分によりセンサス調査を区分できる。各項目の詳細と利用上の留意点はCDの中で詳述している。

<データ収録基準>

原則として世田谷区内の調査記録・観察記録・文献記録を収録しているが、センサス調査の一部で隣接区外の記録を含む場合がある。区外と認識できる記録は除外した。記録は野鳥ボランティアの定例調査以外は、個人の任意提出制で、疑義のあるものは本人に確認したうえで原則として提出のあったものすべてを収録している。野鳥ボランティアの調査以外の個人提出分は観察者名を明示している。また外部の記録については出典を明示し、個人提出分は観察者名を明示した。

参考文献

本目録で引用した文献を著者名の 50 音順であげる。同一著者の文献は発行年順とした。

- 世田谷トラスト協会 野鳥ボランティア 2002 世田谷のツバメ 5 年間の記録 (財) 世田谷トラスト協会
野鳥ボランティア世田谷の鳥編集委員会 2009 世田谷の鳥 -世田谷区鳥類目録- (財) 世田谷トラストまちづくり
野鳥ボランティア世田谷の鳥 2010 編集委員会 2011 世田谷の鳥 2010 -世田谷区鳥類目録- (財) 世田谷トラストまちづくり
野鳥ボランティア 2012. 世田谷区内ツバメ繁殖数調査報告書 (2009~2011 年) (財) 世田谷トラストまちづくり野鳥ボランティア
野鳥ボランティア世田谷の鳥 2015 編集委員会 2017 世田谷の鳥 2015 -世田谷区鳥類目録- (一財) 世田谷トラストまちづくり
- *上記 野鳥ボランティア編集の文献中に参考文献として掲載されている資料は本書参考文献としては省いた。
- 五百沢日丸他. 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥 文一総合出版.
上田恵介. 1999. 種子散布. 築地書館.
植田睦之 2004 ホウロクシギ バードリサーチニュース Vol. 1 No. 3
叶内拓哉・水谷高英. 2020. フィールド図鑑 日本の野鳥 第2版. 文一総合出版.
叶内拓哉. 2021. 野鳥の木の实ハンドブック 文一総合出版.
環境省自然環境局. 2020. 環境書レッドリスト 鳥類. 環境省自然保護局.
清棲幸保. 1965. 増補新改訂 日本鳥類大図鑑 I~III. 講談社.
気象庁ホームページ 「過去の気象データ検索」1988~2020 年
桐原政志他. 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥 文一総合出版.
世田谷区. 2018. 「みどりと水の基本計画 2018 年度~2027 年度」世田谷区・みどり政策課. 世田谷区.
世田谷区. 1965~2020. 「世田谷区統計書」昭和 40 年、昭和 50 年、昭和 60 年、平成 7 年、平成 14 年、平成 16 年、平成 21 年、平成 26 年、平成 27 年、平成 28 年、平成 29 年、平成 30 年、令和 1 年、令和 2 年 世田谷区.
世田谷区. 2021. 「世田谷区都市公園等調書」. 2021. 世田谷区みどり政策課.
世田谷区. 2020. せたがやの環境. 世田谷区環境政策部環境計画課.
世田谷区. 2021. 都市計画概要 世田谷区都市整備部都市計画課.
世田谷区経済課. 1977. キジ放鳥のしおり. 世田谷区経済課.
田村栄. 1961. 多摩川の鳥. 誠文堂新社.
鳥類繁殖分布調査会. 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 2016~2021 年.
東京都. 2020. 東京都の保護上重要な野生生物種 (本土部) 2020 年版. 東京都環境局自然環境部
中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑 陸鳥編. 保育社.
中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑 水鳥編. 保育社.
日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会.
日本野鳥の会東京支部. 1954~2020. ユリカモメ 鳥信. 日本野鳥の会東京支部.
バードリサーチ 2020. バードリサーチ生態図鑑 NPO 法人バードリサーチ.
浜口哲一・叶内拓哉. 2006. 野鳥. 山と溪谷社.
真木広造・大西敏一. 2010. 日本の野鳥 590. 平凡社.
山岸哲・森岡弘之・樋口広芳(監). 2004. 鳥類学辞典. 昭和堂.

協力者・スタッフ一覧

○編集委員会

編集長 山田茂夫
事務局 平俊雄・山田茂夫
データ管理 平俊雄
編集委員 澤村信之・塩出美和子・平俊雄・原田欣典・林健彦・宮森達雄・山田茂夫

○環境写真提供者

岡本博生・澤村信之・根岸章・原田欣典・宮森達雄・山田茂夫

○データ提供者(50音順)

【個人・団体】

阿部尚・荒井広司・東君康・石井親雄・石村眞悟・井上秀明・今井創・岩淵・大竹左紀斗・大塚豊・大山学・小倉正雄・金成・唐沢孝一・草柳正治・工藤美津幸・佐々木・品田美季・鈴木幸雄・多賀レア・東條・多々良利子・富澤保夫・永田靖春・原喜久男・樋口喜政・松田研司・山崎人詩・山崎裕志・有木昭久・吉成才丈・Adrian RINGIN・毎日新聞記者(阿部・川島・木村・佐藤・関根・中西・仁礼・牧野)
桜丘すみれば自然庭園・二子玉川公園

【日本野鳥の会東京 会報「ユリカモメ：鳥信」】

赤池富治・秋元道子・阿部よしの・五十嵐信孝・五十嵐秀明・石塚ひろみ・石塚靖・市川浩一・井出熙子・伊藤キクエ・伊藤信男・井上泰雄・岩井君江・岩木・岩館信也・上田秀雄・植田睦之・上遠岳彦・氏原巨雄・氏原道昭・内山雨海・浦本昌紀・大井一正・大沢佳子・大田八重子・大谷照代・大塚恵子・大塚豊・大森玲子・岡本昭子・小川えい子・小田寛・小田よね子・小原威吹・小原巖・小原伸一・小原裕子・加賀山正・柿沼秀隆・加藤正・金子修史・金子凱彦・川沢祥三・川島洋・川内博・川西琳子・菅野雄義・神部愛林・北川建康・木村邦子・小池奈津子・校條清・小林治人・小宮山博・昆泰要・佐伯彰光・佐伯敏子・笹川昭夫・佐藤珠子・佐藤治男・佐藤治雄・佐藤靖彦・佐藤礼子・島崎忠裕・下野彰夫・下村信一・新谷耕司・杉山瓦男・鈴木邦彦・鈴木隆久・染井康良・多賀レア・高橋・田中利彦・田淵俊人・多摩川自然観察会・土屋公幸・津戸英守・徳見泰・富岡浩一・富田康二・富田三鈴・中西梧堂・中西ハルノ・中村一也・中村包彦・中村直子・中村裕子・中山圭三・中山美恵・西村真一・西本悟郎・農大一高生物部・野村和史・野村英男・蓮尾嘉彪・羽田竹美・馬場淑子・林邦雄・林澄江・樋口邦登・菱沼幸次・日比野芳子・福岡・福田光則・福田光洋・福富美也子・藤門恵蔵・藤村尚道・藤村仁・藤村由美子・古野昭夫・本多きよし・本多光一・増田浩司・松尾一夫・松木護・松崎悠紀子・松村武子・真鍋亮太・溝口親子・武藤健二・村上千文・初山貞代・森口進・柳沢紀夫・矢野真道・山口京子・山下桐子・山田圭子・山田タダオ・山本嘉次郎・山本英夫・山本不二男・吉田静香・吉田葉子・吉成奏慧・吉成才丈・吉成由紀子・吉邨隆資・米沢邦昌・和田圭・渡辺淳一・渡辺美奈子

【野鳥ボランティア】

相本幸一・秋山延江・阿久津美幸・浅野祐司・飯沼慶一・石綿正江・井出あいみ・猪野佳枝・井上弘通・今井孝平・今井典子・今井章彦・今重信子・今城早苗・岩田千種・大澤文夫・大塚勝丈・岡本博生・小川益男・小嶋結子・加藤浩・加藤衛・金子由多嘉・狩野裕之・鎌田愛子・川畑由利子・菊島伊久栄・岸義人・岸野悦子・北澤有希子・木村祥子・久保田幸子・久米亮子・小島昌子・小島良子・権正恩・斉藤けい子・斉藤幸雄・坂井孝次・佐藤優子・猿田愛子・澤村信之・塩出美和子・清水厚夫・白澤俣子・鈴木千栄子・鈴木雅章・鈴木律雄・角田尚嗣・瀬尾直子・十川治江・平俊雄・高木義勝・高緑繁匡・田澤與光・只野斐子・館野晃・館野圭子・津島克好・富川智英子・永井博・西岡光江・二宮尚子・根岸章・根本日出春・萩原定子・蜂谷寛・花澤淳子・林健彦・原田欣典・樋口邦登・秀まい子・廣田行雄・深沢典子・藤田道雄・松井達男・松井翠・松田美晴子・松崎みどり・三浦参平・森 淳・宮森達雄・柳田友邦・矢野和子・矢吹睦子・山田茂夫・山根茂生・山本万起子・横山邦雄・和田智子・渡辺昭彦

参考資料

参考資料 1. 野鳥台帳入力シート

参考資料 2. 繁殖ランク判定基準

参考資料 3. 環境省・東京都の絶滅危惧種カテゴリー

参考資料 1. 野鳥台帳入力シート

(野鳥データベース作成用に、野鳥観察記録を入力するためのシートである。)

EXCEL 入力シート

野鳥台帳入力シート第14.0版 100件(2020年1月改訂)														白地セルのみ入力可。入力規則が設定されています。6～288行は非表示									
入力内容														入力者名									
固定項目	種名から自動入力	▼印をクリックして表示されるリストから選択。文字入力も可能。	数値。約などはない	どこで何をしているかの行動を具体的に記入。文字数制限は無し(50字以内が望ましい)。ここに書かれた内容で行動分類、繁殖ランクを判定する。観察内容以外の補足事項も記入可。	繁殖Aランク	繁殖Bランク	関連物有り	西暦でyyyy/m/dの形で記入。	24時表示でhh:mmと入力	リストから選択入力も可	観察地の詳細区分リストから選択入力も可	町名はリストから選択。丁目は数値記入【例】鎌田 2	観察区分	リストから選択入力も可	表示されたリストにない場合ここに記入								
番号	種番号	野鳥 種名	個体数	観察内容・他	件数	有無	関連	観察日	時刻	観察地	地区	町名	丁目	観察区分	観察者	リストになしの時							
1																							
2																							
3																							
4																							
5																							
6																							
7																							
8																							
9																							
10																							
11																							
12																							
13																							
14																							
15																							
16																							
17																							
18																							
19																							
20																							
21																							
22																							
23																							
24																							
25																							
26																							
27																							
28																							
29																							
30																							

参考資料 2. 繁殖ランク判定基準

繁殖ランク A:繁殖を確認した B:繁殖の可能性がある

繁殖ランク判定基準 1 (20190508改定)

2019年5月8日

財) 世田谷トラストまちづくり野鳥ボランティア 野鳥台帳委員会

- ・全国鳥類繁殖分布調査マニュアルより抜粋の判定基準 観察コード16は野鳥ボランティアが一部変更)
- ・その種の繁殖期に見せた行動で判断する。付表 1, 2 に記載のない種については台帳委員会確認の上決定する。
- ・入力シートの「観察内容」欄には繁殖にかかわる行動・状況を具体的に記録する。 単に「営巣」・「繁殖」との記入した場合は繁殖ランクA・Bの区別がつかねるので、繁殖ランクAともBとも判定しない。

ランク	観察コード	観察事項	判定にあたっての注意事項
A	10	成鳥が巣あるいは巣のあるらしい所にくり返し出入りしている	
A	11	成鳥が抱卵又は抱雛している。あるいはしているようだ	「抱卵の姿勢」のみならず他の動作も含めて「抱卵」かどうか判断
A	12	成鳥が巣のあるらしい所にとびこむと同時にヒナの餌をねだる声がきかれた	
A	13	成鳥がヒナのフンを運搬している	
A	14	成鳥が巣のヒナに餌を運搬している（餌を咥えたまま観察者を警戒し移動する気配のない場合を含む）	
A	15	擬傷をみた	
A	16	巣立ち後の巣がある。ただしその年に使用された巣であること	巣に残された羽毛や、巣の下部の糞などからその年に使用されたものかを判断
A	17	卵のある巣をみた	
A	18	成鳥がおちついてすわっている巣の近くで、その種が営巣し得る環境でその種の卵殻が見つかった	
A	19	ヒナのいる巣を見た	
A	20	ヒナの声を書いた	
A	21	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちヒナを見た	種によるので表2を参照して判断
B	30	その種が営巣し得る環境で繁殖期に、その種のさえずり（キツキ類のドラミングを含める）を聞いた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く	「繁殖ランク判定基準 2」に記載の”種別の標準繁殖期”以前でも適用可
B	31	求愛行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く	「繁殖ランク判定基準 2」に記載の”種別の標準繁殖期”以前でも適用可
B	32	交尾行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く	「繁殖ランク判定基準 2」に記載の”種別の標準繁殖期”以前でも適用可
B	33	威嚇行動、警戒行動により、付近に巣又はヒナが存在が考えられる	
B	34	巣があると思われる所に成鳥が訪れた。ただし、そこが塹（ねぐら）である場合は除く	
B	35	造巣行動（巣穴掘りを含む）を見た	「繁殖ランク判定基準 2」に記載の”種別の標準繁殖期”以前でも適用可
B	36	成鳥が巣材を運搬している。ただし、明らかに周囲に巣を構えていると思われる場合に限る	「繁殖ランク判定基準 2」に記載の”種別の標準繁殖期”以前でも適用可
B	37	成鳥がヒナへの餌を運搬しているが、巣が周囲にあるかどうかわからない	
B	38	巣を発見したが、卵、ヒナともなく、成鳥がそこに来るのを認めなかった	
B	39	かなり移動可能と思われる巣立ちヒナを見た	種によるので表2を参照して判断
B	40	家族群を見た	

参考資料 3. 環境省・東京都の絶滅危惧種カテゴリー

環境省版レッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物の種リスト)2020 年

日本に生息又は生育する野生生物について、専門家で構成される検討会が、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を科学的・客観的に評価し、その結果をリストにまとめたものです。

○カテゴリー（ランク）の概要

カテゴリー名称	基本概念	定性的要件
絶滅 (EX)	我が国ではすでに絶滅したと考えられる種	過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 (EW)	飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種	過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態では存続しているが、我が国において本来の自然の生息地ではすでに絶滅したと考えられる種
絶滅危惧類 I 類 (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している ②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している ③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている ④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している 【情報量が少ないもの】 ⑤それほど遠くない過去(30 年～50 年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの
絶滅危惧 I A 類 (CR)	同上	(定量的要件の基本概念) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧 I B 類 (EN)	同上	(定量的要件の基本概念) IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧 II 類 (VU)	絶滅の危険が増大している種	【確実な情報があるもの】 ①大部分の個体群で個体数が大幅に減少している ②大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある ③大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている ④分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している
準絶滅危惧 (NT)	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種	次に該当する種 生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの 具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの a) 個体数が減少している b) 生息条件が悪化している c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている d) 交雑可能な別種が侵入している
情報不足 (DD)	評価するだけの情報が不足している種	次に該当する種 環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には、次のいずれかの要素)を有しているが、生

		息状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種 a) どの生息地においても生息密度が低く希少である b) 生息地が局限されている c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等） d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている
絶滅のおそれのある 地域 個体群 (LP)	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの	次のいずれかに該当する地域個体群①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見した場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの ②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの

東京都の保護上重要な野生生物種（本土部（区部）） ～東京都レッドリスト～ 2020 年

評価の基準は、原則として環境省版レッドリストカテゴリー（2007）に準拠し、「絶滅」、「野生絶滅」、「絶滅危惧Ⅰ類」、「絶滅危惧ⅠA類」、「絶滅危惧ⅠB類」、「絶滅危惧Ⅱ類」、「情報不足」を用い、評価に当っては定性的要件と定量的要件を併用した。今回の本土部の改定では、東京都独自のカテゴリーとして「留意種」を新たに設けた。

○カテゴリー区分と基本概念

カテゴリー名称	基本概念
絶滅 (EX)	当該地域において、過去に生育・生息していたことが確認されており、飼育・栽培下を含めすでに絶滅したと考えられるもの
野生絶滅 (EW)	当該地域において、過去に生育・生息していたことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、野生ですでに絶滅したと考えられるもの
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの
絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧ⅠB類 (EN)	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの
準絶滅危惧 (NT)	現時点での絶滅危険度は小さいが、生育・生息条件によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの
情報不足 (DD)	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性を有しているが、生育・生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていないもの
留意種（*または*1）	現時点では準絶滅危惧のレベルではないが、相対的に数が少ない種であり、次の理由（選定理由①～⑥）のいずれかにより容易に個体数が減少することがあり得るため、その動向に留意が必要と考えられるもの ＜選定理由＞ ①生育、生息環境が減少もしくは悪化することで、個体数が減少する恐れがある ②生息地の限定もしくは分断による個体群の縮小あるいは孤立化により、個体数が減少するおそれがある （③～⑥省略）
ランク外 (○)	当該地域で生育・生息が確認されているが、上記カテゴリーに該当しないもの
データ無し (ー)	当該地域において生育・生息している（していた）可能性があるが、確実な記録や情報が得られなかったもの
非分布 (・)	生態的、地理的な理由から、もともと当該地域には分布しないと考えられるもの 但し、鳥類では、確認記録があっても当該地域が主たる生息域ではないと判断される場合 ^注 は、非分布として扱った

（注）鳥類は、移動能力が大きいため通常の生息地域を離れて偶発的に飛来する場合がある。そのため、都内で生息記録があっても、記録回数が少なくかつ既知の生息地域から大きく外れているなど、主たる分布域ではないと判断された場合には「非分布」とした。

種 名 索 引

本目録の第Ⅲ章 (P. 27～P. 226) と第Ⅳ章 (P. 227～P. 265) に掲載した種を 50 音順に示した。

アオアシシギ	91	オオタカ	118・254
アオゲラ	131	オオハクチョウ	33
アオサギ	64・251・263	オオハシシギ	88
アオジ	210	オオバン	71・252
アオバズク	123	オオホンセイインコ	217
アオバト	54	オオミズナギドリ	56
アカアシシギ	90	オオムシクイ	162
アカエリカイツブリ	51	オオヨシキリ	167・259
アカエリヒレアシシギ	101	オオヨシゴイ	60
アカガシラサギ	63	オオルリ	189
アカゲラ	130	オカメインコ	225
アカショウビン	126	オカヨシガモ	34
アカハジロ	45	オグロシギ	88
アカハラ	178	オシドリ	33
アカモズ	139	オジロトウネン	97
アジサシ	111	オジロビタキ	189
アトリ	198	オーストンウミツバメ	57
アビ	55	オナガ	141
アマサギ	63	オナガガモ	40・250
アマツバメ	76	オバシギ	96
アメリカヒドリ	37	カイツブリ	50
アリスイ	128	カエデチョウ	222
イカル	205	カオグロガビチョウ	220
イカルチドリ	81・252	カケス	140
イソシギ	94・253	カシラダカ	208
イソヒヨドリ	184	カッコウ	74
イワツバメ	156	ガビチョウ	219
ウグイス	158	カモメ	106
ウズラ	29	カヤクグリ	190
ウズラシギ	98	カラシラサギ	68
ウソ	203	カルガモ	38・249
ウミアイサ	49	カワアイサ	48
ウミネコ	105	カワウ	58・251
エゾセンニュウ	166	カワセミ	126・255
エゾビタキ	185	カワラバト	215・263
エゾムシクイ	163	カワラヒワ	199・262
エナガ	160・258	カンムリカイツブリ	51
エリマキシギ	100	キアシシギ	93
オウゴンチョウ	225	クイタダキ	145
オオコノハズク	122	キジ	29・248
オオジシギ	86	キジ(亜種コウライキジ)	215
オオジュリン	213	キジバト	53・250
オオセッカ	166	キセキレイ	193・261
オオセグロカモメ	108	キビタキ	187

キマユムシクイ	162
キョウジョシギ	95
キリアイ	100
キレンジャク	170
キンクロハジロ	45
キンバラ	224
ギンバラ	223
キンランチョウ	226
クイナ	68
クサシギ	91
クマタカ	121
クロコシジロウミツバメ	56
クロコンドル	225
クロサギ	68
クロジ	211
クロツグミ	176
クロツラヘラサギ	68
クロハラアジサシ	111
ケアシノスリ	121
ケリ	79
コアオアシシギ	90
コアジサシ	108・254
コイカル	204
ゴイサギ	61
コウノトリ	57
コウミスズメ	113
コウライウグイス	136
コガモ	43・250
コガラ	146
コゲラ	129・255
コサギ	67・252・263
コサメビタキ	186
コシアカツバメ	155
コシジロウミツバメ	57
コジュケイ	214
コジュリン	212
コチドリ	82・253
コチョウゲンボウ	133
コノハズク	122
コハクチョウ	32
コブハクチョウ	215
コホオアカ	208
コマドリ	180
コミミズク	125

コムクドリ	174
コヨシキリ	168
コルリ	181
サカツラガン	30
ササゴイ	62
サシバ	119
サバンナシトド	213
サメビタキ	186
サルハマシギ	99
サンカノゴイ	59
サンコウチョウ	136
サンショウクイ	135
シジュウカラ	149・257
シジュウカラガン	32
シベリアジュリン	212
シマアジ	41
シマセンニュウ	166
シメ	203
ジュウイチ	72
ショウドウツバメ	152
ジョウビタキ	182
シラガホオジロ	206
シロカモメ	106
シロチドリ	83
シロハラ	178
シロハラトウゾクカモメ	112
ズグロカモメ	104
スズガモ	46
スズメ	190・261・265
セイタカシギ	85
セキセイインコ	217
セグロアジサシ	110
セグロカモメ	107・254
セグロセキレイ	195・262
セッカ	169・259
センダイムシクイ	164
ソウシチョウ	221
ソリハシシギ	94
ダイサギ	65・251・263
ダイゼン	80
タカブシギ	92
タゲリ	78
タシギ	87
タヒバリ	198

タマシギ	102
ダルマインコ	219
チゴハヤブサ	133
チゴモズ	137
チャキンチョウ	210
チュウサギ	66
チュウジシギ	86
チュウシャクシギ	88
チュウヒ	115
チョウゲンボウ	132
チリーフラミンゴ	225
ツクシガモ	33
ツグミ	179・260
ツツドリ	74
ツバメ	153・257
ツバメチドリ	102
ツミ	116
ツメナガセキレイ	192
ツメナガホオジロ	205
ツリスガラ	146
ツルクイナ	70
ツルシギ	89
テンニンチョウ	226
トウネン	96
トビ	114・254
トモエガモ	42
トラツグミ	175
トラフズク	124
ナベコウ	57
ニューナイスズメ	190
ノゴマ	181
ノジコ	210
ノスリ	120
ノビタキ	183
ハイイロチュウヒ	116
ハイイロヒレアシシギ	101
ハイタカ	117
ハクセキレイ	194・261
ハシビロガモ	40・249
ハシブトガラス	143・256・264
ハシボソガラス	142・256・264
ハジロカイツブリ	52
ハジロクロハラアジサシ	112
ハジロコチドリ	80

ハチクマ	114
ハッカチョウ	222
ハマシギ	99
ハマヒバリ	152
ハヤブサ	134
ハリオアマツバメ	76
バン	70
ヒガラ	148
ヒクイナ	69
ヒシクイ	31
ヒドリガモ	36・248
ヒバリ	151・257
ヒバリシギ	98
ヒメアマツバメ	77
ヒメウズラシギ	98
ヒメコウテンシ	150
ヒヨドリ	157・258
ヒレンジャク	170
ビロードキンクロ	47
ビンズイ	196
フクロウ	123
ブッポウソウ	127
ブンチョウ	224
ヘキチョウ	224
ベニアジサシ	111
ベニスズメ	223
ベニビタイキンランチョウ	226
ベニヒワ	202
ベニマシコ	202
ハウロクシギ	89
ホオアカ	207
ホオジロ	206・262
ホオジロガモ	47
ホシハジロ	44
ホシムクドリ	175
ホトトギス	73
ホンセイインコ	218
マガモ	37・249
マガン	31
マヒワ	201
マミジロ	175
マミチャジナイ	177
ミコアイサ	48
ミサゴ	113

ミゾゴイ	60
ミソサザイ	171
ミツユビカモメ	103
ミミカイツブリ	52
ミヤマホオジロ	209
ムギマキ	188
ムクドリ	172・260・265
ムジセッカ	161
ムナグロ	79
ムネアカタヒバリ	197
メジロ	165・259
メダイチドリ	84
メボソムシクイ	162
モズ	138・255
ヤブサメ	159
ヤマガラ	147
ヤマシギ	85
ユリカモメ	103・253
ヨシガモ	35
ヨシゴイ	59
ヨタカ	75
ルリビタキ	182

本目録の利用及び引用について

- 個人が研究論文などの著作物に引用する場合は、必ず出典を明示してください。
- 上記以外の場合での利用及び引用については、必ず事前に引用の許可を求めてください。
- データCD（希望配布）についても同様です。

世田谷の鳥 2020

—世田谷区鳥類目録—

発行日 2022 年 7 月 31 日

編 集 一般財団法人世田谷トラストまちづくり 野鳥ボランティア
世田谷の鳥 2020 編集委員会

発 行 一般財団法人世田谷トラストまちづくり
東京都世田谷区松原 6-3-5

TEL 03-6379-1624 <http://www.setagayatm.or.jp>
